
霊能力者紅倉美姫 呪殺村

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊能力者紅倉美姫 呪殺村

【Nコード】

N2363P

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

呪われているとしか思えない死に方をする男。その男は呪われても当然の罪を犯していた。事件の背景を調べていたジャーナリストは男に恨みを持つ家族を調べていく内に他にも呪殺事件があることを知り、謎のボランティア団体を追って消息を絶つ。ジャーナリストの恋人に依頼されて山奥に隠された村に向かう紅倉たちに、村の秘密が牙を剥き、紅倉は過去最悪の窮地に陥る。！！警告！！

物語後半は衝撃的な内容を多数含みます。年少者及び感受性の強い方はご覧にならないください。

登場人物紹介

紅倉美姫（べにくらみき）……自称24歳。銀髪の自称日露ハーフ。美人。2年前まで3年ほどテレビ番組に出演していた現代最強の霊能力者。視力が非常に弱く、霊能力を発揮するときには目が赤くなる。子どもの頃の記憶がない。

芙蓉美貴（ふようみき）……21歳。テレビの中の紅倉と運命的な出会いをして押し掛け弟子に。背が高く一流モデル並みの美貌で一時期紅倉と「美人霊能コンビ」として人気を博したが、実はレスビアン。現在テレビを引退した紅倉と共に地方都市に移り住み、二人暮らし。「先生LOVE」だがけっこう浮気者。合気道の達人。

ロテム……紅倉のペットのシベリアンハスキーだが、真つ黒でパツと見よく分らない。

名前の出てくる過去の人物

江戸由宇（がくとゆう）……紅倉を毛嫌いしライバル視する自称美人霊能師。ある事件で世間の非難を買い、引退、出演番組を潰すことに。紅倉もこのあたりで都落ちする羽目になった。「ヌイ姫」という戦国時代のお姫様とその家臣団を守護霊に持つ。

L（エル）……1年前京都の病院を舞台にした謎の事件（「フランケンレディー」参照）で誕生した新人類。強力なテレパシーで人を殺すことが出来る。

01 ヲロログゝ子どもの寝物語

あのね、人は死ぬと、魂は閻魔庁というあの世の裁判所に連れて行かれて、その人が天国に行くか、地獄に行くか、閻魔大王様の裁判を受けて決められるの。

閻魔庁にはじょうはりの鏡という大きな鏡があつて、そこにその人が生きている間にしたことすべてが映し出されるの。だからどんなに上手に嘘をついてごまかしても駄目なのよ？

生きている間に悪いことをした人はみーんな閻魔様に地獄に落とされるの。

地獄というのはそれはそれは恐ろしい所でね、至る所で灼熱の炎が上がつて、岩が焼けただれて、地獄に落とされた者たちは身を焼かれ、真つ赤にただれて皮が剥げたり、骨まで真つ黒に焼けこげたりするのよ。

地獄には恐ろしく残忍な鬼がいてね、地獄に落とされた人間を捕まえて、焼けただれた岩を背負わせて針の山を歩かせたり、大きな杭に串刺しにしたり、煮えたぎつた釜の中に突き落として死ぬほどの大やけどをさせたり、大きなまな板の上にくくりつけて全身の皮を剥ぎ取ったり、腹を裂いてはらわたを抜き取ったり、大きな包丁で体をばらばらに切り離したり、大きなすり鉢に入れてごとごとすり潰して犬に食べさせたりするのよ。そんなことされたら簡単に死んじゃうわね？ でも地獄では罪人は死ぬことを許されないのよ。殺されても、身をばらばらに切り刻まれても、焼けこげた炭になつても、何度も何度も生き返らされて、何度も何度も殺されて、何度も何度も死ぬ痛みと苦しみを味わつて、それが延々と、何百年、何千年、何万年と絶え間なく続いて、ようやく地獄の罪を許されるの。そうしたらまたその人も人間の世に生まれ変わってくる事ができるのよ。それだけ恐ろしい目にあつて痛い思いをして苦しい思いをしてきたのだから、もう二度と悪いことなんてしななければいいのに

ね？

でも、生きている人は閻魔大王の裁判を受けなくて、悪いことをしても罰を受けないで、平気で楽しく生きている人もいますでしょう？

そうね。でもそういう人もいつかは死んで、必ず地獄に落とされて苦しむことになるわ。

でも生きている間はなんの罰も受けないんでしょう？ 悪いことをして、苦しめられて、殺されちゃった人もいるのに、ひどいよ。

そうね。人間には閻魔様のじょうはりの鏡みたいな正しい目はないからね、仕方ないわ。でも、悪いことをしたってはっきり分かっている人は、必ず罰を受けるわ。

どうなるの？

悪いことをして受けた呪いで、ひどい殺され方をするのよ。だから、

あなたはもう安全よ。

もうなんにも心配しなくていいから、ぐっすりお休みなさい？

02 ヲロローグ 13 回目に死んだ男

梅雨の明けたさわやかな青空の下、看護師鈴原聡子はせっかくだから散歩の足を少し遠くまで伸ばしてみようと思った。

「佐藤さん、海を見に行ってみましょうか？」

鈴原看護師は押す車椅子の男性に話しかけ、一応返事を聞く間を空け、道路の先へと進んだ。鈴原看護師の勤め、車椅子の佐藤氏が入院する県立病院は海岸から200メートルほどの高台にあり、丘の上の住宅街を行くと、まっすぐ海まで見通せる十字路に行き着くことができる。少し遠いので普段の散歩でそこまで行くことはしないのだが、この日は素晴らしい天気で、梅雨のじめじめもからっと蒸発して、ポカポカ暖かくとても気持ちが良い、この哀れな患者にサービスしてあげようと思ったのだ。

車椅子に乗せさえすれば佐藤氏はとても軽く、車輪は滑らかに回転し、快適な散歩だった。

「さあ着きましたよ」

十字路を左折し、海の方を向けて車椅子のブレーキペダルを下ろした。

2軒住宅の並ぶ向こうに松林が広がり、その間を道が通っていき、青い水平線が覗いている。

「とっても気持ちよさそうだけど、潮風は体にさわるといけないからここから眺めていきましょうね？」

「サー……、サー……、と、彼方から穏やかな波の音が聞こえてくる。もうじきにここも海水浴のマイカーが押し寄せるようになるだろう。」

海と反対側は長い長い坂道になっている。そちらは民家の屋根が段々と下がっていき、お寺の墓所と大きな山屋根があり、ずっと先の大通りに面してビルが並び、高層マンションとハイタワービルがよきによき生え、昔ながらの下町と開発された中心街が一望に見

渡せる。

超高層ビルの窓ガラスがキラキラ光っているのをなんとなく眺めていると、坂道に面した家の塀からおばあさんが出てきた。二人は顔を見合わせるとあらと驚いた嬉しい笑いを浮かべた。お互い散歩をしている時によく出会う顔見知りだ。

「こんにちは。こちらがお宅でしたか？」

「ああ、こんにちは。お世話になっております。ええ、ここに住んでおります」

鈴原看護師は特別にお世話をした覚えはないが、看護師の制服を着ているからおばあさんはもしかしたら病院の方に通っているのかもしれない。

「これからお散歩ですか？」

「ええ、さいです」

おばあさんはこちらへ坂道を上がってきて、鈴原看護師は

「お気をつけて」

と声をかけたが、思いがけず顔見知りに出会ったおばあさんはニコニコして、あっとつまずくと前に手をついて、坂道をごろんと後ろにひっくり返り、歩道の手すりにどんと背中を打って痛そうに顔をしかめた。

「あらおばあちゃん！ だいじょうぶ！？」

鈴原看護師はびっくりして坂道を駆け下り、おばあさんに駆け寄った。

「いたたたたた……」

おばあさんは起き上がろうと体をひねるが痛そうに顔をしかめて動けず、

「ああ、無理しないで。そっとね」

鈴原看護師が背中に手をそえて起こしてやった。

「だいじょうぶ？ ひどく痛む？」

「え……、ええ、ちよっと……」

「痛い背中だけ？ 他に痛いところない？」

「え…、ええ……」

鈴原看護士はおばあさんの背中を抱きながら、この坂道はお年寄りには危険だわと思った。

「おうちに誰かいらっしやいます？」

「娘が」

鈴原看護士は表札を見上げ、

「笹井さんね。笹井さあーん！ 笹井さあーん！ 手を貸してくださいーい！ 笹井さあーん！」

と呼んだ。大声で名前を呼ばれて玄関から何ごとかと中年の婦人が顔を出した。

「笹井さん。おばあちゃんが」

「あらまあっ！ お母さん、どうしたの？ だいじょうぶ!？」

鈴原看護士がそうつとそうつと注意して、二人で支えておばあさんを玄関へ運んだ。

車椅子の佐藤氏はじつと海の方を向いてたたずんでいた。

彼は頭に柔らかな布の帽子をかぶり、その下には頭を覆う包帯代わりのネットが少しはみ出している。水色の病院着を着て、首に軽くタオルを巻いている。一見したところ体の方に怪我はないようだ。佐藤氏は周囲の黒ずんだうつろな目でぼんやり前を見て、力のない唇から涎をこぼしていた。看護士にすっかり忘れ去られてひとり道ばたに置き去りにされて、サー……、サー……、と静かな波の音を聞きながら、その表情は今の状況を分かっているのかどうか不明だった。

松林の中に大きな護国神社があり、そこを住処にしている者かどうか分からないが数羽の鳩たちがグックーとひょうきんな鳴き声を上げながら道ばたを歩き、餌を探して地面をついばんでいた。

その内の一羽が佐藤氏を見上げ、何を思ったか羽をばたつかせて膝の上に飛び乗り、グックーと鳴き声を上げた。佐藤氏の目玉が動いて、ひくりひくりと薄いまぶたをうごめかせた。鳩は鳴きながら、

佐藤氏のパジャマをついばんだ。くちばしにつまんで引つ張り、おいしくないを見ると、自分の乗っている太ももを突つついた。ブツブツとついばんで、布に穴を開けると、中へくちばしを突つ込んで、ブツブツとついばんだ。佐藤氏は目を剥き、まぶたを痙攣させ、体を揺らした。しかし手すりに置いた手は動かず、膝もお行儀よく揃えたままだった。ブツブツ佐藤氏の太ももをついばんでいた鳩は顔を上げ、横へ向きを変えると、手すりをつかむ手首をついばみ始めた。佐藤氏のまぶたの痙攣が大きくなり、白い血の気のない顔にぬめった汗を浮かべた。鳩は手首の皮膚をついばみ、佐藤氏は一生懸命不自由な体を揺すった。懸命に揺すっていると鳩はようやくくちばさばさ羽を飛ばたかせて飛び上がり、佐藤氏の頭上を越えていった。

佐藤氏はべつとり脂汗を浮かべた顔で、ひどく疲れたようにまぶたを閉じかけたが、足元でガチツと振動があつて、まぶたを驚かせた。ばさばさと、再び鳩が佐藤氏の膝に舞い降りた。佐藤氏は目を剥きだして必死にブルブル震え、鳩はひょうきんにくるつくると首を回し、ばさばさ飛び上がると、佐藤氏の顔にくちばしを伸ばした。佐藤氏はブルブル震えて必死に顔をそらそうとし、鳩のくちばしが危つく目の下をつつくと、弾かれたように首を後ろに引いた。

車椅子がゆっくり後ろに動き出した。

佐藤氏の目が驚愕した。

飛び上がった鳩はばさばさ羽ばたき、車椅子はゆっくり道路を横断していき、佐藤氏は恐怖でブルブル震え、車椅子はゆっくり、後ろの坂道へ向かつていった。

「それじゃあおばあちゃん、お気をつけて。坂道と車には十分気を付けてくださいね」

鈴原看護師はおばあちゃんと娘さんの感謝の言葉を受けて笑顔であいさつして玄関を出てきた。おばあさんは幸い特に怪我もしていないようで、安心してよいようだ。あらたいへん佐藤さんが起きっぱなしだったわと思ったが、安全なところにしっかりブレーキをか

けて止めてあるから大丈夫でしょう、でも看護士長に知れたら大目玉だわねと思つて坂道を見上げると、後ろ向きの車椅子が前を通り過ぎていった。

びくつとしながら見送つた鈴原看護士は、そのまま坂道を後ろ向きで駆け下りていく車椅子を見送つた。車椅子にしっかりと座つた佐藤氏の恐怖の視線がこちらを見ていた。

車椅子が駆け抜け、危うく横道を走つてきた自動車が激しくクラクションを鳴らしていった。

4ブロックも坂道を駆け下り、お寺の前の大きめの通りに飛び出したところで車椅子は走つてきた自家用車に撥ねられ、ガツシャーンと音をさせて佐藤氏は放り出され、反対車線を走つてきたトラックのフロントに激突された。トラックはひどい音でブレーキをかけて止まつたが、佐藤氏は遠く跳ね飛ばされ、アスファルトに激しく転がつた。キーツキーツとブレーキ音が響き車が止まつていった。人が集まつてきて、撥ねてしまつたトラックの運転手も呆然とした顔つきで降りてきた。佐藤氏の手足はあらぬ方へ折れ曲がり、アスファルトの上には頭を中心にとどくと赤黒い染みが広がつていった。

坂の上から眺めていた鈴原看護士は思わずつぶやいた。

「あらまあ、どうしましょう」

110番通報でパトカーが駆けつけ、救急車が駆けつけたが、その場で被害者の死亡が確認された。坂道を下りていた鈴原看護士はとんでもない事態に気が動転して目を真っ赤に泣きはらしていたが、遺体を救急車で運ぶため急ぎ現場写真を撮つていた交通課の警官は佐藤氏を見て不謹慎に言つた。

「あーあ、とうとう死んだか。これが……………13回目の事故か？」

と、まるであきれ返つたように言い、不思議そうな顔をする鈴原看護士の視線におつと肩をすくめ、取り繕つたように合掌した。

「ま、これでこの人もようやく楽になれたでしょうよ」

鈴原看護士は知らなかったが、佐藤氏が交通事故に遭ったのはこの1年半ほどで実に13回目のことだった。そしてようやく不幸な事故遭遇記録にピリオドを打てたわけだが、その顔は、神経が麻痺してろくに動かないはずが、すさまじい恐怖と苦痛でねじ曲がっていた。

03 プロローグ 裁判員候補の熱弁

2009年5月に施行された裁判員裁判も件数を重ね、中には重大な、死刑求刑が想定される事件も扱われ始めた。

ここにも一つ、とある地方裁判所において、2名を殺害し死刑求刑が予想される事件が市民裁判員参加の下、裁判に掛けられようとしていた。

くじ引きに当選された者の中から辞退理由に当たらない者20数名が当日裁判所に召集され、更に6名の裁判員と補充裁判員を決める前に、裁判長より資格の有無の最終的な質問がされた。

集められた裁判員候補者の中に、一人、特に目立つ女性がいた。銀色の髪をした、彫りの深い顔立ちの、24、5歳のハーフラシキ美人である。質問の順番が回ってくると、目がひどく悪いらしいその美人は係員に手で案内されて部屋に入った。

美人が席に着くと、50代の男性裁判長は『おや?』という目つきをしたが、平静を保ち、質問した。

「今回扱われる事件はひどく残虐な手口による殺人事件で、証拠閲覧の際にはひどく生々しい写真や、血の付着した証拠品などを見なければなりません、あなたはそうした物に耐えられますか?」

美人は緊張してかすれた声で

「だいじょうぶです」

と答えた。

「あなたはこの裁判員制度をどのようにお考えですか?」

美人は義務感から張り切って答えた。

「一般市民が犯罪事件を我が事として正しい心で裁く、たいへん素晴らしい制度だと思います」

「今回の事件は被告に対し検察から死刑の求刑が為される可能性があります。あなたは死刑というものについてどうお考えですか?」

美人は義務感に高揚した顔で張り切って答えた。

「殺人に対し死刑という罰は当然のことです。罪を償うために等価の罰が科せられるのが基本であり、人殺しの罪は自分が殺されてあがなうのが基本です。被告の更生の可能性なんて言われませんが、馬鹿馬鹿しい。犯罪の審判は被害者の立場に立って救済のために行われるべきものです。基本的にその被害者を殺してしまつたら救済のしようもなく、自分も殺されて罪を償うのが当然の義務です。被告は十分反省しています、なんて言いますが、ケツ、くつだらな。自分が捕まって今度は自分が殺される側になって、ああ失敗した、こんなことなら殺すんじゃないかと、と、身勝手に反省するのはなんて当然じゃないですか？ そんなのは反省なんて言わないんです、ただの後悔です。人に暴力を振るって殺して、殺される側になんの殺されるべき理由もなければ、殺した人間が死刑になるのは当然です。犯罪の処罰は被害者を救うために行われるのが本分です。

自分を殺した極悪人が、真人間に更生して、残りの人生を立派な社会人として正しく暮らしていくことなんて、自分の未来を無惨に奪われた者が望みますか？ 殺人者は更生なんてしないでいいんです、極悪人のまま殺されるべきなんです！ そうでなければこの世の正義が守られません！ 直接の被害者ばかりじゃありません、愛する者を殺された遺族だって、自分の愛する者は理不尽な暴力で殺され、その未来を奪われたのに、殺した者にその未来が与えられ、生き続けるなんて、耐えられますか？ 犯人を殺したって愛する者を失った悲しみが消える訳じゃないって、馬鹿鹿じゃないの？、んなもんあったりまえじゃないの？！ 犯人が死刑にされて、あゝすつきりした！、なーんて思う遺族がいるわけじゃないでしょうが！ 馬鹿め！ そうじゃないでしょう？ 自分の愛する者を殺した相手が殺されて、この世から消えて、ようやく憎しみを捨てて、失った愛する者への悲しみと、愛しさを、ようやく温かい心で受け止めることができるんでしょう？ 愛する者を失った悲しみなんて一生消え

るもんですか。でも、憎しみが消えなければ、その悲しみさえ素直に受け止めることができないんです！ その憎い犯人が同じく命を奪われることを許されるなら、その差し引きは、殺された自分の愛する者が悪かったってことになるじゃないですか？ そんな理不尽が耐えられますか？ 遺族は犯人が生き続けている限り、一生、憎しみの心から逃れることはできません。これは、拷問に等しいじゃないですか？ そんなことが許されるのなら、犯罪の被害者は、社会なんて信じられなくなってしまっじゃないですか？ なんて不幸な被害者が苦痛と不利益を被り続けなければならぬんですか！？？ それでは社会が成り立ちません！ 社会は正義であるべきです！ 人殺しは、死刑にならなければならぬんですう！！！！」

美人は一気にまくし立てると肩でハアハア息をついた。裁判長は落ち着いた様子でうなずくと言った。

「質問は以上です。ありがとうございます。それでは控え室で結果をお待ちください」

職員に案内されて美人は部屋を出ていった。

裁判長は手元の審査書類の「不適格」に丸を付け、備考欄に「思想的に著しい偏りが見られる」と書き込んだ。

裁判長は思わず鼻から息を吐き出して首を振り、ふと書記官と目が合って、言った。

「そもそも彼女はなんでここにいるんだね？ いろいろその……、拙いだろっ？」

書記官は仕方なく曖昧に苦笑いし、裁判長はまた頭を振り、「次の方をお呼びして」

と言った。

紅倉美姫は裁判員の選に漏れた。選ばれる気満々でいた彼女はショックを受け、ぶくぶくと口を尖らせた。

「ちつくしよおー、インチキしてでも選ばせるんだったわ」

「裁判員に選ばれなかった方はご苦労様でした。こちらより退出してください」

職員に促され、ほっと安堵した人の多い中、紅倉は選ばれた6人をうらやましそうにしながらふくれっ面で裁判所を退出した。

裁判所の敷地を出たところで紅倉は一人の女性から声をかけられた。紅倉は待つていたパートナーの芙蓉美貴といっしょである。

「紅倉美姫さんですね？」

声をかけた女性は着古した感じのあるスーツ姿の、紅倉より少し年上の人物だった。

「この裁判の裁判員候補として呼ばれていたんですね？」

芙蓉は紅倉を守るようにあからさまに警戒して言った。

「裁判員への個別の取材はご遠慮願えますか？」

女性は頭のよさそうな皮肉な笑みを芙蓉に向け、紅倉に言った。

「紅倉先生に是非お願いしたい調査があるのですが、お話を聞いてはいただけませんか？」

04 自己紹介

平中と名乗った女性は近くのビジネスホテルの喫茶店を指定し歩き出した。細身のパンツの脚が長く、スツスツと言うより、ザツザツと言う感じに大股で、歩くのが速い。芙蓉は勝手に先に行かせて自分は先生に合わせてゆっくりのんびり歩いた。

平中の姿はとうに見えなくなつて、紅倉の足で15分ほど歩いて町中に立つビジネスホテルの1階喫茶店に入った。平中の手を上げるテーブルにつくと3人分の紅茶が既に出されていた。

「紅倉先生は猫舌でいらつしゃいましたよね？ 芙蓉さんも紅茶でよろしかった？」

と、ずいぶんせっかちな性格の女性のようだ。

「ここのケーキけっこういけるんですよ？ おごりますからなんでも注文してください？」

茶とオレンジの落ち着いた内装のこぢんまりした店で、4つあるテーブルに他に客はいなかった。芙蓉は自慢じゃないがケーキには舌が肥えている。食べてやろうじゃないの？と評論家気取りで抹茶のショートケーキを注文した。高校生のバイトみたいなウエイトレスに運ばれてきて一口食べると、

「あら、美味しいじゃない」

自分はチョコレートセットを注文した平中はどう？とニンマリし、芙蓉は侮れないわねと見直した。紅倉は芙蓉に教えてもらってラズベリーのミルフィーユを注文した。紅倉はパイ生地系の甘いお菓子が好きなのだ。

「馬鹿にしたものじゃないでしょう？ ここのケーキは裏の通りの老舗のお菓子屋さんから仕入れてるんですよ？ お値段もそこそこリーズナブルで」

イタズラっぽく鼻の上にしわを寄せる女性に芙蓉は好感を持ち、いやいや油断するなと気を取り直した。

「あなた地元の方？」

「いえ。住みかは東京です。情報収集が重要なスキルですので。わたくし、こういう者です」

女性は名刺を取り出し紅倉と芙蓉にそれぞれ渡した。紅倉は読めないなので芙蓉が読んでやった。

「フリーライター 平中 江梨子（ひらなか えりこ）さん」

平中はよろしくと笑顔でお辞儀した。

「主に週刊誌やWEBに記事を書いています。何でも書く便利屋ですが、これでも一応社会派ジャーナリストの端くれのつもりです」

平中は笑顔の中にも鋭く強い視線を見せて、ジャーナリストとしてのプライドを表した。

ミルフィーユと格闘している紅倉に代わって芙蓉が話した。

「それで、社会派ジャーナリストさんが紅倉先生になんの依頼です？ 何か調査を頼みたいということでしたよね？」

「ある人の行方を捜してほしいんです」

芙蓉が隣を見ると、紅倉はフォークにぶっ刺した固まりを頼張り、もぐもぐし、

「やだ」

と言った。

「もうそういうことはやめました」

と、もぐもぐゴックンし、再びパイの破片を撒き散らせながらケーキと格闘を始めた。芙蓉が平中に注釈してやった。

「記者さんならご存じでしょうけど、先生は今隠遁（いんとん）生活を送っているんです」

「昨年今頃の汚職事件のせいですか？」

芙蓉は素知らぬ顔で曖昧にうなずいた。去年紅倉はある狙いがあるつてさる大臣経験のある大物政治家の裏献金疑惑を暴き、結果的に死に追いやったのだ。

「裏で紅倉美姫が動いているという噂がありましたけど、事実だったわけですね？」

「すっかり警察に嫌われてしまいましたね、以前はあんなに捜査に協力してあげたのに」

むっつり怒る芙蓉に平中はお愛想の苦笑いを浮かべた。

「そういえば、もうすっかりテレビにはお出になつてませんか？」

紅倉美姫は以前よく警察番組に出演し、行方不明者を捜したり、身元不明の死体の素性を教えたり、凶悪事件の犯人のヒントを与えて逮捕させたり、「最強の霊能力者」の名にふさわしい活躍を見せていた。その警察番組に出なくなって久しい。芙蓉が言う。

「警察も政治的思惑で紅倉先生と距離を置きたがつているのもありますが、オカルトに関わるのを嫌っているんです」

平中はうなずいた。

「そうでしょうね。例えば、裁判で、被告側弁護士から霊視なんかで得た証拠品の信憑性を疑う質問をされると困りますものね？ ただでさえ検察の証拠捏造なんかの失態がありましたものねえ？」

「そういうことです。それに……」

芙蓉はまだケーキと格闘を続けている紅倉を哀れに見て、ため息混じりに言った。

「先生が見つける方は既に亡くなっている場合が多いですからね、依頼者にも泣かれるばかりであり喜ばれませんから」

「そうそう」

ケーキの残りをばらばらに分解してしまつて、紅倉は顔を上げて言った。

「けつきよくね、家族は本心では恨んでいるのよ。生きていてほしうって言う希望を奪っちゃうから。もうね、そういう嫌な役割を引き受けたくないの」

平中はうなずき、言った。

「遺族の方のお気持ちも分かりますけどね。……紅倉先生。今日は何故裁判所にいらつしやつたんです？ 失礼ですが、先生なら裁判員候補の可否の質問票が送られてきた時点で辞退することは可能だったのではありませんか？」

紅倉は紅茶のカップで口元を隠しながら言った。

「だってえ……、呼び出されちゃったんだもん……」

芙蓉がおかしそうに優しく微笑んで言った。

「先生は嬉しかったんですよ、一市民として認められたと思って。

その質問票、大きな虫眼鏡覗きながら一生懸命自分で記入してたんですよ？」

紅倉はカップを両手で覆って紅茶をすすった。芙蓉はあらもったいないと紅倉のケーキ皿を引き寄せ、大量のケーキの残骸をフオークで集めて口にかき入れた。

「もう一皿お代わりします？」

「うん」

「だそうです。よろしくう」

平中は苦笑いして手を上げてウェイトレスを呼んだ。芙蓉が訊いた。

「あなたは何故裁判所に？ 裁判の取材？ それとも紅倉先生を追って？」

「裁判の取材に来たんです。そのついでに紅倉先生のお宅を訪ねる時間があればと思っただけなんです。」

先生。7月にこちらで起きた、車椅子の男性が坂道を転げ落ちて車にひかれた事件、ご存じですか？」

05 因果

紅倉は

「ああ、そつえばあつたわねえ」

と答え、で？と首をかしげて話の先を求めた。

「それが呪いによる死だと噂されてるんですが、ご存じですか？」

「誰が噂してるの？」

「誰がと言つと不特定多数なんですが、まあ例によってネットの噂というものです」

「ふうーん。で、呪われてたの？その人」

平中はスーツ同様くたびれた感じの皮カバンから大型の手帳を取り出して説明した。

「車椅子に乗っていて坂を滑落して車に撥ねられて死んだのは佐藤一夫、23歳。

この車椅子の事故そのものも悲惨で不可解なものでしたが、佐藤は死亡するまでのおよそ1年半の間、実に12回の交通事故に遭っています。この13回目の事故で死んだ訳ですが、この時佐藤は前の事故で頸椎を損傷し全身麻痺の状態でした。

……佐藤が呪われている原因からお話ししましょうか。

佐藤は大学在学中の20歳の時、死亡交通事故を起こしています。相手の車の親子3人が亡くなっています。

佐藤の大学は神奈川なのですが、8月の夏期休暇中、こちらの実家に帰省して、高校時代の仲間たちと集まって食事をし、夜11時15分頃、帰宅途中で事故を起こしています。

佐藤の実家はだいぶ離れた田舎の方で、こちら中心街であちこちに散っていた仲間たちと落ち合つて食事をしたそうです。

事故の様子は、山間部の一本道で、佐藤が無理な追い越しをかけて相手の車に接触し、斜め後ろから押された形の相手方車はトンネル入り口のコンクリートに激突し、回転、トンネル内の壁にぶつか

り、エンジンが爆発炎上、母親一人だけ車の外に倒れていましたが、ひどいやけどを負っていて、救急車で病院に搬送後亡くなっています。運転していた父親は激突により出血多量のショック死、後部座席の7歳の娘は焼死、変形した座席とドアに挟まれて抜け出せず、炎に焼かれて亡くなったと見られます。母親はギリギリまで娘を助けようとしてやけどを負い、ついに耐えられず外へ逃げ出し、結局亡くなったと見られます」

芙蓉はケーキを食べ終わっていてよかったと思い、片眉をつり上げながらすっかりぬるくなった紅茶をすすった。

「事故はしばらくしてやってきた後続の車によって発見され、119番通報されました。ぶつけた佐藤はそのまま逃走、8時間後に検問に引っかかり逮捕されました。」

佐藤は呼気検査によって微量のアルコールを検出されましたが、本人はアルコール類は飲んでいないと主張し、食事ではノンアルコールビールを飲んでいただけと供述しました。ただ他の仲間が飲んでいたらビールを1杯くらい間違って飲んでしまったかも知れないが味がそっくりだったから分からないとも言っています。そこでいっしょに食事をしていた仲間たち3人に聴取したところ、たしかに佐藤はノンアルコール飲料しか飲んでいないと証言しました。

送検に当たって警察ではかなりしつこく佐藤の飲酒危険運転を疑って調べたようですが、佐藤も仲間も供述を変えることなく、けっきょく殺人罪である危険運転致死は見送られ、事故である業務上過失致死で送検されました。

裁判で佐藤は事故を通報せず逃走したことに関し、接触したのに気づいていたがそんな大事になっていたとは気づかず、たいして気にもとめずに先へ向かったと供述しました。検察は大爆発してすごい音と炎が上がったはずで、それに気づかなかつたのは不自然だと反論したが、佐藤は大きな音で音楽をかけていたと言い、トンネルは先でカーブしているのですぐに後ろは見えなくなつたと供述。

検察は佐藤が8時間後に検問で逮捕されたことに関し、現場から

検問所まで1時間もかからない距離であり、余分な7時間に関し、被告がアルコールを抜いていた可能性を言い、トンネル入り口付近で追い越しをかけるなど危険きわまりない行為であり、事故車の様子から接触時かなりのスピードを出していたことが推測され、被告のかなり危険な酒酔い状態での危険暴走運転である疑いに言及。しかしその疑いは捜査段階で証拠が得られず却下。佐藤はスピードの出しすぎによる危険運転で、業務上過失致死、懲役1年6ヶ月が言い渡された。

遺族は刑が軽すぎると検察に控訴を求めたが、検察は収集した証拠や供述から判決を覆すことは難しいと判断し、控訴を断念。佐藤は刑が確定し、刑務所に収監され服役した」

平中は少し休んで二人の反応を見た。紅倉は黙って紅茶をすすり、芙蓉はむっつり思い切り不機嫌な目をしている。

「1年6ヶ月の懲役でしたが、佐藤は模範囚で、改悛の状があると認められ、1年3ヶ月に刑が短縮されて出所しました。

事故後佐藤は大学から退学処分を受けていましたが、ただの交通事故にこの処分は重すぎると、出所後処分取り消しを求めて裁判所に告訴しました。

佐藤はその裁判準備中に、最初の事故に遭いました」

「佐藤は乗っていたタクシーが赤信号で停止したところ、後ろから追突され、首を鞭打ち。

その治療で通っていた病院の駐車場で、バックしてきた車にひかれ、足を踏みつけられて複雑骨折。

その後も住宅地の交差点で左折するワンボックスカーと塀に挟まれて危うく圧死しかける。

次に恋人の車に乗っていて、エンジントラブルで出火、慌てて逃げ出したところをまたも走ってきた車に接触、全身殴打。これは見た目ほど深刻な怪我にはならなかったようですが、さすがにこれは事故の祟りだと恐れ、佐藤は両親の家に帰り、一家揃って地元の神社でお祓いを受け、被害家族のお墓にお参りし、被害家族の母方の実家に位牌への焼香を申し出たが断られています。その帰り道さっそく追突事故に遭って一家揃って鞭打ちになっています。

更にその後も車がらみの事故に遭い続け、佐藤は外出する必要がある度戦々恐々としていたようです。

そして11番目の事故は父親の運転する車に乗っていて、前を走る大型トラックの荷台から崩れた鉄骨が落下、フロントガラスを突き破って運転席に突っ込み、後続車に激突され車は大破。父親が死亡。佐藤も大けがを負って3ヶ月入院しました。

12番目の事故は退院して家に帰るため母親とタクシーに乗っていて、突然フロントガラスが木っ端みじんに砕け散り、運転手はハンドル操作を誤り対向車線にはみ出し、対向車に接触、転倒し、佐藤は首の骨を折り、一命は取り留めましたが神経を痛め全身麻痺になりました。母親も顔を損傷、片目を失明しました。運転手は奇跡的に軽傷。フロントガラスの割れた原因は不明です。

そして最後13番目、佐藤は入院した病院から散歩に出て、車椅子で坂道を転げ落ち、先の道路で車に跳ね飛ばされ、トラックに撥

ねられて、全身の骨が砕けて内臓破裂、死亡しました」

聞いていた芙蓉は青ざめて、

「それはまたなんとも……」

と感想を漏らした。紅倉も紅茶を飲み終わっている。

「最後の事件で車椅子を押して散歩をさせていた看護師が保護責任を問われ、刑事罰も視野に入れた取り調べを受けました。彼女は院内で同僚からも患者からも評判のいい人で、そのときも坂道で転倒した老婆を助けて家に運んで看護していたそうです。佐藤の乗った車椅子は道一本挟んだ安全な奥にブレーキをロックして止めていたそうで、そのまま自然に後ろの坂道に転げ落ちるのは考えられない状況でした。何者かが佐藤の車椅子を坂道まで押していき、突き落としたと考えられますが、目撃者はおらず、ブレーキロックは乗っている者が手を伸ばして解除できる物で、佐藤は全身麻痺で手は動かせなかったわけですが、奇跡的な回復があり、佐藤が自分でブレーキを解除して自分で坂道へバックし、自分で坂道を転げ落ちた、将来を悲観した自殺の可能性も絶対にはないと、ま、誰も信じちゃいないでしょうけれど、そういう見方もあり、遺族である母親が刑事告訴を望まず、看護師は起訴されませんでした。

看護師は不起訴が確定し、申し訳なさど感謝から佐藤の実家に「焼香にうかがいましたが、佐藤の母親は、すっかり鬱状態で反応が鈍く、まるで幽霊のようだったそうです」

芙蓉はうーん……とうなり、

「それはまた、自業自得の本人はともかく、怨霊の仕業ならすさまじい復讐劇ですねえ？」

先生の顔を見て意見を求めた。

「かわいそうにも思うけど、自業自得でしょうね」

紅倉はツンと冷たい顔で言った。

「親としては息子の殺人犯としての無実を信じたかったところでしょうが、本心では息子の有罪を知っていたんでしょうね」

平中がうなずいて言った。

「佐藤の弁護には相当高いギャラを払ってこの手の事故が得意の有名弁護士を雇っています。裁判では検察は相当やりこめられてカッかしてました」

紅倉は手を開いて言った。

「ぎるていー」

平中は紅倉のおふざけに冷たい薄笑いを浮かべて言った。

「これが怨霊の仕業なら……祟りはまだ続きます」。

佐藤が飲酒していなかったと証言した三人ですが、佐藤の死後、まず一人、高架橋の上から道路に飛び降りて、トラックに撥ねられて死にました。

二人目、夜の街で酩酊状態の所をお巡りさんに保護されましたが、ひどい腹痛を訴え、それが尋常の苦しみ方でなく、急遽病院に搬送されましたが、悲鳴を上げて悶絶した末に死亡。原因を調べるため腹を裂いたところ、腸から長い蛇の死骸が出てきました。

三人目、一人残った男は、警察に駆け込み、実は自分たち三人は事故を起こした佐藤から電話を受け、アルコールを抜くのを手伝ったと白状した。やはり佐藤は相当飲んでおり、足元もおぼつかない状態だったそうです。しかし自分の携帯で電話したのでは記録が残って拙いだろうとわざわざ公衆電話からかけるといふあくどい頭は働いていたんですね。友人たちは佐藤に下剤を飲ませて浣腸までして腹の中を空っぽにし、吐くまで大量に水を飲ませてアルコールを薄めさせたそうです。しかし、警察としても今更そんなこと言われてもねえ、みんな死んじやっているわけですし、もうなんの証拠も残っていません。ま、一応供述を取って、逮捕してくれと泣き喚く男を突っ返したそうです。帰宅した男は、その夜自室で首を吊って死にました。

ねえ紅倉先生」

平中はじつと紅倉のブドウの実の色の目を見つめて尋ねた。

「呪いという物は、この世に存在するんでしょうか？」

07 呪う仕組み

呪いは存在するか？と平中に問われて紅倉は答えた。

「あるでしょうねえ。でもこの場合、事故で殺された親子の怨霊の祟りと見るのがふつうなんじゃない？」

「呪いと祟りは違いますか？」

「まあ言葉の問題かも知れないけど、ふつう死んだ人間が『祟る』って言うんじゃない？ 『呪う』は、生きている人間がすることじゃない？」

平中はフンフンとうなずき、興味深そうな笑みを浮かべて言った。
「なるほど。では、これは怨霊の祟りですか？」

「だとしても大したものねえ」

紅倉は感心したように言った。

「霊が得意なのは、同じ霊を攻撃することなのよ。生きている人間だって体の中に幽霊の元、霊体を持っていますからね。これを攻撃したり、取り憑いたりして、霊体にダメージを与えて、その人の精神を病気にして、体を壊したり、危険への防御力を弱めて病気にしたり事故に遭わせたり、自殺させたりする、っていうのが悪霊怨霊の得意技なわけよ。でもねえ……。」

さっきの話だと、突然車の窓が割れたり、トラックで重い鉄骨を運ぶのなんて相当気を付けて頑丈にワイヤを巻いたりして運ぶんですよ？それを荷台から落下させたり、最後の車椅子がブレーキが外れて勝手に動いたのだったておかしいわねえ？ そういう直接物を操るのは……できなくはないでしょうけれど、相当の体力が必要よ？

「できることはできるんですか？」

「魂はエクトプラズムって言う物質でできているんだけど、これそのものは自然界にどこでもふつうに存在する、空気のような物なのね。このエクトプラズムをたくさん集めて、うんと圧縮して濃くす

れば、物を動かすような超能力を使うことができるのね。家の中でガタガタ音がして写真立てが倒れたり、人形が動いたりする、ポルターガイスト現象っていうのがそうね。でもねえ…………。

せいぜい頑張つてその程度なわけよ。ちよつと音を立てたり物を動かしたりして人を脅かすくらいだね。

厚いガラスを割つたり、鉄製のワイヤをゆるめたり、硬いロックを外したり、重い鉄骨を動かしたり、そんな体力は人間の霊魂にはないわ。

歴史上名高い菅原道真や崇徳上皇の怨霊も人を呪い殺すのが決め技で、四谷怪談のお岩さんもそうよね。あ、呪うつて言っちゃった」
紅倉は舌を出し、続けた。

「『帝都物語』でメジャーになつた平将門も、京でさらしものになつていた首が空を飛んで関東を目指した、または首塚を区画整理で潰そうとしたGHQのブルドーザーがひっくり返つたなんていう豪快な荒技を披露してるけど、関東大震災で壊れた首塚をそのままに建てられた大蔵省で職員が何人も不審死を遂げたりしているように、やっぱり人を呪い殺すのが祟りの中心よね。

怨霊はやっぱり人の霊体を攻撃するのが得意で、物、特にエクトプラズムが馴染みづらい人工の物を操るのは難しいのよ。

そのフロントガラスや鉄骨の例でいえば、そんなことが可能な人間の霊魂はそれこそ平将門クラスの大怨霊くらいのもので、そこまで行くと、もはや人間ではなく神様ね。実際そついう名のある怨霊はことごとく神様として祭られているわけだね」

「神様ですか…………」

平中は何か考え込み、芙蓉は

「先生はたまに変に博識ですね？」

と茶々を入れた。紅倉は自分の頭を指さし、

「ここにビビツとね、電波が入ってくるのよ」
とうそぶいた。

「先生の頭は無線LANですか？」

二人でふざけているといつか平中はじつと奥から覗くような目で紅倉を見ていた。

「紅倉先生。あなたはそういう風に人を呪い殺すことができますか？」

「まさかあ。できないわよ、そんなこと」

「本当ですかあ？」

「本当ですよ」

平中はくすつと笑い、一応納得したように小さくうなずき、言った。

「では先生の他に、そういうことが可能な人はいますか？」

「うーん……、「ちゃんかな？」

「んっん」

芙蓉に咳払いされて紅倉は「てへっ」とペコちゃんの顔真似をした。

「まあ何人かいないことはないけど……、交通事故が13回も、そんなねちねちしたしつこいことをするような人には心当たりないわねえ。みんな飽きつぽそうだからなあ……」

「岳戸さんとか陰陽師のお兄さんとかですか？　そういえばどうしてるんでしょうねえ、岳戸さん？」

「どうしてるんでしょうねえ？」

「では、いるんですね、そうやって人を呪い殺せる人が？」

念押しするように言う平中を紅倉は不思議そうに見た。

「あなたは、やけに『人』にこだわるわね？　その彼を人が呪い殺したっていう根拠があるの？」

「他にもあるんですよ、悪人が呪い殺されたとしか思えない死に方をしている例が」

08 犯罪を許す社会

「裁判員裁判の問題点として指摘される事件ですけれど、暴行を受けてレイプされた女性が、公開裁判での二次被害、いわゆるセカンドレイプですね、それを恐れて逮捕された男が裁判員裁判の対象である強姦致傷ではなく、強姦罪に引き下げて起訴されたという事由が発生しました。その男はその被害女性以外多数の暴行強姦事件の容疑があつたのですが、被害者と見られる女性たちは証言を拒み、告訴しなかつたため、けつきよくこの一件の強姦罪のみで裁かれることになりました」

「なんでよお〜」

紅倉は思いきり口を尖らせて不満を言った。

「訴えて一生刑務所に閉じこめてやればいいじゃない？」

「致死：被害者が殺されなければ、強姦罪も強姦致傷罪も刑期は最高で20年の懲役、悪質な場合に刑が加重されても最高30年までです」

「なによそれえ〜、生ぬるい、そんな馬鹿な刑法さつさと改正しなさい！」

「怖いでしょうね、被害者は、いずれ自分をそんなひどい目に遭わせた男が刑務所から出てくると思つたら」

平中の暗い声に紅倉も黙ってじつと怒りに満ちた目になった。平中は暗く怒りの震えを帯びた声で続けた。

「女性たちは男にかなりひどい暴行を受けたようです………悪質なポルノだのAVだのをお手本にしたような……。とてもそれを思い出して………具体的に証言することなどできなかつたのでしよう。わたしも日本の社会はおかしいと思います。ポルノという娯楽に対してあまりに不道徳で甘すぎます。暴力や犯罪、女性の人権蹂躪、こんなのが野放しに垂れ流されているのは日本のポルノだけではないですか？ ポルノと言えばアメリカがポルノ大国のように思われ

ますが、アメリカのポルノに対する規制はとても厳しいです。流通はもちろん、その内容に関してもです。日本の表現者たちはこの手の問題に対してすぐに表現の自由という免罪符を持ち出しますが、そのくせ自分たちは自由に対する責任をいっさい受け持とうとはしません。性的事件の被害にあつた女性たちが、自分が傷つけられ、苦しめられ、恐怖させられ、屈辱に悔し涙を流させられた暴虐が、面白可笑しい娯楽のタネにされて、多くの男たちに娯楽として楽しまれ、それを野放しに許している社会など、そんなものが許せますか！？　それが自由ですか！？　実際に被害者がいるんですよ？　絵空事じゃないんですよ？　まさにセカンドレイプです。被害者の心をずたずたに踏みにじって、みんなが喜んでいるんだから我慢しろよと、そんな自由、ただのでたらめな暴言です！　彼女たちの人権は、精神は、どうなんですか！？　それを守るのが、社会の正義ではないんですか！？　性犯罪事件の裁判では未だに男性弁護士による『被害者側にもつけ込まれる隙があつたんではないですか？』という男の身勝手な暴言がまかり通っているようです。男社会なんです、女性の性を支配しているのは。社会的な力のある、女性政治家などは、そうした女性が虐げられている男社会の無神経な常識とこそ戦い、改善に力を尽くすべきです！！

……失礼、ちょっと興奮してしまいました」

平中は眉間にしわを寄せ、紅茶のカップを手にし、とっくに空になつているのを思い出してちよつと恥ずかしそうな顔をした。芙蓉は手を上げてウェイトレスに紅茶のお代わりを注文した。

「お代わり分はわたしがお願いします」

「ありがとう」

平中は眉を寄せて嬉しそうに笑った。しばらくして熱い紅茶が注がれ、香りを楽しむと、平中は再び冷静な目で紅倉に言った。

「そういう胸くそ悪い事件があつたわけです」

紅倉は、

「殺しちゃえ、そんなクソ野郎！」

と怒つて言った。平中は紅茶を一口飲み、

「ええ。殺されたんです、たぶん」

ニヤリと、黒い笑いを浮かべた。

「男は拘置中に体の痛みを訴えて警察病院に入院しましたが、股間の大事な物がただれて、腐り落ち、腹部と腿に毒が回って、麻酔も効かずに七日七番苦しみ抜いて、最後は狂い死にしたそうです」

紅倉は嬉しそうに

「あっ！ それならわたしもできそう！」

と笑顔で言い、芙蓉に「んっん」と咳払いされたが、ニコニコ、実に機嫌良くなった。

「いいじゃなあ〜い？ 天罰よ天罰。神様がその腐れ外道の男に天罰を下したのよ。めでたしめでたし」

紅倉は一件落着を計ったが、平中は冷静なジャーナリストの目で言った。

「神様の天罰ですか。でも、その神様が、お金を受け取って天罰を下しているとしたら、どうです？」

09 裏募金サークル

「佐藤一夫の事件ですが。」

被害者家族の家が妻の母親の名義で売りに出されています。佐藤が出所し、最初の事件に遭う前頃からです。どうも母親はその前に大きな借金をして、その埋め合わせのためなのですが。確かに住む者のいなくなった家ですから売りに出しても不都合はなく、事故から一年半が過ぎ、遺品の整理もついたでしょうからいいんですけど……。なんのための借金なんでしょうね？ 家の処分を嫁側の母親が行うことに、夫側の両親もなんら異議を持っていないようです。

女性暴行事件の方ですが。

性的被害にあつた女性たちを支援する団体のホームページがありますが、そこにかつて厳格に管理された会員だけが入れる部屋が存在し、そこに被害者たちを援助する募金を募るページがありました。そこでは目標金額を掲げ、募金をした支援者にはお礼と、『目標金額まであといくら。頑張りましょう！』と明確な目標を持って励まし合うコメントが書き込まれていました。そして、『ありがとうございます。これでわたしたちによりやく平安が訪れます』との管理者からのコメントを最後にそのページも、会員の部屋も、きれいに削除されました。その翌日、容疑者の男は謎の病を発症し、悶え苦しみながら死にました。

交通事故被害者の母親が借金し、その後始まった佐藤一夫の交通事故のシリーズ。

性犯罪被害者たちが募った募金が満額に達し、その翌日から加害者の男を襲った奇病。あちなみに、男の肉体が腐り落ちたのはなんらかのばい菌による毒が原因と見られますが、詳細は不明のまま焼却処分されたそうです。

この二つのタイミングは、偶然なんでしょうか？」

平中は二人の関心の高さを測るように紅倉と芙蓉を見比べた。芙蓉は判断が付かず紅倉を気にし、紅倉は「天罰でいいんじゃないの？」とあまり深い詮索はしたくない顔つきだ。平中は紅倉に逃げを許さないように冷静な固い声で続けた。

「偶然とは思えませんか？」

「こんなおかしな死に方ですからネットで『呪い殺されたんじゃないか?』という噂が立ち、『呪い請け負います』なんていうホームページも存在します。いかにも秘密めいてたどり着きづらい作りになっているので調べてみましたが、ただのオカルトマニアの素人のようです。とても本当にあんな風に人を呪い殺せるとは思えません。それに、若い女性たちはともかく、高齢の女性がそんな怪しげな力モフラージュされたサイトを見つけたせるとは思えません。そこで、そうした事件の被害者に直接接触する仲介者がいるのではないかと考えました」

「誰が?」

紅倉の問いに平中ははっと表情を凍り付かせた。紅倉はのんびりしながら意地悪なほど本質を突く鋭さで訊いた。

「今あなたが話している一連のことは、誰が調べていたことなんですか?」

平中は表情をなくした顔に暗い痛ましさを立ち上らせて答えた。

「安藤哲郎(てつお)、34歳。」

わたしと同じフリーライターです。

わたしの、恋人です」

芙蓉は暇な店だな、経営は大丈夫なのかしらと思った。こうしてもうけっこう話し込んでいるのに、自分たちの他にぜんぜんお客がない。窓から表の通りを眺めて、ああそうかと思った。ガラス窓はアンティーク調に少し色が付いているが、表の景色がやけに白々しく見える。お客のないのは自分たちのせい……先生のせいだろう。先生の放つオーラがこの空間をすっかり異次元の物にしてしまって、表を通る人に何となく警戒心を抱かせ、近づくのをためらわせるの

だ。お店には気の毒に、とんだ営業妨害だ。

芙蓉は何となく嫌な予感を持ちながら平中を見た。

「安藤はそういう、理不尽な不正義に苦しむ人に、いくら憎んでも飽き足りない極悪人を、呪い殺すことを薦め、代行を請け負う者が存在するのではないかと考え、その依頼者になりそうな事件に目を付け、関係者を張り込みました」

10 夫罰の是非

「9月に酒に酔ったサラリーマンが夜中、堀に落ちて溺死する事故がありました。」

警察が調べたところ男性には暴行を受けた痕があり、捜査の結果、4人の男子高校生たちを逮捕しました。彼らは男性に暴行を加えたことは認めましたが、堀に落ちたことは知らないと供述しました。暴行に関しても、自分たちが道路にいたところ訳の分からないことをわめいて絡んできて、あんまりしつこいので黙らせるためにやむなく少し殴っただけだと供述。実際男性の怪我はそれほど大したものではありませんでした。現場は小学校から少し入ったバイパス沿いの畑の中の道で、住宅地からは少し離れていました。夜11時くらいのこと、少年たちはただ集まって学校のことや将来のことを話していただけだと供述。自分たちはサラリーマンを殴って黙らせた後、すっかり白けてしまって、道に座りこんだサラリーマンを残して立ち去ったと言っています。サラリーマンはその後家に帰ろうとして、酔っぱらいの足で誤って用水路に落ち、溺れ死んだ、ということになります。

用水路は幅2メートル、底からコンクリートの護岸の上まで1メートル50センチ、その時の水深は40センチほどでした。流れも特に速くもなく、立ち上がるのに困難なものではありませんでした。しかし酔っぱらいは洗面器の水でも溺死すると言いますから、落下してパニックに陥り、そのまま溺死したことは考えられます。

亡くなった男性は58歳。その夜は会社の同僚と10時頃まで飲んで、駅で別れ、電車に乗って最寄りの駅で下り、歩いて30分ほどの家路を辿り、途中少年たちと遭遇したと見られます。自宅は現場から5分ほどの近所でした。

警察では少年たちの暴行と溺死の関係、もつと言えば、酔った男性を故意に突き落とし、起き上がるのを妨害、殺害したのではない

かと疑い捜査しましたが、そこまで明らかな殺意を立証する証拠は得られませんでした。

男性がお酒を飲んでかなり酔っていたのは同僚の証言で確かです。しかし男性の妻は、夫は明るいお酒を飲む人で、どんなに酔っても人に絡むようなことはしなかった、もし万一夫の方から少年たちに何か注意するようなことがあったなら、それはきつと、少年たちの方に注意されるべき理由があったに違いないと強く主張しました。それに対して少年たちは男性はとにかくひどく酔っていて訳の分からない状態だったと証言を変えています。

ところで、現場の小学校周辺で犬猫の虐待事件が複数起きています。警察ではもしかしてと少年たちをそちらの容疑でも調べましたが、残念ながらと言っていいのか、容疑を裏付ける証拠は出ませんでした。

結局のところ少年たちは男性の溺死とは直接関係ない、軽微の暴行容疑で、少年審判にかけられることになりました。

.....

紅倉先生の心証はいかがですか？」

「警察はもつとしっかり捜査するべきね」

紅倉は体から死の臭いを立ち上らせてピンク色に濡れた目で言った。

「調べるべきところを調べれば、その高校生たちが動物を虐待し、目撃者の男性を故意に殺した証拠が見つかったはずよ」

「調べるべきところとは？」

「動物虐待の現場は道の先のバイパス下のトンネルよ。サラリーマンはその様子を見つけてわざわざ確かめに行ったのよ。彼らは注意されて、反省して泣いて謝り、虐待していた犬を放してやった。サラリーマンは反省したならいい、二度とするんじゃないよ、と許して、道に戻っていった。現場から十分離れて、犯行にちょうどいい場所まで来たところで4人は襲撃した。酔っぱらいは洗面器の水でも溺死するのね？ 溺れ死にさせたのは田圃の引き水に頭を押さえ

つけてよ。溺死させてから用水路に投げ捨てたのよ」

「有罪ですか？」

「有罪ね」

平中は暗く唇を笑わせて訊いた。

「ちなみに、先生が裁判員だったら、量刑は？」

紅倉は自分の首を、くっ、と指で刎ねた。

「4人とも死刑」

平中は呆れたように笑って訊いた。

「16、17歳の子どもですが？」

「殺されれば痛くて苦しいって分かるでしょ？ 十分死刑に値する

大人よ」

平中は苦笑して紅倉を眺めた。

「あなたは徹底してあちら側の味方なんですね？ 困っちゃったな

あ……」

平中はじつとにこやかな目で紅倉を見ていたが、表情を改め、言った。

「少年審判で4人には保護観察が言い渡されましたが、結果的には無実と同じです。男性の暴行被害に関しては民事訴訟で争われることになりましたが、これについても被害者側には不利な状況でした。結局この民事訴訟も行われませんでした。その前に何者かが4人に死刑判決を下し、実行したようです。」

一人が夜の街で暴力団にリンチにかけられ死に、

一人が同級生にナイフで刺されて死に、

一人が父親と大喧嘩をして殴りつけ、逆に父親に陶器の灰皿で殴られて死に、

一人が野良犬たちに襲われて大けがを負い、用水路で溺れ死にました。

さていかが？ ざまあみると、すつきりしました？」

「ええ。ざまあみろとは思わよ。すつきりはしないでむかむかするけれど」

平中はじつと紅倉の目を見つめ、言った。

「わたしも彼らが動物を虐待し、男性を殺害したのなら、ざまあみ
ると思いますよ。」

ですが。

それはあなたの特殊な目が見ているだけで、我々一般人にとつて
は、警察と検察が殺人ではないと認めたケースです。あなたのような
特殊な目ではない我々のふつうの目で、怪しいという思い込みの
主観で殺人者だと決め付けて、呪い殺されてざまあみろと単純に喜
ぶわけにはいきません。それは無責任なジャーナリズムの最も戒め
られるべき悪癖です。

はつきりした証拠もなしに罪人扱いし、私刑に処すなど、法治国
家にあるまじき蛮行です。

それを正義と認めるわけにはいきません」

平中は紅倉に挑戦するように強い視線でまっすぐ見つめ、紅倉は
不機嫌に眉をひそめながら受け止めた。

「あなたは彼らの有罪を知っている。その目で見ているのでし
ょう？ 彼らを死刑に処した者は、あなたと同じように彼らの有罪をき
ちんと見ているのでしょうか？」

「さあ？ どこ誰だか分からない人の目なんて知らないわ」

「しかもその者はお金を受け取って、商売としてそれをやっていま
す。それでは営利的な殺し屋です」

紅倉はフンと笑った。

「神様だつてお賽銭を上げなくちゃ願い事を聞いてくれないじゃな
い？」

「これは神なんかの仕業じゃありません、人間のやっていることで
す！」

平中のきつい視線は紅倉を睨み、紅倉はすっかり不機嫌になつて、
すねたような顔になった。

「なによお、犯人が分かっているのお？」

「犯人は分かりませんが、その仲介者は、分かった、と思います」

11 カウンセリング・ボランティア

「全国的に見て犯罪被害者やその遺族のカウンセリング体制の整った警察や自治体組織はまだ少ないのが実状です。特に性犯罪被害者の110番受付、捜査段階からの女性専任捜査官の配備は是非急いでほしいところですが。」

全国で社団法人等、無料で犯罪被害者の相談に応じる被害者支援センターがありますが、そうした団体の一つ……と言っていいのか今ひとつ実体のつかめない、『手のぬくもり会』という団体があります。いえ、あるらしいんです。多くの犯罪被害者を取材したところ、その名前の団体に所属するカウンセラーに相談に乗ってもらえたという人が何人かいました。その相談に乗ってもらった人たちが、全員ひどい暴力事件や悪質な交通事故や医療事故の被害者やその遺族で、いずれのケースも加害者側がそれ相応の罪には問われなかったケースです。悪質な犯罪ではない、と認められた事件の被害者は対社会的にも精神的にもボランティアのカウンセリングを受け続けるのは難しいことがあるようです。泣き寝入りを強いられ、身も心も内に閉じこもってしまうのですね。

そういう被害者の下を『手のぬくもり会』のカウンセラーが訪れるようです。

カウンセラーは男性と女性と二人いるようです。

男性は信木寛孝（のぶきひろたか）

女性は易木寛子（やすきひろこ）

と言うそうですが、何となく二人の名前を比べるとペンネームっぽく感じますね。

二人は別々に行動し、全国各地に出張しているようです。男性の信木が50代、女性の易木が40代といったところのようです。

訪問を受けた被害者たちの評価は高く、本当に苦しいときに本当に親身になって話を聞いてくれ、適切なアドバイスをくれ、励ましてくれたそうです。おかげで苦しい状態から立ち直ることができた」と

平中は紅倉を真似て両手を開き、二人を見た。芙蓉が訊いた。

「いい人たちみたいね。話が終わっちゃったじゃない？」

平中はうなずき、言った。

「そうですね。話を聞いた人たちは犯罪から日常生活に立ち直って、明るい表情になって、彼らに感謝しているようだったそうです」

「やっぱりいい人たちじゃない？」

「そうですね。どうやら何が何でも呪い殺すことを薦めるわけではないようです。ただ……、同じようなケースで、二人が訪れたことが予想されるものの、話を聞けなかった被害者の人たちがいます。

彼らは話を聞きに訪れた安藤に、知らないと言いつつ、非常に警戒した、恐れと、敵意を見せ、一様に追い返され、二度と会ってもらえなかったそうです」

いかが？と目で問われて、今度は芙蓉がさあ？と肩をすくめた。

「そして話を聞けなかった被害者の事件の犯人たちは、やはり皆、不審な死を遂げています」

平中にじつと見つめられ、芙蓉は

「まあ……、怪しいわねえ」

と認めて紅倉を見た。紅倉は長話にあきたようにあらぬ方を見ている。平中はねちっこく話し続けた。

「安藤が話を聞いた人に信木、または易木に会いたいから連絡先を教えてくださいと頼んだところ、もうこちらから連絡はできないということでした。信木も易木も連絡先として自分の個人携帯電話番号を教えてくださいましたが、最後の訪問で『もう自分には必要ないですね？』と確認すると、それ以降は電話が通じなくなっただけです。どうやら二人ともその時々相談者専用プリペイド式の携帯電話を契約して、カウンセリングが終了すると契約を解除するようです。」

これも怪しいと思いませんか？ 仕事と自分のプライベートを分けるというのも分かりますが、連絡先はその携帯電話一つ切りで、『手のぬくもり会』への連絡方法はなし、これではその団体が本当に存在するのかわかりにくいところですよ。調べてもその名称の犯罪被害者の支援団体は見つかりませんでした。

これは支援ボランティアを装いながら憎い犯罪者を呪い殺す顧客を捜していると疑えるのじゃありませんか？

佐藤一夫のケースと暴行魔のケースでは千万単位のお金が動いているようです。

やはりいかに極悪な犯罪者相手でも、多額の謝礼金を受け取って残虐な方法で呪い殺すなど、許してはいけないではありませんか？

紅倉は平中の視線をつるさそうに見返しながら面倒くさそうに言った。

「お金を取るからいけないの？ 人殺しもボランティアでやってあげればいい？」

「そういうことではありません。それでは社会の秩序が保てません。なにやおく、さつきは犯罪に甘い社会を非難してたくせにい」

「それもそうですが、これもそうなんです」

「めんどくさあ〜い。いいじゃん、どうせ殺されるのは悪者ばっかなんだから」

「よくありません！ あなたは小学生ですか！？」

紅倉はぶーたれて唇をとがらせ、平中は学校の先生みたいに怖い顔で紅倉を睨んでいたが、こちらが大人になって冷静に戻ると続けた。

「サラリーマンが溺れ死んだケースですが、少年たちが保護観察処分になってから易木寛子と見られる女性が遺族である妻を訪ねてきました。少しぼっちゃりめの、控えめな感じの品のいい婦人だそうですね。夫妻に子どもはなく、親戚も遠くにいるようで妻は家に一人

でした。交通事故遺族の母親のところにも易木と見られる女性が頻繁に訪れています。

易木と見られる女性は毎日妻を訪ね、5、6時間も家にとどまり、2週間も通い続けました。

そして妻が久しぶりに外出すると、銀行に行き、多額の現金を下ろし帰宅しました。銀行からの帰り道、30代のいかにも武術なにかやっついていそうな厳しい顔をした男がガードするように付き添いました。妻の口座には夫の死亡保険等かなりの大金が振り込まれていました。

銀行に行ってきた夜、それまで徒歩で通っていた易木がグレーの普通乗用車でやってきて、運転手を残して家に入りました。1時間ほどして大きな紙袋を下げて出てきて、それが易木が妻を訪ねた最後になりました。その翌日から、サラリーマンに暴行を加えた4人の少年たちが、一人ずつ、死んでいきました。そっちの事件は後からわたしが調べました。安藤はそのまま自分も車で易木を乗せた車を追い、関東から岐阜県に入りました。

それからしばらくして、安藤は消息を絶ちました。今から2週間前のことです。

紅倉先生。あなたには是非見てもらいたいものがあります。

安藤からあなたに宛てたメッセージです」

12 ちよつとした暗号

平中はカバンから一枚のハガキを取り出しテーブルの紅倉の前に差し出した。どうせ紅倉には読めないのもで芙蓉が手に取って読んだ。絵ハガキであり、東京の平中江梨子への宛名の下に通信欄がある。

「拝啓 愛しのエリコ嬢。

俺に会えなくて寂しいだろうが、まあ我慢してくれ。

君もこっちに来れるといいのだが。ごらんの通り素晴らしい紅葉だ。

だがやはり君は来ない方がいいな。こっちの冷え込みはハンパねえぞ？

腹をこわしたらたいへんだから君は来るな。

俺もできるだけ早く帰りたいと思うが、よく分からん。

すごく君に会いたい。

じゃ、グッバイ。」

芙蓉はハガキから平中へ視線を移した。平中は寒そうにじつと耐えるような顔をしていた。芙蓉はハガキを裏返してみた。なるほど背後に高い岩の壁がそり立ち、左右から赤と黄の紅葉で埋め尽くされた山の斜面がせめぎ合っている。白いフレームに印字がある。

「紅葉美しいーの倉沢」

その横に表の黒の万年筆とは別の赤いボールペンで

「姫川を望む」

と書き込まれているが、滲んで消えかかり、表よりずっと古い書

き込みのような印象がある。

「ふざけたハガキでしょ？」

平中はフツと笑いながら言った。

「それ、岐阜の郵便局の消印なのに、その絵ハガキは群馬県の物なのよ？ 一の倉沢は群馬県と新潟県にまたがる谷川岳の一部に数えられる、日本三大岩場の一つ。たぶん、たまたま、カバンの中にも入っていた古い絵ハガキを代用したんでしょうね。ちらっとメモされている姫川も長野県白馬村から新潟県の日本海へ注ぐ名水で有名な一級河川だけど、群馬県の谷川岳とはぜんぜん別の場所よ」

芙蓉は一の倉沢の写真をじっと見つめ、平中を見て訊いた。

「安藤さんは、紅倉先生について何か言っていたんですか？」

芙蓉の問いを受けて平中はニヤリと笑った。

「気づいた？」

芙蓉はうなずいた。

フレームの文句に、黒インクで小さく数字が打たれていた。

「¹紅葉美³しい一の倉沢² 姫川⁴を望む」

芙蓉が言った。

「数字の順番で読むと、『紅倉美姫』。つまり、『紅倉美姫を望む』

平中はうなずき、言った。

「小学生並の暗号だけど、きっと安藤が何かあったときの非常通信用に準備していたんでしょうね。もし、敵の目に触れても、見過ごされるように」

差出人は「鉄道ジャーナル」とだけ書かれている。安藤「哲」朗を示す、暗号と言えば暗号か。

平中は悲しそうな目で笑いながら言った。

「こっちに来てほしいとSOSを送っておきながら、わたしには来

るなど言う。紅倉先生、安藤はあなたに助けを求めているんです。

安藤は紅倉先生に興味を持ってずっと調べていました。たぶんどこかでお会いになっていると思います」

平中はジャケットの内ポケットからパス入れを取り出し、中を開いて見せた。おそらく腕を伸ばして自分で撮ったのだろう、笑顔でVサインする平中と、面長で眉が濃く、厚いまぶたに切れ込みの深い二重の、視線の強い目をした男性が仲良く顔を寄せて笑っている。「007」の4代目俳優から女つたらしな甘さを抜いたような渋めの二枚目だ。芙蓉は「ああ」とあごでうなずいた。

「背の高い、耳の辺りに若白髪のある人」

うん、と平中が嬉しそうにうなずいた。

「実物は高田純次みたいにもっとふやけた感じだったわ」

あらら、と平中は苦笑し、紅倉はイヒヒと白い歯を見せて言った。

「美貴ちゃんは男に対しては厳しいものね。嫌いだから」

「あら、芙蓉さんがレズっていう噂は本当なの？」

「本当よ」

芙蓉はツンとすまして否定もしなかった。平中はニヤニヤ笑い、

えりの中に指を入れてネックレスを引っ張り出した。

ネックレスにはシルバーのリングが通されていた。

「彼がプレゼントしてくれた婚約指輪です。仕事柄「じゃま」なのでこうして胸に大切にしまっているんですが。」

彼はスクープにどん欲な人でした。でも芸能人を追い回して一時的な特ダネを狙うんじゃないかと、本にできるような、社会的な大きなスクープを欲していました。作家に転向したいと思っていたんです。わたしとつき合うようになってからは、できるだけ早く。紅倉先生を追っていたのもそのためです。でもこっちの呪殺事件に出会って、乗り換えたんですね。

彼はスクープを狙ううるさい記者だったでしょうが、そのために人の心を踏みにじるような利己的なことはしなかったとわたしは信じます。

紅倉先生。安藤はあなたにとっては八工みたいに目障りな存在だったかも知れませんが、こうして先生を頼っているんです、助けてはくさいませんか？ 安藤が……生きていければの話ですけれど……

「……………」

平中の表情が不安定に暗く沈み、芙蓉は悪い予感を思い出した。

「先生。安藤が生きているか、お分かりになりますか？」

平中は二人の写った写真を紅倉に差し出した。

13 はじまり

紅倉はため息をつくような顔で定期入れを手に取った。安藤の顔の上に軽く左手を当て、半眼になった。

「真つ黒な闇が見える。大きな、非常に危険な闇よ。安藤さんはその中にいる。けれど、生死は分からない。闇が濃すぎて外から中の様子を窺うことはできないわ」

紅倉は目を開き、定期入れを平中に返した。平中は受け取り、大事に手の中に包み込んだ。

芙蓉は平中をとても芯の強い女性だと思う。その平中が出会ってから一番ひ弱い女の顔を見せて紅倉に言った。

「紅倉先生。お願いします。安藤を助けてください。どうか、お願いします」

平中は深々と頭を下げ、肩を髪がサラサラこぼれ落ちた。紅倉は、「もしかしたら、もうお亡くなりになっているかも知れませんか?」と言った。

「それでも、わたしを安藤に会わせてください。彼らが善なのか悪なのか、はつきり見極めます」

紅倉は首を振った。

「あなたは来ちゃ駄目。ハガキにも安藤さんがあなたは来るなど書いているでしょう?」

「会いたいとも書いています。わたしも、安藤に会いたいです」

紅倉は困ってため息をつき、芙蓉に訊いた。

「どうしよう?」

芙蓉はきりつとした顔で平中を見て言った。

「平中さん。あなたもジャーナリストとして相手が非常に危険な連中であるのは分かりますね?」

「ええ」

「それを理解した上で、それでもいっしょに来たいですか?」

「ええ。是非」

「先生」

芙蓉は表情をゆるめ、微笑むと言った。

「ジャーナリストってやつかいな人種ですね？ あきらめて連れていきますか？」

紅倉はため息をついた。

「わたしは知りませんよ？ わたしはお化け専門ですからね」

「生きている人間の相手はお任せください」

芙蓉にニツコリ微笑みかけられ平中は、

「ありがとうございます」

と、改めて頭を下げた。

紅倉がカップを両手に持ってじつと中を見ていた。

その様子に気づいて芙蓉が訊いた。

「さすがにもう冷めちゃったでしょう？ お代わり欲しいですか？」

「うん。これでいい」

紅倉はグツとカップをあおり、ゴクツと残りを喉に流し込んだ。

「ごちそうさまでした」

紅倉はカップを置くとお行儀よく手を合わせた。

芙蓉ははて？と思った。紅倉の口を当てたカップの中、夕焼け色の紅茶の中に目が映っていたように見えたのだ。いや、角度的に中の紅茶が見えたとは考えづらく、あれはきつと紅倉が見ていたイメージのフラッシュバックだったのだろう。紅倉に近い位置にいる芙蓉にはたまにこういうことが起こる。

あの目玉は紅倉先生のものではなかった。

ギョロツと剥き出し、ぐりぐりこちらを覗き込む、邪悪な物を芙蓉は感じた。

その感じ方までが紅倉先生の頭の中のイメージであるのかどうかは芙蓉には分からない。ただ、

敵との戦いは既に始まっていたのだ。

闇の中。

老婆のしゃがれた声が笑った。

「ひっひっひ。女め、わしの目を飲み込みおったわ」

闇の中、老婆は目に黒い布を巻き、完全に外界の視界を絶っていた。

代わりに両手で小座布団の上に鎮座した水晶玉をしつかり鷲掴みにし、そこに映る外の世界を頭の中に見ていた。まるでデイズニー映画に出てくる悪い魔女のようだ。

「ひっひっひ。紅倉美姫か。……………こいつは……………」

老婆のしゃがれ声は不機嫌に低くなった。

「なんとかせねばならんじやろうねえ……………」

14 訪問者

その夜。

紅倉は芙蓉と小さな借家に住んでいるが、もう一人住人がいた。彼は紅倉のお気に入り、犬が大の苦手の紅倉のボディガードでもある、全身真っ黒の大きなシベリアンハスキー犬。ロテムである。犬小屋にうずくまっていたロテムは灰色の瞳を開き、のっそり起き上がると表に出てきた。

街路灯の下にびっくりした顔で中年の婦人が立っていた。婦人は笑顔を作りロテムにあいさつした。

「こんばんは、おつきなワンちゃん」

ロテムは灰色の目でじつと婦人を見つめ、歯をむき出すと、「ウオウンツ」と、路地に大きな声を響かせた。婦人はヒツとすくみ上がり、

「こ、こら、やめて。怖いわ」

と手で一生懸命凶暴な大型犬をなだめようとした。ロテムは歯をむき出してうとうとなり、再び

「ウオウンツ」

と吠え空気を震わせた。

「ヒツ」

婦人は額に脂汗を浮かべてひっくり返るように後ずさった。

ガチャリとドアが開いて芙蓉が顔を出した。

「こら、ロテム。どうしたの？」

芙蓉はロテムを叱りつけるような口調ではなく、むしろロテムが吠えている相手に鋭い警戒の視線を送った。うとうとなっているロテムを「しっ」と抑え、尋ねた。

「すみませんでした。失礼ですが、どちらさまでしょう？」

「こ、ここここ、こんにちは……」

婦人は唇を震わせて笑い、大きなカボチャのような帽子を脱いで

あいさつした。

「こちら紅倉美姫さんのお宅ですわね？ 夜分遅く失礼いたします。わたくし、あのー……」

婦人は名刺を取り出しながら、ロテムが怖くて近づけず、芙蓉も意地悪にロテムを下がらせようとはせず、婦人は仕方なくその場で名乗った。

「わたくし、『手のぬくもり会』の易木（やすき）と申します」

芙蓉は風貌から予想していたものの、相手の素早い行動に「まあ」と思わず口を開けた。易木はロテムを怖がって脂汗を流しながら一生懸命作り笑いを浮かべ、

「あのお、紅倉さんにお会いさせていただけませんか？」
と頼んだ。芙蓉がふうんと考えていると、後ろから声が出た。

「いいわよ、美貴ちゃん。寒いでしょう？ 入れてあげて」

「ロテム」

芙蓉に命令されてロテムは小屋に戻り、大人しくしゃがんだ。

「どうぞお入りください」

芙蓉に大きくドアを開けてもらい、

「おじゃまいたします」

易木はほっとした顔で玄関に入った。

6畳の居間。現在午後8時。

紅倉はこたつに入り、赤いどてらを着た背中を丸めていた。電気ストーブもついている。紅倉は寒がりです。暑がりなのだ。体温調節機能の弱い変温動物である。

「おじゃまいたします。わたくし、こういふ者でございます」

易木はスカートをさばいて膝をつき、改めて名刺を紅倉に差し出した。

「これはどうもごていねいに」

紅倉はこたつから手を出して名刺をつかみ、

「どうぞおー、こたつに当たってください」

と自分の向かいを指した。

「それでは失礼しまして」

易木はぼつちやりした顔に汗を浮かべ、上品な深いえんじ色のコートを脱いで畳み、こたつに足を入れた。冷たい外気が差し込んできて紅倉は

「寒かったでしょう？」

とニコニコしながら訊いたが、

「ええ。すっかり寒くなって」

と言う易木の額からは汗が流れ落ちた。易木の背後にじっと立って見守っていた芙蓉は

「夜ですから生姜湯でも入れましょうか？」

と台所に向かった。

「あ、いえ、どうぞおかまいなく」

と言った易木はとうとう白状した。

「実はその、もっと寒いかと思つて3つもカイロを入れてきました
…」

紅倉は意地悪にニコニコ笑つて訊いた。

「岐阜は寒いんですつてねえ？　こちらよりも気温は高いようですね？」

易木は紅倉の意地悪に苦笑いしながら言った。

「さすがに岐阜からこちらには参つてませんが。はい、寒いですよ。あちらの寒さは底冷えがしますからね。こちらは空気が柔らかくて寒さもじんわり染み込んでくるようですが、あちらのぴりぴり身を切るような寒さに比べると穏やかですねえ」

易木はもうすっかり隠し事もなくなつてしまったようにさっぱりした顔になって、穏やかに上品な笑みを浮かべて紅倉を眺めた。紅倉が訊いた。

「あなたの活動の本拠地はやはり東京？　まだこちらの事件ではあなたの出番まで至つてないでしょうからねえ」

易木はにこやかにうなずいて答えた。

「ええ。私がお訪ねする必要がなければ一番よろしいんですけどね。はあー……。どうなりますんでしょねえ？」

二人は穏やかな微笑みを浮かべて見つめ合い、やがて芙蓉が生姜湯を入れた湯飲みを3つお盆に載せて戻ってきた。

「どうぞ」

と配り、自分もこたつに足を入れた。

「ありがとうございます。ご馳走になります」

易木は手を温めるように厚い陶器を両手で包み、ふーふー、ゆっくりに一口飲んだ。

「甘くて美味しいですね」

紅倉も真似して飲むようにして、

「先生はまだ早いです」

と芙蓉に取り上げられた。二人の様子をニコニコ眺めて易木は言った。

「よろしいですわねえ、お二人仲がよろしくて。実はわたくし、個人的に紅倉美姫先生の大ファンなんですよ。お会いできてとても嬉しいんですよ？」

紅倉は、ふうーん、とニコニコして、

「あんまりいいタイミングの出会いではなかったようですがねえ」

と牽制した。易木も残念そうに眉を寄せ、子どもに言い聞かせるようなゆっくりした口調で言った。

「紅倉先生なら、わたくしどもの活動の意義をお分かりくださると思います。犯罪や事故で救済されるべきは被害者であるべきです。その後も延々と被害者が加害者に苦しめられ続けることはあってはなりません」

紅倉も聞き分けよくうなずいた。

「それは同感です」

易木はうなずき、紅倉の理解に力を得て続けた。

「わたくしは直接何人もそのうした理不尽に苦痛を強いられ続けて

いる被害者の方々とお会いしてきました。彼らに社会的な救済の手が差し伸べられることはなく、それどころか、しょうがないだろう、運が悪かったと思つてさつさとあきらめると、世間から無言の圧力を受け、感情を強く抑圧されます。被害者は正當に裁かれない罪によつて、では自分が悪いのか？と追いつめられ、精神的に身動きできなくなり、被害者の遺族は救えなかつた被害者にあの時ああしていればと自分を責めることを強いられます。

そうではないのですよ、悪いのは相手方であつて、あなたがその責めや不利益を背負つてやる必要はないのですよ？、とわたくしは彼らに話しかけます。もし、加害者側にそうならざるを得ない事情があつたにせよ、それを負うべきは加害者を取り巻く環境であり、被害者のあなたが背負わねばならないことではないのですよ？、と説得します。

運がよい場合には加害者側の事情に補償金を支払わせることができ、それはお金の問題ばかりでなく、被害者にとつては悪いのはやはり自分ではなかつたと精神的な安らぎを得ることが出来ます」

それは易木や同じ「手のぬくもり会」の男性カウンセラー信木の訪問を受け、心の安らぎを得て、感謝していたという被害者、遺族たちのことを言っているのだろう。

そうして上手く補償金を得た場合、易木や信木、「手のぬくもり会」への謝礼はどうなのだろう？

熱っぽく語つていた易木の穏やかで上品な目が、興奮にギラリと光つて、言った。

「わたくしどもはなにも最初から何が何でも実力行使に訴えようというわけではありません。

しかし。

そつでもしなければとつてい救えない場合があるのです。

それも、相当数。

被害者は、救われなければなりません。

それは、紅倉先生、ご理解いただけますわね？」

15 補償金

ここまで話を聞いて、芙蓉は易木の考えを紅倉先生そっくりだと思った。紅倉の様子を気にする。

紅倉が訊いた。

「それで、被害者は救われましたか？」

易木は穏やかな微笑を浮かべてうなずいた。

「被害者の心の傷が消えることはありませんが、少なくとも、それ以上の進行はくい止めることができます。後は時間がゆっくりと治療するでしょう」

紅倉はうーん…と考え、言った。

「憎い悪者を呪い殺して、

殺人者としての後悔は生まれないの？」

易木は自信溢れる笑顔で言った。

「それは、事前に十分時間をかけて理解してもらっています。相手に正当な裁きを下すことはそもそも社会が為さねばならなかったことなのです。社会が誤った判断を下してしまった場合には、それを正すのが正しい行いです。そのジャッジも、わたくしども『手のぬくもり会』が責任を持って請け負っています」

「つまり、えん罪はない、と？」

「ええ。100%、間違いはありません」

芙蓉は喫茶店での紅倉のカップに映り込んだ目玉を思い出した。

平中が問題視していた、「彼らも紅倉先生のように確かに有罪が見えているのか？」との疑念はクリアされているようだ。

つまり彼ら「手のぬくもり会」にはそれだけの高い霊視能力も備わっているということだ。

易木が安心したような笑顔で言った。

「ねえ紅倉先生。わたくしどもの活動をご理解いただけただけなら、わたくしどもをお調べになるのは中止していただだけませんか？ わた

くしたちは存在を世間に知られては困るのです。わたくしたちは、唯一、理不尽な不正義に苦しむ犯罪被害者たちのためにあるのですから。そして、わたくしどもは、これからも、そうであり続けなければならぬのです」

紅倉は、うー……、と考える、

「分かりました」

と言った。

「ただし条件があります」

「なんでしよう？」

「安藤哲郎さんを帰してください」

「安藤……てつお……さん？」

易木は誰なのだろう？と知らないように困って首をかしげた。

「あなた方の本部に捕らわれたはずのフリージャーナリストです。

彼をこちらに帰すことがわたしが手を引く条件です」

「まあ……、本部に……」

易木は気の毒そうに顔をしかめ、

「承知いたしました。その方を帰すよう至急本部に掛け合います」

と表情を引き締めて請け負った。

「よろしく願いますね？ でないと、お互い不幸なことになり

そうですから」

易木は眉をひそめて苦笑した。

「それは是非、願い下げたいですね」

易木は生姜湯の残りを飲み上げ、紅倉もようやく飲むことを許された。易木は額に汗を浮かべながら、一仕事終えて表情は満足そうに穏やかだった。

「それでは、夜分に失礼いたしました。約束は必ず」

易木はふと目を留め、

「それじゃあね、ワンちゃん、バイバイ」

と手をふったが、小屋の中に寝そべったロテムはちらと目を開け

たきり声も上げなかった。

丁寧にお辞儀して去っていく易木を見送って芙蓉は部屋に戻ってきた。

「安藤さんは帰ってくるでしょうか？」

「うーん…、分かんない。あの人はそのつもりのようにだけど……」

「悪い人ではないんですよね？」

「そうですね。使命感に燃えているって感じ。やだなあ」

「先生も本心では彼らの味方ですか？」

「まあねえー。わざわざ出かけていってお節介するつもりはないけれど、目の前にそういう人がいて苦しんでいれば、やっぱりなんとかしてあげたいって思うわよねえ？」

「人数もそれなりにいるようですし、霊能力の実力もかなり高いようです。平中さんには悪いですが、わたしも気後れしてしまいました」

「名刺」

紅倉は易木に渡された名刺を芙蓉に渡した。

「彼女の電話番号があるでしょう？」

「ありますねえ」

「あちらとの連絡窓口ってことね。本部の意向としてもわたしとはあまりやり合いたくないってことなんでしょうね。ちゃんと条件をのんでくれるといいんだけどなあ……」

平中江梨子は1階喫茶店を利用したビジネスホテルに泊まり、本業である裁判員裁判の取材を続けている。そちらはどうせフリーの仕事なので途中で切り上げてかまわないのだが、紅倉からあちらの出方を待つよう言われて取材の仕事を続行していた。

2日後の夜、平中から電話があった。

『岐阜の『手のぬくもり会』からホテルに小包みが送られてきました。安藤のカバンとジャケット、それと……、封筒に250万円が』

入っていました。……………」

受話器を耳に当てて紅倉はため息をついた。

「明日、出られますか？ それとも、やはりあなたはこちらに残りますか？ こちらでわたしたちの帰りを待ってくれた方がいいんですけど……………」

『いえ、行きます。連れて行ってください』

「そう。じゃあ時間とか場所とか、美貴ちゃんと決めてください」

紅倉は受話器を芙蓉に渡し、こたつに背を丸めた。

「ああ、嫌だなあ……………」

とつぶやいて。

16 犯罪を嗅ぐ女

彼女は街灯の下を通り過ぎてしばらく行ってから振り返った。今通り過ぎた街灯の下を、黒の革ジャンを着た若い男がこちらへ歩いてくる。不安が半ば的中して彼女は嫌だわと思った。アパート暮らしの彼女は駐車場を別に借りて、アパートまで10分くらい歩かなくてはならない。夜の11時。地方都市のベッドタウンはあらかじめ寝静まり、バイパスに合流する2車線6メートル幅の道路も今は通る車もたまにしかない。彼女はその道を辿り、バイパスの下のトンネルをくぐり向こうへ抜けなければならない。バイパスの斜面は枯れたススキがいっぱい茂り、道路灯の陰になったトンネル内の蛍光灯は薄暗い。でかでかスプレーの落書きだらけで、嫌なトンネルだ。でも明るい歩道を渡ろうとするとうんと遠回りしなければならない。もっと近くに駐車場を借りられればよかったのだけれど、近場で空いているのはここだけだった。近くの駐車場の管理会社に空きができたら連絡してくれるよう頼んであるが、まだ連絡はない。

会社で残業を終え、彼氏に電話したら向こうもちょうど終わったところだということで待ち合わせて食事をした。お互い明日も仕事なので食事が終わるとそのまま早めに帰宅したつもりだったが。

駐車場から出たところ、まるで待ち伏せていたようにふらりと男が現れ、後を付いてきた。どうしようかと思っていると男に電話がかかってくる。男は立ち止まって話し出した。遠ざかる話し声はどうやら彼女からの電話のようでほっとしたのだが。夜は無人の建物が続く寂しい所に来て再び男が後を付けてきているのに気づいた。いや、たまたま方向が同じだけかと思ったが、道の向こうから同じようなかっことをした男が歩いてきた。危険を感じた彼女はバイパスと反対の住宅地に逃げ込もうとしたが、トンネルへ向かう最後の枝道にやはり同じような革ジャンを着た男の二人連れが立っていて、彼女を見るとゆっくり歩いてきた。彼女はパニックになりそうなの

を必死に抑え、そうだ、防犯ブザーを鳴らそうとカバンのポケットを探った。すると後ろから付けてきた男が走り出した。彼女はギョツと戦慄し、逃げるため、走り出し、トンネルへ向かった。

トンネルをヒールの音を響かせて駆け、出口を出たら大声で助けを叫ぼうと思った。

彼女の希望をくじくようにもう一人の男が出口に現れ、一瞬足の止まった彼女に後ろから男が抱きついてきた。心臓を飛び上がらせ、悲鳴を上げようとした口を男の手で塞がれ、腰に何か押し付けられたと思っただらちクリと痛みを感じて一瞬ですくみ上がった。

トンネルに靴音を響かせて仲間の男たちも追いついたようだ。出口に立った男は暗い蛍光灯の明かりを受けて無精ひげの生えた口を嫌らしく笑わせている。

彼女の口を押さえ腰にナイフを突きつけた男が耳元で興奮を抑えた声で言った。

「姉ちゃん、ちょっとオレらとお散歩しようぜ、な？」

チクンと腰を突かれて彼女は腰を躍り上がらせた。男はたばこ臭い息で笑い、歩け、と肩で押した。

彼女は男たちに囲まれて油臭い工場の敷地に連れ込まれた。バッグは取り上げられ、はつきりと、刃のキラキラ光るナイフを見せられた。

歩きながら彼女は自分の明るく無邪気な人生が永遠に終わってしまつのを予感していた。彼氏のことは考えたくなかった。絶対にこれから起こることの記憶と彼のことをいっしょにしたくなかった。警察だつてきつとこういう犯罪は本人以外誰にも秘密に処理してくれるはずだ。こいつら絶対許さない。いずれ、絶対に罪を償わせてやる、と、怒りの炎を燃やすことでこの地獄を耐えようと思った。許さない、絶対に。

男に腕を突き飛ばされて、彼女は暗く恨めしい顔で振り返った。ナイフの男がニヤニヤ嫌らしく笑いながら言った。

「そんな嫌な顔すんなよ、美人のOLが台無しだぜ？ 憧れちまうぜ頭の良さそうなキャリアウーマンさんよお」

彼女はやっとしわがれた声を出した。

「わたしは、そんなじゃないわ」

男たちはへらへら笑った。

「いいんだよ、その方が気分が盛り上がるからよ。あんた美人だから当然彼氏いるよな？ もしかしてエッチしてきた帰りかな？」

彼女は絶対思い出すまいと思っていた恋人のことを言われてカッとなり、堪えていた涙がじわりと滲んだ。

「お願い、何もしないで帰して」

「いやだよお〜」

男たちは嫌らしく笑い、彼女が逃げられないように輪になって彼女の背を灰色の浪板の壁に追いつめた。

「なあ、恵まれないオレたちにちよつと幸せを分けてくれよ？ いいだろう？なあ？ ちよつと我慢してくれりゃあ、オレたちがうんと気持ちよくしてやるぜ？ なあ？オレたちと楽しもうぜ？ 彼氏よりうんとかわいがって病みつきになるくらいイかせてやるぜ？」

「嫌よ…」

男はナイフを横にかまえ、彼女の目の前に持つてきて、スーッと、鼻の上を裂くように動かした。彼女は目を寄せて刃を見つめ、脚をガクガク震わせた。

男ががらつと変わった暗く凶悪な声で言った。

「ちよつと我慢するのとよお、一生残る傷を顔に刻まれるのと、どっちがいい？」

彼女がナイフを見てガクガク震えていると、男がドスを利かせた声で怒鳴った。

「どっちがいいって訊いてんだよ！？」

彼女はヒツとナイフをよけて首をすくませ、震える声で、

「顔は、やめてください……」

と頼んだ。男が顔をぬつと近づけて、彼女はますます小さく縮こ

まった。

「じゃあいいんだな？ オレたちといたしてよお？」

彼女は恐怖に震え、屈辱に震えながら

「はい……」

と返事した。絶対に、後から、訴えてやるんだから……と自分に言い聞かせて。

「はい、こつち見て」

後ろの男がかまえた携帯電話のカメラを見て彼女はぞつと体が冷
水に支配されるのを感じた。カメラをかまえた男はニヤニヤ笑い、
言った。

「ポリ公に訴えるなんて考えるなよな？ 世界中にAV女優デビュー
したくなかつたらな」

彼女は自分の幸福な人生が永遠に終わったことを知って涙をこぼ
した。体が萎え、男たちに抵抗する気力を完全に失ってしまった。

男たちは彼女をニヤニヤ眺め、残酷に言った。

「じゃあ、ありがたくやらせてもらおうとするか」

「ああ……、臭いねえ……」

声に男たちはさつと緊張し、彼女の口を押さえ、凶悪な顔でじつ
と様子を探った。

工場は高台から下ってくる坂道の下にあり、大きな会社の木の茂
った庭のフェンスと、マンションの土台の石垣に挟まれている。裏
手は生活排水を流す堀が通っている。

声は女の物だった。

カツンカツンと杖を突いて前の道に立っているのは、黒い服装の、
まだ若い女で、立ち止まりながら杖を道の前に倒し、顔を上向かせ
て何か探るような仕草から、どうやら目が不自由なようだ。

女は上向かせた鼻をくんくんさせ、真つ黒な眼鏡の目を工場に向けた。

「臭いねえ。男どもの精液の臭いと……、血の臭いがするね？」

暗がりにはじつと身を潜めていた男たちは凶暴な顔を見合わせ、やっちまうか？とあごをしゃくった。

二人が表に出てきて、女を挟んで向き合った。

女の顔を近くで見た男たちは思わずヒューと口笛を吹く真似をして喜んだ。

「よお、姉ちゃん。目が見えねえのか？ なかなかべっぴんさんみてえなのによ、もったいねえ。あんたも仲間に入りてえのか？ 大歓迎してやるぜ？ オレたちや障害者差別なんてしねえからよ」

男はニヤニヤ嫌らしく笑い、「ま、いまさら嫌だって言っても逃がしやしねえがよ」とつぶやいた。

盲目らしき女は話しかけた男の方を向き、ニヤリと唇を笑わせた。

「そう？ わたしって綺麗？」

男はこいつ痴女か？と舌なめずりして言った。

「ああ。べっぴんだともよ」

女は笑い、サングラスのフレームに指をかけ、

「これでも？」

とサングラスを外した。

うっと男の顔が驚愕して腰が引けた。

17 獺犬と女ハンター

ガルルルルルル……………

うなり声が出て、女を挟んだ二人の背後からそれぞれ牙を剥きだした大型犬がのっしのっしと歩いてきた。2頭とも首輪はしているが紐はつなげていなかった。

女はふふふふふふ…と忍び笑いを漏らし、可笑しそうに言った。

「この子らを散歩させるために夜中出歩いたらとんでもない物に出会ってしまった、なんちゃって」

男たちは迫ってくる凶暴そうな犬たちにびびって右往左往している。女はサングラスを元に戻すと硬い金属の声で言った。

「嘘だよ。あんたらみたいなのが野郎どもを捜していたのさ。て言うか、あんたら？　ここらを縄張りにグループで婦女暴行をくり返してるゲス野郎どもは？」

工場の壁に女性を押し付け様子を見ていたナイフ男はチツと舌打ちして、

「しょうがねえ、みんなバラしちまうか？」

と腹立たしげに言った。言われた仲間の男二人は一瞬ギョツとしたものの、状況を見て、自分たちも尻から折り畳みナイフを取り出して刃を出した。

サングラスの女は工場の方の男たちに視線を向け、ふふふふふ…と忍び笑いをした。

ガチャツと金網の揺れる音が出て、工場の建物を回ってまた1匹大型犬がのっしのっし歩いてきた。更にマンションの石垣を駆け下りもつ1匹。2匹は歯を剥き出してうなり声を上げ、鼻の上にしわを寄せて凶暴な目で男たちを睨んだ。

「くっ、くそっ、なんなんだこいつら……………」

ナイフを構えた男どもも凶暴そうな大型犬たちに脂汗を流した。女性にナイフを突きつけた男がふと道路の盲目女を見て、その笑い顔を見て、女を挟む仲間たちに命令した。

「その女がボスだ！ やっちまえ！」

男たちは女に掴みかかり、その細い首を締め付けようとした。だが、背後から犬が飛びかかり男たちを突き倒した。盲目の女はひよいと踊るような足裁きで倒れてくる二人をよけ、犬たちに命令した。「黙らせる！」

ひいと悲鳴を上げようとする男たちの首に犬たちは大きく口を開け、鋭い牙でガブリと喉に食らいついた。男たちは手足をバタバタさせて騒いだが、喉をがっちりくわえられて声が出ず、呼吸ができない苦しさにバタバタ暴れていたが、やがてブルブル痙攣し、動かなくなった。それでも犬たちはガツチリ首をくわえたまま主人の命令があるまで放そうとはしない。

工場の方で見ていた三人は青くなり、自分たちを狙ってうなっている2頭にひいっとすくみ上がった。

「や、や、や、やろう……………」

追いつめられ、ナイフを女性の喉に押し当て怒鳴った。

「こ、この犬どもをどけやがれ！ でねえとこの女の首かつ切るぞ！」

女性は目にいっぱい涙を浮かべ引きつけを起こしそうになったが、サングラスの女は

「はあ？」

と顔をしかめ、

「やりやあいいじゃない？」

となんてことないように言った。

「わたしが殺しの目撃者を生かして帰すと思ってるの？」

女性は驚いていやいやとブルブル震え、ナイフを突きつけた男も目を丸くして、

「な、なんだと……………」

といぶかしがり、ぐいと女性の喉元に当てたナイフに力を入れた。「本当にぶつ殺すぞ!？」

「やれ」

女の言葉と共に2頭の犬がナイフを構えた男たちに躍りかかった。「ヒ、くそっ」

男たちは必死にナイフを振ったが、一人はその手をかいくぐった犬にガブリと喉に食らいつかれてダン!と建物の壁に押し付けられ、ガウツと首をひねられ、ゴフツと潰れたうめき声を上げて白目を剥き、ダラツと全身の力をなくしてズルズルセメントの地面に座りこんだ。一人はナイフの手をガブリと噛みつかれ、「ギャ」と悲鳴を上げる口を……男にしてみればライオンのように凶太い強力な手で……ぶん殴られ、悲鳴の代わりに鉄錆臭い血をビュツと吹き出した。「……」喉に溢れ返る血を吐き出し思わず空いている手を持ってきたところ、ナイフの手を噛み千切られそうに振り回され、バシッと側頭部を強烈にパンチされて卒倒した。

一瞬にして仲間をみんなやられて孤立した最後の一人は、逃げ道を捜して、人質の女を放り捨てるは無言でナイフを構えて道路の女目指して突進した。

女は男の方を向き、盲人用の杖を振り上げると、突進してくる男のこめかみを思い切り叩いた。男は顔をクツと斜めにしながら突進し、女はひらりと横に避けた。男はこめかみから血を流しながら怒りの形相を向け、ナイフで突こうとした。女は杖を振り上げ、ビュツビュツと振るい、男をバシバシ叩いた。しかし盲人が障害物を探るための杖は細く軽く、男は無言で叩かれながら振るわれる杖を掴もうと手を伸ばしたがスピードだけは速い杖はするりと握る手を滑り抜け、バシバシと無力なくせにうるさく男を叩き続けた。男は力ツとしながらじつと無言で盲目の女にナイフを突き刺す隙を窺った。女を刺すことに夢中の男は、背後に突然巨大な、異様な気配を感じてハツと振り向いた。

まるで熊のように仁王立ちした大きな犬が、鋭い爪を立てた手で

男の顔面を叩き下ろした。肉をガリツと引き裂かれ、頭蓋にグワンと重い衝撃を受けた男はカアツと燃え上がる痛みと白熱するシヨックに意識を消し飛ばされ、どおっと倒れた。

アスファルトに倒れた男の背にドシンと大きな手を載せて第5の大型犬がグルルと凶暴にうなった。ラブラドル種のこの犬が5匹の中で一番巨大だった。

女は口元に笑みを浮かべ、
「待て」

と命じた。犬はうなるのをやめ、女の顔を見上げた。女は犬の頭をくしゆくしゆ撫でてやり

「お利口」

と褒めてやった。顔を上げ。

「みんなもご苦労様。後は人間のお兄さんたちに任せましょう」

道路を坂の反対側から黒い業務用を思わせる大型ワンボックスカーがゆっくり走ってきて、女と犬たちの前で止まった。

前のドアが開いて3人の黒服の男たちが下りてきて犬たちの足元の不良どもを調べた。女が男の一人に言った。

「抵抗されてちよつと出血させちゃったけど、どう？」

男は小型の懐中電灯をつけ、顔面を怪我した不良とアスファルトを調べ、別の一人が工場の敷地へ入っていき、身を縮こまらせて震える女性に「失礼」と声をかけ、倒れた不良たちと辺りを調べた。

道路では、

「問題ないでしょう」

工場の方は

「こっちはコーラで誤魔化しましょう」

手の空いている一人が車に戻って缶のコーラを持って工場の方へ走った。プシュツとプルトップを立て、血の飛び散ったセメントにかけた。

「オーケーです」

「ありがと。じゃ、運んで」

男たちは倒れた不良どもを軽々担いで、バックドアをそつと開けると中に不良どもを放り込んでいった。収容作業はすみやかに手際よく完了し、犬たちの3頭が飛び乗り、バックドアは閉められた。

「お先」

男たちはチャツと指で敬礼するみたいにして車に乗り込み、大型ワンボックスカーは坂道を上がっていき、ウインカーを点滅させ、右折して大通りへ入っていった。

もう1台、真っ赤な、これも大型のステーションワゴンがワンボックスカーの去った後へ止まった。

運転席のドアが開き、若い男が降りると後ろのドアを開けた。

「行け」

女の命令に残り2頭的大型犬が後部座席に駆け込んでいき、若い男はドアを閉め、助手席に回って女の来るのを待った。コツ、と杖を地面に突いた女は、工場の方を振り返り、コツコツと、上がっていった。

OLの彼女は胸を掻き抱いてガタガタ震えた。女は近づくと、苦笑し、言った。

「ごめんよ、あんたを殺す気なんかないよ。あんたを助けるための作戦さ。悪かったね。でも」

女はサングラスの目でじつと彼女を見下ろして固い声で言った。

「あいつらが殺されて当然のクズどもだってのは分かるよね？」

彼女はうんうんと一生懸命うなずいた。

「だがわたしがあいつらを連れ去ったっていうのが知られるのも困る、っていうのも理解してくれるよね？」

彼女はまた一生懸命うなずいた。

「けっこつ。じゃ、気を付けて帰りな。今度はいつでも助けを呼べる安全な道をね。あなたも」

女はフレームに手を添え、顔をうつむかせるとサングラスをずらして彼女を上目遣いで見た。

「こつなりたくなかったらね。気を付けるんだよ？」

彼女は目を丸くし、思わず恐怖の悲鳴を上げそうになる口を両手で押さえた。女はサングラスを戻すと顔を上げ、

「じゃあね」

と手を振って緩い坂を下りていった。女が車の所に来ると、OLも立ち上がって駆け下りてきて、女に頭を下げると急いで道路を駆けていった。

若い、甘い顔をした坊やが心配そうな目で訊いた。

「だいじょうぶでしょうか？」

女は冷たい顔で言った。

「さあね。自分で気を付けるさ。結局自分を守るのは自分なんだからね。そうそうわたしらみたいなのが都合よく助けてなんかやれないよ」

「いえ。警察に通報しないかと」

「ああ……」

女はそつちかと軽く笑った。

「だいじょうぶだろうさ。ちょっと脅してやったからね」

女が助手席に乗ると男はドアをそつと閉め、運転席に戻った。

運転席に戻った男はエンジンをかけると、ボックスから携帯電話を取り上げ、ピッピッと操作して女に渡した。

「部長からお電話がありました」

「なんだろう？」

男は車を発進させて坂道を上り、先行のワンボックスカー同様右折した。後部座席の上と下にしゃがんだ大型犬たちは大人しくしている。

「もしもし。ケイです」

電話で「部長」と話しているらしい「ケイ」は、

「ええっ？」

と相手の話の不愉快そうに眉を歪めた。

「紅倉美姫を？殺すつもりなんですか？……ええ、……ええ、ええ、わたしもその方が賢明だと思いますね。来るんですね？紅倉美

姫が、そっちに？ ま、わたしも朝には着きますから、そちらで。

……はい、では」

盲目の女「ケイは電話を切るとボックスに戻した。運転手の坊やが気にして訊いた。

「紅倉美姫って、あの紅倉美姫ですよ？ ……何をしに来るんでしょう？ ……」

ケイは不愉快そうに、

「彼女が来るなら、わたしたちの秘密を探りにでしようが……」
と言いながら、考えてフツツと笑った。

「会ってみたいとは思っていたのよね、彼女。できることならお友達になりたいものね。でなければ、」

犬たちに「やれ」と命じた冷酷な顔になって言った。

「殺さなければならぬわ」

18 ハプニング

夜の国道を走る赤い大型ワゴン車。

携帯電話の呼び出しが鳴り、運転手が視線を下に向けるとケイがさっさと取って出た。

「もしもし。………了解」

電話を切って言った。

「ちよつと問題発生。適当なところで止めて」

運転手はバスの停車レーンに入ると先の方で歩道に寄せて止めた。

「今何時？」

「2時30分を回ったところです」

「ったくねー。名古屋で宝石店強盗だつてさ。警備員が2人射殺されて、駆けつけた警察官1人殺して2人重症負わせて、車2台で派手なカーチェイスやらかして逃走中だつて。泥棒ならもう少し上手くやれつてんだ。郷に入りては郷に従えつてね、どうせ中国人の武装強盗団だろう、中国人様は自分の物は自分の物、他人の物も自分の物つてまったくガキ大将様だからねえ」

ケイは人種差別的に悪態をつき、実際困つたように言った。

「というわけで名古屋方面はあちこち検問だらけでパトカーが走り回つてとても近づけないつてさ。あんな荷物積んでるのを見られたら一発でお縄だからね。クロさんと話してどうするか決めてちょうだい」

ケイから電話を受け取って若者は「クロさん」にかけた。

「ミズキです。名古屋、駄目なんですつて？ ……はい、……はい。了解しました」

電話を切ると「ミズキ」はケイに言った。

「とりあえずこの先のコンビニで追いついて、あっちの誘導で目立たない場所に」

「了解。やってちょうだい」

ミズキが携帯電話を置いてハンドルを握るとケイは後ろの二頭を振り返り言った。

「悪いね。家でゆっくりするのは少し延びそうだよ」

赤いワゴンカーがコンビニを通り過ぎ、しばらく行くと黒いワゴンボックスカーが追い越し、ワゴンカーは後について走った。

二台は国道を名古屋方面から逸れ、内陸の山中へ入っていった。前のワゴンカーではどういう方法でか警察の動きを探り、危険と判断してどんだん市街地を離れた山奥深くに入り込んでいった。

途中から完全な山道に入り、建物のほとんど見当たらない細い道を登っていき、枯れ草に埋められた駐車場らしき所に止まった。

前のワゴンボックスカーから男たちのうち二人が降り、バツクドアを開いて犬たちを表に出してやった。ワゴンカーからはミズキが降り、ケイのためにドアを開いてやり、後ろの犬たちにもドアを開いてやった。

「状況はどうなの？」

ケイに訊かれて男たちのリーダーらしき「クロさん」が答えた。

「よくありませんね。連中他にも仲間がいるらしく、車を乗り換えて繁華街に潜つちまったようです。その際にも1人殺して、まったく無頼を地で行ってますな、警察も血眼です。さっさと逮捕されればいいが、こりゃあ長引くかもしれませんよ？」

「まったくなんだい、他人様の家に土足で上がり込んで、遠慮も礼儀もまるでなつてないね？ そんな凶暴な奴ら問答無用で撃ち殺してやりゃあいいんだよ」

ケイは犯人たちを外国人と決め付けて自分たちのことは棚に上げて悪態をついた。三十になるかならないかのクロは精悍な顔立ちに渋い苦笑を浮かべた。ケイはクロの苦笑いを気に入らないように訊いた。

「で？ こっちは大丈夫なんだろうね？」

「ええ。警察は内側への囲い込みに必死ですからね。ただ、かなり

範囲を広く取っていますので、下手に近づくのは危険です。時間が経てば捜査を更に外に広げてくる可能性も高いですし、こちらは更にその外側を迂回して行かなくてはならないことになるかと思いません」

男たちのリーダーはクロらしいが、クロより年下のケイがズケズケと偉そうな口をきいて、クロは丁寧な答えてお嬢様のような扱いをしている。まだ二十歳前に見えるミスキともう一人も大人しく二人のやりとりを聞いている。降りてこないもう一人は車内で警察情報収集を続けているのだろう。

「ちつくしよう、腹が立つねえ」

苛つくケイをクロは落ち着いた声でなだめるように言った。

「慌ててどじを踏んだら命取りです。ここは一つのおんびりじっくり構えましょうや」

「冗談じゃないよまったく。こんななんにもないところでのんびりなんざ、肝にカビが生えちまうよ」

ケイは見えてでもいるように杖をブンと山の斜面の下る真っ暗な空間に振った。この辺りには道路灯も点いていない。

「明日にも紅倉美姫が来るんだろう？ こっちが遅刻してどうすんのさ？」

クロが可笑しそうに苦笑して言った。

「どうするって、ハンターのあなたはどうする気です？ 村のことは『青年団』に任せておいてください」

ケイは不機嫌に腕を組み、アルミの杖で自分の腿を叩いた。クロがご機嫌を取って言った。

「紅倉は乗り物が苦手ですからね、途中一泊して、おそらく到着はあさってでしょう。運が良ければ先に着けますよ」

「頑張れ日本警察！てか、愛知県警！か。まったく、当てにしているよ」

ケイはペチペチ腿を叩きながら、ふと、ニヤリと悪い笑いを浮かべた。

「じゃあ、わたしが迎えに行つてやるよ、紅倉美姫ご一行様を」
クロは慌てていさめた。

「ケイ。それは危険だ。あなたにとつても、村にとつても。大人しくわれわれといっしょに……」

「嫌だ！ もう決めた！」

「ケイ！」

「会いたいんだよ、あの女と！」

ケイも自分がわがままを言っているのを悪いと思つているのか、真剣な顔をクロに向けて言った。

「村の仇になるようなことはしないよ、わたしの命に懸けてね」

クロもケイの言い出したら聞かないお嬢様の性格を知つていて、ため息をついて言った。

「命なんか懸けなくてけっこうですから、無茶はしないでください。……どうやら、会長たちには考えがあるようですから」

「了解。とりあえず、村へのエスコートにとどめておくよ」

ケイはお目付役から許可をもらつてすっかり機嫌良くなつて笑つた。一方のクロはお嬢様のじゃじゃ馬に困つたものだとため息をつき、下男のミズキに言った。

「ケイの見張り、頼んだぞ？ 危なくなつたら杖で叩かれるくらい我慢してさつさと車で紅倉から引き離せ」

ミズキは心配そうにケイを見ていたが、クロに言われて「了解」と苦笑しながら請け負つた。

「さつてつとおー……」

上機嫌のケイはイタズラな笑いをワンボックスカーに向けて言った。

「長引くとなると4人も運ぶのは邪魔だろう？ ここで一人に選抜しちまおうか？」

19 サバイバルゲーム

ワンボックスカーの後ろの荷物スペースには4人の不良どもの死体が押し込まれていた。いや。

死体と思われた4人は男たちに乱暴に地面に放り捨てられると、

「うつつ」とうめいて身動きした。

「おら起きろクソども！ 朝だよ！」

まだ日の出前ではあるが山の陰にある朝日が空をピンク色に染め始め、真っ暗だった山の中腹の台地にも色を付け始めた。

明かりを得て全貌の現れたそこは500メートルほどの山の5合目辺りに当たる、テニスコートを3面ほど縦に並べたくらいの平らな尾根だった。外側を枯れてポキポキしたススキが生い茂り、その下の斜面を紅葉の葉を半分くらい落とした木々が覆っている。

不良たちは喉を押さえてゲホンゲホンと咳をし、なかなか焦点の合わない目で自分たちがどうなったのか思い出せないアホ面で辺りをつつろに眺めた。犬たちに喉をがっちりくわえ込まれた不良たちは気を失った状態で止められ、殺されてはいなかったのだ。

最初に口を殴られて血を吐いた不良が痛みに巨大犬に襲われた恐怖を思い出し、「ひい」と悲鳴を上げて体をすくませて怯えた。他の者も徐々に能の酸欠状態から覚醒し、自分たちの取り囲まれている危険な状況を見て背中を寄せ合い、恐怖しつつ、敵意を見せた。

「ふっ」

ケイが笑うと、彼女に杖で叩かれたグループのリーダーらしい不良がガリツと犬の爪にえぐられ生乾きの傷跡も痛々しい顔に憎しみを露わにさせて睨んだ。

「てっ、てめえ……、な、なんのつもりだ？」

ケイはへらへら笑いながら舐めきって言った。

「ボキャブラリー貧困な馬鹿丸出しの頭でもテメエらが無事娑婆に帰れる状況じゃないのは分かるよな？ けどわたしたちもちよつと

拙いことが起こっちゃってね、あんたらテストすることにしたんだよ」

ケイはサングラスで本心を隠しつつ一応まじめくさった顔をして言った。

「生きのいい悪党を一人、ご所望なんだけどね？ 必要なのは1人で、後は…この際お荷物なんだよね。邪魔だからここで捨てていくことにした。ただねえ、分かるだろうけど、わたしらのことを下界でおしゃべりされちゃ困るんだよね。だからさあ、そっちで1人選んでよ？ 要するに、てめえら殺し合って、一人生き残った奴だけ連れてってやるって言うのさ。分かった？」

クロが4人の前に彼らから取り上げた折り畳みナイフを投げてやった。不良たちはナイフとケイ、周りの男たちを見比べて、怒りに燃えた獣のような声で言った。

「つざけんよ。んな訳の分からねえ話に乗って仲間同士殺し合えるか」

ケイの表情にカツと短気な怒りが立ち上り、女性とも思えない汚い言葉でののしった。

「てめえら仲良しリンカン学校のお友だちか？ 反吐が出んだよっ！！ てめえら馬鹿の考えなんかお見通しだ、いいぜ？ 協力してここを脱出してみるよ？ ええ？ ほらあつ、かかってきやがれっ！！」

4人は顔を見合わせ、ナイフを手にするべきかどうか迷った。

怖じ気づいている不良どもにチツと舌打ちしてケイが言った。

「ミズキ。一人やれ」

「はい」

まだ19かそこらの、優しそうな坊やの顔をしたミズキが無表情に歩いてくると、ジャケットの裏に装着した鞘から刃渡り20センチの大型ナイフを取り出し、まさかと浮き足立つ不良の、手近な一人に足を上げると、ザツとナイフを振り下ろした。素早く首を蹴り倒し、ブシャツと噴き出す血は仲間たちを濡らして後ろに飛び散っ

た。ミズキは涼しい顔で濡れた靴底を倒れて痙攣する不良のTシャツの腹に拭い付けた。ビクビク手足を痙攣させていた不良は、動かなくなった。

「や、野郎！」

リーダーがナイフを掴み刃を出すと、一瞬で視界から消えたミズキが、後ろからピタツと、不良の首筋に赤く濡れたナイフの刃を押し当ててケイに訊いた。

「どうします？」

「いいよ。分かっただろう？ こいつらみんな物凄く強いよ？ 犬たちもね？」

三人の不良たちはゾツとした顔で左右に離れて監視するように立つ二人の得体の知れない男たちを見、ケイの後ろで大人しく並んでお座りしている五頭的大型犬を見た。首筋からミズキのナイフが離れると、

「い、い、い、……、いやあーっ！！！」

リーダーはナイフを振るって、となりの仲間の首を切った。

「うがっ」

首を切られた……口を怪我していた不良は、片手で切られた首を押さえ、片手を地面のナイフに伸ばしながら、口から血の泡を吹きだして、ゴフツと咳をすると白目を剥いて倒れた。

「いやあっっ！」

「うおおっっ！」

残る一人は急いでナイフを拾うと追いつき斬りつけるリーダーから逃れ、刃を出すと自分も腕を振って牽制した。二人はナイフを構えてじりじりと睨み合った。

「てつめえー……、殺りやあがったな……」

「悪いいな、おまえもオレのために死んでくれよ？」

脂汗をいっぱい浮かべ狂気の笑いを浮かべる仲間にもう一人は胸くそ悪く言った。

「誰がてめえのために死んでやるかよ。おい、考えるよ？ こんな

事させる奴らが、生き残った一人を本当に生かしておくと思うのか？」

リーダーはちらつと相手のリーダーであるらしいケイを見、油断なくナイフを構えて仲間を牽制した。

「さあな。だが、やらなきゃやられるのだけは確実だぜ？」

「ああ…、そつだなっ」

ビュツと振られる刃先をよけ、こちらもヒュツとナイフを突き出し伸びた腕を狙った。腕は慌てて引込み、ビュンと縦に振り下ろし、横にはらわれる刃をよけて体を引き、シュツと鋭くくり出す。

両者無言でぎりぎりの緊張感でナイフの動きに神経を集中させていた。

カチツとナイフ同士がかち合い、くるっと旋回したリーダーのナイフが仲間の手の甲を裂いた。

「うぐっ」

痛みにビクリと跳ね上がった隙についてリーダーは更に手首に刃を切り込ませ、ブシュツと血が噴き出した。

「ぎゃっ」

悲鳴を上げてナイフがこぼれ落ち、一瞬目が合った仲間の首をリーダーは刃先でなぎ払った。

「イテツ」

押さえる手を押しして激しく血しぶきが噴き出し、リーダーの顔面をビュツと打った。

「く……、てめ……」

仲間は顔を歪めて、どおっと倒れた。

「はあー…、はあー…」

肩で息をする不良に、

パン、パン。ケイが手を打った。

「はい、勝負あり。生き残り、おめでとう」

20 後始末

リーダーはハアハア息をしながら凶暴にケイを睨んだ。

「……本当に、……オレはあ、……殺さないんだな？……」

ケイは大きくうなずいて言った。

「ええ。殺しは、しないわよ。さ、じゃあその危ない物を渡してもらおうかしら？」

ケイは右手に杖を持ち、左手を開いて差し出した。ハアハア息をつきながら睨んでいた不良は、背後で見張っているミズキを気にし、ケイの後ろで大人しくお座りしている犬たちを見て、ゆっくりケイに近づいてくると、足を速め、ナイフを握った手を引き、叫んだ。

「てめえも道連れだ！」

どうせ生かしておくわけはないと踏み、せめてもの復讐にむかつて女をぶつ殺してやろうと、最後の勇気を見せようとしたのだ。距離を測ってナイフの腕を後ろから思い切り突き出そうとし、ケイの振り上げた杖の先がドンと肩の付け根を突いた。

「馬鹿」

こんな物どうでもねえ、と不良は笑おうとし、そのまま肩で跳ね上げようとし、

ケイの口が白い歯を見せてニヤツと笑い、ケイの親指が手元のスイッチを押し、

不良の顔が痛みと驚愕に歪んだ。

ケイは素早く杖を引くと、間髪入れず反対の肩の付け根、両腿、に杖の先を突き入れていった。

ケイがフェンシングの突きの姿勢からさつと後ろに下がると、不良は両脚をくねっと曲げて、体の重みに押しつぶされるように座りこみ、両腕をだらんと地面に付けた。

「くくくくくくくくくく」

ケイは意地悪な笑い声を漏らして、杖の先に仕込まれた細い両刃

のナイフを引っ込めた。不良は痛みには歪む顔に驚きと憎しみの表情を滲ませてケイを睨み上げた。

「て、て、て、てめえ、な、何しやがった？」

ケイは残忍に笑って教えてやった。

「筋を切ったのさ。あんたの手足はもう二度と動かないよ？」

試してみる？と言われているようで不良は体を揺らして必死に手足を動かそうと頑張ったが、まるで力が伝わらず、その事実絶望すると、歯を噛み砕かんばかりに食いしばり、呪詛を込めて言った。「殺せよ。どうせそのつもりなんだろう？ さっさと…、ぶっ殺しやがれ！！！！」

「あらそう？」

ケイは動けない不良の額にピタツと杖の先を当てた。不良の額に汗が噴き出し、血走った目が見開かれた。

「グサツ！。なあーんちゃって。せつかく殺さないって言ってるんだからさ、命大切にしなよ？うん？」

コツ、とつついて杖を下ろすと、不良を見下し、絶対に助けてなんかやりそうにない残忍な悪魔の笑いを浮かべて言った。

「生きるよ？ 死んだ方がましな苦痛を味わっても、死ぬのは許さないよ？ せいぜい……、50人分くらいは保ってくれよ？」

ケイは顔を上げてミズキに言った。

「舌を噛まないようにして」

そしてニヤニヤ不良を見た。不良は脂汗をびっしょり浮かべてあごをわななかせた。その内ミズキが死んだ仲間のTシャツを切り取った布を丸めて不良の口に詰め、上から細布を噛ませてぎゅっと縛り上げた。

ク口ともう一人がスキの原の中でスコップを使って黙々と穴を掘り、ミズキも手伝いに向かった。シャリンシャリンとスコップが土を噛み、ザツザツと土が投げられる音を不良は恐怖の顔で聞いた。不良はべったり地べたに座りこんだまま動かず、ケイは犬たちの所へ歩いていき、

「おまえたち、朝食前に散歩に行くよ」

犬たちに指示すると犬たちはさっと元気に立ち上がった。

「ああ」

ケイが思いだしたように振り返って言った。

「本当におまえを殺す気はないから。今掘ってる穴は3つの死体を埋めるためさ。」

ねえ？ 死体の処理をどうするか、聞きたい？」

ケイは言いたくてウズウズしながら言った。

「あのでかい車には冷蔵庫があつてね、硫酸のボトルが入ってるんだよ。死体を穴に転がしたら、全身まんべんなく硫酸をふりかけて、顔も指紋も、歯も、みーんな溶かしちゃうのさ。うふふふ、ま、あんたらみたいになちんぴらのクズ、そこまでしてやる必要もないんだけどさ。ま、一応礼儀としてね。うふふふふ。」

嫌あゝな臭いがするからね、犬たちに嗅がせるのはかわいそうだ。あんたは、たつぷり人間の溶ける臭いを堪能するんだね？ これからさんざんそういう……地獄を見ることになるだろうからさ。あはははははは」

ケイは杖を振り振り、車の上ってきた舗装のされていない坂道を犬たちを引き連れ降りていった。実際の所ケイに視力があるのかないのか分からない。日はようやく山の頭を越えてさつとまつすぐ白い光線を発し、不良の影を長く地面に描いた。穴を掘り終えた男たちは3つの死体を乱暴に引きずっていき、穴の横に並べた。クロがワンポツクスカーのバックドアに入っていき、不良は思わず血走った目を向けた。クロはガラスのリトル瓶を持って出てきた。手にはざらざらした黒いゴム手袋をはめている。ミズキともう一人を下からせ、口金を外してふたを開くと、仰向けの死体たちに中身をふりかけていった。もうもうと煙が上がり、ビニールと、肉と、何か薬品っぽい物が焼ける臭いが発散された。不良はたまらず猿ぐつわの中で悲鳴を上げ、地面に倒れ込んであごをしたたかに打ち、その痛みもろくに感じる余裕もなく必死にあごと腰だけで体を動かそうと

もがいた。自分が世の中という物を舐めきっていたことを思い知らされた。好きなように生きて、どうにもならなくなったらさっさとこんなクソ世の中なんかおさらばしまえばいいと高をくくっていた。だがこいつらは、用意周到で、当たり前前に死を扱っているプロフェッショナルたちだ。こいつらは、虫けらの命なんて、本当に、何とも思っていないのだ。ミズキがやってきて不良の腹を蹴り上げた。不良は背を丸めてブルブル震えた。

「とりあえず痛い目に遭いたくなかったら大人しくしている」

クロは死体の個人情報が消えたのを確認し、

「よし。いいだろう」

1体を足で穴に蹴り落とし、ミズキともう一人もそれぞれ溶けただれた死体を蹴り落とした。クロは残りの硫酸を穴にぶちまけ、ゴツと上がる煙をよけて嚴重に瓶のふたを閉め、バツクドアに戻っていった。しばらくして煙が収まると、三人はまたスコップで穴を埋め始めた。

地面に転がってビクビク震える不良は、既に地獄にいる気分だった。だが、

不幸な彼の地獄は、まだ始まってもないのだった。

21 女三人旅

紅倉は車が苦手だった。と言うより、電車だろうと船だろうと飛行機だろうと乗り物全般が駄目だった。その中で唯一芙蓉の運転する国産高級ハイブリッドカーだけがましだった。それでも長時間の乗車は頭が痛くなってきた、げっそりして、芙蓉はルームミラーで様子を見て場所を見つけてはこまめに長めの休憩を取った。だから目的地への旅はなかなか進まない。それに今回は平中も同乗している。芙蓉はすっかり慣れてしまっているし以前に比べればずっとましになっていると思うのだが、狭い車中にいつしよに閉じこめられて紅倉の体から立ち上る死の臭いに当てられ、かなり気分が悪くなってしまうようなのだ。だから紅倉は芙蓉の運転する車以外では出かけたがらないのだが、今回はやはり仕方ない。平中は車を持っていなかったが免許は持っている。地方の取材ではレンタカーを利用することがあるそうだが、今回はいつ何が起こるか分からないのでいつしよに行動してもらおう。平中が助手席に座り、紅倉が後部座席の平中の後ろに座っている。

紅倉は海が好きなので日本海の海岸をまずは富山市めざし西に走った。

ふつう3時間半もあれば着けるところを午前午後たっぷり使って夕方到着し、駐車場のあるビジネスホテルに宿を取った。以前は高級ホテルのスイートに泊まっていたものだが、芙蓉は安いAタイプのダブルルームを取った。平中は同じ階のシングルルームを取った。「わたしたちレズですから」

とすまして言う芙蓉に平中は

「根に持つわねえ」

と苦笑し、

「先生はいいんですか？」

と訊くと紅倉は

「ええ。わたしたちお風呂もいっしょですから」

「ところらもすまして言い、平中は

「ラブラブですね」

と言っただけだ。

エレベーターを上がって5Fで降りると、

「はい、富山名物と言えは？」

芙蓉に指されて平中が頭の中のネット検索データを答えた。

「なんと言っただけでもメジャーなのは『ますの寿し』ね。『かぶら寿し』はにぎり寿司じゃなくて発酵食品ね。それと、富山県の味覚と言えはベースは昆布ね。お刺身を『昆布じめ』にして食べるのが代表的ね。かまぼこも美味しいわね。ホテルイカとしろえび。うどんとそばも美味しいわ。そうそう最近盛り上がってるB級グルメで『富山ブラック』っていう黒いスープのラーメンがあるわね」

「お刺身は駄目。酸味の強すぎるのもパス。『ますの寿し』は道の駅で売ってたわね。先生、美味しそうでしたよ？ それにしましよ」

紅倉はうんとうなずき、芙蓉は部屋のロックを開けて先に紅倉を入れると、

「じゃ、部屋に呼びに行くから」

と手を振ってドアを閉めた。

平中が自分の部屋で道具を広げているとドアがノックされ、芙蓉が一人で来た。

「それじゃあ買い物に行きましょう」

平中はもっさいないという顔をして言った。

「外で食べないの？」

「ええ。先生は外食は苦手です。わたしたちは買ってきて食べますから、平中さんはどうぞ美味しい店を見つけて『富山ブラック』でも食べてきてください」

平中は「あの狭い部屋で二人きりでねえ…」と呆れた顔をした。廊下を歩きながら芙蓉はむしろ誇らしそうに言った。

「先生はああ見えてとても繊細な方なんです。先生が本当にリラック
クスできるのはわたしと二人きりの時だけなんです」

堂々と言われて平中は笑ってしまった。

「まるで娘離れのできない母親かシスコンの兄貴みたいね？ 自分で分かつてる？ あなたと紅倉先生、共依存になってるんじゃない？」
「なんです、きょう依存って？」

「例えばねえ、紅倉先生、視力がすごく弱いでしょう？ それであなたの介助なしではなんにもできないで、あなたに頼りつきりになっている。一方のあなたも、紅倉先生に頼られて、ああ自分は先生の役に立っている価値のある人間なんだ、と、先生に頼られることによって自分の価値を確認しているってわけ。先生にとってあなたは頼らなくては生きていけない人だけど、頼られるあなたも実は精神的にべったり先生に頼っているってわけ」

芙蓉はなーるほどと納得し、

「共依存。いいわね。わたしたちは死ぬまで運命と生活を共にしなければならぬ間柄なのね」

と握り拳で小さくガッツポーズを取った。平中はますます笑ってしまった。

「喜んでどうすんのよ？ 病気なのよ？ 精神的なね？」

「なんだってかまわないわよ。わたしは先生とっしょにいらればそれで幸せなんだから」

「あっそ。ぶれないわねえ。あなた本当に紅倉さんが好きなのね？
どこがそんなにいいの？」

「美人」

「レスだものねえ」

「けっこう我が強くて威張りん坊のくせに、案外気が小さくて打たれ弱いよね。すぐいじけるし。上がり性で人目を気にして緊張しやすくお腹こわすし。食べるのが下手ですぐに口の周りとか服とか汚すし。よく転ぶし物にぶつかるし、小さな怪我してばっかり。この頃じゃあわたしの言うことにもよく反抗するし、まあ憎らしい」

「まるで小学校の低学年ね？」

「子どもなのよね、先生は。でも、

先生はかっこいい正義の味方なのよ。闇の中でまぶしく輝くダイヤモンドみたいに、悪は絶対に許さないで、自分自身が悪に染まることは絶対になく、悪の闇が深ければ深いほどますます眩しく美しく輝きを増す、絶対的な存在なのよ」

平中は芙蓉の横顔をまじまじと見つめて覗き込むように小首をかしげた。

「紅倉さんはあなたにとって神みたいなものなのね？」

芙蓉はふふつと嬉しそうに笑った。

「そうね。強くて美しい女神様だわ。わたしはそのおみ足を洗う名誉を与えられて幸せだわ」

芙蓉は平中を見返し、ふとすまなそうに眉を寄せた。

「ごめんなさいね、こんなのんびりしちゃって。早く敵の本拠地に乗り込みたいところでしょうけど……」

うつんと平中は首を振った。

「紅倉先生に来てもらえてありがたいわ。正直言ってわたしも行くのが怖い気持ちもあるわ。もし、一人で行って安藤の死を目の当たりにしたら……、もう二度と立ち直れないかもしれない……」

芙蓉も暗い目になって慰めて言った。

「まだ死んだと決まったわけではないわ。先生も分からないっておっしゃってるんだから。万事に備えて、その上で楽観的いきましょう?」

平中も自分を納得させるようにうなずいて、笑顔を向けた。

「それでは、前向きに『富山ブラック』を味わいましょうか」

二人はホテルを出て、すっかり暗くなって街灯のついた通りを歩き始めた。

まず自分と紅倉の夕飯の「ますの寿し」の美味しい店を探して平中情報で駅とは反対側の美味しい店が集まる通りを目指しつつにぎ

やかな長いアーケード通りに入って歩いた。芙蓉にとってはすっかりお馴染みの地方都市の雰囲気になりラックスして歩いていると、買い物の主婦やら仕事帰りのOLやら学生やらが雑多に行き交っている中、黒のシックなコートタイプのジャケットを着た19歳くらいの男性とすれ違った。

すれ違った芙蓉は立ち止まって振り返り、気づいた平中が男性の後ろ姿を見て言った。背はふつうで、女の子みたいな厚い猫っ毛をしている。

「芙蓉さんも女の子みたいにかわいい男の子はオーケーなの？」

芙蓉はフンと肩をすくめてそしらぬ顔で向き直った。

「ちよつと知ってるような顔だと思っただけよ。せーくんぜん、タイプなんかじゃないわ。」

と、芙蓉は平中を追い越し少し早足になった。

相手が芙蓉を知っているのは感じた。それを気取られぬようにしていたことも。気配のコントロールでは芙蓉の方が上だ。だが、恐ろしく腕の立つ強敵であるのは芙蓉の合気道の達人であるハイレベルの武術センスから直感した。何より芙蓉を内心ゾツとさせたのは、ムツとした血の臭いだった。それは紅倉の体の発する霊的なものではなく、まさに、人を殺してきたばかりの生々しい臭いだった。殺気はなく、物珍しく眺めるような感触だったから今すぐ先生を急襲するつもりはないだろうと踏んだが、彼は、易木寛子のような営業の人間ではなく、明らかに敵の実行部隊の一人だ。霊的なものは感じなかったから、彼が呪殺を行う人間ではないだろう。するとこれから向かう敵の本拠地は彼のような人間が何人も待ちかまえているのかもしれない。

芙蓉はこれまでとはまるでタイプの違う組織だった敵に戦慄する思いがした。

結局芙蓉も平中といっしょに富山ブラックを賞味し、ますの寿し

を3つ買ってホテルに帰ってきた。夜食用でも、朝食用でもいい。

紅倉には街で出会った少年のことは言わなかった。どうせ先生にはお見通しだろう。代わりに、笹の皮を剥き、円形の押し寿司をケーキのように切り分けてやりながら、訊いた。

「車、平中さんがいっしょでお疲れになったでしょう？」

紅倉が芙蓉の運転する自動車以外の乗り物を嫌うのは乗り物酔いするのもあるが、密室で自分の発する臭いが同乗者に嫌な思いをさせるのを十分すぎるほど分かってしまうからというのが大きい。それでも、紅倉は以前は香水と言えば薔薇と思い込んで、薔薇の原液を瓶ごと振りかけたみたいなすごい匂いをさせていたが、今はパフュームの専門家のアドバイスでフローラルとシトラスとムスクと、専用のオリジナルブレンドの香水を使用している。だからそんなに気にすることないのに、と芙蓉は思うのだが、芙蓉自身いつも先生の身近にすぎず鼻が鈍感になっていくかもしれない。緊張すればなおさら臭いのする汗をかくから女同士リラックスすればいいものを、紅倉にはとうていできない。でも自分と二人でいるときにはそれができるのだから、共依存と揶揄されようと、芙蓉は嬉しい。

「うん…、ちよっとね」

と落ち込んだような顔で言う紅倉に、

「はい、センス、サービス」

と、ナイフに刺した押し寿司ケーキを「あーん」と食べさせてやった。

「どうです？」

紅倉はお人形さんのような口をもぐもぐさせて、

「うん。あんまり酸っぱくなくて美味しい」

と元気になって笑った。

「どれ」

と芙蓉も紅倉のかじった跡を食べてみた。

「うん。お魚の甘みが出ていて美味しいですね」

「美貴ちゃん、自分の食べればいいじゃない？」

「どうせ先生残すでしょ？」

「全部食べるもん」

「あらそうですか？ 失礼しました。じゃあこれを全部食べてまだ足りなかったらわたしの分を開けて食べてもいいですよ？」

紅倉は向きになって食べたが、3分の2も食べると口を動かすスピードが目に見えて落ちた。

「美味しそうですね。その残りでいいから欲しいなあー」

芙蓉が物欲しそうに言っつてやると紅倉は黙って寿司の桶を差し出し、芙蓉は受け取って

「いただきまあーす」

とニコニコ食べた。

「ありがとうございます。明日の朝また半分こして食べましょうね？」

「うん」

とちよっぴり悔しそうに言う紅倉に芙蓉は『かわいいわ』と萌えるのだった。

22 地獄？行

安藤哲郎が平中に宛てた絵ハガキの消印、及び「手のぬくもり会」が送ってきた荷物の受付ステーションは岐阜県の群上（ぐんじょう）市内だった。群上市は三つ葉型の朝顔の葉のような形をした岐阜県の、葉の付け根、福井県と接する位置にある。岐阜県の南部美濃地方は愛知県伊勢湾から広がる濃尾平野が中央を占め岐阜市もここにあるが、北部飛騨地方はほとんどが山岳地帯で、南北の中央に位置する群上市も飛騨高地の南に位置し、冬は豪雪地帯となる。

「手のぬくもり会」の本部が群上市にあるとは限らないが、その周辺、と言っても周りも皆山の中で、それ以上住所をカモフラージュする意味もないように感じられる。

芙蓉の運転するシルバーパールのハイブリッドカーは富山県高岡市から岐阜市へ至る国道156号線を南下していった。穏やかな市街地からやがて山部を登っていき、早くも同乗者二人の様子が怪しくなってきた。この地図で見れば日本の胴体を一刀両断するように縦に伸びる国道はまっすぐで比較的穏やかなはずなのだが、この先本格的に山岳部に入っていく、ふつう3時間もあれば十分な道のりだが昨日以上にのんびりした旅を覚悟しなければならぬだろう。もう終わりを迎えているが紅葉の山と青い清流の風光明媚な景色も残念ながら二人の胸のむかむかを晴らす清涼剤とはならないようだ。幸い道の駅が多く、道の駅巡りをして行くだけでもかなりゆつくりした旅程になりそうだ。さっそく30分ほど休憩して、先を行くと、斜面をうんと下った谷地にひとかたまりの集落が見下ろせた。平中が頭痛を押してガイドした。

「平村ですね。平家の隠里伝承のある村です」

芙蓉はその山の中の段々畑ならぬ段々家並みの趣ある小さな町（建物は現代の物なので）を眺め、特殊な人間たちの固い結束を予感してなんとなく「手のぬくもり会」もこんな小さな村が母体になっ

ているのではないかと予想した。その後道は見下ろしていた集落へ急転直下坂道を下っていくことになり、紅倉は後ろで「うげえ」と蛙の潰れたようなうめき声を上げたのだった。

その先世界遺産の五箇山合掌造集落もあったが、せつかくの美しい絵葉書のようなロケーションも轆かれた蛙の体の紅倉には酸素マスキ程度の役にしか立たず、空気の冷たさもかまわずドアを両方開け放った後部座席でぐでつと潰れていた。芙蓉も車に残り、平中だけカメラを持って見学に行った。天気はどんよりした薄曇りであるが、それはそれで村の風情に合っている気がする。

紅倉がなんとか復活し、車内の空気の入れ換えも済んで、併走する高速道路⇨東海北陸自動車道のインターチェンジをくぐり、じきにまたも道の駅に入って休憩した。レンガ造りのおしゃれな建物で、すぐ裏にそもそもこの川沿いに国道の造られた庄川が流れ、対岸の山に美しい滝を眺めることができ、水の風情を楽しむにはちよつと季節が深まりすぎているが芙蓉も二人といっしょにたつぷりマイナスイオンを浴びた。ここは豆腐田楽が名物のようで、すでにお昼時でもあるのだが、この先を考えて紅倉に食べさせるのは止した。

国道に戻り、いよいよ岐阜県に入るのだが、ここにちよつとしたイベントが発生する。道は比較的まっすぐ走っているのだが、そのため蛇行する庄川を突っ切る形で橋が連続している。この川が富山県と岐阜県の県境になっているため、カーナビの音声案内をオンにしておくと「岐阜県に入りました」「富山県に入りました」と橋を越えるたびにアナウンスされ、短い区間に7回も県境をまたぐことになる。

「あら、また。あはは、面白いですね」

と芙蓉は言ったが、二人ともぐったりして返事も無い。

いよいよ、岐阜県に入った。

休み休み二つ目の道の駅ですっかり遅くなった昼食にみだらし団子を食べ、名峰白山のありがたい足湯があるので、丸太を半分にし

た4人も座ればいっぱいのベンチに三人で座り、ひのきの湯船に流しっぱなしの湯に足を浸かった。

「フウ〜ン。生き返りますねえ〜」

芙蓉もう〜んと伸びをしながら運転の疲れを取った。ポカポカ温かさが体の上つてきて、疲れが足裏から流れ出ていくようだ。ここまで道路はよかったが北陸と東海を結ぶ貴重な幹線道路であるため運送用のトラックや工事用の大型ダンプカーまでけっこう走っていて、運転には気を使った。

「お疲れさまです。目的の群上市はもうじきに入りますけれど、広いんですよ。消印の郵便局はちょうど真ん中って感じでしょうか？ 都市部みたいですからそこでホテルを取って、明日はハードになりそうですよ。『手にぬくもり会』の本部が市街地にあればいいんですけれどね、どうも人里離れた山の中って予感がしますね。入り組んだ山道を走らなければならぬかもしれないかもしれませんが覚悟してくださいね？」

紅倉は青い顔でうげ〜と潰れ、

「もうやだあ〜、おうちに帰りた〜い〜」

と駄々をこねた。

「今来た道を戻りますか？ 道は楽ですけど距離はありますよ？」

「うう〜……、わしはこんな所来とうはなかった」

と、今となつてはちよつと通じづらくなつた子ども店長の物まねをして悔やむ紅倉に芙蓉を間に挟んだ平中が申し訳なさそうに苦笑して謝った。

「すみませんね。紅倉先生、本当に乗り物は苦手なんですか？ 無理をさせてしまって、恩に着ます」

頭を下げる平中に紅倉はぶーたれて

「ぜんぜん役に立たないかもよ〜？」

と憎まれ口を叩いた。

23 酔っぱらい仲間

「大丈夫ですか？ ほら、足湯がありますよ？」

こちらも車に酔ったらしい若い女性が連れの若い男に手を引かれてやってきたが、芙蓉は一瞬で体の中が凍り付くような戦慄を覚えた。

「うっ、くそお、気持ち悪い」

女の方は今時のギャル、と言うほど若くはないが、まだ21、2歳といったところで、艶やかな黒い髪をしたなかなかの美人らしいが、口が悪い。連れの男は先に足を浸かっている三人に申し訳ないように苦笑しながらあいさつし、

「お隣、よろしいでしょうか？」

と女のために訊いた。平中は笑顔で「どうぞ」と少し芙蓉の方に寄った。ちよつときついがもう二人くらいなんとか座れそうだ。

「ああ、僕はけっこうですから。さあ、ケイ」

若い、子どもっぽい甘い顔をした……ミズキは、ケイをベンチの端に座らせ、ブーツを脱がせると、靴下を脱がせ、黒いコートのそれを膝まで上げてケイの手に押さえさせ、

「はい、どうぞ」

と倒れないように背を押さえて足を持ち上げて湯船に入れてやった。

目の不自由な様子の彼女の世話をかいがいしくするミズキを微笑ましく眺めて、平中はあら？と思いつ出した。

「あの、あなた、昨日の夕方、富山市のアーケード街を歩いてませんでした？」

ミズキは立ち上がると

「ええ」

とにこやかに答えた。そして顔を少し横にかしげて芙蓉を見て、

「芙蓉美貴さん」

そして、

「それに紅倉美姫さんですよね？」

と油断のならない目でじつと奥隣の紅倉を見た。

紅倉はちょこんと頭を下げて

「こんにちは」

とだけ言つて前を向いてしまった。芙蓉の方は受けて立つと言つた強い視線でミズキを見て訊いた。

「あなたたちは？」

「僕たちは……」

ミズキはケイの顔を窺つて言つた。

「ただの通りすぎりですよ。出先から家に帰るところです。いやあ、有名人に会えてラッキーだなあ」

「うふふふふ」

ケイが平中がちょっと気味悪く思うような忍び笑いをして言つた。

「ミズキ。あんた抜けてるねえ。わたしと紅倉を接触させちまつたら駄目じゃあないか？」

と、お湯に浸かつた足をバシャバシャした。ミズキはハツとしまつたと言つ顔をした。

「あははははは」

ケイは大笑いした。

「いいよ、もうばれちゃってるから。ねえ、紅倉さん」

ケイが体を前傾して下から紅倉を覗き見て、平中は思わず体を引き、芙蓉は遮るようにぐつと奥の肩を前に出した。ケイは面白そうに笑いながら言つた。

「ねえ紅倉さん。わたしがどういふ人間か、もう全部分かつちやつてるんだらう？」

紅倉はずつと前を向いて…足を入れている湯を見ていて、言つた。

「まあね。なかなか……壮絶ね」

ケイはフンと自慢するように笑い、体を元に戻した。平中は強張つた顔でケイとミズキを見てかすれた震え声で言つた。

「あなたたち……、まさか……」

ケイはニツと白い歯を見せて言った。

「毎度お騒がせしております。『手のぬくもり会』の者でございませぬ」

平中は飛び上がるうとして芙蓉に肩を抱き留められ、代わりに芙蓉が湯から足を出して立ち上がった。

「まあまあ、美貴ちゃん。平中さんも、落ち着いて。ねえあなたたち」

紅倉はようやく横を向いてケイを見た。

「ここでわたしたちを殺すつもりはないわよねえ？」

ケイはうなずいて言った。

「もちろん。誰がそんな物騒なことするもんかい」

「だそです。美貴ちゃん？」

芙蓉は平中を紅倉の方に詰めさせ、自分がケイの隣に座って改めて足を湯に入れた。落ち着いたところで紅倉が訊いた。

「それで？ 何をしに来たの？」

「別に。あなたの顔を拝みに来ただけさ。村まで道案内してやろうかと思っただけだね…、ミズキ、お姉さんに村の住所を教えてくださいな」

芙蓉への警戒心で固い顔をしていたミズキはちらつと不満そうに眉をひそめて訊いた。

「本当にいいんですか？ この人たちを村に入れてしまつて？」

「ふふ、ミズキ。あなたの忠犬ぶりはかわいくて好きだけどね。いいんだよ、どうせ紅倉美姫さんはたどり着くさ。でも、ひどい方向音痴とも聞くからね、これ以上山道をぐるぐる走り回らせてグロッキーにさせるのもお気の毒だからねえ。教えてやりな」

ミズキは怒ったようにぶっきらぼうな声で言った。

「岐阜県大字（おおあざ）村。と、カーナビに入力しても出ないだらうから、群上市蜂万町美山へ行ってください。後は……どうぞご自分で」

これでいいですか？と言うようにミズキはケイの横顔を見て、ケイは意地悪そうにニンマリ笑い、

「ま、そうだね。そこまで行けば紅倉さんなら簡単に見つけられるだろうね」

と言った。隣の芙蓉はジロツと横目に睨んで、やけに先生を持ち上げるなあと思った。ケイが続けて言った。

「わたしはお先に帰って紅倉さんの到着をお待ちするよ。本部のお偉いさんはわたしがあんたたちに接触するのを嫌っているようなんでね。ま、無事のご到着をお祈りしているよ。じゃあね」

ケイは足を上げて外側へ体の向きを変えようとしたが、その途端ぐらつとベンチから転げ落ちそうになり、芙蓉とミズキが同時に手を出したが、位置的に芙蓉が抱き留めて起こしてやった。

「ああ、ごめん。くっそおお……、まだムカムカしやがる。昼のドライブは嫌いだよ。ありがとね、あんた優しいね」

ケイはお礼を言ってニツコリ笑った。芙蓉の目に真っ黒な大きいサングラスの端から横に大きな傷跡が伸びているのが見えた。紅倉が言った。

「もう少し休んでいたらどう？ 美貴ちゃんたちはどうぞ、お団子だけじゃお腹空くでしょう？何か食べてらっしゃい」

ケイもニツと笑ってミズキに言った。

「じゃああんたも、ジョンに散歩させてあげてよ。よろしく」

「でも、ケイ……」

ミズキは不安そうに言ったが、

「じゃ、わたしたちは売店でも見に行きましょうか」

芙蓉が足を上げてタオルで拭き、平中も習おうとしたが、思い詰めた顔に決意を固めてケイとミズキに訊いた。

「安藤が生きているのかどうか、教えてください」

ケイも易木と同じようにうん？と眉をひそめて、

「誰だったっけ？ わたしは相手の名前なんて知らない場合が多いから」

と心当たりないように言ったが、ミズキは、

「村に潜入したフリーライターですね？ 死んだ、と聞いています」と冷たく言い、

「申し訳ありません」

と平中に頭を下げた。平中は

「そうですか」

とやはりシヨックを受けて悔しそうに顔を歪めた。

「行きましよう」

芙蓉がグツと平中の手を握り、うなずいた平中は靴を履いて芙蓉といっしょに立ち上がった。ベンチをまたいだ芙蓉は、

「失礼」

と思い切りミズキを睨み付けて横をすり抜けた。平中も負けるものかとしっかりミズキの顔を確認して芙蓉に続いた。

「あーあ、怒らせちゃった。ほら、行きな」

ケイに手を振られてミズキはお辞儀をして出口向かって歩いていった。

24 同病相哀れむ

「そっち行っついていいかい？」

「どうぞ」

紅倉は前を向いたまま背中を丸めて言い、ケイが遠慮なく横にくっついてくると苦手そうに肩を縮めた。ケイは可笑しそうに笑った。「わたしは敵だろう？ そんなのにまで遠慮することはないだろう？」

「敵にはならないでほしいんだけどなあ」

「ふうん……」

ケイは考え、言った。

「ねえ紅倉さん。あなた、うちにスカウトされない？」

「『手のぬくもり会』に？」

「ええ。うちの趣旨には、あなたも賛同してくれると思うんだけど？」

「パス。わたしこれでも警察関係にお友だちが多いのよ？」

「知ってるよ。うちらが影ならあんたは光の当たるスーパースターだ。…別にね、正式会員になってくれなくてもいいんだ。囑託でも、同盟関係でいいんだ。あなたがわたしたちに関わらないって約束してくれるだけでいいんだけどねえ？」

「それは、これから自分の目で確認してみないと」

「ふうん」

ケイは口の端を引きつらせた。

「それは困るなあ……。あなたにはわたしたちのやっていることは見られたくないんだけど？」

「じゃあ……、敵、になっちゃうかな？」

「フン」

ケイはあきらめたように笑って視線を足元に向けた。

「落ち着いた？」

「ああ、だいぶね。昼間は駄目なんだよ。わたしの目は真っ黒に見えるんじゃない、真っ白に見えるじゃない。ただでさえ昼間は眩しくて頭が痛くなっちゃうっていうのにさ、山道なんてゲロゲロだよ。あんたは、全く見えない訳じゃないんだよね？」

「ええ。わたしは見えないんじゃない、ものすごく悪いだけだから」

「あっそう」

ケイは可笑しそうに笑って紅倉はムツとした。ケイは、

「いい……………のかなあ？ それは？……………」

と、ボソツとつぶやいた。

紅倉は顔を向けて訊いた。

「あなたは、何歳で？」

「16さ。それまではね、ふつうに見えていたんだよ、人の顔も、青空も。」

「あんたは？ 元からそうなの？」

「さあ……………」

紅倉は首をかしげて考えた。

「子どもの頃は見えていた……………はずなんだけどなあ？…………… よく分かんない」

「ふうん。やっぱりあんたもその能力は、それなりのことがあって身に付いたもののかな？」

「さあて？ 覚えてません」

「そう。ま、それで幸せなんだろうね……………」

しばらくして、うん、と思いついたようにうなずいてケイはお尻を端の方へ運び、足を上げてハンカチで拭いた。

「あいつめ、タオルを用意していやがらねえ。男つてのは優しいふりしてこういうところが抜けてるねえ」

と文句を言いながら靴下をはき、ブーツを履いた。杖を頼りに手をベンチにしっかりとついて立ち上がり、紅倉を向いた。

「じゃあね。お話しできて楽しかったよ。また……………と言いたいけど、

今度もこういう楽しい時間を過ごせるか分からないね。ま、そんなきもそれなりに、よろしく」

「ああー…、そのことなんだけど……」

ケイはうん？と顔を向け、紅倉は物凄く困った顔で言った。

「あなた、犬を使うんでしょ？ ……今も連れてるの？ ……」

「フツフツ」

ケイは嬉しそうに笑った。

「あんたも間抜けだねえ？ それとも余裕？ わざわざ自分の弱点を教えてくれるなんてさ？ ああ、わたしの武器は5頭の大型犬たちさ。女の細首なんて一発で噛み千切るくらいのでかい口をしているよ。あんたもロテムっていうシベリアンハスキーを飼ってるんだろっ？」

「ロテムはお利口だからいいの。あーあ、あなたみたいなのが敵ならロテムを連れて来るんだっただわ」

「ご愁傷様。うちの五匹もお利口だよ、わたしに対してはね。仲間だっってはつきり分かってるからね。でも、わたしがいなければ…、どうなるか？ 分からないねえー？」

「今連れてるのはジョンだけなんですよ？」

「ああ。四匹は仲間といっしょだよ。わたしが仲間だっただけで教えた人間は襲わないよ。もちろんミズキもね。でも、わたし以外にはなつかないからかわいくはないだろうね」

「嫌だなあ。わたしもあなたのお友だちだっただけでよく教えておいてくれない？」

ケイは愉快そうに笑って言った。

「さあーで、どうしようかねえ？ ま、こっちの切り札としてじっくり考えておくよ。じゃあ、ありがとうよ」

ケイが行ってしまったって、待っていたように芙蓉が戻ってきた。

「悪いお知らせです。ジョンというのは熊みたいには大きなりトリバードです。見た感じラブラドルみたいですが…、でかすぎます」

ね。別の種類との混血でしょうか？ ロデムより一回り大きいですよ。愛想がなくてぜんっぜん、かわいくありません」

「ああ、そう」

紅倉はげんなり肩を落としました。

「先生。あの人とずいぶん馬があつたようですね？ そこですれ違つたとき、蛭ヶ野峠のぶんすいれい公園に寄つていけつて薦められました。何か面白いようですよ？」

「ふうーん、何があるのかしらねえ？ ところで美貴ちゃん」

紅倉は弱々しく手を伸ばして言った。

「助けて。のぼせて倒れる」

芙蓉は呆れて背中と足を持って抱き上げ、ベンチに横に寝かせ、ハンカチで扇いでやった。あーあ、また無駄に出発が遅れるなあ、と芙蓉は内心ため息をついた。

25 分かれ道

昼日中、辺りを全くはばからずに町中の雑居ビルの一室で派手な発砲音が数十発も連続して起こった。他の部屋の会社員や住人たちは流れ弾に恐怖しながら必死にビルから逃げ出し、銃声が収まって静まり返ったところにドヤドヤと拳銃を構えた警官たちが踏み込んだ。窓ガラスが割れ、壁が弾痕でえぐれた部屋には、おのおの拳銃を握った男たち7人の死体が転がっていた。どうやら仲間割れを起こして撃ち合い、全滅したようだが、そこにあつたカバンから大量の宝飾品が出てきた。

名古屋の宝石強盗事件は、盗まれた品物がすべて確保され、犯人たちもどうやら全員同士討ちして死亡したらしく、派手な爆竹のようにあっけなく終わった。犯人たちはやはり全員アジア系の外国人であるようだ。

芙蓉の運転する車は岩を積み上げた西洋の古城のような風情の口ツクフィル形式の巨大な御母衣（みぼろ）ダムとそのせき止める膨大な水量を誇る長い御母衣湖を過ぎ、緩やかな高原の道を上っていた。「中部地方有数の冬のスポーツリゾート地」である蛭ヶ野高原である。

「良さそうなところですねえ」

と快適に運転しながら芙蓉は言った。紅倉は相変わらず後ろで漬れているが、だいぶ慣れた様子の平中は相づちを打って

「牧場や湿原があつて暖かい季節も散策やサイクリングにいいみたいよ？ まあ今はすっかり季節外れでしょうけれど」

と笑った。芙蓉が紅倉を元気づけるように

「先生。もう群上市に入ってますからね、ここで休んだら街のホテル

ルですよ？」

と言い、紅倉は

「うづうづん……」

とうなった。

分水嶺（ぶんすいれい）とは、わき出た水が太平洋側と日本海側に別れるところで、始点を同じくして左に行くか、右に行くかで遙か太平洋に流れ出るか、日本海に流れ出るかという一大分岐点で、ご丁寧に太平洋、日本海、と書かれ矢印を掘った岩があるが、流れそのものは小さなせせらぎである。

「運試し」

と、歩いてちよつと元気になった紅倉が枯れ葉を一枚、元のせせらぎの真ん中に腕を伸ばして落とし、ゆっくり流れていった葉っぱはクルツと踊って日本海側へ流れていった。

「どつち？」

「日本海側です」

「あーあ、わたしの心は早くおうちに帰りたがっているのね」

と紅倉は感傷的にため息をついた。日本海側はここまで併走してきた庄川となり、御母衣湖に貯まり、国道のスタート地点である富山県高岡市から富山湾へ注ぎ出るのが。

「じゃ、わたしも」

と平中も枯れ葉を落とし、芙蓉は

「こらこら、むやみと物を流すんじゃないありません」

と苦笑した。平中の葉っぱは太平洋側へ流れていった。この水は長良川となって濃尾平野を潤すことになる。

公園はミズバショウの咲くという池があり散策には良いところのようだが、もう日もだいぶ傾いて、寒い。すっかり葉の落ちた木々も寒々しい。

「さあもう一頑張り！」

と励まして芙蓉は今日の宿、蜂万町へ急いだ。

短い距離だが走っているうちにすっかり暗くなってしまった。せつかなのでお蕎麦屋さんでおいしいお蕎麦を食べて、町中のホテルに着くともう完全に夜の暗さになっていた。ホテルは足湯の道の宿で平中が携帯でネット予約していた。

部屋に入ると、廊下を歩いているときからどうも気になったのだが、そこかしこにタバコの臭いが染みついているように感じられてちよつと不快感があった。

こういう際に芙蓉は先生と合体技を編み出していた。

「先生、お願いします」

と言うと紅倉は芙蓉の腕を伸ばして開いた手の甲に自分の手を重ね、

「えい！」

と気合いを発した。すると部屋の中に芙蓉のフィルターを通したフローラルグリーンのオーラがジェット噴射で広がり、部屋の空気と壁を薫蒸した。

「一発でダニも地縛霊も浄化します」

と芙蓉が宣伝するので平中も「ぜひ」と自分の部屋も殺菌してもらった。

いつしよにお風呂に入って、パジャマを着て歯磨きして、灯りを落としてゴロニヤンとダブルベッドにいつしよに入ると、紅倉が言った。

「『手のぬくもり会』の村に入るのは相当の覚悟が必要よ？」

「はい」

それは芙蓉も予想し、できるなら先生をそんな危険なところに連れていきたくないと思うが、もう先生は意志を決定したのだからと言うのは止した。芙蓉も訊いた。

「ケイという女性は能力者ですか？」

「そうね。でも力は大了ことないわ。……犬を連れてるのが最大にやっかいだけど……。ミズキくんって男の子も、かなり強そうだけど、美貴ちゃんの方が断然強いでしょうね」

「そうですか」

「でもね」

紅倉は物憂げな調子で言った。

「力が劣っているから平気、とは言えないわ。あの人たち……おそらく『手のぬくもり会』の人たちの怖さは、いったんこうと決めたら躊躇がないことだわ。あの人たちは、それが正義だと信じたら、人を殺すことも何とも思わず実行するわ。……いったんわたしや美貴ちゃんを殺すと決めたら、彼らは迷わず確実にわたしたちを殺そうとするでしょうね、自分の命を懸けてもね」

芙蓉はかわいい顔をしたミズキが人殺しであるのを知っている。

「わたしたつて迷いませんよ？先生に危害を加えようとする相手に対してはね」

「頼もしいわね」

と笑う紅倉に芙蓉は訊いた。

「ケイさんも、怖いですか？」

「怖いわね」

と紅倉はため息をついた。

「犬がいなくてもわたしを殺すことができるでしょうね。……彼女にそんなことをさせたくないけれど……」

「先生は、あの人に好意を持っていきますね？」

「好意と言うより同情だけど……。美貴ちゃん、妬ける？」

「ええ。ものすごく」

と、二人はいちゃいちゃおふざけし、幸福な一夜を過ごしたのだ。

26 悪人の不運（前書き）

！！警告！！ 極めて残酷な描写があります。ご注意ください。

26 悪人の不運

ずいぶん長く不良は車の中で揺られ続けた。手足をちぢ込めた不自然な姿勢が生理的時間を何十倍にも引き延ばしている。手足は口で固く縛り上げられ、固い布できつく目隠しされ、猿ぐつわを咬まされている。車の中に転がされて、彼をこんな目に合わせている連中は何時間経とうが不良の健康や空腹を気遣ってくれる様子は全くない。不良はバンの後ろに大型の犬たちといっしょに積み込まれ、不良はこの犬たちも恐ろしくてならない。唯一自由な耳と鼻が、犬たちの不衛生な獣の臭いを嗅ぎ、息をするドオドオ響く音を間近に聞き、恐ろしくてならない。

どうせくつだらねえ世の中、くつだらねえしみつたれた人生だ、好き勝手に生きて、どうにもならなくなったら派手におつ死んでやるぜ！

なんて甘いことを考えて、悪い仲間たちと欲望のまま若い人生を生きてきた。

人の苦しみや痛みや哀しみや憎しみなど、鼻の先の笑いの夕ネにしか思つてこなかった。

今、恐ろしくてならない。

死んでやる！なんていう威勢のいい馬鹿な甘えはすっかり心から失われ、自分がどんなひどい目に合わされて、殺されるのか？

考えずにいられず、怖くて怖くて、堪らない。

皮の服を通しても染み込んでくる冷気に凍え、ガタガタ震え、恐ろしい考えに堪らず、尿を漏らした。

犬が不快そうに動き、不良の失禁に気づいた人間の男が

「バカヤロウ」

と腹を踏みつけた。不良は口に詰め込まれた布の中にくぐもった悲鳴を上げ、それから、おえつを漏らした。みっともなく、女みたいに、涙を流していた。

ああ、自分はどうなってしまうのだろうか？

本当にあの時、自分の喉を掻き切って、死んでいた方がどれだけ楽だったろう……

喉を掻き切られあふれた血を気管に詰まらせて真紫に膨れ上がった窒息死した仲間の壮絶な表情が甦って震えた。あの時は自分が生き残ることしか考えていなかった。今ナイフを持っていたら、震える手で、自分の喉を掻き切ることをするだろうか？

ああそうだ、心臓を一突きの方が楽だろう。上手く肋骨をよけて突き刺すことが出来るだろうか？……

結局死ぬことを考えている自分の哀れさにまた泣けた。

子どもの頃が思い出された。

お、お父さん………

お母さん！………

恥ずかしげもなく父親母親を心の中で呼んだ。

小学6年生の時、父親が会社の若い女と不倫して、両親の離婚したのが彼の不良人生の始まりだった。

彼は母親と暮らしたが、自分たちを裏切った父親を、憎んでいたのか、愛していたのか、分からない。

父親の不倫相手のOLを重ねていたのか、初めて女を犯したとき、自分も父親と同じ汚い人間になったと感じた。

まともな恋をすれば違っていたのかと思う。自分を愛してくれる女の子がいたら自分は普通に幸せになれたのだろうかと思う。

自分の過去に、どのような将来があり得たのか、想った。

甘美な現実逃避は、

自分たちが欲望のままに人生を踏みじった女たちの恨みのこもった目でうち砕かれた。

いや、ほとんどの女たちは男の暴力を恐れてこちらの顔を見ないように務めていた。

その哀れで青ざめた横顔に、いったいどれだけの悔しさ、憎しみがこもっていたことか。

時間を取り戻せるのなら、
過ちを取り消せるのなら、

その一人一人に土下座して謝りたいと思った。それこそ命がけで
許しを請いたいと思った。

……………誤魔化しだ。

土下座している自分は、決して女の顔を見ようとしない。女の自
分を見下ろす目が怖くてならないのだ。結局のところ自分に自分の
罪をまともに見る意気地はない。

そうだ、暴力で屈服させ、傷を付けるぞ？と脅して蹂躪してきた
女たちの不幸を、なんてことねえだろう？と鼻で笑ってきた自分は、
結局のところ、まともに相手の顔を、心を、見ようとはしなかった。
表面的に、

どつってことねえ、

と決め付け、深く考えようとせず、見ようとせず、結局のところ、
逃げていただけだ、

人との関係から。

安っぽい自分勝手な物の見方、考えから、

どつってことねえ、

と人の人生まで心まで決め付け、

自分の欲望をぶちまけて、笑いながら、いい気になりながら、実
のところ、

人を深く見ようとすること、人と深く関わろうとすること、
から逃げていただけなのだ。とんだ臆病者の、誤魔化しだ。

まともな恋をすれば？ 自分を愛してくれる女の子がいれば？

逃げたのではないか、自分が拒否され、傷つくことから。

結局自分は、なんだかんだ理屈をこねて、自分が傷つきたくない

だけで、自分がかわいいだけで、そして、

人を傷つけてきたのだ。

みんな誤魔化しだ、と自分で分かっている。

こうして殊勝に人生を反省しているふりをして、本当は、自分が
助かりたいだけなのだ。

慈悲を以て、自分の命を助けてほしい、自分を自由にしてほしい、
とねだりたいだけなのだ。もし万が一それがかなえられたのなら、
どうせ自分は元の己勝手の悪人に立ち返るに決まっているのだ。

いや、決してそんなことはない！、と慌てて否定する。

頼む、

俺は生まれ変わる！

もう決して人を傷つけたりしない！

もう決して誰も馬鹿にしたり、見下したりしない！

もう決して人を不幸にしたりしない、人の不幸を喜んだりしない！

だから……

俺は最初から悪人だったわけじゃない、子どもの頃はあんなに素
直な笑顔をしていたんだ！

俺は生まれ変わる、本来の、明るい、素直な、善い人間になる！

俺は何も命を奪った訳じゃない、彼女たちにだってやり直せる未
来を残してやってるじゃないか？

だから、頼むっ、

俺に、一度だけでいい！、生まれ変わるチャンスをくれ……！！

お願いだ、この、通りだっ……！！……！！……！！……！！

不良は、必死で、

神に、

慈悲を願った。

上下左右に揺れる山道で不良はげえげえ吐いて、何度も窒息しかかった。

ようやくバンが止まり、グワアツ、と金属の音をさせてバツクドアが開き、外の、夜の空気が流れ込んできた。

担架……というよりただの板……戸板に載せられて運ばれていき、不良は暴れようとした。だが、ロープに戒められ、腕脚の腱を盲目女の鋭利な細い槍で突かれた手足は動かすことが出来なかった。

不良を乗せた戸板は、階段を下り、どこか建物の中を運ばれていき、どこか下のがらんと開いた空間に差し渡され、ロープに吊られて、ジリ、ジリ、と下へ、下へ、下ろされていった。

不良は耳と鼻だけは利く。周囲の音の反響から、自分が固い壁のある程度の広さのある、井戸の底へ下ろされていつているのを感じ、鼻に、冷たく湿った、ドブの臭気が強く嗅がれた。不良は自分が吐いた物の酸っぱさを感じ、またひどく吐きそうになった。

音の反響から、がらんと開いた大きな空間……地下室に出たのが感じられ、何者かの手で吊されたロープが掴まれ、不良はビクンと身を震わせ、戸板は「ビチャツ」と濡れた地面に下ろされた。

「おい」

と言う男の声は不良に掛けられたものではなく、二人の人間に肩と脚を持ち上げられ、戸板から移動すると、戸板は上へ引き上げられていったようだ。ガタン、と音が響いてきて、ふたが閉められたようだ。

不良は新たな板に載せられ、それもどうやら木の板のようだった。頬の肌にわずかばかり熱を感じ、灯りを向けられているらしい。手足のロープが解かれた。

わずかばかりの自由への期待は、男たちの力強い手で肩と脚を板に押し当てられ一瞬でくじかれた。

こいつらは自分をここまで運んできた車の男たちとは別だろう。自分が何者なのか知っているのだろうか？

見ず知らずの人間にひどいことを平気でするような、そんな、無慈悲な連中なのだろうか？

「ううう、ううう、」

不良は必死で助けを求めた。助けてくれ！ あいつらどうかしている、頭がおかしいんだ！ 助けてくれ！警察に連絡してくれ！

手足にゴリゴリ言う摩擦があり、がっちり、またロープで背中の板にくくりつけられている。

「ううう、うううううーうーうーっっ！！！！」

必死に振り立てる首を、がっちり押さえつけられ、左右から板を当てられ、「ガンガンガン」と金槌で釘が打たれた。

「ううううー！！！！！！！！！！」

耳に直に響く音に不良は発狂しそうなほど恐怖を感じた。釘は、自分に突き刺さってくることなく、どうやら左右に当てられたL字型の木材を下の板に固定しているようだ。

数本釘が打ち付けられて、音は止んだ。頭がガンガン痛み、がっちり固定されて首が動かなくなった。

「ふっ、ふっ、ふっ、………」

不良は鼻の穴をめいっばい開き、細切れに恐怖を吹き出した。

刃物の感触が当たり、皮のジャンパーと、ズボンと、フリースが引き裂かれていき、肌が空気に露出されていった。ズボンを剥かれた股間でパンツも切り取られ、男の一物が露わにされたが、固くしわだらけに縮こまっている。不良は恐怖を吹き出しながら身を刺すような冷たさに凍えた。

カチヤンと金属の何かを金属のプレートから取り出す物音がして、腕に、痛みを感じたとき、不良の恐怖はピークに達した。

手首から内側を上へザクザクと切り裂かれていき、不良は全身を

海老反らせて悲鳴を叫んだ。

切り開かれた腕に、ベチャリと、冷たい粥のようなものが載せられていき、激的な痛みで失神しようとする意識が、末端神経から染み渡ってくるビリビリした痛みで腕が燃え上がりそうになり気が狂いそうになつて覚醒させられた。神経の生きていることを、正気だつたならば、不良は恨んだらう。

不良は全身をあちこち切り開かれていき、得体の知らないゲル状の物を塗られていった。これも正気であつたならば、自分が得体の知れない物に浸食されていく精神的な恐怖と不快感を味わつたことだらう。

刃物が当てられ、目隠しが切り開かれた。白い眩しい光に不良は反射的に目を瞬かせた。影が差し、間近に現れたメスの切っ先になけなしの正気が悲鳴を上げた。メスは目の前から下へ下りていつて不良は鼻の下に鋭い激的な痛みを感じた。メスは縦に上つてきて、気の狂う痛みと共に、不良の気管にスーッ冷たい息が通つた。そこへ、どろりと、青っ洩のようなどろの物がさじで塗りつけられた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

不良は息苦しさと胴体をバタバタ暴れさせた。苦しさと周囲が真っ青に鬱血した目に新たに大量の涙が溢れ出した。

その目にメスが迫つていき、閉じようとするまぶたを手袋を付けた指で無理やり押し開かれ、まぶたをきわを細かく切つていった。ブツンと筋を切られたようでもまぶたが閉じられなくなった。

どろどろが塗られていき、不良の視界は汚らしいブルーに染まっていた。目玉が破裂しそうな灼熱する痛みが何度も何度も膨れ上がってきた。

不良は、もはや自分が人間であることを忘れてしまったようだった。

それでも、

ガサゴソと、耳に何かこすれる音が響いてきて、ギョツと、自分の人間性を思い出してしまった。

……………そのまま忘れていけばよかったものを。

両方から頭を固定した材木には、側面に穴が開けられていた。

そこにメスが伸ばされてきて、

耳の穴に傷を付けた。奥に差し込まれ、鼓膜を突き刺す激痛に最後の、ありつたけの悲鳴を上げた。

耳にも、どろどろが塗り込められ、執拗に内耳へ押し込まれた。

ごそごそという音が頭に響き、やがて、水の中にいるように外の音がぐわんぐわん反響して聞こえてきた。

『これでいいな？』

『いいだろう。お終いにしよう』

青く変色した視界に、今度は、ノミと小槌が現れた。

不良にもうそれがなんのために用意された物か考える思考はなかった。

ノミの先が額に当てられ、

「生きるよ？ 死んだ方がましな苦痛を味わっても、死ぬのは許さないよ？ せいぜい……、50人分くらいは保ってくれよ？」

ふいに峠であの盲目女の言った言葉が甦り、一瞬ハツとなった。

小槌が振り下ろされ、

不良の考える能力は奪われた。

その穴にどろどろを塗り込め、男たちは作業を完了した。

壁に掛けた工事用のランタンランプを取り、4人の男たちは階段を上へ上っていった。灯りが上へ遠ざかると、部屋は真っ暗になった。

しばらくして、遠くから、ドオオーーン……………、ゴゴゴゴオオオオ……………、と音が響いてきて、床に水が溢れてきた。

冷たく、臭う水に浸されていき、少し前まで不良の人間であった肉体は、ブルブル震えて、没した。

その後で何かもぞもぞした動きがあったようだが、真っ暗で、人間の目では何も確認できない。

旅行3日目。

朝起きると芙蓉は朝寝坊の紅倉をそのままに朝食の調達がてら町の散歩に出かけた。

地図を見て「街」と思っていた芙蓉の認識はちよつと外れていた。古くからの城下町である蜂万町は目立つ大きなビルのない小さな家並みの昔ながらの面影を残す観光の町だった。オリジナルの城は失われてしまったが、再建された天守が山の上から町並みを見下ろしている。

山間のこの地は清流が豊かで、路地を水路が走り、名水白雲水が有名だ。こちら地方に疎い芙蓉は全く知らなかったが、板塀が連なり白壁の蔵が多く、周囲の自然と無理なく調和した風情ある小道の多い町は小京都として人気の観光地であるらしい。さすがに季節外れで観光客はまばらなようだが、春夏の祭には相当の人出で賑わうそうだ。

もっと他人行儀なコンクリートの地方都市か、うんと寂れたゴーストタウンのような所を想像していた芙蓉は一気に緊張をそがれる思いがしたが、蜂万町の区域は広く、ミズキに教えられた美山はうんと山の中のはずだ。

せつかくの観光地でただの旅行なら先生といっしょで楽しかろうと思うが、今日は空模様がどうも怪しい。空を覆う雲が変に銀色に明るく、遠くには対照的に黒雲の固まりがもこもこことわいている。あれがいずれこちらに広がってきて、いきなりドツと大降りになるかもしれない。

芙蓉はホテルに帰って先生を起こし、いっしょに食べ慣れたコンビニの菓子パンで朝食を取った。平中はホテルのレストランでモーニングセットを食べた。

ホテルの駐車場を出発すると、この先のことを考えてガソリンスタンドで給油することにした。芙蓉のハイブリッドカーは当然ながらふつうのガソリン車よりガソリンの消費が少なくガソリン走行の燃費も良いが、山道ではやはり普段の感覚に比べてメーターの減りが大きい。

セルフ給油スタンドに付けた芙蓉はドアを開け、反射的にクンと鼻を鳴らした。ガスの臭いが異様に濃く感じられた。降りる必要のない紅倉がドアを開け、平中も降りた。紅倉は空を見て、芙蓉にうなずいた。

「長居は無用、つてところね」

給油を始めて、空が騒がしいので見ると、遠くで固まっていた黒雲がすぐ向こうの空まで迫って広がり、ゴロゴロと不穏な音をさせ、内部で閃光を放ち、稲妻を浮き上がらせた。と、

カツと向こうのビルに稲妻が降り、ビシッ！、ガラガラガラア、と、轟音が空気を振るわせた。

芙蓉はじつと緊張した目で睨みつつ給油を続けた。いよいよ辺りが暗くなり、蛇行する太い白線が天と地を結んで辺りを青く照らしたかと思ったら、さつきと倍する金属をねじ切るようなすさまじい音と天から岩が降ってきたような轟音が体を震わせた。芙蓉は給油ノズルを握ったままじつと緊張し、平中は型を縮こめ真っ青になっている。

道路を向いた紅倉が右手を突きだし、

「あっち向いて〜……、ほいつ！」

と人差し指を左に振ると、目の前の景色が真っ白に光って青みを帯びた図太い電流が横に流れて走り、間髪入れずにバリッドガガガガガンと物凄い音が爆発し、平中は思わず後ろにひっくり返りそうになって腰をかがめた。

カチツと音がして、

「はい、満タン」

芙蓉は給油ノズルを元に戻し、自動精算機から小銭のお釣りを取り、

「さ、行きましょう」

と紅倉にドアを開けてやり、中に押し込め、平中も急かしてエンジンを噴かし、ザーーツと降り始めた太い棒の雨の中、車の流れを確認して道に出た。背後でピカツと光り、ピシャアツ、ガラガラガラア……、と音が背中を追い越していった。それから2度3度と光ったが、雷は別の方向に移っていったようだ。

平中はようやく遠ざかった雷に安堵のため息をついて、
「死ぬかと思つたわ」

と目の前を横切つた光の龍のような稲妻をまざまざと思い出してブルツと震えた。

「危なかつたわねえ」

と芙蓉も同調し、

「先生、あれは『手のぬくもり会』の術者の仕業ですか？」
とルームミラーに視線をやって訊いた。紅倉はうなずき。

「そうでしょうね。びっくりねえ、天気まで操って襲ってくるなんて。これは侮れないわねえ」

平中は後ろへ顔を覗かせて

「でも先生にもびっくり。雷に『あっち向いてホイ！』なんて、マングミたい」

と楽しそうに笑つた。紅倉は肩をすくめ、

「大きな霊力が動いていたから、ちよつと、肩すかしを食らわせてやっただけよ」

と、なんてことないように言つた。ルームミラーをちらつと見て、芙蓉は嬉しそうにニンマリ笑つた。

「でもねえー……」

と紅倉はうかないように言う。

「テストがこれで終わりだといひんだけど」
にやけていた芙蓉は顔をきりつと引き締め、フロントガラスをワ

イパーが掻き分ける先から滝のように流れてくる激しい降雨の先を見て運転に集中した。

道は市街地を抜けつづら折りの山道を登っていく。右に左に体を揺られるが、豪雨に緊張して平中も紅倉もかえって大丈夫なようだ。山の斜面に挟まれたまっすぐな坂道を下りていくと、

「美貴ちゃん」

紅倉が注意した。激しいしぶきで白くかすむ道路に目を凝らすと、前方に杉の黒い幹が逆さに倒れて道路を塞いでいるのを発見し、緩やかにブレーキを踏んだ。

「まいりましたね」

一応2車線道路だが、方向を変えるのは難しい。

「どこかに脇道があったかしら？」

雨で周囲に気を配る余裕はなく、芙蓉は困り、とりあえずバックしようとして左肩から後ろを振り返った。

「美貴ちゃん」

紅倉が怖い目で言い、芙蓉は雨のカーテンの向こうに迫る大型トラックの影を見つけた。思い切りビイーーーーッ、とクラクションを鳴らしたが、坂道を下ってくるトラックが減速する様子はない。紅倉が言った。

「居眠り運転ね」

芙蓉はビイーーーーッ、ビイーーーーッ！と激しくクラクションを連続させたが、トラックはグングン迫ってくる。バックミラーを見て平中は顔を引きつらせ体をぎゅっと固くした。

紅倉が

「パンッ！」

と手を打った。「ビイーーーーッ！」と芙蓉がクラクションを鳴らし、トラックは飛び起きたようにギイイッ！とすさまじくブレーキをきかせて急停車した。激突まで2メートルもなく、運転席にゾツと目を見開いた中年の運転手の顔が見えた。

「プツプツ」とクラクションを鳴らし、芙蓉は傘を差してトラックの運転席に走った。窓を開けて顔を出す運転手と大声で話し、戻ってくる、トラックは黒い煙を吐きながらバツクしだした。

「坂を上ったところに普通車なら通れる枝道があるそうです。カーナビにも登録されていない細い道ですが、美山鍾乳洞まで行けるそうです」

紅倉は

「かえってラッキーだったかしら？」

とすまして笑い、平中はドキドキしながら

「居眠り運転のことは言ったの？」

と訊き、芙蓉は

「いいえ」

と、これもすまして言った。すましている紅倉を見て、

「地元の人しか知らない抜け道を教えてもらったんですから、それでチャラですね？」

とニヤツとした。雷で折れたと思われる杉の大木も運転手の居眠りも術者による「呪い」だろう。

トラックがもくもく煙を吐きながら坂を上りきるのを見送って、芙蓉もパールホワイトのハイブリッドカーをバツクさせていった。坂を上ると、なるほど樹木の陰に隠れて土の脇道が発見され、かなり細い道に車体が傷つくのを心配しながら入っていった。

すっかりどこを走っているのか分からなくなってしまうが、まともな道路に合流してしばらく走ると、「美山鍾乳洞」の看板を見つけ、指示に従って走った。走っているうちに兩足が弱まり、明るくなり、日差しが戻ってくると、美山鍾乳洞の駐車場に到着した。

車内から天井を空を透かし見るようにして、紅倉が言った。

「テストは終わったようね。今度は村まで迷路かしら？」

28 おせっかい

「美山鍾乳洞」は石灰岩の三角山の中に螺旋状の鍾乳洞窟ができており、ふもとの入り口から山の中腹まで6つの階層を上っていく「立体迷路式鍾乳洞」である。

案内の看板を見て芙蓉は、まあ確実に先生には無理だなと踏んだ。入場料大人800円。じきに雪が降れば冬期間は営業休止になる。

芙蓉と紅倉の愛車はすっかり泥に汚れていて芙蓉はため息をついた。

神経を使う運転に芙蓉の方が疲れてしまい、駐車場からしばらく先にある鍾乳洞入り口まで植物園の風情で造園されていて、しばらく休憩したくなった。

すると、最近ハマっている「ザ・ヴェロニカズ」の「POPPOP」というハモリが流れ出し、芙蓉はジャンパーのポケットから携帯電話を取り出した。知らない番号だが信用して良さそうに思っただけで電話に出た。

「もしもし」

「よお、お久しぶり。その節は、どうも」

若い男の声で、相手が分かったがあえて冷たく訊いた。

「どちらさまでしょう」

「こちららてめえ。わざわざ警告してやるつってのにツンデレ気取ってんじゃねえぞ」

「鶴の恩返し」

「誰がてめえらの世話になったよ？ 分かってんじゃねえか、苅田弓弦（かりたゆづる）だ。覚えておきやがれ」

へっ、と芙蓉は唇の端を歪めた。日本の政財界を裏から操る関西の陰のドン、白鶴（はっかく）様と呼ばれる老人に飼われている陰陽師の青年だ。本人はイケてる美青年のつもりだが、レズの芙蓉にはただの間抜けなナルシストとしか思われていない。……昨年京都

の病院で「L」の事件で関わった人物だ。芙蓉にとってはただの間
抜けだが、陰陽道の修行を積んだ能力は確かだ。

「で、なんです？ まだLの行方を追ってるんですか？」

「それはいずれな。まあおまえらが生きてそこから帰ってこられた
らだ」

「どういうことです？」

芙蓉はうるちよろしている紅倉を手で呼び、平中が気づいて連れ
てきた。芙蓉は携帯電話を指さし、紅倉と耳をくっつけて聞いた。

「おまえら今こっちに来てるんだろっ？」

「こっちってどっち？」

「しらばっくれるな。『呪殺村』を調べてるんだろっ？」

おどろおどろしい名前を聞いて芙蓉は紅倉と近い目を見合わせた。
村には手を出すな。殺されるぞ」

「そういう警告は先ほどたっぷり受けました」

「ああ、そうらしいな。だったらとっとと裏日本の漁村に帰れ」

「余計なお世話です」

『親切で言っやってやっつてんだよ。素直に人の話を聞きやがれ』

声のトーンが真剣なものになって芙蓉も真剣に耳をすました。

『あそこは特別な存在なんだ。知ってる者にとっては公然の秘密で
な』

「またあなたのご主人様が関わってるの？」

『と言っよりだな……………』

芙蓉も暗く目を光らせて言った。

「国、なの？」

『まあ、な。もちろん表立っつての政府じゃないが』

「国の黒い部分の人たち？」

『公安が紅倉を狙っっている』

芙蓉も緊張して固いつばを飲んだ。

『京都では仲間を紅倉に殺されてるからな。気合い入っつてるぞ？』

「わたしたちは何もしてないわよ」

「Lの仕業だつてな？　だがそれも紅倉がけしかけたんだろう？」

「……………」
事実なので芙蓉としては何とも言い返せない。

「とにかく連中は紅倉を殺れると思つて喜々としているらしい。今度は去年のような手ぬるさはないぞ？」

「村と公安はつながつてるの？」

「そう言う訳じゃないんだが……………」

苅田は齒切れ悪そうに言った。

「とにかくだ、為政者にとって村は『無い物』という扱いを代々してきてるんだ。その意味するところは自分で考える。だから公安も直接関わることはなかった……………今回の件までは、だ。分かるか？　紅倉がそこに行くつて事は、村にとつても、国にとつても、大迷惑なんだよ」

紅倉が口を出した。

「そう言われると嫌われ者としては引つかき回してやりたくなくなるわね」

「……………紅倉か……………」

苅田の声が一気に不機嫌になった。

「紅倉。行く気が、村に？」

「ええ。なんだか面白そうじゃない？」

「馬っ鹿やるう……………相変わらずねじ曲がつた性格してやがんな？　じゃあおまえを面白がらせるとつておきの情報を教えてやる。……………」

……………公安に、

俺の兄弟子が協力している……………」

苅田は具体的に明かしていないがさる密教の大寺院で陰陽道のエキスパートとしての厳しい修行を積んでいる。

「ふうーん。兄弟仲悪いの？」

「ああ。最悪にな。あれはな、外道だ。だが、術のスキルもパワーも、俺の数十倍すげえぞ」

「へえー。ずいぶんご謙遜ね？」

「まあな。胸くそ悪いが、奴のバケモノじみた力は認めないわけにはいかねえ。紅倉。おまえの霊能力がすごいのは認めてやるが、おまえのは所詮才能だけだ。奴も力は同じか、劣るかもしれないが、術者としてのスキルがまるで違う。おまえは所詮才能だけの素人で、奴はその才能に英才教育を施した主席卒業のプロフェッショナルだ。おまえでも勝てないぞ、絶対にな」

「勉強だけできる人間バカは嫌いよ」

「そうだろうぜ。奴も人間なんて操り人形にしか思ってないさ。紅倉。しつぽを巻いてさっさと逃げ帰れ。おまえが村に手を出さないと意思表示すれば公安も手を引く。それで丸く収まるんだ。紅倉、大人になれ」

紅倉はむっつりして言った。

「公安とあなたのお兄さんの宣戦布告は承りました」

「紅倉っ！」

「わたしね、」

紅倉はムカムカしながら言った。

「偉そうに人を見下した人間って大嫌いな。俺は頭がいいとか金があるとか腕力があるとかかってえばってる人って、めためたに潰してやりたくなるのよ」

「紅倉！ てめえ遊びでやってんじゃ……」

紅倉はもういいと電話を離れ、芙蓉が言った。

「情報提供ありがとうございます。田舎の漁村に帰ったらお礼に笹団子でもお送りしますわ。じゃ」

「こら、バカ……」

ピツと芙蓉は通話を切った。携帯電話をしまいながら、だが芙蓉は心配そうに紅倉を見た。紅倉はプンプン怒りながら、叱られた子どものように向こうを向いて顔を見せたがらなかった。

「先生。どうしました？ 今度はやけに積極的ですね？」

紅倉は芙蓉に叱られるのを嫌がるようにしながらも顔を見せて言った。

「帰った方がいいんでしょうけどね。なんだか、ここで手を引いたらいずれ彼らを本気で敵にしなければならぬような予感がするの」「予感、ですか」

芙蓉は珍しく思った。紅倉は人の心を読んで行動を予想することはいつもするが、未来を予感するようなことはしない。紅倉は更に言う。

「それにね、どうもわたしは呼ばれてここに来たような気がするのよ。それがその悪徳陰陽師じゃなきやいいんだけどね」

「呼ばれてここに来たような気がする」

と思つた根拠を紅倉は、

「ま、そんな気がするのよ」

と誤魔化したのが、「うゝゝん……」と腕を組んで難しい顔をした。

「自分の専門分野の陰陽師はまあいいとして。……公安ねえ……。なんだか、ずいぶん怒っているみたいね？」

芙蓉は呆れて言った。

「今更なんです？ 自分でまいた種でしょう？」

「だってえゝゝ、向こうが悪いんじやゝゝん」

と紅倉は口を尖らせ、芙蓉は

「他にやり方もあつたでしょうに」

と言つたが、まあ今更「ごめんね」で済む話ではない。芙蓉は真剣な顔になつて言った。

「『手のぬくもり会』と公安の関係は分かりませんが、彼らが手を組んでいるとしたら村に入った途端、ズドン、と撃ち殺される危険もありますね？ このまま応援なしに村に入るのは無謀だと思いませんか？」

「応援か……。これ以上他人を危険に巻き込みたくはないわね。よしっ！ 保険を用意していきましょう」

紅倉はなにやら張り切り、芙蓉はなんですか？と首をかしげた。

「蜂万町つて名前、蜂万神社から来てるんでしょう？ 大きな蜂万神社があるのよね？」

「あります」

「そこでお参りして、願掛けしていきましょう」

「なんて？」

「公安にぶち殺されたら祟り神になつて日本をめちゃくちゃにして

やる〜って」

芙蓉は呆れた。

「神様がそんなお願い聞いてくれるとは思えませんがね？」

「いいからいいから。レッツゴー！」

と、せっかく苦勞して上ってきた山道を始点の先まで逆戻りすることになるが、もともと距離的には全然大したことはない。車に乗る前に芙蓉は訊いた。

「先生。村の位置はもう分かっているんですか？」

「もち。あれだけ派手に靈力を使ってくれば、空から見下ろしているみたいに楽勝よ」

群上蜂万神社は長良川に面し、神社仏閣の多い町にあっても鬼門を守る重要な位置にあり、緑の中に整然と平安調の社殿が並ぶ上品なたたずまいで、菅原道真公を祀る天満宮があった。

「菅原道真！ 祟り神オツケー！」

と紅倉はガッツポーズを取り、芙蓉は罰当たりだなあと苦笑した。菅原道真公をお祀りした神社は全国に数多くあるが、「小野自在天満宮」と称するここはちょっと特別で、「自在」つまり「菅原道真公がお姿を現しになった石」がご神体になっていて、高さ1メートルほどの白い石に梅の一枝を持った横向きの姿が黒くはつきりと現れている。シーズンには多くの受験生たちがお参りに訪れるそうだ。

紅倉はパンパンと柏手を打ち、豪勢に万札をお賽銭に上げ、お参りが終わると家内安全のお札を始め破魔矢やらお守りやらを買いあさった。神社のグッズは一々高く、芙蓉はとんだ散財に思いつきり渋い顔をした。

紅倉は罰当たりにお札を開いて、裏に赤ペンの下っ手くそな字で「公安に殺されたらきつと日本政府を祟ります」

と書き、顔を青くしかめながらビクビク安全ピンで右手の人差し

指を突いて、赤い血の玉を膨らませると血判を押した。

もう一度天満宮で派手に柏手を打ち、玉串のようにお札を掲げて「ご助力、よろしくお願いしまーす」

と、恥ずかしいほどの大声で言い、パンパン柏手を打ち、二礼して締めた。

「さて、これでオツケー。心おきなく敵の本拠地に侵入できるわよ！」

「どうだろう？と首をかしげて芙蓉は言った。

「公安が『迷信』なんか気にしないとしますけど？ だいたいここで願掛けした事なんて知らないんじゃないですか？」

「そうかな？」

紅倉は境内をじいーっつと見渡して怪しい人物を捜したが、かえって授与所の巫女さんに不審の目で見られてしまった。自分たちの他に怪しそうな人物は見当たらない。

「そっかー。もう監視されているのかなあと思ったけど、公安も大したことないわね。それじゃしょうがない、教えてあげなくちゃ。

美貴ちゃん、易木さんに電話して」

芙蓉は携帯電話を出し、登録しておいた易木の電話にかけた。すぐに易木が出て、

「もしもし。芙蓉です。今先生に代わります」

と、紅倉に電話を渡した。

「もしもし。紅倉です」

易木のがっかりした声が答えた。

『紅倉先生……。けつきよくそちらへ向かわれたんですね？』

「はい。残念ながら。ま、しょうがないでしょ？」

『ええ……。こちらとしましては精一杯の誠意をお見せしたつもりなんです……。』

「それについてはもう議論するつもりはありません。あなたに一つ、村に連絡してほしいことがあるんですが？」

『なんでしょっ？』

「村はあなたのお仲間さんたちで出入りする人間をチェックしているんでしょね？」

『いえ、村はいたってふつうに生活しておりますから』

「今更しらばつくれなくていいわよ。村から公安の人に伝えてほしいんだけど」

『公安の方ですか？』

「あなたは報されないかもしれないけれど、そうなのよ。多分もう村に入っていると思うから、しかるべき人に伝えて、彼らに忠告してほしいんだけど…、わたし今蜂万神社にいるの。天満宮に願掛けしてね、

……もし公安がわたしを殺したらきつと祟り神となって日本をめちゃくちゃにしてやります、

ってね」

『まあ……』

「わたしが本気かどうかは、そっちに専門家がいるんでしょ？どうぞ調べてくださいな？ でも、じっくり調べる前にさっさと公安に伝えるように。わたしたち、これから村に向かいますからね？」

『分かりました。直ちに伝えます』

「よろしく。……易木さん」

『はい？』

「わたしもこういうことになってしまっても残念です」

『……はい。それも含めて、しかるべき者にお伝えします』

「よろしく。じゃ」

紅倉は電話を芙蓉に渡し、芙蓉はまだつながっている通話をピッと切った。

「さて」

紅倉が晴れ晴れした顔で言った。

「では呪殺村に参りましょうか！」

30 黒い訪問者

かなり年季の入った柱と畳の部屋に老人は戻ってきた。

「失礼しました。どうもお待たせしまして」

「いえ」

と、待たされていた男性は軽く微笑んであいさつした。テーブルの対面、床の間を背に座りながら老人は訊いた。

「政府関係の方とか？ 具体的にはどこの？」

男は人が良さそうに微笑みながら、名刺入れから名刺を一枚取り出し、スツとテーブルの上に差し出して言った。

「こんにちは。皆様の公安です」

老人は不機嫌そうに鼻をうごめかせて名刺を取り上げて見た。

「警察庁 公安課 日本太郎（にっぽんたろう）」

と簡潔に印刷されている。電話番号等の記載はない。

老人は不愉快きわまりなくおもちゃみたいな名刺をテーブルの上に投げ捨てた。

向かいの男を見る。

年は45くらい。光を全く反射しない黒のシンプルなシルエットのコートを着ている。中肉中背。これと言った特徴のない、にやけた、柔らかい顔立ちをしている。

「公安なんて物騒なところの方がこんな田舎の村になんのご用かな？」

「これから来る客のことなんですがね」

公安はいかにも人当たりの良さそうな猫のような声をしている。

村長は虫ずの走るような顔で言った。

「まだあなたの仲間が来るのか？」

「またまた、おとぼけになって。有名人が来るんでしょう？ ま、過去の、ですかねえ？」

公安は哀れむように笑った。村長は警戒の目でじっと見つめてい

る。公安は弓なりに笑わせた目の白目を強くしてじつと奥から村長を見つめた。

「ま、回りくどい言い方も止めますか。」

紅倉美姫が来るのでしょうか？ お電話はその業務連絡ではありませんでしたか？」

村長はいつたんこの男を応接間に案内した後、電話があり中座していたのだった。

村長は重い口で言った。

「紅倉美姫さんが、あんたらとなんの関係がある？」

「関係なんてありやしないよ。我々が懸念しているのはあんたらのことよ。」

「我々の？ こんな田舎の村の、どこに公安の懸念がある？」

「回りくどい言い方はやめようと言っただろう？ まあいいさ。：

…ここは、どこだね？」

村長は公安のいわんとする事に眉をひそめ首をかしげた。公安が言う。

「岐阜県大字（おおあざ）村。それだけだ。平成の市町村大合併を経ても群上市の中にあつてここだけ独立した村を保っている。と言うより、岐阜県民でさえ誰も『大字村』なんて名前も存在も知りもしない。どうしてそんな我が儘が許されている？」

「我が儘も何も、こんな何も無いへんぴな村、周りからさえ忘れ去られているだけじゃよ。」

「県では認識しているぜ？ その上でだ、この村には余計な手出しはいっさい無用と、国からお達しが行っている。この地は、中世以来日本の歴史のブラックホールというわけだ。何故だ？」

怖い顔で黙り込む村長に公安は畳み込んだ。

「あんたらがその昔から神に通じて呪殺なんておっかねえ商売をしている集団だったからだ。」

じつと睨んでいた村長が、フツ、とバカにしたように笑った。

「何を言うかと思ったら、子どものおとぎ話じゃあるまいに。」

「してないと言っかね？」

「ああ。馬鹿馬鹿しい」

「そうか。じゃあ、この女を引き渡してもらおうか？」

公安はコートの胸から一枚の写真を取り出して村長につと差し出した。下に目を向けた村長はギョツと目を剥いてじわつと脂汗を噴き出した。コンコンとテーブルを指で叩いて公安は言った。

「いつまでもおとぎの世界に住んでるんじゃないよ、ええ？こら！、現代社会を舐めてんじゃねえや！」

それまで弓なりに笑っていた目を開くとこんなに大きかったのかと驚くほどギョロリと目玉を剥き出して、凶悪な面相で村長を脅すように言った。

「俺たち警察機構がてめえらの無法を『法で裁けぬ悪を懲らしめる闇の仕置き人』とでも思ってお目こぼししてやってると思っただか？このおめでたいファンタジーの住人どもが。勘違いするなよ？国のために役に立つと思うから生かしておいてやってるんだ。あんまり国を舐めて好き勝手やってると、ぶつつぶすぞおっ！」

公安は肌をどす黒く鬱屈させ額に青筋を立てて村長を睨み付けた。村長はグツと唇を引き締め、今一度写真を手に取りしつかり見た。写真は夜の、どこかの駐車場で、黒いコートを着た女性……ケイが、チャラチャラした服装で地面に膝をついて上半身をのけぞらせた男の喉笛に視覚障害者用の杖を突きつけている決定的なシーンを捉えていた。

公安はギョロツとした目を奥に引つ込ませるようにまた弓なりに笑わせたが、最初のような人当たりの良さは微塵もなく、声だけ猫なで声で気持ち悪く笑って言った。

「うかつだねえ？ 現代社会の日進月歩の防犯テクノロジーを甘く見てもらっちゃ困るよ？ 現場ばかりじゃなく、うんと遠くでも、角度さえ合っていれば、デジタル解析でこれだけはつきり映像があぶり出されてしまうんだよ？ 若い連中にもっと気を付けるように注意しておいてくれたまえよ？」

公安は、

「はっはっはっ」

と喉の奥で笑った。

「証拠改竄もデジタル相手なら楽なものだが、人相手となるとちょっとばかり面倒だね、ま、あまり自分たちの評判を落としたくはないんだが、強面の公安様がにらみを利かせて跳ねつ返りの正義の味方を潰す、てな悪い役回りも引き受けなくちゃならない。守られるんだよ、あんたらはね、この、俺たちに」

恩着せがましく言う公安を村長は脂汗でびっしょりの顔で白い眉の下から見上げて訊いた。

「我々に何をしろと？」

公安はそれには答えず、ふむ？とちょっと興味がわいたように尋ねた。

「あんたら悪人は呪い殺すんだろう？　なんでこんなちんぴら狩りみたいなことをさせてるんだ？」

村長は公安を睨んだまま怒った声で

「企業秘密だ」

と言った。公安はニコニコ笑い、

「あんたらの仕事に必要なことならまあいいよ」

といい、白目を光らせて陰険に言った。

「ただし、認識はしてもらいたいね？我々のお目こぼしを受けて守られているんだと。」

いいんだよ、君たちは、このままで。

法で裁けぬ悪に天誅を下し懲らしめる。大いにけっこう！　社会の精神バランスをそうして保ってくれたまえな！

同じく、

この国を危険に晒すような大馬鹿者が現れて、それが、日本国を動かすような権力を持ってしまい、日本国を危うい状態に陥れようとしたその時には、

同じように、

その馬鹿者に天誅を下してくれたまえ。

君たちはその正義のために、我々によって、独立した自由を守られているのだよ」

村長は眉を険しくして苦しそうに公安を睨んだ。

「我々にその裁きをせよと？」

「いや」

公安は冷たい目で村長を見やって言葉を突きつけた。

「裁きは我々が下す。君らはただ、実行してくれればいいのだよ、決して法に触れないやり方で、我が日本国の危機を排除してくれたまえ」

「その道具として子飼いにしていると……。その君たちには、いたい誰が命令を下すんだ？ 我々の存在は、歴代為政者にして不可侵の約束だったはずだが？」

公安は呆れたように言った。

「それはいつたい何百年前の約束だね？ 我々に命令を下すもの、それは、

国家の意思

だよ」

公安はニヤリと笑い、また目を猫のように笑わせた。

31 邪魔者は消せ!

公安は面白くなさそうな顔になって続けた。

「そこで本題だ。」

ここに紅倉が現れたら、我々で処理するから、君らは、黙って、何もするな。

いいですか?」

村長はもはや否を唱えるつもりもなく尋ねた。

「我々としても紅倉を遠ざけてくれるのはありがたいが、処理、とは? 紅倉は警察に協力的な人物ではなかったのかね?」

「去年まではな」

フン、と公安は腹立たしげに鼻息を吹き、冷静に官僚的口調で言った。

「あの女は凶に乗りすぎてしてはならないことをした。さっきの話で言えば、あの女は愚かにも政界に立てなくてもいい波風を起こして、日本国を翻弄した。そうした真似は、個人に許されることではない」

紅倉は去年大物政治家の裏献金疑惑を暴き、その影響は大きく政界に広がっていくこととなった。もっとも騒動はその後紅倉の仕掛けておいた「落とし穴」によって疑惑そのものが疑われるようになり、大物政治家の死去と共に潮が引くようにならぬやに消えていったのだが。

「そういうことの許されるのは我々だけであらねばならない」

公安は黒く唇を歪ませ、また官僚の鉄面皮に戻った。

「あの女は日本国にとってきわめて有害な存在になった。この際ちようどいいから紅倉には消えてもらおう。その証拠となる周りの人間も含めてな。だからあんたはいつさい何もするな、何も見るな、何も聞くな。分かりましたな?」

噛んで含めるように言い、公安は村長の返事も聞かずに満足そう

に微笑んだ。

しかし村長は、

「いや、それについてだが、」
と、待ったをかけた。

「あんた方公安が紅倉を殺すのは拙い」

「何故かね？」

公安は少しばかり不快そうに眉をうごめかせて訊いた。

「さっきの電話だ。紅倉は天満宮に『自分が公安に殺されたら祟り神となつて日本国をめちゃくちゃにする』と願掛けしたそうだ」

公安はチエツと舌を打ち、

「なにい？」

と眉をひん曲げた。

「祟り神だと？ まったくあの女、何様のつもりだ？ おいあんた、神様っていうのはそんな馬鹿な願いをお聞き届けになるものなのかね？」

村長は自分たちの専門分野にニヤリと笑って言った。

「神は力だよ。それに善なるものを期待するのは人間の勝手だ。神とは、時として人間の味方とは限らないよ」

公安は話そのものはどうでもよく、ひたすら迷惑そうに顔をしかめて訊いた。

「それで、神様が力を貸したとして、死んだ紅倉に日本をどうこうできるほどの力があるものかね？」

「紅倉に関してはそちらの方が詳しいんじゃないのか？」

「我々が関心を持っているのは彼女の巻き起こす現象の方でね。で、どうなんだね？」

村長はニヤツと意地悪そうにして言った。

「紅倉美姫という女、個人としては化け物だよ。あれだけの強い靈力を生身で持っている人間は世界にもそうおるまいて」

「死んだらどうなる？ そのまま化け物みたいな悪霊になるのかね？」

「さあ……。おそらく本人にも分かるまい。だから神社に願掛けして、いわば、自分に呪いを掛けたんだろう。日本政府を転覆させるほどの大怨霊となるのも、あり得んことではあるまい」

「まったく、どこまでも腹の立つ女だ」

「どうだろう?」

村長が膝を進めるようにして言った。

「紅倉のことは我々に任せてくれぬか?」

公安は冷たい視線をよこした。

「我々の決定は紅倉美姫の抹殺だ」

「承知……しよう」

「ほう? その覚悟があるか? ……公安でなければいいのか? 紅倉を殺すのが?」

「条件を欲張っては神も願いを聞いてはくれまい」

「公安だけ目の敵か? 女も分かっているじゃないか」

公安はいやらしく笑い、フンと仏頂面になると村長に命じた。

「では、君たちに任せることにしよう。ただし、我々が、君らも、見張っているということを忘れずにな?」

村長も面白くない顔で重々しくうなずいた。

「心得ている」

村長の家を出ると公安日本太郎は携帯で電話をした。登録番号を呼び出すと現代音楽風の電子音が鳴って相手方につながるまでしばらく待たされた。回線を電子暗号化し、あらゆる、追跡から先方の位置を知られないように設計されている。ようやく相手が出た。

「俺だ。あんたの読み通り面倒が起こった。紅倉が神社に願掛けして自分が公安に殺されたら祟り神になって日本をめちゃくちゃにするると自分に呪いを掛けたんだそうだ。あんたどう思う?」

公安は額をえぐるような深いしわを刻んで電話の声に耳を傾け、うん?と目を剥いた。

「村の連中に任せてしまつていいのか？ あんたは動かんのか？」
再びじつと耳を傾け。

「なるほど。分かった。この電話は大丈夫なんだな？ …… ああ、
奴らを見張るよ、これまで通りにな」

話を終え、公安は通話を切った。

「まったくどいつもこいつも、腹立たしいことだ」

「日本国の正常な運営を陰で守っている自負のある彼は、霊力だの
呪術だの陰陽道だの、訳の分からないオカルトに引っかき回される
のが実は嫌でしょうがないのだった。

「いつそみんなまとめて消しちまえばいい。この国に神はもういら
んよ」

暗闇にぼつと灯つたろうそくに照らされて一人の男が座っていた。
ろうそくは前二つ後ろ二つの四方に置かれているが、どうやら広
い部屋らしく壁に灯りは届いていない。床は黒い板間である。

この青みがかつた色のろうそくは、ふつつのろうそくではなかつ
た。屍蠟。人間の死体が冷たい無酸素状態などの条件下に置かれて
脂肪が蠟のように変化した物から作り出されたるうそくだった。

男は人間の死体を燃やす灯の中、生身でこの世にありながら同時
に冥界に身を浸していた。

男は身を現世に置きながら、その場所は外界の情報をいつさい遮
断して、その位置を隠していた。

それでも携帯電話はつながる。

公安との話を終えた男は携帯電話を傍らの文机に置き、軽く目を
閉じ、ごく周囲の霊波を探った。

「よし。乱れはない」

男は自信に満ちた様子で目を開けた。

年の頃は三十を少し越えたほど。むしろの上にあぐらをかいた姿だが、背は高くなく、顔が大きい。坊主頭が自然に伸びたようなばらばらの髪をしている。天平期の大仏のように面長なつるつとした肉厚の顔をしているが黒目が異様に小さく、酷薄そうで、ありがたみは皆無だ。

黒い着物を着ているが、その装身具が異様だ。

直径10センチほどの丸鏡を4、5枚ずつつなげて、首から股へ、背中へ、両方の肩へ垂らしている。

「俺のことを探ろうという小賢しい策だろうが、あいにくと俺はおまえごときそれほど恐れてはいないのでな」

男は木のうろにぼうぼうと響くような低く輪郭のはっきりしない声で言って、笑った。

「弓弦（ゆづる）の奴がまるで歯が立たなかったようだが、奴など、物の数にもならぬ」

苅田弓弦の名誉のために言うならば、彼は紅倉とは直接戦っておらず、かえって紅倉たちをかばう形で事故に巻き込まれて気絶してしまったようなものだが、それを知っても身内であるこの男は不遜に鼻で笑うだけだろう。

「紅倉美姫。どれほど能力が高く、霊界のことを知ったつもりになつていても、おまえのは所詮小学生の算数レベルだ。陰陽道の本流を極めた俺の高等数学は世界が違うのだ。おまえは俺には勝てんよ」
男はさつと両の袖を払い、瞑想に入る体勢を取った。

「おまえは連中相手にせいぜい踊るがいい。俺の式はすでに立っている。生き残って、俺の姿を見ることがあれば、それがおまえの死ぬときだ。どれほどの怨霊に化けるか俺に見せてみる」

男が目を閉じ瞑想に入ると、炎の色が暗く黒みを帯びて、男の姿を闇に沈めた。

闇にじっと息を潜める男。

名を土亀恵幸（ときさとゆき）と言つ。

32 村の入り口

空は雷と豪雨が洗い流したかのごとくすっかり青く晴れ上がっている。

再び美山に戻ると紅倉は

「ちえー、乗ってこなかったか」

と何やらニヤニヤし、なんのことか分からない芙蓉に、

「ま、いいや。行きましようか？」

と美山鍾乳洞の先へ向かうよう指示した。しばらく国道を歩き再び市街地に出たが、そこで山の方へ向かい、そこから先はかろうじて車一台分の幅がアスファルト舗装された農道のような道を進み、どんだん峠に入っていく、まったくどこに向かっているのか森の中の道へ折れ、アスファルト舗装が終わって土の壁に囲まれたどん詰まりに行き着いたと思ったらこれまた分かりづらい中途半端な位置に木の根で迷彩されたような細い道があり、立ち往生してどうにもならなくなる不安を抱きながら入っていくと、細い道幅のまま、10メートルほどの下り坂に出会った。10メートルほど下った後、また同じ急な角度で上り坂になっているが、その底に激しいしぶきを上げて水が溢れ出していた。水は左の壁の割れ目から流れ出し、右の壁の割れ目に流れ込んでいる。この流れが普段からあるものなのか先ほどの豪雨で溢れ出したものなのかは分からない。紅倉は行けと指示し、芙蓉は坂道を下っていった。向こうの坂を上るためスピードを上げて下っていったが、底の流れに突っ込むようで平中は恐怖を覚えた。左のボディをバシャバシャ水に叩かれながらフロントのバンパーをギリギリかすめて上り坂に乗り上げ、ローギアで上っていった。坂の頂上を越えるとまたうねうねした峠道を進み、明るい斜面を走ったかと思うと、谷間に入っていく、高い針葉樹の枝の間から遠い青空を覗き見るようにして、また一つ峠を越えた。

「着いたわ」

紅倉が言っつてしばらく進むと、前方の風景が開け、峠に囲まれた盆地の村が見下ろせた。

「ようこそ、『大字（おおあざ）村』に」

茶目つ気たつぷりに言う紅倉の案内に、芙蓉は殺伐とした眼差しで村を眺めた。眩しい青空のせいか、一種の幻のように妙に白々と見える。平中も緊張した横顔で身を乗り出している。

道はそのまますすぐ村に下りて行くが、途中村をぐるりと取り囲むらしい斜面の道と交わり、紅倉はそっちを行ってみましようと思芙蓉に指示した。

進んでいくと斜面の向こうが開け、村は意外に広いことが分かった。土地が広がり、きれいに耕された畑の縞模様とぽつぽつと点在する小さな家が見えた。ざっと見渡したところ5、60戸もあるだろうか？ 大きな家もいくつか見受けられる。どれもこれも木造で古そうだ。現代的なコンクリートの建物は見当たらず、学校や病院といった公共の施設もあるんだかないんだか分からない。

目立つのが水車だ。

あちこち村中、今走っている斜面にもいくつも建ち、当然水流がある。あちこち山中のわき水を引いているのか人工の水路にさらさらと日に輝く豊かな水が流れている。斜面の水路は一気に駆け下るのを避けるためか斜めに下りていき、それがあちこちあるものだから螺旋状に、すり鉢の溝のように思える。

日の当たる北側の斜面に段々畑が作られているが、これも土砂崩れを警戒してか斜めにずらしながら全体の3分の1くらいの面積にとどめている。斜面のその他の面はすっかり紅葉の落ちた裸の木が覆っている。

斜面の道は急なカーブで向こうの面へ曲がっていく。村はこのよくなぎざぎざに囲まれながら丸い形をしているようだ。芙蓉の目測でほしい直径700メートルくらいだろうか。盆地は周りの峠の

6合目から7合目くらいの位置にあり、ここまで上ってきた山道を考えると村の標高はふもとの市街地に比べてだいぶ高いだろう。

「先生。建物があります」

ハンドルを握る芙蓉が斜面を転げ落ちないように気を付けながら前方の木の陰から現れてきたモダンな建物を見て言った。道は普通車には十分な幅があるが縁は道路を掘り出す際に出たと思われる黄色がかつた石が積まれて垣になっているがガードレールとしては心許なく、誤って乗り上げたらいつしよにガラガラ斜面を転げ落ちていきそうだ。道は剥き出しの土で、アスファルト舗装などされておらず、村の中を走る道も同様だ。ぽつぽつ小型のトラックや4WDらしいワゴン車が道ばたに放置されたように止まっている。

山の斜面に現れた、白地に緑と赤でペイントされた村で唯一と思われるカラフルな建物は、「ペンションもみじ」と壁に書かれた、その名の通りペンションらしく、芙蓉の車が入ってきたように山から村へ下りていく道に面して建ち、隣に森を切り開いた車4台分の駐車場もあり、2台の普通車が止まっていた。芙蓉はブレーキを掛け、言った。

「どうやら全くの隠里でもないみたいですね？」

こちらの道の方が幅が広く整備された感じで、山の中をぐるぐる回ってやってきたのはなんだったのかと馬鹿馬鹿しく思われた。芙蓉は後ろへ身をよじり、紅倉に尋ねた。

「ペンションですって。どうします？訪ねて、話を聞きますか？」

紅倉はうんとうなずき、言った。

「泊めてもらいましょう。山道を戻ってまたここに来るなんてうんざりだし、他に旅館もないでしょう？」

「ええ、多分。でもここ、部屋が埋まっているかもしれませんよ？車が止まっていますから、お客さんかもしれないません」

「へー、そうなの？ここって観光に良さそうな所なの？」

「あまりそうも見えませんが……、水車がいっぱいありますよ？綺麗と言えば、綺麗かしらねえ？」

芙蓉は首をかしげて平中に意見を問う、平中も今一度村を見渡してうなずいた。

「古き良き時代の、っていう感じはするわね。うん、観光地として行けるんじゃないかしら？」

「案外それがこの村の表の顔かもしれないね？ とにかくペンションに行ってみましょうか？」

芙蓉は車を進め、縦の道に入り、奥の駐車場の空いたところにバツクして止めた。

シュルツとシートベルトを外しドアを開けた芙蓉は、

「うっ、……」

とうめいてよろめき、ドン！とフレームに体を打ち付けるようにしてすがりついた。ぬっと伸びた紅倉の手にコートを掴まれて芙蓉はハツとした。

「なんでしよう、ひどく気分が悪くて頭が……」

紅倉は車の内側から芙蓉の服を掴んだままドアを開け、出てくると急いで芙蓉を捕まえ、頭を押さえ、背の高い芙蓉を屈ませて自分の胸に頭を抱き込んで両手で包み込むようにした。

「美貴ちゃんにここの空気はきついでしょうね。わたしにくっついてないと駄目よ？」

芙蓉は紅倉の背に腕を回してぎゅっと抱きしめた。

「ああ先生、もっとぎゅうっと」

「こらこら」

紅倉は笑いながら芙蓉の頭を撫でてやり、平中に訊いた。

「あなたは？ 大丈夫？」

「ええ。特に何ともありませんが？」

平中はむしろ車内のこもった空気から解放されて晴れ晴れしたように言った。ただ場所が場所なので緊張は窺えるが。紅倉は、

「そう。あなたが鈍感で良かったわ」

とからかうように笑ったが、

「でもだんだん影響を受けてくるでしょうね」

と警戒し、

「ああそうだ」

と思いついた。

「美貴ちゃん、女神様あるわよねえ？ 出して」

「はい」

芙蓉は紅倉の胸から顔を上げ、紅倉は背中に手のひらを当ててやった。芙蓉は後部座席に置いた箱形の旅行カバンを開け、底から平たい桐の箱を取り出した。ふたを開けて紅倉に差し出し、こちらに回ってきた平中も覗き込んだ。紅倉は

「紅倉美姫謹製」

とお茶目に言いながら柔らかい紙にくるまれた高さ5センチほどの物をつまみ上げ、中身を取り出した。シルバーの両手を胸の前に合わせ背中に大きな翼を畳んだ女神の像だ。

「懐かしいわね？」

と紅倉は芙蓉に微笑んだ。芙蓉が紅倉のアシスタントになってからしばらくはこのアイテムをお守りや結界を張る道具としてよく利用していたが、以心伝心でつながるようになって使う必要が無くなっていった。紅倉は両手にくるんで

「えいっ！」

と今一度念を込め、

「じゃあこれは平中さんにあげましようか。ネックレスにして身に付けていてください」

と渡した。背中にリングがついていて紐を通せるようになっていた。平中は受け取って、シャツの中にしまった婚約指輪のネックレスを引っ張り出すとチェーンが通るのを確認して言った。

「首がこりそうだわ」

紅倉はノンノンと指を振り、

「霊波のバイブレーションで霊体がほぐれて気持ちいいはずよ？ 磁力を仕込んでおけば完璧だったかしら？」

と言って平中を笑わせた。箱の中にはまだ3体女神像が入ってい

だが、

「美貴ちゃんにはこつちがいいかな？」

と、シルバーの無垢の指輪を4つ全部取り出した。芙蓉は

「婚約指輪は先生と一つずつでいいですよ？」

と言ったが、紅倉は冗談に乗ったわけでもないだろうが

「それもそうね」

と言い、二つを芙蓉に渡し、自分も左右のそれぞれ薬指にはめた。芙蓉も同じようにはめ、

「ぴったり」

と手をかざしてくるくるした。

「リンク」

と紅倉は両手を開いて芙蓉に向け、芙蓉は手のひらを重ねた。ゾクリと震えが走った後指輪から体内に強い力が流れ込んでくるのを芙蓉は感じた。

「これを使うのは初めてですよね？」

「そうね。作ってはみたけれど、はいこの通り、シンクロが強すぎてまだ美貴ちゃんには使わせられなかったのよね。今なら使いこなせるでしょう」

「はい。もうすっかり先生の霊波が体に染み込んでますからねえ」
芙蓉はすました顔で言って、両手の指輪を眺めて嬉しそうに笑った。

「気分はもう大丈夫？」

「はい。落ち着きました」

「そう。じゃあ、最初の手がかりにアタックしてみましようか」

33 ペンションもみじ

格子窓の西洋風のドアを開けると、カラカラインと軽い金属の鈴が鳴って、「はぁーい」と廊下の奥から声がした。

「はいはいはい。お帰りなさい」

揉み手をするような感じでアフロが崩れたようなパーマ頭の30代の男性がにこやかに出てきて、芙蓉たちを見て驚いた。

「おや！ えーと……、ヒロオカさん……ではありません……よね？」

首をかしげ、申し訳なさそうな愛想笑いで尋ねた。

「えーと、村の方……でしょうか？……」

芙蓉は愛想笑いの中にじっとり脂汗を浮かべるような困惑があるのを敏感に感じた。

「いえ。わたしたち県外からの旅行者なんですけれど、こちら、3名、泊まれる部屋はありますかしら？」

「あつ、お泊まりですか！」

ペンションのオーナーらしき男性は手を打って喜び、

「えーっと、3名様。えーっと、相部屋でもよろしいでしょうか？」

2部屋ならご用意できるんですが？」

と期待するように尋ねた。

「ええ。では2部屋お願います」

「ありがとうございます！ お泊まりは……、どれほど……？」

芙蓉は後ろを振り返り紅倉に訊いた。

「先生、どうしましょう？」

「そうねえ、とりあえず3日ってことにしましょう」

「だそつです。3日間、よろしいですか？」

「けっこうです、ハイ！ ええもう、よろしいですとも！」

男性はひどく嬉しそうで、芙蓉はよつぽど暇なんだろうなあと思感した。男性は高い一本脚の丸い小テーブルを芙蓉の前に運び、あ

っ、と思いついた顔をして。

「一泊2食付きで一人様1万2千円になりますが、よろしいでしょうか？……………」

「1万2千円。ふうん、相部屋も同額？」

「あいすみませんです」

「ま、いいでしょう。お願いします」

「ありがとうございます。では宿帳の方に記入をお願いいたしますです」

芙蓉は万年筆で自分の名前と住所電話番号を記入し、代表して紅倉と平中の名前も書き込んだ。

宿帳は昔ながらの行を連ねて書いていく物ではなく、お客ごと1ページを使って書くタイプだった。芙蓉はその前のページを覗きたいような仕草を見せて訊いた。

「ヒロオカさんという方が泊まってらっしゃるの？」

「ええ。今夜からお泊まりで、ただいま村の方へ見学に行つてらっしゃいます」

「見学？ 村に何かあるんですか？」

「祭の準備をしてるんじゃないかと思えます。ヒロオカさんはそれをご覧にいられたんだそうです」

「今頃お祭りがあるの？」

「ええ。年神様をお迎えするための下準備のようなお祭りらしいですよ？ すみません、わたしあんまり詳しくなくて、お客さんのヒロオカさんに教えられて知ったような有様でして、ハイ。なんでしたら、ヒロオカさんが戻られたらお聞きになってみては？」

「そう。どんな方？」

「ええ、とても気さくな良い方ですよ？」

「ふうん。ところで…、失礼ですがこっつてお客あるんですか？いえ、こちらのペンションにはなく、そもそもこんな山奥に観光客なんてあるんですか？」

「ああ…、ハイ…、ええ………」

オーナーは参ったなあと言うように頭を掻いた。

「いやあ〜……、実はあまり……。いえ、とてもいい所……。だと思
うんですよ？ 村はご覧になりました？」

「ええ。上から眺めただけですけど」

「綺麗な所でしょうか？」

「まあ……そうかしらねえ？」

オーナーは芙蓉の反応の乏しさにがっかりしたように顔を曇らせたが、ここは頑張り所と張り切って村の観光ガイドを始めた。

「お客さんたちも後2週間早くいらっしやっていたらこの谷の紅葉の美しさに目を見張ったことでしょう！ 岐阜で紅葉の名所と言えば金華山、揖斐峡、大矢田もみじ谷、恵那峡とあつてどこも見事な物ですが、この紅葉は特別です！ 赤も黄色も輝くようで、葉の一枚一枚の輝きが違います！ ここはぜひ大字村なんて地味な名前じゃなく『もみじ村』と改名した方がいいです！ 規模は小さいですがぐるっと村を取り囲んだ様子は、まるでこの世ではないほどの宝石のような美しさですよ！」

「2週間前ねえ」

芙蓉は皮肉な調子で言い、紅倉の後ろの平中を気にした。オーナーの熱弁は続く。

「ああ残念ながら紅葉は終わってしまいました。水路と水車の巡る昔ながらの田園風景は世界遺産に登録されたってぜんぜん不思議じゃない美しさでしょう？ 実はですね、ここは平家の落ち人が開いたって言う伝説があるんですよ？」

オーナーはいかにも自慢そうにウインクしたが、
「世界遺産も平家の隠里もここに来る道すがら眺めてきましたからねえ」

と言う芙蓉のすれた旅行者の弁にまたがっかりさせられた。

「いやあほんといい所なんですよお？ これで温泉でも出れば完璧なんですけれどねえ」

「温泉は出ないんですか？」

「出ないんですよ、綺麗な水は豊富に流れているんですけどね。いやでもねえ、これでも十分、もつと積極的に売り出せばきっと評判になって人気の観光スポットになると思っんですよ？　この人たちは……何せ平家の落ち人の子孫だから、どうもよそ者を寄せ付けないで、積極的に外に打って出よう！　っていう気がまるでないんですよ。まったく、宝の持ち腐れですよ。ハア……、もったいない」

オーナーはいかにも惜しいというように頭を振ってため息をついた。芙蓉はそうかしら？　と思いつながら言った。

「こんな山奥の不便な所じゃ観光客の押し掛けてくる余裕もないでしょう？　ずうつと先から交通誘導員が立ってなきやすぐに詰まってケンカになっちゃうでしょう？」

「あ、いや」

オーナーは不思議そうな顔で芙蓉を眺めて訊いた。

「お客さんたち、この前の道を上ってきたんじゃ……」

「いえ。わたしたちは向こうの方から来たんだけど」

芙蓉が指さす方を向いてオーナーはびっくりした顔になった。

「お客さんたち、蜂万町の方からそのまま来たの？」

「ええ……」

「あの道を？　よく来られたねえ？　ひよつとして迷ってここに出ちゃったの？」

オーナーの呆れたような言い方に芙蓉は少々ムツとして言った。

「いいえ。ちゃんと、ここ、大字村を目指して来たんです！」

「あ、じゃあこの村のこと知ってて来たんですか？　いやあそりゃ嬉しいですが……、あの、道は……、知らなかったんですか？」

「まともな道なんてあったんですか？」

「あつたんですよ。この前の道、その、蜂万町から美山を通ってきて、そのまま一良町まで出ちゃって、市街地を北に抜けると、この前の道につながる道があつて、そっちの方は整備されたきれいな一本道で、そのままここに来られるんですよ？　まあ距離はぐるつと

遠回りになるけど……、美山からの道を辿ってくるお客さんなんてめったにいないなあ……」

オーナーは呆れるのを乗り越し感心してニコニコした。芙蓉はすっかりむっつりしている。

「あの坊や……、そんなことおくびにも出さないでえー。せんせえ」芙蓉はジロツと紅倉を睨んで言った。

「ですつてえー。ナビゲーションはバツチリだったんじゃないかなかったですかあ〜？」

紅倉は怒られたときにお得意のペコちゃんの顔真似をして、

「だって、わたしが見たのは霊波の通り道だもーん。そんな普通の道、知らないもーん」

ととぼけた。オーナーは会話の内容が分からないながら

「災難だったねえ？」

とニコニコし、芙蓉はムツツリして訊いた。

「ご主人は、話を聞いていると、この村の出身ではないんですか？」

「ええ。わたしは……」

オーナーは芙蓉の視線に後ろを振り向いた。嬉しそうな笑顔で、

「ああ、おまえ。マナちゃん。お客様だよ。3日間滞在予定の、芙蓉様と紅倉様だ」

廊下の奥で、キッチンから出てきたのか、エプロン姿のかわいいらしい感じの婦人と、婦人の前に婦人に肩を押さえられ、8歳くらいの女の子が立っていた。

「まあ、よくおいでくださいました」

婦人はとても嬉しそうにニコニコ笑って挨拶し、女の子は人見知りしてはにかみながらちよこんとお辞儀した。

34 村のアウトライン

ペンションのオーナーは、

海老原啓太（えびはらけいた）、30過ぎの、見るからに人は良
さそうだがちよつと抜けた感じのある、若い頃は野球やサッカーと
いうメジャーなスポーツより水球なんかをやっていたような、真面
目なのだが一流になりきれないような、と勝手な想像をさせてしま
うようなまあ好人物と言っていい。

奥さんは

里桜（りお）さん、小柄な可愛らしい人で、明るいところへ近づ
いてくるとそれなりの年齢が目尻に見受けられるが、印象はたいへ
ん良い。ちよつと苦勞人っぽい感じが漂い、抜けた亭主のフオーロ
ーが忍ばれる。

娘さんは

愛美（まなみ）ちゃん、小学2年生。髪を左右二つに結んで子ど
もらしいが、こんな田舎に暮らしているせいか人見知りが激しいよ
うで、お母さんにひつついて後ろに隠れたがるうとする。

奥さんにダメ出しされて主人海老原氏は慌てて、

「ああすみません、どうぞどうぞお上がりください」

と3人分のスリッパを出した。それぞれ自分の物と分かるように
色と柄が別々で、この心配りは良し。

2階3室が客室で、1階に食堂、居間、男性用女性用の風呂が1
つずつあり、オーナー家族の居室があった。

2階の3室とも斜面の方を向き、村を見渡せ、雨上がりにキラキ
ラ日を反射させて、窓から景色として味わうとなるほど箱庭のよう
で美しく思える。案内してきたオーナーに

「いいところでしょう?」

と重ねて言われ、芙蓉も素直に

「そうですね」

と答えてやった。

「この村、もみじの形をしているんですよ。大字村って言うのも『大』の字の形っていうところから来てるんじゃないですかねえ？」

「あ、そういうことなの」

芙蓉はドライブしてきた斜面の大きなギザギザを思い返し、ああなるほどそうだったわねと納得した。

「おおあざって、集落を表す単位でしょう？ ド田舎の村って意味だとばかり思っていたわ」

「まあそれも言えてますけどね」

オーナーはお客の口の悪さに苦笑しながらもそんな田舎の風景を愛しそうに眺めて言った。

「わたしねえ、こう見えて以前は都会の商社でバリバリに働く企業戦士でした、その当時は組織の中で上を目指すことしか考えてなくて、家庭の事なんて二の次三の次……まったく省みることもしませんでした……。娘……、愛美が学校でちょっと問題に巻き込まれました……。妻には前から言われていたんですけれど、問題が深刻化するまでまるで考えようとしなくて、妻に泣かれてようやく事の重大さに気づいたときにはどうにも手遅れになっていました……。それでこれまでの生き方を反省しまして、娘のためにこの田舎に引越してきたんです」

「そうだったんですか」

芙蓉はお母さんの後ろに隠れたがろうとする愛美の姿を思い出して胸を痛めた。

「愛美ちゃん、こちらで学校は？」

「ああ」

オーナーは笑顔になって答えた。

「今日明日はそのお祭りです。小学校はお休みなんです。中学校からは一良町に出なくちゃなりませんけど小学校は村に小さな木造の学校があるんですよ。生徒はたったの5人しかいませんが、みんな仲良くしてくれて、先生方もいい人たちで、喜んで通ってますよ」

「そうですか。それはなにより」

芙蓉は朗らかに微笑みながら心の中では『大字村』手のぬくもり会というわけではなさそうね』と考えていた。

「ご主人はどうしてここにペンションを？　こちらの出身なんですか？」

「いえ。わたしは東北の出で妻は東京の人間です。

……まったく知らない土地に来たかつたんでしょねえ……。あの頃は、家族は最悪の状態でしたから……。まるで一家心中する場所を求めてドライブしてるみたいにめちゃくちゃに山の中に入っ
ていましてね……」

オーナーは恥ずかしそうに頬を掻きながら笑った。

「実のところ皆さんの通った道に迷い込んでしまって、で、出たのがこの谷間の村だったわけです。ちょうど紅葉の真っ盛りの時でしたね、本当に、我々にはこの世でないような、天国か、でなければテレビのミステリードラマにあるような平和な昔の理想郷にタイムスリップしたような、奇跡に感じられましたよ。

……ここで、ちゃんと家族三人揃って生きていきたいなと、そう
思っていますね」

オーナーはそのドラマに出演している俳優のようにノスタルジックに微笑んだ。芙蓉はせつかくの感傷に水を差すように訊いた。

「でもちゃんと商売になっっているんですか？　とてもお客が多そうには思えないけれど」

「いや参りましたねえ」

オーナーは今度はアフロの崩れた頭を掻いて笑った。

「確かに多くはないです、はい。でもまあ、こうしてたまに迷っていらっしやるお客さんもいますし」

芙蓉に睨まれておどけた顔をした。

「ちゃんと予約して来てくださるお客さんもまあいらっしやるんですよ？　隠れた紅葉の穴場として知る人ぞ知るって所です」

芙蓉はいつたい何度紅葉と聞いただろうかと思った。結局のこ

るそれしか売りはないようだ。

「桜だつてあるんですよ？ ソメイヨシノじゃなく山桜ですが。これも綺麗なものですよ？ 夏は涼しく……冬は雪に埋もれて出入りできなくなつちやいますけどね……。今が最後の書き入れ時で。そうですね、娘が中学に上がったら、冬の間だけでも出稼ぎに出なくちやならないかもしれませぬえ……」

やはり経済的にはたいへんそうだが、家族の生活は満たされているようだ。

「そもそも村はどうなんです？ 村の人たちはどうやって生計を立てているんでしょう？」

「そうですねえ……」

オーナーもうーん……と上を向いて考えた。

「やっぱり農業と林業でしょう……ねえ？ 村に一つ家具の工場がありますよ。でもまあ見ての通り決して豊かではないですね。やっぱり外に働きに出ている人が多いんじゃないですかねえ？……」

「外へはやっぱりこの前の道を通るの？」

「ええ。あともう一本、このちょうど反対の道がありますが、そっちは山の中をずうつと通つていきますからね、やっぱり外との出入りはこの道ですね。山の中ですからね、大きな4WDがちよくちよく出入りしてますよ」

「ふうーん……」

芙蓉はそれが「手のぬくもり会」の構成員たちだろうと思った。

オーナーは、

「だからねえ、こんなにいい所なんだから、観光開発に力を入れて外からお客さんをじゃんじゃん呼んだらいいんですよ。『癒しの里』ってね。今都会人はみんな疲れて、こうしてほっと出来る安らぎの場所に餓えているんですから。ねえ？」

と芙蓉に同意を求めた。芙蓉はそれには曖昧にうなずいて、改めて外の景色を眺めた。確かに、「人を呪い殺す村」という偏見を持たずに見れば、綺麗な山里のたたずまいだが、結局のところ人は皆

忙しいアミューズメントパークの方がお好みで、静かにゆったりと時の流れを楽しむという時間の使い方は苦手だろう。時間がもったいない！と観光地を梯子して歩くのが現代人の観光の仕方だ。この村に多くのお金を落としていってくれるのは難しいのではないだろうか？ 下手に観光開発などすればこの箱庭の美しさもまさに人工の安っぽいテーマパークに墮してしまうのではないだろうか？ 今こうした小さな村はどこでも過疎化に悩み、こんな不便な所であればなおさら廃村の瀬戸際にあると言っても過言ではないのではないだろうか？

「村はやっぱりお年寄りが多いんですか？」

「いや」

オナーもはたと不思議そうに言った。

「そうでもないんですよ。まあ確かにお年寄りが多いですが、若い人たちもけっこういるんですよ？ ですからねえー、なおさらねえー……」

と、腕を組んで考え込んでしまった。芙蓉はそれはケイやミズキのような若い構成員に違いないと思った。外に出て活動するばかりでなく村の中にも相当数存在し、今、きっと、自分たちの動向をじつと見守っているに違いない。

「村に青年会のようなものはないんですか？」

「ああいや……」

オナーはまたも困って途方に暮れた顔をした。

「あるようなんですけれどね、わたしはその……よそ者と言うことで仲間に入れてくれないんですよ」

「あら、それはひどいわねえ？」

「残念ですよねえ。排他的なのがこの村の悪いところで。何しろ平家の末裔ですからねえー」

平家の落ち人かどうかはともかく、かなり古くからここにある集団なのだろうと芙蓉は感じた。ここは新しい新興宗教なんかではなく、伝統的な、確固たる実力を持った呪術集団の村なのだ。

「この土地は？ どこから購入したんです？」

「ここは……」

答えようとして、オーナーはふと口をつぐんで芙蓉をまじまじと見た。

「お客様、ずいぶん色々訊きますね？ ここへ、何かの調査で来たんですか？」

「ミシユランガイド」

ドキッとしてパツと顔の紅潮したオーナーに、

「冗談よ。ま、ちよつと訳ありだね」

悪いことをしたなあとちよつと反省した。

村の大まかな概容は分かってきた。

芙蓉はここで安藤のことを訊くかどうか迷った。平中はガラス戸を開けた窓枠に手を掛けて外の景色を眺めながらじつと聞き耳を立て、紅倉は部屋の中をうろろさまよっている。

平中が、

「芙蓉さん」

と顔を向けて外を指さした。

「ああ、あちら」

オーナーが笑顔で言い、手を振った。窓に寄った芙蓉と平中も軽く会釈した。

「うちにお泊まりの広岡さんご夫妻です」

山靴を履いた英国紳士風の50年輩の男性とその奥さんがにこやかに手を振り返しながら坂道を上ってきた。

35 村のよそ者たち

「ほう、我々夫婦の他にもお客さんがありましたか？　しかも若いお嬢さん方とは嬉しいですねあ」

灰色のハットを脱いでニコニコ挨拶する広岡氏はチャーミングに笑いながら怒ったふりをする奥さんに後ろからつつかれて大げさに肩をすくめて笑った。白と灰色の頭髪はふさふさして、しわの深い細面をしているが肌の血色は良く、実年齢より若く見えるのではないかと思われる。

「まったくいい年して、男って言うのは死ぬまで浮気性が失せないもののね」

ジロツと睨む奥さんに広岡氏はおいおいと慌てた。

「よしとくれよ、俺がまるで本当に浮気性の女たらしに思われてしまっじゃないか？」

「あら違うんですか？」

奥さんは平然と言ってつんとすました顔をしている。と、困った顔の旦那にぶつと吹きだして笑った。

「はいはい、そうですね、あなたは若い頃から女の尻を追いかけるより山歩きと写真が好きな枯れた朴念仁でした。年を取って少しは色呆けしてききましたか？」

「まったく、これですよ」

広岡氏は処置なしと言った風に両手を開いて見せたが、そうした外国の映画スターのような仕草が似合うなかなかの渋い二枚目だった。若い頃にはそれこそアランドロンのようなイケメンだったかもしれない。

奥さんの方も旦那より十くらい若そうな、スポーティーなキャップからパーマのかかった髪を広げ、丸顔にまつげの長い大きな目をした、ミュージカルスターのように派手な明るい感じの人だった。

「まあまあ挨拶はそれくらいで。立ち話もなんですから、どうぞ中

「へ」とオーナー海老原氏が声を掛けたのは、広岡夫妻は坂を上がってきた道に立ち止まり、そのまま窓を見上げて話し込んでしまっているのだった。

室内を振り返ったオーナーは芙蓉たちにも、

「皆さんも下に下りてきませんか？ ダイニングでお茶をお出ししますよ」

と言うので芙蓉は平中と顔を見合わせてうなずいた。

「先生、下に行きますよ」

子どもみたいにお尻でベッドでぼんぼん跳ねていた紅倉は芙蓉に声を掛けられてボヨンと前に跳ね上がって「うわあ」と危うくつんのめってすっ転びそうになった。

「何遊んでるんですか。いらっしやい」

と、芙蓉に手を取られて下へ連行された。

ダイニングで改めて夫妻と挨拶を交わした。

「広岡と申します。こちら妻の奈央です」

「こんにちは。芙蓉です。こちら紅倉……さんと、平中さんです」

紅倉はちょこんと頭を下げ、平中は「こんにちは」と如才なく笑顔で挨拶した。

奥さんはマスカラが濃いめの大きな目を丸くして、どうやら紅倉先生と芙蓉を知っているようだ。デスク型のテーブルに向かって椅子に座ると、さっそく好奇心に輝く顔で訊いてきた。

「あら、紅倉美姫さんと芙蓉美貴さんですよねえ？ あらまあ！感

激！ あの、握手していただいてよろしい？」

断るわけにもいかなかったので芙蓉は手を出し、夫人は立ち上がって身を乗り出し両手でしっかりと芙蓉の手を握り、

「まあ紅倉先生！」

と感激した面もちでしっかりと紅倉の手を包み込んで振った。

「あらあらまああどうしましょー！」

と嬉しそうな妻を見て旦那の広岡氏は申し訳ないような愛想笑いで芙蓉に訊いた。

「あの済みませんが、テレビの女優さんでしたかねえ？ わたしあんまり若い人を見るような番組には不案内で」

「あなた、違うわよお」

と奥さんは旦那を肘でつついて紅倉に大きな愛想笑いを向けた。

「こちら有名な霊能力者の紅倉美姫先生とお弟子さんの芙蓉美貴さんよお。ほらあ、以前よくテレビで霊視をして行方不明者を見つけたり、殺人犯を逮捕させたりしていたじゃない？」

「あつ、ああああ、そうでした。そうですね、あの紅倉美姫先生と芙蓉美貴さんでしたか。いやこれはお見それしました。これはこれは光栄です」

妻のおつき合いでいっしょに番組を見ていたであろう広岡氏も思いついてニコニコして、敬意を表して今一度深くお辞儀した。奥さんが前のめりに二人に訊いた。

「先生、こちらにはどうして？ また何か事件の調査ですか？ 紅

倉美姫現れるところに事件あり！ ねっ？ どうなんです？」

「いえいえ」

紅倉はすまして答えた。

「わたしはもう引退して、今は地方でひっそりまっとうな小市民の生活をしています」

「芙蓉さんも一緒に？」

「はい。わたしは生涯先生のパートナーですから」

「そうですね。そういえば最近すっかりテレビでお見かけしないと思ったら、あら残念ねえ、そうですね……。いえね、世の中へんてこな嫌な事件が多いでしょう？ 先生みたいな方にはまだまだ大いに活躍していただきたいところなんですのになえー……」

「わたしなんかいてもいなくても、結果は同じですから」

すっかり悟りきったように言う紅倉に奥さんは残念そうな顔をしたが、芙蓉の見えるところ奥さんに何かしら深刻な思いがあるわけで

はなく、ワイドショーのネタが一つ減ってしまった程度の野次馬的興味だろう。

オーナーと奥さんがコーヒー、紅茶、緑茶を運んできた。

「広岡さんのご主人と平中さんがコーヒー、奥さんが紅茶、紅倉さんと芙蓉さんが緑茶でよろしかったですか？」

オーナーと奥さんはそれぞれに配り終わるとお盆を手に抱え、話の仲間に入りたいような素振りを見せた。

紅倉がおもむろに言った。

「実は、事件かどうか分からないんですけど、わたしたち人を捜してここ大字村に来たんです。」

こちらに安藤さんという男性が泊まりませんでした？」

紅倉に見上げられてオーナーは、

「安藤さん。はい。泊まっていかれましたよ」

と答えた。芙蓉平中も是非聞きたいという顔を向けたのでオーナーは予備の椅子を引つ張ってきて奥さんと並んで座り、話した。

「安藤、哲郎さん、でしょうか？」

「そうです」

「よく覚えていますよ……と申しますか広岡さんにご予約いただくまで最後のお客さんでしたから……」

オーナーは情けなく笑い、続けた。

「2週間前ですね。2日間お泊まりになりました」

平中が訊いた。

「2日間、安藤は何をしていました？」

「何と言って……、休暇ということと村をのんびり散策されていたようですよ？ 紅葉の最後の見頃の頃でしたから……、カメラを持ってましたから写真を撮っていたんでしょう。旅行雑誌の記者さんなんですよ？」

「ええ、そうです」

と紅倉が受け取って、訊いた。

「具体的に村のどこへ行っていたか分かりますか？」

「いやあー……」

「オーナーは分からないように首をひねり、代わりに奥さんが村長さんに訊けば分かるでしょう?」

「と言い、オーナーは、ああそうか、とうなずいた。」

「そうですね、村長さんの所です。実はですね、安藤さんには3日間滞在の予定で、宿泊費前払いでいただいていたんですよ。でも3日目は村長さんの所にご厄介になると言うんで村の若い人が荷物を受け取りに来たんですよ。それで1日分の宿泊費、キャンセル料をいただいて残りをお返ししなくちゃと思ったんですが、それは申し訳ないからいいということ、そのままいただいちゃったんですよ」

平中はハツとして、暗い疑惑に惑う顔を芙蓉にうなずかれて小さくしつかりうなずき返した。紅倉が訊く。

「安藤さんとはその後お会いしました?」

「ええ。夕方、デザートにマロンパイを焼いたんで、せめて余分な宿泊費のお返しに届けに」

「安藤さんに直接会いました?」

「ええ。突然悪いねえと謝られましたが、こっちはお金をいただいちゃっているんで」

「何か他に話しました?」

「村長さんにこの村の歴史を聞くんだったと言っていました。明日帰る予定だけれど、その前に顔を出すよと言ってらしたんですけどねえ……」

「翌日は来なかった?」

「いや、ちょうどタイミングが悪かったみたいで。わたしは町に買い出しに出かけて、妻がいたんですが、愛美が具合が悪くなったと学校から連絡があつて迎えに行っている間に来たらしくて、帰ってきたら駐車場の安藤さんの車がなくなっていて。後で村長さんに訊いたらやっぱり昼前に帰ったそうですね、タイミングが悪かったですねえ」

「愛美ちゃんは今どちら?」

「下で大人しく宿題をやってますよ」

「ふん……。愛美ちゃんの具合はどうだったんです?」

「幸い軽い貧血で、どうと言うことはなかったですけど、一応連れ帰ってきました。たまにあるんですよ。成長と共に徐々に治っていくと思うんですが」

「ふん……。村にお医者さんは?」

「一軒、直木医院っていう小さな診療所があります。大した設備じゃないですから大きな病気や怪我をしたら町まで出なくちゃならないですけどねえ」

「ふん……。そうですか……。じゃあやっぱり怪しいのは村長さんのようね」

36 村の秘密

「村長が怪しいというのは、どういうことでしょうか？」

広岡氏が聞きとがめるようにいささか眉をひそめて言った。

「その…、安藤さんという人が行方不明になっているのが村長の仕業だと疑っているんですか？」

広岡氏は状況的に安藤なる人物の身内らしい平中に少し遠慮しつつ村長を援護するように訊いた。

紅倉ははて？と首をかしげて広岡氏に訊いた。

「あなたは、村長さんとお知り合いなの？」

「そうなの？と紅倉のシンパの奥さんも旦那の横顔を見て、広岡氏は「ええ」

とうなずいた。ペンションオーナー海老原氏を見て。

「わたしは前から何度もこの村には来ていますから、その度に村長さんにはお世話になっています。今さつきも妻と一緒に挨拶に伺おうかと思っただんですが、どうやら来客中だったらしく止してきました。ご主人、こちらを始めたのはまだ昨年のことでしょうか？」

海老原氏はうなずいて答えた。

「はい。去年の秋から始めましたんで、ようやく1年経ったところですよ」

海老原氏は思い出して上での芙蓉の質問に答えた。

「この土地は村有地を格安で売ってもらったんですよ。建物を建てるのも地元の方にずいぶん手伝ってもらいましたね。わたしたち親子も2ヶ月ほど村長さんのお宅に居候させてもらいまして、村長さんにはずいぶんお世話になりました。お孫さんの百子ちゃんにも愛美のお姉ちゃんみたいに仲良くしていただいています」

「なあ？と訊かれて奥さんもうなずいた。広岡氏は笑顔で確認して、紅倉と芙蓉、平中に言った。

「人格者ですよ。確かに外の人間に対して警戒心が強いですが、一

度認めてもらえればうち解けてあれこれ世話してくれます。わたしがこのペンションを予約したのも村長さんから紹介の葉書をもらいましたね」

「あ、そうだったんですか？」

と海老原氏は顔をほころばせた。

「ええ。……………そうですね……………」

この村のことをお話ししましょうか。

この村が平家の落ち人の隠里だという噂があるみたいですが……………」

広岡氏は海老原氏を見て苦笑した。きつと到着した広岡氏を自分よりずっと村のことに詳しいお馴染みさんとは知らずに落ち人伝説を得意になって吹聴したのだろう。

「確かに平家派の人間たちが先祖のようです。ただ、落ち人というのは当たらない、源平合戦よりずっと古くからあった秘密の集落であつたようです。これは村長も誰も真実を知らない、決して形……………つまり文字などの記録に残してはならないときつく戒められた上での口語りの伝承だそうです。天皇の隠し子を当時の血で血を洗う権力闘争から守って隠し育てるために開かれた村だそうです。本当のところは、ですから、知りようもないんですが、設立当時には重要な意味のあつた村だったのでしよう。しかし時…時勢の移ろいによってその意味はもう失われ、それでもおそらく村の人間は実直に村の在る意味、自分たちの生きる意味を守っていたのでしようね。それすら、はるか1000年以上前の話です。今も村人の中に天皇の血を有する者がいるのかどうか、記録も何もないわけですから、まったく分からないんですが、先祖のイデオロギーというものが今も確かに村の人たちの中に流れているんでしょうなあ」

「こりゃあ驚きましたねえー」

海老原氏が感心してのけぞるように言った。

「おそれ多くも天皇様のご子孫様であらせられましたかあ！　ううむ、なるほど、そりゃあ外の人間に対して警戒するのも当然でしょうねえ〜」

うんうん！と、海老原氏はすっかり納得して感じ入ってしまった。単純な海老原氏に温かい微笑を向けて、広岡氏は芙蓉たちを説得するように言った。

「それが事実であつたとしても、まさか、それこそおそれ多くも天皇陛下の遺伝子を調べて子孫を特定するなんて不遜なことをするわけにもいきませんし、もう何十代と代を重ねているわけですから、今更天皇の血がどうのと、意味もないでしょう。…おっと、これも不遜な発言でしたな。聞かなかつたことにしてください」

苦笑いする知的な広岡氏に、紅倉はニヤツと得意の意地悪な笑いを浮かべて言った。

「源平以前に分離した天皇の血筋なら、確かに、意味ないでしょうねえ。南北時代を挟んでますからねえ」

広岡氏は一瞬ひやつとした顔をして、紅倉を油断ならない相手と見つめて言った。

「あなたそれは、見方の問題で、血筋の問題とは別ですよ」
「なんです？と分からない顔をする芙蓉に、広岡氏は紅倉の「間違い」を指摘する意味でも説明した。

「紅倉さんの言っているのは南北朝時代の後醍醐天皇と足利尊氏の争いのことでしょうか？ 中学校の日本史の授業で習ったんじゃないですか？」

芙蓉は思い出そうとして苦い思いをした。

「実は日本史は割と最近勉強し直したんですが……、その時代の政権はなんだかごちゃごちゃしていて誰が誰やらさっぱり分からなかつたような気がします」

広岡氏は

「そうですね」

と笑い。

「正当の天皇である後醍醐天皇に対し、武士団の頭領であつた足利尊氏が反乱を起こし、後醍醐天皇を京都から追い出し、傀儡の天皇を擁して新朝廷を興した、と、まあ大まかに言えばそういうことで、

結果的に足利將軍の室町幕府が興って足利尊氏の北朝が勝利したと見ていいと思いますが、誰が誰やら分からないとおっしゃられたように南北朝の勢力争いで内情入り乱れて、まさに誰が誰か分からない状態が続き、実際のところ誰が勝利者なのか難しいところですよ。明治期の歴史研究では天皇に弓を引くとはけしからんと南朝こそが正当であるとし、南北朝時代という名称に関しても正当南朝の置かれた吉野の地を取って吉野朝時代とすべしとのお達しが下されましたが、まあ、戦後は南北朝時代で通ってますね？

それで先ほどの不遜な発言ですが。

足利尊氏が擁した光明天皇ですが、何もどこの誰とも知れない人物を持ってきたわけではなく、そもそも大覚寺統と持明院統に皇室が分裂した権力争いが背景にあったわけで、相手方が認めないだけでどちらも血筋の上ではまぎれもない天皇の血筋にあるわけです。要するにずいぶんと大げさな兄弟喧嘩ですな」

お分かりかな？と若い紅倉をたしなめるように柔らかな微笑を向ける広岡氏に紅倉は肩をすくめて舌を出した。

「あらま。浅はかな素人の知ったかぶりがとんだ大恥でした」

分かればけっこうと広岡氏は大人の態度でコーヒーを口にしながら、紅倉は

「じゃあ……、なんで今の皇室は『直系の』血筋にこだわっているんでしょうねえー？」

と言つて、広岡氏は危うくコーヒーを吹き出しそうになった。

「いや、あなたは……」

広岡氏はハンカチで口元を押さえてとがめるような目で紅倉を見やり、紅倉はニヤニヤ笑いながら手を上げ、

「はい。危ない話題はよろしうね。特に女は」

と、すまして緑茶をすすった。芙蓉は、広岡氏はきつと先生を食えない女だと苦々しく思っていることだろうと思いつつ、こちらもすまして緑茶をすすった。

要するに紅倉ははるか彼方の血筋云々を未だに引きずっている（

本当のところは分からないが、村のアイデンティティーを揶揄した
かったのだろう。

芙蓉にはこの逸話が現在の村のあり方にどう関わっているのか分
からなかったが。

37 村の中央

紅倉と芙蓉は坂道を下りて村の中心向かって歩いていった。平中は広岡夫妻やオーナー夫妻から村と安藤に関する情報を聞き出すように言ってペンションに残してきた。

広岡氏に聞いたことで、大字村はその名の通り「大」の字の形をしているが、村の中心からそれぞれの頂点に向かって道が延び、村の外へと続いているのだそうだ。けれどまともに外に通じているのは頭の部分と向かって右の脚：つまりペンションの前の道の2本で、後は芙蓉たちが来た左脚の道がかるうじて通れ、両手の道は完全な山道で車は通れない。頭の道はずうつと山間を通って行って、日本海側へ向かうそうだ。ここまでやってきた国道156号線、併走する東海北陸自動車道の更に奥を地形に合わせて蛇行しながら走っていくようだ。

村を走る5本のメインストリート、なのだろうが、車1台半くらいの道幅しかない。両脇をとくに刈り取りの終わって切り株が白くなった田圃と、冬の菜物が青々茂った畑が続き、所々にぽつぽつ昭和前期ではないかと思われる古い家が建っている。いかにも古いが、しっかり人が生活していてゴーストタウンのような不気味な静けさはない。道の片側を水路が通っていて、村の特徴である水車が回っている。水車には小さな作業小屋が付属して、水車が回る軸の回転とバシャバシャ水を掻く音と板から水が滴り落ちる音と共に、小屋の中から何か大きな物がグルグル回っている音がする。水車は山から流れる水が豊富で回転が速い。

村の中心に近づいていくと赤い鳥居の向こうに村人たちの姿が見えてきた。年神様をお迎えする準備のお祭りということだったが、トンカンと板に釘を打つ音が響き、広場にちよつとした小屋を建てているところで、脇にはいっぴいわらの束が積まれていた。老若男女の村人たちはその作業にいそしみ、周りで見守り、近づいてくる

よそ者を見つけて警戒した顔を向けた。歩きながら、芙蓉は紅倉に訊いた。

「先生。この村の人たちや、ペンシヨンの家族や広岡夫妻はこの土地の靈氣に晒されて平気なんでしょうか？」

ペンシヨンの海老原ファミリーは一年以上ここに住み、広岡夫妻は、奥さんは今回初めて同行したそうだが旦那は何度も訪れているそうだ。両者に芙蓉が車を降りた直後に襲われた変調の様子は見受けられなかった。弟子の問いに紅倉は答えた。

「靈的に鈍感な人は平気なんでしょうね。わたしたちは靈的に『敵』という意識でここに踏み込んで、この靈波と対決する形で対面したから、美貴ちゃんも負けて気分が悪くなったのよ。そういう意識のない人は、靈的に鋭い人は何か変わっていると感じるだろうけれど、おそらく、その正体を知ることなく、かえって神秘的に良い方に解釈してしまうかも知れないわね」

芙蓉は「負けた」と言われて面白くないが、紅倉はからかうことをしないで説明した。

「ここは彼らの結界の中なのよ。心構えなしに踏み込んでしまったら、あつという間に靈体を染め上げられて感覚を彼らの都合のいいように操られてしまうでしょう。村の共同体意識に感化される、つてことかしらね」

芙蓉はじつとこちらを緊張した面もちで見つめる村人たちを見ながら、外の人間だからと言って広岡氏に心を許すのは危険だと考えた。海老原一家にも気を付けなければならない。食事に毒でも盛られたらたいへんだ。

ざっと見たところ集まっている村人たちは30人ほど、老若男女と思っただけどやはり高齢の者が多い。小屋を建てる作業をしている5人は30代40代の働き盛りだが、周りは60以上のおじいさんおばあさんが大半で、他に学校が休みの小学生が3人見える。テインエイジャーの若者はいない。

「こんにちは」

紅倉がにこやかに挨拶すると、野良仕事の作業着を着た村人たちは固い警戒した顔をうなずかせて挨拶を返したが、その中から慌てたように灰色の事務服を着た50代の男性が出てきて、硬い皮膚にしわを刻み込んだ四角い顔を笑わせて挨拶した。

「こんにちは。ペンションのお客さんですか？」

「ええ」

と芙蓉は答えて後ろを振り返った。なるほどペンションの緑色の建物が丸見えで、駐車場に置かれた愛車のシルバーパールのルーフも覗いて見える。外部からの侵入者のチェックはバツチリと言うことか。

「観光でいらつしやったんですか？」

「ええ、まあ」

「ペンションにお泊まりで？」

「ええ」

「それはよかった」

村人代表の男性は嬉しそうに口を大きく笑わせ、黒ずんだ顔を紅潮させた。目が小さくおどおどした印象だが誠実で人が良さそう……に見える。

「実は、これこの通り、明日祭があるんです。昼のお祭と夜のお祭があつて、夜のお祭は秘祭ということでお見せできないんですが、昼のお祭は振る舞いもたくさん出ますから是非遊びにいらしてください。」

あ、わたくし、こういう者で」

男性は、こんなへんぴな村にめったに客などありそうもないのに、準備よく胸ポケットから名刺入れを取り出し、名刺を1枚芙蓉によこした。

「大字村 助役

賢木 又一郎（さかき またいちろう）」

とあり、村役場の電話番号があつた。そういえばちゃんと電信柱が道々に立って電気が引かれている。ちゃんと外界とつながった文

化的な生活を送っているようだ。賢木助役は赤黒い顔でニコニコ笑って

「村のことでお困りのことがありましたらなんなりとご相談ください」

と言った。

「ありがとうございます」

「あの、これから村長にお会いいただけませんか？」

「村長さんに？」

「ええ。ご案内いたしますんで、是非」

芙蓉が警戒する素振りを見せると人の良い助役がいささか困った顔をして言った。

「いやあ…、せっかく来ていらした外の方にこう要求しては不興を買われるでしょうが、実は昔からの村の決まり事でした。」

村に来た者は庄屋に面通りして許しを得ねば村にとどまることまかりならん。庄屋が許しを与えない者を世話する者は村の裁きを受けねばならぬ。

と、まあ、昔からの決まり事でした。いえ、現在そんな厳しい取り締まりのようなものはないんですが、ま、これも古くからの伝統でして、形だけ、村長にご挨拶いただけませんか？」

助役はニコニコ腰を低くお願いするが、その物言いと周りの村人の雰囲気から要求を受け入れなければ収まりがつかないようだ。

「先生。村長さんにご挨拶してくださいって」

「いいわよ。郷に入りては郷に従え。これも旅の楽しみよね？」

と、旅行なんて大嫌いの紅倉がしゃあしゃあと言い、芙蓉は

「では、案内、よろしくお願いします」

と助役に頼んだ。助役はほっとした顔をして、ニコニコ、

「それではこちらへどうぞ。すぐそこです」

と手で先を示して歩き出した。後に付いて歩き出した紅倉は

「レッドカーペットを歩くみたいねえ」

ととんちんかんなことを言い、芙蓉はいつもの敵ついボディーガ

ードのつもりで斜め後ろについて歩いたが、ふと、ポカンと口を開けて田舎丸出しの汚れた顔で見つめている男の子と女の子に気づいて軽く微笑んでやった。小学校1年生と3年生くらいの男の子と女の子は都会の綺麗なお姉さんに微笑まれて、「ニカッ」と嬉しそうに大口開けて笑った。

助役は広場を通って二人を案内し、やがて止まっていたトンテンカンと釘を打つ音が再開し、村人の注目が小屋の作業に戻った。横切りながら芙蓉は積まれたわらに、わらを束ねて作った実物大の人形が二体寝かされているのを見て内心ギョツとした。

自分たちが到着するのにタイミング良く行われるお祭は、本当に年神を迎える準備のための祭なのだろうか？

確かに村長の家はすぐそこで、広場に面した小さなお城のような家がそうだった。

ここは豪雪地らしく土台の高く作られた家が多いが、村長の家は土台が石積みで２メートルもあり、寺の山門みたいな玄関は四方の柱が図太く、屋根も厚い黒瓦の山屋根で、いかにも堅牢だ。その後ろに２階建ての母家があり、裏手で横に伸びた渡り廊下で離れにつながっているのもお寺っぽい。人徳者で面倒見がいいと評される村長だから、いざというときの避難場所にもなっているように思われる。

階段を上がって玄関の引き戸をガラガラ開け、

「村長ー。お客さんですよー」

助役が奥へ大声で呼びかけた。

しばらくして袴姿の老人が達筆すぎて芙蓉にはまったく読めない書のついたての前に立ったが、それはまるで金田一耕助の映画のワンシーンをみるようだった。

「ほい、お客さんとな」

80になろうかという老人は、小柄だがまだしゃんと背筋が伸びて肩が張っていた。さすがに頬の肉が落ちていささか締まりがなくなっているが肉厚の顔で、ギョロツとした大きな目玉に割れた筆で引いたような図太い眉毛をして、白髪の達磨大師みたいな風貌だ。表の表札には「樹木」とあった。

「村長。こちらペンションにお泊まりだそうですねですからご案内いたしましたえ。歓待してくださいませよ」

助役に明るい声で言われて村長は、

「うん」

と鼻ひげの下で口を結んでうなるように言い、大きな目玉でじいっと芙蓉と、紅倉を見て、

「うん。ではお上がりなさい。茶でもお出ししよう」

と、気が早くさつさと廊下の奥に入っただけで、助役が、

「それでは千枝子さん呼びましようかいな？」

と声を掛けると、村長はうるさそうに手を振って、

「ええよ。おまえさんもええから、祭の監督してなされや。お客さんの接待くらい、このジジイの仕事じゃ」

と、

「さあさ、お上がんなさい」

と芙蓉紅倉を手招いた。

「それではお邪魔します」

紅倉は上がりがまちに気づかず危うくつまずいてすっ転びそうになり、芙蓉にさつと腕を抱き留められた。いつものお約束であるが、土間と廊下の段差も高い。達磨の村長は、

「そそつかしいお人じゃなあ」

と呆れながら左に入っただけで、奥から障子戸の開く音がした。

芙蓉は紅倉のブーツを脱がせてやり、

「勝手に先へ行くんじゃないやありませんよ」

と釘をさして自分も靴を脱いで紅倉の分と揃えて、

「さ、行きましよう」

と紅倉の手を捕まえて左へ向かった。それを見送って

「それじゃよろしくおねがいします」

と助役は戸を閉めて出ていった。

角を曲がって窓から広場を見下ろし、少し行って右に曲がって、障子2枚分の部屋を過ぎ、隣の部屋の障子が開いたままになっていて、

「お邪魔します」

と覗いた。こちらは障子4枚分、畳8枚の和室だ。白黒の山水画の掛け軸の床の間を背に村長が座り、

「どうぞ、お座んなさい」

とテーブルの向かいを指した。芙蓉は紅倉を連れて入りなが

ら、

「正座はご勘弁願えますか？ 先生は正座をすると立てなくなっちゃいますので」

と言った。達磨村長は

「ほんに最近の若い者は」

と呆れたが、

「ええよ。こんなジジイ前にかしこまることもありやせんわな」と碎けた口調で許した。

芙蓉は自分もちやつかり脚を崩して座ると天井を見上げた。吹き抜けになつて、屋根の支えの太い梁が剥き出しになつている。2階部分の壁には前後とも障子の窓がある。芙蓉はそこに忍者でも潜んでこちらを窺つているような想像をした。柱の黒く焼けた様子や白い塗り壁の黒ずみ具合から相当古く感じるが、今この家をそっくり新築しようとしたら億を超えるかも知れない。

火鉢に炭が赤く焼け、網に置いた鉄瓶からしゅんしゅんと湯気が上がっている。村長は湯を湯冷ましに入れ、その湯を三つの茶碗に入れ、しばらく茶碗を温めて捨て、改めて湯冷ましに入れて軽く冷ました湯を急須に注ぎ、煎茶を茶碗に順々に入れ、

「ほい、どうぞ」

と、二人に配り、自分の前にも置いた。

「お先に失礼して」

と、一口含み、

「ふん。ま、こんなもんじゃろ」

と茶の出を確認した。

「どうぞ、お飲みんさい」

「いただきます」

芙蓉は一口飲んで、

「あら美味しい。いいお茶使ってますね？」

と肥えた舌で褒め、一方

「先生にはまだ熱いです」

と紅倉から茶碗を取り上げようとした。紅倉は

「飲めるもーん」

と茶碗を両手で囲って、コクンと一口飲んだ。

「ほら」

と威張られて芙蓉はしょうがないなあと思った。二人がお茶を飲むのをじっと見ていた村長は、

「ま、一応訊いてみるがの、……お二人さん、こんなへんぴな村に何しに来なさった？」

と半分くらいあきらめた顔で言った。芙蓉は横目で紅倉の様子を窺い、紅倉はふーふー冷ましながらお茶を飲み、

「お茶菓子は出ないの？」

と訊いた。村長は口をへの字にして笑い、

「この村にしゃれた菓子屋なんぞないわい」

と言い、じいつと眉毛を水平にして紅倉を見つめ、一段低い声で、

「ほんに、何しに来よったんじゃ？」

と訊き直した。今度はじつと睨むような目になっている。

紅倉はぺろりと唇を舐め、

「安藤さんは、どこにいるんです？」

と、村長を睨み返して訊いた。

「ふにゃ〜、ふにゃ〜」「ふにゃ〜、ふにゃ〜」

廊下を巡って赤ん坊の泣く声がした。二重唱だ。

「あら、赤ちゃんがいらっしやるんですね？ お孫さん……じゃなく曾孫さんかしら？」

「ああ、あれは離れを貸しておるんだわ。夜泣きがひどくて旦那がまいっておつての。ここは何でも屋じゃからのう」

「千枝子さんというのは？」

「孫の嫁じゃ。赤ん坊の母親の世話を頼んどる」

「赤ちゃんは双子ちゃん？ たいへんですねえ？」

「そうじゃろなあ」

「まだ生まれただばかりのようですが、安藤さんがこちらにお泊まりになったときはもう？」

微笑ましい赤ちゃんの話から触れられたくない話題に引き戻されて「安藤さんかね……」

村長は頭が痛そうに眉間に深いしわを寄せ、指で揉みほぐすようにし、弱り切ったように紅倉を見た。

「出ていった……と言っても納得はせんじゃろつな」

「当然」

紅倉は逃さないようにまっすぐ村長を見つめ、村長も仏頂面でにらみ返したが、怖い顔の割りに心が優しいような村長はいたたまれないように視線を逸らした。「はあー……」と重いため息をつき。

「安藤さんが見つからない限りこの村を出ていってはくれんかね？」

「はい」

「うん……。困ったのお……」

村長は斜め下から恨めしく睨むようにして。

「では、あんたらも生かして村から出すわけにはいかん」

じいっと睨む村長を紅倉はまっすぐ見下ろし、うっすら微笑した。

「やる覚悟があるなら、受けて立ちますよ?」

村長は助役にやったようにイヤイヤと手を振った。

「はあー、まったく……。とんだ災難じゃ。」

訊くがな、あんたこそ我々とやり合う覚悟があるのかの? ペンシヨンにもう一人、素人の女がおるんじやろう? あれを巻き込んでいいんかい?」

紅倉は目を閉じて肩をすくめた。

「彼女がわたしたちを巻き込んだんです。恋人と同じ地で恋人と同じ目に合うのなら本望でしょう」

「きつつい女子じゃなあ」

村長は呆れて紅倉を眺め、しばし考え、

「恋人と同じ目に合うなら本望、か。本当にそう思えるじやろうかのお……」

と、仁徳者とは別の、暗い、嫌な笑いを浮かべた。

「のう、紅倉さんや」

芙蓉も紅倉もまだ名乗っていないが、今更、と両者とも思っている。

「あんた下の天神様に面白い願掛けをしてきたそうじゃな?」

「はい。神様の面前で公言してきましたよ?」

「公安に殺されたら、日本に祟る祟り神になるそうじゃな?」

「はい」

「あんたが自分の命を守るためになんの罪もない一般人に不幸をまき散らすようなことをするとは思えんがのう?」

「買いかぶりです。わたしは誰より自分の命を惜しいと思っていますよ?」

「わしらに調べさせてもかまわんと言ったそうじゃの?」

「どうぞ。そちらのプロフェッショナルに調べさせてください?」

紅倉はウエルカムと両腕を開いた。村長は胡散臭そうに眺めながら、

「鬼バア。どうじゃ?」

と顔を横に向けて言った。

芙蓉は村長の顔を見ながら、はっと、後ろの、上を見上げた。吹き抜けの2階の壁の障子を開けて灰色の髪のはわだらけの老婆の顔がこちらを見下ろしていた。

芙蓉はゾツとして、直感的に平中と喫茶店で話していたときの、先生の紅茶に映り込んでいたギョロツとした目玉を思い出した。あの目の主だと、くわっと開いた両目を見て確信した。

大きく開いたガラス玉のような目玉で見下ろしていた老婆は、「婆さん、あんまり覗き込んで落ちるなよ？」

と村長に注意されて、ニツと、齒の欠けたピンク色の齒茎を見せて笑った。ガラスの目玉に普通の光が戻った。紅倉も体をひねって見上げ、

「こんにちは」

と挨拶した。

「はいよ。こんにちは」

老婆はしわだらけの顔で能面の翁のように口の端を吊り上げた。

「それで？ わたしの診断はどうです？」

「ああ、ほんに怖い女子だのう」

老婆は村長と同じように言っけてケケケと笑った。

「確かに、天神様と契約を結んでおるわ。こりゃあえらいことじゃ。この女を殺したらこの日本は大混乱に陥るじゃろつて。ケケケケケケケ」

芙蓉は老婆を干からびた蝦蟇ガエルのように気色悪く思った。

「ほらね？」

と紅倉は指を立てて嬉しそうに村長に言った。村長は羽織の袖の中で腕を組んで面白くなさそうに

「今更道真公が日本を祟るようなことに手を貸すとは思えんがのう

…。ま、ええわい」

言い、腕を出して泰然と構えると、紅倉と、芙蓉に、言った。

「じゃあ、神さんの助力を得ているおまえさんらに相談じゃ。おま

えさんら、

村に入つとる公安どもを始末してはくれんかの？」

「駄目ですよ」

と、紅倉はにべもなく断つた。

「わたしは神様とあつちが手を出さないように契約してもらつたんですから、手出しの出来ない向こう側をわたしがやつつけるなんて、そりゃあ神様が怒ります。道徳的に、契約違反です」

「困つたのう」

村長は達磨のようにとぼけた顔でうそぶいた。

「ではわしらがあんたらを始末せねばならん。わしらは公安にあんたらを始末するよう命じられているんでな。わしらを守ってくれている奴らへの忠誠の証を見せると脅されておるんじゃ。残念ながらわしらは痛い弱みを握られておつて、奴らの命令に背くことはできないのじゃ。…悪いのう」

村長は眉を険しくし、眼力で射殺すような鋭い目つきになって紅倉を睨んだ。

紅倉の目が真っ赤に光を放つた。

ガタガタガタガタと障子が揺れ、火鉢からバチンと炎が爆ぜ、ガタガタガタガタと部屋全体が小刻みに揺れだし、芙蓉は中腰になって落下物の危険から先生を守る体勢を取つた。

「なんじゃ地震か？ …おまえさんがやつておるのか？ ……………」

村長は怖い目を上に向けた。翁の婆さんは窓の縁に捕まって泡を食つていた。

「婆さん？」

部屋のガタガタ言う震えはどんどん大きくなっていき、ミシッと年季の入った太い梁から大きな音がした。

「ええい、やめえ！ 村長、その女にこれをやめさせえっ！ …！」

婆さんは大口開けてわめき、村長は、

「紅倉殿。やめてくだされ」

と強張つた顔で頼んだ。紅倉はパチパチ瞬きし、ミシッと音を立

てさせて、スツと揺れは止まった。「おぎゃー、おぎゃー」と赤ん坊の怯えた泣き声がして、「あらしまった」と紅倉は肩をすくめた。村長は、

「恐ろしい人じゃ。こないな力まで持つておったかいな」

と脂汗を浮かべてなじるように紅倉を見た。紅倉はすました顔で「どうつてことありません。わたしを殺したらもつとひどいことをこの村にしてやるぞ!、と、パフォーマンスしただけです」

「なんじゃい、わしらまで祟るのか?」

「はい。わたし、命が惜しいですから」

「勝手な女子じゃなあ」

村長は呆れてうんざりした顔になった。

「じゃあ、なんじゃ? おまえさん、わしらにどうせえと言っんじや?」

「ですから、わたしは安藤さんさえ返してもらえれば、この村には恨みも何もないんです。こんな物騒なところ、さつさと逃げ出します」

いかが?と紅倉は首をかしげた。村長は握った両手をあぐらをかいた腿に当て、ぐうとうなって紅倉を睨み、言った。

「どうなつておつても……、恨まんか?」

紅倉はうなずいた。

「この際です、致し方ないでしょう。平中さんへも、まあ、なんとか理解してもらいましょう」

村長は目を閉じてうなずき、開けると、暗い目つきで言った。

「まあ……、もう充分じゃろうな……、生きておるならじゃが……。相分かりました。」

安藤さんをお返しいたしましょう。ただし、

引き取りは、紅倉殿、あなたが行ってください。わしら村の者の中に迎えに行ける者はありませんのでな」

芙蓉は村長の暗い殺伐とした目つきを見て、とてつもなく嫌な予感がした。

40 道すがら

「悪いがこつちも準備と、皆に相談もせにやらんから、今晚はゆつくり海老原君のところに泊まって、明日の朝にまた来てつかあさい。祭は昼前……10時頃から始める予定じゃから、まあ、それを見学してからでもええですじゃる。そいじゃあ、助役に来るように言付けてから帰っていただけますかな？」

と、要は今日はこれで帰れと追い出され、広場で助役を見つけて村長さんがお呼びですと声を掛け、助役は笑顔で礼を言つて早足で歩いていった。

小屋はすっかり完成していた。

柱が4本立つて、2階に板で床が作られ、わらで屋根が掛けられている。

2階の床に1体のわら人形が脚を投げ出して座り、もう1体は下の地べたに寝かせられていた。

いったい年神様を迎える準備の祭というのがどういうものかわからないが、その光景に芙蓉は何となく地方の土着の変に生々しい物を感じて関わりたくないと思った。

準備を終えた村人は半分くらいに人数が減っていた。芙蓉たちが村長の家に入っている間に助役が言い含めておいたのか、一応フレンドリーな笑顔をして挨拶してきた。しかしながら芙蓉は、たいへん申し訳なくは思うのだが、笑顔を向けられてひどく不気味な思いがした。

皆同じ顔に見えるのだ。

皆同じ骨格の特徴をして、同じ表情、同じ目つきをしている。

笑っているが、強い警戒心が露わで、妙におどおどしている。

男も女も一様に同じだ。

今残っているのは暇な老人たちばかりだが、さっきいた小学生の女の子男の子も兄弟のようにそっくりの顔をしていた。まあ実際姉

弟であつた可能性もあるが。

芙蓉は以前テレビのディレクターから田舎の電車に乗ったら車両の乗客が老若男女全部親戚みたいにそっくり同じ顔をしていたと聞かされたことがあるが、それがまさにこれだったのだろう。

芙蓉は自分が完全によそ者なのだと言つたことをはつきり肌身に感じた。

中に一人だけ若い背の高い男性がいて、にこやかに話しかけてきた。30代で、首にタオルを巻いて、小屋を作っていた若者組の一人だ。彼だけはあか抜けて自然な笑顔をしていたが、骨格はやはり他の年寄りと同じ特徴をしていた。

「さつき地震があつたでしょう？ 大丈夫でしたかね？」

「ええ。お城みたいに頑丈そうな家ですね？ 外もだいぶ揺れたんですか？」

「いや揺れは大したことはなかったですが、ずいぶん浅いところの地震のようでしたね？ 地下でナマズでも暴れましたかなあ？」

男性は明るい顔で笑つて言ったが、面白くない。年寄り連中も固い顔で黙り込んでいる。

村長の家の玄関から、

「コバっちゃん、君も来てくれ」

と助役が呼び、

「おおーい！」

と男性が大きく手を振つて答えた。

「それじゃ、明日のお祭をお楽しみに」

と朗らかに笑つてコバ？と言つ男性は村長の家へ駆けていった。

「じゃ、行きましょう」

と紅倉が歩き出し、

「先生、まだ村を見て回るんですか？」

と芙蓉が声を掛けると

「ううん。もう疲れたから帰る」

と答える。芙蓉は背中からポン！と両肩に手を置き、

「はい、こつちですよ〜」

と紅倉の向きを直してやった。

「んん〜?」

と紅倉は眉間にしわを寄せて目つきを悪くして自分が行くこうとした方向を見た。

「目印」

と指さす鳥居を、

「目印ならこつちにも立ってますよ。道5本それぞれに立ってるんです」

と教えてやった。村の中心に位置する5角形の広場にはそれぞれの角に5方向から道が延びてきていて、それぞれ広場への入り口に同じ赤い鳥居が立っている。

「あつそうなんだ」

と紅倉は面白くなさそうに言ってフンとすましてペンションへの鳥居をくぐった。「失礼」と村人に挨拶して芙蓉は紅倉を追った。紅倉はろくに見えないくせに意地になって目に頼ろうとするところがある。だからこうしてすぐに方向を間違ったり物につまずいたりするのだ。あのケイという女性のように杖を持って歩けば良いのだろうか……、きっとそれは紅倉のプライドが許さないに違いない。

並んで歩きながら芙蓉は紅倉の起こした地震のことを尋ねた。

「先生にもあんな力があるなんて知りませんでした。驚きです」

紅倉が無敵なのは霊に対してであり、直接ああいうSF映画の工スパーのような能力があるとは思わなかった。

「ああ、あれ。ゼーんぜん、わたしの力なんかじゃないわよ。来るときの雷といっしょ。この村にはとてつもない霊的エネルギーが充満しているのよ。それをちよつと刺激してやっただけ。恐るべきはこの霊的場の方よ」

「そうなんですか？ わたしはあまり感じませんけれど？」

「美貴ちゃんは感じなくていいの」

紅倉は上げた手を振って銀の指輪をキラキラさせた。

「美貴ちゃんみたいなの美味しいオーラ剥き出しにしていたら、よってたかって食べられちゃうわよ？」

「うらめしやくというポーズを取る紅倉に芙蓉は嫌々な感じにブルツと震え、

「先生、是非、そういう物からはわたしを守ってくださいね？」とお願ひした。

「もちろん。美貴ちゃんのオーラはわたしだけの物よ」

「ところらも背後霊のような寄生生物の紅倉がしゃあしゃあと言ひ、先生ならお好きだけどうぞ」

とつんとしながら芙蓉はにやけた。

「ねえ、先生」

芙蓉は自分がいかにも田舎の人間に偏見を持っているようで、先生に嫌われるのを心配しながら、正直に自分の村人への感想を述べた。聞いた紅倉は、

「あらそうなの？ ふう〜ん。わたしも同じ人間だと思って視ていたけれど、見た目もそうなんだ？」

「となんてことないように言った。芙蓉は先生に嫌われずに済んでほつとしながら言った。

「やっぱり狭い村の中で、みんな親戚同士になっちゃっているんでしようね？」

「それもあってしょうけれど。……………美貴ちゃん。」

「な、なんです？」

「あなたも人のこと言えないわよ？ 気づいてない？ あなたとわたし、だんだん顔が似てきているわよ？」

「えっ？ そうですか？」

「そうよ。あーあ、初めて会ったときはあんなに凜々しい美少女だったのに、はあ〜あ〜」

いかにもがっかりしたようにため息をつく紅倉に、

「それはいつたい誰のせいですか？」

と怒るのもアホらしく苦笑いしながら睨んだ。紅倉は自分のことは知らんぷりで持論を述べた。

「顔ってというのはね、相手に合わせて作る物なのよ。」

会話をする時の顔って相手の反応に合わせて表情を作るでしょ？
相手が笑えばこちらも嬉しく笑い、相手が怒ればこっちも怒って
そうよねー？と同調し、相手が悲しそうにすれば悲しい顔をして思
いを共有する。表情ってというのは相手の感情を読んで自分にコピー
する物なのよ。

似たもの夫婦って言うでしょ？ 長くいつしよに生活しているう
ちに、同じ物を見て、同じ事をして、同じ思いをして、お互いの表
情を確認して段々擦り寄せていくのよ。

この村では村全体でそういうことを何百年と続けてきて、すつか
り表情が、顔の骨格レベルまで、平均化されちゃったんでしょうね。
もっとも、テレビが普及するまでは日本中で地域ごとの平均化さ
れた『顔』ってというのがあったんじゃない？ 今はテレビが日本人
全体の顔を平均化させているんでしょうけれど、今も地域の顔がは
つきり残っているのは珍しいでしょうねえ」

芙蓉は村のことなんかどうでもよく自分たちのことを訊いた。

「わたしたちってそんなに似てきてます？」

「ええ。気を付けなさいよお？」

「おかしいですねえ？ わたしには先生の方こそどんどん顔がふや
けてきているように見えるんですけれど？」

「ええ〜？ そんなことないもーん！」

フンツ、とそっぽを向く紅倉を、芙蓉は『自分が言ってるくせに』
と可笑しくて、笑った。

4 1 情報と考察

奥さんの腕を振るった牛ステーキがメインのフレンチ料理はなかなか美味しかった。肉全般が苦手な紅倉も珍しく美味しそうに食べ、下の食堂で平中、広岡夫妻といっしょの食事だったがレストランのコース料理のような面倒もなく、アットホームな雰囲気気分で気楽に味わえた。

お風呂は男性用と女性用に分かれている。女性用を広岡夫人に先を譲り、部屋に平中を誘ってこちらでの情報を聞いた。平中には安藤の生きているかも知れないこと（？）は伏せておくことにした。明日、紅倉が迎えに行つて（？）結果を見て話すことにした。

2週間前2日間ここに宿泊した安藤は、旅行雑誌の記者を装つてやはり海老原オーナーに村のことをあれこれ聞いたらしい。しかし元々よそ者のオーナーに話せることは限られていて、芙蓉たちに話した表面的な観光案内程度だったらしい。しかし芙蓉たちが聞かなかったことを聞いていて、

それは広岡氏の方がより詳しく教えてくれたのだが、村の自治組織のことだった。村に主だった役職は三つあって、

村長、助役、青年団長

がそれだが、それはそれぞれ昔で言うところの、

庄屋、年寄、百姓代

に相当するらしい。

庄屋は村の代表で、まさに村長だ。

年寄もお年寄りの意味ではなく、時代劇に出てくる大年寄だの若

年寄だのいう役職で、お城で言えば藩主を補佐する政務の筆頭の重臣、家老に当たり、村では庄屋の補佐役だ。

百姓代はその名の通り百姓の代表だが、これは組合のリーダーという立場で、行政の担い手である庄屋や年寄が誤った行いや立場を利用したインチキなどをしていないか監視する役割も担っていた。

現在の村長、助役、青年団長もそうした昔ながらの関係をそのまま受け継いでいるらしい。現代よりより互いの身分立場がはっきりしている、ということか？

村長は村一番の金持ちである。が、それは村の資産を預かる銀行のような存在でもあり、何か困ったときには村長さんに相談すればなんとかかしてくれる、と、頼れる存在であるらしい。だから村の者は皆普段から村長を尊敬している。

村長がどんと構えた親分さんなら、助役が細々した行政財政の執行官で、一々うるさいことを言つて村人から嫌われる役回りでもある。嫌われ者の助役が間に入ることによって、

村の特に血気盛んな若い衆をまとめる青年団長が、何か不満があるときにはそれを代表して、助役に談判し、村のお殿様である村長と直接事を構えずに済ませることが出来る、

という構造を保っている。

ちなみに、

村長は、樹木 従侍（きき じゅうじ）

助役は、賢木 又一郎（さかき またいちろう）

青年団長は、木場田 貴一（こばた きいち）

と言う。広場を去るとき声を掛けてきた「コバっちゃん」が木場田貴一だ。

ということを教えてくれた広岡氏は、

ご主人はお隣愛知県の自動車メーカーを今年定年退職した、現在

65歳であるそうだ。芙蓉と平中の見たところもつと若く、50半ばくらいにしか見えない。最近の年寄りには元気な人が多いから特別な例ではないかも知れないが。

奥さんはもつと若く、48歳だそうだ。ジャズダンスが趣味で、料理も得意で、自宅でちよつとした料理教室を開いてもいるそうだ。専業主婦で、たつぷり人生を楽しむ生活をしているようだ。これまでは自分の趣味にかまけて旦那の山歩きの趣味なんか放っておいたが、定年退職して時間になった旦那にスケジュールを合わせてもらって今年からこうしてちよつとした旅行に付き合っただけでいるんだそうだ。

さて。

村にやってきて色々人物の整理がたいへんだが、

村に来る前、美山鍾乳洞の駐車場で苅田弓弦から警告の電話を受けた紅倉は「どうもわたしは呼ばれてここに来たような気がするのよね」と言ったが、ようやくその根拠を明かした。現代最強を吹聴される霊能力の勘もさることながら、

より具体的な根拠は安藤哲郎の出した絵葉書の消印だった。

平中にカバンから出してもらって芙蓉といっしょに確かめてもらった。先ほど出発してきたビジネスホテルと同じ住所の郵便局で、平中と「今岐阜に来ていて」と電話で最後に話した3日後の午後3時のスタンプが押されている。海老原オーナーに確認した、宿泊の予定をキャンセルして村長宅に泊まり、翌日村を出たはずの日付だ。「まあね、安藤さんが彼らから逃げてきた途中でその辺りの郵便ポストに投函したって可能性はあるわね。でも午後3時のスタンプじゃ、投函したのは真つ昼間でしょ？ 商店だつて多いし、2週間前なら紅葉もまだ見頃で観光客だつてもつといたでしょう？ 騒ぎを起こして人目を引いて追っ手から身を守ることでもできたでしょう。まさかメジャーな観光地が丸ごと『手のぬくもり会』のメンバーなんてことはないでしょうからね。すると安藤さんは村を確認した上で

危険を察知して、彼らの手出しできない蜂万町まで戻ってわたしにSOSの葉書を送って、また村に戻るか、人知れず襲撃されて村に連れ去られるかしたのかしら？ それもなくはないでしょうけれど、どうもわたしの勘がね、しっくりこないのよね」

芙蓉が訊いた。

「絵葉書からそこら辺の情報は読みとれないんですか？」

「駄目なのよね。わたしに助けを求める気持ちは感じるんだけど、今すぐ命に関わる危険な状況に陥っている切迫感はないのよね」

困惑した様子で眉を曇らせた平中が訊いた。

「安藤が今現在村にいるのは確かかなんでしょうか？」

紅倉はうなずき、村長からの申し出はないしよに、申し訳ないように念押しした。

「それは確か。でも、現在の安藤さんの安否は分かりません。

はつきりしないんだけど、葉書を書いたのは安藤さんに間違いなくて、その時点で危険を感じていたのも間違いのないと思うんだけど、その時点では、まだ命の危険というところまでは至っていないと思うのね。

「じゃあどうということかって言うと、まさか自分が殺されるとは思っていない安藤さんが自分でポストに入れたか、または、安藤さんから葉書を手に入れた別の人物が町のポストに投函したか、だと思っの」

芙蓉が訊いた。

「葉書に別の人物の気配はないんですか？」

「それがないのね。安藤さん本人じゃないとしたら、わたしの霊視能力を知っていて、それがどういう能力なのか理解していて、それに対する対処法を知っている、つまり、『手のぬくもり会』の呪い関連部門の誰かさん、という可能性が高いと思うの」

芙蓉が緊張した目つきで言った。

「つまり、これは『手のぬくもり会』の先生を呼び寄せるための罠と言っことですか？」

紅倉は緊張する芙蓉に対して「う〜ん…」とよく分からない顔をした。

「それもどうなのかなあ？…と思うのよね。易木さんの態度から見て『手のぬくもり会』はわたしとは関わりたくないと思っただけなのよ。わざわざ呼び寄せるようなことはしないと思うんだけどなあ……？」

芙蓉は村長の達磨大師の風貌を思い浮かべ、疑い深く言った。

「そう油断させて先生をやつつける作戦じゃありませんか？」

紅倉はう〜ん…と考え、

「そうかもね」

と言い、

「でも、もしかしたらその人物は案外簡単に分かるかもね」

と気楽そうに肩をすくめた。芙蓉が目で問い、説明した。

「安藤さんのカバンとジャケットを送ってきた小包。送り主の住所はどこだったかしら？」

安藤の「遺品」はハーフサイズの平たいみかん箱に入れられて送られてきた。それはそのまま車のトランクに入っている。住所を平中が言った。

「岐阜県岐阜市 社団法人岐阜県犯罪被害者支援センター内『手のぬくもり会』」。

でも、その支援センターに電話してみましたが、『手のぬくもり会』という組織はないそうですか？」

「そうね。それは当然名前をかたっただけでしょうけれど、受付ステーションは？」

「群上市蜂万町のコンビニエンスストアです」

「地元よね？」

紅倉はクリッと目を動かして二人を見た。

「多分、本部の意向としてはもつと離れた、それこそ岐阜市のコンビニからでも発送させたつもりだったと思うのよ。安藤さんが平中さんにどれだけの情報を伝えていたかまでは掴んでいなかったと思

うから、できるだけ自分たちの本拠地はぼかしておきたかったと思うの。もつとも、ケイさんがお節介して美山町だつて教えちゃったから台無しだけど。ミズキくんは教えることに抵抗を感じていたでしょ？それは本部の意向として当然だつたと思うのね。となると、地元のコンビニから荷物を発送した人物の行動は怪しいわよね？もし、安藤さんの葉書を蜂万町のポストに投函した人物と同じ人だつたとしたら？容疑はかなり濃厚よね？」

平中が困惑した顔で訊いた。

「その人物は、『手のぬくもり会』本部の意向に逆らつてわたしたちこの場所の情報をリークして、導いたつてことですか？」

紅倉はうなずいた。芙蓉が訊いた。

「荷物からもその人物の情報は読みとれないんですよね？」

「うん」

「会を裏切つて先生を導くのなら、自分の素性を隠すようなことはしないで、先生に自分は味方であると伝えるんじゃないですか？」

「味方、とも限らないんでしょうけれどね。…きつと、自分が村の裏切り者だとばれるのを恐れているのよ。それも含めて彼、または彼女、のわたしへのメッセージなんでしょうね」

芙蓉と平中は複雑な表情で顔を見合わせた。平中が言った。

「『手のぬくもり会』内部に、自分たちのやり方に反対している人がいるつてことでしょうか？」

「それも当然と言えば当然かもねえー…」

紅倉は遠い目をして言った。

「易木さんは自分たちが犯罪被害者のために正しいことをしていると力説していたけれど、彼女が自分で悪人を処刑しているわけじゃないものね。けっこう大きな組織のようだし、だとすれば、世間並みに『死刑制度はんだ〜い！』と言う人だつていいのかもね？」

「その人は先生に何を期待しているんでしょう？」

「たぶん、」

紅倉はニヤツと笑い、

「『手のぬくもり会』、いえ、この大字村を、ぶつつぶしてほしい
んでしょうね」

と言ったが、目は暗い陰を差し笑っていなかった。

42 前夜

村長宅。

村長が紅倉芙蓉と対話した部屋で紐閉じの古い書物を難しい顔で読んでいると、障子を開けて腰を90度曲げた老婆が入ってきた。

この部屋の灯りは奥の角に立った円筒のシェードの電気スタンドだ。

「村長。こたつを出さんか。寒いわ」

文句を言って火鉢の隣に座ってしわだらけの両手をかざした。

「なんじゃい、今更教科書で復習かいな？」

「万葉集じゃ」

なんじゃい、と老婆は呆れた顔をした。村長は大きな目玉でジロツと老婆を見た。

「もののあわれを思いながら心を落ち着けておったんじゃ。で、本を置いて体を老婆に向けた。」

「腸の状態はどうじゃ？」

「ちいと便秘気味じゃな」

老婆はしわだらけの顔をゴムみたいにしかめて答えた。

「奥の方で固いもんが詰まってゴロゴロ気持ち悪いわ」

「そうか。目はどうじゃ？ 見えとるんか？」

老婆は色の薄い瞳にゆっくりまぶたを上下させた。

「ああ、ええ心配ぞ。祭に間に合って良かったわい」

「耳も聞こえるか？」

「おお、おお、遠くの方までよう聞こえるとも。……かえって近く
の雑音はよう聞こえんでイライラするがの」

「しょうがなかる、耳っちゅうんは自分には向いておらんからな。

若衆に見張らせておるで。………

舌は、

………どうじゃ？」

老婆はおどけてぬらっと歯欠けの歯茎にべろんと白い舌を出して

妖怪みたいに笑った。

「ああ、ようけ（余計）涎が出て、食欲は旺盛じゃわ」

村長は難しい顔で鼻息を漏らした。

「そりゃけっこうじゃが、あんまり胃液が出るようじゃったら薬を処方せにやらんぞ？」

「ええじゃろが？」

老婆はやんちゃに顔をしかめて言った。

「食いたいの我慢しとつたら健康に悪いぞな。食い物に困っとりやせんじゃろが？」

老婆はいぎたなく笑い、村長は

「ふうむ」

と難しそうに腕を組んだ。

「ま、せいぜいよく診とつてくれ」

「ああ、任せておけや」

老婆はニタアあ………と嫌らしく、意地悪な目つきで笑った。先ほどから年寄りの体を気遣うような会話をしているが、それはどうやらこの老婆自身の体を言っているのではないらしい。

「紅倉をケツの穴に入れるんか？」

「これこれ」

村長は眉をひそめて老婆の下品な口をたしなめた。老婆はけけけと笑った。

「あない臭っせえ所に、酔狂なこっちゃ」

嫌らしく笑い……、ふと表情をなくして陰湿な目つきで村長を見て言った。

「死ぬぞ？ あの女。それでええんかい？」

村長は腕を組んだまま仏頂面で言った。

「死ぬか。婆さんはそう思うか？」

老婆はちよつと驚いた顔をした。

「おまえさん、紅倉が生きて帰ってくると思っておるんか？」

村長は腕を解き、ちよつとばつの悪いような顔をした。

「まあ……………、それもなかるうとは思つが……………。もしや、とな……………」

老婆は半眼で、面白くなさそうに口の端を笑わせた。

「そう期待しておるんか？」

村長はチラツと、嫉妬している老婆を決まり悪そうに見た。

「いや、ええさ。それで公安との約束は果たしたことになる。……じゃが……………」

中で紅倉が死んだとしたら、どうなる？ 何が起こる？」

老婆はヒクリと、あまり考えたくもなかった問題に曲がつた背を少し跳ねさせた。

「……………何も……………。消化されて神さんの肉になるまでよ……………」

「そうか」

村長は半分尋ねるようにつなずき、

「まあ、とにかく頼むぞ。万が一にも神さんに死なれるようなことがあつてはならねえぞ？」

「あるかい、そないなことが」

老婆は怒つて言い、逆に尋ねた。

「もし……………、もしもじゃ、……………紅倉が生きて、あの男を連れて戻つたら……………、どうするんじゃ……………」

村長はあらかじめその答えを用意していたようで、答えた。

「その時はなんとしてもこちらに味方してもらつて公安を始末してもらつ」

「断られるじゃろ？」

「協力してもらつよう、準備はしておく」

決意を固めている村長をニヒルに笑つて、老婆は訊いた。

「公安をやつちまつて、大丈夫なんか？」

「ええじゃろ。おそらく今回の件は公安の独断じゃろつ。おそらく、政府は何も知らされておらんじゃろつ。嫌われておるようじゃから

な

村長は馬鹿にして哀れに笑い。

「その方がありがたい。政府に交渉して今後一切われらへの手出しは無用と改めてお墨付きを出してもらおうわ」

「そう上手く行くかのう？」

老婆は渋い顔で心配して言った。

「今の政府は学生気分で変に潔癖なところがあるじゃろ？ われらのような存在は、疎ましく思われ、悪い場合には、政府が潰しにかかってくるんじゃあるまいか？」

「それも、心配する必要はない」

村長は断言した。

「顔も名前もはっきり分かっておる人間はわれらの脅威にはなりえん。本人はもとより家族、一族郎党の命を人質に、正当な要求をはねつけられる者などこの世におけるものか」

「そうじゃったのう」

老婆はほっとしたようにうなずき、村長は力強く言った。

「神は力なり、じゃよ」

村長の言葉に呼応するように、

「おぎゃー、おぎゃー」

「おぎゃー、おぎゃー」

と、離れの双子が泣き出した。

「おお、うるせえのう、こっちまで眠れんわ」

老婆は顔をしかめたが、

「なに言うちよるか」

と村長は老婆を叱るように顔をしかめてみせた。

「赤子が泣くんは自然なこっちや。子どもの声が聞けるんちゅうは、幸せなこっちやろが？」

へっ、と老婆は顔をしかめた。

「きんきんと癩にさわるわ」

すっかりご機嫌斜めの老婆を優しい苦笑で眺め、村長は言った。

「我が村の未来は安泰ということじゃ」

ペンションもみじ。

いっしょにお風呂を使い、歯磨きをした芙蓉は、紅倉のベッドにやってきて床にお尻をつき、端に頬杖付いて寝転がる紅倉の横顔を眺めた。

「なに？」

紅倉が顔を向けると芙蓉はニコニコ笑って言った。

「そんなに似てるかなあ？って思って」

「まだ言ってるの？」

紅倉は呆れた目をしたが、芙蓉は紅倉に合わせて顔を横にしてまですすじつと見つめた。

「綺麗な顔……」

触れたくてたまらないような目つきをしている。この頃すっかり忘れ去られているようだが芙蓉自身もキリツとした（この点最近特に怪しいが）トップモデル並の超美形美女なのであるが、紅倉はその芙蓉の目から見ても特別に綺麗で美麗だ。純粋な日本人の目にやはり欧州白人の色は特別だ。葡萄の実のような神秘的な瞳、それこそみじが雪化粧したような真っ白で頬にほんのりピンクの透けた肌、赤い唇、銀色の輝くサラサラした髪の毛。欧州人の彫りの深いきつい目鼻立ちに島国日本人はどうしても苦手意識を抱かせられるが、日本人ハーフの血がほどよく輪郭を柔らかくしている。

ああ、なんて綺麗で可愛らしいのかしら……

と、同性愛嗜好の強い芙蓉はうっとり見惚れてしまう。

「ほらほら、さっさと自分のベッドに入って寝ちやいなさい。明日はいろいろいたいへんよ？」

いつもと反対に寢床に追いやられて、

「はあ〜い」

とふやけた返事をしつつ立ち上がった芙蓉は、

「お休みなさい」

と、天井の電灯を消し、ベッドのフットライトだけにした。

紅倉美姫がただのお人形のような美女でないのは芙蓉は今も十分感じている。

こうして普段通り安心していられるのが、この地では異常なことなのだ。

表で数人の若い男性がこちらを見張っているようだが、恐れと緊張だけで、殺意はない。

心霊ではない物理的な脅威から紅倉を守るのが芙蓉の使命だが、どうやら今夜はその危険はないようだ。

村長宅から帰ってきて、紅倉は適当な石を拾い、念を込め、建物の4角に置いてペンションに結界を張った。

この巨大な吐き気を催すような悪意の強い思い切り濃度の重い結界の内部で、この清浄きわまりない空間を作りだしている結界を新たに作ることがどれほどすごいことか。紅倉美姫のとんでもない、強い、霊能力の証明だ。

先生は人類の宝だ。

という考えを芙蓉は自分で打ち消した。

先生はわたしの宝だ。わたしだけの、掛け替えのない人だ。

薄暗い中に浮かぶシルエットを眺め、

おやすみなさい、

と芙蓉も自分のベッドに入った。

明日は、何が起こるか、分からない。

43 年神様二柱

サンドイッチの朝食を食べて、9時、芙蓉たちは村の中心の広場にお祭を見に出かけた。天気は冬晴れの青空が山に囲まれた狭い天井に抜けるように広がっている。

一行は、芙蓉、紅倉、平中、広岡夫妻、海老原夫と娘愛美、の7人である。

祭は年神様をお迎えする準備の祭、ということだが、これから忙しい年の瀬を迎えるに当たって村人たちが英気を養おうというお楽しみ会の意味合いが強いようだ。

道すがら博学の広岡氏が解説してくれた。

「ここ大字村でお迎えする年神は阿須波神（あすはのかみ）と大土神（おほつちのかみ）だそうです」

芙蓉はそもそも年神というのが分からない。

「お正月にお迎えするその年の神様ですよ。門松や鏡餅などはそもそも年神様をお迎えするための道具だったんです。

そもそもは稲Ⅱ穀物の神でした。日本は農耕民族ですからね。稲は一年生の植物ですから、実っては、枯れて、を毎年くり返す。それで暦の成立に従って年の初めにお迎えして、今年の豊かな実りを祈願する、お正月の神様になっていったのでしょね。

時代を経るに従って、自然の神であった物に神話の神を当てはめたり、自分たちを守護してくれる祖先の霊を重ねたり、農耕以外でもその年の安全繁栄を願い、都市部ではモダンな方位学とミックスされて方位学的にその年の年神様が決められて、ほら、数年前から恵方巻きというのが全国的に流行るようになったでしょう？ あれがそうですよ」

こうなると芙蓉にはさっぱり分からない。神様だの仏様だのの話

はいつもこうだ。勝手に転生して別の名前になったり、勝手にどこぞの偉い神様の眷属に組み込まれたり、勝手に別の意味が拡大解釈されたり、勝手に別の神様といっしょになったり、勝手に別の学問が勝手な解釈を加えたり。結局、なんなのか、輪郭が肥大してさっぱり訳が分からなくなってしまう。

芙蓉の不満顔に紅倉がニヤニヤ笑って分かりやすく言っちゃった。「結局ね、『神様は偉い物だ』って言いたいだけなのよ。人はあれこれ難しそうな学問を言われると、はあなるほどそうですか、とかしこまって納得したような気になっちゃうじゃない？ 頭のいい人がそうやって無知な大衆を自分の神様に手なずけているのよ」

身も蓋もない言いように顔をしかめる広岡氏に舌を出しそうになつて……どうもこの二人は相性が悪いようだ。

「要するに、力、なわけよ。」

ほら、今流行りのパワースポット。

あれなんかは完全に経験的に、『ムムツ、ここはどこか他と違うぞ？ これはすごいんじゃないか？』って感じて、さっさと自分の神様のテリトリーに囲い込んで、後付でいろいろ理屈や縁起をこじつけたんじゃない？

そもそも神様なんてのも同じような物よ」

と、天満宮にこれでもか！と祈念してきたくせに、たいへん罰当たりな事を言った。

もういいですか？と呆れた顔をして広岡氏が続けた。

「大字村でお迎えする二柱の年神様は大年神（おおとしのかみ）の子どもの神で、

阿須波神は屋敷の神、

大土神は土の神、

となってますな。古事記に登場する名前です。古事記、日本書紀というのは天皇の系譜を神話の形で記した歴史書なんでしょうから、多く登場する神々は皆、皇族であったりその皇子や姫であったりす

るのでしょうな。一人一人の神々がそれぞれどういう神なのか？それこそ後世の『ごじつけ』なんでしょうがな」

と、広岡氏も紅倉にいささか当てつけがましく言った。

「この村は歴史が古いですからな、いつ頃からこの二柱をお祭りしてるのか分かりませんが、名前が先なのか性質が先なのか分かりませんが、『屋敷』と『土』の神様をお祭りするというのは興味深いですな。見渡したところ」

と実際に村の中を見渡して。

「大きな建物と言って、村長の屋敷、村役場、木材加工所、小学校、……くらいの物ですか？」

村役場も広場に面して建っているが、こちらはもう少しモダンで簡素な造りの、普通の横長の2階屋だ。木材加工所は山のふもとに煙突の立った大きな小屋のような建物があり、小学校は田圃の中に大正ロマンチックな和式洋館が建っている。小学校にしてはずいぶん小さく感じるが生徒が数人では十分なのだろう。

「やはり目立つのは村長の家ですな。屋敷の神はやはり村長の家にお迎えするんでしょう。個人の家と言うより村の富の象徴のようなものでしょうから。ああ、水車小屋がありました。屋敷とは言わないでしょうが、この村の重要な建物でしょう」

水車は今日も山の斜面と村のあちこち水路でパタンパタンと回転している。雨の降った昨日より幾分緩やかだろうか。

「『屋敷』は分かりますが、『土』はなんでしょうなあ？」

広岡氏は知的に思索を楽しんでニコニコした。

「農耕や実りを司る年神は他にいますからねえ……。土………というのは、やはり、村を走る水路の工事の際に祭った名残でしょうかねえ？」

「どうでしょう？」と広岡氏は嫌みでもなくニコニコ紅倉に意見を求めた。

紅倉は。

「さあ？ 分かりませんが、そう………」

土は……、土、なんじゃないかしら？」

と、歩きながら、トントンの地面を叩いてスキップした。

「土、ですか？……」

広岡氏はハテ？なんだろう？と不思議そうにして黒ずんだ土の道や、周りの田畑を見て、にこやかに肩をすくめた。

「分かりませんな。後で村長さんに訊いてみましょう」

広場には既に村人たちが集まってそわそわと祭の開始を待ちわびているようだった。

芙蓉は広場が近づくに従い、昨日は到着早々車から出た途端によるめいてしまい気のせいかと思っただが、やはりだんだん耳鳴りがして頭が痛くなってきた。平中も額に縦皺を寄せてこめかみを押さえたので自分の気のせいばかりでもないようだと言ってみた。

「頭、痛くなってきましたよね？」

「ええ……。なんだか耳の奥が圧迫されるようで……。頭が締め付けられるように痛いわ」

「そうですね？」

芙蓉が他の人は平気なのかな？と不思議に思うと紅倉が、

「すぐに慣れるわよ。ずっと続くようなら、体質的に合わないんでしょうから広場には近づかないことね」

と、その正体が分かっているように言った。

「なんなんですか？」

と訊くと、

「水洗トイレ」

と、またも訳の分からないことを言った。

「美貴ちゃん、用を足し終わって水を流すとき、なんだか引つ張られるような感じがしない？」

恥ずかしい現場を例えに持ってこられて頬が赤くなる心持ちがしたが、そういえば、と心当たりがあった。

「ありますね、確かに」

水を流すとなんだか体が前の方に倒れ込んでいくような感覚がする。

「じゃあそういうことよ。水は霊が馴染み易いっていうのもあるけれど、もっと単純に体の60パーセントは水分ですからね、水の動きに敏感な人はけっこういるんじゃないかしら？」

「なるほど」

と芙蓉はどうやらこの耳鳴りは水の流れに関係がありそうだと広場を見渡したが、ここまで水路は延びていない。紅倉の見立て違ひとは思えないが……。

広場は地方の市民野球場と言った程度の広さの5角形で、各角から村の外枠の出っ張りにまっすぐ道が伸び、それぞれ入り口に赤い鳥居が立っている。

今向かっている入り口の鳥居に、両手を後ろに組んだ手持ちぶさたな様子でお巡りさんが一人立っていた。何やら冗談を言い合っただけ無邪気に笑っていた村人たちがふと芙蓉たちを見つけて笑いを引っぱい、お巡りさんがこちらを向いた。若い、なんとなくお坊ちゃんっぽい印象のお巡りさんだ。芙蓉たち一行を見て、おやあ？と首をかしげ、近づいていくと、ニコツとさわやかに笑って、

「こんにちは。村の方じゃないですねえ？ 観光のお客さんですか？」

と尋ねた。芙蓉は村にまともな警察官がいるのに驚いた。……いや、まともな警察官かどうかは分からない。

「こんにちは」

と芙蓉が代表して挨拶すると、若いお巡りさんは鄙（ひな）にはまれな若い美人に目を嬉しそうに笑わせて敬礼のサービスをして、おや、と後ろの広岡氏と海老原氏に目を向けた。

「あなたは前にもお見かけしましたねえ？ とすると、やはり皆さんペンションもみじさんのお客さんですか？」

と、お巡りさんと海老原氏は顔なじみらしく笑顔で挨拶した。

「愛美ちゃん」

可愛らしい声で呼びかけて子どもたちが駆けてきたが、学年が別の男の子二人女の子二人、皆顔にお化粧して、獅子舞でも踊るような真つ赤な袋のもんぺに濃い緑の祭半纏をまとい、頭には水玉の鉢巻きをコックのように高く巻き、女の子はかんざしを挿している。

子どもたちはニコニコして、

「愛美ちゃん、早くおいでよ。役場で愛美ちゃんのお衣装も用意してあるから、愛美ちゃんの準備が出来たらお祭りを始めるよ?」

と、年長の女の子が手を取って連れていこうとした。愛美ちゃんはちよつと心細そうにお父さんを見上げ、海老原氏は嬉しそうに笑って、

「さあ行っておいで。準備が出来たらみんなといっしょに写真撮ってやるぞ?」

と、首にぶら下げたコンパクトカメラを構えて見せた。

「行こう」

子どもたちといっしょに愛美ちゃんは鳥居をくぐって駆けていき、若い女の人がニコニコ笑って愛美ちゃんを差し招き、海老原氏に挨拶した。女の人は愛美ちゃんの背に手を当て、「急げ急げ」というようにいっしょに向こうの建物向かって駆けていった。村役場だ。

「どなた?」

芙蓉が訊くと、ニコニコ顔の海老原氏が答えた。

「愛美の担任の相原ゆかり先生です。まあ担任と言っても先生が2人、校長と教頭の計4人だけで、みんないろいろ兼任しているようですがね。なにしろ生徒が5人だけですからねえ」

「ふうん」

走っていった5人でこの村の子どもの全員なのだろう。中学高校は村の外に留学しなければならぬから、村立の祭日にわざわざ学校を休んで帰ってきたりしないのだろう。

相原ゆかり先生は水色のジャージ姿だったが村の茶色系草色系の服装の中であか抜けた印象があった。

芙蓉は若いお巡りさんに訊いた。

「お巡りさん、お名前は？」

「本官でありますか？ 本官、長崎洋介巡査、26歳独身であります。ちなみに長崎と申しますが出身は福岡であります」

と、嬉しそうに訊いてもいないことまで答えてくれたが、手間が省けた。

易木、信木、樹木、賢木、木場田、と、

どうやらこの村の人間は皆名字に「木」の字が付くらしい。すると相原ゆかり先生、長崎洋介巡査は村の外から赴任した人と考えられる。

「巡査さん。このお祭は今日やることが決まっていたの？」

芙蓉はこのタイミングの良すぎる祭が自分たちを村に足止めするために急遽セツティングされたものではないかと疑っていた。果たして。

「いやあ、実は本官も寝耳に水です。昨日パトロールをされていて広場にあの小屋を見つけて、なんだろうなと思っていたら今日の祭で」

やっぱり、と芙蓉は思ったが。

「ここの人たちはいつまで経っても本官をよそ者扱いで、なかなかうち解けてくれないんですよ。仲良くしてくれるのはペンションの海老原さんと学校の先生方だけでして」

と、長崎巡査は情けなさそうに肩を落とした。

「こちらへはいつから？」

「今年の3月に配属されました」

それじゃあまり当てにならないか。

「警察官は？ 巡査さん一人？」

「はあ。本官一人きりです」

まるつきり島流し同然で、人の良さそうなお坊ちゃんばい風貌がいかに頼りなさそうだ。

「美貴ちゃん、行こう？」

紅倉が言い、芙蓉はいつしよに鳥居をくぐった。広岡氏はとつくに村人の輪に入り、顔なじみらしい同年輩に奥さんを紹介して談笑し、芙蓉の話に付き合っていた海老原氏も続いて入った。

芙蓉たちが近づいてきてからというものの口が重くなっていた村人たちは、芙蓉たちが鳥居をくぐるのを見て、急に愛想良く笑顔を見せた。村人たちの笑顔を作るタイミングがピタリと合っていて、芙蓉は内心ゾツとした。

44 祭の裏で

「みい〜やあ〜びきのお〜、おみぎりいはあ〜、はやしだてえ〜、せみはらい〜」

舌つ足らずな言葉で意味も分からず子どもたちが歌い、神楽の真似事のような踊りを踊った。

ちよつと気味の悪いわら人形の2体上下に座ったわらの小屋の前で、衣装を着てお化粧した愛美ちゃんもいつしよに踊り、海老原氏は一人だけ忙しくカメラのシャッターを切っていた。

祭が自分たちをとどめるために用意されたという疑いを抱く芙蓉だが、子どもたちの一生懸命の歌と踊りを見る限り昨日今日の付け焼き刃ではないだろう。もっとも愛美ちゃんはまだ恥ずかしさと練習不足でぎこちなく、他の子たちは毎年踊っているのだろうが。

芙蓉はニコニコ子どもたちのパフォーマンスを眺めているジャージの相原先生に近づいていき、訊いた。

「すみません、旅行者なんですけど」

「はいっ？」

相原先生は目をクリツとさせて笑顔で芙蓉を見た。

「このお祭は最初から今日行うことが決まっていたんですか？」

「ええ」

相原先生は不思議そうに言った。

「4月の年間行事で参加が決まっていました。こんな小さな所ですから、地域の文化は大切に、積極的に参加していかなくては」
ね？と相原先生は子どもたちの教育者らしくチャイミングに笑った。子どもたちの舞まで疑惑の目で見ていた芙蓉は自分がなんだか都会の嫌な大人のような気がして恥ずかしくなった。

どうやら祭は最初からこの日に決まっていて、自分たちがこの夕イミングで来たのは偶然で、ひよつとしたら、村人の方こそこの夕イミングの訪問をひどく迷惑に感じているのかも知れない。

反省反省、と思いながら、出来るだけ清い心で子どもたちの神楽舞を鑑賞した。

舞が終わり子どもたちが揃ってお辞儀すると村人たちは拍手をし、「はいはい、ご苦労様。ジュースを飲んで、この後はお待ちかね、餅つき大会だよー?」

助役の賢木氏が平たい顔に人のいいニコニコ笑いを浮かべて子どもたちをねぎらった。賢木氏と、実行委員らしい数人が子どもたちと同じ深緑の半纏を着ている。半纏を着ているのは若い……と言ってもせいぜい二十代後半から三十代、四十代が中心の10人ほどの男女で、その他村人は老人を中心に5、60名ほどいるだろうか。一方で餅つきの臼と杵を用意し、一方で大きな鍋に湯を沸かし汁物の調理にかかっている。

芙蓉は紅倉の所に戻り、勝手にうろろして迷子にならないよう手をつないだ。

表で祭が賑わっている裏で。

村長宅。

例の居間で村長はテーブルを挟んで今度はケイの仲間の「クロさん」ともう一人の仲間と向かい合っていた。

「今村に公安の連中が入っているのは聞いているな?」

村長に公安や紅倉たちに対して見せたようなおどおどした所は微塵もなく、達磨大師のいかめしい面相に太い筆致の気迫を感じさせる怖い睨みを露わにしている。

「はい」

クロも正座をしてかしまって答えた。

「2人山の中に確認しているが、おそらく、もう2、3人はいるだろう」

「はい」

「ここに訪ねてきた奴がな、こんな物を置いていった」

村長は公安「日本太郎」に渡された写真をクロともう一人の前に滑らせた。写真を見た二人はギョツとした。

「手落ちだの」

村長に不愉快そうに言われて二人は顔を強張らせた。見せられた事実のシヨツクが顔にありありと残っている。

「公安め、このわしをこれで強請りおった」

村長は不愉快そうにも年の割に厚い皮膚をめぐり上がらせてふてぶてしく笑った。クロは

「落とし前は付けます」

と決意を込めて答えたが、村長はうるさそうに手を振った。

「公安はええ。手は打ってある。おまえが考えねばならんのは、…

……分かるな？」

クロは顔を苦しそうにヒクリと引きつらせ、重い口調で、

「……ケイ……………ですか……………」

と答えた。村長は無慈悲に言った。

「そつだ。……フン、

いささか、調子に乗りすぎておるようだの？

黒木。おまえも持て余しておるのじゃろつ？」

クロ、本名「黒木は、

「いえ。そのようなことは」

とケイをかばった。村長は仏頂面に「フン」と鼻息を漏らし。

「ええわい。……………」

あれはよう働いてくれとる。感謝しとるよ。だが。

あれは個人の恨みが強すぎる。恨みが強すぎて、精神がコントロールできず、与えられた力を過信しとる。己自身の弱さがまるで解つておらん。それは、危険だ。分かるな？」

「……………」

黒木は無言で苦しそうにうつむいている。

「あれはかわいいそうな女だ。だが、甘やかすわけにはいかん。ここ
の存在する意味を、もう一度、きちんと理解させねばならぬ。しば

らく村にとどめ置き、鬼婆の仕事を手伝わせよう。それで良いな？」
「はい」

黒木は正座の腿に両手を揃え、背筋をまっすぐ伸ばしたまま頭を下げた。

「うん。……………」

神の力を身につけた者は貴重だ。無駄にすることはしたくない。鬼婆の言うことを聞いて大人しくなればええが、もし、鬼婆の言うことも聞けんと我が儘言うようじゃったら、

黒木、

そん時は、ええなあ？」

村長の声が大きくなり、黒木は下げた顔にじっとり脂汗を浮かべた。

「もつたいないが処分せんにやいかん。あれを始末するとなるとこちらも相当の覚悟をせんにやらんが、ええなあ？黒木い？、覚悟してかかれやあ？」

「はい」

黒木は今一度しっかり頭を下げ、静止した。村長は声を和らげ。

「顔を上げなや。…ま、そうならんようにな、婆様に骨折してもらおう。なあ。」

子どもをあやすような声に黒木は固く苦悩した顔を上げた。もう一人隣の男はガチガチに緊張して悲愴な顔でずっと下を見ている。

「この村は大事だで、何を犠牲にしても守らねばならん。のう、黒木。おまえは、解つておるよなあ？」

「はい」

再びかしくまる黒木にまあまあと村長は手を振った。

「分かつておればええ。黒木。齋木も」

もう一人は齋木というのだった。

「ケイもじゃ。みんな村を守る大事な仲間だ。誰も、犠牲になんぞしとうない。ええなあ？ わしらには、天に与えられた大事な使命がある。くれぐれも、それを忘れてはいかん。ケイも、ちゃあんと、

分かってくれるだろう。のう？」

黒木はさつとうなずき、齋木はこわごわ首をコクンとうなずかせた。

「ええよ。お行き。お祭を楽しんでおいでな。ケイには、後でな、落ち着いたら話すで、おまえたちが心配せんでもええよ。さ、お行き」

黒木はスツと立ち上がり、きちんと礼をして、齋木の後ろを回って障子を開けて出ていった。齋木は無様にお辞儀して慌てて黒木を追い、慌てて障子を閉めていった。

スツと、

吹き抜けの2階の障子が開き、老婆がしわくちやの顔を覗かせた。「なんじゃ婆様、そこにおったんかいな？」

屋敷に住み着く妖怪の神出鬼没ぶりに村長は情けない渋面を作った。子どもに睨みを利かせた大親分の敵めしさは消えている。

「紅倉に続いてケイまでかいな？　ほんに難儀なことぢやな」

「うむ、頭が痛いわい。」

というわけでな、婆様や、ケイを預かって、仕付け直してくださいな
れや」

村長は手を合わせて拝むかつこうをした。

「よせやい、縁起でもねえ。わしやまだ拜まれる身になりとうないわ。」

ケイか……。あれは難しい女じゃぞ？　必ず、わしの言うことな
んぞ聞かんで、やり過ぎるぞ？」

「目でも耳でも使えんか？」

「そこにとどまってはおらんじやろつ。……………」

あの女の魂は、血に飢えておる。

神を、荒ぶる物にしてしまうぞ？　特に、一度交わっておるから

の、自分の立場を勘違いしておる。

巫女として使うのは危険じゃ」

「う……………」

村長は腕を組んで首をひねり、渋面で心底困ったようにうなった。さんざん考え。

「いっそ……………」

紅倉にぶつけるか？」

老婆もぶ然とした真顔になって言った。

「神の中でか？ 危険じゃぞ？」

村長は腹の決まった静かな目で老婆を見上げて言った。

「仕方なかるう。紅倉を仕留めるなら神の中でやらねばならぬ。魂を逃して、本当に村を祟られたら堪ったものではないわ。

巫女たちを使って見張ってくれ。神のコントロールを失わんようにな」

「解った……。しかしそうになると、紅倉とケイ、両方いつぺんに失うことになるかも知れんぞ？ それで、後のことはえんかい？」

「紅倉が死ねば公安との話は付く。ケイが消えれば、強請のネタもなくなる。いずれも村は安泰じゃ。

のう、婆さんや。これもみな村のため、使命のためじゃ。わしら年寄りには、辛抱せねばのう……………」

悲しそつに目をしょぼつかせた。老婆も。

「しょうがねえわ。わしら先祖代々、ずうーっと、そうして生きてきたんじゃからな。これがこの村の血の運命じゃわ」

すっかりあきらめた様子で黙り込んだが、ふと、別の疑念に顔をしかめて言った。

「嫌な卦（け）が向いておるのう？ どうも不吉の運氣が流れておるような嫌な気がしてならんのう？」

「紅倉じゃろう」

村長は苦虫をかみつぶしたように答えた。

「やつかいな女が来てしまったものだ。なんとしても調伏（ちようぶく）して神の血肉にせんとのう」

再び厳めしい顔になって決意を固めた。

彼らに、

地の底に潜む黒い陰陽師の情報は伝わっていない。

45 火種

黒木と齋木が村長の家から出てきたのを見て、助役の賢木は周りの者に愛想を振りまきながら「ちよつとごめんなさいよ」と抜け出し、村長の家へ階段を上がっていった。

戸をガラリと開け助役の「村長。賢木でございますよ」村長の「おう。入っとくれ」という声が聞こえ、助役は「ごめんなさいよ」と戸を閉めた。

広場で振る舞いの雑煮を食いながら、齋木は面白くなさそうに黒木に言った。

「ケイを始末しろですってさ？　さんざん汚い仕事させておきながら、よく言いますよねえ？」

「汚い仕事なら、上のもんたちの方がよっぽどやってるさ」

黒木もムカムカした苛立ちを抑えながら餅を食った。齋木は納得いかない。

「でもですよ？　ケイを殺れだなんて、簡単に言ってくれますよ。俺たちの身なんてこれっぽっちも考えちゃいねえ」

齋木は始末した不良の仲間みたいな黒の皮服の上下を着て、濡れたドレッドヘアをしている。ラテン系のロックギタリストみたいなファッションだが、顔は口に締まりのない田舎のお兄ちゃん、パUNCHパーマの失敗したおばちゃんぽくもある。村人と同じ野良着を着ながらきつちりしたいぶし銀の黒木は部下の不満に神経質に眉をひそめた。齋木は。

「ケイの仕置きの話、部長は知ってるんですかねえ？　俺たちから報告して、会長にきちんと話付けてもらいましょうよ？」

不機嫌な顔でもくもく餅を食っているリーダーを顔をしかめて覗き見て。

「命令されたら、黒木さん、本当にケイを殺す気ですか？」

「うるせえよ」

思わず怖い声で吐き出して、黒木は部下を気遣い、

「おまえも食え。うめえぞ」

とあまり美味くもなさそうに汁をすすった。斎木は仕方なく自分も餅を食い、リーダーの視線の先を追った。村人の人垣の向こうに紅倉も芙蓉ともう一人の女といっしょに椀を持って雑煮を食べている。

「紅倉ですね。……あれは、そんなに殺っちゃ駄目な女なんですか？」

斎木はいっそこいつを殺してしまえば万事解決と安易な目で眺めた。

「紅倉を舐めるな。相棒の芙蓉美貴もだ。甘ったれた顔してるが、トレーニングしているぞ」

「そうすかねえ？」

斎木はまじまじと芙蓉を観察した。相手はとびきりの美女だが、そうした下卑た男の目ではない。もっと職業的に冷たい目だ。芙蓉は珍しく白の宝塚の衣装みたいな袖のふわりと柔らかくたつぷりした服を着て、下もパツと見た感じ足首までのロングスカートかと間違う柔らかい布のうんと幅広のパンツをはいている。体の線は見えないがきれいに滑らかな頬から筋肉隆々に鍛え上げているとは思えない。黒木は、

「修行が足りないぞ」

と部下を叱った。

「あの女のスタイルは合気道だ。力の受け流しに特化している。鍛えているのは瞬発力とスピードと関節の柔らかさだ。俺たちのようなごつごつした筋肉は邪魔だ」

「なるほど」

斎木は自分の未熟を戒め、より敵意のこもった目で強敵を観察した。黒木も油断のならない相手に固い声で言った。

「あの服装も、白で輪郭を膨らませ、手足の裁きを隠すためだ。いわばあれがあの子の本気の戦闘服だ。敵から紅倉を守る決意は固い

「言うことだな」

「俺たちだってですよ」

斎木は口を尖らせて言った。

「俺たちだってケイを……。そうでしょう?」

斎木は同意を求め、黒木も

「そうだ」

と同意した。斎木の不満は収まらない。

「それを、会長たちは……………」

黒木はため息をつき、部下をなだめた。

「もういい。言うな。部長には俺からしっかり言っておく」

「お願いしますよお?」

「なんだよ? 俺まで信用できねえか?」

砕けたおどけた口調に、斎木は慌てて箸を持った手を振った。

「いいえ! クロさんは信じてますよお! 死ぬまで付いていき

ますよ!」

黒木も笑って言った。

「俺もおまえやスエキは信じているよ。おまえたちの信用を失うと

きは、俺の死ぬときだ」

「クロさん……………」

斎木は主人に忠誠を誓う忠犬のように嬉しそうな顔をした。

「ケイも来ればいいのになあ」

すっかり上機嫌の明るい顔で我がアイドルの姿を一応捜してみた。

黒木は。

「来るわけないさ。ケイは村に群れない。一匹狼でいたいのか」

ケイの孤独で意固地な心を思い自身孤独に沈んだ顔をした。ふと

自嘲し。

「ま、ケイにはミズキがいるか……………」

それより末木は? あいつまた引きこもってるのか? あいつこ

そもっと村に馴染めよなあ?」

困った奴だと苦笑し、まじめな顔になって。

「齋木。悪いが末木に公安の情報を集めるよう言ってくれ。ケイと俺たちを追いつめたのは公安の奴らだ。てめえらのやり口は棚に上げて、許さねえ。時期が来たら自警より先に俺たちで始末するぞ。」

「……ケイとミズキと一緒にな」

齋木は嬉しそうにイヒヒと笑って言った。

「とつくにやってますよ。やりましようね、クロさん、きっと！」

俺たちは仲間だ。俺、クロさんやケイのためなら喜んで死ぬますよ！」

「死ななくていいよ」

黒木はくすぐったそうに笑い、約束した。

「俺はおまえたちを裏切らない。何があるうと、絶対にな」

46 ケイと紅倉

「紅倉さん。それでは約束の場所にご案内します」

紅倉が振る舞いの雑煮を食べ終わるのを見計らって青年団長の木場田が声を掛けてきた。三十代。明るいつわい的な笑顔をしているが骨格は明らかに村の一族だ。紅倉は。

「お祭はお終い？」

「子どもたちはここまでです。大人たちはこれから酒が出て夕方までどんちゃん騒ぎになります」

芙蓉はじつと内にこもってなかなかよそ者に素顔を見せない村人たちのどんちゃん騒ぎする様子を想像してちよつと田舎者を見下したような気分になった。

「あつそう。酔っぱらいは嫌い。じゃ、さつさと行きましようか」
では、と先に立って歩き出した木場田に続いて紅倉が歩き出し、

芙蓉も当然のように横に並んで歩き、平中もなんだろうと不安な顔で続いた。木場田は立ち止まり、困った顔で振り返った。

「案内するのは紅倉さんだけと聞いているんですが……」

「わたしは行くわよ」

と当然の顔で芙蓉は言い、しかし平中には、

「平中さんはここで、広岡さんや海老原さんたちと一緒にいてください。また情報収集をお願いします」

と取って付けたように言い、平中の不審を買ってしまった。

「どこに行くんです？ 安藤のことと関係あるんじゃない？」

愛する女の鋭い勘に芙蓉は困って紅倉に助けを求めた。

「平中さん。あなたは危険だからここにいてください」

真顔で言う紅倉にやっぱりという顔で平中はいかにも「自分も一緒に」と言いたそうにした。

「危険だからあなたは駄目です」

紅倉は重ねて言った。

「危険すぎて、村人も近づけない場所があるそうです。もし安藤さんがまだこの村にいるならそこしかないだろう、と、村長さんに教えてもらいました。本当にそこにいるのかどうか分かりません。わたしが見てくるまで大人しくここで待っていてください」

「危険って、……どう危険なんです？」

「わたししか行けないんですから当然、靈的に危険、ということでしょうね」

平中は悲愴な顔で訊いた。

「安藤はそんな場所にいて大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫じゃないでしょうね。亡くなっている可能性が大です」

平中は心臓を掴まれたみたいに顔を歪めた。紅倉は残念そうに言った。

「あなたには確かめた上で話そうと思っただけなんですけどね。いずれにしてもわたしが確かめてきますから、待っていてください。

お願いします」

紅倉に頭を下げられ平中も我が儘を言うのはあきらめた。

「よろしくお願いします……」

「平中さん。あなたには本当にこちらで情報収集をお願いします。

特に、お巡りさんと学校の先生に」

芙蓉は紅倉が自分と同じ事を考えていると知って嬉しく思った。

これだけ一体感の強い村なのだ、村人のほとんどが「手のぬくもり会」の仕事に手を染めている、または知っていて見て見ぬ振りをしている、と考えていいだろう。万が一の場合、自分たちが誰を守って戦えばいいのか？、知っておく必要がある。

平中はあまり納得していない顔ながらうなずいた。

「それじゃ、行って来ます」

手を振り、平中と別れた。わはははは、と紅倉芙蓉のいなくなった広場から村人のあけすけな大笑いが聞こえた。

木場田に連れられて辿っているのはひたすら山の中に迷い込んでいくという道だった。

斜面から走ってきて斜めに村を通っていく水路をまたぐ木橋を渡り、芙蓉はふと疑問を感じた。水路は周囲の斜面を何本も走っている。位置は水車があるので分かる。全部で10本か？水が貴重なのは分かるが、こんな山に囲まれた盆地で、逆に水害の恐れはないのだろうか？こうして斜めに、すり鉢状に村の中心に向かって流れていく水路の水は、最終的にどこに排水されているのだろうか？

木場田に聞いてみようかと思っていると、民家の前の道ばたに二つの人影が立っていた。

「おや、おはようさん」

木場田が声を掛け、人影、ケイは、

「どうも」

と愛想なく答えた。もう一つの人影ミズキはもう少し愛想を見せて微笑み返した。

「おはよう」

ケイが今度はニツと白い歯を見せて紅倉に見せて挨拶した。ミズキの方は逆に警戒した固い顔になった。

「おはよう」

紅倉も会えて嬉しそうに笑顔で返した。ケイはボア付きの目立つピンクのダッフルコートを着て、白のパンツをはいていた。家に帰ってきてリラックスした印象だ。スタイルが良く、夏でもないのにつばの大きな帽子をかぶり、大きな黒いサングラスを掛けているのも芸能人っぽく見えなくもないが、携えている盲人用の杖がその印象を打ち消している。紅倉。

「ああよかった。ワンちゃんは連れてないのね？」

「あんたが来るのを待っていたんでね。この子がわたしの盲導犬代わりさ」

傍らに付き従い犬扱いされたミズキだが、別に気分を害する様子もなく忠犬らしく敵への注意をゆるめようとしなない。

「ガス穴に入るんだって？」

ケイは木場田を睨むように顔を動かした。木場田は同じ仲間なのに愛想のないケイに辟易して黙っていた。

「ガス穴って言うの？」

紅倉が訊くと、

「ああ」

ケイは思いきり鼻の上にしわを寄せて嫌あぐな顔で言った。

「わたしもあそこだけは何かあっても近づけないね。わたしらみたいな人間にはかえって大丈夫なだけけどね」

よく分らないことを言って、うん？と首をかしげる紅倉に、

「ま、行ってみてのお楽しみさ」

と意地悪に教えず、そのくせ、

「入っても門までは行けないね。わたしも、あいつだけはおっかない」

と、ヒントをくれた。さらに、

「その、安藤とかいう男？ まあいけば入り口でぶっ倒れていると思うけど、そこで見つからなけりゃあきらめてさっさと引き返してきな。奥に連れて行かれたんなら、100パーセント、死んでるからね」

と、ずいぶん親切に教えてくれた。その親切ぶりに忠犬のミズキはさすがに面白くないようにご主人の横顔を見た。ケイはうふふと笑い、軽く体重を預けていた杖から右手を外し、紅倉に差し出した。「健闘を祈るよ。生きて帰ってきな」

「どうもありがとう」

紅倉も笑顔で差し出された手を握った。ケイは、

「案外柔らかい手だね？ もっと細くてポキポキ固いかと思ってたよ」

と握手した手を軽く振った。

「まあたいへん、太っちゃったかしら？ 最近栄養がいいから」

紅倉が視線を芙蓉に向け、ケイもあごを動かして芙蓉を向いた。

芙蓉は、偏食ばかりのくせに何言ってるんだか、と内心呆れている。ケイは

「あんたの犬かい？ わたしは何故か雌犬には嫌われてねえ」
フツツと笑い、紅倉の手を放した。

「嫌なイメージを思い浮かべてしまっただろうね、女は……」
後ろを向き、奥へ下がった。こちらに向き直り。

「本当に気を付けるんだよ？ 必ず戻ってきなよ？」

と、戦友を送り出すように気遣った。紅倉も去りがたい素振りを見せ、

「あなたを見込んでお願いがあるんだけど、聞いてくれる？」

と言った。ケイは意外なように

「なんだい？」

と聞き返した。

「わたしたちの連れの平中さん。あなたのお仲間たちから守ってくれる？ 村長さんと一応約束はしてあるんだけど……、どうもあの人は信用しきれないのよねえ……。ダルマ狸」

「ダルマ狸？」

ケイは可笑しそうに

「そうなのかい？」

とミズキに訊いた。ミズキは

「わたしからはなんとも」

とまじめくさって答え、ケイを楽しそうに笑わせた。

「いいよ。分かった。平中さんだね？ ……村の連中とはあまり折りが合わないんだけどね、他でもない紅倉さんの頼みじゃ断るわけにはいかないね」

と、嬉しそうに引き受けた。

「ありがと。これで心おきなく『化け物』と対決できるわ」

「こーら。忠告。忘れんじやないよ？」

「はあーい。行って来まーす」

「ああ。行ってらっしやい」

呆れた様子でケイを見ていた木場田がああと気づいたように先導して歩き出し、紅倉芙蓉は枯れ木をくぐり、山道を登っていった。見えているようにサングラスの目で見送っていたケイは、その後ろ姿が斜面の向こうに消えてもまだじっと見つめていた。

ミズキがちよつとふてくされたように言った。

「ケイは……、紅倉にはずいぶん親しげに話すんですね？」

「ああ」

ケイはミズキの嫉妬を無視して言った。

「わたしがこの世で信頼できるただ一人の女性だと思っている。できるなら、このままお友だちでいたいものだねえ……」

ようやく見送るのをやめ、道を村の中心向かって歩きだした。

「さて平中さんだね。紅倉さんが帰ってくるまでしっかりガードしてやらなきゃね」

ミズキと二人歩いていると、向こうから村には珍しい十代の女の子が歩いてきた。ミズキが、

「木俣、麻里（きまた、まり）です」

と耳打ちした。ケイはうん？と眉をひそめ、

「麻里？ 鬼婆あんとこのかい？ ……麻里まで呼び寄せているのか」

と、何か苛々した声で言った。

セーラー服に学校の青いコートを羽織った麻里は、ケイたちの前まで来ると立ち止まり、利発そうな顔にニツコリ笑みを浮かべて言った。

「ケイ姉さん。ミズキ兄様。お婆様と、部長さんがお呼びです」

それぞれ別の呼び出しらしく、ケイとミズキは思わず顔を見合わせた。

「鬼婆あがわたしになんの用だい？」

「はい」

麻里はニツコリ笑ったまま言った。

「室に入って、紅倉美姫を殺していただきたい」

「なんだってえ？」

ケイは驚き、怒り、思わず子どもに歯を剥き出してみせ、

『嫌な目をした餓鬼だよ』

と思った。

前髪を綺麗に切りそろえた麻里は、ニツコリ笑い、一重の綺麗すぎる目でじいっとケイのサングラスの中を見透かしていた。

47 六の入り口

目的の場所は峠を越えてしばらく下った所だという。

紅倉はひ弱に見えてこれで愛犬ロテムの散歩で足腰はけっこう鍛えている。ちなみに今日の紅倉のファッションは、芙蓉がいつもの黒ではなく真っ白なのに対し、黒の温かいボア付きコートと、こちらもいつもの白と反対だ。黒の厚いパンツに、登山靴ではないが足首を守るブーツタイプの靴を履いている。

山を登っていくと、隣の尾根の上に、高圧線の鉄塔とそのとなり各種アンテナの群が立っているのが見えた。鉄塔からは電線が伸び、道道の電信柱を経由して各戸へ電気を供給し、反対の山中に立つ鉄塔につながり、山の向こうへ消えていく。

村の中から見たのでは気づかなかったが電柱とアンテナ類の立つ尾根は両隣とほぼ同じ高さのだいぶ広い台地になっているようだ。

商業施設のまるで見当たらない村だが、生活は現代の文化レベルをちゃんと持っているようだ。

道は知らなければ絶対気づかない、小さな岩山を越えた裏に細々と続き、何重にも道を誤魔化しながら底へ底へと深く谷を下りていく。すっかり日差しが遠のき、濡れた土の臭いが足元から身を包んでくる。木場田は大型の懐中電灯を持っていたが、それを使わなければならぬほどの暗さではない。目的地で必要になるのだろう。

下りきった谷間を道は続き、

木々の間を薄暗い中ハツと目に焼き付くように真っ赤な鳥居が立っていた。

道幅がないので広場に立つ物よりだいぶ小さく、芙蓉ならジャンプして手が届くくらいの高さだ。

しかし妙に真っ赤だ。しんと音がしそうな薄暗がりに、赤色だけが浮き立って周囲を闇に沈めていくような見え方をする。

妙に静か、というのはただ単に音がしないだけではない。自分の

立てる音もハツとするほど耳に痛く、そのくせ響かずにすぐに立ち消える。周りの木々が、土が、空気が、音を吸収して無にしてしまふのだ。巨木の立ち並ぶ神社の聖域がこのような静寂をたたえているが、そうしたすがすがしさはない。胸をかき乱す得体の知れない不安が、真つ赤な鳥居をくぐってビシビシ吹き付けてくる。ケイがここだけは近づけないと言ったのがよく分かる。

「この先はまつすぐです」

木場田について鳥居をくぐり、先へ進むと、また鳥居が現れた。

平らな道で歩くのに余裕が出来た紅倉は木場田に訊いた。

「安藤さんがその『穴』に入った経緯を教えてくださいませんか？」

木場田は前を向いたままどこまで話すべきか考えあぐねる困惑を感じさせつつ話した。

「安藤さんは旅行雑誌の記者を装って村の秘密をあちこち嗅ぎ回っていたんです。それを邪魔に思った村長が、『山の裏側に古いほこらがある。ずいぶん昔からある物でなんの神様を祭った物か分からないが、村人の何人かは今でもお参りしているようだ。そこで何やら秘密めいた儀式をやっているという噂を聞いた』と教えたんだそうです。安藤さんはその話を確認するためにそこに向かって、帰ってこなかった、というわけです」

と、だいぶ話をはしょって簡単にしてしまった印象を芙蓉は受けた。少なくとも安藤がその話になんの疑いも警戒も抱かずにまんまと危険な穴に入っていったとは考えづらい。無理やり追い立てられ、仕方なく逃げ込んだ、というのが実際のところではないか？と芙蓉は思った。紅倉が訊いた。

「あなたは安藤さんとは？」

「ええ。わたしが村の青年団の団長だと聞いて話を聞きに来ましたよ。一応若い人間の代表として村の暮らしや将来の展望なんかを訊かれました」

「インタビュ―を受けただけ？ 個人的に親しくはしなかった？」

紅倉はペンションの作戦会議で「村の何者かが安藤さんの葉書と

荷物で自分たちをここに呼び寄せた」という疑惑を披露したが、その「何者か」を木場田だと推理しているようだ。確かに青年団長なら村の内外を行き来しても怪しまれず、荷物の発送を引き受ける立場にもあるのではないだろうか？ 紅倉の問いに木場田は

「ええ…、まあ……。有り体に言えばわたしが村の案内をしながら、実は監視して村長に報告していたわけですし……。確かに、村で一番多く話したのはわたしです」

口調に迷うところはあるが、自分だとはつきり言いきった。

紅倉先生を招いたのはこの木場田であろうと芙蓉はほぼ断定した。だとするなら、問題はその動機だ。

木場田は骨格的に明らかにこの村の人間だ。しかし表情に他の村人にはないあか抜けた明るさ。社交性がある。

村長に安藤の行動を報告しながら、広岡氏の説明によれば青年団長。昔で言う百姓代は一般の村人の代表として行政の長である村長。助役の行いを監視する役目でもあるという。村の将来を背負う者として今の村のあり方になんらかの不満を持っていないのだろうか？ 木場田自身は安藤をどうしたのだろうか？

村長の不穏な動きに対して、村から逃がしてやろうとはしなかったのだろうか？

今向かっている「穴」はケイも恐れて近づこうとしない場所だ。村長は村人の中にお参りしている者がいると言っていたそうだが、それは明らかに嘘だろう。中に入ったらまともではいられないというのだから。

しかし逆に、もし、村人が凶器を手に直接安藤を襲ってきたようなら、村人たちが決して追ってこない逃げ場でもある。

更にうがった見方をするなら、木場田がそう安藤をそそのかして穴にとどめ置き、紅倉を呼ぶ餌に利用している、とも考えられる。

話して歩きながら2つ、3つ、4つと鳥居をくぐった。

次々現れる鳥居は、最初20メートル間隔くらいに思ったが、徐々にその距離を縮めていき、10メートル、7メートルと、くぐる

前から向こうに次が現れた。

漆を塗ったように真っ赤だった鳥居が、段々黒ずんでいき、それは年月を経て使い込んだ堆朱の色の変化のようだが、その黒はべたべたと手垢にまみれたように汚く感じられた。中から汁がにじみ出して粘つくように見え、間違っても触れたくない。周りの木々の幹がいくつもうるを開けてぼこぼこ病気のようにこぶを作り、黒く湿ってねじ曲がっていた。

「すみません、わたしは、これ以上は……」

木場田はそれ以上足が進まないように立ち止まり、青黒く、生唾を飲み込んで必死に吐くのを堪えているような顔を見せた。

「いいですよ」

と紅倉は無理をいたわるように言い、どうぞと後ろを指した。

「すみません」

木場田が逃げるように後ずさると紅倉が吹き付ける邪気からかばうように前に立った。木場田は少し持ち直した顔で。

「この先にしめ縄の張った洞窟がありますから、そこが目的地です。安藤さんはその中にいるはずですよ」

「そう」

先ほどの木場田の説明は怪しいが、紅倉は追求せずうなずいた。その代わりに。

「安藤さんの質問に、あなたはどうか答えたんですよ？」

「安藤さんの質問？」

「あなたはこの村をどう思っています？」

安藤は具合悪そうに体をそわそわせながら、眉間にしわを寄せ、質問を反芻するようにうんうんとうなずきながら、

「村は好きです。生まれ育ったところですからね。大切に思っています」

と答えた。

「こんな窮屈な村を、出たいとは思いませんか？」

「わたしたちはここで生きて行くしかありませんよ」

「なんで？」

「わたしたちは運命共同体ですから」

「村の外で活動されている人もいますよね？」

「彼らだって、心はこの村にあります」

「郷土愛、っていう意味？」

「意味は……、いろいろです」

木場田は思わせぶりに笑おうとして、体の不調に思い切り気持ち悪い顔になった。紅倉はまっすぐ木場田の心を見つめるようにして訊いた。

「わたしが村をぶつつぶす存在なら、あなたはどうします？」

木場田は限界が近いように表情をつつろに、体をふらふらさせながら言った。

「その裁きは……、中の門番に任せますよ」

「ありがとう。どうぞ、お帰りになってけっこうです。ああ、もう一つだけ」

紅倉は人差し指を立てて質問した。

「あなた、ご結婚は？」

「いえ。まだです」

こんなひなびた田舎では嫁の来手がなくて、とかなんとか冗談の一つも言いたくなる話題だろうが、もう木場田は余計なことは一切思考が回らないようだ。

「ありがとう。もういいですよ」

芙蓉が懐中電灯を奪うように受け取ると、木場田はぼうつと夢遊病者みたいな様子でよろめきながら去っていった。後ろ姿を目で追って、前方に向き直った芙蓉もいささか血色の悪い肌をしている。「美貴ちゃんも帰っていいわよ？ とりあえず美貴ちゃんのお世話になるような危険はないと思うから」

「いえ。どんなところなのか見てみないと安心できません」

と、芙蓉が先に立って歩き出した。紅倉が追い越し。

「背中に隠れて付いてきて」

「すみません……」

芙蓉は素直に従った。これまでも危険な心霊スポットにはいくつか行っているが、先生に守られてさえ、これほど気分が悪く、心が押しつぶされそうに弱くなったのは初めてだ。

鳥居をくぐる。

心臓から送り出されたばかりの血のように真っ赤だった鳥居が、今はめつきりべたべたした黒が支配的で、周りの木々のねじれ具合は段々に凄まじく、放射能に犯されたようにおどろに形を崩している。

向こうに4つ、連続して鳥居が立ち、それはもう真っ黒で、タールのように溶け落ちそうので、そして、岩の壁にしめ縄を張った洞窟の入り口があった。

それを見た瞬間に芙蓉はゾツと心臓に細かな裂け目が走ったようなショックを受けた。

近づきたくない！、と正直に思った。

洞窟は人の手が入っていて、縦2メートル、横1・5メートルくらい、炭坑のように木の柱で支えられ、床板もあり、それは奥へそのまま続いているようだ。

上辺から少しはみ出してしめ縄がぶら下がっていたが、真っ白色の抜けたわらが中から弾けたようにばらばらにささくれ立ち、縛りが弱まっていた。

岩肌を木の根が割って飛び出していたが、樹皮がずり剥けたように割れ、白い中身を見せ、土の関係なのだろうが生傷のように赤い筋を走らせ色を滲ませていた。

鳥居を二つ残して、芙蓉はとうとう足が動かなくなってしまった。「いいわよ。美貴ちゃんもここから離れて、わたしの帰ってくるのを待っていて」

紅倉が引き返してきて芙蓉の手から懐中電灯を受け取るうとした。芙蓉は意地になって放そうとしなかった。そのくせ心がフリーズドライのようにがさがさに縮み上がって声を発することもできない。

固まってしまった芙蓉に紅倉も困ってしまった。

「美貴ちゃん。わたしは大丈夫だから。ね？」

懐中電灯を握りしめた手を両手で包んで、固まった指を揉みほぐそうとする。恐怖の表情を張り付かせて呼吸をする黒い穴に魅入られたように目を見開き、芙蓉は一生懸命指をほごうとする紅倉の指に甘え自分の使命を放棄しそうになった。

先生、ごめんなさいっ！……………

ひどく後悔するのが分かっているのに、得体の知れない恐怖に心が負けそうになった。

指が外れ掛けたとき、

芙蓉の目は信じられない物を見て、驚きの色を差した。

誰も入れないはずの呪われた洞窟から、

白い少女が出てきたのだ。

48 見えない少女

芙蓉は固まったまま口が利けなかった。

確かに洞窟の奥から歩み出てきた少女は、お誕生会にでも着るよ
うなおしゃれな白いスーツとスカートをはき、白いエナメルの靴を
履いた、十歳くらいの可愛らしい少女だった。ただ、髪の毛まで真
っ白だった。眉毛も白く、唇の色も薄く、瞳だけ黒かった。

あり得ない場所に突如出現した少女を、芙蓉は幽霊だろうと思っ
たが、輪郭がはっきりし、足や髪の毛に向こうの景色が透けて見え
ることもなく、芙蓉の目にはどう見ても現実の女の子としか見えな
かった。

「あ・・、あの、先生、お・・、女の子……………」

芙蓉はようやくあくごを震わせながら言い、懐中電灯と反対の手で
指さした。

「うん？」

紅倉は振り返ったが、

「どこに？」

と首をかしげた。芙蓉は驚いた。

「先生。いるじゃないですか、そこに、白い服の……………女の子が」

「白い服の女の子お……？」

紅倉はう……んと目を細めて透かし見たが、

「どこ？」

と見えないようだ。しかし肉眼に見えなくても、紅倉の目なら、
生きていようと死んでいようと、人の気配が見えないわけではないの
だ。すると……。

『すると、これは、わたしの頭が作り出したイメージ？』

と芙蓉は怪しんだ。そういえば少女は毛の色以外純日本人的だが、
顔立ちは紅倉先生によく似ている。

紅倉美姫によく似た十歳の少女は穴の前に立って芙蓉を安心させ

るようにニツコリ笑った。芙蓉は。

「先生。どうやらわたしの頭が幻を見ているようです。恐怖に負けようとする心を守るために自衛装置が働いたようです」

と、冷静になって説明した。それがどうして紅倉の少女の姿をしているのか分からないが。

紅倉は芙蓉が見ているらしい所を眺めて、

「ふうーん。面白いわね？ 確かに、わたしになにも見えないんだから、そういうことなのかしらねえ？」

と、一応納得したように言った。

「美貴ちゃん、大丈夫？」

芙蓉はすっかりうなずいた。

「失礼しました。大丈夫です。行けます」

「そう？」

紅倉は心配そうにしたが、芙蓉のオーラが健康的な色を取り戻したのを見て

「じゃあ行きましょうか。でも、無理はしないでね？」

と歩き出した。芙蓉は紅倉について歩いていき、少女に近づきながらドキドキした。頭の中のイメージだと思っただが、そこに居てリアルだ。少女はニコニコしながら紅倉をよけ、芙蓉が隣に來ると、手を伸ばして腰に触れた。

芙蓉ははつきりと触られる感触と熱を感じた。

少女の背は芙蓉の胸の辺りで、少女は芙蓉の腰に手を当てながらニコニコ芙蓉を見上げた。

どうやら芙蓉の脳はどうでも少女の幻を「本物」と思い込ませたらしい。芙蓉はこんな場所にいる少女に不気味だとか怖いだとかいうネガティブな感情をまるで抱かなかった。本能的に自分の味方であるというのは間違いないと感じる。たしかに、こんな思い切り自分の好みの少女と一緒にいられたら、怖いなんて後込みしてられない。

枯れ枝を燃やした跡があった。白い灰が積もり、数本の黒焦げた

枝が載っている。

「ここで煙を焚いて、穴の中をいぶして安藤さんを奥へ追いやったようですね」

「ふうん、木場田さんの話からするとそうなんでしょうねえ」

芙蓉もまだこれが先生を誘い込むための罫ではないかとの疑いを捨てていない。

入り口前に立つ鳥居が十三個目だった。

芙蓉は紅倉を追い越して最後の真っ黒な鳥居をくぐり、

懐中電灯をつけ、中を照らし、入り口をくぐった。

木の柱と梁が連続し、地面も丸太の横木を並べた上に板を4枚縦に並べて差し渡し、ずっとそのまま続いているようだ。壁にノミがかかるはしだかの当てられた跡が見え、洞穴と言うより坑道、簡易なトンネルのようだ。

人工の物ならなんの目的で作られた物なのだろうか？

人が作ったからには最初から人の立ち入れぬ呪われた所ではなかっただろう。

木組みはかなり古そうで、何故かこれら木材は鳥居や表の変形した木々のような禍々しい変質はしておらず、代わりに天井を支える梁に大きなひび割れが走っていたり、足場の板が普通に腐って足が踏み抜きそうになったりして、純粹に落盤事故の危険が感じられた。「先生、足元に気を付けてくださいね？」

すっかりいつもの調子を取り戻して芙蓉は先に立って歩いた。その後ろを少女が腰を掴んでぴったりくっついてくるのがくすぐったいようで変な感じだが。

トンネルは緩やかに下っている。

奥から嫌あな空気が上ってきている。血に脂肪が混じって腐った、きつい悪臭だ。ペンションに帰ったら今晚は大量に入浴剤をぶち込んだ風呂に2時間は浸からなくてはならない。

トンネルは左右のぶれはなく、山をグルッと回ってきてはつきりとは言えないが村に向かって伸びている。ただかなり山を下ってき

たから、更に下っていくとなると完全に村の地下に潜っていくことになるに思う。

少女のおかげで立ち直った芙蓉はこのまま行けると自信を持った。

しかし。

歩きながら、芙蓉は得体の知れないめまいを起こし、頭がガンガンに痛くなってきた。胸が気持ち悪くて、まあやったことはないが安い酒に悪酔いしたみたいに、吐き気がしてしょうがない。なんとか堪えながら歩き続けたが、めまいがひどくなり、突如平衡感覚を失ってドドツと床に倒れ込み、危うく岩の壁に頭を打ち付けそうになった。

「す、すみません……」

懐中電灯の黄色い灯りで足元を確かめ立ち上がるうとするのだが、頭の中身がぐらっと傾いて、意志と反対方向にドオツと転げ落ちてしまった。

「くっ……」

芙蓉は板の上をゴロゴロ転げ、両手で掻いて、必死に立ち上がるうとしたが、めまいがひどく、視界がぐうーっつと回転して、気持ち悪くてならない。芙蓉はまたすっかり自分の頭がどうかしてしまった恐怖を感じた。

紅倉が、

「ああー……、これは美貴ちゃんには無理だわ」と言った。

「先生？……」

自分の何が駄目なのか？ 芙蓉は悔しくも胸が気持ち悪く、するよように紅倉に訊いた。

紅倉は平気なように、斜めに立ち、言った。

「視覚の罾が施されているのよ。これは自然に出来たものじゃなくて、意図的に仕組まれたものね」

「どんな……罾なんです？……」

芙蓉はその仕組みから抜け出せずに苦しみながら訊いた。紅倉は相変わらず平気な様子で。

「この道、うづん、この道と柱のユニット、水平に続いているように見えて、実は少しずつ斜めになっていって、ご覧の通り、けつこうな傾きになっているのよ」

と、斜めに立った紅倉は手を左右に開いて平均台に乗ってバランスを取っているように体を揺らした。

「傾いている？……」

芙蓉は確かめるように懐中電灯の光を前方に向けたが……、それが罾なのだ。床板と柱、天井の梁は直角を保ち、水平だと思い込んでいる脳は、耳の三半規管の斜め信号を誤りとして受け止め、無理やり補正しようとして、まんまと、斜め地獄の罾に陥り、視界が回転し、無様に転げ落ちる醜態を晒してしまっているのだ。

ケイが

「自分たちのような人間はかえって平気なんだけど」

と言った仕掛けの正体がこれだ。視覚に頼る健常者にはここは感覚の狂った地獄の廊下だ。

理屈は分かっても、日常的に擦り込まれた感覚のズレを修正するのは難しく、どんなにこうだと感覚に命令しても言うことを聞かず、脳の酩酊状態は収まらない。

「ああ、無理しない。目を閉じて、水の中にもいるように考えて。耳の平衡感覚に素直になって」

芙蓉は壁に寄りかかり、素直に目を閉じた。ボディーガードのもりがまったく足手まといだ。目を閉じていると段々気持ち悪さが収まってきた。しかし困った、これでは先へ進めない。

「美貴ちゃん、役立たず……」

紅倉が意地悪を言って笑った。

「わたしが前を歩くから、しばらく灯りを消して、わたしに掴まっ
てついてきなさい」

芙蓉はまったく無様で情けないっただらないが、

「はあーい。よろしくお願いしまあーす」

と、紅倉の肩に掴まらせてもらった。懐中電灯は紅倉が預かった。
芙蓉は紅倉の両肩に掴まらせてもらって、まるで幼児の電車ごっこ
だ。紅倉が運転手、芙蓉が車掌、謎の白い女の子が芙蓉の腰に掴ま
ってお客さんだ。

歩きながら、芙蓉は出来るだけ何も考えないようにした。視覚を
イメージするとどうしてもまためまいに襲われる。本当に、何をし
に付いてきたのか分からない。
が。

突然、ザワツと全身の肌が泡立つ感じがして、これまでと比べ物
にならない凄まじく強い危険を感じた。

はつきりと、凄まじい敵意を持った存在が、そこに、居る。

「美貴ちゃん」

紅倉が言って、カチツと懐中電灯のスイッチを入れて、前方を照
らした。

またも鳥居の連続があった。

しかしおかしな眺めだった。

真っ黒な鳥居が、

足元に小さな、靴の先が入るかどうかというミニチュアの鳥居が
立ち、

徐々に大きくなって、八つ目で、天井近くの高さになった。鳥居
と鳥居の間はメートルくらい。中間地点でよけるのとくぐるのと
面倒そうだ。

しかし。

そんなことを考える余裕は芙蓉にはなかった。

八つ目の鳥居の向こうに、鉄格子のドアがある。

その鉄格子の向こうに、

真つ赤な人間が、

手足を鎖につなぐられ、中途半端な姿勢でぶらさがっていた。
うなだれていた首がグルツと動いて顔を上向かせた。

「あああ~~~~~」

その口の発した声を聞いて、芙蓉は体が震え、今すぐ走って逃げ
帰りたい衝動を感じた。

生ある体の本能が、最大限の危険信号を発していた。

赤さびた鉄板を爪で掻きむしるような不快な声は、これ以上なく
危険な、死、そのもののように思えてならなかった。

49 鬼巫女衆

ケイはミズキに

「どうもこつちはただで帰しちゃもらえないようだ。紅倉さんの約束だ、平中さんのことを頼むよ」

と言った。ミズキは

「なんでしようね？」

とケイを心配したが、

「ミズキ兄さまは部長さんが至急お話があるそうですよ？」

と麻里に冷たく言われ、ケイにも

「いいよ。さつさと済ませてきな」

と促され渋々部長の職場に向かった。

「さ、ケイ姉さんはわたくしと」

麻里に手に触れられて、ケイは虫ずが走るように払いのけた。

「わたしに触るんじゃないよ、この、魔女め！」

ひどい剣幕だが、麻里は手を乱暴に払われたことにも腹を立てずに子どもしからぬ薄笑いを浮かべたままじいっとケイを見つめていた。その視線がケイには腹立たしくてならず、ヒステリックな怒りを燃え立たせる。

「わたしを姉さんなんて気安く呼ぶんじゃないよ、この気色悪い魔女娘！ わたしがこの村の人間であんたを一番嫌っているって知ってんだろう！？」

「あらひどい。傷つきますわ」

と、麻里は見下した薄笑いを崩さない。

「わたくしはケイ姉さんを実の姉のようにお慕いしておりますのに」
「どの口が言いやがる、白々しい」

麻里ははつきりと馬鹿にして白い歯を見せて笑った。日本人形のように美しい娘であるが、日本人形のように気味悪い。麻里はしらすとした目つきになるときびすを返し。

「無駄なお世話を掛けさせないでいただきたいわ。さつさと遅れずに付いてきてくださいまし」

と、スツスツ、と無駄のない足裁きで歩き出した。かなりの早足だ。

「くそつ……」

ケイはむかついて悪態をつき、大股で歩きながら、時折不安そうに立ち止まり杖で辺りを探った。

「こつちですわよ」

「分かつてるよ！」

麻里はフツと小馬鹿にしてまたスツスと素早く歩き出した。ケイは向きになって大股で追いかけた。

村長の家の裏手に、高い土台に隠れるようにして一軒の家があった。

「ただいま戻りました」

と麻里は玄関に入り、革靴を脱ぐと廊下を奥へ向かい、イラツとした陰険な目で後ろを振り返った。バン、と半分開いていた引き戸に肩をぶつけてケイがまたカツとなった。

「麻里！ あんたわざとだね！」

盲者をからかう子どもものいたずらに本気でカツカして、麻里は可笑しそうに笑った。

「不自由ですわねえ？ お察しいたします」

クスクス声を忍ばせて笑い、ケイは歯をギリギリ言わせた。

麻里は廊下の先の裏口の土間で赤い鼻緒の草履を履き、正面ではなく右の収納庫のような戸を開けた。

更に頑丈なドアがあり、地下へ下りる階段があった。

「置いていきますわよ？」

ケイは靴を履き替えることをせず、ブーツのままドカドカ廊下を歩いてきた。

「お行儀の悪い」

麻里は眉をひそめて、プイと、先に立って階段を下りだした。

白色灯の照らし出す白々した通路を通り、板間の部屋に出た。

こたつにあの妖怪婆あと4人の女たちが足を入れていた。

老婆はぬくぬくと綿入れを羽織り、他の女たちは白い着物に、赤い袴をはいているようだった。一人女の子がいて……それは表の祭で神楽を舞った小学校高学年の子だった。巫女装束の大人に混じって一人お祭の化粧をして草色の半纏を着ているのがいかにも楽屋裏でくつろいでいるようで微笑ましくも思えるが。

「おお、来たか。おこたに当たって足をお温めと言いたいところじやが、場所もふさがつとるし時間もないからのう、話をさせてもらうぞ」

「話つてのは、」

ケイが敵意剥き出しで老婆にくつてかかった。

「わたしに紅倉を殺せてこつたらう？ ええ？ 鬼ババア！！」

老婆は出来るだけ穏やかに話そうとしながらケイの口の悪さに洗面を作り、たしなめるように言った。

「言わずもがなだがの、皆の手前もあるし、念のため言うておくぞ。わしや鬼木のババじゃ。鬼ばば、ア、は余計じゃ」

部屋の入り口に突つ立つたケイはへつと笑い。

「どうせみんないずれはその妖怪と同じ鬼、ババア、になるんだらう？」

こたつに入った他の女たちはムツとした目でケイを睨んだ。鬼木のババの歳の離れた妹みたいな六十代の女、その娘みたいな四十代の女、その子どもみたいな小学生の女の子。一族三代の女たちが集まったみたいだが、大字村の者は女もみんな親戚みたいに同じ顔立ちをしている。態度の悪い生徒のためにいっしょに先生に叱られているようにケイの隣に立つ麻里だけ、他の女たちと違う高貴な丸顔をしている。都会的な顔立ちのケイは明らかに村の外からの客人だ。

「ケイよ」

老婆は辛抱強く言い含めた。

「もうちいと村のものと仲良うせんか。村のみんなも、この鬼木の巫女衆も、仲間じゃろうが?」

ケイはうんざりしたように首を巡らせた。

「どうでもいいよ、そんなこと。それよりも」

サングラスの目で睨む。

「なんで紅倉を殺す? 紅倉は安藤って男を連れ帰りに来ただけなんだろう? さっさと連れ帰らせりゃいいじゃないか?」

「それは村長と話し合ってもう決まったことじゃ。今さら和を乱すな」

「てめえらで勝手に決めるな!」

「おば様」

隣の麻里が冷たく突き放した口調で言った。

「教えて差し上げればよいのです、ケイ姉さんに、誰のせいであるという羽目になったのか」

「なんだよ?」

ケイはじろりと睨んだ、麻里は涼しい顔ですましている。

「鬼ババア?」

「じゃから鬼木の婆じゃと……。ええわい。

公安のもんが村に入り込んだのはおまえも聞いておろう? 奴

らに紅倉を殺すよう脅されておるんじゃ」

「何をネタに脅しているって言うんだい?」

「それが大問題ですわねえ」

ケイは茶々を入れる麻里を睨み、婆に答えを求めた。

「麻里や。見せてお上げ」

「はい、おば様。さ、どうぞ、ケイお姉さん」

麻里は馬鹿にした調子で、胸ポケットから出した一枚の写真をケイに持たせた。ケイは一応見る仕草をして、イライラ訊いた。

「なんの写真なんだい?」

おばばにうなずかれて麻里が教えた。

「殺人の決定的な瞬間を撮られてしまいましたの。ちんぴら男の喉を、グサツ、とね」

「・・・・・・・・・・」

ケイが顔を強張らせて麻里を睨んだ。麻里は平気な顔で、多少の非難を含んで、言った。

「とんだ失態ですわね、ミズキ兄さま」

ケイは苦しそうな表情で写真の表面を親指でこすった。そこに写っているミズキの殺人の証拠をイメージした。

……鬼木の婆は悪人である。

ケイの持っているのはミズキのただ笑う横顔を撮りただけのスナップ写真である。おそらくクロや仲間と話しているところを撮られたものだろう。本物の、ケイが殺人を犯している、証拠写真は村長が持っている。

麻里も子どもの姿をした悪魔である。

鬼木の婆は麻里に写真を渡し、

「こやつが人を殺す現場を監視カメラに撮られた」

と伝えただけである。それだけでこの日本人形の顔をした悪魔はすべて、自分の役どころを、了解した。彼女はただ自分の知る「事実」のみをケイに伝えただけである。喉をグサツ、は脚色であるが、ミズキのやり口を心得ている。

ケイは脂汗を滲ませ、

「くっそー……………」

とつめいた。婆は、

「ミズキを守るためじゃ。紅倉を殺せ」

と命じた。ケイが惑う素振りを見せると声を荒げて畳みかけた。

「おまえは紅倉とミズキ、どっちが大事なんじゃ!？」

ケイは歯を食いしばり、

「公安をぶつ殺せばいいじゃないか!? わたしが片づけてやるよ
お!」

と吠えた。婆は、

「馬鹿もんが! 写真は警察から公安が無理やり接收した物じゃ!
警察からミズキを守っておる公安を殺してどうするんじゃ!」

と叱りつけた。ここのもも卑怯だ。村長はいずれ村に入り込んで
いる公安も始末するつもりでいる。婆は、

「どうするんじゃ、ケイ!? あれほどおまえのために尽くしてく
れとるミズキを、見捨てるんかっ!」

と迫った。それでもケイが苦しそうに黙っていると、静かな顔に
なり、ふてくされたように言った。

「おまえがやらんのなら、むしろ巫女衆でやる。紅倉も危険じゃし、
あの男も生かして帰すわけにはいかん。紅倉の情婦の芙蓉も、男の
恋人の女もじゃ。修羅道じゃが、それがわしらの運命じゃ。それが
嫌なら、さっさと村を出て、神の力を天に返せ」

最後通告をすると、よっこらせと立ち上がり、巫女たちもさつと
立ち上がり、年輩の者が老婆の手を取った。

「義母さま。われらで、まいりましょう」

婆はこれ見よがしに大きいため息をつき、

「そしよつかのう……」

と未練だらだらに言った。

「皆の内何人生き残れるか……分かんがのう……」

「分かったよ、わたしがやるよ」

チツと舌打ちしながら、とうとうケイが言った。

「紅倉をどうでも殺らなきゃならないなら……、わたしがこの手で
やるよ……」

隣で麻里がニッコリ笑って言った。

「ご安心を、ケイ姉さん。ケイ姉さんはわたくしたちが守って差し上げますから」

ケイはむかつく顔をしながら、何も言わなかった。

50 敵の敵は

ミズキが資材調達部部長の仕事場を訪ねると、外遊部隊隊長の黒木がいつしよにいた。

部長の表の職業は小学校の校長である。

賢木 双十郎（さかき そうじゅうろう）校長先生、53歳。

賢木 又一郎（さかき またいちろう）助役、57歳の弟である。

弟の双十郎氏の方が背が高く、面長で長方形の顔をしているが、表情は兄弟よく似ていかにも温厚そうで世話好きな人の良さが溢れている。

場所は小学校の校長室であるが、賢木校長先生は祭の役員に名を連ね、草色の半纏を羽織っている。

ノックをして入室したミズキは、しばらく外の気配を探り、デスクの前にやってくると気ぜわしそくに問うた。

「ケイに紅倉を殺すよう指示が出たそうですが？」

「なにっ!？」

寝耳に水の黒木も驚き、「部長？」と校長に迫った。

「落ち着きなされ。そう騒がないようにな、助役からも、村長からも、釘をさされたわい。」

そう怒らんと。考えてみい、今村で一番強い力を持つとるんは誰じゃ？ ケイじゃ。どうでも紅倉を倒さねばならんことになったら、一番強いケイを頼むんは、当然だろうが？」

うん？と困った渋面で問われ、黒木は

「しかし……」

と、後の言葉を口ごもった。黒木は頼みの部長に対し村長に先手を打たれてしまった。部長は仕方ないといった調子で続けた。

「そもそも原因を作ったのはケイだ。自分で始末を付けるのも、当然と言えば当然じゃろう？」

ミスキが黒木に顔で問うた。黒木はやるせない渋面で教えてやった。

「ケイがちんぴらにとどめを刺しているところを監視カメラに撮られてしまったんだ」

ミスキも青くなって、しかし黒木と部長に訴えた。

「それはケイの責任じゃないです！ 監視カメラなんて、俺たちが気を付けてなければならぬことじゃないですか？ 気を付けていたのに、いったいどこでしくじったんだ？」

「近くのカメラじゃない。遠くの、たまたま運悪くこちらを向いていたデジタルカメラに撮られていたんだ。コンピューターで解析して得られる情報だ、現場ではカバーしきれない。そういう時代なんだということだ」

「でも、ケイのせいじゃない！」

ミスキは懸命に二人を説得しようとした。

「ケイは紅倉に親しみを感じています！ ケイが唯一心を許せる相手なんです！ だが紅倉は、そんな甘い相手じゃない！！ ケイは、紅倉には勝てません！！」

「そのために」

部長はまた詰め寄られるのを分かっている嫌な顔で言った。

「麻里たち巫女衆がサポートに付く」

「ケイは麻里が大っ嫌いなんです！！」

部長は顔をよけ、そらと眉を曲げた。

「とにかく……。今頃もうケイは神につながっておるんじゃないか？ もう手遅れだよ。あつちのことは、わしらじゃ手出しでけん。そうじゃろ？」

「そうですね」

苦虫をかみつぶしたような顔ながら素直に同意した黒木にミスキは驚きと非難の目を向けた。黒木はむかつきを我慢するように静か

な視線をミズキに向け言った。

「神の中に入ってしまったら、俺たちにはどうすることもできん。そんなことは分かっているだろう?」

「はい……………」

事実そうなのであるが、常にケイに寄り添い、若いミズキにはそれはとうてい承伏できることではなかった。

「しかし部長」

と、黒木は部隊のリーダーとして部長に毅然と宣言した。

「俺たちは今回の一件、とうてい納得できません。俺たちにも責めは当然だが、村長のやり方も拙いんじゃないですか? ケイが戻ったら、俺たちとして、きつちりけじめは付けさせてもらいますよ?」

黒木は怒りをたたえた目でまっすぐ射抜くように部長を見つめ、
「行くぞ」

とミズキに声を掛け、さっと出口を向いて歩み去った。ミズキも思いきり不満そうな顔で部長に礼をし、黒木を追って部屋を出た。

ドアの向こうへ二人を見送った部長は一仕事終えたように、ほー
ー…、と息をつき、ギツと椅子を鳴らして表を眺めた。

「可哀相になあ。ケイが生きて戻ることはないよ」

表に出た黒木は、

「部長ならと期待したが、やはりあの人も単なる自分を良く見せた
だけの日和見（ひよりみ）人間か」

村に帰ってきたときには何かと気に掛けあれこれしてくれた部長の人情を信じたが、所詮は村長派の助役の弟、親切にしてくれたのは単なる部下の人心掌握の手管だったということか。それをまんまと信じていた自分が腹立たしく、吐き出すようにつぶやいた。自分もケイと一緒に「よそ者」として見捨てられたような惨めな気分だ。鋭くじつと遠くを見るようにして、

「ミズキ」

と決意を込めて呼んだ。

「ケイを救い出すぞ」

ミズキはパツと顔を輝かせ、

「ハイッ」

と元気に返事した。黒木は表情を引き締めて言う。

「だが部長の言うとおりだ。神につながってしまったケイを俺たちが助けることは出来ない。せいぜい『室』に押し入って鬼木の婆と巫女たちを脅しつけることくらいしか出来ない。それに……、俺たちは地下のことは知らん。神職以外の者は立ち入り厳禁だからな。助力がいる。……………」

黒木は誰か心当たりがあるように検討し、言った。

「……青年団の、木場田団長を頼ろう……」

ミズキは、それはどうだろう？と眉を曇らせた。

「木場田団長なら紅倉を案内して『ガス穴』に向かいましたが……。青年団は自警団の母体です。村を危険に晒すようなことに協力は……、どうでしょう？……」

「うん……」

黒木も考え、いや、と決心した。

「今村を危険に晒しているのは村長のやり方だ。大事な村民を犠牲にして、村を守ったことになるか！！いつも裏に潜んで事を操っているから考え方が陰険になっているのだ。村を守っているのは、表に立って戦っている俺たちだ！」

「ハイッ！」

ミズキは嬉しくてつい話の途中に大きく相づちを入れてしまった。

黒木はニヤリと苦笑し。

「木場田さんは兄貴肌の、気持ちのいい人だ。俺たちの気持ちを理解し、ケイを救い出す手伝いをしてくれる。木場田さんの話なら鬼木の婆さまも聞くだろう。そもそも巫女たちが一番直接的にケイに世話になっているんじゃないか！？いくら村長の命令でも、恩人を命の危険に晒すなど、巫女たちも話せば分かってくれるだろう。」

しかし……」

黒木は難しそうに考えた。

「木場田さんに頼んだとして、それでも婆が拒否すればケイを神の中から引き上げることは出来ない。婆は、村長とは子どもの頃から懇意なようだから……。やはり……」

いささか自信なさそうに自嘲気味に言った。

「紅倉……に頼るしかないか……。ケイがそれほど買っている女なら、ケイの窮状も察して味方になってくれるはず……と言うのは甘いか？」

ミズキに情けなく笑って見せ、

「それほどの女なのかどうか……。いくら『現代最強』などと騒がれても所詮生身の女、『門番』に出会って無傷では済むまい。いつそ……、門番に取り込まれて潰れてくれればそれで話は済むのだが……。それも甘いか？」

黒木はピシャンと自分の頬を打って気合いを入れ直した。

「出来るなら紅倉にコンタクトを取ってこちらの味方にしたい。いくら紅倉の足が遅くても時間的に穴にたどり着く前に追いつくのは無理か。しかし芙蓉美貴は穴に入れまい。中途半端な霊能力ならなおさら穴から吹き出る腐った靈気に耐えられまい。芙蓉に接触できれば、あの二人はテレパシーで結ばれているそうだから紅倉にこちらの考えを伝えてくれるかも知れない。……しかし、穴の入り口だと普通人には近づきがたいか……」

黒木は誰かそれが可能な人間を考えたが、これは思い浮かばなかった。

「クロさん」

「うん？」

ミズキが強い決意を秘めた顔で言った。

「ケイの救出、任せてもいいですか？」

「おまえがケイを救い出さないで、どうする？」

「俺が穴に行つて芙蓉にケイのことを伝えます」

黒木も内心それを考えていて、意思を確認するために訊いた。

「きついぞ？ おまえは常にケイと一緒にいるから俺たちよりいくらか耐性はできていると思うが…、正気を失うかもしれないぞ？」

「負けませんよ。ケイを救うためです」

黒木は坊やのミズキの面構えを見てうなずいた。

「よし。頼む。ではすぐ向かってくれ。途中木場田さんに会うだろうから…、末木の家に来てもらってくれ。俺たちはそこで作戦会議を開いて、木場田さんを待つ」

「了解です。では」

「うん。気を張って行けよ？」

「ハイッ」

ミズキはいても立ってもいられないように駆けだした。小学校は広場から奥まっているが、

『目立ちやがるな』

と黒木は温かく苦笑した。勢い良く突っ走っていくミズキを見れば村人は何ごとかと思うだろう。

「あいつの心意気を裏切らんためにも、なんとしてもケイを助け出さねばな」

黒木も歩き出し、キラリと、凶暴な面相になった。

51 神通

大字村は水が豊富である。

ケイは身につけている物すべて……サングラスも、脱いで、薄い白襦袢一枚だけまとい、襦（みそぎ）に望んだ。

地下で天窓など無い部屋は一切の闇で、入り口に置かれたLEDの白色のランタンだけが冷たい光を発し、奥に立つケイの半裸身を寒々と浮かび上がらせている。

部屋にはザアー……ツと水の流れ落ちる音が響いている。

ケイは膝をつき、まず水槽に溜め置かれた水を桶にすくい、肩から掛けた。水は氷水の冷たさで、肌突き刺すような痛みを感じ、心臓がショックに躍り上がった。ブルツと震えが走るが、体を慣らすために反対の肩からも掛ける。唇がブルブル震え、あごがカチカチ鳴った。カコンと桶を放り出して立ち上がる。体の震えが止まらない。ザアー……ツと言う頭の上から水の流れ落ちるのを聞き、氷の飛沫の混じった冷気が恐ろしく後から後から沸き立ってくる。

ケイは覚悟を決めて地下の室内に注がれる滝に歩みを進める。すのこからセメントの水場へ下り、足首まで水に浸かった。ゾツとする冷たさが痛みと共に駆け上がる。この冷たさは危険だと心臓がドクドク警鐘を鳴らす。胸を締め付けられ、ヒツヒツとしゃくり上げるようにして、ザアーツと雪崩落ちる冷水に、足を進め、ザアツと頭を打たれる。ドドドドドオツと耳の中で激しく音が鳴り、体がブルツと大きく震え、一切の思考が奪われる。日頃口汚く悪態をついてばかりのケイが、一瞬で、無垢な少女のような殊勝な素直さになる。

『くそつ、わたしはこれから……』

と思うのだが、激しく頭と肩を打つ冷水に煩惱……抵抗心を叩き出される。ケイは無心になり、ただブルブルガタガタと体を震わせ、胸の前に固く両手を握り合わせ、ひたすら耐える。やがて。す

つまり時間の感覚は失われているが。体の心まで凍えさせられついに意識がふうつと消え入りそうになると、自衛本能が、命を燃やすようにカツカと一個一個の細胞を発熱させる。スウィーツと震えが止まり、滝の中にもうもうと湯気を立ち上らせる幻想を見る。思考を超えて神経がカツと目覚め、ナイフのように鋭く研ぎ澄まされる。人間存在を超えた、神に、近づく。

ケイは背をしゃんと伸ばし、滝から出た。

部屋の外に控えていた麻里がやってきてバスタオルで軽く髪の毛と体の水滴を吸い取らせた。

「こちらへ」

麻里についてケイは廊下へ出る。

「ここから階段です。お気をつけください」

踊り場で向きを変え、更に下りる。更に。

地上からだいぶ下になるだろう、空気が重く、物音が重い。

「こちらです」

廊下を歩き、

「『室』でございます」

かしまる麻里を行き過ぎ、音の響きの固い空間に出る。固い岩盤が剥き出しの10帖ほどの部屋であるのをケイの鋭敏な聴覚が見て取る。

固い空気感に、冷たく澱んだ空気のひとかたまりがゆらめいていた。床の中央に切られた「穴」の湿った空気がわずかな風に表面を漂わせていた。

部屋の中には3人の女がいた。鬼木の婆と年かさの巫女たちだ。小学生の女の子はいない。鬼婆もここではぬくい綿入れを脱ぎ、他と同じ白の小袖と緋袴姿をしている。

重い戸を閉めて麻里も部屋に入った。

ここも灯りはLED電球のランタンが使われていた。

部屋は寒い。熱を持つ物は女たちしかないが、冷たい空気は薄着の巫女たちの肌に深々と差し込んでいき体温を外へ外へ引き抜いて

いく。

その中でケイが最も寒いかつこうをし、まるで自身が冷凍庫のようだ。

「ケイ。頼んだぞ」

ケイは迷いのない歩みで穴の縁まで行く。1メートル四方の穴はやはり1メートルほどの深さで、下は湿った小砂利が敷かれている。ケイは手を貸そうとする年輩の巫女を断り、縁に腰かけ、体をひねって前向きになりながらぺたりと砂利に足を付き、屈んで尻を付くと、寝そべった。床下は支柱が等間隔に並び、床と同じ広さの地面が壁に仕切られている。

「ケイ。よいな？」

「ああ。やりな」

婆が下がり、巫女たちが部屋の隅に畳んでおいた戸板を4枚ちようつがいでつなげた物を持ってきて、穴を囲んで立て、合わさった端と端を縦のかんぬきでロックした。

婆の指示で壁のスイッチが押され、何か電気装置らしいそれは、入力を示す赤いランプが灯った。

ランタンの明かりが万が一の非常事態に備えるだけの必要最低限に絞られた。元よりケイの目にこの暗さでは光は映らないが、四角く切られた天井の隙間にもほぼ完全に光はなくなった。

電気装置が作動させた機構が働き、ブウウーン…とモーターの回る振動が伝わってきて、ゴトゴトと、もつと静かだが重い音が響いてきた。

ケイの手足と背中を、ひたひたと水が浸していった。真つ暗闇に冷たい水に浸されていったら、それは普通の人間には耐えられない恐怖だろう。楔ぎを行い心を凜と落ち着かせたケイにもその恐怖は抑えがたいものがあつた。それでも、ケイは日常的にこの恐怖の中にいる。本心を言えば、車も、人も、恐ろしくてならないのだ。だが、この「死」の恐怖は、別種の恐ろしさをはらんでいる。

ひたひた背中を浸し、徐々に上がっていく水位は、耳を浸した辺

りで止まった。

闇と冷たさに慣れたつもりが、恥ずかしいほどドクンドクンと心臓の鼓動を大きく感じた。

ざわざわと、足先からおぞけが走る。

近づいてくる。

すっかり冷え切ったケイの体でも、この氷のような冷たさの中ではずいぶん温かい熱源なのだろう。

それは人肌の熱を求め、匂いを求め、いそいそこの囲いの中に身を伸ばしてきた。

ケイの裸足に触れ、はいずってきた。

ゾゾゾ、とおぞけが全身を走る。

『ああ嫌だ、この世で最もおぞましい感触だよ』

そう思いながらケイはじつと我慢する。ぬるぬるした形の定かならぬ物が脚を這い上がり、腰にまとわりつき、腕に絡みつき、首筋へ、ケイの肌へ、ぬるぬると染み入る嫌な感触ですがりついてくる。耳孔からケイの内部に入り込もうとする。おぞましい感触は顔に張り付き、唇を覆った。

ケイは巫女としてそれに身を委ねねばならない。

ぬるぬると髪の毛の中にまで染み込んできて、ケイは突然身が燃えるような強烈な感覚に震える。五体を超えて感覚が広がる。

今、ケイが「神」となる。

くわつと押さえつけられていた感情が沸き立ち爆発的に膨れ上がる。

ケイの「神の目」が開く。

意識がゴゴゴゴゴ、と物凄い勢いで「穴」を駆けていく。

『紅倉ああ……………』

自分でも制御の利かない衝動が暴れ出そうとする。

赤子が母を求めて泣き叫ぶように、ケイは紅倉を求めた。

紅倉……、わたしを……、

救ってみせろ！……！……！……

52 赤い門番

それはそこに、居る、としか芙蓉の目に見えなかった。

「あああ~~~~~」

心をグサグサに掻きむしられる声に足がすくんで腰が抜けそうになる。

「あれは……、幽霊のはずですよねえ？」
思わず紅倉に訊いた。

10メートルくらい向こうに鉄格子がはまり、その1メートル、2メートルほど向こうに、天井の両端から下がった鎖に両手を吊されて、それはぶら下がっている。

「あああ~~~~~」

と聞かされるこちらが身をよじりたくなる声を上げてぶらぶら揺すっている体に、大型懐中電灯の黄色い光線を受けた鉄格子がはつきりと影を映している。

黄色い光の中で、それは真つ赤な姿をしていた。

「ねえ先生」

と芙蓉は怖くてならず、紅倉に問い直した。悪い靈気にすっかり精神をやられておかしくなってしまった安藤哲郎……では明らかにない。女だ。

何者なのだろう？

「あれは巫女ね」

紅倉がいつもの口調で言った。それで芙蓉は少しだけ自分を取り

戻した。

「幽霊ですよね？」

紅倉は振り返り、ちよっぴり可笑しそうに芙蓉を笑った。

「そんなにはつきり見える？」

「はい」

「うん……。ここの空気は霊媒物質の濃度が異様に高いのね。スコールの起こる直前の熱帯雨林並みね。それに、あの霊自体、凄まじい怨念をかかえて、自己主張が強いのね」

「あああ~~~~~」

芙蓉はビクツと震え、思わず耳を塞ごうとした。両手を爪が食い込むくらいぎゅうつと握りしめ、勇気を振り絞って赤い幽霊を見た。全部真っ赤で分かりづらいが、着物と袴を来て、確かに巫女の装束のようだ。

「一人じゃないのね」

紅倉が説明する。

「何人もの巫女たちが重なり合ってあの姿を作っているわ。古い霊ね。ここ十数年の物ではないわ。」

何十年どころか、何百年の年代物ね。生きていた頃の記憶は……、幽霊になる以前に壊れちゃっていたみたいね。

鉄格子と、鎖と、鍵、

紅倉が懐中電灯の光を動かして指し示す。紅倉自身ここではよく目が見えるらしい。

赤錆びてぼろぼろになった鉄格子と、天井と床につながったやはり赤錆びてちぎれそうな鎖、鉄格子の手前の柱に鉄格子の錠前を外す鍵がぶら下げられている。

「ああ、そうか」

紅倉が気づいたように言う。

「元々は本当の人の死体がぶら下げられていたのね。巫女たちの幽

鬼がここから外にさまよい出ないように、呪詛を掛けたのね。体を与えて縛り付けたのよ。この」

と、向こうから手前に順々に小さくなってくる鳥居を指して。

「鳥居もそうね。鳥居は神様のテリトリーへの門というか玄関みたいなものだから、段々狭くして行って、ここからは出られませんかよ、と教えているのね。」

鎖、鉄格子、鍵。実態のないも同然の幽霊にそんなもの、本来意味は為さないんだけど、あれによって縛られている、と思い込ませて、かろうじて人であることを保たせているのね。あの幽霊にしても、やっぱり人でありたいと思っっているでしょうから、この呪詛が成り立っているのね」

芙蓉は哀れに思い、少しだけ余裕ができた。

「巫女と言うからには神に仕えていたのでしょうか？ どうしてこんな姿になっているんです？」

「神、ねえ……………」

紅倉は皮肉な調子に言い、暗いため息をついた。

「神というのは、元々は尋常ではない強い力を差したもののよ。元々、神に、いいも悪いもないのよ。」

太陽や大地や大河、人間に恵みを与えてくれる物への感謝と畏怖、という人の営みに密接に関わる物へ意味を込める以前に、

巨木の生い茂る深い森や、

静かすぎる湖や、

巨大な岩や、

霊峰と言われる高い山や、

経験的に、そこに立ち入るだけで、それに触れるだけで、何か、とてつもない物を感じ、本能的に恐れる、

そういう物が、本来の神の本質なのよ。

人知を超えた強い力、
それは確かに存在するのよ」

最近「パワースポット」と呼ばれて騒がれているのがそうなのだろう。紅倉はそれこそが原始的な神の姿であり、神の本質であると力説する。

「神は人の霊体なんかがまともに触れることの出来ない強大な霊的パワー。」

それは、本来は自然の霊体が宿した物なんだけど、
崇徳院も、藤原道真も、平将門も、基本はいつしよよ。

……昔の人は今とは比べ物にならないほど魂が濃かったんでしよ
うねえー！……。

我を忘れる……人間であることを忘れるほどの、
激烈な、怒りの感情と共に命を落として、その負のパワーが爆発
して、祟り神となったのよ。

怒りこそ人の力を最も強く引き出す感情だものねえ…。

神に必要なのは、徳なんかじゃない、力よ！

人のコントロールできない、激烈な、パワーよ。

だから神様っていうのは、最初はみーんな災厄の形を取るのよ。
荒ぶる神こそ、神の原初的な姿なのよ。

でも、生きている人間はそれじゃあ大迷惑だから、
力の入れ物〃社を建てて、荒ぶる魂に入ってもらい、神として祭
り上げ、力の及ぶ場所を限定してもらおうのよ。

そうして住居を与えられた神が、祝詞（のりと）と言う呪詛によ
って『あなたはこういうものなのですよ』とキャラクターを与えら
れ、それに則（のっと）った多くの参拝客に拝まれ、敬（うやま）

われることによって自分はそうであるという自覚が生まれ、人々の思いに応えることによって、徳のある

神様

になるのよ。

荒ぶる強大なパワーを『神様』にするのは、人、なのよ」

では、芙蓉は質問する。

「ここにもそうした『神』がいるんですか？」

紅倉はうなずく。

「そう……、

いるのよね、神が……。

とんでもない神様みただけ……。

神は人に拝まれ敬われて、仁徳ある神様になる。

神の善悪を決めるのは人なのよ。

その点ここの神様は……、なんととっても『人を呪い殺す』神様ですからね、本来の荒ぶる神に限りなく近いわけよ。

しかもここの人たちは、具体的なターゲットを決めて、確実に仕留める、

そういう殺人マシーンとして神をコントロールしているのよ？

あの巫女たちの幽霊を見る限り、ここの人たちは何百年も前からそういうことをしてきたようね。

人を呪い殺すような強大なパワーをコントロールしようとして、それに触れる巫女が、まともでいられないわけないわよね？

で、やっぱりまともでいられなかった巫女たちのなれの果てが、あれなわけよ」

「あああゝ」と人とは思えぬ奇声を上げる幽鬼は、いわば神の禁忌に触れた、崇りの形なのだった。

53 紅倉の宣戦布告

赤い……かつて巫女たちだった女の幽霊は、奇声を上げながら鎖にぶら下がった体を揺すり、侵入者に怒っているのか、ただ不快に感じてむずかっているのか、判断できない。幽霊の常として論理的思考に乏しいものだが、この場合、完全に壊れてしまっているらしい。

むつつと押し寄せてきた濃い臭気に芙蓉は胸が悪くなった。樽で熟成させた年代物の血液を掻き回しているみたいだ。

吐き気に頭痛がしながら、芙蓉ははつと基本的なことを思い出した。

「先生。ここに安藤さんはいないのでは？ だって、こんな所、どんな状況だろうと普通の人間がここまで来れはしないでしょ？」

ましてあの幽霊から向こうにいるなんて、絶対あり得ません！ ここまでの途中にいなかったんですから、安藤さんはこの穴にはいないんです！」

芙蓉は、やはりこれは罠か、と怒りを覚えた。安藤はどこか別の場所に隠されているか……、それより、とつくに殺されてどこかに埋められているのだろう。

「先生、引き返しましょう！」

芙蓉は紅倉の腕を掴んだ。が、その腕に抵抗を感じ、驚いて顔を見た。紅倉はいかにも心残りをありありと、じいっと赤い幽霊を見ていた。

「先生？」

芙蓉は非常に強い不安を感じて紅倉に呼びかけた。

「美貴ちゃん。あなたは引き返して。わたしは念のため奥を見てくるから」

「先生！ いるわけありません！」

「うん……、まあ、そうなんだろうけれど……」

紅倉は自分でも分かっているくせにどうしてもあきらめきれないみたいに関わり悪い苦笑をした。

「なんだかねえ……、見てみたいのよ」

「先生!!」

芙蓉は怒ってぎゅうつと紅倉の腕を握った。

「あんな化け物、いったいどうするって言ってます!?! あれは…

……、パワーは先生より上です。違いますか?」

紅倉は困ったなあと眉を寄せた。

「そしてみたいねえー」

「じゃああきらめてください。帰りますよ」

「やだ」

「先生つ!!」

芙蓉は本気で怒って紅倉の両肩を掴み、間近につばを飛ばして叱りつけた。

「あれはもう人の幽霊なんかじゃありません! 完全な化け物です

! 救おうなんて、考えないでください!」

「別に救う気なんてないけど…」

叱られた紅倉も意固地になって聞き分けなく口を尖らせた。

「あれは毒の固まりですつ! あんな物に触れたら、ただじゃ済み

ませんよつ!」

「だ〜いじよぶ、だいじよぶ」

「大丈夫じゃありませんつ!!」

「んんん〜」

駄々をこねる紅倉を睨み付けているうち、芙蓉は本格的に胸が悪くなつて、吐きそうになつて紅倉を放し、あまり触れたくない壁に手を付けてうつむいた。

「だいじよぶ?」

紅倉が心配して丸まった背を撫でた。

「先生、お願いです、ここを離れましょう?」

「ごめんね美貴ちゃん」

紅倉がスツと離れて、芙蓉はぎゅっと胸が痛んだ。

「どうしても、ね」

紅倉は、ニヒルな薄笑いを唇に浮かべた。

「何故です、先生？ 何がそんなに胸に引っかかるんですか？」

「なんかね……。」

あの幽霊見てたら、ここの神様にむかつ腹が立ってきた。

うふふふ……

なるほどねえ、『手のぬくもり会』がわたしに来てほしくなかったわけえー。

彼らの大事な神様、表に引っぱり出して、ぶっ潰してやりたくないっちゃった」

芙蓉は、……これもここの毒素にやられたということなのだろうか、紅倉の精神状態が非常に危険なレベルにあることを感じ、恐れ

た。
「先生。先生だってこれまで、神と戦うのはさすがに無理だ、って、おっしゃってきたじゃないですか？」

「今回は、勝機があるの」

「危険な賭なんでしょう？ 命を懸ける？」

「まあね」

紅倉はもう意志を変えないすつきりした表情で、穴の奥を睨んだ。
「でも。所詮わたしはそういう戦い方しか出来ないのよ」

54 幽霊殺し(前書き)

！！警告！！
極めて残酷な描写があります。お気をつけくだ
さい。

54 幽霊殺し

「はい、これ。わたしはいらないから」

紅倉は芙蓉に懐中電灯を渡した。

「門番って言うんだから、門はあの更に奥にあるんでしょうねえ？」
のんきに首をかしげる紅倉に、心配でならない芙蓉は訊いた。

「本当に、あの化け物をどうするつもりですか？」

あれは毒その物だ、と芙蓉は思う。例えるならば、

エボラ出血熱を患った幽霊のような物だ。

全身を真つ赤に染め上げる出血の飛沫に触れるだけで霊体を犯され……、あれだけはつきり実体を現しているのだから肉体も直接害を受けるだろう。

あれは存在そのものが毒で、危険なのだ。

「今回わたしは大丈夫。なんと言っても天神様にたつぷりお賽銭を上げて拜んできたから。」

ジャジャー、秘密兵器」

と、紅倉が黒のダツフルコートの内から取り出したのは天満宮で買った破魔矢だった。芙蓉は呆れた。

「さっきあれだけ神様を分かり易い俗物におとしめて、よくもまあぬけぬけと」

「別に俗物におとしめてなんかいないわよお」

芙蓉はちよつと笑えた。

「準備の良いことで。……それ、役に立つんですか？」

「もちろん立つわよお？ 高かったんだから」

破魔矢は鈴と絵馬は外されていた。棒に赤と金の帯が巻かれ、矢羽は白でお尻が赤く染められている。やじりは神頭（じんとう）という、流鏑馬（やぶさめ）に使われる紡錘形の物が付けられている。もちろん飾り物だから、矢としての殺傷力など無い。芙蓉は大いに不安を持って訊いた。

「それでどうするんです？」

紅倉はグツと矢を逆手に持って、凶悪な笑いを浮かべた。

「ぶっ刺して、ぶっ殺してやるのよ」

おふざけをやめてまじめな顔で言った。

「あれだけはつきりした実体を持って、人間でいたがっているんだから、もう一度ちゃんと殺して、普通の幽霊にしてやるのよ」

芙蓉に注意した。

「ここは危なくなるから、どうしてもわたしを待っている気なら、うんと離れていてね？」

「もちろん、待っていますよ」

困った子ね、と笑って、

「行つて来ます」

紅倉は奥へ歩き出した。

つま先の入るか入らないかのミニチュア版の鳥居から1メートル置きに、8段階で2メートルちよつと高くなっている天井までの鳥居へ段々大きくなっていくが、4番目、5番目は外へよけて通る余裕が狭まり、6番目はくぐる幅が狭く、懐中電灯を当てている芙蓉は紅倉が触れてしまうのではないかとはらはらした。真っ黒な鳥居は見るからに毒々しく、べったり濃いタールが染み出しているようだ。紅倉は、普段はあれほど物につまずいたりぶつかつたりしているくせに、こういうところでは器用に危険物をすり抜ける。

鉄格子に迫る紅倉に、

「あああ~~~~~」

と赤い女が反応し、檻の中のチンパンジーのように体を前後に揺すった。離れて見守りながら芙蓉は瞳に膜の張るような粘着質の刺激に目を瞬かせ涙をにじませた。

「美貴ちゃん、下がって」

紅倉の鋭い声に芙蓉は大人しく2メートル、3メートル、退いた。

紅倉は最後の鳥居をくぐると柱から鍵を取ったが、それはぼろぼろで、とてもはや錠前を回す強度を保てるとは思えなかった。しかしそんな心配をする必要もなく、鉄格子の扉自体、錆が松の樹皮のように浮き本体は痩せ細り、ギイとこちらに引くとバラバラバラと大量の赤錆を振り落として開いた。この様子では少なくともここ数年間この扉の開いた様子はない。つまり、安藤哲郎はほぼ確実にこの奥にはいない。

それでも紅倉は扉を越えた。

ねっとりした空気が肌に塗りとくられた。紅倉の白い肌にぶつぶつと水膨れが膨れ上がり、弾けてピンクの汁を垂らした。紅倉がゾツとした顔をした。

「これはちよつと……、痛いじゃないの……」

神経の鈍い紅倉はちよつとした打ち身では怪我をしたのも気づかないほど痛みを感じにくい。その紅倉が痛そうに顔を歪めた。紅倉は肉体の神経が鈍い分、霊体の神経は人の百倍くらい鋭いのだ。しかもこれは肉体も霊体も両方の毒素をたっぷり持っていた。

ガシャン、と鎖を鳴らして赤い巫女が体を前に飛び出させた。

「あああ~~~~~っ」

腕を伸ばしきり、首に筋を立ててあごを突き出し、……温かい肉体を持つ紅倉を仲間と誤っているのか、敵と誤っているのか、いずれにしろこいつに触れられたら結果はいつしよだろう。

「あああああ~~~~~っ」

赤い女は口を大きく開けて鼻のひん曲がる血なまぐさい息を吐き出した。

芙蓉は突然気道に血の膿が溢れ出したようなゾツとする気持ち悪さを感じ、瞬間的に総毛立ち、体温が一気に5度くらい下がり、堪らず胃の中の物を吐き出した。頭の中が大地震のまっただ中にあるようにグラングランと揺れ、また大きく転がりながら堪らず逃げた。床板に手を付いたが、バランスを崩して肩をしたたかに打って倒れ、

ズキンとした痛みによく我を取り戻した。

耐えられない吐き気がこみ上げる直前、両手の指の付け根に針を何百本も一気に突き刺されたような激痛に驚き手を跳ね上げさせた。その後に襲ってきた吐き気に、先生のダメージの大きさを感じたように思ったが、違う。芙蓉が感じたのはあの場の不快感だ。それまで両手の指輪でリンクして先生に守られていたのが、針の突き刺す痛みで驚いて芙蓉が自分からリンクを切ったのか……、いや……、違う……、先生がリンクを切ったのだ。自分とリンクしていたら自分のダメージを芙蓉に与えることになると考え、意図的に切断したのだ。

芙蓉は自分を取り返しのつかない失敗をしてしまった気がしてゾツとした。『先生!』と叫ぼうとしたが、口を開くとむっつと血なまぐさい腐った空気がなだれ込んできて、むしる転げるようにまたその場から逃げた。胃のひっくり返るような思いに涙が溢れた。凄まじい耳鳴りがして頭が割れるように痛い。泥酔者のように無様に転げながら、芙蓉は紅倉を永遠に失ってしまふ予感に声も上げられずに泣き続けた。

「死ねえっ!」

紅倉は右手を振りかぶり、女の首の付け根に破魔矢を突き立てた。「ぎゃあああああああああっ」

何百年と、思いがけない痛みには女は悲鳴を上げ、わめきながら顔を振り立て、体を揺すって暴れた。全身からごおつと赤黒いオーラが噴きだし紅倉に当たった。ズボツと矢を引き抜くとビュウツと血が噴き出し、紅倉を濡らした。幽霊の血をかぶった紅倉は、「うわあああっ」

と鬼の形相で叫び、グサツ、グサツ、と女に矢を突き立て続けた。

生者の肉体には凶器になり得ないおもちゃの矢は、幽霊の肉体にはちょうどよくぶつ刺さった。

「うわああっ、死ねえええっ！！！！！」

突き立てた矢をビツと横に引き、血管を引き破り、ブシャアツ、と大量の血を噴き出させた。

「ぎゃああああっ」

耳の痛くなる悲鳴を上げ、ビクビク痙攣し、女は腕を伸ばしてぐったり鎖にぶら下がった。…と、すぐに顔を上げ、

「あああああ~~~~~」

とわめき、紅倉を凄まじく恨んで睨んだ。

紅倉は逆手に持った矢を横から女の首に突き刺し、グリグリねじ込み、

「死いいねえええっっ」

グシャツ、グシャツ、と握り拳の下に血を叩きながら矢を突き刺し続けた。

「うぎゃああっ、ぎゃああああっ」

狂ったように悲鳴を上げて狂ったように躍り上がり、女はだらんとぶら下がって静かになった。…と、またすぐに顔を上げて「あああ~~~~」とわめき出す。

「死ねっ！死ねっ！死ねっ！」

紅倉は矢を突き立て続け、すっかり狂気に取り憑かれている。

「気合いだ！気合いだ！気合いだあっ！人を殺すのは、気合いだあっ！！！」

グサツ、グサツ、と凶器を突き刺しながら、その血塗れた顔に鬼女の笑いを浮かべている。

辺りに充満する血の霧に、黒い渦がいくつか巻き、紅倉に取り憑いてきた。

「やかましいっ！！！」

紅倉は全身から真っ赤な、炎のオーラを吹き出した。黒い渦は炎に焼かれ、人の顔となり、

「ぎゃあああつ」「ぎゃあああつ」

と恐ろしい悲鳴を上げて、苦痛に歪み、わずかの炭の粉を残して消えていった。

「うおおおつ、うわあああつ」

破魔矢を振るう紅倉の、同じ人間を何度も何度も殺し続ける殺戮は続く。断末魔の悲鳴を上げて息絶え、再び再生して身のすくむわめき声を上げるのは、同じ女の姿に何重にも重なった何十人、ひよつとしたら何百人の巫女たちの幽霊なのだ。紅倉はそれを一人ずつ「人間として」殺し続け、幽霊となって紅倉に祟ろうとする死霊を炎のオーラで焼き消しているのだ。

「死ねっ、死ねっ、」

矢を突き刺し続ける紅倉は、腕がすっかり疲れて動きが鈍くなってきた。

「うあああああゝ」

首から矢を引き抜こうとする腕に、女が大開口開けて噛みついた。骨まで染みて駆け広がる黒い毒に、

「イイイイイっ、」

紅倉も歯を食いしばって脂汗を噴き出させた。女の乱杭歯が衣服を突き抜け肌に食い込み、肉を噛み潰そうとし、べたあつとした唾液が肌を濡らすのを紅倉は不快に感じた。ブルブル震える腕をぎゅうううと力を込めて拳を握りしめ、

「めんどくさいっ、みんなまとめて、皆殺しだっ！！！」

全身から炎を噴き出させ、周囲の空間皆炎に巻き込んだ。ぐおおおつと渦を巻いた炎が通路の四隅を満たして前後に爆発的に突っ走り、その中で

「ぎゃああああつ」

「うぎゃあああつ」

「ひひひひひっ」

「ひひひひひっ」

「わああぎゃああああつ」

何十という凄まじい悲鳴が叫ばれ、

「うわああっ、死ねえっ、死ねえっ！」

紅倉は真っ赤な影となつて矢を振るい続け、ずたぼろに崩れた女の肉体を引つかき回し、ぐさぐさに切り裂き、これでもか、これでもか、と突き刺し続けた。噴き出す炎は何十という女の幽霊たちを凄まじい苦悶の絶叫を上げさせながら焼き消していく。

紅倉は自身、己が誰なのか、その素性を知らない。その強すぎる霊能力ゆえ自分というものを失っていた時期があるらしい。もう2年前になるか、九州の怨霊巣くう廃病院でもこうして霊たちを焼き殺したことがある。紅倉が最大限攻撃的に霊波を使うときこのように炎の形を取るのは、自分自身その廃病院で「わたしは焼け死んだ！」とはつきり言っているから、そこからどのようにかして甦り、その際にこの人の尋常ではない強力な霊能力を得たのかも知れない。炎が真っ赤に燃え上がり、内包する物の形をすっかり消し去り、

「ごおおおと言う物凄いい音が声も何も消し去り、ごおおおと燃えるだけ燃えた炎は、もはや燃やす物は何もないとわつと消え、天井に巻き上がった最後の火花を一瞬で弾かせ、真っ暗になった。

すっかり静かになり、何もかも焼き尽くしたと思われる空間に、天井からぼろぼろになり途中で引きちぎれた鎖がぶら下がり、足元にうずくまった影が、ごそりと動いた。

影は立ち上がると、疲れ切り足を引きずるようにして、奥へ、歩き出した。

55 幻との対話

芙蓉は懐中電灯のスイッチを入れると光線を奥へ向けた。黄色い光を受けて真つ赤な霧が汚らしく浮き上がった。ゆっくりと対流する濃い色つきの空気の奥を見通すことは出来ない。

芙蓉はため息をつきスイッチを切った。どれくらいここで先生を待たなければならぬか分からないし、電池がどれくらい保つのか分からない。芙蓉はがっくりとうなだれ、疲れ切っている。板から外れた岩場にお尻をつき、腰を岩壁に付けている。ムカム力はずつと続いているが、我慢できる程度だ。頭痛もだいたい収まった。空気が汚れているが、軽くなった気がする。先生があゝの門番を倒したのだろう。その先生がどうしているのか芙蓉には感じる事が出来ない。門番がいなくなつたのなら追っていきたいが、あの赤い霧はまだ毒素をたつぷり含んでいるだろう。収まってくればいいが……、まだ10年くらいこのまま漂っていそうな気がする。穴に入ったのが12時半頃、さっき見た腕時計は2時を少し回つたところだつた。先生が先に行つてからどれくらいなのか、時計を見ている余裕なんか無くて分からない。

芙蓉は鼻から息を吐き、疲れ切つた顔を上げ、隣を見た。

白い服の少女が芙蓉と同じかつこうで座っている。

芙蓉の見える幻……と芙蓉は思つてる少女は、全身がぼんやり光つて暗闇に浮き上がつて見えている。こうして見ると幽霊っぽい。でも思い切り芙蓉好みのかわいい顔をして、こちらを見て微笑んで、全然気味悪く思わない。

「あなた、誰？」

芙蓉がお人形で一人遊びするみたいに訊くと、少女は答えた。

「わたし、ヒメクラ ミク。紅倉美姫の守護霊よ」

芙蓉は驚いてまじまじと、ヒメクラ ミクの顔を見た。

「紅倉先生の守護霊さま？」

「そうよ、美貴ちゃん。ちなみに、ヒメクラ ミク、は紅倉美姫の漢字の並べ替えよ」

姫倉 美紅、だ。

「本当に先生の守護霊なの？」

単なる言葉遊びみたいな名前に怪しんで訊くと、

「本当よお〜？」

と先生がやりそうなふざけた返事の仕方をして、芙蓉は笑ってしまった。姫倉美紅は先生より純和風で、子どもで、それだから真っ白な髪と眉がかえって異様だ。神がかつていると見えなくもない。

芙蓉はまだ信じていない。

「紅倉先生の守護霊さまなら、どうしてこんな所にいるの？ 先生は今たいへんなのよ？ こんな所にいちや駄目じゃない？」

相手が子どもの姿なのでつい話しかける口調も甘いものになる。

美紅はちよつと深刻な顔で答えた。

「だからよ。かなり危険なことになる予感があったから、わたしは紅倉を離れてあなたについていることにしたの。万が一の時の、保険としてね」

それが本当ならと、芙蓉も青ざめた深刻な顔になって訊いた。

「守護霊のあなたが離れてしまったら、先生が危ないじゃない？」

美紅はそれは大丈夫と首を振った。

「紅倉には他にも強力な守護霊が何人も憑いているから平気。わたしは紅倉の守護霊の中では弱い方だから」

「ふうーん、さすが先生。守護霊ってふうーん一人じゃないの？」

「代表的な人格はね。でもグループでいるのが一般的よ？ その人の成長に合わせてけっこう入れ替わるものだしね」

「ふうーん…。ね？わたしの守護霊は？分かる？」

「ノーコメント。紅倉に口止めされてるから」

「あつそ。……先生に内緒で？」

「ダメ」

「あつそ。…ケチ」

美紅は可笑しそうにクスクス笑った。子どもらしい自然さで、守護霊とはいえ幽霊の一種とこうして会話していることに芙蓉は不思議さを感じた。その疑問を敏感に感じ取って美紅が大人びた賢い顔で言った。

「紅倉に習って勉強しているでしょ？ わたしもこうして話しているのはあなたの頭脳をシェアしてもらってよ。…ここでは霊媒物質の力もあるかな？ 普段は紅倉の頭脳をシェアしているわけ」

「なるほど。やっぱりあなた自体はあんまり頭良くないんだ？」

「こらこら、呪っちゃわよ〜？」

「冗談よ。先生の守護霊なら頭をハッキングされても光栄よ。じゃあ……、守護霊自体は霊的なパワーはそれほど大きくないの？」

「霊体は憑いている人の霊体に同化させているわ。その場合何人の守護霊を持つことが出来るかはその人の霊的な体力によるわね。紅倉の場合肉体はふにやふにやだけど、霊的な体力は桁違いに大きいわ。美貴ちゃんもかなりスタミナある方だけどね。その他、霊体はあの世にあってテレパシーで結びついていてというパターンもあるわね」

「なるほど。勉強になるわ。」

「……どうして先生にあなたの姿が見えなかったの？」

「それは……」

美紅はちよつと考えて答えた。

「わたしと紅倉は霊的に同じ物だから、例えば…、鏡で自分の姿を見ているようなものよ。鏡に映った自分の姿を、別の誰かとは思わないでしょ？ ま、そういうことよ」

と、余りよく分からない例えだが、この美紅が中身も紅倉先生とそっくりだというのは話し方からしてよく分かる。芙蓉は美紅の

話を頭の中で整理して、まじめな顔で確認した。

「先生の方が一の時の保険にあなたをわたしに付けたというのは、あなたの判断なの？ それとも先生の？」

「紅倉の無意識の意識ね。考えたくもない最悪の場合に備えて、でしようね」

「最悪の場合って？」

「紅倉が死ぬ時よ」

「そんなことはさせない、絶対に」

「そうね。それは困るのよ。紅倉に、こんなことされてもらっちゃと、

美紅は心配するというより、ひどく迷惑そうな、冷たい目で赤い霧が漂っている穴の奥を見た。

その顔は非情で、悪霊怨霊に対峙するときの紅倉の横顔によく似ていた。

芙蓉の疑惑の視線に気づき、美紅は気まずそうに取り繕った笑顔になって言った。

「だから、その時は、美貴ちゃん、紅倉をよろしくね？」

「ええ。あなたも、よろしく頼むわね？」

「はい。……まったく…、紅倉美姫というのはやつかいな人間だわ……」

美紅がどういふつもりでそう言ったのか知らないが、

「同感だわ」

芙蓉が同意し、二人は顔を見合わせて笑った。

「……先生は、今はまだ大丈夫なのね？」

「大丈夫、……のはずよ？ 本当に危ないときははっきり分かるはずだから」

「もどかしいわね」

「まったくね」

二人は黙って、暗闇の中、不穩の漂う奥をなんとはなしに眺めていた。

と、

美紅がスツと反対の方を向いた。

「誰か、来た」

芙蓉もじつと緊張し、耳をすました。どたどたともつれる足音が響いてきて、大きく規則性を外しながら、速いスピードで近づいてきた。

空間を直接音が聞こえてきて、

「誰!？」

芙蓉は懐中電灯をつけた。

ガタンツ・・・と派手に音を響かせて、ミスキが足場に仰向けに転がり、呻きながら体を回転させた。

ミスキと、大きすぎるラブラドルリトリバー、ジョンだった。

56 決死の頼み

ミズキは頭の中がぐるぐる回って止まらないように辛そうに呻きながら体を反転させた。その気持ちは芙蓉にはよく分かる。ミズキもひどいが、犬のジョンも、かろうじて四肢を踏ん張っているが、主人？同様目を回してうつろな瞳でぼうつとする表情を首をブルツと震わせて必死に奮い立たせている。ミズキはジョンの引き紐を握り、ランタン型のランプを持っていたが、ランプはきつと途中で斜め地獄から逃れるために消したのだらう。しかし視覚のトリックが消えても坑内に充満して吹き上がってくる腐った毒の靈気にはどんなに靈感のない人間でも体調を著しく損ない、動けなくなってしまうのだらう。

そういう意味で普通人のミズキがよくここまで来られたものだと芙蓉は感心した。

しかし何をしに来たのだらうと考えると、呆れ返ってしまった。

「あなたいつたい何しに来たの？」

ミズキは起きあがれないで気持ち悪くしてしょうがないように体をのたくらせている。

芙蓉は仕方なく歩いていくと、ミズキの腕を取って癒しの気を送ってやった。ミズキが大きく呼吸して、まともに目を開けた。

「何か……、したのか？……」

「まあね。治療費、高く付くわよ？」

ミズキは呻きながら起き上がり、あぐらをかいて息を整えた。芙蓉はジョンにも気を送ってやろうとしたが、ジョンは焦点の合わない目で警戒して唸り声を上げた。

「ジョン。静かにしろ。ケイのためだ」

ミズキが叱るとジョンは唸るのをやめ、芙蓉が頭に手を当て気を送ってやると落ち着いたようで、濡れそぼった毒気を払いのけるように毛皮を震わせてすっかりした姿勢になった。逆に芙蓉は一步下

がり、警戒を露わにした。

「で？ 何をしに来たわけ？」

「あんたに頼み事に来た。……出来れば紅倉に直接頼みたかったんだが。」

ケイが神の中に入って、紅倉を殺そうとしている。

「で？ あんたたちはその支援にわたしを殺しに来たわけ？」

芙蓉は一応身構えるそぶりをしたが、ミズキは苦笑して首を振った。

「違う。それならこんな醜態は晒さない」

「でしようね。」

神の中に入る、って、どういう意味？」

「そのままの意味さ。この穴の奥に神が棲んでいる。ケイは穴の中を下りて、神と合体する、……んだそうだ。俺たちは部門が違うんでね、詳しくは教えられていない」

芙蓉はチラツと背後の穴の奥を気にしながら、訊いた。

「神というのは、実体のある物なの？」

「ああ」

ミズキは、……ケイが今どういう状態なのか考え、暗いすさんだ目で言った。

「神は、不死の存在、なんだそうだ。この村が出来た時から、ずっと、生き続けているんだそうだ。それはおとぎ話や迷信ではなく、本当に、いらっしやるんだそうだ。俺は見たことはないが、神に仕える巫女たちや神職は実際にその姿を見ているし、『神の肉』なら俺も見た」

「神の肉って？」

「これもそのままさ。その生き神様の体の一部をちようだいした物だそうだ」

「それをどうするの？ ご神体として社に奉つてあるわけ？」

「もつと生々しい使い方をする。それを食うと神の力を授かるんだ。しばらくの間ちよつとした超能力が使えるようになるのさ」

「あなた……食べたの？」

「いや」

ミズキは悪趣味さに顔をしかめて言った。

「村を守る自警団の連中だ。たぶん、今回公安を警戒するために食っているだろう。」

……そこで頼みだ。ケイは公安に殺しの証拠をネタに紅倉を殺すように命令されているんだ。だがケイは紅倉に心酔している。ケイに紅倉は殺せない。だが、いったん神の力に取り込まれたら、それでは済まないだろう。巫女たちを束ねる鬼木の婆も許さないだろう」

「鬼木の婆？」

「村長の家に出入りしている妖怪みたいな婆さんさ」

「ああ、あれ」

と芙蓉は合点した。

「だから頼む。紅倉に、ケイを助けてくれるよう伝えてくれ。頼む。……。あんたなら、紅倉に心が通じるんだろう？」

「心が通じる、っていうのはなかなか甘美でいいけれど……。残念ながら今は心が通じていないの。ご期待に添えなくてごめんなさいね」

「駄目なのか？ なんとかならないのか？」

必死な思いで苦渋を滲ませるミズキに、

「ほら」

と、芙蓉は穴の奥へ懐中電灯を向けて見せた。あの鉄格子からだいぶ離れているが、じわじわと赤い霧が広がって、奥は霞んで見えなくなっている。赤い霧を見たミズキは、気持ち悪さがぶり返して胸と口を押さえた。

「わたしでもここから先はとうてい進めないわ。先生がわたしを守るために自分で精神のリンクを切ったのよ。わたしからの呼びかけは……、とうていあの壁を突破できないわね」

「そうなのか……」

ミズキはここまで危険を押しやってきたのが徒労に終わってがつくりした。

「……紅倉は、先へ進んだのか？ 『門番』がいるそうだが？……」

「……」
「先生が始末したわ」

「やつつけたのか？ ケイでもあれには絶対近づきたくないって言うてたが？」

「霊に対しては先生は無敵よ」

と言いながら、芙蓉は紅倉のダメージを心配していた。しかしミズキはそのまま信じ、ケイのためにため息をついた。

「あまり認めたくはないが、紅倉っていうのは本当にすごいんだな……。ケイは……」

ミズキは大切な人の運命を思っただけ深く落ち込んだ。その様子を見て芙蓉は言っただけで止めた。

「先生もケイさんには好意的だったわ。ケイさんに先生を殺せないという気持ちがあるなら、先生には分かるわよ」

ミズキは希望に瞳を輝かせて芙蓉を見上げた。

「ケイを、助けてくれるだろうか？」

「わたしにはケイさんがどういう状態なのか分からないけれど、先生は彼女の味方をすると思うわ」

「そうかあ……。よかった……」

ミズキはすっかり安心したように思わず笑みをこぼし、芙蓉は本当に坊やだことと内心微笑ましく思った。

「ここまで完全な無駄足だったわね？」

「まあな」

ミズキは苦笑し、それでも明るい表情を見せた。

「それでも、俺には来た価値があったよ。ありがとう」

「お礼は後で先生に言うのね」

芙蓉は、さすがの先生も「神」相手にそこまでの余裕を持てるだろうかと思っただけ、ミズキにはないしよにした。それより。

「ねえ。じゃあ穴の奥は、別の所から入れる場所があるのね？」

「ああ。……村長の家の裏に鬼木の婆の家がある。そこから地下へ

下りられるはずだ」

芙蓉は考え。

「じゃあ、わたしたちもそこへ行きましょう。こっちからではとても先生の所へ行けないわ。そっちの方から…、神、にアクセスできれば先生にわたしのテレパシーを送ることが出来るかも知れない」

「よし」

ミズキは踏ん張って立ち上がった。

「仲間がケイ救出のために既に向かっているはずだ。巫女たちを制圧するのは造作ないだろう。さっそく向かおう。ジョン、頼む。…芙蓉さん、灯りはない方がいい」

ミズキはジョンの引き紐をしっかり握り、いても立ってもいられないように出口の方を向いた。

「芙蓉さん」

「ええ」

芙蓉はもう一度赤く煙る奥を見て、出口を向くと、懐中電灯を切った。大人しく黙って見ていた姫倉美紅がとなりで芙蓉の腰を触った。ミズキはまったく気づいていなかった。彼は靈感はまったくないのだろう。ジョンが最初芙蓉を警戒したのは美紅の存在を感じてだったかも知れない。先生によると犬は靈感があるそうだから（だから自分はいつも犬に吠えられるのだと恨めしそうにこぼしていた）。

『先生。これから、迎えに行きますからね』

「そっちのペースでどうぞ。ちゃんと付いて行くから」

再び真つ暗闇の中、芙蓉たちは外の光求めて歩き出した。

57 密约会談

時間を少し戻って。

紅倉と芙蓉を「ガス穴」に送って、その毒素にやられてぼうつとした頭で戻ってきた、村の青年団団長であるところの、木場田貴一は、山を下りて村内に入ったところで犬のジョンを連れたミズキに会い、資材調達部の黒木たちが待っていると伝えられ、ただならぬ様子に頭を目覚めさせながら末木（すえき）の家へ向かった。この五道の枝道を行った、電波山の麓の、隣に立ったポールに4つも大型のパラボラアンテナを付けた家だ。村には各戸に電気と電話線が引かれ、ケーブルテレビも行き渡っている。余計なアンテナは、外の世界では違法な電波データの収集用だ。

家の前に4頭の大型犬が並んで座っていてギョツとさせられた。ケイの飼い犬たちだ。犬たちは大人しくお座りしていて、木場田はゾツとした心持ちで犬たちの顔色を窺いながら玄関に近づいていった。

「ごめんください」

と戸を開けると、狭い土間に3組の男の靴があった。

「木場田さん。どうぞ、入ってください」

リーダーの黒木だ。木場田はすっかり頭をフル回転させながら、表情はいつも通り人当たりの良い社交性を維持して、廊下を上がってすぐの居間のふすまを開けた。

ちゃぶ台を囲って男が三人むさ苦しく肩を寄せ合って座っている。外遊部隊のデータ収集担当末木の仕事場は奥の部屋で、そちらには自作の高性能コンピューターが4台置かれて、ケーブルだのなんだの雑然としているが、こちらの部屋は物が少なく整然としている。コンピューター部屋も本人的には機能的に完璧に整理されているのだ。几帳面で他人の手の入るのを極端に嫌い、当然独身で一人暮らしだ。

「お呼び立てしてすみませんが、緊急に相談したいことがあります」
何やら決意みなぎる顔つきのリーダーの黒木を挟んで、レゲエかぶれの田舎の兄ちゃんの斎木と、末木。末木はUSアーミーみたいな頭のサイドを刈り上げ、ウルトラセブンみたいな眼鏡を掛けた近未来的なルックスの男だ。いかにもオタク的な神経質な顔つきをしているが、ジャンパーを押し上げて筋肉が盛り上がり、なよなよしたひ弱なところはまるでない。鍛え方までトレーニングフェチっぽい。

「なんででしょう？」

木場田はちよつと嫌だなと思いつつ腰を下ろし、ちゃぶ台の間に入った。

「ま、お茶でもどうぞ」

末木が急須に入っていた煎茶を湯飲みに注いでよこした。

「はあ、では」

飲むと、物凄く苦くていがらっぽかった。末木がつるんとした顔にニヤリと小馬鹿にしたような笑いを浮かべて言った。

「ガス穴に行つて来たんでしょう？　これで目を覚ましてくださいよ」

「目ならもう覚めてますがね」

と言いつつ木場田は茶を飲み、苦げえと顔をしかめながら、頭を120パーセントしゃっきりさせた。

青年団団長で村の自警団団長でもある木場田は外回りの遊撃部隊である黒木たちと普段あまり接点を持たない。妙に仲間意識の強い黒木チームは、村の守りの要として村民に頼りにされている青年団とどうも冷めた距離感がある。大量の茶葉を熱い湯で煮出した煎茶を飲まされるまでもなく木場田は内心かなり緊張してここに来ていた。

木場田はじつと表情を窺いながら黒木に訊いた。

「緊急の相談というのは、紅倉美姫の取り扱いについてですか？」

黒木はあいまいに首を振り、ため息をつくように表情をゆるめた。

「ま、知らない仲じゃないんだ、腹を割って話そう」

木場田の方が2年年上だが二人は同じ小中学校に通っていた幼なじみだ。木場田もうなずき、肩の力みを解いた。

「紅倉はガス穴に安藤という雑誌記者を連れ出しに行った。安藤がまともな状態とは思えないが……、それで紅倉は落としどころを付けると言う話だが？」

「それは村長に聞かされた話だろうか？」

「そうだが？」

何が問題なのか木場田は首をかしげた。黒木の目が怒っている。

「村長は紅倉を殺すためにケイを神の穴に下ろさせた」

木場田も驚いた顔をした。

「紅倉の件は、可能な限り穏便に済ませるという話だったが？」

黒木は

「そうか？」

と木場田も怪しむように斜めに睨んだが、まあいいと続けた。

「紅倉自体はいい。俺たちにとって邪魔な存在であるのは確かだ。

が、村長のやり方が許せん。その気になれば紅倉を殺すなど造作もないだろう。わざわざ霊能力の戦いにする必要はない。何故ケイを使うのか？が問題だ。村長はケイや俺たちを、使い捨ての駒としてしか見ていない。邪魔になったケイを消したいんだ」

暴力的な実力行使部隊の黒木たちに霊能力者紅倉の取り扱いのやっかいは分かっている。自分たちの不満が先に立ち、村長のように村全体の危機的状況など深刻に考えていない。

木場田はどうなのだろうか？

彼は真剣な顔でうなずき、もつともだとうなずいた。

「村長は村を大事に考えているんだろうが……、しよせんそのために自分が犠牲を払うわけではないからなあ……」

「そうだ！、とレゲエの斎木が身を乗り出した。

「そうだ！ 上の奴らは命令するだけで、自分たちは安全な場所にいて難しく悩んでいるふりをしているだけだ！ てめえが身を切る

立場になればコロツと態度も変わるだろうによ！」

齋木は頼りにした部長「賢木校長の冷たい態度を聞かされて憤慨している。木場田は齋木の弁にももつともだとうなずき、半纏の袖の中で腕を組んでうーん……と考え、黒木を見つめて問うた。

「君らの気持ちは分かった。で？ 俺にどうしろと？」

「あんだと、自警団の力を借りたい。まずケイを助けるために、あんだに鬼木の婆を説得してほしい。ケイを無事引き上げたら、自警団の後ろ盾で村民会議を招集し、村長のやり方を正してもらいたい」
木場田は難しい顔で考えた。

「ケイさんを助ける手伝いはしよう。しかし、村民会議となると……、年寄りたちはまず村長の側に付く。それに、公安の動きを考えるとそんな悠長な余裕はないかも知れん」

「公安は、どうなってるんだ？」

黒木は末木に視線を送りながら木場田に訊いた。

「3人、山の中に潜んでいるのを捕捉しているが、銃器で武装し、紅倉を殺りたくてうずうずしている。こちらに紅倉を殺る意志がないと踏めば、実力行使に出るぞ？」

「銃か……。いざとなれば隠密行動もへつたくれもなしか。こっちの立場を見越して舐めてやがるな」

と言いつつ、黒木は末木に発言を促した。末木はいくらか得意げな侮りを浮かべて言った。

「村に潜入した公安は4人だ。名前も顔も分からないが、人数は確かだ」

木場田は本当に驚いた顔をした。

「そうか……。あと一人いるのか……」

不安そうに脂汗を浮かべた。自警団は「神の肉」を食って超能力を得ている。その能力で村内及び周辺を走査して絶対の自信を持っていたのだ。

「なんとしても見つけださなくてはな。……まさかと思うが、あっちにも能力者がいるのか？」

末木が答える。

「どんな化け物がいてもおかしくありませんぜ？　今回作戦行動しているのは公安0（ゼロ）課だ。公安の中の公安、官房長直属の秘密作戦部隊だ。部隊の全容は不明。当然メンバーの素性を示すあらゆるデータも無しだ」

「官房長直属か……。すると、今の内閣の直接作戦と見ていいわけか？」

木場田はテレビに映った官房長の食えない渋面を思い浮かべた。一見常識家に見えて、かなり我の強い野心家で、頑固者だ。身内の与党議員にも反発を覚える者が少なくないようだが、そんなもの物ともしない。はたして作戦が内閣の総意、または総理の意志であるのか、疑問の持たれる所であるが。

「青二才の学生気分抜けの抜けないボンボンたちだと思っていたが、現実の困難さを前にあっさり変節したか。情けない」

テレビから伝わるうんざりしたようなやる気のなさを見れば、もはや睨みの利く実力者の言いなりか。

「まあ、いずれにしてもだ。国とどう交渉するにしても村の意志を一本にまとめなければならぬ。だが、若い者と年寄りで、確実に割れるぞ？」

黒木は眉をひそめて不思議そうに木場田を見つめた。

「木場田さん。あんたや……。青年団の連中は……。今の村のあり方をどう思っているんだ？」

黒木は木場田の思いがけず村の行政に不満のありそうな口振りに意外な思いがした。自分たちとしては単純に行政の長である村長に不信と不満を持っていただけで、自分たち以外の村人は皆一緒に連帯感を持っていると思っていたのだが、どうも世代間に意識の違いがあるらしい。

木場田はちよつと先走りすぎたかと拙い顔をしたが、あきらめたようにさっぱりした表情で言った。

「簡単なことさ。若くてエネルギーのある連中は外へ出ていきたく

てうずうずしている。村の因習に縛られることにはいい加減辟易している」

驚く顔の三人を見て、木場田の方が暗い影のある笑い方をした。「外で暴れ回っている君らには村の閉塞感は分からないだろうなあ……。」

君たちはどうなのかな？ ……ケイの仲間だものなあ……。
君たちを敵に回すのは拙いんだが…、我々はもう、

『神』から解放されたい、

と思っっているんだよ」

黒木の頬にカアツと赤い怒りが立ち上り、木場田はほら言わんことじゃないという顔をした。黒木が何か言う前に素早く言った。

「もういいじゃないか。どうして我々がいつまでもこんな『義務』を負い続けなければならないんだ？

もう、君らだって、ケイだって、いいじゃないか？

国が『神』を欲しがらるなら、くれてやればいい」

木場田の思いきった物言いに黒木は目を丸くして、しばし言葉を失った。ようやく。

「……………木場田さん、あんた、そこまで考えていたのか？……………」

木場田は照れくさそうに笑った。

「君が仲間を思つのと同じだよ。俺は青年団の仲間のことを考えているだけさ。もう異常な正義の味方を返上して、普通の人間として自分たちの幸せを追い求めたっていいじゃないか？ 年寄りたちは反対するのも知れないが、誰かが、どこかで思い切らなければ、俺たちの次の世代にまた同じ『犠牲』を払わせることになるんだぞ？ もう…、やめにしようぜ？」

木場田は子どもの頃の同級生を見る目で黒木を見つめた。黒木は

その視線を受け止め、両隣の仲間の目を見た。

「俺は……、やはりおまえらやミズキやケイが大切だ。神とその力は、この際木場田さんたちに任せても……いいんじゃないか？……」

齋木と末木は顔を見合わせ、黒木にうなずいた。

「俺たちはクロさんに従いますよ。ミズキも異存無いだろうし……、問題は、ケイだなあ……」

黒木はうなずき、さわやかな顔で言った。

「ケイは、ミズキに説得させるさ。あいつに説得されればケイだって……。なあ？」

「ええ！」

齋木は大口開けてエヘエへ笑い、末木も

「フツ」

とニヒルを気取りながら嬉しそうな顔をした。黒木もニツと笑い、

「木場田さん」

姿勢を正してまっすぐ向き合った。

「俺たちはあんたに従う。だから、ケイのことは助けてやってください。お願いします」

黒木が頭を下げ、齋木と末木も正座をして頭を下げた。木場田も正座してぐつと頭を下げた。

「ご協力させていただきます。……顔を上げてくれよ」

黒木たちが顔を上げると、木場田はニコニコと……、自信にあふれた顔をしていた。

「ケイさんを取り返したら、村長、助役を拘禁し、村は我々が主導する。」

公安を排除し、村がどうあるべきか、政府にオープンな話し合いを要請する」

58 ケイのこと

いわゆる「ガス穴」。

芙蓉は犬のジョンに先導されるミズキについて門番の鉄格子から出口向かって歩いていった。

穴は距離自体はそれほどではなく、200メートルといったところだろうか。その先に「門」があるはずだが、芙蓉はそこまでたどり着くことは出来ない。

外の光と新鮮な空気を求めて進む帰り道は楽で足取りも速かった。道はほぼまっすぐのはずで、暗闇の中歩いていて時々奇妙な感じがあるのは足元の板が左右に傾きを変えているからだろう。視覚に頼らないと角度はかなり大きくなっているのが感じられる。

表の明かりが見えてきて、芙蓉は言った。

「あなた、人を殺しているわよね？」

ほっとして喜び勇んだ足が、ふと重くなり、ミズキが固い敵意を含んだ顔で振り返った。

「それが？ なにか？」

開き直りというのではない、むしろ「殺し」に誇りを持ったような顔つきだ。

「誰を殺したの？」

「誰でもない。名無しの、クズだ」

激しい憎しみと、徹底した軽蔑を露わにしている。

「あなたがクズだと判断したから殺したの？」

ミズキは薄暗い陰の中で薄笑いを浮かべた。

「クズだと判断したのはケイだ。俺たちはケイを『審判者』としてその判断に従う」

「ケイさんつてずいぶんなカリスマぶりね？ でも、『呪い殺す』

のがあなたたちの売りじゃないの？ あなた、自分の手で殺したんでしょう？」

「サービスだよ、社会の害虫を駆除する。企業イメージアップの社会奉仕さ」

ミズキは気の利いたジョークを言ったつもりのようにだったが、自分で悪趣味さに嫌気が差し、前を向くとまた早足で歩き出した。芙蓉も続いて歩き、穴を脱出してしまふ前に訊いた。

「なんの必要があつて殺したの？」

単なる感情だけのことではないはずだと睨むと、果たしてミズキは、ため息をつくように言った。

「神の供物だ。……正確には、神の体にするんだ。別に本来は殺しが目的じゃない」

ミズキはチラツと振り返り、あんたは同盟者だから信用して話すんだぞ？、という目を見せた。

芙蓉は疑問に思つて訊いた。

「神は実体があるんじゃないの？」

歩きながら、ガス穴を出したが、ミズキはそのまま話し続けた。

「体はあるが、長い年月の内に形を無くしてしまったんだそうだ。

だから人の体を与えて、力を制御するためのインターフェイスとして使用するんだとさ。それ無しで神を使おうとすると、巫女が神に飲まれて、壊されてしまふんだとさ」

「なるほど。先生の見立て通りね」

ミズキはまたチラツと芙蓉の顔を見たが、歩き続けた。紅倉は門番を「巫女たちのなれの果て」と視たが、それは正解だったわけだ。

「ケイツて、何者？ この村の人じゃないでしょ？」

かわいい顔をしたミズキも微妙なところだが、面構えは村人と共通したところがある。けれどケイは明らかに村人とは異質だ。芙蓉は、あまり思いたくもないけれど、自分に近いタイプのように感じた。

「ケイは……」

ミズキはおつくうそうに重い口調で言った。

「可哀相な人だ。自ら業（ごう）を引き受けてくれた。だから、ケイは俺たちが守ってやらなくてはならない」

ケイももちろん村……もはや「手のぬくもり会」その物と見ていいだろう、のために働いているのだろうが、ミズキの言葉には、そうした組織上の仲間意識以上の感情が見られた。

「あなたとケイさんって、どういう関係？」

ミズキはその質問には直接答えず、言った。

「ケイがどうしてこんなことをやっているか？、察しは付くだろう？」

「まあね」

芙蓉はケイのサングラスからはみ出た大きな傷跡を思い出して痛ましい気持ちになった。

「ケイが能力者になったのは自分の復讐のためだ。ケイには……、正義のため、なんて気持ちはないんだろう。ひたすら自分の復讐心に従って行動しているだけなんだろう……」。

ケイは巫女たちの中でも特別の能力者だ。直接、神の力を持っている。

神の能力者になるためには、特別の修行をしなければならない。

神の穴に入って、真つ暗闇の中で……ま、これはケイには関係ないが……、49日間過ごし、神を受け入れ、一体化しなければならぬ。

俺が殺したのは男だ。つまり神は男ってことだ。その神を受け入れるってのがどういう行為か分かるだろう？ それは、ケイがこの世で最も憎悪する行いだ。ケイにとっては、まさに地獄の四十九日間だっただろうぜ」

話している内にミズキの言葉に暗い怒りがこもり、向こうを向いている顔がギリギリ奥歯を噛み締めているのが容易に見て取れた。

「……それ以前のケイを俺たちは知らない。でも、分かるんだ、今のケイは、本来の彼女じゃない、って……」

うつむいた後ろ頭はすっかりしよげてしまっている。感情の柔軟

な、素直すぎるくらい素直な少年だ。

「ケイは今も苦しんでいる。悪夢を忘れられずに、いや、決して悪夢を忘れまいとして、その悪夢を食らう悪魔になろうとしているんだ。ケイは、『悪』と審判した者には容赦ない。どんな残酷なことでも平気でやる。でも…、それはきつと、みんな自分の悪夢に返って来るんだ。ケイは怒りを露わにして、自分が傷ついてなんてないってふりをするけれど…、そんなわけないんだ……。どんだ自分の心を、魂を、傷つけていつているんだ……。それが、俺は、可哀相でならない……」

芙蓉は、ケイが紅倉を慕う気持ちがよく分かった。やはり自分と似ていると思つた。ケイは知っているのだ、自分の心を救ってくれるのが、先生しかいない、と……。ミスキがボソツとつぶやくように言った。

「ケイは……、紅倉美姫を殺せない……」

立ち止まり、すっかり感情の傷ついた顔で芙蓉を振り返つた。

「紅倉美姫に……、ケイを、助けてほしい……」

芙蓉は、フン、と笑つてやった。

「わたしの紅倉先生を舐めないでよ？ 先生なら、ケイさんの心なんてすっかりお見通しよ」

ミスキはストンと感情の抜けた、驚いたような顔をして、笑つた。

「それは、お見それしました」

「そうよ」

芙蓉は笑つて先を促した。ミスキはじつと芙蓉の顔を見ているジヨンの頭を撫でて先へ行くぞと命じた。

芙蓉は、

二人が暗黒の闇の中闘うのを暗い気持ちで思つた。

59 もう一人の魔女

毒素の空気を脱してミズキはジョンと共に急ぎ山道を登りながら、ハツと思いい出して芙蓉を振り返った。スポーツ万能の芙蓉は一度通った山道を楽々と登ってきている。芙蓉は何？と心配そうなミズキの顔を見た。

「麻里がいる」

芙蓉の知らない名前だ。

「誰よそれ？」

ミズキは不吉な胸騒ぎを振り払うように歩き出し、話した。

「木俣麻里（きまたまり）、外に寄宿して高校に通っている2年生だ。」

……巫女の一人だが、鬼木姓ではない。

ああつまり、巫女の才能が認められた子どもは鬼木の頭領……今は鬼木の婆の、養子になって、鬼木姓を名乗るんだ。

麻里は生まれたときから別格扱いだったそうさ。つまり……」

ミズキは言いづらそうにしたが、思い切って続けた。

「麻里の母親は元巫女だったそうさ。」

神は男神で、神に仕える巫女は処女でなければならない。だから巫女たちは生涯独身が原則だ」

「あらひどい。今時お寺のお坊さんだって妻帯が当たり前なのにねえ？」

芙蓉は茶々を入れながら、じゃああの妖怪婆さんも処女なのね？とお下劣なことを思った。ミズキは無視して続ける。

「神は女の体内に男の汚れがあるのをひどく嫌うんだそうさ。汚れに触れると怒り狂って女にひどく乱暴をする……」

巫女になることを定められた女子は結婚も恋愛も禁じられる。村の厳しい掟だ。

だが、

麻里の母親は、掟に背いて男と恋に落ち、体を通じ合った。彼女は掟に背いたことをひた隠しにしていたが、神が汚れに触れ、怒り狂い、彼女を中に引きずり込み、無理やり犯したんだそうだ。

彼女はなんとか助け出され、厳しく問いただされて、男との密通を白状した。村では男も巫女と通じるのは厳しく禁じられている。相手の男は袋叩きにされ、見せしめに玉を潰されたそうだ。

芙蓉は胸がムカムカして顔をしかめた。

「麻里って子が高2ってことは、20年も前の話じゃないんでしょ？ この村じゃいまだにそんなことをやっているの？」

「ああ。村の掟は、絶対だ」

と、それに関してはどうってことないようにミズキは言った。

「女はその後妊娠していることが判明し、そして生まれたのが麻里だ。」

麻里は生まれたときから強い霊能力を持っていたそうだ。

麻里の父親が密通した男なのか、神なのか、分からないが、生まれながらに神の力を持っているのは確かだ」

芙蓉はそれはさておき気になっていることを訊いた。

「玉を潰された恋人はどうなったの？」

「麻里の父親だ。巫女を引退した母親と一緒に暮らしている」

芙蓉は、好き合った二人なのだろうがそういう目に遭って夫婦になるというのはどうなのだろう？、と哀れにも不快に思った。

「待ってよ。暮らしている、って、この村で？」

「ああ、もちろん。村で生まれた者は生涯村を離れることは許されない。俺たちみたいに村のために外で働く者は別だが」

「それでいいわけ？」

芙蓉は麻里の両親の夫婦を思っ腹が立った。

「この現代日本で、そこまで個人の人権を踏みにじる行為がまかり通って、いいの？」

ミズキはうるさそうに立ち止まり、小馬鹿にしたような薄笑いを浮かべて芙蓉を見た。

「甘いな。この村に、日本国憲法なんて通じないよ」

歩き出す。芙蓉は、なるほどやはりこのミズキという坊やも骨の髄まで村の人間なのだと思える思いを抱いた。ケイへの優しい思いと矛盾するが、他者と身内の線引きが異様にはつきりしているのだろう。芙蓉はムカムカして、必要なことを訊いた。

「で？ 麻里ってというのはどういう子なの？」

「それが問題だ。一言で言えば、異常だ。」

村の子どもは小学校を卒業して外の中学高校に通うと周りとはどこか違ったところがあつて、孤立し、イジメの対象になることが多い。麻里の中学時代は特にそうだったが、麻里をいじめた生徒はことごとく精神異常を引き起こして不登校になってしまった。担任も学年の途中で2度代わっている。そういう問題を引き起こして麻里自身はどうかというと、落ち込んでいじけたりするようなことはなく、超然として、面白がつっていたようだ。高校に進んでからはすっかり噂が広まって麻里にちよっかい出す人間はいなくなった。麻里は…、遊ぶ相手がいなくなって退屈しているらしい……」

芙蓉は嫌な子のようななと思った。一見先生に似たところがあるように思うが……、先生はきつとこの子は嫌いだろう。

「麻里は鬼木姓でないように正式の巫女ではない。が、子どもの頃から勝手に穴に潜り込んで神を相手に遊んでいたらしい。何度もお婆や村長に叱られたらしいが、全然反省なんてしないだろうな。大人なんて、怖くもなんともないんだろう。」

その気になれば、簡単に精神を破壊したり、殺したり出来るんだからな」

「殺したことがあるの？」

「父親の玉を潰した男……、当時の青年団団長だった男だが、背骨の腫れ上がる奇病に犯され、5年以上苦しみ抜いた挙げ句に死んだ。最後は完全な廃人になってしまって、もう飽きたということなんだろう。麻里が中学に通うために村を出る当日にひどい悲鳴を上げて事切れた。村で麻里は腫れ物に触るような扱いで、麻里に逆らえる

人間は誰もいない。面と向かって悪口を言えるのは…、ケイだけだ」
ミズキはちよつと笑ったようだった。芙蓉は麻里に対するイメー
ジをちよつと修正した。考えてみればちよつと可哀相な子でもある。
それ以上に恐ろしく危険な少女のようだが。

芙蓉は、芙蓉にとつて重要な質問をした。

「見た目はどうなの？ その子、化け物みたいな容姿をしているの
？」

ミズキは、何を訊いてるんだ？と呆れたような顔を見せて、答え
た。

「いや。黙っていれば綺麗な子だよ。日本人形みたいに気味悪いけ
どな」

芙蓉は、不気味系美少女、けっこう好みかも知れないわ、と思っ
た。ミズキが立ち止まり、振り返って冷たい目で注意した。

「麻里を味方にしようなんて間違つても考えるなよ？ おまえがニ
ヤニヤ考えているようなまともな人間性なんてこれっぽっちもない、
化け物、だからな？」

怖い目で釘をさし、再び歩き出した。なんだかジョンまで芙蓉を
馬鹿にしたような顔をしている。

なんなのよ、つまらない、と思いつながら、

峠の上りが終わり、向こう側、村へ下る地点に来た。ここもあか
らさまに道を隠し、岩を乗り越えなくてはならない。ジョンが飛び
上がり、ミズキが慣れた足でひよいひよいと足場を辿って上がり、
芙蓉も舐めないでよねとちよつと自分の背丈くらいの岩場を木の根
を頼りに上り始め、

芙蓉は今日白いふわつとした羽織袴みたいな服を着ている。自分
の得意の合気道のスタイルに合わせた服装だ。

岩に上がりきると眺望が開けふもとの村がよく見渡せた。

時刻は3時を過ぎ、だいぶ傾いた冬の日が峠の影を長く伸ばし村
の半分を覆っている。祭はどうなったのだろう、山はのどかに静か
で、水色の空の空気は冷たい。

芙蓉はふつと反射的に岩場から飛び降り、前で待っていたミズキが驚いた顔をした。

ビシツと岩の破片が鋭く跳ねた。その後でヒュンと言う空を突き抜ける音が聞こえた。

芙蓉は素早く這うように走り、茶色の尖った葉を付けた大木の根元に身を沈めた。ミズキとジョンも走り込んできて身を隠した。

「狙撃か？」

緊張した怖い目と、驚きの表情で芙蓉に尋ねた。芙蓉は涼しい顔で、目は鋭く緊張し、隣の峠を窺った。

「どつやら業を煮やして撃っちゃったみたいね。神様に願掛けしているのは先生だけだからわたしは殺してもかまわないってことかしらっ。」

60 小競り合い

ミズキは芙蓉の見ているらしい隣の電波山の中腹の狙撃地点をそつと覗き見て、芙蓉を見た。

「あそこからか？ あんな距離からの銃弾を、どうやって避けた？ 距離は120メートルくらい。一般的なライフル銃の弾速は秒速700メートルから900メートル。スーパーマンでもあるまいし、飛んでくる、弾丸を避けるなど不可能で、撃つたと気づいた瞬間には打ち抜かれている。破片の飛んだ岩肌の位置からしてスナイパーの狙いは完璧だったはずだ。相手の姿が見えないこの位置で撃とうとしているアクションを目視して避けたとは考えられない。」

「どうやった？」

幹の根元に張り付いてじいっと向こうの気配を探るようにしている芙蓉はうるさそうにジロリとミズキを睨むと、すぐに視線を戻し、集中を切らさないように言った。

「あなた、銃で狙われたことある？」

ミズキはいささか顔色を無くして答えた。

「いや……」

「今の仕事から転職する気がないなら一度狙われてみることもね。体の中にね、ヒヤリと透き間が空いたような感覚がするのよ。その嫌あな感じをね、体が覚えてるのよ。」

ミズキは経験のなさを馬鹿にされたようで面白くなく言った。

「だからって、普通の人間に弾が避けられるか」

「まだ狙っている」

芙蓉はじいっと集中し、ミズキもジョンの背を押さえて地面に張り付き、何か感じられないか必死に探したが、ミズキには無理だった。じいっとしていた芙蓉の緊張が、ふっと解けた。ミズキを見てフツツと笑い、

「穴がふさがったわ」

と自分の心臓を指で突いた。

「とりあえず狙撃は諦めたようだけど、まだスコープを覗いているわ。でも……、ちよつと面白いことになりそうよ？」

怪訝そうなミズキに芙蓉は謎の笑みを浮かべた。

狙撃手は隣の山の芙蓉たちより少し高い位置で岩のくぼみに腰を預け、木の幹と枯れた灌木を盾に身を潜め、立てた左膝に左肘を載せ、左手と右肩で銃身を支えてスコープを覗いていた。ライフルにはサプレッサー（銃声低減装置）が装着されている。秋枯れの山に合わせたカーキ色のジャケットを着て、薄いスモッグのサングラスを掛けている。日本太郎とは別の公安隊員だ。じいつと意識を集中してスコープを覗いていたスナイパーは、

「…見えてるのか……」

とつぶやき、凝った首をほぐすように軽く頭を振った。

一撃必殺がスナイパーの必須だ。

狙いは完璧だった。まれに超感覚の人間が気配に気づいてこちらを向くということがあるが次の瞬間には額を撃ち抜かれている。その点も相手が霊能力者ということに十分留意し、超一流の彼は自然の呼吸で極めてスムーズに引き金を引き、無心に「的」を撃つ訓練が出来ている。実施の経験も積んでいる。

女の動きは意識したものではなく、無意識の反射だった。

「こいつも化け物ということか」

悔しさより面白い物を見つけた好奇心でスコープを覗いた。丸い視界に岩場の浅い土から盛り上がるドングリの木の根が映っている。男の頭がチラチラ覗いて笑わせるが、女は、ひよつとしてどこかに移動したかと思わせるほど完璧に隠れていた。単なる臆病ではなくこちらの位置を完璧に把握しているのだろう。

フツツ、と男は笑った。

「面白れえ」

ギリツと、サングラスの中で男の目が動いた。

「おっと。公安の旦那。動いちゃ駄目ですぜ」

背後の高い位置から男の声が降ってきた。

公安はびくつく風もなく笑った。

「やっと出てきたか。そっちもいい加減隠れん坊は飽きただろう？」
背後の男も笑いを含んだ余裕のある声で応じた。

「今しばらく大人しくしてもらわなくちゃ困りますよ？ 紅倉の死を確認するまであの女には手を出さんでください」

「紅倉の姿はないぞ？ そっちで片づけてくれたんじゃないのかい？」

「その予定なんですがね。ですからもうちょっと辛抱してくれなくちゃ」

「面白いだ。他に譲りたくはないな」

公安は再びターゲットを狙うポーズを取った。

「旦那。言うことを聞いていただけじゃないんで？」

「だったらどうする？ ど田舎とは思ったが、まさか竹槍が得物とはな」

「……」

相手の驚きを察して公安は笑った。

「頭には付いちやいねえよ。バックミラーで見てるだけさ」

公安の足元には何かの蓋みたいなの黒い四角のプラスチックが立ってかけられていた。真っ黒で光の反射はなく、とても何か映りそうには見えないが？

「グラスとセットでな、俺の目には見えてるんだよ。あんた、猿飛びサスケの子孫か？」

次の瞬間公安はざつと横へライフルを抱いて転げ、そこへ竹槍を突き刺す形で小柄な男が降ってきて、横へ転げた公安を追ってビュツと竹槍を振った。しかし公安は更にひよひよいと木の根元を蹴

つて斜面を駆け下り、

「動くな」

広い足場に下りたつて体を反転するとライフルを構えてまっすぐ村の男に狙いを定めた。男は槍投げの間抜けなポーズで固まり、じつとり脂汗を滲ませた。

「フフツ。形勢逆転、てとこだな。まあ、そういきり立つな」

公安はライフルを下ろし、そこにあつた細長いプラスチック製のケースにしまった。いざという時の脱出ルートも計算してあつたのだ。「高い道具なんでね。傷つけたくないんだ」

公安はニヤニヤ男を眺めた。灰色の野良着に地下足袋を履き、公安と同じような茶色の上つ張りを着て、確かに現代の田舎の忍者っぽい。小さな丸顔で、猿っぽくもある。公安隊員の油断ならなさを思い知らされながら、コケにされてカッカと怒っている。

公安は腰からアーミーナイフを抜き、言った。

「来いよ。いっちょ揉んでやる」

「舐めるな！」

猿男はカンフー映画みたいに背中に槍を隠して3メートル飛び降り、体をひねってビュツと槍を突きだした。

「面白れえ」

公安は右手にナイフを逆手に持ち、左手で体をかばうようにして槍の突きを避け、

「イヤアツ」

とくり出される蹴りも避け、ブンと槍を振り回す間合いに走り込み、必死の形相の猿男の胸に「ドン！」とナイフの柄を突き入れた。猿男は後ろによるめき苦しそくに胸を押さえた。公安は油断無く構えながら仕掛けず、次の攻撃を誘っている。格闘の実力は明らかに公安が上だ。猿男は歯を食いしばり、

「舐めるなと…、言っただろう！」

左手を開いて突き出し、バトルアニメみたいに「ハアツ！」

と気合いを発した。すると、公安の足元からザツと枯れ葉が吹き上がり、公安の顔を襲った。

「うっ、くそっ」

サングラスの隙間から細かいちりが入り込み、痛みを感じて公安は思わず目を閉じて後退した。猿男はすかさず槍をくり出し、痛みを耐える怖い顔で薄目を開けた公安は間一髪避けると槍を左脇に抱き込み、ナイフを円を描いて振り上げ、猿男の腕を切り裂いた。鋭い痛みが手が槍を放し、パツと袖に赤い色を滲ませながら

「うおおおっ」

猿男は気合いを発して公安に組みつき、

「うおおおおおおおおおっ！！！！」

ドドドツ、と農作業の馬力で公安を押しやり、ドン！と木の幹に押し付けた。

「気色悪いいな」

公安は腕を羽交い締めになれながら手首を返しナイフの刃で猿男の太ももをえぐった。

「ぐおっ、」

猿男は飛びのき、負傷した脚をかばって斜めに姿勢を崩し、憎々しげに公安を睨んだ。

「フッフ。まあそう怒るな。こっちはこれで飯を食ってるんでな。おっと、そっちもそうだったかな？」

ニヤニヤ笑う公安を、猿男は、ニヤニヤ笑い返した。公安が怪訝に不快な顔をして、ふと、足下に目をやった。驚きが表れ。

「なんだこれは？」

足を動かさそうとしたが、動かない。太いツタ植物が足首から太ももまで絡みついている。公安はそういう場所に追いやられたのかと思ひ、ナイフでがっちり腿を締め付ける太い繊維を切断しようとした。その手にシュルシュル蔓が伸びて来て巻き付き、公安はギョツと驚き、巻き付かれた腕はぐっつと強い力で引っ張られ、気づくと左腕も、両腕を後ろに引っ張られ、背中を幹に押しつけられ、木に

縛り付けられてしまった。

「くっ、くそっ、な、なんなんだこれは!？」

予想外の出来事に公安はすっかり余裕を失いわめいた。ハッと、初めて恐怖の目で村の男を睨んだ。

村の、青年団の団員は、形勢逆転にニヤニヤ面白そうに公安を眺め、言った。

「遊び相手を間違えたな。ここは神のテリトリーの中だ。ここで、俺たち相手には勝てんよ。ま、そこでゆっくり頭を冷やすんだな。こここの夜は、冷えるぞ？」

笑いながら、ライフルをしまったケースを取り上げ、

「質草にはならねえなあ？」

とうそぶき、笑いながらどこぞに立ち去った。公安は

「てめえこそ、ここで遊んだことを後悔するぞ」

と怒り心頭である。

公安と青年団が対決している間に芙蓉たちはとうに山を下って村に入っている。

61 血闘、紅倉VSケイ

赤い門番を倒した紅倉は、暗闇の中、穴を更に50メートルほど進んだ。

つーんと鼻の痛くなるカビの臭いがした。

紅倉は四角い空間に行き着いた。

通路から出るとここにも黒い鳥居が立ち、2メートルくらいの高さのほこらが建っていた。かなり古い物らしく木材がすっかりもろくなり、特に背面はぼろぼろに腐っていた。

部屋は丸太の柱に横に板が渡され、天井は社殿の内部のように梁が渡され、三角の屋根の形に板が張られていた。

ほこらの後ろに幅4メートルほどの堀が切られていた。横は15メートルくらい、堀は左右とも壁の手前で2メートルくらいの幅になって奥へ続いている。護岸は石を積みまれている。

その2メートルに狭まった堀は左右とも途中で木の板が下ろされているが、両方とも下が腐ってぼろぼろに崩れて、臭いのする水が5センチくらいの深さで溜まっている。元々水の流れがあったようだが、今はもつと手前で別の水路に流れ、ここへは溢れたか染み出したかした水がちよろちよろと溜まっていった感じだ。

「ああ、なるほどね、門つて、水門のことだったの」

貯水用の幅広の堀の出入り口に下ろされた板は水流を調節、または遮るための弁で、それを開閉するための原始的な装置……縄を天井から吊した滑車に通してつり上げる物……があったようだ、縄も滑車も今はとくに消滅している。

「察するに、ここが元々『神様』のおうちだったのかしら？」

急に空気に水気が増し、風が感じられた。と、

バアンツ！、と右手の板が吹っ飛び、ザーーツと水が流れ出てきた。

ゴオツ、と、生暖かい嫌な風を巻いて宙にケイが現れた。

「来たか、紅倉」

ニヤリと嬉しそうに笑うケイはもちろん生身の姿ではなく、生き霊……とこの場合は言うのだろうか？、ともかく生身の肉体ではなく霊体として現れている。

霊的視力に特化した紅倉の目には元よりはつきり見えているが、普通人の目にもこの一切外界の光のない暗闇の中でもケイのぼうつと白い光を滲ませた姿はよく見えるだろう。幽霊など頭の中で見る物で、見えない者には見えない物だが、この場所でケイの姿は誰にでもはつきり見えるだろう。紅倉の言う「霊媒物質」が異様に濃く充満しているからだ。それもケイの出現と共に一気に濃く膨れ上がった。

ケイは薄物の襦袢をまとっただけのエロチックな姿をしている。濡れた体の線も生々しい。

目がきれいに開いている。

多少目つきがきつ過ぎる嫌いがあるが、なかなかの美人だ。

「嬉しいね、あんたの顔を拝めたよ。でも、せつかくの美貌が、台無しじゃないか？」

紅倉は、

赤い門番の毒素と血をこれでもかこれでもかと浴びまくって、白い肌がべろべろに剥けたようになっていた。

それが血を塗り重ねただけの汚れならいいのだが……。

ケイは紅倉を見ている内じつと怒ったような顔になった。

「紅倉。あんた、ここで死ぬ気かい？」

「まさか」

紅倉は肩をすくめた。

「わたしは美貴ちゃんの腕に抱かれながら死ぬって決めてるの」

「ふふ、妬けるねえ。ま、それを聞いて安心した。あんたはわたしの物にしたいから、ここで殺させてもらうよ」

ゴツと強い圧力が全身にぶつかってきて紅倉は後ろの板の壁に背

中を激しく打ち、げほつと咳をして膝をつき、手を付いた。苦しもうに咳をして、血を吐いた。ケイが言った。

「こういう攻撃は受けたことがないかい？ 霊能力って言ってもこっちは神の力だからね、霊力って言うより、超能力ってとこさ！」

ケイの霊体が「ハッ！」と右の張り手を突き出すと、重い圧力の固まりがドン！と紅倉にぶつかり、紅倉は体を跳ね上がらせて後頭部を『ガンツ！』と強打した。

紅倉は激痛に顔をしかめ、どおつと前に倒れた。

ケイの霊体がスーツと宙を滑って紅倉の前に来た。

「おやおや齒ごたえのない。てんで駄目じゃないの？ これが現代最強の霊能力者と歌われた紅倉美姫さんかい？」

……やっぱり、門番に相当やられているようだね？……」

ケイは冷たい目で肩で息をする紅倉を見下ろした。

「生身でここまで来られたのはさすがだよ。でも、わたしみたいに霊体を飛ばした方が良くなかったかい？ ま、剥き身の霊体じゃあ神に一飲みで食われちまうかねえ？ いずれにしろそれで精一杯じゃあ、神の相手にはならないね。その程度なら、本当に、殺しちゃおうか？」

ケイは紅倉の頭を鷲掴みにするように右手を動かした。その手がサクツと縦に五つに裂けて、ケイは

「ぎゃああつ」

と悲鳴を上げた。一気に反対の壁まで後退し、右手を押さええたりぎり恐ろしい顔で睨んだ。紅倉はあはあ肩で息をして上半身を起こすと、頭をもたげ、疲れた目でニヤツと笑った。

「こういう攻撃を受けたのは初めて？ わたし、霊体を直接いたぶるのは得意なのよ？」

「やるじゃないか、さすが紅倉美姫さんだ」

ケイは裂けた右手を激痛を堪えてぐつと握り、ぶるぶる震わせてぎゅつぐゅつと握りしめた。白い光がぶくぶく泡立つように膨れ上

がり、裂けた傷が修復された。

紅倉は壁にすがりながらなんとか立ち上がった。はあはあとケイを見て、余裕を見せようと無理やり笑った。

「あなたの手は分かっているわよ。」

あなたの霊体はしっとり吸い付くみたいなもち肌で……、べとべとくっつきそうだわ。

異様に粘り気があつて、浸透力が強くて……、内部は熱く活性エネルギーに満ちている。

あなたの必殺技は相手に霊体を融合させて噴き飛ばす、爆弾攻撃よ。

自分の霊体を爆発させるんだから当然自分も傷つく。やりすぎれば相打ちで自分も死ぬことになる。

……わたしはあなたと心中してやる気なんてさらさらないから、そんな攻撃はしないでね？」

ケイは驚いて真顔になったが、すぐにニヤニヤした笑いで誤魔化した。

「さすがだねえ、お見通しかい。でも、どうやらこっちもそこまでしてやる必要はなさそう……だよ！」

再び「ドンツ！」と右手を突きだした。

紅倉はまっすぐケイを向くと修行僧のように合掌し、「えい！」と気合いを込めた。

ドツと攻めてきたケイの霊波の大砲が紅倉の合掌した手に切られ、根元まで大きく裂けていき、ケイは再び襲った手のひらの「ビリッ」とした痛みに慌てて手を引き握った。これも生身の肉体だったらドクドクと熱い血が流れ出してくる大げがだ。ケイは怒りに顔を歪めて紅倉を睨み付けた。紅倉は静かな目で解説してやった。

「普通の空間ならわたしはその攻撃に対処できないわ。でもここは全体がほぼ霊空間になっているから、物理的な攻撃も霊的エネルギーに変換されちゃうのよ。それがあなたの巨大なパワーの源なんでしょうけれど、痛しかゆしってところかしら？」

ケイは悔し紛れの笑いを漏らした。

「戦い慣れてるねえ……。こっちも死ぬ気でかからなくちゃあねえ

……」

「痛いでしょ？」

紅倉は首をかしげて訊いた。

「わたし、あなたに何か悪いことしたかしら？ あなたがそうまでしてわたしを殺さなくてはならない積極的な意味はないと思うんだけど？」

「女王様のおんと違ってこっちはいろいろ人間的しがらみがあったてねえ。あなたの命か、身内の命か、どっちか選ばなくちゃならないのさ」

「わたしと手を組んだ方が得だと思っただけど？」

「それを見極めさせてもらうよ！」

ケイが両手を縦横に振るって激しい気流が紅倉を襲い、

「弾けるっ！」

ドドンツ！と至近距離で連続して爆発が起こり、

「きゃあっ」

紅倉は悲鳴を上げて体を揺さぶられ、再び膝をついた。

「フツ、どうだい？ 内部から吹っ飛ばすことにこだわらなきゃ別に我が身を犠牲にしなくて爆弾攻撃は出来るんだよ。なにせ材料はたっぷり充滿してるからねえ」

紅倉はげほっげほっと苦しそうに咳き込み、だらあーっと粘つく血を吐いた。

見つめるケイの目が細く冷たくなり、不愉快そうにぶ然とした。

「紅倉。本気になりな。わたしを殺す気で来なけりゃ、わたしがあなたを殺すよ？ わたしはね、弱いあなたなんか必要ないんだ」

ケイの目がカツと怒りに光り、ババババンツ、と紅倉を包んで閃光が炸裂し、全身からもうもうと赤い煙を噴いて紅倉は倒れた。土の地面に頬をべったり付け、虫の息である。

「弱い」

ケイはムカムカと怒りを燃やした。

「しょせん人は神に勝てないか。見込み違いだったよ」
紅倉が弱々しい瞳を動かしてケイを見た。

「油断大敵…よ……」

「たいした敵にはなりそうもないね」

ケイが手を突きだし、ドンッ！。と紅倉の腹部で大きな爆発が起き、めらめらリンの青い炎が散ると、紅倉は腹をかばって背を丸め、動かなかった。それを眺めケイは、

「残念だよ」

と心底がっかりしたようにつぶやいた。

紅倉は、死んだようだった。

ざわざわとケイの背後が騒いだ。

「綺麗なあんたが汚らしくむさぼり食われる様なんて見たくないねえ」

そう言いながらケイは両手で胸を抱き、自分の体を守るようにした。

ケイの背後からざわざわと生臭い靈気が溢れ出した。堀は30センチくらいの深さでゆるやかに水が流れているが、そのケイの現れた右の穴の奥から、何か大きな物がひたひたと近づいてきた。

その間に生臭い靈気の固まりが倒れた紅倉に迫り、覆い被さろうとした。胸を抱いたケイは痛ましく目を細めた。と。

『ギイヤアアアアアアアアアアアアア』

生臭い靈気が下から爆発的に燃え上がり、天井まで噴き上げられて黒いかすになって散った。

カアツと熱に照らされてケイは思わず顔をかばった。

「なんだ？」

ゴオゴオと炎が燃え立ち、その炎をまとって恐ろしい形相の鬼女が立っていた。紅倉と同じ顔をしているが、人間の紅倉のふにやつと腑抜けたところは微塵もなく、鬼神のごとき憤怒相をしている。

チリチリと身を焼く熱さに顔をしかめながら、ケイは嬉しそうに笑った。

「それが最強霊能力者紅倉美姫の本当の姿か。いいわ。これよ、この恐ろしいまでの強さを、わたしは求めていた……………」
ケイの笑いは大きくなり、炎に照らされてこちらも鬼女の顔になった。

62 決着

炎をまとった紅倉は牙の生えた口を開き、炎となって逆巻く髪がおどろに踊り、天井まで伸び上がると、炎の龍となってケイに襲いかかった。

「来いっ!!」

ケイは自ら受け止めるように両腕を広げ胸を張った。

「やめ……ろ……………」

地面に張った紅倉がか細い声を出し、ケイに迫った炎は目前でピタッと止まった。

宙に立つ紅倉はくわつと開いた恐ろしい目でケイを見据え、地面では肉体の紅倉が動いた。

「止せ……、戻れ……………」

「逃がさないよ!」

ケイは紅倉の炎を捕まえようと手を前に伸ばした。

「やめろおっ!!!!!!」

紅倉が血を吐くように叫ぶと、ザクザクと全身を無数の矢に射抜かれたように、

「ぎゃああああっ」

ケイは叫んで全身を痙攣するように引き伸ばし、仰向けになってふらふら漂い、失神したようにガクガクブルブル震えた。

「戻れ……………」

必死の紅倉に命令されて炎の鬼女は光を消し、スツと空間から姿

を消した。

紅倉はぼろぼろになったコートの胸から真つ赤に染まった破魔矢を取り出し、腕をガタガタ震わせながら堀の右の奥めがけて投げた。矢はひよろひよろ不思議な飛び方をして、奥に消えた。

紅倉はそれで力つきたように腕を前に投げ出して動けなくなった。はああー……、すうつ……、はああー……、と、やつとのように呼吸し、閉じそうになるまぶたを震わせてケイを見た。ケイはまだシヨックでブルブル痙攣していたが、やがて収まってくると、ガバアツと起き上がった。

「次だあつ！ どうする紅倉ああつっ！！」

血走った目で叫び、腕を突き出し次の攻撃を加えようとしたが、

「……焼かれたか……」

さっきの鬼女の炎で火薬であるこの空間の霊媒物質をあらかた焼き消されてしまったらしい。

ケイはフウツと嬉しそうに笑った。

「やっぱりこれをやるしかないようだね。あんたといっしょに死ぬるならわたしは本望だよ」

ケイの霊体がピンク色に光り、輪郭がぼやけた。

「わたしといっしょに、死んでくれ」

スウツとケイが迫り、紅倉に微笑むと、体を重ねて紅倉の中へ溶け込んでいった。顔を半分溶け込ませて、ケイは言った。

「完全に入り込んでしまったら自分を保てなくなる。まだ自分が分かる内におさらばさせてもらおうよ」

カアツと、ピンク色の光が激しく赤くなり、紅倉の肌も熱くくすぶった。

「さよなら、紅倉さん」

紅倉の手が最後の力を振り絞って持ち上がり、わななき、

「食らえ」

グツと握りしめた。

その手に折られるように、
闇の中で破魔矢がボキッと繊維を弾かせて折れた。

グオオオオオウアああああああ

風の音か地鳴りか、大きな唸り声のような物がして、

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

と物凄い振動が連続して起こり、

ガタガタガタンッ、ガタガタガタンッ、

と何か転げ回るような音が穴の奥から響いてきて、

ブシュウッ、ブシュウッ、

と穴から、花を差したまま何日間も放ったらかしにした花瓶の水
のような臭いしびきが噴き出された。
はっきりと、

「ぶおおおおっ、ぶおおおおっ」

と、何か獣が苦しんでいるわめき声が聞こえた。水を飛ばして嵐の海の荒波のようだが、はっきりと生き物の「感情」が感じられた。そして、

ゴゴゴゴゴゴゴ、ゴゴゴゴゴゴゴ、と大地の大きな震えが続いた。

紅倉に半分溶け込んだケイが驚きの声を上げた。

「紅倉！ 何をした！？」

「ふふふふ……」

紅倉はケイの口の重なった口で笑った。

「あの化け物を取り込んで壊した魂の恨み苦しみをたっぷりお返ししてやったのよ。あいつの中には殺された巫女たちの魂のかけらが残っているはずだから、それに反応して感情が爆発したのよ。ふふふ……、いい気味……」

「殺された……、門番のか？」

「それより、どうしたの？ 起爆装置の故障かしら？」

「……………」

ケイはまるで金縛りにあったように動けない体にぎよっとして、苛々した胸騒ぎに震えた。

「どういうことだ？ わたしを、どうした？」

「タイミングを逸したわね。あなたの霊体はもうわたしの支配下にある。あの汚らしい化け物からも切り離れた。肉体の方が心配だけど、ちよつと我慢してね？」

「べ、紅倉？ お、おい、なにを……」

「いい子になっておねんねしてね？」

「べ……にく……ら……」

ケイはふうつと目を閉じ、スウツと紅倉の中に沈んでいった。

「はあっ……………」

紅倉は仰向けになり、疲れ切った息をついた。ゴゴゴゴゴゴ、と地震は続き、堀の水はバシヤバシヤ波立っている。

「あー…、拙い。体をやられ過ぎた。せつかくケイさんの魂を捕まえたのに、このままじゃ生き埋めだわ…」

力を込めて体を起こそうとしたが、寝返りさえ打てなかった。

「まいったなあ。ちよつと無謀だったかな？ ずいぶん丈夫になつたつもりだったんだけどなあ……。ごめんなさいねケイさん。本当にここで心中する羽目になりそう。……ごめんね、美貴ちゃん」

紅倉は目を閉じ、どうしようもなく疲れて、眠りの中に落ち込んでいこうとした。ミシツ、と板の裂ける音があちこちから聞こえ、重い岩のうごめく不穏な音が響き、パラパラと小石の転がる音がした。騒音の中で紅倉は睡魔に心地よく魅了され、意識を途切れさせようとした。

静かになつて、紅倉は目を開けた。

「あら？ いつの間にか天国に到着？ なわけないか」

うう、うううううう、とうめいてなんとか体を起こした。

「あの化け物、落ち着いちゃったみたいね？ ……麻酔銃でも撃たれたかしら？」

パシヤツ、パシヤツ、と水を掻き分ける音がして、右の穴奥から白い明かりが漏れ、誰か現れた。

「ふうー」

と、低い天井から解放されて腰を伸ばし、しらつとした目で紅倉を見たのは冬の紺のセーラー服を着て前髪をきれいに切りそろえた高校生の少女だった。紅倉は知らない顔に首をかしげた。

「あら。えーと…、あなたは、誰？」

少女は白けた無表情を紅倉に向けた。

「あなたが化け物呼ばわりした物の娘ですわ」

「あらま。耳がいいこと」

紅倉は微笑みかけながら、じつと相手の实力を見極めるように少女Ⅱ木俣麻里を見つめた。

63 典型的パターン

「やっぱりケイお姉さまは勝てませんでしたわね。せつかく神の力を授かりながら、いくらでもとどめを刺すチャンスはありましたのに」

麻里は冷たく吐き捨てるように言い、水路をパシャパシャ歩いてくると、ランタン型ライトを地面に置き、よいしょとメートルの高さをよじ登り、紅倉の前に立った。

「ああ嫌だわ。あなたが水路を辿って来てくださればよかったのに。足に臭いが染みついてしまっじゃありませんの」

麻里は足袋に草履を引っかけていて、ぐっしより濡れていた。嫌だわと気持ち悪そうに濡れた足を動かし、ピツと振って紅倉に水を飛ばした。

「あらごめんあそばせ」

とわざとやったくせに白々しく謝って笑った。

「さてあなたをどうしましょうか？」

腕を組んで考える。

「わたくしあなたを殺さなくてはなりませんの。かわいいわたくしの手でも今なら簡単にその首を絞め殺せそうですわね？」

と、うっとり楽しそうに言った。

「あのー？」

と紅倉は首をかしげた。

「ああ。わたくし、木俣麻里と申しますの。鬼木巫女衆の助っ人を頼まれておりますの。よろしく。

ねえ紅倉お姉さま」

麻里はきれいに歯を見せて笑った。

「殺してよろしいですわね？」

手を伸ばし、紅倉の首を掴むとぐっつと締め付けた。紅倉は苦しさに口を開け、舌を覗かせ、非力に麻里の腕を掴んだ。麻里は笑っ

て、手をゆるめた。

「うえっ、げほっ、げほんっ」

紅倉が涙を流して咳き込むと、またぎゅっつと締め付けた。紅倉の体がじたばた暴れた。

「ああいい感じ。温かいですわ。わたくしも生身の体を手に掛けるのは初めてですわ。とても心地よいものですね？ とくに紅倉お姉さまのようなお綺麗な方を絞めるのは、なんとも楽しい」

紅倉は足をじたばたし、締め付けから逃れようと体を伸び上げらせようとしたり。その足から力が抜け、じわりと下半身に生暖かい物が広がった。

「あらばっちい。お漏らししましたわね？」

麻里は手を放すと、咳き込む紅倉の胸を蹴り上げた。

「ゲホッゲホッ、ゲホッ、……………ゲホッ、……………」

紅倉は腹を抱えて丸まった。麻里は残忍な笑いを浮かべて見下ろしている。

「よろしいですわ。あなたが今完全に無力で簡単に殺せるというのは分かりました。このまま殺しても良いのですが、つまらないですわね。全然わたくしの力ではございませんものね？」

紅倉は咳き込み続け、咳をする体力も失せて、ゼエゼエ息をつき、堪えられないように咳をして、血の混じった涎を吐き出した。ゼエゼエと喉を鳴らして息をつき、さすがに恨めしそうに麻里を見て言った。

「そう……………やって……………、主人公を……………見逃して……………、ハアッ、ハアッ、ゲホッゲホッ、ゼーゼー、あ、後で……………、やつつけられるときに……………、あの時殺しておけ……………ば……………って、ゼエゼエ、典型的なパターンじゃない……………」

「やつと言いつつ切るとゼエゼエと胸で嫌な音を立てて呼吸し、まぶたを痙攣させて閉じようとした。」

「あら、もうちょっと楽しくお話ししましょうよ？」

麻里は屈むと指で紅倉のまぶたを剥き、顔を寄せると舌を伸ばし

て「グリッ」と紅倉の目玉を舐め回した。麻里は起き上がると

「ニンニクでもかじってくればよかったですわ」

と意地悪に言った。高校生の少女にいいように遊ばれて、紅倉はもはや人形のように為すがままだった。

「あなたのせいでお父さま、すっかり苦しまれて、わたくしと巫女衆でなんとかお鎮めいたしました。緊急措置で少々強いお薬を差し上げてしまいました。外の方にはないしよですが今村の防衛力は半分以下に落ちてしまっています。さあて、このおいたの罰を与えなくてはなりませんわね？」

うふふふふふ、と最高に残忍に笑った。

「わたくしが後で殺しておけばと後悔するとおっしゃいました？」

おほほほほほ。あいにくそれはごさいませんわね。わたくし、別に自分の力自慢をするつもりはございませんの。あなたを自由にさせてさしあげるつもりもございません。ただ……」

麻里はニンマリ笑った。

「楽に死なせてあげるのはつまらないですから、あなたには是非泣き叫びながら死んで行っていただきたいの」

ライトを手に取り辺りを照らし、フウーン……、と考えた。

「やっぱり何もありませんわね。わたくしも気を利かせてロープでも持って来るんですけど。仕方ありません、戻って下女を連れてきましようか」

ライトを持ってよいしょと水路に下り、紅倉を照らして言った。

「戻ってくるまで20分くらいでしょうかしらねえ？　ま、その間に逃げるのならどうぞお逃げくださいませ？　その様子じゃあ無理のようですね。ご愁傷様」

うふふ、と笑い、麻里は身をかがめ穴の中へ戻っていった。

この危機から逃れることの出来る最大のチャンスであるが、徹底的に痛めつけられた紅倉にはいずる力も残っていなかった。

64 舞台裏（前書き）

！！警告！！ 極めて残酷な描写があります。ご注意ください。
尚これ以降このような描写が頻発します。くれぐれも年少者及び感
受性の強い方は読まないでください。

64 舞台裏

また時間を少しさかのぼる。

紅倉とケイの対決が始まる前、

鬼木巫女衆。

神と一体化したケイを支援するため、鬼木の婆……実は名を重（しげ）と言い、年は81歳になるのだが、名など誰も覚えていないし、年は100歳くらいに思われている……と、養子の長女ヨシ65歳、次女メイコ44歳の三人は一つ上の階の「室（むろ）」と呼んでいる神のコントロールルームに移動した。

床下でケイの体が寝ている部屋には麻里一人が見守り役で残されるのだが。麻里は、

「つまらないですね。要はケイ姉さんの魂を体に戻さなければよいのでしょうか？」

と言った。ケイに支援を約束したものの、実はその気はさらさらなく、ケイの魂＝霊体も紅倉もろとも神の餌にする計画にいる。

「わたくし、ケイ姉さんの魂と紅倉の体が神に食べられるところを直接見物したいですわ」

麻里の我が儘に婆は嫌な顔をしたが、どうせ自分の手に負えない相手だと分かっている。

「勝手におし。嫌な仕事をおまえが引き受けてくれるんならわたしはその方がいいわい」

「まあ、嫌な仕事だなんて。うふふ、ではお任せくださいませ」

麻里はランタンライトを一つ持ってケイの寝ている穴に下りた。

「あら。子どもの頃は楽でしたのに、背が伸びてしまっていたいへんですわ」

婆は、

「おまえも体はまともな人間ということさ」

と戒めとも愛しみとも取れる憐憫の表情で言ったが、麻里は「ふ

つ」と小馬鹿にした笑いを浮かべただけで、

「では行つてまいりますわ」

と腰をかがめて床下を進んでいった。

「行くよ。よもや紅倉が神に勝てるとは思わんが、ケイが造反することもあり得んことではないからねえ」

部屋から通路に出た婆は

「おまえたちは階段をお使い」

と二人の娘たちを先にやり、自分は別の小部屋に入った。エレベーターだった。ちょうど村長の家の真下に位置し、小さなエレベーターは応接間の吹き抜けの2階まで通じているのだった。

1階上がつてエレベーターを下りた婆は待つていた娘たちと一つの部屋に入った。

何もない真四角の部屋だが、床に変わったものが生えていた。

中央と部屋の対角線4分の1の4点、合計5つ、30センチほどの高さの四角い木製の筒が生え、そこに直径20センチほどの大きな水晶玉が載っていた。

「明かりを落とすな」

二人がライトの光量をうんと落として闇に近くなると、婆が中央に座り、二人はそれぞれ後ろの左右に座り、それぞれ自分の水晶玉を覗きだした。二人は目で見ているが、年季の入ったお婆は目を閉じ、手のひらを当てて触覚を視神経として脳につなげる。

水晶玉は真っ黒で、何も映していない。だがその漆黒に三人はそれぞれ霊的なビジョンを見ている。

水晶玉を載せた筒は中は空で、ずつつと床下へ伸びている。実はこの筒は途中屈折するところに鏡をはめ込みつつ、あの、黒木たちに連れてこられた哀れな不良青年の沈められた井戸の底の部屋に通じているのだ。

半球のドーム型の部屋の壁の高いところに覗き穴があり、そこま

でこの筒は通じている。

もしあの部屋に十分な光を焚いたら鏡に反射した像が小さく、一個の星のように覗けるはずだ。

中央のお婆用以外の4つには現代的に光ファイバーケーブルが通されて、水晶玉に接続されている。胃カメラの映像を水晶玉でモニターしているようなものだ。

彼女たちの見ているのはあくまで頭の中で直接視る霊的なイメージであるのだが、その手がかりとしてやはりクリアなイメージ映像のあった方がよいらしい。

真つ黒だが、彼女たちの目が直接水晶玉の中に見ているのは水の中に漂う哀れな不良青年の死体である。……のはずだが。

驚いたことに不良青年はまだ生きて呼吸をしているらしい。

青年をくくり付けた板が水に浮き、板は床にロープで係留されそこから流れていかないようにされている。

青年の体は板の上にかぶった水に耳の上辺りまで浸っているが、その体は、奇妙な状態になっている。

ちょうど蛙の卵のようなぬらぬらしたゼリー状の物に包み込まれ、鼻と口がふがふがと苦しそうに粘膜を膨らませて呼吸している。裸の胸も大きく上下し、それで生きているのが分かるのだが、この状態ですべて生きているのか、非常に嫌な気分になる。

青年は体を切り裂かれ何やら糊のような物を塗りたくられていた。その傷口が内部から膨れ上がり、ほどけた赤い繊維がゼリーの中に漂い出ている。眼球は表面がべらべらのビニールみたいにしわが寄り、眼窩から膨れ上がって、更に周囲から赤い肉がぶよぶよとはみ出ている。呼吸する鼻は付け根と鼻梁を切り裂かれてぱくぱくと開閉し、大口を開いた唇も舌もぶよぶよに膨れ上がっている。

肉体全部が真つ白にふやけて、赤い傷口が弾けて、腐乱した水死体のようである。

これで生きているというのがおぞましい。

しかし本人に生きている自覚はないだろう。

額に開いた穴から白い物がほどけてはみ出ている。その部分は特につるつるしたゼリーがこんもりとこぶになっている。

残酷を絵に描いたような有様だが、これが巫女と神職たちが神の強すぎる力から我が身を守るために何代も重ねて改良してきた末のコントロール装置なのだった。

神はこの傷ついた体に肉体的に同化し、曲がりなりにも「人」としての形を得て、巫女たちは神の人の形に念思でアクセスし、人の五感を延長した物として神の力を使うことが出来るのだ。

では神もここにおわすかとも見ても、そのお姿はないようだ。

普段は確かにここにいるのだが、今はケイの生き霊と合体して紅倉美姫のところへ向かっているのだ。

神の肉体は霊体とほぼ等しい物のようだ。他の現世の生き物のように肉体と霊体が別々の物ではなく、かなり重なって、同じ性質を共有しているようだ。

鬼木の婆と娘たちは水晶玉を見て、神の行方を追っている。通路の先へ先へ、紅倉のいるガス穴の奥の「門」へ。

一方麻里は。

神の住みかの水路は幾本も道があるらしく、麻里は井戸の底の水槽は通らずに先へ、もうずいぶん長い間使われていない古い水路へ進んでいた。

ケイと紅倉の戦いが始まり、極めて優れた霊能力者で、かつ神を「父親」とする麻里はその様子を頭の中のリアル3Dテレビではつきり鑑賞していた。

結果、

ケイは紅倉に敗れた。

チツと舌打ちし、いくらでも殺せるチャンスはあったものと思う。

しかしもはや瀕死の状態の紅倉を見て、さてどういたぶってやりましょうかしら？、と考えることを楽しんだ。ところが。

神が劇薬に犯されて暴れ出し、リンクしていた麻里も脳をガン、とやられ、危うく天井に頭を打ちかけた。

頭の中で様々な負の意識が爆発しまくり、脳を破壊されそうになった。

「く、くそ…、おのれ……」

麻里は神とのリンクを切った。ガタガタ震動する壁にすがりつき、ズキンズキン痛む頭を安静に保ち、呼吸をコントロールして胸の動機を落ち着かせる努力をした。

キイイーッ！、と歯噛みし、巫女衆に強い思念で命じた。

水晶玉を覗き、神の異変にうろたえる巫女衆、

長女ヨシがハッとひらめき、婆に言った。

「御神酒を」

婆もうなずき、

「麻里じゃな。それしかあるまいて。神に御神酒を投入せよ、ありつたけじゃ！」

と緊急措置を命じた。

ヨシは壁に走り、知らない者には見分けづらいパネルを開き、中に並ぶスイッチの1列を残らずひねった。赤いランプが灯っていき、地下で何かの機構が動いた。

通路のあちこちで天井が開き、ドドドドド、と御神酒「高アルコールのウイスキーが樽をひっくり返して注ぎ込まれていった。

ウイスキーは水路を満たしていき、それはやがて神に届き、薰り高い高アルコールに身を浸した神は、やがて、酔っぱらい、いい気持ちになって、大人しく眠ってしまった。

暗くなった念思の視界の中で婆は、

「これは二日酔いが心配じゃわい」

と頭が痛いようにつぶやいた。

その後麻里は綺麗なお人形さんの顔に戻って紅倉をいたぶったわけだが、腹の中はムカムカが真っ赤に煮えたぎっていたのである。

しかし、いい気になって紅倉をいたぶった麻里が、紅倉を運ぶ下女を連れに戻っている間に、何が起こったのか？

65 潜入作戦

青年団長木場田と黒木たちグループは犬たちを連れ、極力目立たないように村長宅裏の鬼木の婆の家へ急ぎ向かった。

玄関は鍵も掛けずになんなく入り込めたが、地下へ通じる入口を捜し、裏口の脇にある物置のドアを見つけたが、いかにも怪しいそこは中にもう一枚頑丈な鉄鋏を打ったドアがあり、ここは鍵が掛かっていた。

こうした工作の得意な末木がいじつてみたが、構造は至ってシンプルなはずなのにびくともしなかった。

「見せてみる。特殊な鍵かも知れない」

木場田が前に出て右手を開き、探るようにした。その様子を怖い目で見て黒木が訊いた。

「あんたも神の肉を食ったのか？」

じいっと探っていた木場田は諦めたように手を下ろし、言った。

「ああ。団長が力を持たないわけにはいかないだろう？ どんなに不味くてもな」

木場田はどうしても感じてしまう黒木たちのゲテモノを見るような不快な視線を振り切るように言った。

「駄目だ。これには神の結界が施してある。神の肉を食ったくらい
の即席神通力者じゃ歯が立たん」

「開かんのか？」

黒木が険しい表情で言った。

「まさかもうここで諦めると言う訳じゃあるまいな？」

木場田は不敵に笑って言った。

「鍵が壊せなくても、入り口をこじ開けることは出来るさ。つるはしで壁ごと枠をぶっ壊してやるさ。だが、そうなると確実に下に知れるだろう。もっとも結界を破っても結果は同じだろうが……。どうだ、二手に分かれるか？」

「他の入り口というと、『炭窯』か？」

村の端に大きな小屋のような木材精製及び家具工場があるが、その裏手に炭焼きの窯がある。大量の炭を作るため、炎の熱を効率的に全体に回すため、奥に長く、奥が上がっていく構造をしているが、……それはフェイクで、実はその下に地下に下りる通路が延びている。……黒木たちが狩った不良青年を連れていった所だ。

「そこからこの地下に行けるのか？」

黒木たちの仕事は材料を調達してくるところまでで、その処理は男性の神職が行うためそこで引き渡され、後のことは知らない。木場田はいやと答えた。

「いや、直接はつながっていない。祈とう所は男子禁制だからな。

だが神の穴はつながっているはずだ。穴に下りてさかのぼっていけばこの下にたどり着けるはずだ」

「神の穴に下りる、か……」

黒木は難しい顔をした。

「危険だな。神に見つかれば、確実にやられるだろう？」

「だろうな。だから二手に分かれて、こっちは強行突破を試みる。

巫女たちの注意がこっちに向いたところで、下から潜入を開始してもらおう。危険だが、神の意識も紅倉に向いているはずだから、上手くタイミングが合えば行けるんじゃないか？」

「よし、時間がない、それで行こう。…斎木、末木。おまえたちに潜ってもらっていいか？」

「任せてください」

二人は間を空けず答えた。

「頼む」

「『炭窯』まで行かなくても依り代のある神の巢は役場の裏の物置から下りられる。神職はマイナスの靈感の者が務めているから結果はないはずだ。遠慮なく鍵を壊して入ってくれ」

末木が

「普通の鍵なら普通に開けられる」

と請け負った。

「よし。では俺もついでに道具を拝借してこよう。あんたはここで見張っていてくれ」

「分かった」

木場田を残し黒木たちは表で見張らせている犬の内二頭を連れて役場の裏へ向かった。

黒木がつるはしを持って戻ってきて、結界の施されたドアの破壊を開始した。通路は狭いので一人でしか作業できないが、年代物の木の板は柔らかい感触で尖った先を吸い込み、メリツと、簡単にほぐれてばらけた。黒木は腕を振るって固いつるはしを打ち込み、バラバラと、材木と塗り固められた漆喰を粉碎していった。壁の縁を破壊して穴を開けると、現れたドア枠の側面に思い切りつるはしを振るい、突き刺した。ここには『ガンツ』と言う固い手応えがあり、尖端も簡単には突き刺さらなかったが、まるで歯が立たないということもない。

「なんならこのまま枠ごとドアを突き倒してやるさ」

黒木は汗をかきながらガン！、ガン！、と乱暴につるはしを振るい続けた。

タイミングは。

ケイと紅倉の戦いが始まり、神の行方をトレースしていた婆たち巫女衆は優位に立ちながら生ぬるい攻撃をくり返すケイに苛立ちを覚えていた。

「ええい、そこじゃ、早うとどめを刺さんかい！……ええい、何を遊んでおるか！！」

と、その時である。

「婆さま」

上の異変に気づいたメイコが鋭く呼びかけ、お婆とヨシもギョッ

と緊張した。かすかに音が響いてくるが、それより神経を集中して
霊波を探った。

……何者が侵入しようとしている。

この神聖な場所への乱暴狼藉にまさか村の者がと驚いたら……、
「黒木と木場田のせがれかい。チツ、くそ、あの悪ガキどもが、神
をも恐れぬ不埒者どもめ」

お婆は悪態をつき、煩わしく

「メイコ。村長に……」

電話して引つ捕らえさせる、と言おうとしたのだが。あつとこち
らも髪の毛が逆立つように驚いた。

ケイが負けた。しかも。

ドクンツツツツツ。

物凄く強い動悸が心臓と頭を揺さぶり、お婆たちは

「イギイイッ……」

と、汗を拭きだし、恐ろしく顔をしかめた。

「か、神が……、なんという……」

ぎゃあつ、と神の霊波を捉えていた脳が高圧電流が走ったように
シヨックを受けた。

お婆も二人の巫女も頭を抱えて転げ回った。

「あああ、い、いかん、か、神が、荒らぶる……」

手をわななかせ、なんとかせねばと、ビシイッ、と太い血管が破
裂するような熱いシヨックを受けて、堪らず神とのリンクを切った。

「ヨシ！ メイコ！ 大丈夫かえ!？」

二人もリンクを切っていたが、シヨックで神経が痺れてどうにも
ならないようだった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ、と、地震が起きた。

地下にいる三人にミシミシと柱や天井が音を立てる激しい揺れは生き埋めの恐怖をまざまざと連想させて震え上がった。

スウツと、脳が働き、ひらめいた。

長女ヨシがハツと、婆に言った。

「御神酒を」

婆もうなずき、

「麻里じゃな。それしかあるまいて。神に御神酒を投入せよ、ありつたけじゃ！」

と緊急措置を命じた。

ヨシが壁に走り、緊急用の装置を作動させた。

大量のウイスキーが投入され、なんとか神は鎮まった。

「お……………、おのれ紅倉ああああ……………」

婆は本物の鬼婆のような恐ろしい顔になって地中を睨み付けた。

「婆さま！ 上が！」

ハツとすると、地震の起こっている間にドアを突破し、侵入者たちが階段を下りてきている。

「愚か者どもがああ……………。早う！早う村長に電話せんか……………」

婆に叱りつけられてメイコが通路に出て内線電話を取ったが、

「婆さま、駄目です、通じません！」

途方に暮れて訴えた。

「ええい……………、なんたることじゃ……………」

お婆は恐ろしい目をして、頭の中のビジョンで通路をさかのぼった。侵入者は確実に近づいてきている。

かってくる音が重なった。黒木は思わず「わあっ」と大声を上げ、あっと思つと足場がなくなり、ゴロゴロと階段を転げ落ちた。

「おい、おい！、大丈夫か？」

木場田に懐中電灯で照らされ、黒木は目を瞬かせながらブルツと首を振った。

「お、おう、大丈夫だ」

黒木は自分で確かめるように壁に手をついて立ち上がった。肩やももが痛むが、しつかりつるはしも握つて、平気だ。

「危ないところだったみたいだな。なんだったんだあれは？」

「うん……」

木場田が深刻そうにうめいた。

「神の気が弱まっている。ひどく刺々しいのに、力そのものはずいぶん弱い」

「まさか、神が紅倉に殺されたなんてことはないだろうな？」

「いや、それはない。神が死んだら、もっとはつきり分かるはずだ。しかしただ事ではないな。とんでもないことが起こったものだ」

「チャンスじゃないのか？」

「そうだな。行こう」

二人は階段を転げ落ち踊り場にいたが、階段は向きを変え、更に下っている。この壁は木の柱と梁に木の板が張られ、建物の中という感じで、土の中を掘って作った穴というのは中からは感じられない。

「神の気が落ちてもあんたらの神力は使えるのか？」

「使えるが……、だいぶ弱まった気がする。まだ肉は腹の中にあつてまだ十分エネルギーはあるはずなんだが」

「麻里はどうか？」

「麻里か……。あいつは自分自身が化け物だからあまり関係ないんじゃないかな？」

「お婆に話を付ける前に麻里が出てきたら、やっかいだな」

「そうだな。話を聞く奴じゃない。問答無用で、俺たちをなぶり殺しにするだろう」

「末木、斎木が上手くケイにたどり着けるといいんだがな」
通路のある階に下りた。階段はまだ続いているが。

立ち止まり気を探った木場田は

「お婆たちはこの階だ。麻里はいないらしいぞ？」

とほつとしたように言った。

「ケイもいるか？」

「……………分からん。おそらく霊体が離れているんだろう。気はつかまらん。とにかくお婆に話を付けなければ」

通路を進もうとすると先でガラガラと音を立てて天井から重い戸が下りてきた。

「急げ！」

二人は走ったが残念ながら間に合わず、ドーンという音の後にべたつと張り付いた。

「くそつ、頑丈そうだな」

高級なテーブルに使うような厚い檜の一枚板のようだ。

「なんとかならんか？」

「待て」

木場田は懐中電灯を床に置き、突きだした右手を開き、左手で手首を押さえ、

「むん！……」

と力を込めたが、ぎりぎり奥歯を噛み締め、脂汗を流し、はあつ……………と力が抜けた。

「駄目だ、壁の中で鋼のアンカーがロックしている。俺程度の力では歯が立たん」

「ならこいつだ」

黒木は木場田を下がらせ、再びつるはしを振るって板の中央に力任せに打ち込んだ。固く分厚い板に、先は食い込むが全体はどっしりしてびくともしない。

「どれだけ厚さがあるのやら、つと！」

黒木は両肩の筋肉を怒らせて思い切りつるはしを打ち込み続けた。木片が飛び散り顔に当たるが、向こうへ突き抜ける手応えはない。

木場田が気を発するポーズを取った。

「そのまま続ける。アシストする」

黒木が打ち込むとさつきより深く食い込んだ気がする。気合いを込めながら木場田が気力を保つために話しかけてきた。

「俺にとっては長年の野望を実現するチャンスだが、君らは、ケイのために命を懸けるか？」

黒木もふうふう熱い息をつきながら振り上げる調子に合わせて答えた。

「ああ。俺たちチームは恋愛は、御法度なんで、なつ。……ケイは俺たち野郎どものアイドルなの・・さつ」

木場田は力をキープしながら呆れたように笑った。

「ずいぶん愛想のないおつかないアイドルだな？ 今外じゃああいうのが流行ってんのかい？」

「今回の一件は、常に恐れていることではあつた。俺たちは証拠の残る、明らかな犯罪者だ。悪人とはいえ、この手で直接何人も殺してきている。子供を作って家庭を持つわけには、いかん、さつ！」

「死者への贖罪か？」

「殺したクズどもにはなんの罪の意識もない。俺は………無精子症だ。」

末木もそうだ。斎木は玉がない。あいつ、あんな面して子どもの頃は女の子のかつこうしていただろう？」

「そう………だったな。………そういうことだったのか。知らなかったひよつとして、君らがこの仕事に選ばれたのは、そのせいかな？」

「俺たちが特別武術に優れていて選抜されたとも思っていたか？」

そうだ、俺たちが外に出る危険な仕事に選ばれたのは、捨てゴマとしてだ、子供の作れない俺たちは、村の将来には必要ない人間なん、だつ！」

「知らなかったよ」

「自慢して吹聴することじゃないからな。狭い村で世代を重ねた哀れな出来損ないの犠牲者が、俺たちだっ!!!」

バキイツ!、と尖端がようやく向こうへ突き抜けた。黒木は湯気を噴きながらハアハアと肩で息をし、つるはしを引き抜くと、仕上げだとはかり思い切り振り下ろした。

「本当は神の依り代なんて誰だっていいんだ。浮浪者でも何でも、もつと安全に足がつかないようにスカウトする方法なんていくらでもあるんだ。俺たちに悪人狩りをさせているのは、役立たずのカスの俺たちへのお情けさ。おまえたちもちゃんと世間様のお役に立っているんだぞ、誇りを持って、と、弱者救済の福祉事業さ。俺たちは、やっかいな、お荷物なんだよっ!!!!!!」

バキツ、バキツ、ミシツ、バキツ、と縦の穴は広がっていき、
「ちつくしよおめえっ!!!!!!」

渾身の一撃で分厚い板はビシイツ!と上下を結んで亀裂が走り、ガタンツ、と左右がずれた。ガンツ、ガンツ、と蹴りを入れると横に裂け目がミシミシ広がり、なんとか通り抜けられる隙間が出来た。ハアハアと息をつきながら黒木は振り返った。

「あんたは村の若者のために未来を作ってやればいいさ。俺たちは仲間……ケイを、救い出す」

木場田は重くうなずき、

「行こう」

と促した。

67 水槽

また時間をさかのぼる。

地震が起きたとき齋木と末木は役場裏の道具置き場に隠された階段を下って神の住みかの入り口付近に潜んでいた。

「運が良ければ」訪れるタイミングをじっと待ち、それがいつどのように訪れるのか、本当にあるのか、分からなかったが、二人は『きつとある』と信じていた。ここは神の地、心から願えば、きつとかなうのだ。

地震が起きた。かなり激しい早い揺れだ。

確信はなかったが、今だ！、と二人はドアを開け、ドーム型の水槽に飛び込んだ。

ここの水深は腿の辺りまで。懐中電灯で中の様子を照らし出した二人は、そこに浮かぶ物を見てさすがに総毛立った。

水死体、としか思えない、自分たちが狩ってきた不良青年の哀れななれの果てだ。今さらこの男に対し罪悪感もないが、単純に生理的な嫌悪感を感じた。

「どうやら神様はいないようだな」

水の流れを見て、

「こっちだろう」

大の男にはちよつと狭い水路へ腰をかがめて入っていった。まだ揺れは続いていて古い石積み通路は石同士の擦れ合うギシギシキユーンと言う不穏な軋み音に不安を感じつつ、それを押しのけてひたすら急いだ。ここはもっと恐ろしい化け物の巣窟なのだ。

水は甘く、べとつきがあった。やがてそこにぷーんと、かなり濃いもったいなくも高級なアルコールの匂いが充満した。

「いったい何してやがるんだ？」

匂いだけで酔っぱらいそうな濃厚なアルコールに思わずつぶやきながら齋木が先にひたすら進んだ。

水路が分かれた。Yの字に分かれて、どちらからも水の流れがある。

「くそ、どっちだ？」

揺れが急速に収まっていき、止まった。

「急げ！」

後ろから末木に急かされ、

「ええーい、こっちだ！」

勘で選んで右へ進み、どんどん先へ急いだ。途中途中支流らしき流れが合流してきて、いくつか角に行き当たり、曲がって進むと、通路の途中で奥の部屋に分岐する枝道があった。斎木は喜び勇んで進もうとしたが、

「待て」

後ろから末木が待ったをかけた。

「ずいぶん来てしまったぞ？ 本流をぐるつとさかのぼって来ているんだ。俺の勘じゃあここはもう村の外れの方だ」

「でも部屋があるみたいだぜ？」

斎木はグズグズせずに早く入って確かめたが、

「いや、止せ。ここはなんだかひどく嫌な感じがする」

末木は反対した。

「なんだよ、おまえ靈感なんてないだろう？」

「ないが、おまえは鈍感すぎるんだよ」

斎木は不満そうに口を尖らせたが、

「最初で間違えたんだ。急いで戻るぞ」

末木は未練も見せずにさっさと戻り始めた。斎木は未練たらたらに

「なんだよお、臆病者」

と穴の奥を振り返ったが、

ユラッ、ユラッ、と、

りんの青い炎が揺らめき、それが恨めしげな男の顔に見えて……

「なんだ、外れか」

斎木も間違いに納得しないうぶん先を行ってしまったっている末木を

急いで追いかけた。

結局最初のYの字の分岐まで戻り。

「やっぱりここだ。ケイは支流に入って神を待ち受けたんだ」

末木は分岐点で左に弁があつて開いているのを見て確信した。

「行くぞ」

末木が進み、齋木も続いた。

やがて、広い所に出て、支柱が並んで立ち、床下のようだ。水深も浅くなって、懐中電灯で照らした末木は、

「いた！ ケイだ！！」

水に濡れて横たわるケイの体を見つけた。低い天井に身をかがめ猿のように床を手で叩きつつ駆け寄り、

「ケイ！ ケイ！」

小さく鋭く呼びかけ、様子を見ながら薄着の肩を揺すつた。ケイの首はぶらんぶらん揺れ、まるで意識の反応はない。

「やはり魂は戻っていないようだな」

「このままここに置いておかないと拙いのかな？」

「……いや、救い出せるチャンスはこれっきりだろう。とにかく確保だ」

末木はケイを照らしていた光線を上に向け、床の穴から立ち上がつて上の室内を照らし、誰もいないのを見ると這い上がった。

「ケイをよこせ」

齋木の懐中電灯を受け取つて照らしてやり、齋木が抱き上げて立ち上がったのを受け取つて床に寝かせた。齋木が這い上がってくる間に末木は外の通路を照らして様子を探り、

「だいじょうぶだ。ケイを負ぶつてついてこい」

齋木がケイを負ぶつて来るのを待つて通路を進んだ。

「ケイが冷たいよ」

裸に薄物を一枚まとつただけでぐっしり濡れたケイを背中に抱いて、齋木が言った。

「早く温めてやらないとな」

末木はエレベーターを見つけてボタンを押してみた。ランプはつくのだが、しばらくして消えてしまう。もう一度やっても同じだった。

「さっきの地震で安全装置が働いたか……そんな物無くてただの故障か」

「階段がある」

「行こう」

二人は階段を上がり、上の通路の様子を見て破壊された防御壁を見つけた。末木が先になつて狭い穴をくぐり抜け、

「様子を見てくる。おまえはケイと階段のところで待っていてくれ」と、一人先へ進んだ。そこに黒木と木場田が向かった巫女たちの詰める「室」がある。

再び末木と齋木の後方へ戻る。

井戸の底の神の住みかである。

二人が汚い物を見下す一瞥をくれて水路に消えていった後、見下されて軽蔑されたそれに変化が現れた。

ゴゴゴゴ、と揺れは続き、水は丸い波紋を往復させぶつかり合つてバシヤバシヤ跳ねた。

不良青年を載せた板は左右にぐらぐら揺れ、やがて地震は静まっていたが、そうすると揺れの収まってきた板の上で白く水膨れした青年の体が苦しそうにじたばたと動き出した。左右から板に固定された頭を一生懸命動かそうとし、鼻と口を覆った粘膜をブフーフーフーと懸命に膨らませ、ロープにくぐられ、ケイに腱を切られて動かない手足を重そうにして必死に胴体をくねらせ、苦悶の痙攣を続け、やがて、ブルブル最後の震えを終え動かなくなった。それまで神の肉体にくるまれどうい風にしてか生きながらえていた傷

だらけの肉体が、神が眠って生命維持機構がダウンし、ついに死に絶えたのだ。死に物狂いの苦しい臨終だったが、苦しみを感じる意識は持たなかったはずだ。ところが。

暗闇の中で、腐乱したような肉体を覆っていたゼリー状の物が、白く変化し、もやもやと、屋台の綿菓子時間が時間が逆転してほどこけていくように細い糸になってゆらゆらと体から漂い始めた。それはうんと伸びると、やがて宙で一つにまとまっていき、何か形作っていた。人の形になっていき……、その顔の部分に、たった今死んだところの不良青年の顔が浮き上がった。

不良青年は起きたての寝ぼけた眼で、とてつもなく不機嫌な、凶相をしていた。

「……ち・く・しよ・う……」

驚いたことに不良青年の幽霊？ははつきりと耳に聞こえる言葉を発した。

「なんだろうなあ……、ものすげえー……、」

人をぶつ殺してえ気分だぜえ……」

くわつと目玉を剥き、ニイイツ……と歯を剥き出し、凶暴な面相でギョロリ、ギョロリ、と「ぶつ殺す」相手を捜した。

「そこに、いやがるなあ……」

68 爆裂する復讐神

黒木と木場田は神のコントロールルームである「室」に入った。女たちは暴力的な侵入者を怯えて引きつった顔で迎えた。

お婆はつるはしを握って肩でハアハア荒い息をする黒木を見、木場田をジロリと睨んで言った。

「青年団長。これはいったいどういう所存じゃあ!？」

黒木が前に出て言った。

「さっきの地震はなんだ？ ケイは無事か!？」

お婆はジロリと黒木を睨み、ぶ然と

「やられたわ、紅倉にな。あの馬鹿めが、紅倉もろとも自爆するつもりが、それもかなわんと取り込まれおったわ」

言い、思い切り不機嫌に笑った。

「その紅倉も虫の息だで、じきに麻里に始末されるわ」

黒木は殺気立った。

「やめさせる! ……せめてケイの魂を取り戻すまでは……」

お婆は妖怪みたいにカラカラ笑った。

「もうええわい! ケイの心根はよう分かった。あの女、もう村にはいらんわい!」

「きさまあ!」

黒木はいきり立ち、小さなお婆の襟元を掴んで軽く持ち上げた。

お婆は苦しそうにじたばたしてわめいた。

「ええい放せ! ええんじゃ! ケイはもう戦えん! 紅倉に遭って心が折れよった! このまま安らかになるんがあいつの望みじゃ! それ
が、分からんかあつ!」

「……」

黒木は怖い顔でお婆を睨み付けながら、襟を絞める手から力が抜けた。

「やめろ」

木場田が黒木の腕を掴んで睨み、黒木はお婆を放した。

「けっ、くそたれの悪ガキが、年寄りになんちゅう狼藉しよる」

お婆は床に尻を着いて喉をさすり黒木をなじった。黒木は心が弱くなるのを自分で叱りつけるようにお婆を睨み下ろした。

「ケイは仲間だ。見殺しにはせん」

不敵に笑うお婆に、木場田が言った。

「麻里を止めてください」

お婆は意地悪に笑った。

「嫌じゃ」

「今後村の運営は我々青年団が行う。村長、及び村長派の年寄りたちには、隠居してもらおう。鬼木の婆さま、あなたにもだ」

「よう思い切りよったのお、小僧っこが。いっぱしにクーデターかい？ わしなしで、神がよう扱えるんかえのお？」

「そうだな」

木場田は暗い目でじっとお婆を見つめ、その視線を、次女のメイコに移した。メイコはひいっと震え上がった。

「あなたは、

『へその緒』

の保管場所を知っているか？」

お婆がムンと目を剥き、黒木がギョツと木場田を見た。木場田は、「どうだ？」

とメイコに返答を強く迫った。メイコはブルブル首を振り、「わたしは知らん。教えられとらん……」

と、つい、すぎるような視線を長女のヨシに向けた。視線を追って木場田もヨシを見た。

「あなたは教えられているようだな？」

養女のヨシはお婆が太ったような大柄な女で、実の娘のようによく似ていた。娘とはいえもう六十をだいぶ越えている。ヨシは、

「うぬら村の反逆者に、教えると思うてか」

と、頑固な面構えで言った。そのあからさまに反抗的な態度に木場田はどうするかしばし迷った。黒木が木場田に訊いた。

「おい。ここに来たのはそれが目的か？」

多少非難を含んだ黒木の問いに木場田はまるで悪びれず答えた。

「そうだ。あれを握られては身動きできん。おまえらこそ、そんなことも考えないで行動してたのか？」

逆に呆れた非難の目を見て、ああそうか、と険しさをゆるめた。

「仲間第一か。それがおまえさんらの目的だったな」

再びヨシを向き、説得を試みた。

「俺たちは村の反逆者じゃない。村のみんなの幸せを考えているんだ。自分の幸せを犠牲にして村に奉仕する今のやり方を変えたいだけだ。頼む、俺たち若者に未来をくれ！」

「黙れえいっ！！」

お婆が泡を飛ばしてわめいた。

「わしらは村と団体じゃあ！ 村を生かさんで、人は生きられんわっ！！」

木場田も長年の鬱屈を込めてカアツと怒りの声をぶつけた。

「俺はっ、そんな人生がもう嫌なんだっ！！ 村の運命に支配されるのは、もう、真っ平なんだよおっ！！」

木場田とお婆は互いの主張を譲らず、ぎりぎり視線を闘わせた。

二人の緊張を固唾をのんで見守っていたヨシは、ふと、気配に、水晶玉を見た。

不良青年の凄まじい凶悪な顔がわあっと丸く広がった。

ヨシは思わず片膝立って、

「婆さまー、」

と殺気立った声を上げ、お婆もハツと振り返ると、

凶相が悪魔じみて広がった水晶玉にビシッと割れが走り、ヒツと息をのむヨシと視線を合わせ、
「バンツ！、と激しく爆発した。

水晶の破片は大砲のようにヨシの顔面を襲い、肉をえぐって頭を吹き飛ばし、ヨシの体はびっくりしたように両手を漂わせ、一瞬間の後、ドオツとひっくり返った。

「うぎゃああああああああっつっ」

ヨシの血を顔面にかぶったメイコが凄まじい悲鳴を上げた。

「お、おのれ・・・」

お婆がパンツと合掌して身構え、

水晶が吹っ飛んだ台の筒から白い煙が吹き上がり、宙に悪鬼と化した不良青年の幽霊が現れた。

「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。愉快痛快、恐悦至極たあこのこつたぜえい。

うひゃひゃひゃ、吹っ飛ばしてやったぜ、うひゃひゃひゃひゃ、く~~~~、気っ持ちはいい~~~~！

うひゃひゃひゃひゃひゃ.....
まるで.....」

ギョロリと狂った顔に目玉を剥いて、言った。

「神様になったみてえに、いい気持ちだぜ」

えに顔面オロシにして、虫みてえに手足をぶつちぎって殺してやるから最後まで死ぬんじゃねえぞおっ!？」

思念の力で黒木の足を高く持ち上げると顔面を床に着けさせ、「お習字の時間だぜえいっ」

思念で足を引つ張って黒木の顔面を床に引き回した。木場田とお婆は思わず避け、メイコは悲鳴を上げて隅に逃げて縮まった。黒木は右に左に首を振り、手で床から持ち上げようとしたが、

「おらおらおらあつ、書はアートだぜいっ!!」

幽鬼の思念にぐるぐる引き回され、転がるヨシの血だまりで朱の顔料を補充し、板の間を赤い曲線で二重三重四重に染めていった。突つ張ろうと頑張っていた黒木の腕がだらんとなり、幽鬼はようやく引き回すのをやめた。

「見せてみるや？」

手を上げて黒木を立ち上がらせ、残酷な笑いを浮かべた。黒木の顔面は皮も肉も破れ、ぼたぼたと大量の血をしたたらせた。

「ギャハハハハ。おお〜い、生きてるかあ〜?」

ヒクリと黒木の腕が痙攣し、真っ赤に濡れた中で目玉が力無く幽鬼を見た。幽鬼はニンマリ笑った。

「けっこう、けっこう。じゃあまず左腕から引っこ抜いてやるかな?」

黒木の左手がピーーンと横に伸び、うんと伸び、ミシミシ、ブチブチ…と、筋肉の繊維が引きちぎれていく密な音がした。

「ぐぐぐ…うわあああ……………」

黒木は堪らずつめき声を上げ、逃れるように首を振り、溢れる血を飛ばした。

ブチッ、と大きな音が響き、

「うおわああつ……………」

黒木は悲鳴を上げ、がっくり首を垂れ、気絶した。

「チッ、なんだつまらん。まあ、寝てるや」

幽鬼が興味を失うと、黒木はガタンと音を立てて落下したが、意

識を失ったまま反応しなかった。

「おいおい、なんだよおめえら？」

幽鬼は部屋を見渡し言った。

「お友だちがイジメにあってんのに見て見ぬふりかあ？ 先生情けないぞお〜？」

幽鬼に視線を向けられ、木場田は霊力のパワーの差に為すすべなく端に寄って突っ立っていたが、思わず、

「お、俺は何もしていない！……」

と口走り、我ながら男らしくない言い訳に屈辱を感じ、幽鬼はニヤニヤした。

幽鬼は他の生徒を見て、うん？と眉をひそめた。

「ババアがいたはずだが。いつの間に逃げやがった？」

隅にメイコが半狂乱になって震え、ヨシの死体が血溜まりに転がっているが、やはりお婆の姿は部屋にない。

「……………いや？」

幽鬼は首をひねり、

「ババア、出てこいやあつ！！！」

激しく怒りの気を爆発させると、

「うぎゃっ」

悲鳴を上げて、お婆が突然部屋の隅に姿を現しひっくり返った。

「いたな？ てめえは妖怪だろう？ 忍法隠れ身の術ってかあ？」

ひっくり返ったお婆は両手の平がめくり上がり血を流していた。手印を結び幽鬼から身を隠す呪術を行っていたが、それを破られたらしい。

幽鬼は残酷に笑いながらぬうとお婆に近づいてきた。お婆の額からだらだら脂汗が流れる。

「てめえも思い出したぞお？」

幽鬼の顔から笑いが消え、ひたすら残虐な憎悪が剥き出しになった。

「俺の体に何してくれやがった？ 百万年もひでえ悪夢を見させら

れた気分だぜえ。すっかり頭がドラッグ漬けのパンクロッツカでぶつとんじまってるがよお、脳天ぶつ壊されてなきやあ幽霊の俺様もちりぢりになっちまってたところだ、今は、感謝するぜ」

殺すことを決めていて残虐に笑った。

「俺を『神様』として使ってくれてたみてえだな？　へへへへ、なんなら協力してやってもよかったのによお？　・・・いいー気持ちだぜえー？　すんげえ力が流れ込んで、ちびりそくにブルブルエクスタシーを感じちまった。死んで初めて生きてる気がするぜえ。神様になるってのは、すっげえグレートエクスペリエンスじゃねえか？」

お婆も死を覚悟して言った。

「しれ者め。貴様のような下衆が神になんかなれようか。貴様なんぞ、わら人形のわらに過ぎんわ」

「じゃあてめえもわらくずにしてやるよ」

幽鬼の目がギラリと悪魔の目となり、お婆は、

「ぐぎゃあああああああああああ」

凄まじい悲鳴を上げると、細いしわだらけの体の中で、筋肉がバラバラにほどけ、皮膚が突っ張り、人の形を無くして、爆発して部屋中に血をまき散らした。

「ババアでもけっこう詰まってるもんだな」

お婆への興味を無くし、

「さて、」

メイコが目を三角にしてヒイーンと引きつり、木場田は震える体を必死に足を踏ん張って抑えていた。

「てめえも仲間か？」

入り口で黒木を助ける隙を窺っていた末木がギョツと立ち尽くした。幽鬼がニタアツと笑った。

「てめえはゆっくり解剖してやる」

「うわっ、」

念力に引つ張られて末木は黒木の隣の床に転がされた。

「く、クロさん！」

近くで見る黒木の凄まじいやられ具合にカアツと怒りが燃え上がり、

「きつさまあー……」

と幽鬼を睨み上げた。

「マツチヨな兄ちゃんだな？ んじゃ自慢の筋肉拝ませろや！」

末木の鍛え上げた厚い大胸筋がビクビクうごめき、ゴリゴリ痛んで張り切り、末木は顔を真っ赤にして汗を噴き出した。皮膚がミシミシ音を立てて裂け、バチンツ！、と筋肉がぶっ千切れて飛び出した。

「うっぎゃあああっつっつっつ！……！！」

末木は神経の焼き切れる凄まじい激痛に気が狂ったような絶叫を上げた。

ジャンパーの胸がぐっしより赤黒く濡れ、白目を剥いて倒れた。

「う……、すう……、すえ……き……」

黒木がヒクヒク白目を剥きながら痙攣した。

「よおし、目が覚めたか」

幽鬼は喜んで舌なめずりした。

「思ったより根性ねえな？ じゃあひと思いに八つ裂きにしてやるうかあ!？」

黒木がザアツと立ち上がった。

「ぶっ飛びなあっ!!」

黒木の全身の骨がミシツと軋んでバラバラに離れようとした。

「ぐく……ぐぶふっ……」

黒木の顔が歪み、血をだらだら噴き出し、ぶくぶく泡混じりの血

下腹部がぐちゃぐちゃになり、股が広がって両脚がだらんと下がった。

「お、お、お、俺様は、神様……ぎゃああああっっっ」
右脚、左脚が股から外へ外れて吹き飛んだ。

手足を失った幽鬼は哀れに宙に張り付けにされたように動けず、
「ひっ、……や、やめるおおぐがががが……」

顔がいびつに変形し、ぐちゃっと潰れ、汚い汁が宙に飛び散って
漂い、やがて白いもやもやになって体も雲散していった。

「末木！ クロさん！」

斎木が懐中電灯を持って駆け込んできて、凄まじい惨状に一瞬息
をのんで立ち止まり、

「末木っ！ クロさんっ！」

二人の元へ駆け寄った。

「おい、クロさん……、末木い……。なんてざまに……」
末木が呻きながら言った。

「ど、どうした？ け、ケイは？」

「ケイは……寝かせてきた……。巫女を連れた木場田さんが血相変えて
走ってきて、二人がたいへんだ！、つて……」

末木が宙でバタバタ手を掻き、

「お、起こしてくれ……」

斎木が手を取って起こしてやろうとすると「あああ……」と恐
ろしく顔をしかめて悲鳴を上げた。

「い、いいから、起こせ！」

末木は鬼の形相で痛みを堪えて起こされ、

「クロさん、クロさん！」

と呼びかけた。黒木はごぼごぼと血の泡を吹きながら、こちらも
鬼の形相で起き上がった。

「い、いぐおう……」

斎木と末木の手を借り、ブルブル震えながら立ち上がった。

「クロさん、大丈夫か？」

黒木は激しく鼻息を吹き、どういう意味でか首を振った。

「ケイはあ……、見つけたのか？」

「ああ、大丈夫だよ。魂は抜けたままだけど、体はどこも怪我してないよ」

「つあつ、……魂、わああ……、紅倉の、中、だ……」

黒木は血を吹きながら

「……ふうんんんんんん！！！！」

無理やり気合いを入れて自分を奮い立たせた。

「行くぞお。ミズキに合流してケイを託す。芙蓉美貴に同道し、紅倉からケイの魂を戻してもらおう。行くぞお」

黒木が率先して歩こうとして、末木と斎木が左右から支えた。

防御壁の向こうでケイは無事眠っていた。再び斎木が背負い、末木が黒木を支えて歩きながら、男たち三人には、これが自分たちの生涯最後の戦いになるだろう予感がしていた。

71 娘の憤慨

神の住みかの水槽で。

麻里が不良青年のぶくぶく膨れた水死体を踏みにじっていた。

ふわふわに水膨れした肉体は女子高生の蹴りで簡単に潰れ、引きちぎられた。柔らかな腹を蹴り破り、心臓を蹴り抜いたらぶしゅつときつたない汁をいっぱい吐き出したのでムカついて腕を蹴り飛ばし、手を踏みにじり、蹴り飛ばした。縮こまったぶよぶよに皮の膨らんだ陰部がことさら醜悪で、ぐちゃぐちゃに踏みにじり、両脚を蹴り飛ばした。幽霊がもがき苦しんでいるのが鬱陶しく、顔を踏みにじって完全に黙らせてやった。

バラバラになった死体を眺めて、

「まあ醜い」

麻里はいつもの人を小馬鹿にしたお上品な口調で言ったが、

「こんなくっだらな下衆野郎にまで。ムカつくったらありませんわ」

キイイと歯ぎしりしたくなるヒステリーが小さな胸の中で激しく波立っているのだった。

ジロツと陰険な目を水路の先へ向けて、

「お婆は死にましたか。ま、十分生きたからもうよいでしょう。どうぞご冥福を」

まるで心にもなく言い、

「さて。こちらのネズミどもにも罰を与えてやらなくてはなりませんわね。とりあえずメイコお姉さまだけ返していただかなくてはさすがに手が足りませんわね」

ギラツと物凄く怖い目で睨み付けた。

「ヒイイイイイッ」

階段の途中でメイコは木場田の手を振り払い、頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。

「ヒイイ〜、ヒイイ〜、麻里、わたしが悪いんじゃない、わたしのせいじゃないんだよお〜、許しておくれよお、ヒイイ〜、ヒイイ〜」

「おいっ、しつかりしろ！」

木場田が怒って肩を掴んで揺さぶったが、メイコはひいひいわめいて頭を抱えて目を剥き、もうその場から動こうとしなかった。木場田は頭を抱える腕を一本無理やり引き離すと、

「しつかりしろ！」

バシンと頬を平手で打った。メイコは口を歪めて恐ろしく恨めしい目で木場田を睨んだ。すっかり病的に険が立って、後ろにまとめた髪が血を被つてごわごわにそそけて、まるつきり幽霊だ。

「おい、あなたは本当に『へその緒』の保管場所を知らないんだな？」

メイコはこうなったのも全部おまえたちのせいだと恨めしく歪めた口を動かしてようやく言った。

「知らないよ」

木場田は怖い顔を自分で照らして問いつめた。

「だが、それを知っていたお婆もヨシ婆あも死んだ。もうへその緒は使えない。そうだな？」

メイコはニタア〜つと、ざまあみろというように言った。

「麻里は知っているさ。あの子は秘密を嗅ぎ回るのが大好きな子だからねえ」

くそっ、と視線を外し、木場田は苛々考えた。メイコに向き直って説得を試みる。

「なああんだ、メイコさん。俺は本当に村のみんなのために村を正常な状態にしたいだけなんだ。あんだだって、まだ若いんだ、巫女の掟から解放されたいと思うだろう？　なあ、なんとか協力してくれないか？」

メイコは四十半ばだ。女性として若いと言えるかどうか微妙なところだ。メイコはへらつと病的に笑った。

「今さら、誰がわたしなんか『女』と見てくれる？」

木場田はうんざりした気分で、たしかにな、と思った。木場田はメイコを見限った。そこへ、

「木場田さん！」

こちらも思い切り恨めしく非難を含んで齋木が呼びかけた。ケイを背負った齋木の後から互いをかばい合うように肩を支え合って大けがをした黒木と末木が上ってきている。木場田は、

「すまん」

と素直に頭を下げた。

「あの場では、俺にはどうにも出来なかった」

齋木が敵意剥き出しにじいっと睨み、追いついた黒木がほとんど表情の分らない顔で、

「それはいい。だが、まだあんたを信じていいのか？」

と訊いた。木場田は、

「俺は村のみんなを救いたいんだ。君たちだって、可能な限り助きたいと思っている」

と主張した。

「村人が自由になるためには、どうしても『へその緒』が要る。どうやらそれは麻里に握られているらしい」

メイコが

「もうすぐ来るよ」

とへらへら笑いながら言った。木場田は汚い物を見るように横目で睨み、黒木たちに、

「俺が麻里を説得する」

と言った。

「麻里を、説得できるか？」

「説得できなければ、もはや神を使えるのは麻里だけだ、神が復活したら、コントロールできるのも麻里だけだ」

と、忌々しく役立たずのメイコを睨んだ。

「なんとか『へその緒』を返してもらえよう頼んでみる。俺たちの自由のために、どうしても必要なんだ」

「分かった」

黒木はうなずいた。

「俺たちはケイのために行く。せめてケイの自由を確保するまで、時間稼ぎしてくれ」

「分かった。最善を尽くそう」

「じゃあな」

齋木に邪魔にされて木場田は端に寄り、末木と黒木もすれ違つて上つていった。

「死ぬなよ」

木場田の激励に振り返ることをしないで男たちは黙々と外の世界目指して上つていった。

麻里が来た。

「麻里！ おお麻里！ た、助けておくれ」

メイコがさも木場田から逃げるように大仰に腕を伸ばして麻里の元へ階段を駆け下りた。

「メイコ姉さま、汚らしいですわ。触らないでくださいませ」

麻里はメイコに冷たい一瞥をくれ、階段の上の木場田と睨み合つた。

「君と交渉したい」

「あら。逆者が今さら交渉の余地などお持ちだと思いですの？」

「君が神を独り占めすればいいさ」

これには麻里も驚き、メイコもギョツと目を剥いてまじまじ木場田を見た。

「どうだ？ 君なら神を自由に操れるんだらう？」

「まあ、できなくもありませんわ」

「俺が村をまとめて、神を君に譲り渡す。公安……国が神の力を欲しがっているようだから、なんならそっちの交渉を受け持ってもいい」

「ふうん。あなたにそれだけの力がありますかしらねえ？」

「神を君に譲るから、そうしたら、……『へその緒』を返して、村人を神から解放してほしい。そういうことなら、若い連中は必ず俺に付く」

「なるほど、『へその緒』ですか。まあ考えてあげてもよいでしょう。ではわたくしからの条件」

「その条件でも不足か？」

「村の結束力と覚悟のほどを見せていただきたいですわ。ケイ姉さまの体を奪い返してきなさい。お仲間が邪魔をするでしょうから、全員殺してくださいませ」

木場田は顔をしかめ、言った。

「必要ないだろう？ 紅倉はどうした？ 君が仕留めて来たんじゃないのか？ ケイの魂は紅倉に吸収されていたんじゃないのか？」

「ああ、そうでした、紅倉美姫。彼女はまだ生かしておきましたわ、夜祭りの捧げ物に。ケイ姉さまもいっしょに供物にしましょう。そうそう、もう一人若い女の連れがいるんですしたわね？ 彼女もついでに。神は、たいへんお喜びになるでしょう」

「そうか……」

木場田は少女の皮を被った悪魔の悪趣味さに反吐の出る思いがしたが、顔には出さず、思い切った。

「分かった。ケイを取り戻す。それで、こちらの条件はのんでもらえるんだな？」

木場田の物わがりの良さにふうんと麻里は考え、

「ま、よろしいでしょう」

と言った。

「青年団に黒木チームを狩らせなさい。外に逃げられるようなら公安の皆さんにもご協力お願いしなさい。くれぐれも抜かりないよう

に

「分かった」

木場田は重々しくうなずき、上を向いて歩き出した。

『黒木君。すまん』

と謝りながらも心を鬼にして。

血みどろの死闘が、始まる。

72 倒壊

芙蓉たちが地震に遭ったのはスナイパーの銃撃を逃れて峠を下り、ちよつど村に入ったときだった。

揺れが来る前に芙蓉もキイイン……と頭を突き抜ける悲鳴のような大きな霊波の乱れを感じた。芙蓉はハツと目を見開いた。

「先生！……」

その後揺れが襲ってきて、揺れはそれ自体が生き物のように不規則に突き上げる縦揺れ、咆哮するような長波の横揺れが入れ替わりながら長く続いた。先を急ごうとすると宙に浮いて放り出されるような激しい揺れだった。

よつやく揺れが収まり、

「急ぎましよう！」

芙蓉はミスキとジョンを引き連れ鬼木の婆の家へ向かって走った。地震が起きる前に広がった悲鳴のような霊波。

それは巨大な、おぞましい存在の上げたものだったが、その中になぜかに紅倉の苦しんでいる思念が感じられた。それはとてもか細く、今にも消え入りそうので、芙蓉は紅倉のかつて無い窮地を思い、恐ろしい不安に胸を痛くしながら走った。

広場に入ると、昼の祭はもうお開きになったようで気味悪い年神様のわら小屋の他餅や雑煮の鍋などは片づけられ、ぽつりぽつりと老人たちが地震に不安な顔をして立っていた。

村長の家の玄関にも村人がいて、石階段から中の様子を窺っていた村人たちが血相変えて走ってくる芙蓉たちを何ごとかと見た。裏手に向かうと、そこにも20人ほどの村人たちが集まっていたが、彼らが見ている先、鬼木の婆の家は倒壊していた。小さな木造の2階屋だが、屋根が噴き上げられ、残った四角の木枠がスナック菓子の袋の口をぎゅっと締めたみたいになじれて内側に倒れ込んでいた。まるでガスが大量に噴き上がって真空状態になった筒に外の空気が

殺到したようだ。

芙蓉は力アツと頭に熱を発し、

「地下への入り口はどこ!？」

とミズキに訊いたが、ミズキは知らず、

「ジョン!」

と訊くと、ジョンは鼻をくくん巡らせ、後ろへ回り、壁ごと倒れた裏口のドアをガリガリ掻いた。

「こっちなね?」

芙蓉は斜めにねじれてバリバリ板の裂けたドアをミシミシ音を立てて引き破り、蹴って枠から外した。中を覗くと柱や壁板が割れて折り重なり、ぼろぼろに砕けた壁土が白く降り積もっている。すぐ左に奥の廊下が続くドアがあるが、倒れた柱に引っかかって動かすのはたいへんそうだ。芙蓉はじつと意識で先を探り、立ち上がると左へ歩き、

「ここ、開けて」

と、ミズキと村人たちに壁を指して命じた。ミズキが、

「何か道具を持ってきてください」

と村人に頼み、芙蓉の示した壁を調べた。窓も何もない所で、手がかりが無くやっかいそうだ。とりあえず村長の家の庭からスコップを拝借して壁の破壊作業に取りかかった。

役場の裏の物置につるはしを取りに行った村人が「あっちも同じように倒壊してる」と騒いだ。芙蓉はそっちは特に関心がない顔をしながら、ミズキに

「急いで!」

と鋭く催促した。ミズキはスコップを折れ曲げそうに乱暴に扱って板をバリバリ剥いでいった。村人たちに「神様のお宮」という声が囁かれ、芙蓉は自分たちに不審の目が向けられているのを感じた。ミズキがスコップを置いて手で直接板を掴んで力任せにバリバリ剥いでいくと、ぬっと白く粉を被った斎木の顔が現れ、ミズキも思わずビクツと体を震わせた。

「齋木さん!？」

「おっ、ミズキ! 戻ったか!」

齋木は白い顔で妖怪のように笑い、

「手伝え! ケイを上げる!」

と、いったん引つ込み、「ケイ!？」とやきもきしているミズキの前に目を閉じて眠ったケイの顔が突き出されてきた。

「引つ張り上げる!」

奥から齋木が言い、ミズキは壁の下に腕を差し入れ、ケイの脇の下を掴んでケイの顔を割れた板にこすらないように気を付けながら引つ張り上げた。ミズキがケイを外に連れ出すと、

「ミズキ! 手伝え!」

とまた呼ばれ、ミズキはケイを芙蓉に預けて壁の穴に戻った。

芙蓉は受け取ったケイを離れた安全な場所に枯れた草を枕に寝かせてやった。ジョンが心配そうに顔を寄せてくんくん鼻を鳴らした。ケイは目を閉じているが、その左右と鼻の上に、ピンク色の薄い皮の盛り上がった大きな傷が痛々しく走っていた。

「クロさん!？」

ミズキが大声を上げた。腕を差し入れ、足を踏ん張って大の男を引つ張り上げた。周りで不審の目を向け見守っていた村人たちも現れた黒木の顔を見て「わっ」と驚いた。血だらけで、皮膚がぐさぐさに破けている。ミズキは抱きかかえて黒木を外に連れだした。齋木が這い出してきて、「頑張れよお!」と励ましてうめき声を上げる末木を引つ張り上げた。

「クロさん! いったい何があった!？」

あまりの重症ぶりにミズキがうるたえて問い、黒木はなんとか自分で立ち、ミズキを退けるような仕草をした。芙蓉が強い調子で言った。

「ケイさんは安藤さんを連れ帰るために『ガス穴』に入った先生をサポートするために神とコンタクトを取った。でも事故が起こり、ここで控えていたあなたたちが急いで救出に入ったけれど、地震で

閉じこめられてしまった。そうね？」

黒木が

「そつだ」

と血を吐きながら答えた。村人から

「鬼木の婆さまと巫女たちはおらんのか？」

と質問され、黒木は

「悪鬼が現れて殺された」

と答えた。村人たちに「婆さまが殺されたじゃとう？」と動揺が走り、

「それじゃあ、か、神様はどうされとるんじゃ！？」

と質問された。黒木は首を振り、

「分からん。麻里と木場田さんが事後策を講じているはずだ」と答えた。

「青年団長じゃと？　なんで青年団長まで？　神の宮は男子禁制じやろうか？　なんでおまえらが？」

と、村の年輩者たちの不審は更に高まり、責めるような雰囲気が強まった。芙蓉が言った。

「だから、非常事態でしょ？　村長とわたしたちで契約があったのよ。さつさと村長に報告して確かめてきなさい」

「それもそつじゃ。急ぎ村長に報告じゃ！」

村人が数人走り、猶予はない、と芙蓉は黒木を睨んだ。黒木はうなずき、

「すまんが、診療所へ運んでくれないか？　見ての通りの有様だ」

と、弱々しく笑った。手を差し伸べようとするミズキを、

「おまえはケイを」

と断った。代わりに齋木が黒木の肩を支えた。末木も怪我をしていられるらしくジャンパーの胸が真っ赤に濡れているが、黒木ほどではない。ミズキはハーフコートを脱ぎ、芙蓉に持ってもらうと、ケイを負った。その上にコートを掛けてもらい、袖を自分の首の前で結んでもらった。芙蓉は、

「急いで!!」

と、さも怪我人を気遣っているようにせき立てた。早足で歩いていく背中で村人たちの不審の目と何ごとか相談し合う気配をひしひしと感じながら。

73 それぞれの道

村唯一の診療機関「直木医院」の直木医師は70過ぎのかなり目つき手つきの怪しい老人だった。

芙蓉はベッドでケイを他に何もなかったので白衣に着替えさせ、ミズキは黒木末木のために薬や包帯を風呂敷に包み、斎木は車を取りに走った。

目に血が垂れてくるので自分で包帯を巻きながら、黒木は背中を目隠しの向こうの芙蓉に話しかけた。

「ケイは、どうなんだ？」

「魂が抜けているわね。このまま戻らなければいずれ衰弱して体も死んじゃうでしょうね」

「そうか…。紅倉がどうなったか分かるか？」

「分からないわ」

「そうか。お婆の話だとケイの魂は紅倉の中に取り込まれてしまったそうだ。我々としても紅倉に会ってケイの魂を返してもらわなければならぬ」

「ずいぶん勝手なことを言うわね？」

芙蓉は不機嫌を隠そうともしないで言った。

「この人は先生を殺すために神と同化したんじゃないの？」

「村長に脅されて仕方なくだ。ケイは、紅倉に心酔していた」

「あつそ」

状況的にこちらから地下の穴に潜って紅倉を救い出すのは無理なようだ。芙蓉は事態に対処するため苛々を吐き出し、冷静になって言った。

「村長が命じたのね？」

「そうだ」

「あのダルマ狸。…あなたたちはどうするの？ 村長命令に背いたんでしょ？」

「俺たちは村を出る。ミズキとケイをあんたに預ける。紅倉と合流して、二人をいつしよに逃がしてやってほしい」

「さて、どうしようかしら？」

芙蓉はケイの着替えを済ませ、

「いいわよ」

とミズキに声を掛け、いそいそやってきたミズキをジロリと睨み、「わたしは先生が何より大事。先生を救うための足手まといはごめんよ」

ときつく言った。ミズキも何か言いたそうに芙蓉を見つめ返した。「先生がこの人に平中さんのボディガードを頼んだわよね？ 平中さんはどうしているの？」

ミズキはハツとしたように、

「いや、俺は……」

と口ごもった。

その時、カンカンカンカン、と甲高く鐘が連打される音が聞こえてきた。黒木が

「役場の半鐘だ」

と言い、芙蓉は人の本能に訴えかけて不安にさせる音に目をつり上げながら黒木を振り返り、

「わたしは平中さんに責任があるわ。彼女を村から脱出させて、先生を助け出す。そっちは勝手にやってちょうだい」

と、意識の戻らないケイを冷たく突き放した。黒木は、

「そうか。仕方ない。では紅倉を助け出したら村の外でミズキと合流してやってくれ」

と言い、ミズキに、

「行くぞ。あれは俺たちに追っ手を掛ける合図だろう。ケイを守って村を脱出するんだ」

と急がせた。

「お先」

芙蓉は先に玄関に向かった。表に出ると甲高い半鐘の連打が直接

耳を打った。番犬のようにそこで待っていたジョンが思わず不安そうな顔で芙蓉を見上げた。

「悪いわね」

芙蓉は犬の主人を見捨てた詫びを言い、不安な警告音に負けないうように意識を集中し、勘を働かせた。

「学校ね」

紅倉は平中に村の外から入ってきたと思しい小学校の女教師と駐在所の巡査に話を聞くよう頼んでいた。あれからだいぶ時間が経つてとつくにペンションに引き上げているかもしれないが、それならその方がよい。しかし芙蓉の勘は平中を小学校にいると見た。ペンションと逆だが、医院からは近い。

芙蓉が走り出すとジョンがいつしよに走り出した。芙蓉は仕方なく立ち止まり、

「あなたのご主人はあっち。わたしは別行動よ」

と指で戻るよう教えてやったが、ジョンはじつと芙蓉を見て目をそらさなかった。

「連れていってくれ」

ケイを背負ったミズキが出てきて言った。

「紅倉がいなくちゃケイが目を覚まさないことを知っているんだ。あんたが紅倉を連れて逃げてしまわないよう見張るつもりなのさ」

芙蓉はジョンを片目をつり上げて睨み、

「役に立つてもらおうわよ？」

「と言い、ジョンは

「ワンッ」

と、早く行けとでも言うように一言吠えた。

「後で引き取ってもらおうわよ」

とミズキに言っただけで芙蓉はジョンを引き連れ走り出した。

赤いワゴン車が斎木に運転されて走ってきた。ミズキの運転する車だが、村の人間は村に置いてある間キーは差しっぱなしかダッシュボードに置きっぱなしにしている。ミズキは後部座席に間にケイ

を挟んで黒木と乗り込みながら訊いた。

「他の犬たちは？」

自分がジヨン連れ出すとき他の四匹には末木の家に向かうよう指示して行かせた。黒木は、

「いなかっただな。地震に驚いて逃げたんだろう」

と答えた。ミズキは彼らが地震だろうと主人のケイを見捨てて逃げたとは思わなかったが、逆にケイを捜してどこかに向かい、人間たちと行き違いになったのかもしれない。それとも地震のせいで動物のナビゲーション感覚が狂ってしまったか。いずれにしろ彼らを捜している時間はないし、ミズキがケイ以外にはけっして慣れようとしていない犬たちの心を測り知ることはできなかった。

「飛ばせ。ルートは任せる」

黒木に言われて斎木は車を発進させた。半鐘はいつの間にか止まって、村はその名残ですっかり何か欠けたような静寂に包まれている。

葬式に沈んだように静まり返った村をワゴンカーは走っていく。

じきにその静寂が赤い霧に染まっていくことだろう、山間のこの村は決して照らさない夕日の赤の代わりに。

74 先生と生徒の物語

平中は地震が起きたとき小学校の教務室で相原ゆかり先生とお茶を飲んで話をしていた。

机が4つ集まった狭い部屋の中でいろいろ物が倒れ、廊下に面した格子窓やファイル類を入れた棚の戸のガラスが割れ、揺れが収まると二人して机の下からおっかなびっくり這い出した。

「大きかったですね。震度4以上あったわね。この辺り地震は多いんですか？」

平中の問いに相原先生は

「いえ。こんな大きなのはわたしが来てから初めてです」

と青ざめた顔で答えた。平中はその様子を見て、

「でも、なんだか変な揺れでしたね？ 昔話みたいだけど地面の下で大ナマズが暴れ回っているみたいよ」

と鎌を掛けた。はたして相原先生は平中の疑いに答えるようにまですます青ざめてまじまじと見つめ返してきた。

相原ゆかり先生はまだ二十代の、明るく優しい笑顔をしたとても感じのよい人だったが、一方で優しさが弱さになりひどく打たれ弱い印象があった。

先生はもう一人三十代の男の先生がいるが、こちらは祭の手伝いに加わりどこかに行っている。相原先生は子どもたちの担当で、踊りを終わっておもちを食べた子どもたちはその場で解散になり、平中は話しかけていっしょに学校に来た。紅倉に話を聞くよう依頼されていた外の人間のもう一人、ナンパな島崎巡査は突然県警本部長から緊急の用件で呼び出しが掛かり、大慌てですつ飛んでいった。学校の教務室で相原先生と特にどうと言うことのない世間話の中で村での生活を聞き取っていたのだが。

相原先生は笑顔しか似合わないような優しい顔に精一杯恐ろしそくに目を見開き、震える唇で言った。

「実は……、わたし、この村が怖いんです……」
言ってしまったから、またハツとしたように目を見開き、両手で口を覆って恐ろしそうにガタガタ震えた。

「この村の何が怖いのか？」
相原先生のお姉さんの年齢でこれまでうち解けた会話をしてきた平中は心配そうに、めいっばい親しみを込めて尋ねた。相原は平中を旅行雑誌の記者としか知らない。相原先生は怯えた目で逡巡しながら、心のコアの部分の固い殻を破るように話し出した。

「この村はとてもものどかない所で、この学校は昔ながらの先生と生徒の良い師弟関係が残っていて、わたしのような人間には都会よりずっと合っています。でも……」。

この学校では、普通の小学校では教えないようなことを教えています……。

道徳の時間では、昔の語り聞かせ文化に触れるという名目で……、地獄の様子を話して聞かせたりします……」

「地獄の様子？ どんな風に？」

「悪いことをして地獄に落とされた人間が……、そこでどんなひどい目に遭わされるか、とても……、生々しく……、聞かせるんです……」

「それはあなたが？」

「いいえ。そういう話は校長先生や教頭先生が。恐ろしくてわたしなんか耳を塞ぎたくないような話を……、子どもたちは平気で聞いているんです。もうすっかり慣れているみたいで、時に笑いながら……。幼い頃から周りの大人の聞かされているんだと思います。確かに昔はお寺の本堂に子どもたちを集めて住職さんが壁の地獄絵を見せて『悪いことをするとこういうところに落とされるんだぞ？』と脅して教育を行っていた所もあったようですが、わたしは子どもに聞かせるには生々しくて残酷すぎると感じました。」

他にも……こんな辺鄙な狭い村ですから、外の世界のことを知ろうと言うことで新聞記事をみんなでいっしょに読んだりするんです

が、そこで選ばれる記事というのが陰惨な殺人事件や、その裁判の記事だったりして、わたしにはとても小学生の勉強に取り上げるような内容とは思えません。

でも、どうやら村の人たちはそういうことを当たり前に思っているようで、学校の教育方針にクレームを付けてくるような親はいません。……………。」

相原先生は何を思っただかひどく言いづらそうにし、額にびっしょり汗を浮かべた。

「どうしたの？ なに？」

平中が心配そうに顔を覗き込むと、泣きそうになりながら、勇気を振り絞るように話し出した。

「実はわたし……………、前に務めていた学校でトラブルに遭って、教師を辞めようと思っただかんです。」

先生になり立てで一年生のクラスを受け持ったんですが、ちょっとイジメのような問題が発生して、対応に苦労しました。それは子ども同士のちょっとしたことで、わたしもイジメという認識ではなく、みんなで仲良くしましょね？と融和を計ったつもりだったんですが…………。生徒の母親が学校にやってきまして、わたしの娘がイジメをしているってどういうことですか！とひどい剣幕で。わたしはそんなこと言ったつもりはないんですが、わたしがそう言って娘さんを叱ったと決め付けて、どう説明しても納得してくれないんです。わたしはその母親に保護者会でするし上げにされ、まるで土下座をするようにみんなの前で謝らせられました。ところがそうすると今度はいじめられていた女子生徒の母親がやってきて、自分の娘がいじめられているのにどうして守ってくれないんですか？ あなたは経験不足で、そんなことでは子どもを預けられません、もっとしっかり指導力を発揮してくれなくちゃ困ります、とさんざん説教されて」

「モンスターペアレントね」

平中の指摘に相原先生はうなずき、続けた。

「わたしは……、生徒たちが騒いでも怖くてまともな注意できなくなってしまう、すっかり学級崩壊のような状態になってしまいました。そうすると同僚教師たちからも白い目を向けられて指導され、それが知れるとますます母親たちが不安の声を上げてわたしを攻撃してきました。わたしはすっかりノイローゼになって病院の精神科に通うまで悪くなって……」

相原先生は何かひどくショッキングなことを思い出したようにブルブルとひどく震え上がった。平中は肩を抱き、今はもう大丈夫よ？と優しく揺すってメッセージを送った。相原が勇気を出して続ける。

「そんなときに……、恐ろしい事件が起こったんです……。わたしにひどくクレームを付けていた母親が……、何者かに刃物で顔を切られたんです」

相原先生はまたブルブルと震え、ギョツとした平中も緊張してぎゅうつと相原先生の肩を抱きしめた。

「買い物帰りの、夕方の暗い道でのことでした。二度三度と繰り返して切りつけられたらしく、悲鳴も上げられずに顔を覆ってうずくまってしまったそうです。暗い道で何が起こったのか分かりませんが目撃者は数人いました。コートを着て、帽子を被って、サングラスとマスクを掛けた、買い物袋をぶら下げた中年の小太りの女性だったそうです。うずくまった女性がどうなっているのか気づいて、大騒ぎになったときには中年女性の姿は消えていたそうです。

わたしはまだ中年に見られるほど老けてないつもりですが、刑事が来てアリバイを訊かれました。事件のあった時刻わたしは病院にいて、完璧なアリバイがありました。犯人は精神に異常性のある通り魔だろうという見方が強いようで、わたしは本気で疑われていたわけではないと思います。

もちろんわたしは犯人ではありませんが、正直言って恨んでいた相手ですから、まるで自分が犯人のように恐ろしくなっていました。

その人は最初に娘がイジメをしていると決め付けられたと学校に乗り込んできた母親だったのですが、その反対側の娘がいじめられていると激しく訴えてきていた母親が、反目する相手が出てこられなくなつたものですからここぞとばかりに厳しくクラス改革するように強要してきました。わたしは毎日教壇に立つのがやつとの状態で、そんな極端なこととも出来る状態じゃありませんでした。その母親は毎日のように学校に来るか電話してくるかしてわたしを叱りつけ、わたしはもう、精神がぼろぼろになって、自殺することまで考えるようになってしまいました。

すると、今度はその人が同じように顔を切りつけられる事件が起こりました。

その人は前の被害者と反目していたということではやはり一時期犯人と疑われたらしいですが、犯人ではなかったようです。

今回の犯人も同じ中年女性であったようですが、けっきょく正体は分からず、まだ捕まっていません。

今回もわたしは病院にいて完璧なアリバイがありました。

わたしは犯人じゃありません。でも完璧すぎるアリバイがあるとかえって疑われるようで、警察には何度も事情を訊かれました。

二件の事件でクラスの母親たちはすっかり何も言わなくなりました。同僚教師たちもです。みんな無言で、でもわたしを犯人と同じ目で見て怖がっていました。

わたしはなんとか一年間勤め上げ、教師を辞めようと思つていましたが、山の中の生徒の数人しかいない小さな学校への赴任を打診されました。元々憧れてなつた教職ですし、このまま辞めたらこの先一生トラウマになって何もできなくなるんじゃないかという恐怖で、その話を受けました。

そうしてやってきたのがこの学校で、今年で二年目になります。「相原は話し終えてはあー……と深く息をつき、自分自身これをどう考えてよいか分からないように平中に視線をよこした。平中は椅子に座る相原先生を横から立ち膝になってすっかり抱きしめる

ようにして話を聞いていたが、ようやく汗ばんだ手を先生の肩から放し、代わりに手を取って、じつと見つめて尋ねた。

「嫌なことを訊くけど、あなたは誰かに……、その人たちを黙らせるように依頼したりしていない？」

相原は信頼して話した平中に疑われるように言われ、シヨックに泣きそうになつて首を振った。平中は手を握りしめて、振った。

「ごめんなさい。あなたを信じるわ。たぶん、村はあなたのような先生がこの学校に欲しかったのよ。誰かにひどく攻撃されて、心に深い傷を負ったような人が。その人たちが襲われたのは、あなたにこの学校に勤めてもらうための、この村からの報酬だったのよ」

相原先生は悲壮に目を見開き、わなわなと震えた。平中は真剣に見つめて言った。

「この村は、そういうことをやっている所なのよ。はっきりしたわ、子どもの頃から極端な善悪を教え込んで、この村その物が、『手のぬくもり会』、お金で悪人を呪い殺すことを請け負う、『呪殺村』なのよ」

相原先生は齒をカクカク言わせて怯えた。

「……………怖い……………」

その時、

カンカンカンカンカン、

と、けたたましく半鐘が打ち鳴らされ、相原先生はビクツと飛び上がりそうになった。

「あれは何？」

「あ、あれは……。…役場の鐘が鳴らされたら、それは夜の秘祭の始まる合図だから、祭に参加する選ばれた者以外は外に出てはいけな」といいう合図…だそうです。……………！」

相原先生はまた何か思いだして怯えた。

「わたし……、嘘をつきました……。芙蓉美貴さんに祭は最初から今日やる予定だったのか訊かれて、そうだと答えたんですが……、嘘です。観光客がお見えになっっているから今日やろう、ただ本当の

祭らしく最初から今日やることが決まっていたことにしよう、その方が観光客向けのパフォーマンスじゃなく伝統文化として喜んでもらえるから、と校長に言われて……。本当は大晦日に行く予定だったんです」

相原先生はそれも裏で何か恐ろしい計画がなされていたのかと今さらながらに怯えた。

「わたし……………、ここから逃げ出したい……………」

それまで疑惑の内に押さえ込んでいた恐怖がとどめようもなく膨らんできたようで、相原はさすがのような目で平中を見つめた。平中は緊張した顔でうなずいた。

「そうね。ひどく嫌な予感がするわ。いったん村を離れて様子を見た方がいいわね。行きましよう。」

平中にはつきり言われて相原はほっと表情がとろけたような顔になって椅子から立ち上がろうとした。

廊下に面した格子窓のひび割れたガラスの向こうから真っ白い怖い顔がじっと睨んでいた。

相原は

「きゃあっ」

と悲鳴を上げた。

ドアを開けて入ってきた。

「…な、成美ちゃん……………」

それは薄草色の祭半纏を着て顔におしろいを塗ってお化粧した5年生の鬼木成美だった。……………鬼木巫女衆の最年少の一員である。

「先生。村を裏切って、逃げるですって？」

成美は歪んだ上目遣いの恐ろしい顔で相原先生を睨み、平中はさつき聞いた地獄の話を思い出し、ゾッと、子どもの成美が地獄の鬼のように見えた。

75 芙蓉の脱出行

成美は怖い目を平中に向けると、

「あなたも、逃がさない」

と、半纏の袖の中に隠し持っていたスタンガンを取り出し、バチツバチツと青い火花を散らさせながら突っ込んできた。

「危ない！」

相原先生が横から成美の腕を突き飛ばし、平中は危うく電気ショックを逃れた。机の上を滑ったスタンガンが「バチチツツ」と衝撃を放った。

「先生えー……」

成美は怖い顔で相原先生を睨んだ。相原先生はスタンガンを恐ろしそうな目で見ながら、平中との間に入って教え子の説得を試みた。「成美ちゃん？　ね、そんな危ない物使うのは止して？　人を傷つけるのはいけないことよ？　もう5年生なんだから、分かるわよね？」

成美は先生の背後にかばわれる平中を敵意のこもった目で睨みながら、スタンガンを机の上に置いた。相原先生はほっとしたが、成美はジロリと先生を睨んで言った。

「どうして村を出ていくのよ？」

「それは……」

傷ついた心で非難の視線を突き刺してくる生徒に相原はたじろいだ。教育者としてそれではいけない、この子をこの村の異常な思想から解放してあげなければならない、と相原は一步成美に近づいたが。

「先生は村を裏切つて、木場田さんも裏切るんだ？」

と言われてハツとした。成美は女の子の鋭さで指摘した。

「先生、青年団の木場田さんとおつき合っているんでしょう？」

知ってるんだから。校舎の裏でこっそりキスしてたよね？　ひどい

わね、先生、恋人を裏切って村を出て行くんだ？ 最低ね？」

「それは……………」

相原は明らかに動揺し、「青年団の木場田」の名前に平中はピーンと来た。木場田が相原先生と恋人なら、ペンションで紅倉が言っていた紅倉をこの村に呼び寄せた相手とは、彼ではないか？ 今度は平中が相原先生をどかせて成美に向かい合った。

「違うわ。先生は木場田さんを裏切るんじゃない、木場田さんは先生のためにこの村の異常さを正そうとしているのよ。人を愛するようになれば、どんな相手だって人を傷つけるようなことをしなくなるわ。あなただって、大人になって本気の恋をすれば、きつと分かるわ」

平中は成美が「恋」を禁じられた神の巫女であることを知らない。成美の顔がカアツと怒りを露わにした。

「うるさあいつ！！」

甲高く叫ぶと、平中はびっくりした顔をして吹っ飛び、3メートル後ろの壁に背中を打ち付け、跳ね返されて床に倒れ込んだ。肺を思い切り圧迫されて、「ゲホッ、ゲホッ、」と苦しそうに咳をした。後頭部も強打し、鼻血が出ていた。鼻の奥がツーンときな臭く痛む。平中は顔をしかめながら信じられないように成美を見た。超能力だ。怒りの念力で平中を突き飛ばしたのだ。

「よそ者は黙ってて」

ギロリと、相原を睨んだ。相原は目を丸く見開いて、半開きの口をあわあわと震わせている。

「……………や……………やめて……………成美ちゃん……………怖いことしないで……………」

相原は震えながら哀願し、怖い顔を向けた成美は、

「先生は村から出ちゃ駄目」
手を伸ばした。

「や、やめて……………嫌……………怖い……………」

相原の中に学級崩壊を起こし自分の言うことを聞かずにわーわー

ぎゃーぎゃーと騒ぎ回る子どもたちの声が反響し、子どもへの恐怖がまざまざと甦ってきた。成美は先生の手を握ろうとしたのだ。恐怖に怯えきつた目を向けられ、嫌、嫌、と手を拒否されて、成美は暗い怒りに燃えた。

「あんたなんかもう先生じゃない！」

ぐわっと膨れ上がる強い力が相原の顔面を捉え、歪めた。

ガラツと玄関の戸が開けられる音がして、廊下を芙蓉が走ってきた。

戸口に現れた芙蓉に、成美は相原に向けていた力を芙蓉に向けて一気に放った。

「ハッ」

芙蓉はとつさに成美の力を自分のオーラで絡めて得意な合気道の要領で円を描いて放り上げた。すると

「あっ！」

自分の力に引きずられて成美が上に飛ばされ、天井に背中を打って、床に落下した。

「ぐうっ・・・」

成美は潰されるつめき声を上げて、ぱったり、意識を失った。

芙蓉は自分のしたことに驚きつつ駆け寄り、成美の様子を探った。

「ああ良かった、息はしているわね」

と、能力者である成美のことは切り捨て、

「平中さん！」

胸を押さえて苦しそうにしゃがみ込んでいる平中に駆け寄った。

胸と背中に手を当て、平中のバイオリズムを自分のオーラに同調させると、平中の呼吸が落ち着き、痛みが引いたようだ。

「ああ、芙蓉さん。あの子も呪いの力を・・・」

「そうみたいね」

芙蓉の視線に倒れている成美を見て驚いた。芙蓉は「さ、」と平中を立たせた。

「村を脱出するわよ。ペンションの駐車場に急ぐわよ」

あ…、とすがるような視線を向けられ、

「来るの？ 急いで」

相原も意を決して駆け出した。床に倒れる成美を振りきって。

芙蓉たちが外へ出ると、ジョンがうろろと怖い唸り声を上げ、手に手にクワやスキや鎌を持った年輩の男たちが待ちかまえていた。皆恐ろしく殺気立った顔で睨んでいる。

「急いでるのよ。心臓発作でばっくり逝っても恨まないでね」

芙蓉はさつき成美を投げ飛ばした呼吸を思い出し、男たちの怒りのオーラを捉えると、

「ハアッ」

と右手を突きだし、一気に向こうへ突き飛ばした。

男たちは一瞬で白目を剥き、ばたばたと倒れた。

平中は驚き、相原は成美と同じ力に恐怖の表情を浮かべたが、芙蓉は

「わたしは正義の味方。行くわよ！」

二人に考える間を与えず駆け出した。道に凶器を持った村人が現れると、

「行け！」

ジョンに命じ、猛然と規格外の巨体を躍動させて飛びかかったジョンは一撃で老人を突き倒した。

「どけえいっ！」

凶器を振りかざして襲ってくる村人に芙蓉が怒りを込めて手を振ると、横様に面白いように吹っ飛び、畑に転がった。幸い成美のような能力者はこちらには振り分けられていないようだ。

「走って！ 走って！」

自分よりはるかに運動能力の劣る二人を容赦なくせき立て、やがて、ペンションに上る坂道にたどり着いた。

赤いワゴンカーを運転する斎木もペンション前の道を目指して爆走した。しかしその道を向こうから白い軽トラックが走ってきた。運転しているのは青年団の若者だ。

「くそっ」

斎木は軽トラックごとき跳ね飛ばす勢いでアクセルを踏み込んだが、

「よせ！ あっちはぶつけて止める気だ！」

助手席の末木に言われて

「・・・・・・・・」

砂煙を蹴立てて脇道に入り、危うく軽トラックとすれ違った。

細い道を走っていくと、畑の端に止めてあったやはり軽トラックが無人で道路に滑り出た。

「危ないっ！」

危うく避けたが、隣を流れる水路の斜面にタイヤを取られ、後輪が踏ん張りきれずに滑り降り、水路に落ちてしまった。タイヤが土の表面だけ搔いて空回りし、

「駄目だ」

チームは車を破棄した。後部座席は黒木の側しか開かず、黒木が下りると、ミズキが下から支え上げるケイを斎木が掴んで引つ張り上げようとした。末木は水路に下りたが、大胸筋をやられて腕に這い上がる力が入らず、仕方なく飛び上がれる所を捜して先へ走った。

「よし、もうちょい」

斎木がケイを尻までフレームに引つ張り上げたとき、妨害車を動かしたと思しい青年団の能力者が車と反対の畑を駆けて現れた。右手を開いて突きだし、左手を重ねるように構えた。額にニヨロツと太い青筋が浮き上がっている。

その頃麻里はメイコを引き連れ地下の水路に下りていた。ビビリまくるメイコを叱咤しつつ歩かせ、不良青年の体がぐちゃぐちゃに踏み散らかされた水槽に出ると、ヒーヒー悲鳴を上げるメイコを「うるさいですわよ」

と鬼のように睨み、バラバラになった肉体に右手を開いて念力を送った。

「ま、これで応急処置ですわ」

肉片が泳いで集まってきて、くつつき、丸い肉団子になった。

「神よ、目覚めよ！ 新しい肉体に宿りたまえ！」

ビリビリッ、と電気が走ったように青く光り、肉団子が収縮をくり返し、呼吸を始めた。麻里はフムと眉を動かし、

「グロテスクですが、仮の体です、まあ我慢していただきますよ。さあ、神よ、怒りの力を解放したまえ。」

地上で闘う下部どもに、大いなる力を解放したまえ！」

神を操るように手を動かし、肉団子は「ブウウウウン………」と高電圧装置に似た音を発して青い電気を強くし、「バチィッ」と電光を迸らせた。

メイコは怯え、麻里は青い光に悪魔の笑みを照らし出された。

「うふふふふふ。殺しておしまいなさい」

「うおっ」

黒木が吹っ飛ばされて道に転がった。

「クロさん！ うわっ！」

齋木がケイを抱えたまま後ろへ吹っ飛ばされた。能力者は走り、ワゴン車の上に飛び乗り、右手を構え齋木を攻撃しようとした。

ドスツと能力者の右肩にナイフが突き立った。道に転がった黒木

が投げた物だ。能力者は黒木に向かって力を放った。

「ぐわああっ！」

黒木は地面をガリガリ掻いて滑らされた。

車内から飛び上がったミズキが大型ナイフで能力者の両足をなぎ払った。

「ぎゃあっ」

能力者は悲鳴を上げて堪らずひっくり返り、斜めのルーフを滑って水路へ落下した。ミズキは飛び降り、能力者の胸にナイフを突き立て、能力者は水の流れにぶくぶく赤い泡を立てて絶命した。

水路を上がった末木が戻ってきて、ミズキも道へ飛び上がった。

黒木も起き上がってきて、水路を見た。

「元々帰る道はない。行こう」

軽トラックに乗り換えようとする、そのフロントガラスがボウリングの玉でも打ち込まれたみたいにバリンと丸く砕けた。

道の向こうから右手を構えて能力者が走ってきた。車を潰そうと狙っているを見て齋木が

「やらせるかっ！」

両腕を開いて突進していった。

ドウンンンンッ、と鉄球のような衝撃が齋木の胸を砕いた。

齋木はぶふつと血を吐きながら、能力者が顔を力ませて次の弾のエネルギーを溜めているのを見て、

「・・・・・・・・」

突進した。

「齋木いーーーーっ！！！」

「齋木さあーーーーんっ！！！」

ドウンンンンッ、と、齋木の右腕が変な形で踊った。肩が粉碎されたのだ。

「ぬぬぬぬうううう！！！！！」

突進した齋木は振り上げた左手で能力者の顔を殴りつけた。ぐらつとよろめく体を追い、渾身のアッパーを腹にお見舞いした。

運転席のミズキがキーを回し、軽トラックのエンジンがかかった。発進し、齋木の前に止まった。

「齋木さん！ 乗って！」

ミズキが助手席のドアを開けて叫んだ。黒木と末木はケイと一緒に後ろの荷台に乗っている。齋木は左手を座席について転げ込もうとしたが、「ドンツ」と後ろから受けた衝撃で背骨を砕かれ、白目を剥いて崩れ落ちた。ミズキはアクセルを思いきり踏み込んだ。タイヤが泣いているような金切り声を上げて急発進した。

サイドミラーに映る追ってくる能力者の姿が遠ざかっていく。そのまま振り切れればと思う。ルートは蜂万町に直接向かう細い山道へ向かっている。斜面の周道をペンションもみじへ向かいたいが、それを許してはくれないだろう。不安を感じながらもミズキはまっすぐ突き進んだ。齋木が命がけで守ってくれた道を、死んでも抜けてやると涙をにじませて思った。

ボンツ、と前輪のタイヤが吹っ飛び、ミズキはハンドルを取られて必死に立て直そうとしたが、第2撃が運転席側のフロントピラーをぐにゃつと曲げ、ミズキは残っていたガラスの破片をまともに浴びて顔を切り、弾の衝撃を御しきれずに軽トラックはグルツとカーブしながら転倒した。

「ミズキいつ！ ケイを守れっ！」

黒木も末木もケイを背負うことは出来ない。ミズキはフロントウインドから転がり出て、迫ってくる能力者から逃れて横に走った。軽トラックは向こうに腹を見せちようど道をふさぐ形で横転している。ミズキは能力者の手の照準をさつとかわして、その陰に駆け込んだ。荷台から三人は放り出され、ケイは末木が体を呈して落下の衝撃から守っていた。黒木は左腕が完全に折れてしまっているようだった。

「どうやら俺もこれ以上は足手まといにしかならんようだ」

弱音を吐く黒木にミズキは怒りながら訴えた。

「何言ってんですか？ 死ぬまで戦い抜いてくださいよお!？」

黒木は力無く笑った。

「そのつもりではいるがよ。ミスキ。おまえはよそ者だ。なんとかても村を脱出して生き抜け」

「今さらよそ者はないでしょう？ 俺、クロさんたちに拾われなきや……」

「馬鹿。べそかいてる暇ねえぞ。おまえがよそ者つてのは、俺たちの希望だつてことだ。末木。後は頼んだぞ」

末木は真剣な顔でしっかりうなずいた。気心の知れた仲間にならずと笑いかけ、黒木は鬼の形相になって車の向こうの能力者の位置を探った。今襲ってきているのは気弾を発射するタイプの能力者たちようだ。向こうもこちらのナイフ投げを警戒しているようだが、「くそつたれめ、あのバケモノ野郎に痛めつけられなきゃもうちょっとまじな殺し合いがやれたのによお……」

黒木は苦笑し、ナイフを握りしめると

「生きるよ」

車の陰から飛び出し、

「うおりゃああっ！！！！」

気合いを発した。狙っていた能力者が手のひらから気弾を発射した。予想していた黒木は斜めに体勢をかがめて避け、勢いを殺さずにダッシュし、能力者に襲いかかるうとした。能力者は額いっぱい青筋を走らせ、気を固めずにそのまま発した。

「う、ぐ、ぐ……」

黒木は力に体を押され、進む足を鈍らせた。能力者も必死の形相で力を発し続けた。力が黒木の傷だらけの皮膚をなぶり、傷口をめぐり上げ、溢れ出る血を後方に飛ばした。黒木は歯を剥き出して踏ん張り、能力者も力を込めながら顔を真っ赤にし、血管が膨れ上がり、目の網膜が破れて血の涙を流した。黒木はニヤリと笑い、

「要するに……、気合いだろうがああっ！！！！」

吠え、踏ん張り、ブルブル震える腕でナイフを構え、能力者に迫った。距離2メートル。

ミスキはケイを背負い、末木と共に能力者を横目に先へ駆けた。

黒木は

『行け！、行け！』

と心の中で叫び、

「うおおおおおおお……」

鬼のように能力者に迫った。

突然黒木の体が動かなくなった。

後方2点から追ってきた能力者たちが同じように力を発して黒木を捉えたのだ。

3方向から体をがんにじめられて黒木は動けず、凄まじい圧力が全身に掛かり、骨も肉もバラバラにしようとした。傷口から皮膚がめくれていき、流れ出た血が粒になって周囲に漂った。

「く、く、く……」

黒木はせめて一太刀、修羅道の最期に浴びせようと前の能力者へ腕を伸ばした。力む能力者の目の横の血管が破け、ビイツと血が迸った。だが、3方向の力のバランスが崩れ、恐怖の表情を浮かべる顔にナイフの突き刺さる寸前黒木の右腕はぐにゃと折れ曲がった。

無念。

観念した黒木の体は凄まじい圧力にくるくる宙に躍り上がり、バラバラにほどけて体中の血をまき散らし、それは赤い霧となって広範囲に広がった。

77 手の中の運命

末木とミズキは走り続けた。

一瞬凄まじく鉄錆び臭い空気を嗅いで、黒木の死を悟った。

「所詮これが俺たち村に生まれた人間の運命さ」

末木がクールに、悔しさを振り切るように言った。

「ミズキ。敵が現れたら俺を踏み台にしても先へ進め。俺たちにはおまえとケイが全てなんだ。分かるな？」

ミズキは無言でうなずいた。実の弟のように接してくれた末木たちには感謝しかない。ミズキには分からないが、村の人間である彼らには何か根元的に村から離れられない事情があるのだろう。彼らが自分たちに望みを懸け、「生きる」と言うなら生き延びるのが自分の責務だ。そしてミズキ自身、

「死んでもケイは俺が守る」

という、自分の生きる意味全てを懸けた思いがある。

山の坂道を目前に、新たな能力者が現れた。

「上手く避けるよ」

末木は走るスピードを上げて突っ込んでいった。

能力者が手から気弾を放った。末木は右に避け、ミズキは左に避けた。気弾のチャージに時間が掛かるのは斎木と黒木が身を以て教えてくれた。能力者はケイを背負ったミズキに腕を向けた。

「どこ見てやがるっ！！」

末木が大声で怒鳴り、体をひねってだらんと伸びた腕を振り回し、ナイフを放った。ナイフは見事能力者の喉笛に突き刺さった。

「おぐっっ…」

能力者は苦しそうに顔を真っ赤にしながら力を末木に向けた。

「死ねやあつ」

末木は飛び上がって喉笛に突き刺さったナイフを蹴り上げ、ガクンと頭が後ろに折れ曲がった能力者は膝をついてドツと倒れた。

「行けえっ！ 走れえっ！」

ケイを背負ったミズキはどうしても足が遅い。細身の女とはいえ成人女性をずっと背負って走り続け、相当膝に負担が掛かり、体力も落ちていくはずだ。

「走れえっ！ 走れえっ！」

末木はクールなキャラに似合わぬ必死の大声で叱咤し、自分も腕をだらんとぶら下げながら必死に走った。

坂道に掛かった。村の、外の世界への道。

「あら、一人たどり着いちゃったわね。うふふ、あなたは、残念賞」
神の穴の中で、麻里はセーラー服のスカートのポケットから末木が母親の胎内から誕生したときのへその緒を取り出し、しわくちゃのそのの両端を掴むと、ブチッと、引きちぎった。

「あ………」

末木は突然立ち止まった。

異変を感じてミズキは振り返った。

「末木さん？」

末木はポカンとした顔で、

「う、運命………」

とつぶやくように言い、全身の筋肉が弛緩し、後ろ向きに坂道に転がった。

「す……、末木さん………」

末木に何が起こったか分からない。しかし黒木が「おまえはよそ者だから」と自分に希望を託したのはこのことなのだろうと思った。ミズキは前を向いて走り出した。ぶら下がるケイの体が重い。も

もが腕からすぐ滑り降りようとし、お尻が垂れ下がっていく。走るタイミングでケイを前に放り上げるようにして背負い直す。

走りながらミズキは真つ赤に、鬼のような形相になっていった。鬼のミズキは、涙を流していた。みんな知っていたのだ、どうせ自分たちがこの村から外へ逃げられないことを。それでも、絶対にケイを見捨てられない自分を、こうして外へ逃がすために命を懸けてくれたのだ。

ミズキはこれまで正義を信じ、仲間を信じ、村を信じて「悪」と見なされる所業に手を染めてきた。ミズキはそれを正義と信じて疑わない。しかし、村にとって「正義」の捉え方は違うようだ。ミズキにとつての正義は絶対に絶対の物だ。村の子どもたちが年寄りに「悪いことをした奴は地獄に落とされるんだぞお」と聞かされる、純粋な正義を信じていた。しかしそれなら、何故自分たちが村から狩られる？ 何故ケイに必要でもない紅倉を殺させるようなことを命じ、仲間を救おうとする自分たちを「裏切り者」として殺す？

彼らの正義は純粋ではない。

彼らは外の俗世間と同じように自分たちの都合で正義をねじ曲げ、自分たちの保身を計っている。

天誅を、

いつか奴らに食らわせてやる。

燃えたぎる復讐心を胸に、ミズキは坂を駆け上がり、やがて、峠の向こうの暗い木陰に入った。ハアハアとびっしょり汗をかいて湯気を立ち上らせ、ミズキはケイを背負い直した。まだ全然終わりにやない。一本道を車で追ってこられればすぐに捕まる。追っ手の追いつく前に、山中のどの地点に有利な足場を確保できるかだ。車で追ってきてくれるならありがたい、運転手を殺して、いただくまでだ。

走るミズキは、前方を見てハツとした。道の両脇の木を結んでツタ植物が蜘蛛の巣のように網を張っている。

そうという能力者もいると聞いた。

「どこだ？と神経を研ぎ澄まし、ギラツと後方の木の上を見た。シユルツと生木のロープにぶら下がって能力者が下りてきた。」「ケイをいただこうか」

「気が付くと道にスルスルとツタ植物が伸びてきていくつも輪を描いている。きつとそこに踏み込めば足首を絞め上げるのだろつ。」

「ケイをよこせとはどういうことだ？ 殺せと言われているんじゃないのか？」

「ケイは罪人だ。今夜の秘祭の神への捧げ物にする」「なにいつ！？」

「カアツとミズキの怒りが最大限に燃え上がった。」

「ミズキの中で、今はつきりと村への憎しみが形を為した。」

「おまえもその秘祭に参加するのか？」

「さあな。だがそれまで傷物にするなというお達しだ。大人しくケイをよこせ」

「おまえは殺す」

「出来るか」

「ミズキはケイを下ろし、そのまま腰をかがめ、体をひねって背後に腕を隠すと、手に持った物を投げつけた。それは細身の懐中電灯だった。」

「懐中電灯は能力者の手前で地面に着いて足下へ転がった。」

「くだらん、フェイントか」

「そうだ」

「上空高く飛んだ小型ナイフが下りてきて、ドスツと能力者の肩に突き立った。」

「イテッ！、くそっ」

「能力者がうるたえた際にミズキはダツシュした。」

「甘い！」

「能力者が綱を引っ張るように握った手を引くと、道を覆ったツタがシユルツ、シユルツ、と絞まった。ミズキは足を取られて転がったが、転がりながらアーミーナイフで素早くツタを切り、能力者に

走り寄った。迫るミズキの鋭い殺気に能力者は恐怖に怖じけた。バツと手を突き出し力を放ったが、

「生ぬるい」

ミズキは物ともせず突進した。

「ひいつ、やめ……」

能力者はついに両手で自分をかばったが、ミズキは躊躇なく突きの構えからナイフをくり出そうとした。

パンツ、と乾いた破裂音が響き、ミズキは反射的に横にのき、能力者の後ろに駆け去り、木の幹に身を隠そうとした。

パンツ。再びピストルの音が響き、ビシッとミズキの駆け込もうとした木の幹に穴が開いた。

「動くなっ！」

鋭い声が命令し、ミズキは立ち止まり、声の主を睨んだ。

森の中に黒いコートを着た男が立ち、ピストルを構えながらゆっくりこちらに出てきた。

公安の、日本太郎である。

男の射撃の腕は確かだ。

5メートル、4メートル、3メートル。まっすぐ銃口を向けられ、ミズキは思った。これが体の中に穴が開く感覚かと。だが、ミズキには芙蓉のようにその銃弾を避ける自信はなかった。ただ、

こいつを殺してケイを逃れさせる、

それだけを思って敵を睨み付けた。

78 届かない手

「よおし、ミズキ、覚悟しろ」

能力者が力を発し、ミズキの首を捉え、絞め殺そうとした。ミズキは顔を赤くして負けじと首を太くして氣道を確保し、二人の闘いに気づいた日本太郎はチツと舌を打ち、言った。

「やめろよ、敗者がみっともねえ。てめえはすっこんでろ」

ピストルは油断なくミズキを狙ったまま首をひねって能力者に命じた。ミズキに殺され掛けた能力者はいきり立ち、

「客人こそ引っ込んでてもらおうか」

とすごんだが、

「うるせえよ。てめえの力じゃピストルの弾は避けられねえんだろ？ どたまに風穴開けられなくなかつたらすっこんでろ」

と邪魔にされ、その軽い調子に自分に対する躊躇ない殺意を感じた能力者は力の放出をやめ、言われたとおり退き、振り返ると、地面に寝かせられたケイの所に向かった。

「やめろっ！ ケイに近づくな！」

ミズキは自分に向けられた銃口も忘れて激高した。日本太郎は、「おい、気が散る。戦利品は決着が付いてからにしろ」

と命じ、ミズキの意識を自分に集中させた。ニヤニヤと嫌らしく笑い、

「とはいえ勝負はもう付いちまつてるがなあ？」

とピストルを軽く振った。ミズキは頭を吹き飛ばされても食らいついていきそうな氣迫で公安を睨み付けている。

「殺る氣満々だな。バアン」

日本太郎は誘うように銃口を上には振ったが、まだ隙は見せない。

「ミズキ君？」

本名、辺見瑞喜（へんみみずき）」

ミズキの怒りの表情が一瞬ひくりと反応した。日本太郎は捜査資

料を淡々と暗唱した。

「小学5年生の時、高校1年生の姉が自宅の自室で首を吊って自殺。状況的に発見したのは学校から帰宅した弟の君。姉は股から大量の出血をしていた。妊娠6ヶ月。後に発見された遺書には自分をレイプした5人の男子同級生の名前が書かれていたが、その5人はその日の内に刃物で股間をえぐられて死亡。犯人は君だ。小5だてらに見事な手際だよ。その日以来君は行方不明。……この村のお仲間にかくまわれていたわけだ？ 類は友を呼ぶ、蛇の道は蛇、ってか？

あのケイって女は……」

「ケイのことは言うな！」

鋼がビリビリ震えるような怒気を含んだ声に日本太郎はニヤリとした。

「自殺した姉の代わりか？ 君は相当なシスコンのようだな？」

「うるっせえよ。てめえ、ぶっ殺す」

「さあて、どうやってやる？」

日本太郎はピストルを振ってニヤニヤし、ピストルをコートの内にしまった。代わりに黒の革手袋をポケットから出して両手にはめた。ぎゅっつと拳を握りしめて馴染ませ。

「来いよ。遊んでやる」

ボクシングのファイティングポーズを取って体を揺らした。

「死ぬ」

ミズキは大型のアーミーナイフを構えて容赦なく斬りかかった。ミズキが小さく振るナイフを日本太郎は中年男子とは思えぬ見事なフットワークで避けた。ミズキの狙っているのは相手の急所ではない、攻撃する拳だ。革手袋などこの肉厚で切り立った刃で簡単に切り裂ける。人間は手を怪我すれば確実にかばい、気が弱くなる。

「それ」

素早いフットワークからくり出されるジャブがミズキのナイフを握る腕を打った。ミズキは手首を返して敵の腕を切るうとするが、

「こっちだ」

反対から簡単にジヤブを食らってしまふ。

「どうしたどうした？」

タンタンタン、とリズムカルにパンチを浴びせられ、ナイフを落とさないように必死に握りしめる腕が体から開いていった。ミズキはパンチ攻撃に集中する敵の隙について脇腹へ蹴りを放ったが、

「てえいやっ！」

逆に強烈な回し蹴りを腰に食らい、横様に吹っ飛ばされ、地面に倒れた。日本太郎はファイティングポーズを取るのもやめ、やれやれと首を振った。

「てんで弱いじゃないか？　ここまで女を背負ってきた体力を差し引いてもまるで駄目だ」

ミズキはナイフを握りしめ、足を狙って飛びつくように腕を振った。日本太郎はステップを踏むようにくると避け、タンゴのフイニッシュのように「ダンツ」と腕を踏みつけた。

「くくく・・・」

必死にナイフを握りしめる腕をぎりぎり踏みにじり、もう片方の足で「ダンツ」とナイフを握る手を踏みつけ、

「ぐわっ」

と悲鳴を上げてミズキはとうとうナイフを放した。それでも体を回転させて両足で腕に乗った敵の体をはね除け、蹴りを放ちながら立ち上がった。

「フンツ、フンツ、」

連続して蹴りを放ち、体を回転させて蹴りをくり出した。日本太郎は、スツ、スツ、と肩で風を切るように素早く避け、体の回転を加えた渾身の蹴りを「パシツ」と両手で受け止めると、グギツとひねった。

「うがっ・・・」

ミズキは脚の付け根まで吊ったような熱い痛み呻き、ビイーン…と痺れた。日本太郎に放されても脚はひどくしびれ、まともに立つていけないほどだった。

必死のミズキに対し日本太郎は余裕の顔で駄目駄目と首を振った。憎つたらしく余裕綽々だが、隙と見えるところが全然隙じゃないという恐るべき実力をミズキは思い知らされた。それでもギラギラと目を光らせ、「殺す」という意志は揺るがない。日本太郎は

「チツチツチツチツチツ」

と指を振った。

「それじゃあ、俺は倒せんなあー。」

君、自分は強いと思っっているだろう？」

「……………」

ミズキは答えず、敵を殺せるポイントを探っている。日本太郎はギョロツと眼を剥いて悪魔の顔になった。

「君は、弱い」

ミズキは答えない。悪魔の日本太郎は威圧するように宣言してやった。

「君は弱いよ、どうしようもなくね！ 君が自分を強いと勘違いしているのは、相手が簡単に殺されてくれるからだ！ 人つて言うのはねえ、ふつうまさか自分が殺されるなんて本気で思ったりしないものだよ！ 君は卑怯にもその隙を突いて、躊躇なく、ぶつ殺す！ それだけのことだよ！ 人を殺そうと思っただけなんの迷いもなく殺せる人間なんて社会にはそうそういないよ？ 君は社会的に見て、異常な人間だ！」

ミズキは相打ち覚悟でストレートのパンチをくり出した。ミズキのパンチは当たらず、日本太郎の重いボディブローが腹を叩いた。「ぐふう……………」

ミズキは体のぶつ壊れる強烈な痛みを腹を抱えて後退した。顔が真っ赤になって唇が膨れ上がっている。目はギラギラしているが、次第に体の痛みが弱気が涙となってにじみ出てきている。日本太郎は両手を開いて肩をすくめ、おどけた顔を振った。

「レフェリーストップだ。なあ、辺見君。自首して人生やり直さな
いかな？ ご両親はまだご健在だよ？ 可哀相に、子どもを二人い
っぺんに失って、すっかり落ち込んで暗い日々を過ごしておられる
がねえ？ どうかなあ？、罪を償って、立派に更生して、親御さん
を安心させてやらんかね？ お上にも慈悲はあるよ？」

いかにも親身そうに微笑んで言う公安を、ミズキは憎しみを増し
た目で睨んだ。

「黙れ。俺はもう表の世界では死んだも同然だ。お父さんお母さん
には、もう、こんな汚れきった息子は要らない」

「死んだ？ 何甘いこと言ってるやがんだい？ 君の手配は続いでる
よ？ 君はまぎれもなく辺見瑞喜だ。どんな悪人だろうとな、この
日本でわたくし刑は許されちゃいないんだよ。君、辺見瑞喜は、ま
ぎれもなく連続凶悪殺人犯だ。そうだ、今さら外の世界に君の安住
の場所なんか、ないんだよ？ 君は、どこに行く気だ？」

日本太郎はまた大きく首を振った。

「俺にはよく分らんのだがねえ、君たちは何を仲間割れしてるの
かね？ この村の連中は、どいつもこいつも、自分たちの立場って
ものがまったく分かってなくて、いやはや、困ったものだ」

日本太郎は人のいい顔をやめて、強烈に悪魔の顔で言った。

「おまえらに今さら生き方なんて選択できねんだよ。大人しくいま
で通り人殺し稼業を続けている。スポンサーはこっちで見つけてや
るからよお」

ミズキは、こいつは悪だ、と断じた。

悪 即 殺。

コートの中に揃えてある小型ナイフを両手に握り、敵に躍りかか
った。

『芙蓉。紅倉。ケイを頼む！』

殺されても、殺す、と敵に傷を負わせることだけを考えた。

ヒュンッ、ヒュンッ、とくり出される突きを避けて日本太郎はミ
ズキの懐に滑り込み、強烈な肘打ちを胸にたたき込んだ。

バキツ、と体の中で固い物の碎ける音が響いた。胸に激烈な痛みが爆発し、水つばい苦しさが溢れ返った。

「あぐぐぐぐぐ」

ミズキは両手のナイフを取り落とし、胸を押さえ、膝をつき、意識ではどうにもならないシヨックにブルブル痙攣し、口からゴボツゴボツと血の泡を漏れ出させた。顔色が青黒く変色していく。生命に直結する深刻なダメージを負った証拠のようだった。ミズキは自分ではもうどうにもならず地面に転がった。日本太郎が冷たく見下ろして言った。

「その若さで、何人殺してきた？ 今度はおまえの番ということさ。たつぷり死の苦しみてやつを味わいな」

能力者が負傷したのと逆の肩にケイを担いでやってきた。

「旦那、とどめは刺さないんで？」

「今さら同じ村民の情で楽にしてやりたいってか？」

「いや、そういうわけじゃねえですが……」

「放っておけよ。人生の余韻くらい味わわせてやりな。バッドエンディングだったがな。それより、さ、行こうぜ？ 勝ち戦の將軍様だ、獲物を携えて凱旋と行こうじゃないか？ お山のキャンプも飽きたんでな、もう客として迎えてくれてもいいだろう？」

「へい……、ま、ようがす……か……」

「それ、行くぞ」

公安のリーダーはすっかり主人気分で村人を従えて坂を上っていく。

ミズキは意識ではケイが彼らに連れて行かれるのが分かったが、体はシヨックでビクツビクツと痙攣をくり返し、体に激痛が脈打っているのが分かったが、頭はどんどん冷たくなっていった、意識が肉体を遠く離れていった。

痛みを離れた分、死がすぐそこに迫っている。

公安に言われたせいだろうか、幼き頃の記憶、綺麗だった姉の笑顔が思い出された。あの日以来のことがすべて夢に思える。何人殺

したのだろうか？ 生きていくべきではないクスだと思ってその死をリアルに感じたことなどなかったか。視界が夕闇に沈むようにどんどん暗くなっていった。訪れる闇の中に、

さらなる底なしの闇を背負った物たちがミズキを見つめながらわき上がってきた。

79 水流

麻里はメイコを引き連れ神の穴を進み、四角い貯水池へ出た。その岸にひどく負傷した紅倉が転がっているはずだったが。

「あら、いませんわ」

紅倉の姿は倒れていた所になかった。

「まあ、まんまと逃げられてしまいましたわ」

麻里はよいしょと岸へ上がり、紅倉が倒れていた場所に出血の跡を確認し、

「どこかなあ〜？」

と、ガス穴を懐中電灯で照らして覗いたが、

「いませんわね」

と、向き直り、明かりを自分が出てきたのと反対の水路の穴に向けた。水深40センチほどでさらさらと淀みなく水が流れている。一時濃厚だったウイスキーの香りも今はすっかり消えている。神は途中の部屋で休んでいた。しばらくアルコールが抜けないでうつらうつらしていることだろうが、じきに夜のお楽しみイベントでバツチリ目覚めるだろう。

じいつと意識で水路の先を覗いた麻里は、

「いましたわ」

と、腹を立てるより可笑しくて堪らないというようにニンマリした。

「思ったより根性ありますわね。ではその根性に敬意を表しまして。メイコ姉さま」

ここがその昔恐ろしい所であったことをお婆より聞いているメイコはゾツとした表情で部屋の様子を照らし出していたが、呼びかけられてビクツと思わず光線をまともに麻里に浴びせた。麻里は不快そうに目を細め、

「メイコ姉さま、一々ビクつかないでくださいまし。鬱陶しい」

と叱り、ひどく意地悪に笑った。

「戻りますわよ。戻ったら神職にここにめいっばい水を流すよう伝えてくださいな」

そして考え。

「神に自分のお部屋に帰っていただかなくてはなりませんわね。メイコ姉さま。手伝ってくださいましね」

メイコはヒイ〜とおののいた。

「どどどどど…、どうやって?…」

「押して行くに決まっていますでしょう?」

「かかかか…、神にふふふ触れるの?…」

麻里はうんざりした顔をした。

「大丈夫ですわ、寝惚けた神にあなたが食べられてしまわないようにちゃんと見張っていてあげますから。それとも…」

さつきと同じひどく意地悪な笑いを浮かべた。

「……神のおやつにしてしまおうかしら?」

麻里が見たとおり紅倉は真っ暗な水路を下っていた。水路は肩幅より少し広いくらいに狭まり、底に肘を付いて這っていくと水はザバザバとあごを浸して顔に跳ね、鼻に入って紅倉はゴホゴホとむせた。立って歩く高さはない。

暗闇の中普通の人間には耐え難い恐怖であるし、紅倉にも恐怖があった。意識が集中できず先を見通すことが出来なかった。このまま空気のあるところを進んでいける保証もなかった。意識が肉体を離れて楽になりたがる誘惑と繰り返し戦っている。今それをしてしまつたら、肉体は確実に溺れ死ぬだろう。

かなり無茶な賭だと自分でも思ったが、あの場を切り抜けるには他に選択肢はなかった。あの麻里という悪魔に捕まってしまうたら、芙蓉が危ないと思った。芙蓉は自分を助けるためにはどんな危険な

ことでもするだろう。芙蓉が強いのは知っていたが、麻里には勝てない。あれは、自分が倒さなくてはならない相手だ。…だが、今麻里と闘う力はない。手当をして、休んで、体力を回復しなくてはならない。そのためには、なんとしてもここから生きて脱出しなくてはならない。

紅倉は何度も眠り掛けて、その度水を飲んで溺れかけてパニックに陥りながら目を覚ました。

最初お酒の冷ややかな匂いがしていて、薄めた梅酒しか飲めない紅倉はそれだけで真っ赤になって眠ってしまいそうになったが、やがてなくなった。

紅倉は必死に眠気と闘いながら這い続けた。水路はやがて坂が急になり、壁がごつごつと自然の物になり、曲がりくねった。狭いところを水の流れが急になり、紅倉は背中をバチバチ叩かれながら必死になって狭いカーブを這い出た。

横幅は狭いが縦の亀裂は高くなって立って歩けるようになった。空気に外に通じる新鮮さが感じられて、紅倉はようやく生き返った気がした。しかし。

ゴゴゴゴゴゴ……、と背後から不穏な音が響いてきた。

まさか、とひどく嫌な予感がした。果たして、霧が吹き付けたと思ったら、

「ドドドドドドドド」

と狭い穴に溢れんばかりに大量の水が押し寄せてきて、ひ弱な紅倉に殴りつけ、体を水中に転がし、もみくちゃにした。体のあちこちを岩に打ち、頭も打って鼻の奥にキーンときな臭さが溢れた。それ以前に息が出来ず、必死にもがいてドドドドド、と激しく弾ける波の上に顔を出し、必死に息を吸い込んだかと思っただらまた水中に転がされ、したたかに頭を打った。息が出来ないと水の冷たさが容赦なく体内に浸透してきて心臓がきりきり痛んだ。新鮮な大量の水の冷たさを、これは体にとって危険だと思っただ。息をしようとして出来ず、死の息苦しさに思考が完全にパニックに陥った。

死に直面した紅倉は無意識のうちにSOSを発した。
切れていた芙蓉との霊的リンクが復活した。

紅倉との霊的リンクが復活してハツとした芙蓉はその時、ペンションもみじの駐車場に着いていたが、そこでまた一つの危機に遭遇している真っ最中だった。

芙蓉には今、散弾銃の銃口が向けられていた。

芙蓉たちが村の中心部を駆け抜けると邪魔をする村人はいなくなった。派手な車のクラッシュ音が響き、騒がしい雰囲気が出ているから若者たち主力は黒木チームの討伐に向かったのだろう。ケイを見捨てたことに後ろめたさはあったが芙蓉は正直ありがたいと思っ

た。
坂道を駆け上がり、駐車場が見えてくると、芙蓉はリモコンキーでエンジンを掛けた。

「平中さん！」

芙蓉はゼエゼエ息をつきながら駆け上ってくる平中にキーを放り投げた。

「あなたたちは車で逃げて！ 一応110番通報してみてください。でも直接警察署には行かないように、かえって危険かも知れないわ」

「わ、分かった」

「市街地に出て、適当に移動していて。できるだけ賑やかなところをね。いい？」

「わ、分かったわ」

ハアハア死に物狂いで走ってきた相原と共に車に乗り込もうとした平中は、ギョツと驚いた。

「芙蓉さん！！ タイヤ！！」

「えっ？」

紅倉の身を案じて気が焦っていた芙蓉が視線を下に向けると、愛車のタイヤが4本とも空気が抜けて底が潰れていた。

「やられた」

駐車場には他に広岡夫妻のブラウンのセダンと、海老原オーナーの白いハッチバックが置かれていたが、広岡夫妻のセダンもやはり空気が抜かれていた。

相原先生が真っ青な顔で言った。

「愛美ちゃんは、実は……」

あの人の仕業？、と思つた芙蓉に答えが突きつけられた。

「駄目ですよ。わたしの車には手を出さないでください」

建物の陰からライフル銃を構えた海老原氏が現れた。銃床（ストック）を肩に当ててしっかり目線上に銃身を構え、芙蓉に狙いを付けている。崩れたアフロのひょうきんさは消え、思い詰めた暗い情感が表に現れている。

芙蓉も殺気立って海老原を睨み付けた。

「やっぱりあなたも村のシンパだったわけね」

「そういうことです」

海老原は油断なく狙いを付けながらより確実に撃てる位置に出た。きた。

「ねえ芙蓉さん、あなたすごく強いんですよ？ でもね、これ、散弾銃なんです。あなたを狙つて撃つても、後ろのお仲間さんたちも穴だらけになっちゃうから、かっこよくわたしをやっつけようなんて思わないでくださいよ？ わたしは、下手くそですんでね、びびってすぐに引き金引いちゃいますよ？」

海老原はゴクリと生唾を飲み込み、不安定に銃身を揺らした。ジョンがウゝ…とうなり、前足を踏ん張った。

「芙蓉さん？」

「ジョン。大人しくしなさい」

芙蓉に命じられジョンは不承不承静かになった。

「どうもありがとうございます」

海老原はおどした目をチラッと相原に走らせた。

「相原先生。あなたまでですか。どうして、愛美を悲しませるようなことをしてくれるんです？」

相原は蒼白になって今にも倒れそうにふらふらしていた。

「え…、海老原さん……」

夢つつつのうわごとのように言った。

「そ、それじゃあやっぱり、あなたもこの村の人に愛美ちゃんの敵

(かたき)を……………」

海老原の目にギラツと凶暴な憎しみがたぎった。

「そつだ！ 当然でしょうがっ！？ 愛美を…、愛美を…、ころしたやつらにい……………」

歯茎から血が溢れそうに噛み締めながら声を振り絞った。

「天誅を加えてもらったんだ……。当然の罰だ。愛美の人生を奪った奴らに、未来を生きる資格など、ない……………」

芙蓉は海老原から目を離さずに軽く顔を後ろに向けて訊いた。

「どういうこと？ 愛美ちゃんは生きてるじゃない？」

この神の気の充満した地で、あの愛美が実は死者であつたなんてこともあるまい。そつつと歩み寄つた平中に肩を支えられながらまるで幽霊を見るような蒼白の顔で相原先生が言つた。

「今の愛美ちゃんは、海老原夫妻の実の子じゃないんです。海老原さんの娘さんの愛美ちゃんは…、自殺しているんです……………」

「そつだっ！！」

と血の出るような声で海老原は叫んだ。憎しみに歪む目から涙が溢れている。

「愛美は…、わたしたちの愛美は…、クラスのイジメに遭つて自殺した……。わずか1年生でだ……。どうして、どうしてそんな幼い子が、自ら命を絶とうなんて考える？ ……クラスのガキども……………」

教師……………、生きてる資格なんてないんだ……………。許されるか…、絶対に許さん……………」

海老原は真つ赤になつて唇を噛み、涙をぼろぼろこぼしながら今にも引き金を引きそうに殺気立つた。芙蓉は彼に話し続けさせるため訊いた。

「どうやって呪い殺させたの？」

「愛美が死んだのは1学期の終わりだ。2学期には楽しい遠足にクラス揃つてニコニコお出かけた。その貸し切りバスを、谷底に転がしてやつた。馬鹿教師と愛美をひどくいじめていた4人の生徒は死

亡。愛美を見殺しにした他の生徒たちも大けがさせてやった。奴らは一生事故のトラウマに悩まされるだろうぜ、愛美をいじめた罪と共に……………」

「愛美ちゃんが自殺したのなら、今いる愛美ちゃんは誰なの？」

「あの子も可哀相な子だ。傷ついたわたしたちは、お互いが必要とし、あの子はわたしたちの愛美に、わたしたちの娘になってくれたんだ。」

あの子の親は、ひどい奴らだった。赤ん坊の頃からあの子を虐待してきたんだ。とうとう命に関わるような重傷を負わせて、警察に通報された。だが親どもはしつげと事故だと主張して、虐待を認めなかった。幼い頃から恐怖の体験をし続けたあの子は親の虐待を証言することが出来なかった。それを見かねた親戚が、カウンセラーに相談したんだ」

「『手のぬくもり会』のカウンセラーね？」

「そうだ。……あの子の父親母親は、パチンコ店の火災に巻き込まれて死んだ。あの子は孤児になってしまったが、それで良かったんだ。あの子を産んだというだけで、あいつらは親でもなんでもない鬼だ、悪魔だ！ 子どもを痛めつけるような奴は、絶対に許さん！」

「その子がどうしてあなた方夫妻の養子に？」

「『手のぬくもり会』の周旋だ。両親の排除を依頼した親戚も、引き取って育てるのには躊躇があった。ひどい両親の身内であるのがかえって心配されたんだ。そこでわたしたち夫婦が引き取った。この村はわたしたちのような人間にはとても優しい。この村で、あの子はわたしたちの娘になることを受け入れてくれた。わたしたちの愛美になることを受け入れてくれた。あの子のおかげで、わたしたちは生きていく希望を持てたんだ。この村はわたしたちの希望の地だ。それを壊す物は……………、排除する……………」

芙蓉の霊感が海老原の心理が非常に危険な状態であることを感じた。

その時、突然、紅倉の靈波がキャッチされた。言葉にはならない、強烈なSOSを受け取った。

と同時に両手の指輪の、紅倉との靈的リンクが復活した。

芙蓉のオーラが燃え上がり、デスペレートな海老原の靈体を捉えて強制的に操ろうとした。が。

芙蓉はハッと、そのオーラを納めた。

「海老原さん」

海老原の背後に近づいた人物が落ち着いた声で呼びかけ、カチリと握った物に金属の音を立てさせた。海老原はギョツとして、銃を構えたまま視線をゆっくり後ろへ向けた。

すらりとスマートな英国紳士の広岡氏が小型のピストルを構えて海老原の背中を狙っていた。

海老原はゾツと脂汗を浮かべ、ギラツと憎しみの目で広岡氏を睨んだ。

「あんたも、敵だったか……」

広岡氏は落ち着いた目で海老原氏を見つめ、ゆっくり首を振った。

「いや、敵じゃない。落ち着きなさい。愛美ちゃんのお父さんが、

そんなことをしちやいけない」

「ま、愛美……」

「大丈夫だよ。奥さんと愛美ちゃんはちゃんと妻が見ているからね」

「……………」

「わたしは敵じゃない。広岡というのは偽名だ。この村に帰ってくるよきのね。」

芙蓉さんも、改めまして。

わたしの本当の名は、信木 寛孝（のぶき ひろたか）。

易木寛子君の同僚の、『手のぬくもり会』のカウンセラーです」

81 外部保安官

「『手のぬくもり会』のカウンセラーが、なんで村でわざわざ偽名なんて使ってるんです？」

海老原は疑わしそくに訊き、

「まあ、落ち着いて。銃を下ろしたまえ」

と、信木カウンセラーを名乗る広岡氏は構えたピストルを海老原氏の背中から芙蓉に向けた。

「芙蓉さん。あなたとも改めて話したいですな」

芙蓉は広岡の正体を判断しかねている。信木の名前を知っているからには「手のぬくもり会」に詳しい人間なのだろうが。

広岡は皆が納得するように話し出した。

「わたしはね、いわば『手のぬくもり会』の保安官も兼ねているのですよ。村で偽名を使うのは今回のような場合のための備えですよ。何かトラブルが持ち込まれたときに自由に動き回って処理できるようにね。そしてわたしは村長に何かあった場合の村長権限の代行者でもある。村長は紅倉さんの入村に関して強い憂慮を持っていた。残念ながらそれは現実になってしまったようだ。今わたしが心配しているのは、現在誰が村のイニシアティブを取っているかということです。今出されている資材調達班の追討命令は、乱暴で、用意周到な村長の出したものとは思えない。青年団長木場田君の独断ではないかな？ 神の異変といい、村長の意思が見えないところといい、どうやらわたしの出番のようだ」

これだけ村の内部事情を詳しく述べられて、海老原は信用してラフル銃を下ろした。広岡氏、いや、信木保安官はうなずき、苦笑した。

「わたしの愛車までパンクさせてくれるとはねえ？」

「すみません」

「いや、いいよ。いきなりズドンと散弾銃を食らわされなかっただ

けました。命令を出した者はどさくさ紛れにわたしも殺されてしまえばいいと思っていたんじゃないかな？」

信木保安官に尋ねられるように首をかしげられ海老原は、

「紅倉の関係者を決して村から出すな、手段は選ばない、と青年団から連絡されまして……」

と申し訳なさそうに答えた。信木はふうむと考え、

「木場田青年団長の……クーデターかな？」

とつぶやいた。穏やかな顔をしながらジロリと、

「ま、動機の見当は付くがね」

相原先生を見て、相原は自分の恋がこんな恐ろしい事件を引き起こしたのかとまた青ざめた。

「それなら切り札はこちらが握っているということだね。木場田君はまさかあなたが村を逃げ出そうとは思っていなかっただろう」

相原はまたも恋人を裏切ったことを責められ、辛そうに落ち込んだ。

「というわけだ」

と、今度は芙蓉に。

「それではここペンションもみじを中立地帯として、事態の收拾を図ろうではないですか？」

芙蓉はピストルを向けられたまま敵意を納めずに言った。

「あなた本当に信木カウンセラー本人？ 信木カウンセラーを捕らえて情報を聞きだした公安部員、っていうことはない？」

海老原はギョツとして信木を見つめ直した。信木はやれやれと油断なく芙蓉に目を向けたまま首を振った。

「疑い深いですねえ。わたしが村人と懇意なのは広場で見たでしょう？」

「前々から村を内偵していたっていう可能性もあるわ。あなた、村の出身なんですよ？ 顔が村の人と違うわ」

なるほど、と信木はうなずいた。

「ごもつともですね。わたし自身驚いていますよ。だがこれがわたし本来の顔だ。もしわたしが若い頃からずっと村にとどまっていたら、やはり村のみんなと同じような顔つきになっていたでしょうね。あなたなら分かるでしょう？それだけこの村の『呪い』の力は強いということです」

「先生やわたしと中立の立場を取りたいのね？」

「その通り。村の秩序の回復がわたしの仕事だ」

信木は困ったようにため息をつき、言った。

「わたしも村の中に何人かスパイを持っていてね、その情報によると、鬼木のお婆と長女のヨシさんが死んだそうだ」

表情で確認を求められ、芙蓉は

「そうですね」

と黒木からの情報を確認した。信木はまったく困ったことだと頭を振った。

「その点でも村は今非常に危険で不安定な状態だ。メイコ君は無事なようだが、彼女はまだ経験不足で神の制御は難しいだろう。麻里が神の力を思うまま独占したら……、あれは危険な娘だ。ほぼ確実に村の役割から逸脱した行為を、神を使って行っだろう。……芙蓉さん。」

この際です、我々は紅倉美姫さんの力をお借りしたい」

信木は芙蓉に向けていたピストルを下ろした。

「ずいぶん勝手な言い分ね？」

「それは承知してます。そちらにも良い条件を提示するつもりですよ。」

平中さん

視線を向けられ、相原の肩を支えていた平中は敵意のこもった目で見つめ返した。信木は柔らかな表情で受け止め、言った。

「安藤さんをお返ししましょう。今、懇意にしている個人病院に入院しています」

あっ……と平中も芙蓉も目を見開いた。信木は二人の驚きに満

足そうに微笑み、言った。

「これも説明しなくてはいけないでしょう。」

村長から紅倉さんが来ると事態を説明され、わたしは村に来る前に密かに『ガス穴』に入り、倒れている安藤さんを見つけ、病院へ運んだ。3日前のことです。10日間も飲まず食わずでしたから衰弱が激しいですが、命は助かりそうです。心苦しいですが、快復までにそうとう時間は要すると思います。」

「どこの病院です!？」

平中がいても立つてもいられないように訊き、信木は

「名古屋です。ま、それ以上は今はまだ教えられませんが、大丈夫です、立派な病院ですから、治療は万全をつくしてくれます。」

とすべては明かさず、平中はまだ食い下がりがりたかったが、先に芙蓉が鋭く訊いた。

「あなた、あの穴に入ったの？ 普通の人間があそこに入られるとは思えないけれど?。」

「普通の人間なら、ね。」

信木は上からの目線でほくそ笑み、言った。

「わたしはマイナス方向の霊能力者です。村でもトップレベルのね。そのベクトルで言えば、わたしはあなたよりはるかに優れていますよ?。」

穴の中で七転八倒した芙蓉は悔しそうに睨んだ。どうりで霊能者の芙蓉がこれだけ敵意をぶつけているのに平気な顔をしているはずだ。

「それじゃあ、本当に安藤さんは無事なのね?。」

「まあ、無事…、とは言い切れない状態ですがね。」

芙蓉はうなずき、一応信木に対する敵意を納めた。

「そっちの条件は分かったわ。じゃあ、わたしが先生を助けに行くのはかまわないわね?。」

「どうぞ。」

と信木はピストルを持っていない方の手で斜面の周回道を差した。

そちらへ行きかけた芙蓉は、指輪のリンクから紅倉が大量の水に押し流されているのを見て、訊いた。

「ガス穴の奥に地下水の流れがあるわね？ 出口はどこ？」

「そこを紅倉さんが？」

信木は驚いた顔で訊いた。

「そっちの下水道はもう何十年と使っていないはずですが。そうです…、ガス穴の入り口から更に下って…、道が隠れていて分かりづらいんだが……」

「もうけっこう」

行けば分かる、と芙蓉は駆けだした。その背中に信木が

「ああ、是非紅倉さんにこちらへの御協力をお願いしますよ？」

と呼びかけた。芙蓉は駆けながら考えた。

安藤が既に村からいないのなら何故信木はさっさとそれを教えて先生に出ていってもらおうとしなかったのか？ 安藤の容態があまりにひどく、かえって怒りを買うと恐れたのだろうか？ だが芙蓉の感触では村長も木場田も安藤が既に穴から連れ出されているとは知らなかったようだ。ダルマ狸の村長の腹は読みきれないが、おそらくは安藤は穴にいますと思っていたはずだ。

信木は、木場田にはともかく、何故村長にも安藤を連れだしたことを教えなかったのだろうか？

信木は木場田の動きを「クーデター」と評したが、案外それを信木も企てていたのではないか？

これから信木はどう動くのか？

「クーデターを利用したクーデターか……」

信用するのは危険だなと芙蓉は判断した。

ジョンがタタタタと土を蹴立てて走ってきて芙蓉に並んだ。

「あんたもこっちに来てくれるの？ ありがたいわ」

紅倉の動きが止まっている。位置はだいたい分かるが、あちらからの情報が入ってこないので正確な位置は分からない。犬のジョンが捜してくれればまっすぐ駆けつけることが出来るだろう。

「頼りにするわよ？」

芙蓉は犬に負けじと全力で駆け、電波山の隣の峠道を目指した。

「頑張ってくださいよ」

信木は芙蓉とジョンに応援の手を振った。手を下ろすと、人当りの良さの失せた陰湿な表情で、

「死なれては元も子もないからね」

とつぶやき、ふむと考えた。

「紅倉が村長、芙蓉が助役：という人事もありなんだがねえ……」

可笑しそうに笑い、さて、と平中たちを向いた。

「さて」

平中と相原は身を寄せ合うように固まった。信木は笑顔を作って言った。

「中に入ってお茶でもいただこうじゃありませんか？　ここは中立地帯ですから、どうぞリラックスなさってください。ねえ？」

と顔を向けると、海老原が

「あ、はい。どうぞ」

と、今さらながら、慌てて猟銃を後ろに隠すようにして玄関へ差し招いた。歩き出した信木に平中が言った。

「安藤の病院を教えてください！　もう、わたしたちはいいじゃないですか？」

相原も連れていく気にかばうようにして言う平中に信木はニッコリ笑顔を向けた。

「駄目ですよ。ここは中立地帯ですが、あなた方はわたしの捕虜です。中立地帯から逃げ出そうとしたら、こいつを使わなくちゃならん」

と、黒光りするピストルを見せつけた。

「戦争をしている敵同士にも友情が芽生えることもある。我々は、出来るだけ友好的に行こうじゃありませんか？」

82 りへんじ

芙蓉は細い山道を駆け上がっていき、裏の隠された道へ出るため岩に取り付いた。帰り道に狙撃に遭った場所だ。一瞬慎重になった芙蓉を追い越しジョンが飛び上がった。

瞬間、芙蓉はジョンの体が血を飛び散らせて宙を跳ね上がるイメージを見た。

「ジョン！」

芙蓉は叫んだが、間に合わなかった。声を上げた瞬間に身体の内部分がヒリリとするあの独特の感覚がフラッシュした。狙撃者は向こうの山から狙っているのではない、裏の道を下った先から獲物が現れるのを待ち伏せていたのだ。

間に合わない、

と思った瞬間芙蓉の脳波が天井知らずに飛び上がり、芙蓉のセンスが時間と空間をワープした。

現れたのが犬と知って狙撃者の判断が一瞬だけ躊躇した。ほんのひらめき程度の瞬間の後、

『シユート』

と訓練で培った反射神経が命じ、スナイパーは構えたピストルの引き金を引いた。芙蓉の見たジョンの体が宙に跳ね上がる瞬間、

「バキヒインンンッ、」

激しい爆発音が上がり、

「ぎゃっ」

スナイパーは腕を跳ね上げた。ピストルがバキインと金属の割れる音をさせ、手の中で弾け、火を噴いた。公安の顔を金属片が襲い、人差し指と親指が吹っ飛んだ。

「うつ、く、くそつ……………」

スナイパーは肉と骨と神経の引きちぎれた激痛を手首を固く握り締めて堪えた。針のように尖った金属片が眼球の底部に突き刺さり、右目が内部から真っ赤に濡れた。

「くつ、くつ、くそおつ！！！！」

わめいて、眼球の弾け飛びそうな激痛を吐き出そうとした。

「殺す……………」

血の涙が溢れてきて流れ落ち、スナイパーはぎりぎり野獣の顔になった。

スナイパーの後方で、

「なんだよ、旦那、やられちまったじゃねえか？」

スナイパーとやり合っつて木に縛り付けた「猿飛びサスケ」の青年団員が呆れた調子で言った。

「旦那があを女を殺りたいだろうと思っつてわざわざ誘っつてやったのによお？」

恩着せがましく言う猿にスナイパーは吠えた。

「やかましい！！ 女は俺がぶつ殺す！ 手え出すんじゃねえぞ！！」

青年団員はひひひと笑った。

「さあてそいつはちつと聞けねえなあ。今度は殺していいつて指令が出てるんでねえ、旦那の趣味に付き合っつ義理はねえんで」

ジョンは撃たれることなく着地し、激しい爆発音に驚き、敵を察知してうつと唸った。

「ジョン、いい、おまえは行っつて。先生を頼むわよ」

幹の裏に隠れて敵の出方を見ながら芙蓉が命じ、ジョンは判断するとさつと道を外れて斜面へ駆け下り、木から木へ、岩から岩へ、野生動物の運動センスで飛び跳ねていった。

芙蓉はジョンを見送り、忌々しそつに2人の敵を睨んだ。

「急いでいるのよ、まったく」

敵に飛び道具はないようだ。芙蓉は自分から仕掛けることにした。

芙蓉は道に飛び出ると二人に向かって走った。

「殺す！」

スナイパーは左手に腰からナイフを取り、走ってくる芙蓉にこちらからも突進した。

「シエイツ」

間合いを計る余裕を与えず突き出し、横に逃げられると、体の前にグツと握った右手を軸に素早い足の動きで体を回転させ、

「シエイツ」

直線でナイフを突き出し、同じく体を回転させ、足を伸ばして土を蹴り、一気に間合いを詰めて突いた。芙蓉の格闘スタイルは合気道だ。回転の動きに絡め取られないように一突きごと芯をまっすぐに鋭く突く。利き腕は右だったが、左手でも80パーセントの戦闘力は確保している。芙蓉は避けながら反撃の隙を狙っているだろう。スナイパーはその隙を与えない。芙蓉のひらりひらりとしたドレスがナイフに切り刻まれていく。芙蓉はすすすすとナイフを避けながら鋭い目つきでじつとスナイパーの目を見ている。

「ステージを間違えたようだな、ええ、お嬢さん!？」

スナイパーは額に運動の汗を浮かべて笑った。戦闘に集中し痛みを切り捨てている。すっかり冷静さを取り戻していた。突き出したナイフを引くとき、手首を返し刃を横に向けていた。未だ芙蓉の肉体に傷を負わせてはいないが、袖は幾筋も切り裂き、だらだらとぶら下がって、いかにも動きづらそうだ。この服装はなるほど素手相手の格闘ならいくらか意味もあるのかも知れないが、刃物相手では完全に誤った選択だ。スナイパーは狭い小屋に追いつめたウサギをいたぶるような残酷な心持ちで芙蓉の白い衣を切り裂くのを楽しんでいた。

「シエイツ」

さつと鋭く突き出したナイフが芙蓉の腕をかすめ、腕と胸の間に入った。芙蓉の緊張した（スナイパーの目にはぎりぎりに追いつめられた）目を見てスナイパーは笑った。手首の返しを大きくして切

っ先を胴を撫でるように引いた。

わずかばかり、引く腕が胴側に寄って、引く軌道が斜めにぶれた。二人の間に自然と格闘の呼吸が生まれていたが、芙蓉は一呼吸もなく素早く大きく身を引いた。リズムを崩されスナイパーはハツとしたが、慌てて引く腕にナイフが切り刻んでぶら下がった袖の布が絡みついた。しまった、と思ったときには芙蓉の拳が目の前に迫り、スナイパーの鼻骨を砕いた。

「……………」

ツンとしたきな臭さが激痛と共に爆発し、鼻血が噴き出した。再び袖を切り裂いてナイフはスナイパーの手に握られていた。

「くっ、くっそおおお……………」

スナイパーはジンジンと燃え上がる痛み顔に顔を真っ赤に染めてナイフを構えた。芙蓉は憎たらしく空手の直線的な構えを解いて両腕を軽く下に下ろした柔らかな合気道のフォームに戻っている。

「訊くけど」

芙蓉が言った。

「わたしをぶつ殺すつもりなら、当然自分がわたしに殺される覚悟もあるんでしょね？」

スナイパーは血に濡れた歯を剥き出して恐ろしく笑った。

「お嬢様武道が調子に乗るなよ？ センスは褒めてやる。だが、おまえの武道で人は殺せんよ」

「どうかしらね？」

「そうさ！」

スナイパーはダツとジャンプするように踏み出すと、

「キエエエイツ、エエエエイツ、エエエエーッ」

凄まじい気合いでナイフを次々くり出してきた。勢いだけでむちやくちやに突き、振り回しているようだが、芙蓉との間合いを計り、ナイフがちょうど肉体に到達する距離を測っている。凄まじい攻撃をくり出すスナイパーに芙蓉は狭く凸凹のある足場で必死に体を躍らせて避け続けた。芙蓉もぎりぎりナイフの届かない間合いを測っ

て避けている。スナイパーは高速で身体を運動させて芙蓉の柔らかな動きの間合いに突き進んでいく。ふわりふわりと避ける芙蓉は円形、もしくは8の字にステップを踏んでいるが、スナイパーはその流れを直線で縮めて切り込んでくる。

「いつまでお遊戯が続けられる!？」

スナイパーの気迫に圧されたか、芙蓉の足が地面を踏み込み、体がぐらりと下へ沈んだ。スナイパーは歓喜の顔でナイフを突き出した。

「シエイッ」

どつと倒れ込む芙蓉を追ってナイフを突き出すスナイパーの腰に、地面から跳ね上がった枯れ枝の折れ口が突き刺さった。

「ぐっ」

スナイパーは眼を剥き、芙蓉は素早く転げて後ろへすっ飛び、立ち上がった。

スナイパーは腰を触った。枝はジャケットの固い繊維に遮られて突き刺さりはしなかった。

スナイパーはギロツと芙蓉を睨んだ。

「狙ったか。大した女だ」

「旦那」

上の斜面から見物していた青年団員が飽き飽きしたように声を掛けた。

「そろそろ代わっていただきやすぜ？」

「やかましいっ！ 大人しく見てろ！」

「へへっ、不満なら後でまたお相手してさしあげますぜ？」

青年団員はふざけた表情から真顔になって両手を前に突き出し、スウツと息を吸い、

「ハアアアッ!!!!!!」

大きく固い気弾を芙蓉めがけて放った。

芙蓉はスツと手を横に払った。

「ぎゃあああっ」

気弾の軌道が「グイッ」と逸れ、スナイパーの横っ腹に打ち込まれ、スナイパーは堪らず悲鳴を上げて斜面に放り出され、ドサツ、ドサツ、と音を立てながら落下していった。

「なにいつ!？」

青年団の能力者は呆気にとられ、芙蓉が突進してくる姿に思わず両手から力を放った。

「悪いわね」

芙蓉が待つていたように腕を後ろにはね除けると、

「うぎゃああー!ー!ー!」

能力者は見えない手に投げ飛ばされるように宙に飛び上がり、大きく飛んで、スナイパーの落ちていった斜面の下へまっすぐ落ちていった。

芙蓉は冷たい目で見送り、

「死んじやつても恨まないでね」

と、もう興味を失って先を急いで駆けだした。

冷静なような芙蓉だが、

内心はそうでもなかった。

強いオーラを持つ者ならこうしてそれを利用して倒すことは可能だと小学校で分かった。だが金属の固まりであるピストルを暴発させて破壊するなど、オカルトではなくSFの分野で畑違いだ。しかも反応が異様に速かった。この村に異様に霊媒物質が濃く、地下から「神」のオーラが放出され、霊的エネルギーが飽和状態に近く充満しているせいだ。芙蓉は自分までその力に使われているような嫌な気分がした。

先生の状態も気になった。

力の出所は村からばかりでなく、指輪のリンクを通した先生からでもあった。その力の輪郭が崩れ、力その物が生で芙蓉に注ぎ込まれてきている感じがする。先生の霊体が剥き出しになり、体がひどく衰弱しているのを感じる。

芙蓉は自分の強さを知っていたが、常にその限界を命がけの緊張

感で意識していた。常にその限界を引き上げる努力をしているが、けっして自分の力を過大評価はしなかった。全ては紅倉を守るという目的のためだ。自分の敗北、死は、紅倉の危機、死につながる覚悟している。自分は決して敵に負けてはならない。頑張れば何とかなる、などという甘い考えを芙蓉は持っていなかった。

『頑張ってください、先生。今行きますからね』

芙蓉はリンクから逆に自分の霊力を紅倉に送るようにしながら道を急いだ。

紅倉は谷底の沢に倒れていた。気絶している。丸く摩耗した大小の石を水が浸しているが、流れは見えず、放水は終わっている。

放水はそこから15メートルほどさかのぼった山の斜面に開いた亀裂からなされた。ここにはまだちよろちよると残りの水が流れ出ている。紅倉を吐き出したときにはかなりの水量、勢いがあつたのだろう。

穴からの放水が終わった沢は川底を覗かせていき、灌木やシダが中央まで浸食しているからここはもう長い間水は流れず、枯れ沢となっているのだろう。丸い石たちは白く乾いてもろくなった物が多く見受けられ、久しぶりの大量の水を吸いすぎてぱっかり割れてしまった物もある。

ガサツガサツとまだ濃い緑を保つ陰性植物を踏み越え規格外のラブラドルレトリバーのジョンがクリーム色の巨体を踊らせて木々の間を走ってきた。まっすぐ紅倉の元へ駆けつけ、うつぶせに倒れぐつしより濡れた体をコートの首のところをくわえて、ひたひたと顔を濡らす水から持ち上げ、高い岸へ運び上げた。

だらんと首をうなだれて動かない紅倉は、獣の気配と両手の指輪を通して呼びかけてくる芙蓉の霊波に感覚を刺激され、眉間にヒクヒクしわを寄せながら意識を覚醒した。

「……………痛い……………体……………」
ブルツと震えが走ると、ガタガタガタと幼児のおもちゃのように体が震えて止まらなかつた。ブルブルと唇が震え、歯が力チ力チと鳴った。

「さ……………寒い……………美貴ちゃん……………」
体を丸めて肩を両手で抱きしめ、保護者である芙蓉を呼んで甘えようとした。ぬっと触れてきた毛の衣にすがりつこうとして、ハツとそれが自分がこの世でもっとも苦手としている生物であると気づ

き、

「ひつ、……、ひつ、……」

はいずって逃げようとした。ジヨンはのっしのっしと反対側へ回り込み、紅倉が沢に転落するのを抑えた。紅倉は反対側へ逃れようとし、ジヨンは面倒くさそうに紅倉の体をまたいだ。紅倉は震え上がって固まり、紅倉の動きが止まったのを見るとジヨンは沢側に戻り、紅倉に体を寄せてしゃがんだ。

生理的に犬に極度の恐怖感を抱く紅倉はほとんどパニックに陥って呼吸を忘れ、またも失神しそうになったが、背中に触れる呼吸し血の通った生き物の肉体の温かさに心地よさを感じ、次第に気持ちさが落ち着き、温かさに頼るようになった。

「……寒い……」

ガタガタという震えは止まらない。負傷した肉体が休息を要求し、寒い寒い……とうわごとのように思いながら、ガタガタ震えたまま紅倉は眠りに落ちていった。

「先生。先生。」

耳元で呼びかけられて紅倉はうるさそうに目を覚ました。

「先生。大丈夫ですか？」

芙蓉の声が途端に優しくなって尋ねた。紅倉は疲れた目を瞬かせた。

「美貴ちゃん……」

泣いてる……、というのがぼんやりした影だけでも分かった。

「美貴ちゃん。寒い……」

「ええ。濡れた服を脱いでわたしの服を着てください」

芙蓉はジロツと紅倉に腹をくっつけて横たわるジヨンを睨んだ。

「オスはあっち」

ジヨンはのっそり立ち上がって歩いていった。

芙蓉はスナイパーにビリビリに切り刻まれた白い服を脱いだ。中には身にびったりした黒いスウェットスーツの上下を着込んでいる。芙蓉は紅倉に

「ちよつと我慢してくださいね」

と声を掛けて服を脱がし、自分の白い服を着せた。

「ごめんなさいね。着替えを用意してくる余裕がなくて。我慢してくださいね」

芙蓉は大きな石の上にお尻を付き、広げた股の間に紅倉を座らせ、背中から覆い被さって抱きしめた。

「こんなに凍えてしまつて、…かわいそうに……」

紅倉の震えは止まつていない。震えを押さえつけるように芙蓉はぎゅっつと紅倉を抱きしめた。

谷底は既にかなり暗くなっている。時刻は4時半。ガス穴に入つたのは12時半。あれから4時間。ばたばたと様々な出来事が起こっていたが、それらは村の狭い空間とこの4時間という短い時間の間に濃厚に折り重なって進行していったのだ。

紅倉の負傷と疲労はひどい。芙蓉はしばらくはここから動かせないと判断し、律儀に向こうを向いているジョンに声を掛けた。

「ジョン。ペンションに戻つて毛布と、チヨコレートみたいな物を見繕つて持つてきて」

ジョンは話を通じているのか、紅倉の重症具合を確認すると、さつと藪の中に駆け込んでいった。

「ロテムみたいに賢いといいんだけど」

「だいじょうぶよ」

震えながら紅倉が答え、芙蓉は顔を覗き込んだ。

「あの子はわたしの中にケイさんがいるってちゃんと分かっているから、わたしを死なせないためにちゃんと考えているわ」

芙蓉は紅倉の濡れた髪の毛の匂いを嗅ぐように鼻をくつつけ、じつと抱きしめ、訊いた。

「誰にこんなにひどいことされたんです？」

「門番の巫女たちと、麻里って言う女子高生」

「それにケイさんでしょ？」

「……………」

紅倉は芙蓉のいわんとする事を予想して答えなかった。芙蓉は静かな声で厳しく尋問した。

「ケイさんにも殺されそうになっただんでしょ？ 今先生の中にいるのだから、先生の霊体を破壊するために潜り込んだんでしょ？」

「ケイさんは、わたしと心中したかったのよ」

「どうでもいいです。わたしから先生を奪う行為には変わりありません」

「美貴ちゃん、ケイさんのこと、嫌い？」

「許せないんです。先生を傷つける者は、誰でも」

紅倉の全身は痣だらけだった。中にははつきり蹴られたひどい傷もあった。そればかりか…………

あの真っ白な雪のように透明だった肌が、赤黒く染みだらけで、やけどして膿んだようにケロイド状になった傷が顔から胸、腕に、多数あった。

治らないかも知れない、と芙蓉はぼろぼろ涙をこぼしたくなった。こんな所、絶対先生を連れて来るんじゃない、と激しく後悔した。

「美貴ちゃん……」

芙蓉の心情を察して紅倉が元氣のない声を掛けた。

「ごめんね……………」

芙蓉の傷ついた心を知って紅倉もぼろぼろ涙をこぼした。芙蓉は抱きしめ、頬を擦り寄せた。

「帰りましょう、先生。もういいわ。もう、いいから、二人のおうちに帰りましょう？ ね？……………」

84 村が隠したい物

「安藤さんが生きていたんです。広岡さん、……彼が『手のぬくもり会』の男性カウンセラー信木だったんですが、この村に入る前に『ガス穴』に入って倒れている安藤さんを助け出していたんです」

「広岡さんが信木カウンセラー……。ふうん、そうだったの」

「はい。彼はマイナスの霊能力者で、ガス穴にも平気で入れたんだそうです」

「そう。で、彼はわたしにさっさとこの村を去ってほしがっているの？」

「そうです」

「美貴ちゃん、嘘つき」

「……………」

「何か企んでいるんでしょう、信木さん？」

「どうでもいいです。先生がいなくなれば企みも失敗です。平中さんと相原さんはわたしが助け出しますから、みんなでいっしょに逃げましょう。安藤さんは、名古屋の個人病院だそうですが調べれば見つけられるでしょう。ね？ それでいいでしょう？ もう、ここを離れましょう？」

「駄目よ。ケイさんを助けなきゃ。……残念だけど、彼らは逃げ切れなかったでしょうね。ケイさんの体はあっちに奪われてしまったでしょう」

芙蓉はケイとミスキを見捨てたことに後ろめたさを感じた。しかし。

「自業自得でしょう？ 彼らはわたしたちの敵で、あっちの仲間ですよ？ 話が逆じゃないですか？」

芙蓉は自分の後ろめたさを誤魔化しているだけだろうかと自問したが、そうではない、先生を守るためだ。芙蓉の心を察して紅倉が言った。

「そうね。美貴ちゃんがあの人まで引き受けていたら、きつと、美貴ちゃんたちまでやられていたでしょうね」

「そうです」

と答えて、果たして本当にそうだったのだろうか、とまた芙蓉は自問した。いっしょに戦えば、助けてやれたのではないか……

「麻里つて子は」

紅倉のボソツとした言葉に芙蓉はハツと注意を紅倉に戻した。

「ほんとに憎ったらしい悪魔っ子で、ひどいサディストだったわ。わたしを殺し損ねて物凄く腹を立てているでしょうね」

ざまあみろというように紅倉は芙蓉に抱かれた背中を揺すって笑った。体が温まって震えは止まっていた。

「でも……………」

きつとひどく残酷な仕返しを考えているでしょうね。絶対わたしを殺したがっているでしょうから、そのための罠を用意しているはずだわ。

ケイさんは殺していないわ。体を奪っただけ。わたしの体にケイさんの魂が吸収されているのは知っているから、体を取りに来い、と言う訳ね」

芙蓉はケイへの敵意を捨てていない。

「ケイさんの魂を外に出して、勝手に体に帰らせるわけにはいかないんですか？」

「うーん……………」と紅倉は考えた。

「糊みたいな感じなのね、ケイさんの霊体は。べったりわたしにくっついちゃってて、本人の体に触れないと離れてくれないみたい」

芙蓉は本当かしら？と怪しんだ。

「もらっちゃったらいいじゃないですか？ 先生が支配していて、何も支障ないんでしょ？」

「うん。気持ちいいくらい」

「ああそうですか」

芙蓉の嫉妬を笑って、紅倉は沈んだ声で言った。

「まだ神のケイさんへの支配は続いているのね。今外へ魂を放つたら、神に食われて、ケイさんはケイさんに戻れなくなるでしょう、あの赤い巫女たちのように」

「ああ……」

芙蓉も暗い声で相づちを打った。あれは、悲惨だ、と芙蓉も思った。

「ケイさんの魂を一度浄化する必要があるわね、本人に戻してから」
「先生の中で出来ないんですか？」

「出来ないわね、わたしの魂、どろどろに汚れているから」

「まあ。そんなことないでしょ？」

芙蓉は、大好きですよ、と抱き直してやったが、紅倉はかすかに笑っただけで答えなかった。代わりに思い出したように言った。

「そっか…、安藤さんを連れだしたのは広岡さん……信木カウンセラーだったのか……。わたしはあの麻里だと思っただけけど、違ってたわけね……。ふうん……」

何か気になる風な紅倉に

「なんです？」

と芙蓉は尋ねた。

「うん……」

紅倉は自分自身まだ考えがはつきりしないようながら話した。

「安藤さんは何故この村から外へ出されなかったのかしら？」

芙蓉はなんだ今さらと思った。

「それは安藤さんがこの村に来てしまったからでしょう？ この村の存在を隠すために外に出すわけにはいかなかった」

「でもこの村、ちゃんと道が通って、外の世界から隔離されているわけじゃないわよ？」

「ああ…、そう…ですね……」

広岡氏は偽のお客だったが、ペンション前の道が外の一良町に通じているのは確かなようで、ここにはちゃんと電気も通り、携帯電話も使える。頼りないが駐在だっている。この村の存在その物は別

に隠されているわけではないのだ。紅倉は言う。

「わたしが村長で、どうしても村の存在を秘密にしたいなら、確実に安藤さんを、普通の殺し方をして、ここから離れた全然別の場所で、遺体を発見させるようにするわね。お財布を抜き取って物取り目的の殺人に見せかけて」

「なるほど」

「でもそうしなかった。村に安藤さんをとどめたおかげで、わたしみたいな厄介者が来てしまった」

では、何故なんだろう？

「わたしね、信木さんが安藤さんを連れだしたっていうのは驚きなのね。あんな所、普通の人が近づけるわけないって高をくくっていったから」

それは芙蓉も同じだ。

「信木は自分は村でもトップレベルのマイナス方向の霊能力者だつて威張ってました」

紅倉はうなずいて言う。いつもの調子が戻ってきたようで芙蓉はちよつと嬉しい。

「そうなんだ。案内してきてもらったときの木場田さんの様子から見ても他の村人はやつぱりあそこには近づけないようね。それじゃあもしかして、安藤さんは本当に自分からあの穴に入って行って、中毒を起こして、出てこられなくなったのかもしれない」

「それはどうでしょう？ 入り口に煙でいぶした跡がありましたよ？」

「それが自分たちが安藤さんをここに追い込んだんだって見せかけるために後で偽装した物なら？」

「わたしは先生を誘い込んで殺すための罠じゃないかって最初から疑ってましたけど？」

「彼らはわたしの霊視能力をずいぶん高く買ってくれていたみたいだから、わたしが近づけば中に安藤さんがいるかどうか見えると考えていたんじゃないかしら？ 残念ながらわたしの能力はそこまで

高くありませんでしたけど」

と紅倉は芙蓉の腕の中で肩をすくめ、芙蓉はまたまた本当かしら？と疑った。

「同じ神に通じる穴でもあそこは巫女の毒が強すぎてあちらでも見通せなかったみたいね。彼らはあそこに安藤さんが倒れていると信じて疑ってなかったと思う」

「そうですね」

芙蓉も信木が何故安藤を救出したことを村長にも話さなかったのが疑問に思った。紅倉の読み通り村長が本当に知らなかったとなれば信木の行動は確実に怪しい。

「信木さんの動機はともかく、村長たちは安藤さんがあの穴に強い興味を持っていたということをおわたしたちに知られなくなかったんじゃないかしら？」

「穴の中に、何かありましたか？」

「神を奉った古い社があったけれど、そこはもう何十年も使われていなかったわ」

「じゃあ、何が？」

芙蓉は紅倉の勘ぐりすぎだと思ったが、紅倉の背中では体温が上がり、興奮状態にあった。

「安藤さんは、神の穴への入り口としてあそこに入り込んだんじゃないかしら？ どうしても確認したい物があって、霊感のない者の悲しさで無理に先へ進んで、気づいたときには動けなくなってしまうもなくなっただんでしょね。」

安藤さんは、何を、そんなに見たかったのかしらね？」

85 怠まわしき村

「わたしの勘はたびたび悪魔的な発想をして嫌になっちゃうんだけど、この村ではそれがもろに当たっちゃう気がするのよね」

はあー……………、と紅倉は暗いため息をついた。日は沈み、芙蓉と紅倉の姿も闇に溶け込み、芙蓉はジョンはちゃんと帰ってこられるかしらと心配した。

「安藤さんが来たのは2週間前。2週間前、この村で何があったのかしらね？」

芙蓉は紅倉の口から恐ろしい真実が語られる予感がした。

「ね？ 美貴ちゃんはなんだと思う？」

「わたしには2週間前のことなんて分かるわけありません」

芙蓉の頭は最初から考えることを拒否した。紅倉は容赦なく赤い瞳の視る「真実」を語る。

「ヒントはもらったじゃない？ 村長の家の離れに、元気な双子の赤ちゃんがいたじゃない？」

「……………」

「お母さんに挨拶して、だっこさせてもらえば良かったわねえ？」
どうせ生まれたての赤ん坊なんておっかなびっくりで抱きたくなんてないくせに白々しく言った。

「ちようどそんなところなんじゃない？ 赤ん坊が産まれたのは？
村長のお屋敷はこの村の富の象徴だつて言つてたわよね？」

2週間前、安藤さんは呪殺の依頼者と見られる犯罪被害者遺族の家から依頼金を受け取ったと見られる易木さんの自動車を追つてこの村に来た。易木さんは多額の現金を持っていたと見られる。さてその易木さんが向かったのが村のどこかと言つと、村の富の象徴、村長の家だつたんじゃないかしら？

村長の家は富の象徴であると同時に、村の何でも屋でもある。赤ん坊と母親が離れて生活しているのを村長は旦那が夜泣きにまいっ

てと説明したけれど、出産前からあそこにいたんじゃないかしら？
医療機関は村に一軒きり、それもたいして大きい病院じゃないんでしょ？ こんな小さな村じゃ出産なんて自宅出産が普通なんじゃない？ でも、出産がああ離れて行われたとしたら、それは医療上の理由からだけなのかしら？

易木さんをこっさり追った安藤さんは、たまたま、離れを覗いて、
出産現場を見てしまった。

ふうん……

たまたま、って言うのもご都合主義ねえ…。

じゃあ、外から安藤さんが覗ける隙があつて、安藤さんにそういう興味を抱かせる状況があつたとしたら、
どういう状況だったかしらね？」

芙蓉は、知りたくない、と思った。

「ところでねえ、

村人がみんな同じ顔をしているって言ったわよねえ？」

紅倉の話はこころ話題が変わる。

「ええ。信木も神の力の影響だろうと言っていました」

「そうね。それもあってしょうね。でも、この狭い、閉鎖的な、村の場合、もっと根本的な原因があるんじゃない？ 村人同士で結婚をくり返せば、当然その子孫同士、血が重なっていくわよねえ？」

芙蓉は知らないが黒木たちはその重なった遺伝子の負の発動の犠牲者たちだった。

「それを避けるためにはどうしたらいい？」

「外から新しい人を入れなくてはならないでしょう？」

「そうよね。だから海老原夫婦と愛美ちゃんなんかは大歓迎されたんじゃないかしら？ 村の将来の新しい血として」

「相原先生もそうです。村の学校に都合のいい教育者としてばかりじゃなく、新しい血の母親としても期待されたんですね？」

「うん、そうなのね。犯罪の被害者で、村に恩義のある、村のシンパである外からの移住者は大歓迎でしょうね。こんな事情のある村じゃ普通の人を住民に迎えるわけにいかないものねえ。でも、そういう人だってそうそうこんな恐ろしい村に来てくれるとは思えないわよねえ?」

紅倉は意地悪だ。そうしてのを絞っていき、芙蓉を自分で真相に気づかせようとする。嫌だ。

「そういえば、お祭、どうなったのかしらねえ?」

紅倉は、意地悪だ。

「祭はやっぱり今日の開催に変更されていたそうです。本当は大晦日の予定だったそうです」

「ああ、やっぱり。計算上そうだろうなと思ったのよね。双子を予定日より2週間も長くねえ…、頑張ったわねえ……………」

「なんなんですか？ 産まれた赤ん坊と、祭と、なんの関係があるんです?」

「この村の人たちは、悪人には容赦なく残酷なのよ」

紅倉の冷たい金属のように固い声に芙蓉はゾツとした。

「悪人は男ばかりとは限らない。女の、こんな女は絶対許せない、という悪人だっているでしょう」

芙蓉は真相が見えてしまつて気が遠くなるのを感じた。

「この村、『手のぬくもり会』は、悪人をこれでもか、これでもかと苦しめた上で残酷な死を与えている。最期の最期まで、罪を責め、

苦しみを与える手をゆるめない。

女の極悪人には、

いったいどんな責め苦を与えるかしら？」

答えない芙蓉に紅倉はまた別のことを言った。

「秘祭ではないけれど奇祭と呼ばれるお祭があるわよね？ やつぱり稲作地域に多いようだけれど、奇妙、または奇怪なお祭と呼ばれるゆえんが、たいていは男性器や女性器をかたどった巨大なご神体を担ぎ出す、つてところで共通してるんじゃないかしら？ 誇張された生殖器は主に稲作の豊作を祈つての物でしょうね。年神さまの関連で言えば、うちの地元関係では『賽（さい）の神』っていう小正月の行事があるわね。やっぱり巨大な男性器のご神体を作って、昼間はその周りで子供向けのイベントをして、夜になると火を付けて燃やしてしまうのね。

これは道祖神のことらしいわね。道祖神も例によっていろいろくつついたり混ざったりしてよく分からない神様だけれど、『道』の字が女性器を『祖』の字が男性器を表すように、男女和合の神様なのね。夫婦で餅つきをしている絵なんてのもあるけれど、餅つきがセックスの象徴なわけね。これもやっぱり子孫繁栄の願いを込めた神様で、稲の豊作への願いと共通するのね。

これがオープンなお祭として盛大に行われるなら、おおらかにあげっぴろげで、微笑ましいんだけれど、秘祭として隠されると、別の意味が生まれて来ちゃうわよね？

この村では秘祭として、そのまま、行われているんじゃないかしら？」

「夜の祭には選ばれた者だけが参加を許されて、その他の者は決して見てはいけない、ということだったわよね？」

この村で奉られる年神は二柱。屋敷の神と土の神って言ったけれど、女の神と男の神っていう意味もあるんじゃないかしら？ 土の男神が屋敷に上がってきて女の神と和合する。そういう意味じゃないかしら？ あの小屋はお飾りでしようけれど、明日には火を放って夜の間に行われたことの証拠隠滅、という行事なんじゃない？
これが形だけの神事ならいいけれど、ここ地下には本物の神様がおわしますからね、神が真似事の神事を行うっていうのもお笑いよね？

……祭に参加するのは村の若い男たちと、

拉致されてきた、許されざる罪を犯した女、

なんじゃないかしら？

夜の秘祭で行われるのは、

神憑きになった男たち集団で行う、女性への種付けよ。」

芙蓉は背筋が寒くなって気持ち悪くなった。

しかし紅倉の語る悪魔の所業はまだ続く。

「それは、悪質な交通事故で親子三人を殺した大学生に対する執拗な交通事故被害と同じ、罪を犯した女への情け容赦ない残酷な罰なのよ。女性が、一番傷つく責め苦が何か、分かるでしょう？」
「考えたくありません……………」。

許されるんですか？ いかにもひどい許されざる罪を犯した人でも、

女性が、そんな目に遭わされるなんて……」

芙蓉は義憤に燃えて言ったが。

「この村の人間は悪人には情け容赦ないと言ったでしょう？　それは、罪人が男だろうと女だろうと、差別はしないわ」

「でも………」

芙蓉は胸がムカムカと気持ち悪く、なんとか正当な反論を試みる。「いかに理由があろうと、やっていいこととは思いません。それなら、いつそ殺される方がずっとましです」

紅倉の横顔は、しばらく何も言わなかった。

「この村には近親相姦を防ぐための新しい血が必要。罪人とはいえない外の女は貴重な母体になるわ。」

彼女には子供を産めばその子供の母親として生かしてやるとでも交換条件を提示するんでしょうね。女の罪人は、子どもを妊娠してしまっただけには命が助かるために子供を産んで母になるしかない。しかし、疑惑を抱くでしょうね。本当だろうか？、と。本当に子供を産んで、その母親として生かしておかれるのだろうか？、と。

複数の男たちにレイプされて、子どもの父親が誰かなんて分かったものじゃない。そんな子供を産んで、自分がその子を愛せるとも思えない。子どもを愛せない母親を、あんなひどいことをした村の人間どもが、生かしておくだろうか？、と。

だからあの双子の母親は、殺されたくない一心から、産むのを我慢し続けたんでしょうね。双子を予定日を大幅に越えてお腹に入れ続けるのは相当に苦しかったんじゃないかしら？

しかし、とうとう赤ん坊は産まれてしまった。

その夜、

彼女の身に何が起こったのかしらね？

安藤さんはどうしても地下の神の穴へ入りたかった。入って、そこで確かめなくてはならないことがあった。でも神の穴への入り口は嚴重に施錠され、どこも入れなかった。一つだけ、神の穴に通じている別の穴があった。それがあのガス穴。ガス穴を安藤さんは自分で見つけたのかしら？ おそらく、木場田さんでしょうね。木場田さんは村の案内を引き受けながら、実は安藤さんを見張っていた。と言うのも表向き。本当は今の村のあり方に不満を持っていて、それを変えたいと思っていた。しかしそのためには強烈なきっかけが必要だ。そう考えた木場田さんはこれを千載一遇のチャンスと見て、安藤さんに実は…と自分の考えを明かし、協力を求めた。安藤さんにわたしへの葉書を用意させ、どうしてもわたしをこの村に引っ張ってきた木場田さんは、安藤さんに安藤さんの入りたがっている神の穴への別ルート、ガス穴の存在を教えた。安藤さんはまんまとその罠にはまり、自ら地獄の入り口に入っていく、そこで倒れた。

さて。

安藤さんがそうまでして確かめたかった物、それは、

赤ん坊を産んだ母親のなれの果て、

だっ たんじやないかしら？

出産は、子どもの父親たち全員を集めて公開で行われたんじやないかしら？

さあおまえたち、おまえたちの子供が産まれるぞ、この子の父親として、村の大切な財産として、大切に育てていくんだぞ、という誓いの儀式として。大勢の男たちを集めて公開で行われていたから

安藤さんも外から覗く隙があつたんじゃないかしらね？

そして子供を産んだ母親を、さっそく、『神の穴』へ、『神への供え物』として、運び去つたんじゃないかしら？

その時点で母親はまだ生きていたんでしょね。殺されていたらくらい安藤さんの好奇心が強くても村を抜け出して警察に110番通報していたでしょうからね。

子供を産んだばかりの母親を男たちが集団で別の場所に運び出す奇妙な光景を、安藤さんは理解できず、古い村の珍しい風習とでも思つたんじゃないかしら？ あまりに奇妙で理解できない出来事に出くわすと、人間は自分の最大限常識の及ぶ範囲で無理やりでも納得したがるものじゃない？

安藤さんは、

いったんそう思つたものの、やはりその異常さにおかしいと思ひ、その真相を突き止めようとした。

村に旅行雑誌の記者を装い滞在し、いろいろ嗅ぎ回つたんでしょね。

産まれた赤ん坊は母親ではない別の若い女性が面倒を見ている。

実の母親は地下に連れて行かれたきり戻つてこない。

その母親がどうしているのか？、

どうしても確かめたかつたんでしょね。

結論を言つとね、

わたしはあの地下で、地下中に張り巡らされた水路の水に触れたけれど、その母親である女性の存在は感じなかつたわ。

神の『お供え物』にされた女性は、

神に食べられちゃつたんでしょね」

芙蓉はきつく紅倉を抱きしめた。今は芙蓉の方が震えていた。震える声で、怒りに声を震わせ、芙蓉は言った。

「ひどい。あまりにもひどい。」

それは、人間に許される行為ではないわ」

「甘いわね」

紅倉の言葉に芙蓉はビクツと震えた。

「おそらく、現在の村の子どもの数を考えると夜の秘祭が実際に行われることはそうそうないでしょう。けれど、村の血を健康に保つために、必要なこともある。おそらく今大人になっている人の中にもそうやって生を受けた村人が何人もいるんじゃないかしら？ けれどその人の存在は悪ではない。この村は悪を行った者には情け容赦なく厳しいけれど、そうでない者には、とても優しいのよ。秘祭はタブーではあるけれど、村人には公然の秘密。実の母親のいない者にとつてもね。村で子どもたちには『悪は絶対に許されない』と地獄の残虐さを例に徹底して教育される。悪人の母から産まれた者は、自分自身の善を証明するため、悪に対しては他の村人以上に苛烈に当たる。その悪を犯した者が女性でも、率先して、天罰を与えようとするでしょうね」

「何が天罰ですか！！」

芙蓉はついに悲鳴を上げるように言った。

「そつやって自分と同じ、呪われた、母親のいない子どもを生み出すんですか!？」

「男子正統」

「え?.....」

「男尊女卑、とも違うんでしょうけれど、この村ではおそらく、伝統的に男性こそ正統であるという考えが伝統的に強いんでしょね。だから、どの母親の腹から産まれてきたかということは、その人の評価の上で、あまり考慮されないのよ」

「ガーン.....、と、芙蓉は頭が真っ白になるようなショックを受けた。

「そついうことだったのか.....と.....」。

悪魔のイメージーションを持つ紅倉はこう結論づけた。

「この村は狂っているのよ、根本的に、ね。」

86 捧げ物の運命

「麻里はケイさんの体を夜の秘祭の供物として男たちの慰み者にするつもりでしょうね」

「まさか。ケイさんにまったくそんな罪はないじゃないですか？」

「そうね。もう大義もへったくれもないわね。それをやればこの村に正義は完全にないわね」

「だったらやっぱり」

「大義だの正義だの、もうどうでもいいのよ。村は今それを捨て、変節しようとしている。村人一人一人、特に若い人たちの本音は、そんなもの、うんざりしているのよ。そんなうるさいことを言う邪魔者は排除して、自分たちの新しいライフスタイルを手にしたいのよ、力を持つ者の当然の権利として」

「……自分たちがどんな汚らしいことをしているかという意識はないんですか？」

「人間は常に理屈を考えて自分の立場を正当化しようとするものよ。自分たちに利益があることをして、自分は悪だとは決して考えないせいぜい、必要悪、としかね。戦争状態でどんなひどいことをしても、勝者の戦争犯罪が裁かれることはない。」

ケイさんを餌にすればわたしが出てくるのを麻里は知っている。

勝てば官軍。わたしは、村の輝かしい未来をぶちこわしにする敵だから、悪なのよ。

今夜行われることは、明日になれば火をくべて、灰にして、はい、おしまい。

村は昨日までのことをきれいさっぱり忘れ去って、新しい清潔なライフスタイル、価値観、未来を、歩み始めるのよ」

「じゃあ……先生も、ケイさんも、結局殺す気なんですか？」

「そうでしょうね。村の秘密の儀式……呪殺は、ただの仕事になって、村は外の社会に開かれ、内部で近親相姦をくり返す必要も、罪

人をレイプして子どもをはらませる必要もなくなる。わたしたちの死体は神に食わせるか、手を組んだ公安の手を借りてどこかに運んで哀れな強姦殺人の犠牲者として処理するか、どっちかでしよう」

芙蓉は自分のため息に嫌な臭いが混じっているのを感じた。

「そこまで……、この村は狂っていますか？」

「自分たちしか見えていない、と言うより、自分たちが見えていないのかしら？ 外から見て自分たちがいかに異常かという視点をまったく持っていないのね。」

ま、それについてわたしもちょっと反省しているけれどね。

この村は神の霊波に支配されている。その神をいじめて怒らせちゃったから、村人たちの精神状態をそこまでハイにしてしまっているんじゃないかしら？ しくじったわねえ……」

芙蓉は、紅倉はきつと全然反省などしていないのだろうと思った。芙蓉はケイとミズキを見捨てたことを深く後悔した。こんなことになるなら意地悪しないで助けてやれば良かった……それも自分の利益のための反省か……。

紅倉が小さな声で言った。

「嫌われちゃったかな」

「え？ 何がです？」

「ずいぶんひどいことべらべらしゃべっちゃったから。物には言い様ってものがあるわよね？ あーあ、わたしも神の毒気にやられちゃってるのかしら？」

「それは言えますね」

「ほら、わたしって感覚で思いついたままぺらぺらおしゃべりしちゃう癖があるじゃない？ あんまり考えてしゃべっているわけじゃないのよね。だからねえ、ほんと、気分なのよ。村の人たちが本当にそこまで狂って、独善的にひどいことをする人たちかっていうと、そうでもないと思うのよね。テレビだってちゃんとあるんだから。」

今現在の気分なのよ。今村は集団ヒステリーを発症する直前の状態になっていと思うの。その暴発が恐ろしいのよね。出来ればそん

なひどいことを起こさずに済ませたいんだけれどねえ……」

紅倉は芙蓉の腕に頭をもたげ、ふうーん……、と考えた。

「ペンションに電話して」

「はい」

芙蓉は傍らに置いた携帯電話を取り、ペンションもみじに電話した。

『もしもし……』

元気のない声で、奥さんの里桜さんが出た。

「芙蓉です。えーと……」

「広岡さん」

「広岡さんを出してもらえますか？」

『はい。少々お待ちを』

しばらくして。

『もしもし。広岡改め信木です』

信木カウンセラーが出た。

『先ほどジョン君が帰ってきましたよ。あなた方の部屋に上がって何やら持ち出したようですが、紅倉さんは無事見つかりましたか？』

紅倉が芙蓉から電話を受け取って話した。

「はいはい。ピンピンしてますよー」

『おや紅倉さん。そうですね、それはけっこう。わたしに用ですか？』

「ええ。あなた、村長さんに交渉権をお持ちなの？」

『村長権限の代行を任されています』

「それはちょうどいい。では、ケイさんを夜祭りの捧げ物にするのは中止してください」

『ケイさんを？ どうしてそんな馬鹿なことを？』

「そういう馬鹿なことをする状態に村はなってしまうているんです。あなたも、気を付けて交渉してくださいね？」

『ご忠告どうも。もちろん、ケイさんにそんな馬鹿なことはさせません。……祭の内容は、ご存じでしたか？』

「分かつちやいました」

『お恥ずかしい。嫌な風習です。改めたいが、わたくしどもには必要がありますので』

「はいはい。とにかく、ケイさんのことは、くれぐれもよろしくお願いしますよ?」

『分かりました』

「と、あなたが約束してくれても不安なのよね。それを先導しているのは麻里ちゃんでしょう」

『……麻里、ですか……』

「あなたの言うことなんて聞いてくれないでしょう?」

『でしょうねえ、残念ながら』

「だからね、麻里ちゃんに伝えてちょうだい、わたしがリベンジしたい、って」

『はい。……』

「そうね、ちよつとお腹が空いちやったから、2時間後に、同じ場所決闘を申し込むわ」

『2時間後。8時ということでしょうか?』

芙蓉はディスプレイの時刻を覗き見てうなずいた。6時までまだしばらくあるが、先生には出来るだけ長く休んでもらいたい。

「はい、けっこうです。ではそれまでにあなたも村の幹部たちと話をまとめてください。……英国紳士の良識に期待しますよ?」

『はっはっは。では、英国紳士の名に恥じぬよう良い結果に導いてみせますよ』

「よろしく。じゃ」

電話を受け取った芙蓉が訊いた。

「平中さん、相原さんはどうしてます?」

『ご無事ですよ。妻と仲良くやっていますからどうぞご心配なく』

「そう。では」

芙蓉は通話を切った。紅倉に注意する。

「信木は信用できません。先生に対しても何か企んでいるかも」

「信用してませんがね、最初から。じゃあ……、信用できる人に相談してみましようか？」

「誰です？」

「もう一人のカウンセラー、易木さんに電話して」

87 助っ人

芙蓉が易木寛子に電話しようとする、ガサガサッと緑を踏み分け、ジョーンが帰ってきた。

ジョーンは畳んだ毛布を背負い、口に取っ手をくわえて芙蓉の大型の旅行ケースを丸ごと運んできた。

「まあ。さすが大型犬。役に立つわね」

毛布はバスローブのベルトで腹に結わえ付けられていた。平中が結んでくれたのだろう。

「ありがとう。はい、あっち向いて」

芙蓉は紅倉をヌードにすると毛布を頭から被らせた。旅行ケースにはいざという時さっさとずらかれるように荷物を全て戻してある。芙蓉は紅倉に新しい下着を着せ、懐中電灯で照らして改めて体の傷を調べた。出血を伴う傷はないが、どす黒い痣とケロイドだらけで、さっきの話といい、芙蓉は村に対する殺意をめらめらと燃え立たせた。しよっちゅうあちこちぶつけて青あざを作っている紅倉だが、これはまるつきり怪我の種類が違う。

「お薬塗ってあげますね」

医療用のクリームをたっぷりほぼ全身に塗ってやり、青く腫れているところにべたべた湿布を貼り、包帯を巻いてやった。その間紅倉には非常食のチョコレートを食べさせた。

「先生。くれぐれも、もう無茶はしないでくださいね？」

芙蓉は悲しくなってしまうて湿った声で言った。

「はい。ごめんなさい。次で、おしまいにします」

「……………」
紅倉はまだやる気だが、芙蓉は我慢して黙っていた。鈍い紅倉が、自分の体の状態を分かっているのだろうか、と怖くなってしまふ。

一応手当を終えると、いつも白がトレードマークのような紅倉だが、夜の保護色として黒のパーカーを着せた。フードを被れば銀色

の髪の毛も隠れて狙撃からも身を隠せるだろう……気休めだろうが。芙蓉は自分も黒のジャンパーを着た。

芙蓉は紅倉と並んで腰かけ、二人で毛布に体を包み、携帯を易木の携帯電話につないだ。

しばらく待たされて、易木が出た。

『はい、もしもし』

『もしもし、芙蓉です』

芙蓉は紅倉に渡そうかと思ったが、そのまま二人の間に携帯を挟み、顔を寄せ合って、訊いた。

『信木カウンセラーの奥さんはご存じですか？』

『奈央さん？ ええ、知ってますが？』

『丸顔で目の大きい、ミュージカルスターみたいな人？』

『ええ。そうです。奈央さんが、何か？』

『奥さんは銃の扱いに慣れている？』

『銃ですか？ さ、さあ……存じませんが。あの、どういうことでしょうか？』

易木は驚き、戸惑って尋ねた。その声の調子は演技には思えない。

『奥さんは村の出身ではないですよ？ 信木カウンセラーとのなれそめは？』

『……奥さんも……、若い頃事件の被害に遭われて……、そのカウンセリングに当たったのが信木でした。その縁で……』

『奥さんも『手のぬくもり会』のシンパということね？』

『あの？……』

『平中さんと小学校の先生が人質に取られているの。奥さんに、おそらく拳銃で見張られて』

易木の声が性急に問うた。

『学校の先生って、まさか、相原先生？』

『ええ』

もう一人男性教師がいるはずだが、祭会場で見たのかも知れないが芙蓉の記憶にはない。易木はひどく慌てた様子で恐ろしそうに言

った。

『いったい相原先生が何故？ 村でいったい何が起きているんです！？』

芙蓉は皮肉を込めて言った。

「クーデター、だそうですねよ？」

『クーデター？ ま、まあ……、なんてことでしょうか……』

「信木カウンセラーってどういう人です？」

『信木さんは、とても熱心な、尊敬できるカウンセラーですよ？』

ま、まさか、信木さんがクーデターなんて恐ろしいことを？」

「いえ、それは青年団の木場田団長が」

『そ、それで、人質って、小学校ですか？』

「いえ、ペンションもみじです」

『あつ、ああ……、そ、そうですね……。ああ、まあ、どうしましよ……』

芙蓉には小太りの易木が額にびっしょり汗をかいているのが目に見えるようだった。

『あ、あの、信木さんの奥さんがどうして相原先生を人質に取らなければならぬんです？』

「わたしたちといっしょに村から逃げ出そうとして、相原先生は木場田の恋人だからです」

『相原先生が木場田さんの恋人？ そ、そうだったんですか……』

易木には一々驚きの連続であるらしい。

「平中さんと相原先生を助け出して村を脱出したいんですが、協力していただけます？」

芙蓉は果たしてどうだろうか？と易木の答えに神経を集中させたが。

『ええ。もちろんです』

易木は迷うことなくあっさり答えた。

『どうしたらよろしいですか？』

「安藤さんが実は信木さんに救出されて名古屋の個人病院に入院させられているんです」

『えっ？ 安藤さん、生きてらしたんですか？』

「ええ、そうなんです。最初から分かっていればわたしたちも村に来る必要はなかったんですけれどね。でも信木さんはどの病院か教えてくれないんです。病院、分かりますか？」

『え、ええ…。心当たりはありますが…。あの…』

「では安藤さんの安否を確認して、安全を確保してくれませんか？ 易木さん、今どちらです？」

『村の…、外です』

「ええっ？」

今度は芙蓉が驚かされた。

「村の、どこにいるんです？」

『ペンションへの道の途中に。あの、わたし、やっぱり心配で、こっそり様子を見に帰ってきたんですけれど、なんだか様子がおかしくて、きつとあなた方をなんとかするためだろうと思って、心苦しくて、村には入れずに途中で様子を見て…。、村長さんや助役さんに電話してそれとなく様子を訊いてみたんですが、なんだか答えをばぐらかされてしまって…。。ああ、どうして、どうなってしまっているの？』

「落ち着いて。信木さん、保安官なんでしょ？ 彼が村の状態を回復するため動いているはずですよ。ただ、わたしたちはもう村には関係したくないんです。易木さん、車で来てるんですね？」

『ええ』

「では、… 1時間半後」

今時刻は6時ちょうど。

「いえ…。7時50分に、ペンションの側にそっと車で来てくれませんか？」

芙蓉は出来るだけ長く紅倉を休ませたかった。

『分かりました。それで相原先生と、平中さんに乗せて脱出するんですね？』

「そうです」

『あなたと紅倉さんも一緒に?』

「出来ればそうしたいですが…」

芙蓉は紅倉を見つめた。紅倉は首を振った。

「…わたしたちは別ルートで。とりあえず二人の安全の確保をお願いします。出来ればその足で安藤さんの病院へ」

『分かりました。そうします』

芙蓉は易木が協力的なのでほっとした。この人は純粹に村の正義を信じているのだろう。

「易木さん」

紅倉が話しかけた。

『ああ紅倉さん? 为什么呢?』

「2週間前、安藤さんはあなたをつけて、出産の現場を目撃したんです」

『えっ! ……』

易木のシヨックは大きいらしく、長く沈黙が続いた。ようやく。

『そう……だったんですか……。見られていたんですか、あれを、安藤さんに……』

「あなたも、立ち会っていたんですね?」

『はい。』

「……そうですか。」

相原さんは美貴ちゃんがきつと助け出してくれますからご安心を。その代わり、後のことはよろしく願いますね?」

『承知いたしました』

「夜祭りが行われるのはどこですか?」

『南の、墓地の奥……山側の社です』

「まあ悪趣味。分かりました。それじゃ、平中さんをお願いします。紅倉の用が済んだようなので芙蓉は、

「では、7時50分に」

と確認して通話を切った。

「易木さんがこちらに来ていてラッキーでしたね。ずいぶん相原先

生のことを気にしていたようですが、やはり相原さんがこの村に来た裏で易木カウンセラーが動いていたんでしょうね？」
「そうですね。」

「……虫の知らせ、かしらね」
「何がです？」

紅倉は肩をすくめた。

「易木さん、独身でしょうね。相原さんを自分の娘のように思っているんじゃないかしら？」

「なるほど、そうかも知れませんね」

「うん。」

紅倉はくたつと体を芙蓉に預けてきた。

「美貴ちゃん。出発まで休ませて」

「ええ」

芙蓉は紅倉の体を抱き寄せ、頭に頬を寄せた。

「無理……しないでいいですよ？」

「もう一頑張り。あの悪魔っ子、うんときついお灸を据えてやらなきゃ」

「そうですね……。少し眠ってください。もう少し余裕がありますから。信木が帰ってくるとやっかいです。多分先生が麻里と決着をつけるまで村にいるでしょう」

「うん」

紅倉が静かになった。眠ってしまったら、このまま自分も動かさず、ケイも、平中も相原先生も見捨てて、自分と先生と二人だけで逃げてしまおうと思った。

「駄目よ、美貴ちゃん……」

紅倉が寝言のように言った。

「何がです？」

「……………」

紅倉は答えず、静かに寝息を立て始めた。

「信用なんてされたって……、裏切るんだから……………」

芙蓉はぼろりと涙をこぼすと紅倉の頭をかき抱き、口づけした。
ぼろぼろと、悲しくてならなかった。

88 二つの集団プラス2

信木カウンセラー……今は信木保安官が下りてくると、村は静かさを取り戻していた。ただし、表面的な静けさの下に、激しい感情の鬱積がわだかまり、どろどろとした澱みをいくつも内包していた。城塞にも似た屋敷に村長がいる。そこに青い顔をした助役と、助役の弟の小学校校長が詰めて、表の様子をせわしなく、こわごわと覗いている。

広場に青年団が集合している。団長木場田と、彼をリーダーと頼る村の主力を担う若手の自警団たちだ。彼らは神の肉を食い、一時的であるが神通力を得ている。自警団は男性で占められている。女が神の肉を食らうとおかしくなってしまうと言い伝えられている。祭の年神の小屋の前に篝火が燃え、男たちの顔を赤く照らし出している。彼らは黒木たち資材調達班討伐命令が村長から出されたものではないと知り、どういうことなのか？とリーダー木場田に不審を持ち、問い詰めている。その答えに説得される者、反発する者、青年団はしばし結束を乱し一つにまとまっていけない。

広場の隅に公安の黒服が二人いた。リーダーの日本太郎を名乗る40代ののっぺりした中年男。もう一人は眉骨の飛び出た、プロレスラーのような大男だった。目が落ちくぼみ、何を考えているのか伺い知れないが……何も考えていないようにも見える。

年神の小屋の1階に、わら人形と並んで、むしろを掛けられてケイが寝かされていた。なんだか土左衛門みたいだ。

役場の半鐘が鳴らされて以降、村の表に非戦闘員の姿はない。興味深い光景ではあるが

信木は暗い夜道から広場の赤い篝火の届く空間へ歩み出た。

「あっ、広岡さん」

近くの青年が気づいて声を出し、皆が信木に注目した。信木は軽く手を上げて挨拶し、皆に取り囲まれるようにしている木場田に近

づいていった。

「広岡さん……」

なかなか皆をまとめきれない木場田はばつが悪そうな顔で信木を見た。

「今は信木保安官ということで、よろしく。……黒木君たちは、ケイさん以外、皆、殺したんだね？」

「ええ……」

「君たちの被害は？」

「久野木と木村が殺られました。茂手木が重症です。それと、木猿が戻ってきません」

「久野木君と木村君がね……。うん……。そうか。では今いるのは……」

「茂手木と木猿を除いて、13人です」

「うん。……あ、君たち」

信木は青年団皆を見渡して言った。

「君たちは村の現在と将来を担う大事な村人だ。これ以上の身内の争いは避け、自分たちを大事にしなさい。いいですね？」

「はい」と、青年たちは口々に返事をした。保安官に従順な団員たちに木場田は面白くない顔をした。

「木場田君」

呼びかけられ、木場田はさつと信木を見た。

「村のこれからについて村長と話しに行こうじゃないか？」

「ええ……」

木場田はまだまとめ切れていない団員を心残りそうに振り返りつつ返事した。そこへ。

「あっああー。ちょっと待ってくれないかな？」

公安日本太郎がのっぺりした顔をニコニコさせてやってきた。プロレスラーのゴリラ大男はぼうつと突っ立ったままだ。

「実はうちの者も一人出てこなくてね。人見知りする奴じゃないんだが。どうやらそちらのお猿さん？といっしょだったようだね」

スナイパーと植物使いの能力者だ。芙蓉に斜面へ放り出されて、

連絡がないということやはり相当の重傷を負って動けなくなっているらしい。日本太郎は。

「まあ、脱落者はいいや。死して屍拾う者無し、つてのが我々の身上でね」

「こちらの情報では村に入った公安は4人のはずだが？」

木場田が不審を露わに問いただした。しかし日本太郎はふやけたポーカーフェイスでとぼけて言った。

「いいや。村に潜入しているのは3人だ。もちろん俺も含めてね。今回『祝殺』なんておっかねえ物を相手にするんで外部にオブザーバーを頼んだ。そいつのことだろう？ そいつはあくまでオブザーバーで、現場には来てないよ」

木場田は怪しんだが、日本太郎は笑顔を作って上機嫌で威張った。「それより、一番手強い若造を仕留めて女をさらってきたのはこの俺だぞ？」

信木はしらつとした目で公安を眺めた。

「ミズキが、一番手強かったかね？」

日本太郎はニヤニヤしながらいやみやみつたらしく言った。

「ああ。他はみんなひどくやられてぼろぼろだったみたいだぞ？

こいつら超能力戦隊だろう？ 死に損ない相手に二人も殺られるとは、ちょっと、かつこわるいねえ？」

団員たちはギラツと敵意を込めて公安を睨んだ。このまま能力でくびり殺しそうな目つきだ。信木がまあまあと若者たちを抑えた。

「それで？ なんなのかね？」

「村のこれからを話し合うなら、是非俺も仲間に入れてほしいねえ？ 村の将来は、我々抜きには決められないだろう？」

木場田が、

「わたしもその方がいいと思います」

「といい、日本太郎は満足そうにニンマリした。

「だそうですね、保安官殿？」

信木は眉を上げ、細い目になった。

「いいでしょう。わたしも公安さんには物申したいと思っていたからね」

「さてさて、なんでしょうなあ？」

日本太郎はニヤニヤし、さ、と手で促した。

「参りましょう」

木場田がチラツと信木の顔色を窺うようにして歩き出した。

「おい、団長」

村長宅へ歩き出した背中に団員から呼びかけられた。

「ケイは夜祭りの祭壇に運ぶんだろ？」

振り返った木場田は団員たちの目がガラツと濁った色を帯びたのを見てギョツとした。

「ああ、それなんだがね」

信木が手を上げ、皆を制して言った。

「夜祭りは取りやめだ。ケイさんを神への供物にする話は無しだ」
どよつと、団員たちの間に声にならないどよめきが起こった。

木場田に呼びかけた、ケイを担いでここまで運んできた男が言った。

「信木さあ〜ん。無しつてのは…、無しでしょう？ 俺たち二人も仲間やられて、怪我人も多い。今さら無しつてのは…、ちよつと、納得行かねえなあ〜？」

信木は不愉快そうに眉をひそめた。

「夜祭りとは、そういう意味合いで行われるものではないよ？」

しかし男はニヤニヤ揉み手をしそうな感じで言った。

「そりゃあ分かってますよ。大事な神事だ、神さんに捧げるねえ？」

あーあ、神さんだつて、楽しみに待ってんのになあ〜？ 俺ら神の肉いただいて今神さんとながつてるから神さんの気持ちがお〜く分かるんだよなあ〜？ なあ？」

他の青年たちはあからさまには賛同しないが、不満を持った目で木場田に『どうなんだ？』と回答を迫った。木場田は苦り切った顔

でちらりと信木に視線を振った。場の雰囲気眺めて日本太郎が白々しく訊いた。

「夜祭りつてのは盆踊りみたいなものとは違うのかい？」

木場田は、

「秘祭だ。参加者以外には見せられない」

と不愉快そうに言い捨てた。

「ああそうかい」

日本太郎はたいして興味もなさそうに視線を外しながら嫌らしく笑った。ど田舎の夜の秘祭など、やることの見当は付く。彼は発言した男が女を担いで山を下りる道すがら「ちくしょう、重えなあ。傷に障るぜ」と愚痴を言いながら密やかな手つきで女の太ももや尻を撫で回していたのを知っている。

「なあ、団長、どうすんだよお？」

男は騒ぎ、周りからもボソツと、

「そうだな。神さんの収まりがつかねえやな」

と囁かれ、

「その気になっちまってるんだ、今さら中止したら、荒れるわな」

「ああ、それが怖ええな」

と、次第に男の意見に乗ってくる声が多くなってきた。視線が木場田を責めるように集まる。

「夜祭りは中止だ。もうそういう話がついている」

信木保安官がぶれのないトーンで言い、青年たちは黙った。信木は彼らの承諾にうなずきながら、その目の内にくすぶる不安を眺め、言った。

「紅倉美姫との約束でね。麻里と決着をつけるそうだ。麻里のためにも、神の注意をそくような真似は慎みたまえ。そう……、決闘は8時の約束だ。夜祭りは深夜行うのが恒例だろう？ どっちにしろ、それまで大人しくしていたまえ」

「じゃ、じゃあさあ、」

ケイの体に触れている男がいぎたなく言い寄った。

「……麻里が勝つたら……、いいんですよねえ？……」

信木は白い目で青年を見つめ、

「その時は、麻里さまにお伺いを立てるんだねえ」と言った。

青年たちは「そうか、麻里が勝てば夜祭りはするんだな？」と期待するように確かめ合った。

木場田は、そんな仲間たちの様子に嫌悪感を持った。麻里に言われてケイや黒木たちを売った後ろめたさがそう思わせるのか。

木場田の心の揺らぎを鋭く察して、信木が言った。

「そうそう。紅倉の連れだが。平中という女記者と、それから、小学校の相原先生をペンションに監禁しているよ」

木場田の顔にギョツと驚きが走った。口を半開きにするのを眺めて信木は言った。

「わたしの妻が見張っているから大丈夫だよ。残念ながら、相原先生もいつしよに村から逃げ出そうとしてね。ま、やむを得ない」

青年団にざわざわと「学校の相原先生が？」と驚きと怒りの声が囁かれた。木場田は口をつぐみながら、頭の中を真っ青にして冷汗をかいていた。信木が言う。

「困ったことだ。ま、事態が落ち着いたら先生には村の再教育を受けてもらおう。彼女も、村の将来に大切な人材だ。一度の裏切りくらいで、抹殺してしまうのは惜しい。そうだね？」

信木は念押しし、青年たちが不承不承うなずくのを満足そうに微笑んでうなずき返した。

「さ、村長の所へ行こう」

信木が歩き出し、日本太郎と、木場田が続いた。入り口の階段にさしかかって、木場田は不安でならず青年団を振り返った。皆火の前に一つに集まって、何やら一つの意見にまとまっているようだった。

鬼木の婆が死んだと聞かされたとき、村長は、

「そうか、婆が、まかりおつたか」

と、ぼうぼうとした眉を沈め、ひどく寂しそうな顔をした。

大地震の後、裏の婆の家が潰れたと聞き、エレベーターを作動させた。電気が通じず動かなかった。しかし穴は塞がっておらず、こちらから人を使って婆たちの様子を見てこさせようとした。

実際は、村長の予感をはるかに越えた悪いことが起こっていた。

村長が気を急いでエレベーターにかかずらわっている間に婆の家の下から黒木たちがケイの体を連れて這いだし、村長にその知らせが来たとき、芙蓉、ミズキといっしょに姿を消してしまっていた。

婆が悪霊に殺されたと聞き、

見誤ったか……

と深く悔やんだ。

状況はよく分からない。しかし、ケイを動かして紅倉に余計な手出しをしたのが全てを狂わす原因になったと思う。

半鐘が鳴らされた。

地震で火事が起こったかと村長は思った。村の消防は青年団の仕事だ。しかしそれはあらかじめ村人たちに報せてあった夜祭りの準備に掛かる……戦闘を伴う非常事態令発動の合図だったと思い至った。呆けたかと自分の頭を疑ったが、自分はそんな命令は出していない。誰が勝手にと思っていたら助役が青い顔でやってきて、「たいへんなことになりましたなあ」とのんきに言いやがった。黒木たちの討伐が命じられたと言う。誰が？と思っていたら、当人がやってきた。青年団長木場田が、

「全て、任せていただきます」

と怖い顔で言った。村長と青年団長の睨み合いに助役はあたふたしていた。

「団長。いやさ木場田。何を企んどる？」

「村を新しく作り替えます。老いては子に従えと言いますね？ 従っていただきます」

村長と助役は軟禁状態となり、やがて黒木たちを全員討ち取ったと知らせが来た。かわいそうなことをしてしまったなと村長は思った。

やがて、木場田の反乱の後ろ盾となっていた者が現れた。麻里だ。「婆さまが死にました。ヨシおばさまも。メイコさんや成美ちゃんでは、神を制御するのに力不足ですわね？」

木場田と麻里が並び、企みが明らかとなった。

「村を、売る気か？」

再び木場田が、信木と公安「日本太郎」と共にやってきた。

「お婆さまは気の毒でしたね」

信木にお悔やみを言われて村長は少しほっとした。若者どもの欲求と、信木の人望と、どっちが上回るか？

「さて」

村長を上座に、助役と校長を並べ、向かい合って木場田と信木が並び、

出入り口の一番下座に公安を座らせた。保安官信木がこの場を仕切る。

「麻里ちゃんはどこですか？」

「麻里は離れに赤ん坊を見に行っておる。自分の妹にしたいんじゃない」と

「そうですね。ま、邪魔をしてくれなければそれでけっこう。なあ村長。」

まずは若い者の言い分を聞こうじゃないか？」

「この村の異常さが、あんたら年寄りには分からないのか？」

何故俺たちは生まれながらに人生を決められる？

何故自分の自由な生き方を選択できない？

外の世界では、みんな当たり前前に行っていることじゃないか？

何故俺たちだけが、決められた、こんな呪われた生き方をしなければならぬ？

俺たちは特別な要求をするんじゃない、日本国民として、当たり前前の自由と権利を返して欲しいだけだ！」

日本太郎がおかしそうにニヤニヤした。村長はぶ然として。

「おまえはこの村に生まれた意味が分かっておらん。」

確かに不自由だろう。不満もあるう。だが。

それはわしらこの村に生まれた者の先祖代々受け継いだ、義務じや。

わしらの生き方には、人の世に必要とされる理由があるのじゃ」

「その義務を引き受けるのが、何故我々でなければならぬ？」

不公平だ。

義務を引き受けるなら引き受けるで、応分の見返りを得るのが当然だろう？」

「報酬ならきちんと受け取っておるだろうが？」

「一生を村に縛り付けられて、なんの喜びがある!？」

俺たちが欲しいのは、俺たち自身の生きる喜びだ！」

「己を神に捧げ、必要とされる義務をまっとうしようという潔い生き方ができんか？」

「そんなもの、したくもない！」

俺は、

自分や、自分の愛する者のために、自分の人生を使いたいんだ！
この村には、その、俺の一番望むものが、ない！

俺は、この村での俺の生き方を、愛する人に誇れない！……」

「女か」

「そのどこが悪い？」

何故俺たちは、不幸を糧にしてしか出会えない？ 結ばれない？
何故、その人の不幸が前提でなければならぬ？

この村には……

幸せな愛が………無い………。」「

「堪えろ。我々村の人間にとって、愛とは、救ってやるものだ。
我々が望んで得るものではない」

「それが異常なんだよおっ！？」

俺たちの命には………、普通に男と女が愛し合っ………、愛が、こも
つてないじゃないか？

それが俺は、愛する人に恥ずかしい。

俺は自分の純粹な愛を、自分の子どもに受け継ぎたい。

村に、神に、子どもの人生や愛を、絶対に、握らせたくないんだ
！………。」「

「愛か……。わしらの世代には恥ずかしゅうてよう口にはできんわ。」

「そっだの…、
それを口にするなら、
もっと大きな愛を見んか？」

「自分の仕事が恥ずかしいだと？ 自分の命が恥ずかしいだと？
この、うつけが。」

「わしらは誰よりも立派な仕事をし、立派な命の使い方をしておる
ではないか？」

「わしらは必要とされるからこうして生きておるのじゃ！」

「それを誇りに思わんと、恥ずかしいとは、この、神に対する罰当
たりもんめ!!！」

「けつきよくそれだ！ 神だ！」

「大事な大事な神様にご奉仕して、俺たち人間など、ただの道具じ
やないかっ!？」

「俺は……………」

「人間であるために……………」

「神にだって反抗するぞっ！」

「貴一っ!!！」

「きさま、言つてよいことと悪いことがあるぞっ!!！」

「俺にも神の天罰を下すかあっ!？」

「何が義務だ！ 何が誇りだ！ 都合のいい美辞麗句を並べ立てて、
けつきよく、

「そっやって逃げられない力で支配してるだけじゃないか!？」

「俺たちは……………」

奴隷

だ！」

「……団長……」

村長と団長は顔を真っ赤にして睨み合い、どうやら年寄りの伝統的な価値観と、人権意識の目覚めた若者の広く普遍的な価値観は相容れないようだ。

「信木さん」

木場田は村長相手ではらちがあかないと信木に意見を求めた。

「あなたはどうです？ 外から見ていて、この村が異常だと思いませんか？」

信木はゆっくりうなずき、村長を見て話し出した。

調停者である信木保安官が話す。

「木場田君の意見はもっともだと思つ」

木場田は喜びに顔を明るくさせ、村長は逆に旧友の裏切りとも思える言いように顔をしかめた。

「なあ村長。本当にこの村の中だけで生きていた我々の子供時代とは違つ。我々大人世代だつて、この村を維持していくのに、ずいぶん無理な、やりたくもないことをしてきたじゃあないか？」

「それがわしらの義務じゃ。わしらだつて、ずいぶんと犠牲を払ってきたんじゃ……」

「そうですよねえ。だが、我々世代はそれを仕方のない義務として受け入れた。ですがねえ、我々大人だつて、若い子どもたちに我々が払った犠牲を、同じように払わせようというのは、辛いじゃあないですか？」

「だが、しかし……」

分かっていきますよ、と言うように信木は村長にうなずいた。

「木場田君。

外の話だがねえ。

外の世界だつて、テレビで見るとなような楽園ばかりが広がっているわけじゃあないよ？」

「分かってますよ、そんなことは」

木場田はまるきり子ども扱いされて面白くない顔をしたが。

「自由かね？ そつ……」

今の社会は個人主義が蔓延している。

自由、権利、自己責任。

社会の一員として社会を維持するために義務を担おうという意識は皆無だ。

外の世界の人間の無関心ぶり、無責任ぶり、自由放蕩ぶりは、

そりゃあひどいものだ」

信木の顔が豹変した。穏やかな英国紳士然とした顔つきが、目が三角に吊り上がり、隈取りのように深くしわが刻まれ、一瞬にして恐ろしい憤怒相になり、一同を唾然とさせた。

信木は視界が霞むようなどす黒い憤怒のオーラを放ち、口角泡を飛ばして激烈に言った。

「裁判なんてのは醜いものだ。

自分の非は決して認めず、

非は全て他人に押し付け、

自分の権利ばかり主張する。

弁護士は自分の弁護する極悪殺人者の被告を何が何でも助けようと、被告がいかに不幸な身の上で犯行がやむを得ないものだったか、厚顔無恥にも演出たつぷりのシナリオを用意して裁判官に長々と朗

読する。

自分の弁護する極悪殺人者を助けるために、被害者の人権をおとしめ、遺族を苦しめることも平気でする。

道徳や、良識や、良心などというものは存在しない。

あるのは、

己の利益を守ることのみだ。

それが権利だと言う。

わたしのせいではありませんと自己弁護をするばかりで、自分の責任を見つめようとする態度など、皆無だ。

裁判員裁判にも期待したが…、駄目だ。

世論なんて責任のない外野では

『凶悪犯罪に対する処罰が甘い！』

『極刑が当然だ！』

『裁判官の量刑は一般の感覚から乖離している！』

などと声高に叫んでいて、

だがいざ自分が裁判員として責任ある立場になった途端ころっと萎縮して、自分たちがさんざん批判してきた甘っちょろい量刑でお茶を濁しやがる。

どいつもこいつも、自分は責任を負いたくないのだ。

外の人間どもは、駄目だ。

自分、自分、自分、と自分を主張するばかりで、

他人の気持ちになんかお構いなしだ。

他人への思いやりなどないのだ。

他人の心の痛みなど、何ほどのこともない。

他人の心の痛みを思いやる神経が、現代人には退化して、無くなってしまうのだ！

他人の心など虫けら同様、幼児の悪戯のように踏みにじって、平気で笑っている。

イジメなんてことをやる餓鬼どもはみんなそうだ。

今の人間どもは、腐っている。

何が人間をそこまで腐らせた？

個人主義か。

原因などどうでもいい。だが、

対策は必要だ。

この数年、わたしはひどく忙しく、忙しさは募るばかりで、手を差し伸べてあげられない犯罪被害者を多数取りこぼしてしまった。

たいへん気の毒であり、申し訳なく思う。

わたしは我々のシステムを効率化する必要をここ数年、痛烈に感じている。

神の天罰を必要とする事件が多すぎるのだ。

わたしは、

この際、公安と手を組むのは良い選択だと思う。

「

村長は眼を剥いた。

「ノブ。おまえ、自分が言ってることがどういふことか、分かっておるんか！？ おまえ、それは、我々が先祖代々最も大切にしてきた、神の精神を、捨てるっちゆうことじゃぞ！！؟؟」

村長はテーブルに手をついて膝を立て、腕とあごをブルブル震わせたが。

信木の顔から剥き出しの憤怒は消えていたが、代わりにすっかり薄情な、冷徹な眼差しに落ち着いていた。

「確かに我々は不幸な個人のためが信条だ。だが、ここの世の中が悪くなって、理不尽な不幸が量産されては、社会そのものに対して厳しく当たらねばらちがあかないだろう？

今の社会には肅清が必要なのだ。

畏れを知らぬ我身勝手な個人主義者どもに、神の怒りを知らしめる必要があるのだ。

神への畏れ。それが今の社会に決定的に欠けているものだよ。

それを為すためにはもつと大きな組織の力が必要だ。

我々はその組織の一部となり、我々の仕事にだけ専念すればいい」

村長は額に寄つたしわをヒクヒクさせて言った。

「為政者に取り込まれその力となるのは、この村が、先祖代々決してしてはならぬと戒められてきたことではないか？」

「それは我々神の力が戦争の道具として使われることを戒めてきたのだらう？ 今は昔と違う。

国が割れて覇を争う時代はとうに終わった。

民主主義の時代だ。

我々も、もうとつくに変わっていても良かったのだ」

「ノブ……………」

村長は幼い時を自分の弟のようにかわいがっていた幼なじみの顔を恐ろしそうに見つめた。

張りつめていた糸がぷつぷつ切り切れ、背中を丸めてへたり込んだ村長は、ふと、2階の、こうした会合の時によくそこから覗き見していたお婆の姿を思い出した。

ひどく力のない声で。

「そうか。どうやら、わしにもう村を束ねる力はないらしい」
少し恨めしそうに木場田を見た。

「よかろう。それが村人の意志だと言うなら、わしも従おう。……
民主主義じゃからな」

「はっはっはっはっは」

パンツ、パンツ、と日本太郎が大喜びして手を打った。

9 1 麻里出陣

会談の成りゆきに日本太郎は大喜びして拍手した。

「いやいやどうして、あなた、保安官殿。あんたはいい。あんたなら我々公安部隊の隊長を任せてもいい」

「どうも、お褒めに与りまして」

信木はすっかり英国紳士の端正な余裕ある顔に戻って会釈した。

「では、我々がそちらと手を結ぶ場合、我々村民の身分は？」

「オーケー。信頼には信頼を。良い待遇を用意させますよ」

「そうした話は、具体的には誰と出来るのかな？」

「はっはっは。抜かりありませんな。それは、ことが落ち着き次第すぐに」

スツと障子が開いた。

「難しい話は終わりましたの？」

麻里が赤ん坊を抱いて立っていた。緋袴の巫女の装束に学校の紺のコートを羽織っている。

「この子をわたくしの妹にしてかわいがってあげることになりましたわ。ほら、かわいいでしょう？」

ピンクのネルにくるまれて小さな顔を覗かせた赤ん坊は、ようやく肌が張って赤ちゃんらしいかわいらしさを發揮してきたところだが、きよとんと丸く目を見開いて、泣き声も上げず、なんだかひどく怯えているように見えてしまう。

うふふ、と麻里はお姉さんらしく赤ん坊を揺すり上げて微笑んだ。

「ああ、麻里ちゃん。こんにちは」

「広岡のおじさま。こんばんは」

麻里は優しい笑顔のままちよこんと膝を曲げて挨拶した。

「ご機嫌だねえ？ 今晚はこのまま赤ちゃんたちの面倒を見ている

かい？」

「いえ。妹にするのはこの子だけ。あつちはこの子の肥やしよ」
上機嫌の悪魔が、双子の未来に何を企んでいることか。

「この子もわたくしの妹にするのはまだ先よ。殺してしまつてはもつたないもの」

麻里は部屋に入つてくると、

「はい、おじいちゃん」

と、すっかりおろおろを通り越して泥のように覇気を無くしてしまつている助役に赤ん坊を押し付けた。兄に押し付けられた赤ん坊を、小学校校長の弟の方がまだ元気に指で頬をつついて笑つた。

麻里は凝つた腕を振つてふんぞり返り、自分の下部のように見下ろして木場田に言つた。

「夜祭りはいつ始まりますの？ そうだわ、この子たちにも妹を作つてあげましょう。ケイママに五つ子でも産んでもらおうかしら？」

5人別々の父親の方が楽しいわねえ？」

木場田は思いつきり眉をひそめ、険悪さを制して信木が言つた。

「麻里ちゃん。夜祭りはないよ」

「あら？ なんですの？」

麻里は思い切り不興に信木も睨んだ。麻里の睨みに信木だけは平気で、子どもの我が儘をいさめるように言い聞かせた。

「麻里ちゃん。この村はもうそういうことをするのをやめにしたんだ。君も、女の子らしく普通に恋して、普通に男の子とエッチしてもいいんだよ？」

麻里は思い切り馬鹿にして笑つた。

「わたくし、他の女どものように男欲しさに盛つたりしませんの。

…もっと、楽しいことはいくらでもありますから……、男の体を使うにしてもね」

麻里の女子高生らしからぬサディスティックな恍惚の表情に信木もさすがに不愉快そうにした。

「ま、ほどほどにしておきなさいよ？ とにかく、今夜の秘祭は無

しだ。いいですね？」

「よくありませんわ」

麻里は真顔でぴりぴり怒りをこめかみに震わせて睨んだ。

「わたくし、ケイ姉さんがなぶり者にされるのを楽しみにしていませんよ？ 神もすつかりその気です」

「……………こういう奴が捧げ物にされるんだらう？…」

「はあ？ 何かおっしゃいました？」

木場田のボソツとした悪態を聞きとがめて麻里は睨み付けた。木場田は顔を背けて黙り込んだ。麻里はフンとあざけり、何か言おうと信木に顔を向けた。

「秘祭を行いたければ、紅倉美姫を倒したまえ」

麻里が眉をつり上げた。

「そう！、紅倉美姫。あの人も是非秘祭に参加させたいのですわ。ええ、もちろん、やつつけるつもりでありますわよ、殺さず、半殺し程度で」

信木は静かに麻里を見つめ、フツ、と馬鹿にするように笑った。

麻里の癪にカチンとさわった。

「広岡のおじさま。ちよつと、ム力つきますわよ？」

「紅倉と闘うなら殺す気で掛かりたまえ。ケイ君は、そうやって彼女を舐めて、敗北したのだらう？」

麻里は笑った。

「ケイ姉さんとわたくしをいっしょにしないでいただきたいわ」

「そうかね。わたしは、紅倉美姫に新しい神になつてもらいたいと思っっているんだがね？」

一同は驚き、麻里は目を吊り上げて恐ろしい顔になった。

「なんですって？」

信木は、麻里や村長から見れば不遜な態度で、言った。

「どうも我が神様は扱いづらい。紅倉はクリーンで、男神のように淫らな性癖もない。この際だ、神も新旧交代でいいと思うが？」

「紅倉が呪いの神の役割なんて引き受けるものですか」

「それは条件次第だと思っねえ？ 彼女も、基本的には我々と近い考え方をしている。神の理念から離れているのは、むしろ、この村の方だと思っがねえ？」

村長が、何を今さら、と言う顔をしたが、信木は目で制した。

麻里はキイーンとヒステリーを起こす顔になった。

「紅倉が・・・」

「力においても、

……紅倉は我が神に匹敵するんじゃないかね？」

麻里はあざ笑った。

「馬鹿を……」

いいわよ、見てらっしゃい、紅倉を祭壇に引きずり上げてやるわ。重くて運ぶのが面倒だから手足を引きちぎって、芋虫みたいにしておね！ そういう方が喜ぶ男もいるでしょう？」

信木はのんきに腕時計を見た。

「8時に、同じ場所で決闘を申し込むそうだ。『門』のことかな？ 向こうは君をこてんぱんにやっつける気満々だよ？」

「8時ね」

麻里はカツチカツチと振り子を鳴らす年代物の掛け時計を見た。

現在6時40分。

「まだあるじゃない……。いいわ、ママの所に行って軽くお夕飯をいただいてくるわ。搬入門から行くから鍵開けておいてくださいませね？」

搬入門とは、木材加工場の裏の炭窯の下のトンネルのことだ。神の水槽へ縄梯子で下りなければならぬが、そこまでの道は一番広くてきれいだ。

「了解した」

信木が請け負い、麻里はツンとした顔で出ていった。玄関の戸が閉まった途端、助役に抱かれていた赤ん坊が火のついたように泣き出し、呼応するように離れからも激しい泣き声が上がった。助役は驚き、慌ててよしよしとあやし、「兄さん、お貸しなさい」と校長

が受け取り、「おー、よしよし」と笑顔を作つてあやした。べろべろばあーという顔を真つ黒な瞳で見ながら赤ん坊はぎゃーぎゃーと激しく泣き続けた。

「いやはや……」

日本太郎が呆れたように言った。ぎゃーぎゃー耳に突き刺さる赤ん坊の聲が高い天井に響き渡る中、赤ん坊をあやす校長以外大人たちはしーんと静まり返っていた。

「訊くがね」

「なんですかな？」

信木が応えた。

「紅倉を新しい神に、つてのは、本気かね？」

「ええ。わたしはそうしたいと思つてますよ？」

「そうかい……。ま、それはあんたらが専門だ。俺は分からん。で？ どうなんだ？」

紅倉とあの麻里つて女子高生、どっちが強いんだ？」

村長が断固とした口調で言った。

「少なくともこの村の中で、麻里が敗北するわけがない！」

「ほう、そうかい？ じゃあ紅倉は負けるか？」

日本太郎はそれはそれで面白いかと感慨深い顔をした。

「万が一、万が一にもだ、

紅倉が勝つようなことがあれば……」

「勝つようなことがあれば？」

日本太郎が水を向けると、村長は恐ろしい顔で言った。

「あの女は、神だと、いうことだ。」

「ほおー、紅倉は、神、か」

日本太郎は面白そうに言い、村長がギロリと大きな目玉を向けると信木は、日本太郎と同じような笑みを浮かべていた。

「どちらが新しい神にふさわしいか、見物ですね」

92 男の不安

木場田はそわそわした様子で立ち上がった。

「それじゃあ話はもういいですね？」

「うん。ま、ということ、いいが？」

信木がのんきに見上げると、

「失礼します。仲間たちに報告してやりたいんで」

と木場田はその場の皆に一礼してきびきびした動きで部屋を出ていった。

見送る信木は細い目をして、口の端を歪めた。

玄関を出た木場田は高いところから広場を見下ろし、青年団の連中がまだ藁小屋の前に集まっているのを見てほっとしたが、ふと違和感を感じ、その原因が分かると階段を駆け下り慌てて集団の中に駆け込んでいった。

一人一人顔を確かめ、

「宝木、堀木、乗木、……は、どこだ？」

と訊いた。団員たちは、何を慌てているんだ？、と呆れた顔で

「しょんべんじゃねえか？ 腹へったって言ってたっけかな？」

と、どうでもいのように言った。木場田は一瞬カツとして、皆の視線を受けてハッと大人しくなり、

「そうか。ならいい」

と、視線を下げ、

「……仲間が二人もやられたからな、つい、不安になってしまった」と言い訳した。団員たちはうなずき、

「そりゃそうだ。こんなことが起こるなんて前代未聞だからな、不安になる気持ちは分かるさ。なあ？」

と口々に「そうだな」とうなずきあった。木場田はその様子を感じと観察した。一人が、

「それで団長？ 話し合いはどうなったんだ？」

と尋ね、皆興味津々の顔で聞きたがった。

「ああ。信木さんが代表して、村は公安と手を組むことになった」

「公安と？ おいおい、大丈夫かい？」

「信木さんがそれがいいと提案したんだ」

「信木さんなら外でいろいろ詳しいだろうし、村長より頼りがいがあるなあ？」

「そうだな、信木さんなら信用できるわ」

「そんで、俺たちの今後はどうなんだい？ 俺たちはどうやって生活していけるんだい？」

「それも信木さんがしっかり交渉してくれるから心配いらない」

「そうか、信木さんが。そりゃいいな」

それで？、それで？、と笑顔で聞きたがる団員たちに木場田は焦燥を募らせていった。

「まあ待てみんな。まだ今の一件が終わったわけじゃないぞ？ 麻里が紅倉と対決する。すべては、麻里が勝つてからのことだ」

いいな？と木場田は強い視線で皆に念押しした。

「ああ、分かってるよ。けど、ま、麻里が負けるわけねえからな」

「そうだな。紅倉美姫つてのはずいぶんとべっぴんだったな？ やっぱ生はテレビで見てるのと違うなあ？」

「ずいぶん小せえ顔しておったな？ やっぱ外人の血が混ざっておると違うのう？」

「芙蓉美貴も背えが高こうて、都会のおなごは出来が違うのう？」

あれもええ体しとるんよなあ？」

「麻里は紅倉倒して、どうするんじやろなあ？ 殺してしまうんじやろつか？」

「そりゃあもつてえねえのう？ 改心させて、村の一員にでけんかのう？」

「芙蓉に紅倉の命乞いをさせるちゆうんも手じやのう？ あれは女同士できてるんじやろつか？ 不健康じやのう？」

若者たちは嫌らしい会話に顔を火照らせ、木場田は胸くそ悪く思った。藁小屋の中のケイはまだ静かに寝かされている。

「とにかく、麻里の戦いの邪魔はしてはならんぞ。いいな？」

木場田は言いつけて団員に背を向け、広場を離れようとした。歩き出すと、

「団長。おまえ、どこ行くんじゃ？」

声を掛けられた。木場田はじりっと汗の浮かぶ思いで、背を向けたまま顔だけ後ろに反らして言った。

「神職んところだ。搬入門の鍵を借りにな。麻里はあそこから神の穴に下りるそうだ」

「そうけ。すらご苦労さん。なあ、団長」

「なんだ？」

「麻里によお、今の話、伝えてくれんかのう？ 頼むで」

「……分かった。言うだけ言うておいてやる」

木場田は道に向き直り、走り出したい気持ちをじつと我慢して歩き続けた。広場の篝火がとうに背中に離れても、じいっと、団員たちの目が自分に注目しているのを、自分も神の肉を食べている木場田は痛いほど感じていた。

神職の長官の家に向かうふりをして脇道に入り、家の陰に入ると木場田は走り出した。どす黒く胸が騒いでならない。神への畏れと掟にきつく結ばれていたモラルが、弛み、解けようとしている。その掟を破ったのは自分だ。しかし、それで仲間たちがこうなるとは思ってもしなかった。仲間たちのことも思ってしまったことなのに、人は秩序から解き放たれるところも己の欲望を露わにするものなのか？ 今村は悪い熱病に浮かされているようだ。神の天罰が、ことさらに自分に、落とされようとしている不安に足が震え、胸が悪くなってくる。

無事でいてくれ……、ゆかり……。

恋人、相原ゆかりは、自分を置いて村から逃げ出そうとしたと言
う。仕方ないと思う。そうして恋人を失いたくないから自分はこん
なにも必死になっているのだ。失ってなるものかと思う。それどこ
るか、万が一、彼女が傷つけられるようなことがあれば、

俺は……………。

決して自分が許せなくなるだろうと思う。それを恐れて、

木場田は必死で走り続けた。

激しく後悔していた、

紅倉を村に囲い込むため形だけでも年神祭をやるう、

と提案したことを……………。

木場田の背中を見送った広場では。

白い目で薄ら笑いを浮かべた若者たちは、

「ああは言ったが、ま、準備をしておくだけなら神さんにも障るめ
え」

と、いつせいに小屋を向き、中に眠るケイを見た。

93 別れを惜しむ

芙蓉が紅倉を連れ、ジョンを伴い枯れ沢を出発したのは7時10分、ガス穴の入り口に到着したのは7時30分だった。

「それでは先生、わたしはペンションに寄って平中さんたちを逃がしてからケイさんの所へ向かいます」

秘祭は村の南側の、墓地の裏の社で行われるそうだ。

「先生。絶対に、麻里をこてんぱんにやっつけて、ケイさんの所に来てくださいね？」

「もち。今度は絶対に負けないんだから」

「約束ですよ？ それじゃ、後ほど」

「バイバイ」

紅倉は手を振って不吉な黒い鳥居をくぐって穴に入ってしまった。

最初に来たときには恐ろしくて足が動かなくなってしまった場所だが、今はわりと平気でいられる。中にいたおぞましい赤い巫女を紅倉がやつつけたからだろう。

芙蓉は懐中電灯で紅倉の背中を照らしていたが、すぐに穴の陰の中に消えていった。

「行っちゃったわね」

声に呆れて隣を見た。姫倉美紅（ひめくらみく）、紅倉美姫の守護霊だと名乗る、ピアノの発表会みたいな白のスーツとスカートをはいた、10歳くらいの紅倉似の美少女だ。

「あなたまだいたの？ 穴を出てから姿が見えなくなったから先生の中に帰ったと思っていたわ」

「わたしはずっと美貴ちゃんについていたわよ？ 出番が無くて邪魔だろっから姿を見えなくしていただけ」

「あらそうだったの？ 都合のいい姿ね？ 先生に会えたのに戻ら

なかったってことは、まだ先生に命の危険があるということ?」

「この村を無事出るまではね、油断できないわ」

「それは言えてるわね」

芙蓉は暗い目で真っ黒な穴を眺めた。

……先生を、あのまま眠らせておいてあげたかった。

その結果ケイがどんなひどい目に遭わされようと……、先生は自分を怒りはしないだろう。ただ、心が冷えて、自分に笑顔を見せてくれなくなるかも知れない。それが辛くて、

「先生、時間ですよ? 起きてください?」

と、泣きながら起こしたのだ。

「さあ出発しますよ? 麻里って性悪女子高生をやっつけに行きましようね?」
と。

紅倉は重そうなまぶたを開けて、

「美貴ちゃん……。起こしてくれてありがとう」
と言ったのだ。

その言葉を聞いて芙蓉は、やはり起こすんじゃないかと深く後悔した。どんなに恨まれて、嫌われても、起こすべきじゃなかったと思った。

先生の力を信じよう。・・・と、思うしか芙蓉には出来なかった。

ジョンは芙蓉を見上げ不思議そうな顔をしていた。芙蓉が見えない誰かと話しているのが不思議らしい。芙蓉はあら?と思った。どうやらジョンには美紅が見えないらしい。洞窟の中でジョンが芙蓉に唸ったのは単純にケイとケイの認める仲間以外になつかないのと、その奥の禍々しすぎる靈気を感じてのことだったようだ。それでも犬が大の苦手の紅倉の守護靈である美紅はジョンの視線を避けて芙蓉の陰に隠れるよう移動した。

「犬、怖い……………」

「この子は大丈夫でしょう?」

芙蓉は美紅の肩を抱いてやった。はつきりした感触がある。芙蓉にはこの子が肉体を持たない霊体とはとても思えない。……妹にしまいたいわ……と思うくらいだ。美紅がジロツと芙蓉を睨んだ。「美貴ちゃん、不純」

「あら、未成年者に手なんて出さないわよ？ ……あなた、17歳の姿になれないの？」

「なつてあげない」

「ケチ」

芙蓉は微笑んで……、はあーっとため息をついた。

「行きましよう」

「わたしのことはお気遣い無く。またね」

美紅はパツと消えた。

「おーい、美紅ー。声くらい聞かせないの？」

しかし美紅の気配は皆無で、ハアツと強めの息を吐いて芙蓉は気持ちを切り替えた。

「行くわよ、ジョン」

芙蓉は軽く駆け足をした。冷たい夜気に体を温めるウォームアップだ。

芙蓉は平中たちの救出を軽く見ていた。

紅倉との別れを惜しんで時間を無駄にした以前に、紅倉の体を氣遣って時間の設定を遅らせたのが、芙蓉を悲劇の現場に合わせなかつた。

芙蓉がペンションに到着したとき、そこには既に血の惨劇が跡を残すばかりだった。

94 トラウマトラウマ

木場田は坂道を駆け上がり、ペンションの建物近くに来ると、辺りの様子、中の様子に神経を配った。

特に異常も見られず、そつと玄関に近づき、ドアノブに手を掛けた。鍵が掛かっていた。灯りがついていて、ガラスの内に人影はない。木場田は右手をノブに当て、むん、と力を広げた。鍵の機構を捉え、カチツ、と錠を外した。

ほつつと息をつき、ドアベルを鳴らさないように力で押さえ、そつとドアを開けた。抜き足差し足中に入り、ドアを閉めた。

閉じた空間の中でじつと気配を探り、よく知っている相原の霊波を捜した。霊波の発生は上の階に集中している。階段を上がりたい気持ちを抑えて1階の安全を確かめる。一瞬ギョツとしたのは……冷蔵庫か。霊気と強い磁場を発生させる物は混同しやすい。じつと動きがないか確認する間も上の霊波の揺らぎが気になってしょうがない。緊張はすごく感じるが、激しく動揺する差し迫った危機感はない。木場田は靴をどうするか迷ったが、そのまま廊下に入り、そつと音を立てないように気を付けながら階段を上がり始めた。

平中と相原先生は猟銃を持った海老原が見張っていた。2階の別の部屋で広岡……信木の妻が拳銃を持って海老原の妻と娘と一緒にいるはずだ。海老原は妻たちと一緒にいたが、海老原の変心を警戒した信木に許可されなかった。海老原は恨めしく思ったが、妻子を人質に取られては危険な行動には出られない。

平中はそんな海老原をなんとか自分たちの側に引き込められないかと思っただが、じいっと考え込んでしまっている海老原は、明るい快活な表情はすっかり無くなって、ひたすら暗く、世をすねた、デ

スプレートな顔つきで、入り口付近に椅子に腰かけ、膝の上に寝かせた猟銃を、ベッドに並んで座った女二人にいつでも向けられるように手を掛けていたのだった。

「おずおずと相原が話しかけた。」

「海老原さん……。わたしのことを、恨んでいるでしょうね。」

わたしは駄目な教師です。教師失格です。

わたしはけつきよくまた逃げ出してしまいました。

前の学校の生徒たちも……。やっぱり先生であるわたしに見捨てられたと思っっているんでしょうね……。

心に……。深いトラウマを与えてしまったと思います……。」

若い相原は生徒のモンスターペアレンツのクレーム攻撃に萎縮して、学級崩壊を引き起こしてしまった。生徒たちがそのストレスの中で、もしそのストレスを晴らす方向を同じクラスメートの一人に求めたら、本当のひどいイジメが起き、海老原の実の娘のような取り返しのつかない悲劇を招いてしまったかも知れない。

もし自分が海老原の実子のクラスの担任だったとして、その自殺を避け得た自信がない。

おろおろするばかりで、結局自分も自分の力のなさを言い訳に、海老原の怒りを買った学校の心ない対応と同じことをして、海老原に殺されていただろう。

相原自身、モンスターペアレンツのトラウマにひどく心を傷つけられ、すっかり自分に自信を無くしてしまっているのだった。

海老原は暗い顔で、視線を斜め下に向けたまま、ぼそつと口を開いた。

「逃げたりしないで……。きちんと謝って……。愛美のことを死んでも大切に覚えていてくれたら……。殺したり、大げがさせたり、ひどい目に遭わせたり、しなくても良かったんだ……。」

「済みません……。」

「誰も……。先生も、クラスメートも、愛美のことを、生きている

間も、死んでからも、全然、どんなに辛い思いをしたかなんて、考えてもくれなかったじゃないか……。自分の言い訳ばかりしやがって……。くそっ……………」

「済みません……………」

平中は一緒になつてひたすら深く深い渦の中に落ちていくような二人のやりとりをばらはらしながら見ていた。このままいつか、バンツ！、と暴発してしまうのではないかと……………。

「わたし……………」

相原がボソツと底抜けに暗い声で言った。

「実は養子なんです」

今現在「二代目の」愛美を娘にしている海老原は初めて明かされる相原先生の身の上にハツと目を上げた。

「いえ、わたしは実の親に虐待されたとかいう以前に、生まれてすぐに養子縁組の手続きが取られて、育ての親に引き取られたようです。育ての親もわたしを大切に育てて、愛してくれましたが……、どうしても、ちょっとした拍子に、ああ、やっぱり本当の親子じゃないんだな、と思うことがありました……………」

海老原はじつと相原先生が話すのを見つめている。

「そのせいでしょうかね、何かいざというときに、わたし、自分にひどく自信が持てなくなつて……………、逃げ出しちゃうんですね……………。不安で堪らなくて、自分は駄目なんだ、って、自分から逃げ出しちゃうんですね……………。生徒の気持ちのよく分かるいい先生になりたかったのに……………、全然……………、駄目ですね……………」

また暗い渦のスパイラルに落ちていく。海老原は何か思うところはあるのだろうが、今現在の自分自身の問題でもあり、何かはつきり考えを言葉に表すことは出来ないようで、悶々とした。

「海老原さん」

廊下からそつと声を掛けられ、海老原はギョツとし、

「しっ！」

と、誰か尋ねる前に制された。ドアノブが回り、ゆっくりドアが開いた。

「わたしです」

口に『しっ』と指を当てた木場田が現れた。木場田はベッドの二人にも声を立てないよう注意した。慌てて椅子から立ち上がるようにする海老原に。

「落ち着いてください。わたしは皆さんを助けに来たんです」

廊下の先を気にしながらドアの内に滑り込み、そのままドアを細く開けておいた。

「海老原さん、落ち着いて。わたしは味方です」

海老原は怒りと緊張でブルブル震えた。

「広岡さんもそう言って、わたしの妻と子を人質に取っているぞ？」

「そうですね、その通りです。……広岡さんは恐ろしい人だ、今や村長に代わってすっかり村を支配してしまっている」

平中が信用できないように口を挟んだ。

「それを狙っていたのはあなたじゃなかったの？」

木場田はうるさそうに、……相原の表情を気にして、言った。

「そうだ。……だが、こんなことを望んでいたんじゃない。俺はみんなが幸せになることを望んでいたんだ。なのに……、今の村の様子はおかしい。みんな、悪魔に取り憑かれたようになってしまっている。神の毒素に、すっかり頭をやられてしまったみたいだ。村は今、非常に危険な状態だ」

木場田は恋人相原が村を逃げ出そうとした気持ちを正当化し、自分につなぎ止めておこうと必死だった。

「海老原さん、あなた方一家も危ない。一刻も早くここから逃げ出さなくてはならない」

海老原は信用せず、今にも猟銃を木場田に向けたそうにした。

「どうしてわたしたちが危ないんです？」

木場田はじりじりした気持ちで、辛抱強く海老原を説得した。

「それは…、村が愛美ちゃんを神の巫女にしたいからだ。お婆とヨシが殺された。新しい巫女が必要なんだ。あんだ、娘を巫女に差し出す気があるか？」

「それは……」

海老原の心がぐらついた。

「あんたら両親が拒否の態度を取れば……、奥さんも危ない」

「なにっ!？」

「しっ。だから、今村は狂っているんだ。若い女たちを神の生け贄にして神を鎮めようとしているんだ。平中さん、…相原さん、それに奥さんも危ない。さあ、早く!、迷っている時間はない。とりあえず避難して、また村の様子を見に来ればいいでしょう? でも、今逃げ出さなかったら、恐ろしいことになってしまっますよ?」

木場田のせっぱ詰まった説得に、海老原もうなずいた。

「は、話は分かった。でも、妻と娘が広岡の奥さんと一緒にいる。

二人を助け出せないなら話は無しだ」

と、猟銃を今度こそ木場田に向けた。木場田は両手を広げ。

「分かった。まず二人を助け出す。俺を信じろ」

海老原は追いつめられた目で油断なく「行け」と銃を振って指示した。木場田は真つ青な顔の相原に目でうなずき、そつと、廊下に出た。

海老原たちがこもっているのが階段を上がった一番手前の部屋、広岡の妻が海老原の妻子と一緒にいるのが一番奥の部屋だ。

木場田がそつと足音を忍ばせて歩いていくと、中年女のヒステリックな声が響き渡った。

「誰!?! さつさとこつちに来て顔を見せなさい!」

95 男の夢見たこと

後にした部屋から

「里桜！ 愛美！ どうした！？ 大丈夫か！？」

と海老原の悲壮な叫びが呼びかけた。

「里桜！ 愛美！？」

一拍おいて、

「あなた！」

「パパ！」

と、海老原の妻子の怯えた震え声が呼びかけた。

「里桜！ 愛美！ おおい、二人に何かしたんじゃないだろな？」

二人に何かしやがったら、許さねえぞ、こらあつ！！」

負けじと女が声を張り上げた。

「さつさとこつちに来なさい！！！」

前と後ろから苛々した声に煽られて、ええい！と木場田は踏み出し、奥の部屋のドアを、開けた。

いきなりピストルの弾を撃ち込まれるのを警戒したが、入り口正面に向かって海老原の妻子が並んで立っていた。二人とも真っ青に怯えきつた顔をして、後ろで二人に隠れるように信木の妻がピストルを母親の背中に突きつけていた。

まつげのピンピン立った大きな目でギラリと憎々しげに木場田を睨み付けている。

「おまえは……、青年団長の木場田だね？ そうか、やっぱり恋人を逃がしに来たんだね？」

「信木保安官の奥さん……」

木場田も怒りを込めた目で睨み付けた。

「村はもう保安官が牛耳ってる。もうここで人質を取っておく必要はないぞ？」

木場田は人質の二人が怯えるほど悶々と赤い怒りを燃やした。信

木の妻が言う。

「あらそう。でもまだ旦那の連絡はないのよ。連絡が来たら、あんなが来てることを報告してあげるから、大人しく待ってなさい」

「・・・・・・・・」

木場田は悔しそうにしながら怒りのオーラを燃え立たせた。信木の妻は意地悪くにやけている。信木の妻はこの村の人間ではない。この村を訪れたのは長い結婚生活の中でこれが初めてのことだ。

靈力に対する耐性はないと見た。

「はああっ！！」

木場田は部屋に充滿させた怒りのオーラを信木の妻に勢い良く収束させた。

「ぎゃっ」

パンッ！。

「きゃあっ」

「きゃああっ」

信木の妻が後ろに突き飛ばされてひっくり返り、銃弾は天井に向けて発射された。壁に「ゴンッ」と後頭部を打ち付け、信木の妻は失神した。

「さっ、早く！ 急いで！」

木場田は母娘を守るように部屋の外へ急がせ、

「あなた！」「パパ！」

「里桜！ 愛美！」

夫婦親子は無事再会を果たした。

木場田は海老原を急がせた。

「早く車を。みんな揃って逃げるんです！」

行こう！、と海老原は妻と娘の背中を押すように階段を下りていき、木場田は部屋の中を見た。

「二人も急いで」

平中が先に出て、木場田は相原とまっすぐ見つめ合った。

「貴一さん……………」

相原はいろいろ聞きたいことがあるのだろうが、混乱で胸がいっぱいのように、自分の気持ちもよく分からないのだろう。

「俺は君を愛している。それだけ、信じてくれ」

木場田は泣きたくなる真剣さで恋人を見つめ、相原もうなずいてくれた。

「一緒に来るんでしょ？ 側にいてね？」

木場田は一瞬迷った。自分の「へその緒」もまだ麻里に握られている。あれはこの村で産まれた赤ん坊が神に忠誠を誓い、神の庇護下に置いてもらう…………… 奴隷の契約書だ。神〃村を裏切れば、引きちぎられ、命を絶たれる。黒木の仲間の末木はそうして麻里に殺されたい。

自分が裏切って逃げたと知られば、自分も確実に殺されるだろう。

木場田のためらいに相原の目が不安に陰った。

「行くこう」

と、木場田は言った。

「もう、俺は君から離れない。一緒に生きていこう」

全てを懸けた、命懸けの恋だ。

安藤が穴から連れ出されたという話は聞かない。生きていてもまともな状態ではあり得ない。黒木たちを裏切り、死に追いやった。

彼らが命懸けで守ろうとしたケイを、忌まわしい祭の捧げ物に墮そうとしている。

呪われた、黒い血の運命だ。

何もかも自分の望んだことではない。自分はただ、普通に、この人を愛したかっただけだ。

自分の呪われた運命と行動を知ったら、この人はまた自分の元を去ってしまうだろうか……………。

懸けよう、と思った。

命を。

今、愛する人と一緒にいられる瞬間に。

自分が死んだら、愛する人が傍らで泣いてくれるだろうこの時に、青ざめながらほっとした表情を見せる恋人に、

「行こう」

手を差し伸べた。冷たく細い手が握り、力強く握り返し、包み込んだ。

生きたい、と強く思った。

俺は、この人と、自分の人生を生きたいんだ！、と大声で叫びたい気分だ。

……紅倉が頼りか。

ともかくにもあの穴から生還した。麻里の絶対的優位は変わらないだろうが、望みを懸ける希望はある。現金なものだと笑ってしまいたくなるが、紅倉が麻里を倒せば、もはや神を操れる者はなく、神のシステムは、村の体裁は、崩れ去るだろう。

壊れる壊れる、ちりとなって消えてしまえ！

すべて俺の悪夢を、空のかなたへ吹き飛ばしてくれ！

表に出ると海老原が車のエンジンを掛けたところだった。4ドアのハッチバックで大人5人子ども1人の乗る座席はないが、バックドアを開けてトランク部に乗れば何とかなる。村から離れさえすればいいのだ。

相原を後部座席に向かわせ、自分はバックドアを開けると、道を、坂の方から声がした。

「団長。どこへお出かけだよ？」

96 甘い夢の終わり

紅倉はカウンセラーの易木寛子が来ていることを「虫の知らせ」と評した。

その虫が知らせたのか、易木は離れたところに車を置き、ペンションの近くまで様子を見に来ていた。芙蓉と打ち合わせの時間にはまだ時間があつたが、いても立つてもいられなかつたのだ。

木の陰から様子を窺っていると何やら金切り声が聞こえ、パンツ！、と銃声が上がリ、ぎゅっと心臓に痛みが走つた。何が起つたのだろうと思つてしていると、ペンションの親子が駆け出してきて、慌てた様子で車に乗り込み、エンジンを掛けた。親子と一緒に平中がいる。ということとは、自力で脱出に成功したのだろうか？、と、じりじりして陰から表へ一歩出ると、玄関から手に手を取つて木場田と相原が出てきた。ああそうなのだわ、木場田が救いに来て、脱出できたのだわ、と嬉しく思った。木場田は相原を母親と娘の乗る後部座席に向かわせ、自分は窮屈な自動車後部に乗り込もうとしている。易木は出ていって「車ならわたしがあるわよ！」と教えてやるうとした。が。

「団長。どこにお出掛けだい？」

坂を3人の青年団員が上がつてきた。木場田はバックドアを上げたところで固まつた。恋人相原は「きゃっ」と小さく悲鳴を上げて両手で口を覆つた。

木場田は3人を確認した。暗くてはつきり分らないがシルエツトとオーラで分かる、宝木、堀木、乗木の二十代トリオだ。木場田は努めて事務的な口調で言った。

「芙蓉が襲つてくるかも知れない。今の内に人質を移動しておく」
「なるほど。あの女もおつかねえからな。ところで、信木さんの奥

さんはどこだ？」

「奥さんは…、中で信木さんと電話してる」

「そうか。……奥さーん！」

「こら。電話の邪魔するな」

「へへ、すみません。どこに行くんです？ 当然村の……、役場か村長宅ですよ？ 芙蓉が襲ってきたら怖ええから俺らが護衛しますよ」

そう言いながら三人はじっとり粘っこい視線でドアを前に固まっ
てしまっている相原と、助手席で緊張して振り返っている平中を眺
めた。

車はバツクを道路側に向けて駐車している。

並んで立っていた三人がこちらに向かって動き出した。

「海老原さあーん。あんたは下りてくれ。俺が運転するよ。女は乗
つてくれよ？ レディーファーストだ、へへへ」

ポン、と宝木が木場田の肩を叩いた。

「団長さんも乗ってってくださいよ？ こんな所に乗らなくなつて
女の子はパパと散歩していきゃいい……それとも、奥さんと夫婦水
入らずがいいかな？」

運転席のドアが開いた。どす黒い怒りを顔に集めた海老原が降り
立った。手には猟銃を。

「ねえー！ ちょっとー！ー！！」

中年女の声になんだ？と皆振り向いた。

暗い道を、手を振りながら、易木カウンセラーが急ぎ足でやって
きた。

宝木たちは顔を見合わせた。

「易木カウンセラーじゃないすか？ なんでこんな所に？」

「なんでって……」

宝木の近くにやってきた易木は膝に手を置き、小太りの肩をはあ

はあ上下させて、つばを飲み込み、言った。

「紅倉さんを説得するよう村長に頼まれて急いでやってきたのよお。そしたら……、坂の下でパンクしちゃって、もうー、もう少しだっというのにねえ？ 悪いんだけど修理してくれないかしら？ なに？ 村長の家に行くの？ じゃあわたしも乗せてってね？ もちろんいいわよねえ？」

カウンセラーは「手のぬくもり会」の重要なポストだ。男たちは顔を見合わせ、嫌々ながら承知した。

「いいっすよ。じゃあお送りして、誰か得意な奴を修理に呼びますよ」

「そう、ありがとうね……」

上気した笑顔を上げた易木は、一瞬表情を消し、腕を振り上げた。易木は、櫛に模した折り畳み式のナイフを持っていた。床屋で男のひげをあたる肉厚のかみそりに似ている。

「よくも」

振り下ろす。手応えが、あの時と重なる。

「よくも」

サツと反対から振り下ろす。感触を、覚えている。

「よくも」

真一文字に切り裂く。鮮血が迸り、顔を、生暖かく濡らす。

一瞬の早業で誰も何が起こったのか分からなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

宝木がうずくまりながら、力を放った。ナイフを握った易木の腕がねじ曲がり、刃が、男の血に濡れた頬をざっくりえぐった。

「ひいひい」

易木は悲鳴を上げながら、左手で右手を押さえ、下に向けると、宝木の力を放つ右手の平にグサツと突き刺した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

左手で顔面を押さえる宝木は堪らず右手を引き、抜けたナイフを易木は、自分を恐怖の色で覗く宝木の目玉に突き刺した。

「うぎゃあああああつ」

叫んだ宝木の両頬から大量の血が噴き出し、あごがガクンと垂れ下がった。

「アガ・アガ・アグガガガガ・・・」

怒りを込めて、力を爆発させた。

「ぶげえっ・・・」

動物のような悲鳴を上げ、易木の太った腹部が破裂し、中身を飛び散らせながら後ろにひっくり返った。

素早い展開に隣で呆気にとられていた木場田は、力を込めて拳を宝木の開いたまま閉まらないあごに叩き込んだ。

「ぐえわっ・・・」

これまた空気の抜けたような呻きを上げて、宝木の気道が膨れ上がり、中から肋骨を砕いて飛び出させ、血をブシュッと溢れさせて、絶命した。

凄まじいバイオレンスに固まった空気を、

「きゃあああああつ！！！！」

相原の甲高い悲鳴が震わせ、

「うわあああああつ！！」

猟銃を構えた海老原の叫び声が突き破った。

「くそっ」「」

堀木と乗木は動きをシンクロさせて飛びすさり、力を同時に放った。

車がグルッと大きく回転し、堀木乗木の側の相原と、向こう側の海老原を跳ね飛ばした。

「きゃあっ」

「うわっ、くそっ！！」

「おのれ！」

木場田は宝木の胸から引き抜いた血塗れの右手を二人に向け、

海老原は跳ね飛ばされた地面から起き上がって慌てて猟銃を構え直し、

「くそっ」

「くそっ」

堀木と乗木はそれぞれ力を放った。

力と力がぶつかり合い、運命をねじ曲げた。

「バアアンツツツツツ」

「……………きゃああああああ、きゃあああああああつ、きゃあああああああつ！！！！！！」

相原はありつたけの悲鳴を腹から吐き出した。

能力者たちの力と力がぶつかり合い、誰にも予想できない力の軌道は、銃の引き金に指を掛けた海老原の腕をぐりつと動かし、横を向かせ、

「バアンツ」

と発射された散弾は、もろに木場田の側面を撃った。バババババババババツ、と一斉に襲った小さな鉛の弾たちは、木場田の肉体をぐさぐさに破壊した。

木場田は真っ赤に染まってドサツと倒れ、相原は悲鳴を上げ、海老原は自分の引き起こした惨劇に呆然とした。人を殺すという行為を、図らずも、体験してしまった。

ギリリリギユアアアアツ、

タイヤを軋ませて車が急発進し、

ガンッ！

「げっ、」

「ぐえっ、」

堀木と乗木を思い切り跳ね飛ばした。森まで飛んだ二人は、凸凹の地面に変なかつこうで転がり、幹に頭を打ち付け、倒れると、動かなかつた。

「相原さん！ 海老原さん！ 早く乗って！！！」

開いたドアから平中が金切り声で叫んだ。人を轢いて、もしかしてひき殺して、興奮状態になっている。

海老原は「あなた！」と必死に呼ぶ妻の声に我に返り、急いで娘の隣に乗り込み、親子三人ひっしと抱き合った。

「相原さん！！！」

平中が怒鳴ると、相原は恐ろしく目を見開き思考の飛んでしまった顔で這うようにして助手席に乗り込んだ。

「ドア閉めて！」

平中は怒鳴り、ギアを切り替え、バックし、方向を道に、村から出る方に向け、発進した。

目を見開き恐ろしい顔をしていた相原が、

「あ、」

と窓に張り付いた。

腹部の破裂した易木の凄まじい悲鳴を叫んだ、死体を、通り過ぎた。

相原は実の親ではない両親の元に養子に入り、育ててもらった。実の母親が何故自分を養子に出したのか、育ての親からも教えてもらっていない。実の母親がどこの誰かも。

虫の知らせ、というものを相原は一瞬感じた。

もしかしてあの人が……

そう思ったが、それを当人はもう答えてくれない。

ほんのつかの間の邂逅の後、最期の姿が、あまりにも凄まじい。相原は両手で肩を抱いて震え、しばらくして恋人を思いだし、激しく嗚咽した。

平中も心臓が飛び出そうな興奮状態で気持ち悪くなりながらギスギスした目で道路を見つめハンドルを握っている。

後ろの親子は、ただただ恐ろしく、小心に、この地獄から抜け出すことをひつしと抱き合って望んでいた。海老原は猟銃を放り投げてきていた。

底抜けに暗く重い車内で激しく嗚咽する相原は恋人が望んだように彼の死を悲しんで声を上げ泣いているのか、それともただ起きたことが恐ろしくて感情の線が切れてしまっただけなのか、本人にも分からず、ただただ、こみ上げてくる物に急かされて泣き続けた。

車は易木の残していった車を通り越し、坂を下って町への長い暗い道に消えていき。

夜空に響く銃声に慌てた芙蓉が駆けつけた時、そこには無惨に破壊された易木と木場田の死骸と、名も知らぬ青年団の能力者の死骸と、森にあと二人の能力者が気絶しているばかりだった。

ペンションの中にも誰もいなかった。

97 神なる物

両親の所で夕飯を食べた麻里は搬入門に向かったが、入り口の鍵は開いていなかった。

「開けておくように言いましたのに」

麻里は右手を前に出すと、バリツ、と青い電光を放った。頑丈な錠前がバチンと火花を噴き、白い煙を上げた。

「ちゃんと開けておかないのが悪いんですわよ」

ガラガラと鉄の扉を開き、懐中電灯で先を照らした。階段が下りている。コンクリートで壁が補強され、こちらは割合最近改修された通路なのだ。

「メイコさんはわたくしの言いつけを守ってちゃんと準備しておいたかしら？」

麻里の能力ならちよつと意識を集中して調べれば分かるのだが、行ってみてのお楽しみとやめておいた。

「さあ紅倉美姫さん。ちゃんと時間通り来ているかしら？ 急がないと……、男どもはすっかり盛って我慢が出来ないようですわよ？」

お人形のような顔に年に似ぬ淫靡な笑いを不気味に浮かべ、麻里は通路を進んでいった。

麻里が井戸を縄ばしごで下り、水槽に下りると、そこに神はいた。麻里は、

「お父さま。メイコさんを食べちゃったりしてないでしょうね？」と笑って尋ねた。

神、とはなんなのだろう？

ミスキは神は不死の存在で、この村の成立からずっと生き続けていると言っていた。

村長は鬼木の婆と神さんが死ぬようなことがあってはならないぞ

と話していた。死ぬことを心配するようにやはり命を持った生き物であるようだ。

今麻里は神に「お父さま」と呼びかけた。しかし彼女はついさっき両親の家で夕飯を食べてきたところで、ちゃんと人間の両親がいる。しかし彼女の母はこの神に犯されて麻里を産んだという。麻里のタネがその時すでに肉體関係を持っていた当時の恋人であるところの父親の物なのか、この神の物なのか、誰も分からない。人間の父親のタネで受精した卵に、神の淫乱の靈氣が注入されて麻里が出来上がった、というのが鬼木の婆あたりの見立てではないだろうか？ 麻里自身、この神を愛しく思っているようでもあり、下等生物……バケモノとして、馬鹿にしているようでもある。

彼女に人や、何かを、愛する心があるのかもはなはだ疑問であるが。

今、ここにいる神は、元不良青年であった半分水死体を、この麻里がぐちゃぐちゃに踏みつぶし、改めて強力な靈力でまとめて肉団子にした代物だ。人間一人分の肉體とはこれくらいか？とちよつと小さく思っくらしいの、ぶよぶよした白い球體で、水に3分の1頭を浮かせている。

しかし、どうやらそれは神の体の一部であるようだ。肉団子にくつついて、水の中に、長い、白い、ナマズがひっくり返って腹を見せているような物がずうつと続いている。

神は、人間の数倍ある巨大な体の持ち主なのだ。しかし、こうして懐中電灯の明かりで照らしてみても、これがどういう「生き物」なのか、さっぱり分からない。神は、「神」という種類の生き物なのだろうか？

「さあ、行きますわよ。ああ、お父さま、わたくしが紅倉を倒しても食べちゃいけませんわよ？ 後で、男たちの体を使ってたっぷり楽しんでから、ご賞味くださいませ」

綺麗な顔で悪魔のようなことを平気で言う麻里は、神の長い体を

追いついて、水路の先へ進んだ。

神の白い体が青い電気を帯びて動いた。長い体をUターンさせて、肉団子の頭を先に、麻里の後を付いて泳ぎだした。ぬらっとした表面で、水死体と変わらずぶよぶよした体は、泳ぐような推進器官や筋肉を備えているようには見えない。青く光る電気＝霊力で、動いているようだ。話が本当なら何百年、いや、千年以上生きているはずのこの生き物は、すでにオリジナルの形を無くし、半分以上霊的な存在になってしまっているのだろう。

麻里は神を伴い進んでいく。水路を曲がりながらずつと進んでいくと、真つ暗な先に、ろうそくの明かりのようなオレンジ色が見えてきた。

「門」に出た麻里は、

「ああ、メイコさん、ちゃんとお願いを守ったんですね。後で褒めてさしあげねば」と満足そうに言った。

「紅倉お姉さまの苦悶の顔をすっかりこの目で見てやりたいですからねえ」

立方体の空間に、水路の兩岸に8基、室で使うLED電球のランタン型ランプが置かれている。色は暖色系に傾け、光量は低く抑えて、ちょうど夕暮れのように薄暗い。神は強い光を嫌うのだ。

そして。

古い社の鳥居の所に、紅倉美姫が膝を抱えて座っていた。

「あら、待たせてしまいましたか？ 申し訳ございませんでした」

麻里は浅いプールをザバザバ歩いてくると、紅倉と反対の岸に「よいしょ」と這い上がり、紅倉の正面に向かい合った。

「別に。わたしもついさっき来たところ」

紅倉もよいしょと立ち上がった。

麻里はニイッと笑った。

神は肉団子の頭を少し覗かせて、本体は水路の中に隠していた。

ここでこの紅倉にひどい目に遭わされて、ナーバスになっているよ
うだ。麻里が言う。

「お父さまはどうぞそこから見物しててくださいまし。お父さま
をひどい目に遭わせたこの女を、今わたくしがひどい目に遭わせて
さしあげますからね？ おやつに腕と脚を食べさせて上げますから、
よだれをたらして待っていてくださいね？」

神は、喜んでいいのか、ブシユウと臭い霧を吐いた。

紅倉は首を傾け、

「あの醜いバケモノは、何？」

と訊いた。麻里は余裕の笑みを变えず、

「こら、畏れ多い。神に向かってなんて口をきくの？」
と叱った。

「グロテスクう〜」

紅倉は口を尖らせて馬鹿にした。

「わたしも口の悪い霊能者仲間に『死体袋』って陰口を言われてい
たけれど、アレなんか、まさにそうじゃない？」

「まあ。わたくしを怒らせていっそひと思いに殺してほしいって作
戦かしら？ 残念ながら、ひと思いに楽に死なせてなんかあげませ
んわよ？ お願い、もう殺して、って、泣きながら哀願する顔を見
てやりますわ」

「あなた、悪趣味なバイオレンス小説の読み過ぎなんじゃない？

わたしはそんな悪趣味なことをしないで、この場で徹底的にあなた
をやっつけてやるから安心してなさい」

「ふっ。神の聖地でよく減らず口を言う」

「あいにくと不信心者なものでして」

二人は互いに攻撃的なオーラを膨らませていった。

「とりあえず、半分死ね」

バリバリッ、と凶太く青い電光が空間を走った。

98 決闘、神の娘

走った、というのはまさに瞬間のことで、実際人の目には「バリッ」とその軌跡が網膜に焼き付くばかりだ。

麻里の上空から発した稲妻は凶太い線でカーブを描き、紅倉の左腕を狙って襲いかかってきた。

麻里が「死ぬ」と言った瞬間紅倉は攻撃を感じ靈的な空間を外へねじ曲げた。瞬間の間に紅倉を襲った青い稲妻はねじ曲がった磁場に沿って外へ逸れ、壁を「バリバリバリッ」と木の根のように分岐して這い、青く光らせ、紅倉たちの黒い影を揺らした。

「・・・」

麻里が開いた手のひらを振り下ろすと、操られてまた頭上から「バリバリバリッ」と今度は数本の稲妻がヤマタノオロチのように紅倉に襲いかかった。今度は紅倉も右手を突き出し、丸く靈気の磁場を押し出した。稲妻たちはその球面を滑って紅倉の後方に流れていき、凶太い電光のまま壁を這い回り、「ビシビシビシッ」と木の板を割り、それでもまだ勢いが収まらず、部屋中をグルグル駆け回り、稲妻同士ぶつかってあちこち物凄いスパークを発し、「バキインッ」と鳥居を叩き割った。部屋中に散った白い網のような雷光が、下のプールにも走り、水路を逆流して進った。

「ぶぎゃああああああつ・・・」

神の白い肉団子が青い電気を針のように突き立たせて輝いた。

「くっ」

麻里が手を握って力を納めると、放電は消え、神はしゅっしゅっ…と白い煙を噴いて静かになった。

麻里は忌々しそくに紅倉を睨んだ。小馬鹿にした態度が消え、剥き出しの敵意が顔に恐ろしいしわを刻み込んでいる。

「なかなかやりますわねえ？」

「自分の家の中で騒がれたら神様も迷惑でしょうねえ？」

「うるさいですわ、あなた」

暗にこちらの不利を当てこする紅倉を睨み付けた麻里は、邪悪に笑った。

「では、もつと確実にあなたを捕まえてさしあげるわ」

一瞬で部屋の空気が重くなった。麻里の笑いが大きくなり、冷たく鉛のように重い空気が紅倉に押し寄せた。紅倉は両手を顔の前に開き、麻里のオーラを受け止めた。

「ほらほら、どこまで耐えられますかしら？」

麻里は自分のしかかっついていくように肩から両腕に力を込めて前のめりになった。

「ううう・・・おおおおお・・・」

可愛らしい女の子の声でせいっぱい低く唸って気合いを発した。麻里の周囲の空気は鉛どころか鋼鉄のような重さに変じ、黒く固まり、近くにあったランプを「パリン」と割った。

部屋中に充満した麻里の黒いオーラが、逃げ場無く、重く紅倉にのしかかっついていった。

紅倉は両足を軽く開いて立ち、両手を顔の前に開き、そのままの姿勢で立ち続けている。

麻里の笑いが怪訝に消えた。

「何をしますの？」

これだけ重いオーラにのしかかれたら、霊体も、肉体も、耐えられずに床に這いつくばるはずだ。紅倉は平気な様子でまっすぐ立っている。麻里は力を込めながら、

「何を……」

と憎々しげに観察し、ハツと理解した。

「それは……、ケイ姉さんの能力ですわね？」

鋼鉄のように重いはずの空気が、紅倉の周囲でそよ風のようになっている。麻里のオーラが紅倉の手によって変質させられているの

だ。麻里は一方的に力を送り込んでいるばかりだったので気づかなかった。霊体をどろどろにして相手に解け込むのがケイの特異能力だ。紅倉はそれを応用してオーラを自分の快適な状態に変換しているのだ。

「チツ、やつかいですわね」

言いながら、麻里は焦るでもなく、

「ならば、どこまでそれが通用しますかしら？」

ますます力を込め、オーラを重くしていった。

「この場にはわたくしに味方する霊力が無限に貯蓄されている。わたくしの力に、限りはございませんわよ？ あなたは、どこまでそうやってそれをしのげます？」

麻里のオーラが黒く濃くなって、その姿が見えなくなった。それは肉眼でより、紅倉の霊的視力に顕著だった。

体を全方位から押し寄せてくる黒く重い鋼鉄のオーラに、紅倉はそれを軽やかな日向のお花畑のような空気に変換して対抗していたが、濃すぎる酸素が生物に害なように、それ自体の濃度が異様に高まってきて、紅倉は段々息苦しさを感じるようになった。しかも麻里の黒いオーラはどんどん重さと勢いを増して全方位を圧してくる。紅倉は口を開けてつばを飲み、「がはっ・・・」と喉を喘がせ、まぶたを瞬かせ、顔を歪めた。身体の内部まで濃すぎるオーラが染み渡り、充満し、体がブルブル震えてきた。熱い。細胞の一つ一つが異様に活性化され、発熱し、紅倉は体中にねっとり汗をかいたが、それが外に発散されることなく逆に肌に押し戻されようとして、肌呼吸が出来ずに全身がだるくなってきた。ブルブル震える腕が下がり、膝がわななき、崩れ、麻里がもくろんだように床に手をつき、膝をつき、「はあ〜……………、はあ〜……………」と具合悪そうに病的に息を吐いた。新鮮な空気を求めて、得られず、気持ち悪さが毒となつて全身の筋肉を駄目にしていった。紅倉は苦しそうに背を丸め、かろうじて床に寝転んでしまつのを耐えていた。「はあああつ……………、はあああつ……………」と必死に呼吸し、目は細まり、頬が苦痛にヒクヒ

ク痙攣し、その苦痛も忘れそうに意識を失い掛けている。

「はああああああつ、はああああああつ、はああああああつ、はああああああつ、はああああああつ、」

紅倉はもはや痙攣するように肩と背を波立たせて大きく必死に喉を喘がせ、黒のパーカーの背中からピンク色の湯気がもつもつと上がった。それが発熱する紅倉の大量の汗なのか、黒に対抗する変換されたオーラなのか。

麻里の意識が黒いオーラのベールの中から生き霊の形となつてぬつと紅倉の上に現れた。

「グロッキー。どうやらおしまいのようですね？ 殺したくはありませんの。もっといたぶる楽しみが無くなつてしまいますから。どうです？ ギブアップしていただいただけませんか？」

「はああつ、はあああつ、はあああつ、はあああつ、はあああつ、はあああつ、はあああつ、はあああつ、はあああつ、はあああつ、」

「はあああああつ・・・」
と顔を上げた。

真っ赤に濡れたようになって、瞳が、ルビーのように真っ赤に光を放っていた。

赤い光が眩しいほど強くなって、一瞬、紅倉の顔が真っ白にスパークした。

麻里の霊体はギョツとして、一步退いた。

紅倉の周りに赤く霧が立ちこめ、黒いオーラを凌駕するように広がっていく。

麻里は不快そうに眉をひそめた。

「もう、駄目ですね。やせ我慢をして、つまらない。体が崩壊してきているではありませんか？」

麻里の指摘通り、紅倉の真っ赤になった肌は、発熱に耐えきれず、白い煙を噴き、チロツ、チロツ、とオレンジ色の炎を表面にくゆらせた。

「紅倉さあ〜ん、わたくしの声が聞こえますかあ〜ん？」

麻里の霊体はわざとらしく耳に手を当て返事を待ったが、紅倉は「はああつはああつ」と大きく喘ぐばかりで、反応しない。麻里は、しらっとした目になった。

「あーあ。じゃあもういいですね。そのままちりになってしまいなさい」

ぐつと圧力を加えると、ポツと紅倉の顔が火を噴いた。

「ぎゃああああつ」

紅倉は呼吸も忘れて叫び声を上げた。

「あはははははははははは」

麻里は今とばかりに大笑いした。

「残念。メイコさんにはビデオカメラも用意させておくんでしたわ。紅倉美姫さん。いい顔ですわよ？」

「ぎゃああああつ、わあああああつ」

紅倉の黒いパーカーからもオレンジ色の炎が溢れ出し、足から頭の先まで、紅倉は火だるまとなって激痛に転げ回った。

「あはははははは、あはははははははははは」

腹を抱えて大笑いする麻里の霊体に、紅倉は目玉まで炎にあぶられる顔を向け、必死に救いを求めて手を上げた。

「あはははははは」

紅倉の手から炎が走った。

「なにをするっ！」

麻里は激怒して汚い物のように炎を振り払った。

「フン」

霊体はすっかり興ざめしたように自分の肉体に戻った。

紅倉の肉体は周囲を赤く照らし出して燃え上がっている。炎を上げながら床にのたうち回っている姿が哀れだ。

「現代最強の霊能力者、ここに眠る。ふん、相手と、場所が、悪かったですわね？ ま、あなたは所詮お綺麗なタレント霊能師ということですよ」

麻里は積極的に紅倉を嘲ろうとした。自分の体に帰ってみると、

さすがに靈力を使いすぎ、肉体の疲労がひどい。このまま勝負が長引けば下手をすれば自分の方が肉体を崩壊させていたかも知れない。床に仰向けになった紅倉が、まだゆっくり腕を、パタン、パタン、と持ち上げ、落とし、していた。

赤々と、部屋を火事のように照らしている。

「ふ…、ふふふ…、ふっふっふっふ…。死ぬ、紅倉美姫が死ぬ。死ぬ、死ぬ、燃え尽きて、醜い焼けこげになってしまえ」

疲れた自分を鼓舞するように笑う麻里。その背後に、赤い人影が立った。

「！」

麻里は振り返った。

「うわあああー！ー！ー」

全身真っ赤に濡れた女が眼を剥き、口を開け、両手を上げて麻里に抱きついてきた。

「！ 巫女！？」

真っ赤に血塗れた巫女は麻里に抱きつき、

「うわああ、ああああああああああ」

と、すっかり言葉と思考を忘れて、べたべたと麻里の顔に触り、どろっとした血液を塗りたくった。

「何をする、汚らわしいっ！！」

麻里は振りほどき、「うわああ」とまだまとわりついてこようと
する巫女を、

「失せろおっ！」

腕を振り、力で粉碎した。ぐしゃっと潰れた胸から大量の血液が爆発し、麻里に浴びせられた。

「うわっ、ぺっ、」

麻里は口の中に入った生臭い物を吐き出し、喉の奥にこびりついた物をおええくと吐き出した。

背中にべたりと濡れた腕が抱きついてきた。

「ぎゃっ」

麻里は驚いて跳ね上がり、すがりついてくる物を振り返ると、また真つ赤に濡れた巫女が、

「ああああああああああ」

と血生臭い息を吐きかけてわめいた。ぐりつと開いた、血に濡れた目玉が麻里を凝視している。

「こ、こいつ、どこから湧いて出て・・・」

麻里はひいっとおぞげだった。

「ああああーーーーー」

「ああああーーーーー」

「ああああーーーーー」

右から、左から、前からプールを這い上がって、次々巫女たちが麻里を頼って寄ってきた。

「ああああああああああ」

ギョロリと眼を剥き、真つ赤に濡れた手で麻里を触ってくる。

麻里は、iiiiiiiiiiii、と震え上がった。

「やめるお、触るなああつ!!!!!!」

麻里は靈力を爆発させ、赤い巫女たちは次々破裂していった。バシッ、バシッ、バシッ。そして、ザアツと大量の血潮が麻里に降りかかってきた。

「うわああああつ」

麻里は大量の血の雨にずぶ濡れになり、足を滑らせてひっくり返った。

「うげっ、げええええええつえつえつ、」

すさまじく気持ち悪い。

「うづうづうづう...うええええええええつ。」

胃がひっくり返り、夕飯に食べた物を全部ぶちまけた。

「げえええつ、げえええええつ」

胃の痙攣が収まらない。胃ばかりでなく内臓全部が、今自分の所

を流れている血液を吐き出そうともがき、暴れ回った。心臓は凄まじく脈打ち、破裂しそうに痛んだ。しかしその心臓も送り出すのはきれいな赤い血液ではなく、どす黒く、タールのようになっとりした腐った血液だ。

「うぎやががが・が・が・が・が・が・が・が・が・が」

全身が凄まじい痛みを訴える。全身が気持ち悪くて堪らない。この体を捨ててしまいたい。

赤くべたつく床でのたうち回る麻里の肉体から、ふうつと意識が遠のいた。

麻里の生き霊はのたうち回る自分の肉体を見下ろし、歯ぎしりした。臨終に近い、肉体にとって非常に危険な状態だ。

『お父さま！』

麻里の霊体は自分を助けようとしぬい神を非難するように睨んだ。神は水路の奥に身を潜め、怯えたようにじつと様子を窺っていた。何故こんなことが起こった？ 門番の赤い巫女どもは紅倉が倒したのではなかったのか？ ！。

紅倉！

紅倉は向かいの岸に立って哀れっぱい目で麻里を、麻里の霊体を、見ている。

麻里はカアアツと怒りに燃えた。

「紅倉ああっ」

黒い鉄球となり紅倉に襲いかかった。紅倉は右手を突き出し、炎を放った。

麻里のまとった黒い鋼のオーラが灼熱して燃え上がった。

「ぎゃああああああっ」

麻里の霊体は飛び上がって熱から逃れた。

紅倉は手を霊体に向けた。麻里はひつと怯えた。

「やめ・・・」

ボオツと麻里の霊体が燃え上がった。

紅倉は怖い目で麻里の霊体を睨んでいる。その右手に狙いを定められて、

『お願い……、もう……、ひどいことをしないで……』

霊体の麻里は泣きながら哀願した。

ぶすぶすと小さく赤い焼け残りをくすぶらせながら、麻里の形は崩れ、真っ黒に炭化して、ひび割れていた。

紅倉は、右手を下げた。

麻里は少し悔しさを滲ませて、訊いた。

『あの巫女たちは何？ おまえはどうして平気なのだ？ おまえは……、死んだはずだ……』

紅倉は冷たい顔で言った。

「あなた、神のテリトリーの中で絶対の自信があったんでしょ？ だからね、わたしも自分のテリトリーを作ったの。あなたの読んだ通りケイさんの特殊能力を借りてね」

『だが……おまえはその中で中毒を起こして自滅したはず……。どうして……？』

「あの時は危なかったわよ？ あなたがもう少しじっくりわたしをいたぶって、わたしのテリトリーの中に入ってこなかったら、わたしもあなたに幻を見せられずに、本当に死んでいたかもね？」

『幻……？ あれは……、幻を見せられていたのか？……』

幻にきゃっきゃと喜んでいた自分の滑稽さに腹が立ち、麻里は紅倉を恨めしく思った。

紅倉はふうとため息をつき言った。

「わたしねえ、ある人に、おまえは才能だけの素人だ、ってさんざん嫌味を言われたんだけど、それは、神の力に頼り切ったあなたにこそ当てはまる評価だったようねえ」

『神を頼って……。わたしには、産まれたときから、それ

しか生きる道はなかった……………」

「ま、そうかもね。人は所詮、与えられた環境の中でしか生きられないものよ。不幸だったわねえ？」

ま、お説教なんて聞きたくもないでしょうから解説してあげるわね。

あの巫女たちはね、わたしもさんざん苦しめられて、毒がたつぷりわたしの中に残っていたのよ。それをあなたの神様の霊力を使って再生しちゃった。うふふう、わたしのスキルも大したものではない？ あなたをやっつけられるし、あの神様は巫女たちの毒が怖いだろうし、一石二鳥ね。あはははは」

紅倉は乾いた笑い声を上げ、麻里は嫌な女と思った。

紅倉がまたスツと冷たい顔になった。

「あなた、助けてほしい？」

『助けてよ……………。ケイは助けるんでしょ？ だったら、わたしだって助けなさいよっ！』

麻里の霊体は悔しさを吐き出し、紅倉は呆れたように表情を和らげた。

「はいはい、助けましょう。ほら、興奮して大声出すと顔が崩れちゃうわよ？ ……でもねえ、条件付き」

『何よ？』

「悪の道から更生すること。人生先は長いんだから、今からでも十分明るい世界で生きていけるでしょう？」

『フツ、フッフ……………』

麻里は意地悪な少女の顔に戻って笑った。

『あんた金八先生？ やっぱ説教するんじゃない？ 何よ、あなたわたしが憎いんでしょう？ どうしてそんなこと言うの？ そこまで、子どもだと思って、馬鹿にするわけ？』

「困った子ねえ」

紅倉はあごに指を当て小首をかしげた。

「わたし、けっこうあなたのこと好きなんだけど？ あなた、かわ

いいわよ？」

『……そうやって、馬鹿にする……………』

「じゃあねえ…、どうする？ このまま惨めに死ぬ？」

『助けなさいよ』

「じゃあ更生」

『分かったわよ。これからお利口になってあげるわよ。それでいいでしょう？』

「はい、けっこうです。ちょっと待ってね？」

紅倉は貯水池に下り、向かいの岸によいしょと苦勞しながら這い上がった。

死んだように動かない麻里の体を赤い血溜まりから外へ引きずり出した。

「はいはい、いらっしやい」

紅倉が手招くと固く炭化した麻里の霊体は引き寄せられるように飛んできた。

「変換」

紅倉が触れると、炭の体が白く燃え、じんわり熱を放ち、表面が溶けるようにして瑞々しい白い霊体に戻った。

健康な霊体に戻った麻里は素早く紅倉から離れた。

『アハハ、バーカ。馬鹿にして舐めた真似してくれて。誰が今さらいい子ちゃんになんてなるのですか！』

紅倉は呆れた。

「まあ。悪い子ちゃん」

麻里の霊体は黒い水路を背に言い放った。

『死ね！ 紅倉！』

冷たい静寂がたたずむばかり。なんの激烈な変化も起きず、麻里の顔を驚愕が立ち上り、悔しそくにキツときつくなると、

『お父さま！ いい加減になさって！』

と水路を振り返った。

「ねえー、麻里ちゃん」

気の抜けた声で呼びかけられ、麻里はキツと振り返った。

「あなたもわたしのこと馬鹿だと思ってる？ わたしはね、」
ひどく意地悪な笑いを浮かべた。

「わたしに仕返しをするような敵を、そのまま逃がしてやったりはしないのよ？」

「……………どういふことかしら？……………」

「あなた、自分で気づかないの？ あなたのお父さま、とっくにあなたを見限って、霊体のリンクを解いてるのよ。もうその子とわたしは無関係ですからどうぞお好きになさってください、ってね」

「……………そんなはず……………ない……………」

麻里は後ろを向いてじっとしていたが、おどおどした悲惨な顔で振り返った。視線を落として、紅倉を見ようとしない。

「ほら、さっさと体に戻りなさい？ 死んじやうわよ？」

紅倉が手招くと大人しく飛んできて、紅倉の横を通り過ぎ、横たわる肉体に入っていた。

「……………はあっ、」

麻里ががばつと起き上がり、

「うえっ、ぐえっ、」

また気持ち悪く吐き散らす続きをやるうとして、恐ろしい目で紅倉を睨み上げると、

「殺してやるう……………っ！！！！！！」

起き上がって飛びかかってきた。紅倉は右手を突き出し、炎を放った。

「ぎゃああ……………っ！！！！！！」

麻里は再び炎に全身を巻かれて踊り狂った。口からも青い火を吐いている。炎は一通り麻里を焼くと、ポオツと天井に燃え上がり、麻里の体から去った。

麻里は目玉をひっくり返して、どおつと倒れた。

「浄化の炎よ。苦しかったでしょうけれど、体に染み込んだ霊的毒素を焼き払ってあげたから、きれいになったわよ？」

紅倉は倒れて答えない麻里を覗き込み、ふう、と息をついた。

「あなたはこれから明るい世界で清く正しく、明るく生きていくの。あなた自身を守るためにね。ま、悪くないと思うわよ？ 人生楽しむことね。……………あ、」

紅倉は何か思い出し、舌を出した。

「麻里ちゃんに訊こうと思ったことがあったんだけど……………ま、いっか」

大した用でもなかったようだ。

そして。

「さて。」

怖い目で黒い水路の奥を睨んだ。

100 神いじめ

紅倉はざぶんと貯水池に下りた。途端に、バリバリバリッ、

と凄まじい雷が襲ってきた。紅倉の体を丸ごと吹き飛ばしてしま
いそうな巨大な青白い電気の大砲は、しかし、
「むん」

紅倉が飛び降りると同時に突き出した右手を避けるように幾筋に
も分かれて後方へ走っていき、「バリバリバリッ」と凄まじい音を
立てて壁板、天井を破壊していった。

「バリバリバリッ」

第2波が襲ってきた。

「むん！」

今度も紅倉の右手に弾かれ後方へ幾本も渦を巻いて走っていき、
凄まじい音と震動を上げて構造体を破壊した。

「ここら、麻里ちゃんまで焼けこげちゃうでしょうが？」

バリバリバリッ、

「うるさい」

紅倉が両手を開いて突き出すと、水路の入り口に栓がされたよう
に、雷が真っ白に光り、

「ドッオオoooooooooooo」

と爆発を起こし、

「ガラガラガラン」

と物凄い轟きを発した。天井から木片と岩が落ちてきて紅倉の周
囲にもバシャバシャ落ちた。

ゴオオオオオオオオオオ……………、と雷鳴が長く轟き、ビリビリビリ
ッ、と空気と部屋が震えた。

その轟音の中で、

「……………」

水路の奥から何とも言えない悲惨で不気味な悲鳴が上がっていたように思う。

紅倉は水を蹴りながら水路へ進んでいった。天井の低い通路に入ろうと屈み、

「まだやる気？」

右手を突き出すと、

「グオオオーッ」

と、まるでサイボーグのように火炎放射を發した。真っ黒な通路を赤々と照らし出し、奥から今度ははつきり、

「キイヤアアアアアアアアアア」

と、木が軋むような、生き物ともななんともつかない悲鳴が響いた。

「フン、懲りたか」

紅倉が火炎放射を納めても、奥の方でチロチロと赤い火が燃え、更に奥へ、もそもそと逃げていく。

「ふふふー、だ。わたしの方がまだ足が速いわね」

紅倉は屈んでバシャバシャ水路を進んでいった。しばらく行くと少し広い、天井のなんとか立って歩ける高さの通路に出て、左右に分かれる水路を、

「こつち」

迷わず進んでいく。焦げ臭い臭いが漂ってきて、

「ほーらほら、隠れたって駄目だよーん」

水路が枝分かれた水槽に入っていく、ゴオオツと炎を走らせた。柱に火がつき、室内を照らし出した。柱が並び立ち天井を支えるプールの奥に、背中焼けこげた「神」がとぐるを巻くようにしてじつと潜んでいた。それはまるで小動物か知能の低い水生生物が、なんでボクを虐めるの？、と怯えて問いかけているようだった。

紅倉は向き合って言う。

「ま、あんたがそのまま悪って訳じゃないんだろっけれど、あんたは悪の元なのよ。あんたの存在そのものが人間と相容れず、あんたに関わる人間を、不幸にしているのよ」

紅倉が右手を突き出すと、「神」ははつきり怯えて震えた。ふるふると、泡の固まりのような白い、醜い体を揺すり上げて。

紅倉はさすがに哀れに思ってたか炎を発射しなかった。

「わたしがこんな芸当の出来るのもあんたの『神』の力を利用して
いるから。あんたはねえ、人間にこういうことをさせちゃうのよ」

紅倉は駄目なペットを躡るように、無慈悲に、炎を放った。

「ぶぎゅああああ、ぶぎゅるるるううううう」

声帯を持たない白いぶよぶよの固まりは、水しぶきを上げ、腐った息を吐き出して、汚らしい悲鳴を上げてのたかった。オレンジ色の炎の中でビカリビカリと青白い放電をして、なんとか火を消そうと霊力を放っている。それは空気と地を揺るがし、水槽に激しい三角波をいくつも突き上げた。

「おまえは、なんだ？」

炎を放ち、燃え上がらせ、悲鳴を上げさせる。

「答えてみる、おまえは、なんだ？」

炎が放たれ耳を塞ぎたくなる悲惨な悲鳴が響き渡る。

「答えるっ！」

激しい炎がゴオツとなぶり、白い体が沸騰してプチプチ破裂した。紅倉は火炎放射を納めた。冷たい顔で言う。

「分からないんだろう？ 哀れな奴め」

ぶすぶす黒い煙を噴いてくすぶっていた「神」は、静かに、じいっと考え込むようにし、ぐつぐつぐつと内部をうごめかせると、バリツと青く眩しく輝くと、部屋中にその青い光の網を広げ、紅倉を覆った。紅倉は首をかしげ、

「今度は糸を吐いた」

その光の網が紅倉を捕らえるべくぐつと縮まってくると、

「触ってみろ！」

紅倉は全身から真っ赤に灼熱したオーラを発した。紅倉を捕まえようと迫っていた光の網はもろに赤いオーラを噴き上げられ、

「ぶぎゃあああああぶつづつづつづつづつづつ」

「神」は神経をまともにあぶられたように絶叫して暴れ回った。
ゴゴゴゴゴ、と地鳴りが響く。

「おまえは誰だ！」

紅倉が噴きだしたオーラを「神」に浴びせた。「神」は赤いガスに包まれ窒息するように暴れ回った。

「おまえはもう、誰でもないっ!!」

「神」の体が真っ赤に発光し、ぼこぼこ大きなこぶを作ってたごめかせた。

「おまえにはもう、『自分』なんて高尚なものは、とつくに無くなっている!!」

「神」は真っ赤に沸騰した。

「おまえは、とつくの昔に、死んでいるんだっ!!!!」

「神」は、

「自分が死んだことさえ、覚えてもいないかっ!!!!??」
ボコンと膨れ上がって、爆発した。

「ぶぎゅつあああああああつつっつ」

黄色い汁をまき散らして、「神」の「肉体」がバラバラに吹き飛んだ。

天井や柱にぶつかり、汚く潰れて張り付き、ボドボドとプールに落下した。

「ブシューー、ブシューシューシューシューウー……」

水の中に残った壊れた体が水蒸気を吐きながら必死に「生きよう」ともがいた。

「いい加減その体を死者に返せ。その肉のほとんどは巫女や、生け贄の女たちを食った物だろう？」

男の本能だけは嫌らしく持ち続けているか？

生き続けるのがそんなに大事だったのか？

子を作るのがおまえの使命か？

とつくに終わっているのよ、そんなもの、おまえが死んだ時に。

周りの者の期待か？ 執着か？ おまえはそれに応えたかったのか？

いまだに応えようとしているのか？

男の体には取り付き、いまだに『男子』として自分の子孫を残そうとしているのか？

そんな物はもういらぬのよ。

おまえはもう、あらゆる意味で誰でもない、ただのバケモノだ。この村の連中も、みんな、おまえがバケモノにしてしまった。

おまえはもう、生きていてはいけないモノなのよ。

おまえに罪の無いのは分かる。おまえは今も、村の人間、おまえの力を必要とする人々の思いに応えようとしているだけなのだろう。だから、

わたしは、

鬼

になる！」

紅倉の体が白く輝き、紅倉自身からももつもつと白い湯気が上がった。

「うわあああああああああああああつっ」

部屋全体が赤く染まり、水の中にポコポコ泡が浮きだした。

「・・・ぶぎゆうー、ぶしゅ、ぶしゅぶしゅぶしゅー……」

湯気の立つプールの中で神の残骸が力無くのたくった。

ポコツ、ポコツ、ポコツ、と大きな泡が次々弾け、赤い部屋いっぱいになり赤い湯気がもうもうと立った。

「うわあああああああああつっ」

固く湯で上がった「神」がゴロンと丸く浮き上がり、パリッ、と皮が弾け、中身がめくれ上がった。

「わあああああ・・・あ・・・あ………」

紅倉の体が突然ぐらりと傾き、自分の熱したお湯の中に倒れ込んだ。

「バチンッ」

「神」がすっかり中心までさらけ出し、わずかに残った柔らかさの中からいくつかの青い光の玉が飛び出し、倒れた紅倉を避けて通路へ逃げていった。

紅倉は腕を突っ張ってザバツと顔を上げた。ゲホツゲホツと咳き込み、ハアハアよだれを垂らして息をついた。疲れた目で振り返り、「くそっ……、まだ魂を取り逃がした……」

くっ、と頑張って体を起こし、立ち上がった。ふらふらよるめきながらなんとか体勢を保つ。

「ああくそ……、体が重くて、だるい……。ちつつくしょう……」

辛そうに顔を歪めながら足を動かそうとした。麻里に勝利した紅倉だったが、やはり相当ひどくダメージを受けているのだった。それに、いかに神の溢れ出すオーラを利用しているにしても、

「靈力の使いすぎね。保たないわ……」

どうにもならずその場にしばし立ち尽くした。

少し休んでなんとか持ち直した紅倉は、疲れた暗い目で神の残骸を眺め、暗く笑った。

「食ってやろつかしら、これ」

ザバツ、……ザバツ。重い足を引きずりながら歩き出した。

ペンションもみじにもはや誰もいないことを確認した芙蓉は、表に出て紅倉と落ち合う約束の墓地裏の社へ向かおうとした。位置的には正反対の所だ。状況的に平中たちは既に脱出したと見ていいだろう。

「行くわよ、ジョン」

超大型ラブラドルリトレバーのジョンを従え坂向かって駆け出した芙蓉は、

「パンツ」

後ろから撃たれた。

「えっ……」

背中を撃たれ、肺がせり上がって肋骨に押し付けられ、芙蓉は、『どうして?……』と信じられない思いを抱きながら、倒れ、意識を失った。

驚いたジョンが現れた狙撃者にうごと牙を剥き、「ガウツ」と襲いかかった。

「パンツ」

撃たれてジョンは宙で踊って、落下した。倒れて、起き上がるうとするジョンに、狙撃者は歩み寄ってきて、狙いを定め、

「パンツ」

2発目を撃ち込んだ。ジョンは四肢を跳ね上げさせ、動かなくなった。

狙撃者は慎重にピストルを構えて二者の動かないのを確認すると、坂に向かい、村へ歩いていった。

村長宅。

修理の終わったエレベーターが1階に上がってきた。応接間の隣の狭い部屋で固唾をのんで村長たちが見守っている中、年代物のグレーのドアが開いた。一般のエレベーターよりはるかに小さな小柄な一人乗り用の箱の中で、紅倉が膝を抱えて座っていた。

村長たちはゾワツと背筋が震えた。三度起こった地震と不吉な胸騒ぎにもしやと予想していたが、悪い予感が当たってしまった。地震の起こった時にある程度あきらめの気持ちになっていた村長だが、もはや驚くまいと思っていたのが、現れた紅倉の様子には思わずビクリと後ずさりさせられる、凄惨なものがあつた。

「どっこいしょ」

紅倉は大儀そうに起き上がりながらエレベーターを下りた。

「ああそう言えばお婆ちゃんのエレベーターがあつたわって思い出して良かったわ。はい、おみやげ」

村長はポンと手渡された物を、思わず放り出した。

「あらあら罰当たり」

村長はじつとり脂汗を浮かべて床に放り出してしまった物を凝視した。パツと見たところ脂身付きの分厚いステーキ肉のようだが、実状は大きな魚卵のように丸い粒が集まった物で、カチカチに固まって、色は表面が白く、内部がオレンジ色で、片面が焼けこげ汚く茶色になってべったり潰れている。

村長は恐ろしいぎよる目で紅倉を睨んだ。

「『神』か？……………」

紅倉はニツと凄惨に笑った。

「『神』…ね？　これが？　訊くけど、あなた方はこれをなんだと思ってるの？」

「『神』は……………、『神』としか言えん……………」

「嘘おっしやい」

紅倉は白けた目で睨んだ。

「なあにが『神』よ？　こんなのは、

死んだ人間のガン細胞の集まり

でしょうが。なあにが、

神は永遠に死なない、

よ？　こんな奴、

最初っから死んでんじゃないの？」

村長は飛び出そうに目玉を剥いた。

「『神』は、生きておられた！」

「生きてなんかいないわよ。現代医学じゃね、脳死は人の死って認められているのよ。」

あなた方は先祖代々、死体のガン細胞を、無理やり増殖させていただけじゃない？

まあね、曲がりなりにも『生き物』らしくまとまった形を保っているのは大したものだと思うわよ？　それも大学の研究室でもなくこんなところだね。

やっぱり霊的なまじないをしたんでしょね。あんな物が自分で運動するなんてあり得ないものね。

あれは動物的な肉体と言うより、靈魂を溜め置く袋でしょう？　なんとか無理やりでも肉体を『生き続け』させようとし、魂を現

世に留め置こうと『呪い』を掛けた結果、肉体はぶくぶく膨れ上がり、霊媒物質をありったけ吸い込んで、あんなバケモノが出来上がったのだわ。

霊媒物質を大量に蓄え込んだバケモノは、異様な霊能力を身につけ、人を呪い殺すほどの、『神の力』を手に入れた。

どういう事情の人なのか知らないけれどね、その『呪い』を恐れる人たちがいたんでしょうね。その人たち、きつと大きな権力を持った人たちによってこの村は『聖域』とされた。

元々山の洞窟の奥に作った神殿が『神様』のおうちだったんですよ？ でもすっかりバケモノになった神様に巫女たちを何人も食い殺されて、すっかり穢れてしまった。

神の寝所をきれいに整える必要があつて、この村を整備した。

神も巫女たちを食って……、体に寄生して癌化して取り込み、大きくならずぎて生かし続けるのが大変になった。

日光を嫌う裸の細胞を守るため神は地下で水に浸っている必要があつた。村に広く地下水路を造つて神を迎え入れた。神を迎えるために昔のおうちからも水路を引いたのね。

山から水を引いて村に巡らせている水路は神の住居に新鮮な水を循環させるさせるため。いったん広場周りの水路に集めて、水量調節なんかやってるんでしょ？ たくさん建っている水車も小屋に換気扇を設置して新鮮な空気を送り込むため。細胞を維持する栄養液を日常的に与えるための穴なんかもあるんでしょ？

この村は……、

昔はもつと下にあつて狭かつたんでしょ？

そこに神の水路を掘り、蓋を被せ、……今は電線の鉄塔やアンテナがいつぱい並んでいる山ももつと高く尖っていたんでしょ？それを切り崩して、その岩と土で土地を埋め立てて、神の通路を地下に埋め、谷底の土地を底上げして結果、表面積が広がった。昔の神の家も、今は地下になつてるけど、当時は普通に洞窟の奥にあつたんでしょ？

大工事だったと思うけれど、その昔、ここは中央に対してそれをさせるだけの権力を持っていたのよね？

そつだ、神の通路もそんなに深く作る必要もなかったんでしょけれど、地下水を使いたかつたんでしょ？ 呪術者たちは呪いの研究を進めて、より広く、より強力に呪いを発動させる方法を編み出した。工事のスポンサーの要望だったんでしょね、『国』という物が広がり、国を支配するのと、外敵をやつつけるのと、両方の必要があった。水は霊体が最も溶け込みやすい、力を伝えやすい物質だから、特に地下水は外に力が逃げるのを防いで、日本全土をカバーするのに都合がいい。相手を見るだけなら霊波を飛ばして空から見ればいいけれど、物を動かすような強力な力を発揮するには空気はいまいち適さない。まずは地下水を通じて力を運び、その後地上で細かな作業を行うのね。ここは、元々は都から離れた地方の隠里だったんでしょけれど、時代が進んで図らずも地理的に日本の中心に位置していた。ご近所に『日本のへそ』の町もあるものねえ？ その頃その工事のスポンサーになった人たちは直接『神様』の呪いのターゲットにされるような人たちでもあった。だからその力を利用してながら、逆に怒りを買って自分たちが呪い殺されないようにずいぶん手厚くお世話してくれたんじゃない？ でもその後世が移り変わり、権力者も移り変わり、この地には呪いの力だけが残った。その力に色目を使う権力者もいたでしょうけれど、この村は自分たちの出自に誇りを持ち、自主独立の道を選んだ。当然それを許さず潰しに掛かる権力者もいたでしょうけれど、この村は神の力を武器にそれをしのぎ、今日この日までそれを貫いてきた。

長い激動の歴史の中で不動の位置を保ってきたのは、まあ？、立派といえ、立派、かしらねえ？」

「出てきたと思ったらまあ、ペラペラとようしゃべりおるおなごじやのつ」

村長は呆れた口調で言いながらむつつり紅倉を睨んでいた。狭い

部屋に村長、助役、保安官、校長、公安リーダーが押し掛けている。「こんな所で立ち話もなんだ、こっちにお出でんさい。濡れておるのう、助役や、奥からバスタオルを持ってきておあげな。ああ、紅倉さん、ここは室内じゃ、靴は脱いでくだされや」

村長は忙しく言っつて男たちを部屋から追い出し入り口を開けた。

紅倉は床を指さし、

「おみやげ」

と言った。村長は苦々しく振り返り、

「神を……殺したんか？……」

と訊いた。紅倉はコックリうなずいた。

「死んだわよ。細胞の一個まで、完全にね」

村長は口の端を引き下げ、情けない顔になって、

「なんちゅう……、罰当たりを……」

と落胆した。

102 人殺しの罰

紅倉はいつもの調子でペラペラおしゃべりしながら、実は死ぬほど疲れていて、すっかり足首までガードするスニーカーを脱ぐのにまたべったり床にお尻をつかなければならなかった。脱いだ靴を、

「玄関に置いておきましょう」

と校長が受け取り、紅倉は

「ありがとう」

とお礼を言った。よいしょと壁に手をついて立ち上がり、

「あら広岡さん。怪人二十面相」

と信木保安官を指さして笑った。

「ははは。失礼しました。ご存じでしょうが、カウンセラーの信木です。改めまして、よろしく」

「はいはい、どうも」

と、紅倉はもう一人、中年男に目を移した。廊下で「村長。バスタオルはどこですかいなあ?」「ええいおまえさんも役に立たんのう」とやり合う声が聞こえた。

「悪者」

子どもみたいに指さして言う紅倉に日本太郎は苦笑いした。

「こつちが正義の味方だよ」

「公安さん?」

「コウアンさんたあ坊主みてえだが、そつだよ、俺が公安だ」

「わたしを殺す?」

「いや。あんたを見て、個人的にはその気が失せた。麻里つて娘と神を殺したのか」

「わたしは人殺しじゃないわよ? 麻里ちゃんは生きてます。ちよつとお灸が効きすぎてるかも知れないけど」

「そつかよ。余裕だな」

「えっへん。まあね」

日本太郎はフツと哀れに笑った。この女、目が見えねえんだよな、と思った。

「お待たせしました」

助役がバスタオルを持ってきた。紅倉は受け取って髪の毛をぐしやぐしや拭いた。

「あーあ、乱暴にするな。貸せ。拭いてやる」

日本太郎が見かねてタオルを取り、頭と背中を拭いてやった。

「セクハラ」

「うるせーよ。俺はグラマーな女が好みなんだ。あんたみたいな瘦せっぱち欲情しねえよ」

足まで拭いてやり、

「ほらよ。無い胸は自分で拭きやがれ」

とタオルを押し付けた。もちろんパークと厚手のパンツの上からのことだが、芙蓉が聞いたら激怒することだろう。

紅倉が拭き終わると、

「ささ、火に当たって、乾かしてください」

と助役が如才なく隣の居間に招いた。

紅倉が出ていった後、びちゃびちゃ濡れた板間には、大量の毛髪が散らばっていた。

村長が箸で炭を転がし、火鉢の側を勧められた紅倉は言われたまま近づいたものの、

「ピリピリする」

と痛み、廊下まで逃げた。

「その部屋、暑いわ。ここでいい」

と言いなから寒そうにバスタオルを頭から被って肩を押さえた。

「そうか。じゃあ、助役や……。離れに行って、千枝子に言って毛布を出してもらっておいで」

「はいはい。行ってまいります」

助役は「役立たず」を自任するように困った笑いを浮かべながら

奥へ入っていった。

「そこでいいんかい？」

「はい。けっこうです」

紅倉は廊下にぺたりと座り込んだ。

「村長さん。ケイさんを祭の捧げ物にするのは中止していただけたね？」

村長はぶ然と、

「わしは最初からケイをそないな目に遭わせる気はないわい」

と信木を睨んだ。信木はニコニコして、

「もちろん。木場田団長にちゃんと言いつけておきましたよ。……

はて、木場田君は戻ってきませんねえ？　なんだか銃を撃つ音が聞こえたが、それを調べに行ったかなあ？　広場の団員たちも解散したらしいし……、村はすっかり人手不足で、事が起こっても対応に苦慮しますよ」

と困ったように言った。紅倉は白けた暗い表情をしたが、今は何も言わなかった。ひどく、疲れて、辛いようだ。

村長は、哀れんで紅倉を眺めた。

『神殺しの罰か』

と思う。

今の紅倉に宝石の輝きはなかった。ひどく汚れて、傷だらけだった。

顔と手と、水膨れに覆われ、裂け目だらけで、どろっとピンク色の汁が流れ出ていた。眉毛もほとんど抜け落ちている。唇も腫れて半開きの口で「すー……、すー……」と呼吸している。服の下の全身がこんな感じだろう。

こんなことまでせんでもええのに……

なんでじゃろうな？　なんでこの人は、ここまでせんにゃならんのじゃろうな？……………

自分たちから大事な物を奪ったにつくき敵ながら、彼女の失った物を思うと哀れで涙が滲んできた。

なんでここまで？　何故だ？

紅倉が肌の痛む首をゆっくり向け、疲れた目で村長を見て、その動機を話そうとした。

「はいはい、お待たせしました。毛布を持って参りましたよ」

明るい声で、間が悪く、助役が毛布を持ってきて、ついでに新しいバスタオルを持ってきて紅倉が頭から被っている物と交換し、毛布を広げて肩から掛けてくれた。村長は話の流れを止められて苛々したが、紅倉は前向きな日和見主義を好ましく思った。

「助役さん。赤ちゃんたちの様子はどうでした？」

「ええ。二人とも疲れてぐっすり眠っておりますよ」

助役は麻里の出掛けに赤ん坊を押し付けられ辟易したが、それでちよつと情が移ったらしく、ニコニコ嬉しそうに言った。

「そうですね。それは良かった。ねえ助役さん。あなたを見込んでお願いがあります」

「わたしを見込んでですか？　そりゃいったいなんですか？」

助役は四角い顔をニコニコ丸く膨らませて訊いた。

「赤ちゃんとお母さんを連れて、村を出てくれませんか？」

「へ？　村を？　いつ？」

「今すぐ」

「へえ？……………」

助役はどうしたものかと村長を見た。紅倉が村長に言った。

「念のためです」

それから奥ですっかりくつろいでしまっている様子の校長に顔を向け。

「校長先生？ あなたにもお願いします。子どもたちと家族を、村の外に避難させてください。今すぐ」

「村長、どうしますかな？」

村長は怖い顔で紅倉を見て訊いた。

「神は、殺したのではなかったかな？」

「ええ。ですから、念のため、です」

村長は怪しんだが、紅倉は愛想笑いを作って（あまり上手くないかなかったが）ごり押しした。神の魂は取り逃がしてしまった。神の力を体内に持つ若者たちもいる。まだ後始末が残っているのだ。今の自分の状態を考えると、どういうことになるか分からない。

「ま、ええじゃろ。助役、校長、ご苦労じゃが、そうしてくれ。町に出て、皆でホテルに泊まってくれな」

村長はもうすっかり諦めたように言い、信木保安官に、

「ええじゃろう？」

と確認した。信木はうなずき、

「どうぞ。ご随意に」

と了承した。

「へい、それじゃ。ソウジユウ、行こや」

兄の助役が弟の双十郎校長に言い、

「へい、それじゃ。皆様、失礼いたします」

校長は挨拶して立ち上がり、兄弟して部屋を出、兄は離れへ、弟は玄関に向かった。

二人が行ってしまつて、

「話してくれますか？」

村長が紅倉を見て言った。

紅倉の肌は、時間が経って腫れがひどくなってきた。目は重そうに閉じがちになり、ひどく疲れて、眠そうだ。それでも紅倉は話し出した。

「わたしたち、いったい何やってるんでしょうね？」

村長が怪訝そうに訊いた。

「何、とは？なんじゃね？」

「わたしはここに、最初から、安藤さんを捜しに来ただけだとさんざん言いました。ですよね？」

「そうじゃったな……」

「それなのに、変な横やりのせいですか？」

非難がましく公安を睨み、日本太郎はとぼけて肩をすくめた。

「安藤さんは既に信木さんが穴から助け出して病院に入院している
そうじゃありませんか？」

紅倉が非難の目を信木にも向けると、村長が、

「なんじゃと！？ 信木、それは本当か！？」

驚いて信木を問い詰めた。信木は涼しい顔で、

「ええ。その通りです。村の状況が把握できていませんでしたので
ね、内緒にさせていただけました」

と説明した。村長は愕然とし、

「なんじゃと？ おまえ、わしにも黙っておくて、どないな見じ
や？ それが分かっておれば、分かっておれば……」

改めて数々の後悔が胸に去来した。お婆に、ヨシに、黒木たちに、
ケイに、村の若者たちに……

無駄に死なせてしもつたじゃないか！……

信木の秘密主義が恨めしく思えてならなかった。信木は何とも思わないのか平然としている。じいっと信木を睨む村長に紅倉が訊いた。

「何人死にました？ ずいぶん、お亡くなりになってるんじゃないですか？」

「うむ……。ずいふんと……。死におつた……。」

村長は、自分が知っている以上に死んでいるのだろうと思った。自分が事態に気づいた後も、尚。

それもこれも、全てこの女、紅倉が来たせいなのだが……。紅倉はため息をついた。腫れた唇が苦しそうだ。

「わたしだつてね、来なくなつたんですよ？ 本当ですよ？」

あーあ、さつさと安藤さんを返してくれば、こんな所、さつさと出ていったものを」

恨みがましく、嫌みつたらしく、また不自由にため息をついた。唇に溜まった唾液がツーツとだらしなく垂れた。

「おかげでこの有様です」
ジロツと村長を睨んだ。

「神とは争わない、というのがわたしの一つのモットーだったのに、でも、この神は、『神様』じゃなかった。人間が自分の都合のいいように操っている、ただの巨大な霊力のバケモノだった。

人に操られる神など、神ではないわ」

「否定するのかね？」

村長がぶ然と問いただした。

「あんたは世の悪人に対して、この村と同じ考えをしておるんじゃないか？」

紅倉はうなずいた。

「そうですよ。世の中には絶対に許すことの出来ない犯罪があります。」

犯罪と言っても法律を犯すばかりじゃありません、それをされた人間が、血の涙を流して『許せない！』と思うような罪です。どんな言い訳をしようと、絶対に、許せないことが世の中にはあるんです。

死刑廃止を訴える人がいますが、わたしには理解できません。

復讐で人を殺しても殺された人が帰ってくるわけではない、復讐は新たな復讐を生み、虚しいだけだ。

殺された人は自分がされたのと同じ復讐殺人を望んでなどいないだろう。

ふんつ。

なんてお人好しな、くつだらな自己満足だろうと思います。

わたしなんか自分が殺されたら絶対お化けになって殺した相手を呪い殺してやるわよ。

復讐しても虚しいだけだ？ そうよ、虚しいわよ。でも、人を憎しみ続ける苦しみからは解放される。

殺された人間は決して帰ってこないわよ。当ったり前じゃない。でも、

生きていたときの思い出を素直に慈しむことは出来るわ。憎い相手が生きていたのでは、

愛する人が殺されたという、その時点から心は動かない、どんな前に進もうとしても、過去を慈しもうとしても、どうしたって『殺された』という時点に心は引き戻されてしまうのよ。

その人間が生きていては、

被害者は『憎しみ』という一点から決して前にも後にも、動くことが出来ないのよ。

死刑執行は、決して許されない犯罪の、被害者の、当然の権利よ」

「同じじゃあないか、我々、村と。何故、神を滅ぼした？」

「矛盾よ」

「矛盾、とな？」

「そ、矛盾。」

正しい事をしているはずのケイさんや、木場田さんや、この村が、その行いを守るために苦しんでいる」

「辛い仕事じゃ。じゃが、誰かが引き受けねばならぬ必要な仕事じゃ」

「ふうん。でも、いっぱいお金もらってるじゃない？」

「……わしら村にも生活はある。わしらは神に仕える仕事に奉仕している。奉仕と生活を維持するためにそれだけの金額も仕方なかるう？」

「村一丸の家業ですものねえ。でも、被害者は愛する人を失い、犯罪の悪夢に悩まされながら、更に巨額の支払いの負担をさせられるわけですよ？ ひどい話じゃないですか？」

「仕方あるまい。それともただで、ボランティアで人殺しを引き受ければ褒めてくれるか？」

「ええ。ご立派、と褒めてあげますよ？ ま、それで天誅を気取つただただの暴力馬鹿が大威張りで人殺しをするようじゃ困りますけれ

どね。あなた方は……まさかそんな輩じゃあないでしょうねえ？」

「疑うな。そんなんじゃあないわい」

「はい、失礼しました。じゃあ……、あなた方は人殺しという行為そのものには苦しめられている？ それとも、もうすっかり、人を殺すことに麻痺してしまっていますか？」

「……………」

「ま、あなた方のことはいいですが、話を戻して、

犯罪において、犯罪後の負担を、被害者が受け持つのはおかしい。犯罪の被害者側が、更に犯罪の社会的意味の被害者になるのはおかしい。

裁判のことを言ってるんですよ。特に加害者に同情的な、あくまで加害者の更生を目指す弁護側の。

わたしは死刑廃止に明確に反対します。

加害者を殺さなければ、救われない被害者がいるからです。

加害者にも犯罪者にならざるを得なかった不幸な事情がある。

でもね、

同じ事情を抱えていたって、決して犯罪者にならない人間が、大多数なのよ。

凶悪犯罪を犯すのは、その人間がそういう人間だからという、当たり前前の事なのよ。

……なんてことを言えば弁護側に『あなたは何も分かっていない』と叱られるんでしょうね？

きつと加害者の不幸な、ひどい過去を、これでもかこれでもかで見せられるんでしょうね？

でもね、そんなこと、

犯罪の被害者にはどうでもいいことなのよ。

じゃあ自分がどうして殺されたり、レイプされたりしなければならぬのかなんて

理由には、

全然ならないのよ！

加害者の不幸を、被害者がひどい目に遭わされて、慰めてあげなければならぬ理由なんかにはね！

弁護側は加害者の不幸を披露して被害者側に『許し』を求めるんでしょうね？

裁判という公の場で許しを求めるということは、社会にその『許し』を認めてもらおうと言うことです。

被害者側に社会の一員として『許し』を認めると言うことです。では、

それは『社会』が自分の不備のせいで加害者の不幸を見逃してきた『罪』を、被害者に一方的に押し付けると言う事じゃありませんか？

自分のせいにくせに、それを棚上げにして、不幸な被害者に、ま、かわいそうな人なんだから許してあげなよ？、なんて、何様のつもりよ？、馬あゝ鹿。てめえで責任持てつてえーのよ、馬あゝ鹿。」

村長は紅倉の興奮した壊れぶりに呆れ返った。

と、紅倉はくるつと冷たい目になって言った。

「だからね、矛盾なのよ。」

被害者も社会の一員。加害者の不幸を知らんぷりしてきた社会の一員で、広い意味では、確かに、加害者に対して罪があるのよ。

だからね、わたしも、被害者が自分はこんなにひどい目に遭ってこんなに苦しんでいるのに、どうしてみんなもつと真剣にわたしのことを考えてくれないんですかっ!？、と涙ながらに感情的に訴える姿は、鬱陶しいな、と、思っちゃうのよね。

じゃあ、あなたはどうなの？、と思うわけ。あなたは自分が被害者になってそんなに社会の無関心を怒っているけれど、被害に遭ったのがあなたじゃなかったら？ あなたはそんな風に他人の被害に熱心に同情したの？、ってね」

村長は困って眉をひそめた。

「あんた、けつきよく、どっちの味方なんじゃい？」

紅倉は肩をすくめ、痛そうに顔をしかめた。

「それも矛盾。わたしだって社会の一員ですからね。だからねえー……………、それが、

今の人間の限界

だと思つたのよ。

わたしたちがこの社会で生きている以上、わたしたちはこの社会を守らなければならない。

この社会で生じてしまった『不幸』は、どうしたって誰かが犠牲

になつて帳尻を合わせなければならぬ。それをしなければ、わたしたちはこの社会を維持できない。あなた方がこの村を守ろうとするのと同じようにね。

でも、その犠牲を犯罪の被害者が払わなければならないというのはおかしい。それをしていたら、

この社会で真面目に正しく生きている人々が、社会そのものを信じなくなってしまう。

社会が、壊れてしまうわ。

犯罪の罪は、それを犯した人間が償うのが正常です。

決して許されない罪を犯してしまった者は、その者にどんな事情があろうと、死罪を以て償うのが社会の正常な在りようなんです。

ここで弁護側、死刑反対論者は言うのでしよう、

社会の不備を不幸な人間の一時の過ちに押し付け、社会の犠牲にするのか？、と。

その通りです。

かわいそうなのかも知れませんが、犠牲になつてもらわなければ収まりが付きません。

それが我々、今の社会の、限界なんです。

死刑反対を訴える人間は、それならば、人を死刑になんてしないで済む社会の整備をこそ考えるべきなんです。

この数年裁判の様子を伝えるニュースの中で『被告は犯行時心神耗弱（こうじやく）の状態にあり』『責任能力はなかった』という弁護側の言葉がよく聞かれるようになりましたよね？ どんな殺人事件の裁判でも馬鹿の一つ覚えのよう。

ここにも矛盾があります。

そういうことで通り魔殺人がなんでもかんでも許されていたら、当然、じゃあそんな危険な精神病を患った人間はみんな施設に閉じこめて厳重に管理しておけ！、という声上がるでしょう。社会が

自分の身を守るための当然の論理です。

となれば人権擁護派は当然人権論を持ち出して牽制するでしょう。そうして、また、誰も悪くない凶悪殺人事件が発生する。

誰も彼もが責任を誰かのせいにして、結局、誰一人責任を取らず、罪人のいない犯罪の被害者だけが一方的に多大な損害を被る。

ね？ これで社会がまともに維持できる？

だからね、

矛盾を承知の上で、

犯罪の責任は加害者が負わなければならないのよ。それが社会の犠牲だとしてもね。

それが、悪、だとしてもね。

その罪も、誰かが負わなければならない」

紅倉の腫れた唇が割れて、だらつと真つ赤な血が滴った。

自嘲するように笑って、言う。

「誰か個人がそれを負えば、その人は不幸になり、人生を壊してしまふ。

無理と矛盾があるのは分かっているのよ。社会は全然完璧なんかじゃなく、理想にはほど遠く、出来ないことだらけなんだから。だからこそ、

社会がそこから逃げずに、責任をきちんと引き受けなければならぬのよ。

そしてその社会を作っているのは間違いなくわたしたち一人一人なのだから、

社会は、まだまだ全然発展途上なんだから、

わたしたち一人一人が見識と思想のレベルを上げて、この社会を

良くしていくよう努力していかなければならないのよ」

じっと黙って聞いていた信木カウンセラーが言った。

「裁判員裁判にはわたしも期待したんですがねえ」

紅倉は信木を見て残念そうに笑った。

「そうですね」

紅倉は生来の性分でべらべら早口のおしゃべりを続けていたが、ふと言葉の途切れた瞬間にひどく眠そうにまぶたを下ろし、体を揺らした。ところがまた持ち直してべらべらおしゃべりを続ける。

どうやら頭が熱に浮かされているらしい。

全身これだけひどい怪我を負って、カッカと発熱しているだろうが、肌は漬れて汗をかけない。非常に危険な状態だ。

まだしゃべろうとする紅倉を

「分かった。もうええ」

と村長が制した。

「日本太郎さんや、あんた申し訳ないが直木医院に行つて爺さんを連れてきてくれんか？ 酒が回つて使い物になるかわからんがな」

「しょうがねえなあ」

日本太郎が立ち上がるうとすると、

「わたしは大丈夫です。お構いなく」

と紅倉が断つた。

「大丈夫には見えないがなあ？」

「天罰なんですよ？ そんなものに負けるもんですか」

相変わらず口は減らないが、しゃべってる先からぼうつとした顔になる。日本太郎は、

『こりゃあ保たねえかもしれねえな』

と思つた。

「それじゃあ村長、わたしら行きますんで」

助役が赤ん坊を一人ずつ抱いた婦人たちと小学生の女の子を連れて廊下に現れた。

「なんじゃ助役、おまえさんまだおつたんかいな？」

呆れる村長に助役は両手に持った荷物を掲げて苦笑した。

「生まれたばかりの赤ん坊はなにかと世話が掛かるようで。急ぎじや言っただんですがね」

「すみません」

後ろの婦人二人が毛布を被って廊下を塞いでいる紅倉をこわごわ見て頭を下げた。年輩の方が村長の孫嫁の千枝子さんで、若い方が双子の母親役を仰せつかった村の女だろう。女の子は曾孫で3年生の百子だ。ペンションもみじの海老原愛美が「お姉ちゃん」と慕う子だ。曾祖父さんに似たドングリ眼で、この村を離れば、将来ひよっとしてとんでもない美人に化けるかもしれない。村長は手を振って、

「ええから、早う行きなされ。また面倒なことが起こると大変じゃ」と追い立てた。

「はい。それでは失礼します」

赤ん坊は眠っているらしく女たちの胸にしっかり抱かれて声を上げなかった。村長は曾孫には優しく笑って、

「お母さんの言うことよう聞いて、赤ん坊たちの面倒見てやっておくれよ？」

と送り出した。百子は下級生には優しい良いお姉さんでも、大人は苦手らしく、固い顔で母親についてそそくさと行ってしまった。そう言えばその父親はまるで姿を見ないが……、広場の若者たちの中にいるのだろう。

後ろを助役と母親たちが通り過ぎても紅倉はうなだれたまま気づきもしないように見えたが、

「やっと行きましたか」

玄関で戸が開く音がするとおっくうそくに顔を上げた。

「赤ちゃんたちを怖がらせたくないですからね……」

信木保安官も日本太郎と同じ哀れを切り捨てるような冷静な目で

じつと紅倉を觀察し、言った。

「紅倉さん。それでは訊きますがね、

この呪殺村を潰してしまつて、では、いったい誰が不幸な犯罪被害者を救つてくれますか？」

あなたの言うのはもつともだ。それは、社会が制度の上できちんとしなければならぬことだ。が、

今の社会にそれが望めますか？」

改革改革と口ばかりで、ああでもないこうでもない、改革案なんてのは常に実効性に乏しい骨抜きにされるのが落ちだ。その付けは、現在進行形の被害者たちが払わされなければならぬんでしょ？

それが、正しいことですか？」

紅倉はウトウトしていた顔を上げて答えた。

「わたしの望んだ事じゃありませんけれどね、それこそ……、仕方ないでしょう？」

「仕方ないじゃあ困る。あなたにも責任を取ってもらいたいですなあ」

「わたしにどうしろと？」

「あなたに神になつてもらいたい。別に特別な事じゃない、この村に住んで、我々がお伺いを立てる事件について、あなたが判決を下し、刑を執行してくれればいいんです。それならあなたの倫理観にも背かず、不幸な被害者たちを救済できるでしょう？」

「そんなことならこの村で神様にならなくたって自分でやります」

「いくらあなたでも日本全国の被害者をカバーは出来ないでしょう？　ここならそれが出来る。そのシステムとノウハウはこの村が確立している。あなたはそれを利用して、この日本国の、正義の神となればいい」

「ううう……」

紅倉は嫌そうな顔で一応検討した。

「やっぱやだ。わたしはおうちに帰りたい。フリーの方が気楽でい

いわ」

「この村を破壊して、神を殺し、不幸な犯罪被害者たちの一縷の希望を奪い去って、ずいぶんな我が儘じゃあないですか？」

「ごめんなさいね。でも……、暗殺なら神様の力を借りなくたって、得意な人たちがいるでしょう？」

紅倉の嫌味な視線に日本太郎は密やかに笑った。

「神様なんか頼ってちゃあ、人間、進歩できないわよ？ 人間のことは、人間で解決するのね。神様っていうのはね、」

紅倉は天井を指さして言った。

「天の上から人間の愚かさを眺めて、たまに雷を落とすくらいでちよつどいいのよ」

信木はしばらく無言で紅倉を眺め、ため息をつくると残念そうに首を振った。

「駄目ですか……。あなたには分かっていたただきたかったですかねえ……」

「ご期待に添えずごめんなさい」

紅倉は目を閉じ、口で辛そうに呼吸した。眠りながら、そのまま死んでしまうのではないかと思われたが、

「さて」

目を開けると、「よっこいしよ」と大儀そうに立ち上がった。

「ケイさんの所に行きましようか。そろそろ魂を返してあげないと体の方も危険でしょう」

「よしなされ。あんたはここで休んでおればええ。ケイなら誰か若いもんに連れてこさせるで」

村長が止めたが、

「多分、若者たちはもうあなたの言うことを聞かないでしょう」

と、紅倉は毛布を置いて玄関向かって歩き出した。村長は不快そうに

「なんでじゃ？」

と訊いたが、自分なりの答えは既に胸にあるようだった。

「ちょっと嘘を言いました。実は、神はまだ完全に滅んでません。魂が抜け出して、おそらく、若者たちに取り憑いていると思います。生き残る道を探して」

「神が、復活するのか？」

紅倉はジロリと村長を睨んで言った。

「ですから、させません」

青黒い闇の中で土亀はゆっくりまぶたを開いた。

土亀恵幸（どきさとゆき）、自他共に天才を認める暗黒の陰陽師である。

これまでまったく物語の表舞台に顔を出さず、まるで忘れ去られたかのような男が、実は何をしていたかと言えば、何もしていなかった。

『「式」は既に立っている。時が来るのを待てばよい』

今長い瞑想から目を開けたということはその時が来たようである。『さて、それでは俺も出向くとするか』

土亀は塗り壁のように凹凸の乏しい長方形の顔にカツと目を見開き、開いたままぴくりとも動かなかつた。剥き出した目玉はガラスのようにつつろな瞳をしていた。

紅倉は体に危機的なダメージを負い、とりあえず動けるようになるまで眠ってしまわないようにおしゃべりをしながら休憩した。この時間のロスがケイの体に危機的状况を進行させてしまっているのは分かっていたが、『自分にも限界はある』、と突き放して考えていた。紅倉は「生き霊飛ばし」の技があつたが、今霊体が肉体を離れるのはすなわちそのまま死を意味した。紅倉もわざわざ死にたいとは思わない。芙蓉に怒られる。

足が腫れて靴が履けず、バスタオルを巻いてもらって代わりにした。なんとか動けるだけ体力を回復したつもりだが、村長宅から夜祭りの行われる社までわずか300メートルほどが、絶望的な長距離に思えた。

「いいから待ってる。車を回す」

日本太郎が広場から見える道ばたの鍵付きワゴンカーを見つけて走り出した。広場にはでかいゴリラプロレスラーの公安が独りぼつんと突っ立っていて、日本太郎は見とがめ、

「ゲンジ。おまえ何やってんだ？」

と訊いた。ゲンジとはもちろん光源氏などではなく北京原人とかいったものを指してのネーミングだろう。ゴリラから原人に降格？したゲンジはのぼつとした顔で、

「誰を殺つたらいい？」

と訊いてきた。日本太郎は呆れて、

「ぼつつとしてやがれ」

と走り出した。

村人のワゴンカーを拝借して広場に戻り、信木に肩を支えられた

紅倉に

「乗れ」

と命じた。紅倉と信木が後部座席に乗り、助手席に仏頂面の村長が乗り込んだ。

「ご老体も行くのかい？」

「ふん。村の『未来』とやらをこの目で見させてもらつたい」

紅倉がちよつと嬉しそうに言った。

「どうしたんです？ やけに親切じゃあないですか？」

日本太郎はルームミラーに目をやり、

「別にな。俺は結果だけでいいんだ。片を付けるんだろ？ その後

であんたをどうするかはまた上の指示待ちさ。行くぞ」

車を発進させた。

この時点で紅倉はもう知っている。

事が既に済んでしまっていることを。

この村の共同体意識は高い。墓地というのは春夏ならば緑に包ま

れたちよつとした小山の上に石造りの五輪の塔が立っている。その背中に箱がしつらえてあつて、そこに亡くなった者たちの名簿が収められている。これ以外に墓はない。大字村には寺もない。きれいさっぱり、死生観に爽やかな印象を与えるが、その小山の下はどろどろとした暗黒が隠されている。

神は死んだ肉は食さない。

だが死者の魂は食う。

死んだ村人は臨終後すぐに小山の下に隠された穴に放り込まれる。そこには累々と先祖代々の遺骨が積み重なっている。腐肉が骨をぶら下がり、したたり落ちて、軟らかな土となって下の骨を埋めていく。元はかなり深い穴だったろうが今やずいぶん嵩が溜まり、入り口から上の骨が覗けるようになってしまった。もう10年もすれば満杯になってしまいそうだ。

天井は漏斗を逆さにしたように上に向かってすぼまっていき、天頂に開いた穴は隣、社の境内の地下にある神の水槽につながっている。穴は天井を結んでいるので水は通っていない。腐った死体で神の住居を汚さないためだ。神はこの穴の出口で肉体を抜けた魂を待ちかまえ、食すのだ。そうして新しく得た魂の分肉体はブドウ糖で膨らむ。村人のあの世は天国もなく地獄もなく、神の中にある。輪廻転生も神の体内から村で新しく生まれる肉体へ行われる。

そう、だから夜祭りの秘祭は大事な神事なのだ。

墓地の裏の社というのは小さな物で、朱塗りのほこらがあり、その前の境内が10メートル弱ほどの正方形の広場になっている。砂利も石畳もなく土が剥き出しになっている。周りは覆い隠すように土が盛られ今は枯れた灌木が覆っている。

境内の四隅に篝火が焚かれ、ほこらの前に長方形の木のテーブルが出されている。「寝台」と呼んでいるが、これは普段は片づけられていて、こうして必要なとき必要な数を出して並べる。彼らに残念なことには結局寝台は一つで足りてしまうようだ。

寝台はほこらに向かい縦に置かれる。今その上にケイの体が頭を
広場側にして寝かされている。神の家に足を向けて寝るとは不遜で
あるが、この場合はそれでいい。股が神に向いていなくてはならな
い。

広場に集まった男たちは木場田と三人が欠けてちょうど10人に
なっている。彼らは三人がもう来ないことを承知している。

異様である。

男たちはこの身に染み入るような寒さの中、裸にふんどし一丁の
姿でいるが、そのふんどしは股ぐらを包んで締めることはせず、腰
の後ろで紐を結んだきり四角い布を前に垂らしている。局部を形ば
かり隠した状態だ。

異様なのは顔もそうだ。奇怪な天狗のような面を被っているが、
面相は天狗だが、そのトレードマークである長い鼻やくちばしはな
い。顔を覆うのは鼻から上ばかりで、鼻の先と口は表に出ている。

そのように異様な出で立ちの男たちが、

更に異様な事をやり始める。

寝台に向かって前から4人4人2人と3列に並んで自分の位置が
決まると、彼らはしゃがんで土を掘り出す。そうして開けた穴に、
ふんどしの前をからげ、丸出しにした己の股間の物が収まるように
うつぶせに寝るのだ。そうしてじっと、神が己の種の貯蔵庫に上っ
てくるのを待つ。

神は時に二人三人同時に宿ることもあるが、大抵は一人ずつ順番
に行われる。確実に期するため2巡3巡、延々と朝方まで行われるこ
ともある。そうした時の捧げ物の女は美しい良い体をしているもの
だが。

今夜捧げ物となっているケイも、当然朝方まで男たちが何度も繰
り返し種を注ぐことになるだろう美しい女だ。顔に大きな傷がある
のがもつたないが。残念なことに魂が抜けているからまぐわいに

なんの反応も示さないだろうが。

男たちはじつと神が上ってくるのを待つ。

一人に、神が宿った。

袋がばい菌でも感染したように丸々膨れ上がり、差し棒が祭の張りぼてのように巨大にそそり立った。

男は興奮して、歯を食いしばって起き上がった。ほこらの前に回って神の役回りとなり、寝台の上のケイにのしかかり「神事」を行おうとする。

しかし。

男が立ち上がったところ、他の男たちも興奮した様子で立ち上がった。十人全員である。ズルをして己個人の欲望で立ち上がったのかと見てみれば、ふんどしの布を押しつけて神の御印がはつきり屹立している。

複数人というのは過去もあつたが、全員というのは初めてのことだろう。

こうなれば。

男たちは我先にとケイの体に群がった。

紅倉に肉体を破壊された神は、魂は紅倉の炎から逃れ、地上向かって生き延びた。魂も大部分焼かれてしまつて神の力はほんの小さなものになつてしまつたが、幸い事前に男どもに分け与えていたものがあつた。

改めて男たちに宿り、男たちの魂をありつたけ吸い取つて女の胎内に注がせ、女を新しい肉体にしよう、女の体に宿るなど屈辱的ではあるが一時のことだ、胎内に新しい男の肉体を作り出し、そこにまた移り、男子として千数百年ぶりに現世に「生き神」として転生しよう、

というのが神の計画：あくまで生に執着する浅ましき本能の命ずるところのものだつた。

今十人の男の肉体に宿つた神は、男たちの肉の本能に任せ、魂の種をありつたけケイに注がせようとしていた。果てた後に男たちがどうなるかなど、絶対の君主たる神の知つたことではない。

我先にとケイに襲いかかった男たちは、勢い余つてどつと雪崩を打つて倒れ込んだ。

いや、
違う。

「ガウウウ、ガウツ・・・」

大型の犬が男の裸の背に襲いかかつて爪を立て、首筋にかぶりついた。

ジョンだつた。

「ぎゃあつ、くそつ」

襲われた男は他の男たちに体をぶつけながら暴れ、ジョンを振り

ほごこうとした。がううと唸り声を上げて襲いかかるジョンだったが、いつものような力強さはなかった。

「なんだ犬か」

外側で格闘する男を後目に内側の男たちはこの隙に俺が初物をとケイの肉体にむしゃぶりつこうとした。

「ええい、放しやがれ！」

絡みつかれる男は神の力を放ってジョンを振りほどいた。ジョンは大きな体を地面に転がされ、果敢に起き上がったが、脚がしつかり立たず斜めによるめいて走った。

「ちっ」

獲物を他の男に先取りされそうな男は一気に仕留めようとジョンに開いた右手を向けた。よろめきながら目を剥き齒を剥き襲いかかるうとするジョンを、内蔵から爆発させてやるうと残虐に考えた。

「死・・・」

何者かが走ってきて、体ごと男の懐にぶつかってきた。

「うげえっ！」

寝台の上にケイにむしゃぶりつこうとしていた男たちを弾き飛ばして背中から勢いよく倒れ込んだ男の胸に、深々と肉厚の大型ナイフが突き刺さっていた。

その男の腹をまたいで寝台に降り立った何者かは、ナイフを引き抜くと、男を横へ蹴り落とした。

寝台から突き飛ばされた男たちはせつかくの楽しみを邪魔する奴を「誰だっ!？」

と睨み上げた。

鬼の形相をしたミズキがケイの体をまたいで仁王立ちしていた。

「ミズキ？」

山中でミズキに肩を刺されながらケイの体を運んできた男が怒り狂ってわめいた。

「てめえつ、生きてやがったのか!？」

日本太郎にめちやくちやにやられて、顔をどす黒くして苦しがつていたミズキが、どうしてこれほどの力強さで立っていられるのか？ 胸からナイフを抜き取られた男は既に事切れ、抜け出した神の魂が青い人魂となって漂っている。

まさか、ケイを救えるチャンスを狙ってやられたふりをしていたのか？……

いずれにしろ男たちはこの邪魔者をつての仲間とも思わず、両手を突き出し、神の力で息の根を止めてやろうとした。

ミズキは飛び上がると、向けられる神の力の上を踊るように回転し、腕を伸ばして、手近な男の首を撫でた。スパツと頸動脈が切り裂かれ、

「あぐうつ、うづうつー……」

ビシャアツと勢い良く太い血流を迸らせ、男はもんどり打って倒れ、ヒクヒク痙攣し、事切れた。

という間にも、

ミズキは愛用のアーミーナイフで男たちの無防備な裸を襲っている、シャープに肌が裂け、肉が断たれ、派手に血の噴水が上がった。神の力を持った男たちも素早く動き回り刃物で襲いかかる手練れに為す術なく斬られていき、阿鼻叫喚の地獄を演じて逃げまどった。篝火が掻き回される空気に揺れ、行き交う黒い影をおどろに揺らめかせた。

最愛の人を汚されようとしたミズキは身も心も鬼となっていた。

男たちの血を浴びて真っ赤になりながら痛みを上げて逃げまどう背中を追いかけ、切り裂き、致命傷を与える間も惜しんで他を逃がすまいと追いかけて、斬りつけた。

「ジョン！ 逃がすな！」

「ガウウウウッ」

深手を負っているジョンも助つ人に勢いを得て、走り、血塗れの男の腕に、脚に、噛みついて、頬の肉を膨らませて歯を食い込ませ、男の肉を引き千切った。血塗れの涎を垂れ流しながら丸出しの尻に噛みつき、必死に逃げる男に巨体でぶら下がりながら放さず、ついにバリバリバリと柔らかな肉がまとまって剥がれ落ちた。べろんと剥けた肉のかたまりをぶら下げて男は泣きながら逃げ回った。ジョンは逃がさず、回り込み、今度は前から噛み付いた。男の物凄い悲鳴が上がる。

殺人鬼と凶犬に追いかけられ逃げ惑う男は自分たちの流した血に滑って転げ、襲いかかってきた鬼のミズキに降参の両手を上げて助けを求めたが、ミズキはその両手をなぎ払い、次の殺戮に向かった。斬りつけたが、これだけ生肉を切りまくって脂に刃が滑った。ミズキは男の頭を捕まえると力任せに延髄に切っ先を叩き込んだ。引き抜き、次の者には仮面の目玉に突き刺した。凄まじい悲鳴が上がるが、かまわず、次の、まだ動いて逃げようとする者に襲いかかる。刃が脂と汗と血に滑って押し返される。見れば、仮面の外れた顔はケイを担いできた男だ。ミズキは深い憎しみに冷たくなり、ようやく周りを眺め回した。ジョンが喉笛に噛みついていている者はピクピク痙攣しているが、徐々に動きが鈍くなっている。他にまだ動いている者もあるが、立って逃げようとする者は既に無い。ミズキは冷たい憎悪の目を下に転げてあわあわ逃げようとする男に向けた。

「た、たすけて……、こ、殺さないで……」

ミズキは這いずる無様な尻を踏みつけた。ひいっと女みたいな悲鳴を上げる。

「こ、ここに、殺さないで……」

男の体も傷だらけで泥まみれの血液が汚く塗りたくられている。ミズキは冷たく見下ろす。尻からはみ出して引きずられる男のシンボルは既に神に見放されて萎んでいる。ミズキは男の尻を踏んづけ

たまま股を割ってしゃがむと、男の根元にグサツとナイフを突き刺し、力を込めて、掻き切った。

「ぎゃあっ……」

静かになった。ミズキは歩いていき、まだ辛うじて動いている者にとどめを刺していった。

もう、動く者は無い。

宙に男たちの肉体を抜け出した神の十の青い人魂たちが恨めしそくに舞い、一つの意志を持つと、一斉にミズキに襲いかかってきた。人魂たちはミズキに取り憑き、ミズキの種袋に集まった。ぐつぐつと男の本能が煮えたぎり、元々少年のように可愛らしい顔をしたミズキもケイの横たわる肉体への男の欲望をたぎらせた。神は殺された男たちの代わりにミズキの肉体を操りケイに入り新しい肉体を得ようとした。

ジョンがミズキの異変に警戒して唸り声を上げた。

ミズキは目を剥き、頬をヒクヒクさせてケイに向かう自分の欲望と闘った。神が、やってしまえ、おまえはずうつとこれをしたかったのだらう？、と淫靡に誘いかける。神の誘いに屈してしまえばミズキも男として最高の快楽を味わえたらう。だが。

「何が神だ。薄汚いバケモノめ。よくもケイを」

ミズキはコートの下のシャツで刃の血脂汚れをきれいに拭くと、股を広げ、逆手に持ったナイフを突き刺した。

「……」

声にならない悲鳴がぐるぐるぶるとミズキの肉体を駆けめぐり、そこから逃れられないように苦しげに暴れ回り、ミズキのズボンの股間は真っ赤な血が広がって足下に伝い落ちていき、神は、沈黙した。

「うっ、くっ……」

ミズキは途端に激痛に襲われ、ダダツ、ダダツ、と大きくよろめ

きながらケイの寝台に歩み寄り、ダダツと倒れ込んだ。端にすぎりついてケイの顔を見つめた。ミズキの顔は、さっきまでの怒りに赤くなりながら力のみなきる様子から一変して青黒く病的に肌色をくすませていったが、苦しいながらも、表情は穏やかだった。

「ケイ………………。最期にあなたの顔を見られて良かった……………」

ミズキは愛しそうに微笑み、すがりついているのが辛くて向きを変え、背中を寝台の脚に寄り掛けた。

ジョンも脚を引きずりながらミズキの隣に来て、これだけの騒ぎの中少しも動こうとしないケイを見て、地面に座り込んだ。

「どうしたジョン？ おまえは、撃たれたのか？ かわいそうに。だが、よくケイを守った」

ミズキはジョンの背中を撫でて褒めてやった。

しかしミズキ自身苦しそうな呼吸をして、力無く黒い血の混じった咳をした。

どうやってこれだけの活躍が出来たのか分からないが、ミズキは自分の体がもう駄目なことを最初から知っているようだ。

「紅倉、早く来てくれないかなあ………………。ケイの叱る声を聞きながらみんなの所に逝きたいよ……………」

紅倉が、来た。

車の音が近づいてくる。坂を上がってくる。

車はいったんスピードを落として、いかにも慌てたようにスピードを上げて走り去っていった。

「うっ……」

意識を取り戻した芙蓉は息を吸い、肺に鋭い痛みを感じて咳き込んだ。また痛んだが、徐々に落ち着いて普通に呼吸できるようになった。体を起こす。

背中が痛い。左の肩胛骨の内側だ。狙撃者は背後から芙蓉の心臓を狙って撃つたらしい。

芙蓉は防弾ベストを着ていた。紅倉にも着せている。

金属のプレートを使用した特に防御力の高い大型のものではなく、強靱な繊維を重ねて編み込んだ薄手のもので、服の下に着けていても外見上まず分からない。しかし当然防御力は低く、例えばライフル狙撃などされればまず防げない。せいぜい小型のピストル程度の弾を1度防げるだけだ。

今回は運が良かった、と芙蓉はゾツとしながら思った。

手を後ろについてもうしばらく呼吸を整えた。ペンションの灯りが少し邪魔だが黒い空にたくさん星が透明なきらめきを放っている。

芙蓉は、自分は油断していただろうか？、と自問した。銃弾のひやりとした感触は体……霊体だろうか？が覚えていて狙撃者、と言うより銃器、弾丸その物に、反応したはずだ。自分は先生の身を案じて周囲への感覚を無視してしまったのだろうか？ そうなのかも知れない。しかし、そうでなかったら、狙撃者は……。紅倉はまた指輪のリンクを切っている。

「くっ」

芙蓉は下腹に力を込めて立ち上がった。キツと村の反対側を睨み、

駆け出した。

墓地の表に車を乗り付け、紅倉は自分でドアを開けて外に出た。回り込んできた信木の手を断り、自分で歩いて裏の社に向かった。篝火に照らされて、血の惨状が広がっていた。篝火は4基のうち2基が倒され消えている。転がる死体はどれも大きな傷口をばったり開けて実にむごたらしい有様だ。

村長は遺体たちを見回し、目を剥き、
「吉之助……………」

とつぶやいた。孫を見つけたのだろう。娘もあり、将来の村長候補でもあったはずだが、何とも浅ましい死に様をしたものだ。

紅倉が現れると、顔を見て、ミズキはちょっと驚いた。

「来てくれたか。ありがとう」

「あなたも、頑張ったわね。ジョンも。わたしは、間に合わなかったわ」

「いいさ。ケイを守るのは俺の仕事だ」

「でも、あなたはどうやって?」

「俺は……………」

ミズキはちよつと不快そうに顔をしかめた。

「たぶん、神の肉を食った。ねちやねちやして、シヨンベン臭かったからな、たぶんそうなんだろう。だが、おかげで死んだ体が動いてくれたよ」

「どうやって神の肉を?」

「分かん。口の中に押し込まれた。ほとんど意識を失っていたから、誰の仕業か分かん。ただ……………」

ミズキは思い出して苦笑いした。

「物凄く生臭い息を嗅がされた気がする。もしかしたら、犬たちじゃないかと思う」

と、ジョンの頭を撫でた。ジョンのチームの他の四頭の犬たちは昼の地震後行方不明のままだ。

「そう…」

紅倉は犬だけはどうしても苦手だったが、彼らが主人に忠誠を尽くす動物であるのは知っている。何故彼らが姿を現さないのかは分からないが、何か理由があるのだろう。地震の際、地下の出口であるお婆の家と役場裏の物置が倒壊した。神の凶暴な霊気が大量に噴き出したためと思われるが、その際その付近にいた彼らに何かトラブルが生じたのかも知れない。

紅倉はだるい体を引きずるようにケイに近づいた。

「待たせたわね」

仰向けの首の下に髪の毛を掻き分けて手を入れ、ほんのくぼを触った。首と頭のつなぎ目、靈魂の出入り口だ。

すうっと、紅倉の魂からケイの靈魂が分離して自分の体に入った。

ケイは胸を反らせて大きく息を吸い、はぁー………、とゆっくり吐き出した。

見えない目が開いた。ケイの目玉は瞳が無く、瞳が破けたみたい。ギザギザの形をした透明のガラス体が広がり、奥の赤い毛細血管がレンズに拡大されて覗けた。

「紅倉さん……かい？」

ケイは起き上がり、額を押さえた。

「ああ、ちくしょう、ひどい悪夢を見た最悪の気分だ。ここは…外かい？ 寒いじゃないか、いったいどうなってるんだい？」

ミズキが身を起こし、コートを脱いだ。

「これを。汚れてしまっているが」

紅倉は受け取り、ケイの肩に掛けてやった。ケイは寒そうに震えてコートの前を掻き抱き、

「ミズキかい？ 何してるんだい、紅倉さんのお手を患わせるんじ

やないよ？ ねえ、どうなってるのさ？ ここは、ひどい血の臭いが立ちこめてるじゃあないか？ まさかおまえも怪我をしたのかい？ わたしは目が見えないんだよ、顔をお見せ」

ぞんざいな口をききながらケイは心配そうに手をミズキのいる方へ伸ばした。ジョンがミズキを立たせようと顔を脇の下に入れて持ち上げようとし、紅倉が手を貸してなんとかミズキを立たせた。

「ミズキ。ジョンもいるのかい？」

ケイは両手を伸ばし、それぞれにミズキとジョンの顔を触った。

「ああ、二人とも迷惑掛けちゃったみたいだねえ？ どうなってるんだい？ ム力つくひどい霊気だらけだけど……、神のオーラが感じられない……。いつたい、どうなってる？」

ケイは、ひよっとして……、という期待を滲ませて訊いた。

「ケイ。神は、滅びました。紅倉さんがやつつけちゃったんですよ」「本当かい？ ……そりゃあ……、喜んでいいものかねえ？」

「いいんですよ、喜んで。あなたはもう自由だ。もう、神の力もないんでしょう？」

「そう……なのかねえ？」

「不自由かも知れないが、我慢してください。それが自由の代償ですよ」

「なんだい、偉そうに」

「……ケイ。」

ミズキはまぶたの閉じかけた暗い目でケイを見つめながら微笑んだ。

「これから、ちゃんとあなたの人生を生きてくださいね？ あなたの悪夢は、今、終わるんです……」

「ミズキ？ どうした？ おい、しっかりしな？」

不安そうに触るケイの手にミズキは頬を押し当てた。

「クロさん、斎木さん、末木さんは、死にました」

「なんだって!？」

「あなたを守って……。村の連中が裏切ったんです。だから、あな

たはもう村にも神にもなんの恩義も感じる必要はない。あなたは十分社会の…、不幸な女性のために働いた…。もう、あなた自身の悪夢も忘れてください。それが、俺たちの、最期のお願いです。ありがとう、ケイ……。どうか、幸せに……。生き……。て…。」

「おい、ミズキ！ おいっ！…！」

ケイは崩れ落ちるミズキの顔を一生懸命押さえようとした。

「しっかりしろ！ミズキ！！ おまえがいなくなったら、わたしの杖は誰が務めるっ！？」

「ケイ…。もう、勘弁…。」

ミズキはケイの手に包まれ笑った。

「ミズキっ！！ 死ぬなあっ！！！！」

自分を必要としてくれる人の声に送られてミズキは幸福に意識を途切れさせようとした。

素早く、

走ってきた巨大な物がミズキの横から飛びかかり、ガアツと首に噛みついてその勢いのままケイの手から奪い去った。

それは地面に押し倒したミズキの首を強い力で乱暴に振り回し、完全に息の根を止めた。

「ミズキいいいっ！！！！」

ケイが悲鳴のように叫んだ。

あごを開いてミズキの頭を地面に落としたのは、頭の高さが紅倉の胸まである、灰色の毛むくじゃらの体をした、犬だった。

「 バウツ！、ワウツ！、ワウツ！ 」

人間の血の混じった唾液を飛ばして空気を爆発的に震わせる大声

で吠えた。

その声でケイは相手が分かり、

「キース！……………おまえ…、なにしたんだいっ!?!」

とち狂った飼い犬を激しく叱りつけ、

紅倉は、ビイイイイイ……イイン…、と犬の吠え声が耳の奥に
反響し、

「ヒイー……………」

息を吸い込んだきり恐怖に身をすくませ、

「ウウゝ」

ジョンは「敵」に凶暴に唸った。

ジョンはキースに襲いかかった。キースの犬種アイリッシュ・ウルフハウンドはその名の示す通りアイルランドの国民犬である同国においてはもつともメジャーな「大きな犬」であり、最大級の大型犬だ。普通ならラブラドル・レトリバーより一回りも大きな犬だが、ジョンは規格外の大きな個体だ。同じだけの体高がありがっしりした体つきをしていた。ガウウと唸りを上げて噛み合い転げ回る二頭の闘いは周りの人間たちを圧倒し何も行動を起こさせない迫力だ。

「ジョン！ キースかいつ！？ おまえたち何をやってるんだい！？ おやめっ！？」

ケイは声を張り上げて命令したが、いつもなら彼女に絶対服従のはずのキースが、まったく聞く耳を持たず目を血走らせてケイの一番のお気に入りのジョンを攻撃し続けた。

2発も銃弾を食らい出血多量でふらふらのはずのジョンも気迫負けすることなくキースを攻撃した。ジョンは本能的にキースが「敵」であることを分かっていた。こちらの感覚をイラツと刺激するきつい臭いをさせていた。主人を守るためにジョンは全力で仲間を倒そうと頑張った。

唸りを上げ空気を激しく鋭く震わせる闘いは続き、

「ジョン！ キース！ おやめっ！！」

ケイの命令は虚しく、

紅倉は震えて立ち尽くした。

タタタツと、

境内を囲む高台に残り三頭の犬たちが現れた。

ずんぐりとでかく、見るからに力のありそうなセントバーナードのリング。

細長い顔で手足のすらりと長いゴールドの毛を垂らす高貴なサーキーのチャーリー。

均整の取れた力強く運動能力に優れたジャーマン・シパードのカール。

彼らは灌木の垣根を飛び越え広場に降り立つと、

カールがダッシュして二頭の鬪いに飛び込み、機敏に飛び回り、隙に潜り込み、「敵」を攻撃した。

残るリングとチャーリーは、すっかり固まっている紅倉は無視し、入り口で呆気にとられている人間の男たちに近づいていつて威嚇の牙を剥きだした。

「犬畜生が、舐めるなよ」

公安日本太郎が身を守るため拳銃を取り出したが、構えた途端、体が固まって動かなくなった。

背の高い面長のチャーリーがじっと睨んでいる。まさかこの男がその眼に怖じ気づいたわけでもなかるうが。

「くっ、なんだ……………」

日本太郎はじつとり脂汗を浮かべ、金縛りにあったようである。チツと舌打ちし。

「そうか、貴様か。何を企んでやがる……………」

何者かを毒づいた。動けない日本太郎を、チャーリーは襲うつもりはないようである。

保安官信木も拳銃を持っていた。彼も懐から取り出し構えたが。

リングがのっそり前に出て、のんびり愉快的顔に、ぐわっと巨大な牙を剥きだして凄んだ。

信木保安官もその迫力に圧されたのか、構えた銃を下ろした。その態度に村長がうるたえわめいた。

「信木よ、何を躊躇しとる？ こやつら狂っておるぞ？ 早う始末

せんか!？」

信木は哀れな目で村長を見た。

「狂っている、ようには見えませんがねえ」

「何を!？」

村長を落ち着かせるように言った。

「わたしにははっきりした意志を持っているように見えますがねえ? 犬畜生の考えじゃあなくですな、もっと高いレベルの。何を企んでいるか、見極めようじゃないですか?」

村長は半信半疑の顔で犬たちの様子を観察した。

「もしいや、まだ神が……」

村長の古い意識を信木はこっそり笑った。

「さあ……、どうでしょうかな?」

ガウウツ、ガウツ、

「ジョン! キース! カール! おやめっ!! おやめったらー

ー!!!!!!」

ケイの悲痛な訴えにようやく目が覚めたのか、争う犬たちが静かになった。

三頭はくつついたまま動かない。

ジョンの背中に取り付いたカールがジョンの左脚の付け根に噛みつき、がっちり鋭い牙を腱に食い込ませていた。

キースはジョンの顔に手を掛け、爪をえぐり込ませ、その首に大きく開けたあごをがっちり噛みつかせていた。

ジョンは運動能力を奪われ、呼吸をか細く制限され、流れ出た血液に体力は底をつき、悲しげに主を見つめていた。その心が伝わったようにケイが震える声で呼びかけた。

「ジョン?…… どうしたんだいジョン?…… 返事をして

おくれ？……………」

なんとか呼吸を通過させていたジョンの首の筋肉が、力尽きた。ガリツと噛み込んだキースのあごが軟骨を粉碎した。

ジョンは白目を剥き、だらんと力が抜け、キースとカールは死んだ肉体を吐き捨てた。

「ジョーーーーー！！！！」

ケイは無垢な忠犬の魂のため哀しみと怒りを込めて叫んだ。

「キース……………、カール……………、……………、チャーリー！、リングゴっ！！」

盲目のケイは自分の載せられた寝台の縁を両手で探って下へ下りようとした。

「おまえたち、どうしてしまったんだい？ いったい…、何が狂わせている！？」

チャーリーとリングゴがこちらを向き、キースとカールと、八つの目がじっとケイを見つめた。

ケイの背にゾワツと悪寒が駆け上がった。

周囲はむごたらしい死体だらけである。その流れ出た血液が一気に気化したように空気が真っ赤に染まった。

「！！」

盲目のケイは神と一体化したときには物を見ることが出来た。しかし普段単独で、紅倉のように霊力で物を見ることは出来なかった。盲者として、鋭い勘に頼るしかない。

ところが今、真っ赤に染まった空気の中で、ケイの網膜にかなりはっきりその場の様子が映った。

特に四頭の自分を見つめる犬たちの姿が。

その犬たちの視線が、ケイに身の毛のよだつ恐怖を感じさせた。

ケイは思わず寝台の上で後ずさるように

「……………おまえたち……………、よしな……………」

と震える声で命じた。

紅倉は悲鳴を上げ続けている。二頭の大型犬はひ弱な紅倉の肉体に強靱なあごでがっちり噛み付き、首を振って尖った歯を、骨まで砕きそうに深く食い込ませた。悲鳴を上げる紅倉は肩と腿をそれぞれ引きちぎられそうに揺さぶられ地面をズルズルと背中ですり抜いた。砂埃が流れ出た血で重く湿っていく。

悲鳴を上げる紅倉の恐怖はケイに伝染している。

犬たちを手足の延長のごとく扱ってきたケイが、そのどう猛さに危険を感じて体の心から震えていた。

「や、やめ……………」

震えてうわごとのような声を犬たちはとうてい聞く様子はない。

ケイの見えないはずの目には赤い視界の中で、犬たちの目が爛々と光っているのがはつきり浮き上がって見えた。危険で凶暴きわまらない光だ。

紅倉は悲鳴を上げている。すつとぼけながら、美しく、クレバーな面差しは消し飛んで、ひたすら恐怖し、苦痛し、発狂している。

村長は目の前の恐ろしい光景にぎよろりとした目を剥き、唇をわななかせ、信木保安官を睨んだ。

「死ぬぞ、紅倉が。ええんか？」

村長は信木の下ろした拳銃へ視線を落とした。

「ええんか！？ノブ！？」

「ふむ」

信木は拳銃を持ち上げ、戯れるように紅倉に食らいついている犬の背に銃口を向けた。

さつとキースとカールが信木を見た。その目の異様な光に、村長がうろたえた。

「やはり……………、神……………、なのか？……………」

「撃つかね？」

信木の問いに村長は脂汗を流すばかりで答えられなかった。
神が復活するのならば、紅倉は当然その生け贄となるべきだ……

……
突如紅倉の悲鳴が止んだ。

目を見開き、恐怖にも痛みにも反応を無くし、完全に壊れてしま
ったようだ。

チャーリーとリングゴは口を離した。紅倉の左肩と右腿は広くぐっ
しより濡れ、地面にドクドクと黒い染みを広げていった。

邪魔者を完全に沈黙させた四頭は改めてケイを見た。

歯をカタカタ言わせて怯えるケイの目に、犬たちの姿が不気味に
変容していった。

じっと見つめる顔が、より高度で嫌らしい知恵を持った物へと変
化していった。人間だ。

人面犬。

人間の顔をした獣たちは、股の間に、人間にはあり得ない長さ
と太さの、オスのシンボルを突き立たせていた。

ケイは目を剥いて震え上がった。

「い、いや……、こ、来ないで……」

人間の女に欲情した獣の体をした男は、嫌らしく、笑った。

その四人の顔を見て、ケイは更に心に暗い戦慄を感じた。

恐怖と、憎悪と、屈辱の、その、男たち……

ケイは必死に忌まわしい幻を打ち消そうとブルブル顔を震わせた。

『 覚えているだろう、俺たちを？ 』

ケイは顔を振って否定した。

『ハアハアハアハアア。覚えているな？ 忘れるわけねえ。おまえが最後に見た顔だもんなあ？』

ケイは否定する。

「し、知らない……。お、お、お、お、……。おまえたちは、死んだ……、はずだ……」

男たちは笑う。

『ほおーら、覚えてやがる。ああそつだろつぜ、俺たちや死んだんだ、殺されたんだ。おまえに呪われてな。』

せつかく捕まらねえように目玉に切れ目入れてやったのによお？、見えねんじやお巡りに俺たちの顔を教えられねえもんなあ？、なのによお、呪い殺すなんてよお？、法治国家の理念に反するじゃねえかよ？、なあ、カズズエ（一恵）ちゃあ〜ん？』

うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ、あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。

『で？ どうだよ？ 俺たち呪い殺して、俺たちにしてもらったことを、忘れられたかい〜？』

男たちの笑い声にケイは耳を塞ぐ。（うひゃひゃひゃひゃ、あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。）

『忘れられやしねえ、おまえは、一生、俺たちのコトを、忘れられやしねえ。そつだろ？一恵？ 夢に見て、お漏らししまつんだろう？ なあ？一恵え？』

「やめる、やめる、そんなことしない……、どうして、どうして、わたしの名前を知っている？……、わたしを……知っていて……襲ったのか？……」

『いいやあ、通りすがりの若いいい女っただけでどこの誰とも考えもしなかったぜ。』

俺たちをさあ……、

呪い殺しちゃったりするからさあ……、

俺たち、あんたに取り憑いちゃったんだよおー？』

「そんなの嘘だ、おまえたちなんか、地獄に落ちて……」

『その目で俺たちを見やがれっ！……！』

『ほおーら、見えるだろう？ 見えないはずの目で俺たちが見えるってえのが、俺たちが、取り憑いて、あんたの、中、にいるって証拠だ』

「いや、いやっっっ！……！ そんなの嘘！、信じないっ！……！」

『強情張ってもさあ、体にちゃんと分からせてやるよ、また、何度でも』

ケイはビクツと固まった。

『そうだよ、何度も、何度も、俺たちは外に出てきて、あんたを
楽しませてやるよ。あんたがきつたねえ婆あになるまで、何度もな。
俺たちは、あんたにぴったりくっついて、決して離れやしねえよ』

「いや、いや、出てって、わたしの心から、消え去って!!」

『出ていかねえっ。ハアハアハアハア。おまえは俺たちを追
い出せない。決して、俺たちを忘れられない。一生な』

ケイは突っ張った虚勢が跡形もなく消え去り、すっかり無垢な乙
女に戻ってしまったている。

「嫌、嫌、嫌ああ、もう……、やめてえ、もう、これ以上、わたし
を苦しめないで……………」

『じゃあ、

楽しもうぜ!』

ケイはとっさに逃げ出そうとした。男の嫌らしくにやけた顔がや
つてきた。あつちからも、こつちからも。

怯えきり逃げ道を捜すケイの足下、寝台の上に男の顔をしたキー
スが飛び乗った。男の顔をしたカールが、チャーリーが、リンゴが、
右から左から、頭の上から、迫ってきて、嫌らしくニヤニヤ笑った。
寝台に足をかけ、しっぽを嬉しそうに振った。ケイは震えて、涙を
流していた。

キースが立ち上がった。巨大な男のシンボルをこれ見よがしに振
り立て、ニチャニチャ嫌らしく笑って、ケイに覆い被さってきた。

「・・・！！・・・！！・・・！！・・・！！」

心臓がバグバグ言って、体がガクガク震えて、「あう、あう、あう、あう、あう」と過呼吸に陥る。

男の生臭い息が耳元に触る。

「また、入れてくれや」

犬の後足が器用にケイの薄物のすそをからげ上げる。

ケイの太ももに忌まわしい感触が甦る。

体内に侵入してくる忌まわしい感触を、

ギリギリまで怯えきったケイの心は拒否した。

ケイの目は何も見なくなった。

耳は何も聞かなくなった。

肌は何も感じなくなった。

自分の体が消えた。

心が消えた。

ケイは、

形だけ残して、

どこにも、いなくなった。

キースは主人の顔を舐めた。ケイはガラスの目を見開き、長い舌の愛撫にガクリ、ガクリ、と首を揺らすだけでまるで反応を示さない。カールもチャーリーもリンゴも手や脚に鼻先を寄せ、顔をこすり付けてみたが、やはりだらんと筋肉が弛緩したきり反応しない。彼らの鋭敏な嗅覚は不快な異臭を感じた。肛門の締めりがなくなつて内臓に溜まつていた物が漏れだしたのだ。うら若い美しき女主人が、最低限の羞恥心さえ忘れて、人間であることをやめてしまつて

いる。

彼らは戸惑い、悲しげに鼻を鳴らして女主人が目覚めてくれるのを待った。主人に心の底から忠誠を誓う彼らはただ「心神耗弱」の状態に陥つていただけなのだ。

彼らは自分の罪も知らず、ひたすら主人を愛した。

度を超した残酷行為にさすがに苦々しい渋面でいる男たちの背後から、

一人の男が歩いてきた。

背の高い、肩幅はあるが細身の男だ。渋い色の防寒ジャケットを着ている。髪の毛が豊富で天然気味にうねっている。明かりの中に現れた顔はなかなかの二枚目だ。二昔前のヨーロッパの映画スターみたくに。

「お、おまえは!?!」

三人の中でとりわけ村長の驚きが大きかった。

男は、安藤哲郎、ガス穴で生きていても半死半生の状態に陥つて

いるはずのフリージャーナリスト。平中江梨子の恋人である。

三人を通り越して前に出た安藤は、渋い二枚目顔に冷徹な眼差しで眼前の様子を確かめ、ニヤツと笑った。

日本太郎はまた訳の分からぬ奴が出てきやがったなと呆れ、3日前ガス穴から安藤を助けたと語った信木は不可解さを苛立たしさにつなげないように冷静を保ちながら訊いた。

「安藤君。君、体の具合は大丈夫なのかね？」

名古屋の個人病院に入院しているはずの安藤はしゃんと立った背中、振り返り、男たちにもニヤツと笑いかけた。

「黙って見物している」

村長は「神か？…」と怪しみながらも相変わらず希望的観測をつぶやき、日本太郎だけ真相に合点がいった。

「てめえだな？ 陰陽師。」

安藤は答える代わりにニヤツと笑いを大きくした。日本太郎は不快に眉をひそめた。

「おまえは表に出てこないんじゃないか？ 何しに来やがった？」

安藤はジロツと日本太郎を睨んだ。

「黙って、見てろ」

そうして、地面に仰向けになつて痙攣している紅倉に歩み寄った。

村長が聞きとがめ苦しい顔で日本太郎を睨んだ。

「陰陽師だと？ 何者だ？」

日本太郎は面白くない顔で言った。

「陰陽師土亀恵幸。知らんか？ その筋では有名人だと聞いたが？」

「土亀、恵幸・・・」

村長の顔色が変わった。キツと怖い顔で安藤の背中を睨んだ。

「高野のモグラか！？」

日本太郎がニヤツと嫌な笑いを浮かべた。

「やっぱり有名人か？ さる筋からそういう仕事なら打ってつけだろうと紹介されたんだがな、……陰険な野郎だな」

これだけ陰険な日本太郎に陰険と嫌われるのだからよほどのものなだろう。信木はほうと感心し、村長はギリギリと睨み付けた。

「神では・・・、なかつたか・・・」

村長にはそちらのシヨックの方が大きいらしい。

安藤に憑依した土亀は。

足下に立った安藤は首をかしげて紅倉の顔を見た。

「ここまででしたか？ まったく、楽しみにしていたのに、ひどい面をしてやがる」

そう言いながら残忍に笑った。

「まあいい。所詮体など使い捨てだ。どれ」

安藤はジャケットの前を開き、ズボンのベルトを解き、ジッパ―を下げ、下着ごと膝まで下ろした。

紅倉に添い寝し、頬に手を掛け、じつくり顔を眺めた。

「世の男どもが知ったらさぞかし嫉妬に狂うことだろうぜ。もっとも、こうなってしまうては百年の恋も一発で興ざめか？ 男なんてのは所詮、女の美しさにしか憧れないものさ。そして、一度自分の物にしてしまったら、もう、どうでもよくなってしまつたさ」

安藤は達観して笑った。

「俺は女など興味はない。どうでもいい。その気になれば、いくらでも思いのままに出来るからな。だから、おまえには少しだけ、興味があつた。少しでも俺の思い通りにはならないかと思つてな。だが、結果はこれだ。おまえも今、俺の腕の中にある」

安藤は舌を覗かせ紅倉の唇を見やったが、水膨れして爛れた有様に興味を無くした。

「密教の秘技に男女のセックスにまつわるものは多い。肉体を熱くたぎらせ、魂も高揚させる。紅倉。おまえの体も最高に喜ばせてやる。絶頂まで高まつたおまえの魂を、食らつてやる。女であるおまえの体を、男である俺が支配し、おまえの心も、霊力も、全て俺の

物にしてくれる。おまえ……処女か？」

安藤が淫靡に笑い、手が、紅倉のパンツに掛かった。

「紅倉美姫。俺の女になれ」

紅倉の目が開いた。真つ赤に光を放っている。

ギロリ、と安藤を見た。

「う、……」

安藤の顔が引きつった。首を亀のように伸ばし、筋が立った。額に青筋を走らせ紅倉を見下ろした。

「ごさかしい……、最後のあがきか……」

安藤が歯を食いしばり憤怒相になった。

「よもやあの女を見殺しにして俺をあぶり出したつもりでもあるまい？」

額にもややも黒いオーラがうごめき、縦に線が走ると、くわつと目を開いた。金縛りになって徐々に遠のいていた体が再び紅倉に迫っていった。紅倉は赤い目だけ安藤を見て、体は動かない。安藤が四角く口を開くと、によつきり牙が生えていた。

「いいぞ、抵抗しろ。無抵抗の女を犯してもつまらん。せいぜい俺を喜ばせる」

紅倉の目の光が強まり、安藤は第三の目を細めて顔中青い血管を走らせた。

「くつ、くつ、くつ……いいぞ、いいぞ、頑張れ」

そう言いながら、安藤の顔の皮膚が裂け、ピッ、ピッ、と細かく血が飛び散った。口の端が頬を盛り上げ、怒りと笑いと入り交じった凄まじく力んだ顔になった。ピピピピピッ、と皮膚は裂けていき、血の玉が数珠繋ぎに浮かんだ。

「くつくつくつ……ぐぐぐ……」

目の下がヒクヒクうごめき、ブチツと血管が切れ、眼球が赤く染まった。苦痛の表情を混じらせながら安藤、いや、土亀は言い放った。

「かまわん！、これも使い捨てだ！」

ビシヤツと顔面を割って血が噴き出し、紅倉の顔に降り注いだ。

紅倉の赤い目の光はますます強くなっていき、とうとう、

目の周りからぶすぶすと白い煙を噴き始めた。

「あきらめる紅倉。おまえは俺には勝てん」

社へは墓山を巡って左右から道がある。男たち三人がぼうつと突っ立っているのと反対側から、

「何をしているっつー!!」

芙蓉が烈火のごとく怒りながら駆け込んできて、紅倉に覆い被さるうと頑張っている安藤の尻から、鞆丸を思い切り蹴り上げた。

「ぐあっつっつっつ、」

男の最大の急所を情け容赦なく力いっぱい蹴り上げられ、安藤は前にすっ飛んだ。

「うがあっ、ぎゃああああっ、ぎゃああああっ、」

両手で股ぐらを押さえてゴロゴロ転げ回った。

芙蓉は紅倉の上にかがみ込んだ。

「! 先生っ!!!!!!」

その顔は芙蓉に計り知れないショックを与えた。

「……先生? 先生? 大丈夫ですか? わたしですよ? 美貴です」

紅倉は答ええないが、疲れ切ったようにまぶたを閉じた。まるでパンドのように周囲が真っ黒になっていた。

「……………」

芙蓉は立ち上がると、恐ろしい目で転げ回る安藤を睨んだ。ズカズカ歩いていき、横から腹を蹴り上げ、上向かせた。

「ぐああっ……………く、く、く、く、くそ、やめろ、お、俺が誰か分かるのか?」

芙蓉は青い炎に燃え上がる目で睨み付けた。

「きさまは、下劣な色魔だ！」

長い脚で、安藤の横つ面を蹴り飛ばした。

「ぶげえっ、」

安藤は首をひねってぶつ倒れ、怒りの固まりになった芙蓉は安藤が起き上がるのを待って胸にトゥーキックを突き刺した。安藤はもんどり打って倒れ、

「・・・ゲツ、・・・ゲホツ、ゲホツ、」

苦しそくに咳き込み涙を迸らせた。迫る芙蓉に慌てて手を上げた。

「ま、待て！ 本当に待て！ 安藤だ！ 俺は、安藤だっ！！！」

芙蓉は拳を握り、頬を殴った。安藤は唇を切つて血と、折れた歯を吐き出した。安藤は情けなく泣きながら芙蓉の攻撃を両手で防ごうとした。

「安藤だ！！ 分からないのかよおっ！！??」

芙蓉の表情はビシツと音がしそくに怒りで硬くなっている。

「どうでもいい。わたしの先生にこんなひどいことをした奴は、全員、死刑だ」

「おおお、俺じゃない、本当に、俺じゃないんだ！！！」

安藤は泣いて哀願した。

「俺は操られていただけだ、本当だ！ 操られた俺が罪を問われるなら、ほら、奴らだ！ 奴らが紅倉にあんな大けがをさせたんだ！！」

安藤は芙蓉の気を引こうと必死で犬たちを指さしてわめいた。

犬たちはもはや人間たちの争いなどどうでもよく、ひたすらどこかに行ってしまった主人の帰りを悲しげに待っていた。

芙蓉が寝台に取り付く犬たちに顔を向けると、安藤は鼻血を流しながらニヤリと笑い、ふつと目を閉じ、ぐらりと揺れて地面に倒れた。

芙蓉が向き直ると、宙に黒い影が浮かんでいた。

影はふわっとマントを開くように輪郭を広げ、芙蓉を包み込むように覆い被さってきた。

『今度はおまえを操ってやる!』

芙蓉は笑いながら迫ってくる闇の中の顔にまっすぐ拳を突き出した。土亀の霊体は笑っている。この女の肉体に取り憑くのが目的なのだ、パンチなど……、

突き抜け、肉の内部に浸透していくはずが、

ガンツ、と固い反発が生じ、真っ赤な稲妻がバリバリッと土亀の霊体に広がった。

『ぎゃあっ』

土亀の霊体は煙を噴いてひっくり返った。ザアツと芙蓉から避難するように離れ、びっくりした様子で、カアツと怒ってわめいた。

『馬鹿な!? 貴様ごときに、俺を跳ね返せる霊力などあるわけない!』

芙蓉は土亀をぶん殴った拳に真っ赤なオーラをたぎらせ、固い怒りに揺るがず、睨み据えている。

『何を隠しているっ!?!』

芙蓉はスウツと息を吸い、凄みのある声で言った。

「分からないか? わたしは怒っているのよ。感情のありっただけ。先生が言っていたわ、神とは力だ、人が神になるのは我を忘れるほどの激烈な怒りによって、人間であることさえ忘れてしまうのだと。」

わたしはそこまで自分を失ってはいないけれど、

おまえは許さない。

今わたしは何も怖くない。何も恐れない。

今なら神だつてぶん殴つてやる。

おまえはわたしにとって絶対にやっつてはならないことをした。

おまえは、わたしの怒りの逆鱗に触れたのだ」

土亀は笑った。

『思い上がるなあっ!! おまえごときが神になれるかっ!?!』

芙蓉は揺るがない。

「神になど、なるか」

土亀は忌々しげに歪み、ふと、残酷に笑った。

「その女を食らえ！」

犬たちが、ピクツと顔を上げた。目の色が変わり、芙蓉を見た。

芙蓉も犬たちに目を向けた。

「やれっ！」

土亀は命じた。

犬たちは、芙蓉の鋼の霊体から立ち上る怒りのオーラに怯えた。

その怒りが自分たちにも向けられていることに戸惑いつつ、怯えた。向けられる怒りが、自分たちがしてしまったことを本気で考えさせた。

犬たちは地面の紅倉を見、寝台の上のケイを見た。

自分たちがしてしまったことを理解した。

犬たちも凶暴な面相で牙を剥いた。怒りだ。激烈な、許し難い。

犬たちは、自分たちにそれをさせたのがその黒い影であること知った。

「ウウ~~~~~」……

バウツ、ワウツ、ガウツ、ガウガウガウツッ！！

凶暴に牙を剥きだし、涎を垂れ流し、白い息を爆発させながら、怒りの丈を込めて吠え立てた。

影の浮かぶのは犬たちの攻撃の及ぶ高さではなかったが、怒りの感情は激しいオーラの爆発となって土亀の霊体をぐいぐいと押した。土亀は怒った。

『この…役立たずめら……。死ね』

犬たちの表情が歪んだ。生命の糸がぐにゃっと曲げられ、絡まり、ぶちっと引きちぎられようとした。

「死ぬのはおまえだ！」

芙蓉の叫びが真つ赤に灼熱した槍となって土亀の額に突き刺さった。

黒い土亀の霊体が、真つ赤に焼けた。

真つ白に煙が上がり、苦しさにのたうち回り、辺りに煙をまき散らした。

「お、お、お、おのれえええ~~~~~」

再び芙蓉の怒りが飛んだ。今度は数十の火の玉が弾丸となって土亀の霊体を貫いた。

「ぎゃああああああっ」

形が崩れ、焼けただれながら、土亀は背後の夜空に溶け込んでいった。

「おのれ、おのれ、おのれ、こ、この俺が、こんな小娘ごとき……に

……」
悔しさを滲ませながら、土亀の霊体は消えた。

「先生。先生。先生。」

大丈夫ですか？ 美貴ですよ？ 分かります？」

紅倉の目が薄く開いて、芙蓉にかすかにうなずいて見せた。

芙蓉は優しく微笑みかけた。

芙蓉は紅倉の頭を膝の上に寝かせて、額に手を当て髪を撫で下ろしてやり、肩の傷をそつと押さえてやっていた。

「頑張ってくださいね、今病院に連れていって手当してもらいますからね」

紅倉は口をぱくぱくさせてか細い声で言った。

「病院……嫌い……」

「ダメですよ。こんなにひどい怪我して。後でうんとお説教してあげますからね、覚悟してください？」

「美貴ちゃん……、ごめんなさい……」

「ええ。はい。もう……二度としちゃ駄目ですからね。先に応急処置をしますからね、今お医者さんから道具を取ってきてもらっていますから、待ってください？」

紅倉は手を震えさせながら持ち上げようとした。

「美貴ちゃん、手……」

「握ってほしいんですか？」

芙蓉は腕を伸ばして紅倉の両手をそれぞれ握ってやった。胸の上を持ってこさせ、そこから芙蓉の得意な治癒の気を送ってやった。

同時に紅倉の「意志」が伝わってきて芙蓉の頭に考えを思い浮かべさせた。

「ミズキに『神の肉』を食べさせたのは犬たちだった。彼らは神職の貯蔵庫からそれを奪ってきた。」

彼らにそれをさせたのはあの陰陽師の仕組んだ『式』だった。

『式』とは霊体に組み込んだ命令プログラム。陰陽師は彼らが村に入る前にどこかで接触して、式を霊体に仕掛けたのだわ」

芙蓉たちの知らぬ事だが、黒木たちチームは若いOLをレイプしようとした不良青年を狩った後、突発的に名古屋で起きた宝石強盗事件で足止めを食らい、ケイ、ミズキ、ジョンたちと分かれて別ルートで村に帰った。その途中で接触したものだろう。名古屋の外国人グループによる宝石強盗事件も、おそらく、陰陽師土亀恵幸の操ったものだろう。

芙蓉は紅倉に覆い被さるようにして耳元に尋ねた。指輪のリンクで声に出さなくても考えは伝わるだろうが、芙蓉は出来るだけ紅倉にくつつきたいと思ったのだ。

「先生。犬たちはもう危険はありませんか？」

紅倉は疲れ切って口を動かす元気もないが、芙蓉の頭に考えが浮かんだ。

「犬たちに仕組まれた『式』は犬たちが自分の力で壊した。もう操られる危険はない」

犬たちはまた悲しそうに寝台のケイに寄り添い、紅倉がなんとかしてはくれないのか？と期待を寄せて時々様子を窺っている。

「安藤哲郎さんも『神の肉』を食べさせられていたと思う。それで命をつないだのだわ。」

安藤さんに神の肉を食べさせたのは信木さんではない。おそらく、木俣麻里だろう。

木俣麻里はふだん村の外の高校に通っている。おそらく、彼女も『式』を仕組まれていたんでしょう」

安藤哲郎は芙蓉に情け容赦ない暴行を加えられて伸びている。平中に知られたら激怒されるだろうが、命があっただけめつけ物だ。もっとも目覚めた安藤の精神状態がどうであるか分からないが。

芙蓉の口から真相を聞かされた信木は肩をすくめた。保安官として陰陽師の存在を察知できなかったのは失態だった。事件の最中にはうつと土の下に潜っていたのだから知りようも無かったのだが。麻里は……、紅倉に神の水門に置き去りにされて、どうなったのだろうか？ もう神もなく、彼女自身の霊力も紅倉に焼き尽くされて、もはや脅威ではなくなっているはずだが。

「木場田さんも『式』に操られていたのかしらね？ 分からないけれど、事を大きくするのに都合のいい人材だったんでしょうね」

木場田の死体は芙蓉はペンションの表で確認した。カウンセラー易木寛子の遺体も。

二人がどのような思いで事件の中で行動していたか芙蓉は知らぬただ、それぞれ自分なりの熱い思いがあって必死に働いたのだろう。

「今回のことは」

芙蓉が紅倉の思いを代弁して言う。

「たしかに、わたしたちが来なければ起こらなかったことかもしれない。でもわたしたちはきっかけに過ぎず、

起こるべくして起こった要因が、村には長年の間にもりつもって、沸騰点に達しようとしていたのではないですか？」

この問いは村長に向けられたものだろう。村長は老い先短い生涯

をかけて守ってきた村を、たった一日ですっかり破壊され、神の復活ももはや無いと悟り、今や半分呆けてしまったような緩慢な表情で答えた。

「それで、おまえさんらは満足か？ わしらはずっと耐えて、守り抜いてきたんじゃない。わしらはかりじゃない、先祖代々だ。それをすべて奪い去って、ええ気持ちか？」

すっかり愚痴のように言った。たしかにこの老人には失った物があまりに多すぎただろう。

「わたしたちは自分の正義や善意を振りかざすつもりはありません。ただ…」

もう耐えられなかったんじゃないですか？

神の力は人の手に余る、

そうは思いませんか？」

村長はふてくされる。

「よう言うわい。

その神を殺したんは誰じゃ？ 村を滅ぼしたんは誰じゃ？

まったく、おまえさんなど、ほんに村に来てほしゅうなかったわい」

堂々巡りだ。神と人、罪と罰、復讐と許し。こうだ、という答えなど、決して出ることはないのだろう。

芙蓉は自分の思いを言う。

「行いには結果が生じるわ。わたしも、先生はするべきでなかったことをしたのだと思う。それはきつと、先生ご自身分かっていたのよ。その結果、自分が受ける罰も。」

もしこの結果に対し先生が悔い、許しを請うならば、

わたしが先生を許します。

罰を受ける先生を、わたしが受け入れ、守ります。

わたしにとっては、

先生を愛している。

その気持ちが全てです」

もしケイの意識がどこかで聞いていたらと思う。

彼女の悪夢は生涯無くなりはしないだろう。だが、

その悪夢から守ってくれる人がいれば、彼女は普通の生活を営め
たと思う。普通の幸せな人生を歩めたと思う。悪夢の根元は、もう
消え去っているのだ。彼女自身の気持ちの問題なのだ。その彼女の
気持ちを支える、彼女に愛を捧げる人がいれば、彼女はその愛を信
じ、人の善意を信じ、自分の幸せを信じる事が出来ただろう。

その愛を捧げてくれた人たちを失ってしまったのが、現在の彼女の不幸だ。

この一日で、この村に、いったいどれだけの血が流されただろう？

芙蓉はやりきれない思いになる。

それで、何が得られたのか？

誰か一人でも、幸せになれた者があるだろうか？

こんなに傷ついた先生は、本当のところ、どういう思いでいたの
か？ 心が通じてても本当に深いところまで理解することは出来ない。

この村は、今も、それ以前もずっと、不幸だった。

そういうことでしかないのだろうと、芙蓉は自分を納得させた。

ゲンジがやってきた。日本太郎が彼に連絡して直木医院から救急箱を持ってくるよう命じたのだ。

「ご苦労」

差し出された救急箱を日本太郎が受け取ると、ゲンジは浮かぬ顔で問いたげにした。

「なんだ？ 報告することがあるのか？」

「タロさ。誰を殺していいんだ？」

「ああん？」

日本太郎は呆れた。この頭の足りない暴力マシンは、何を考えているのやら。

日本太郎はとりあえず芙蓉に救急箱を渡してやった。そうして呆れた顔で原人に教えてやる。

「作戦は終了だ。紅倉はあの通りだ。この村もすっかり利用価値が無くなってしまった。後は、後始末をどうするかだ。そんなめんどくせえだけの面白くもねえ仕事なんざ他の暇人どもに任せておけ」
ゲンジは図体ばかりでかくて小さな頭を一生懸命働かせながら言う。

「爺さん婆さんたちがいっぱい武器持って集まってきてるぞ？ あれはいいのか？」

「なんだって？」

日本太郎は面倒くさそうに村長に振った。

「おい、村長さん。どうやら村の年寄り連中がいきり立ちまってるようだぞ？ さっさと説得してくれ。でないと、また無駄な死人を出すことになるぞ？」

村長はこちらももつやる気がないように信木に振った。

「保安官。おまえさんがやってくれ。わしゃもう引退じゃ」

信木はやれやれと肩をすくめた。

「仕方ないですな。では、ちょっと行つて来ますか」

日本太郎が信木を見送つていると、ゲンジはまだ問いたげにじつと見ていた。

「なんだ？ まだあるのか？」

「殺せつて言うんだぞ？ タロさと女、どっちが偉いんだ？」

「女？ どの女だ？」

「えー……と……」

ゲンジはぬぼうつとした顔で視線を天に向けて考えた。

「偉そうな女」

「誰だよ、そりゃ？ その女が誰か殺せつておまえに言つたのか？」

「紅倉を殺せつて」

「誰だよ……、！」

日本太郎の眉が心当たりを見つけてヒクリと動いた。

「女…… だつたのか？……」

芙蓉は紅倉のパーカーと服を脱がせ、肩を裸にした。白い防弾ベストは肩までカバーしていないが、いずれにせよ鋭く尖った牙相手に繊維織り込み式では太刀打ちできなかつただろう。

紅倉の細い肩には半楕円の穴が痛々しく並び、血にまみれ、肌自体爛れていた。

「我慢してください、染みますよ」

芙蓉は消毒液を瓶から直接傷に振りかけ、脱脂綿で拭いた。紅倉は痛そうにうめいたが、それにも力が入らない。

「頑張ってください。ばい菌が感染したらたいへんですからね」

痛がる紅倉に芙蓉も泣きたくなつたが、気を奮い立たせて手当に集中した。

一通り消毒し、ガーゼを重ねて当て、腿の方に向かった。

布が穴だらけに毛羽立ち、巨大なあごの暴力の蹂躪に芙蓉は怒りを思い出したが、努めて冷静になり、ハサミで破けた部分から切り裂いて、右脚の筒を付け根から切り取つた。こちらの傷も深く、無

惨なものだった。芙蓉は紅倉が歩けるようになるか心配した。毎日愛犬ロデムの散歩を楽しみにしているのに、松葉杖をつけてでは遠出もできないだろう。せつかく健康的になったのに。

手当をしながら、紅倉の力無いうめき声を聞き、暗い気持ちに沈んでいると、芙蓉はハツと背後に危険警報を感じた。一度撃たれた銃を、今度こそ背中がはつきり覚えていた。怒りが燃え上がる。

「やめろおっ!!!」

芙蓉が振り向きざま攻撃の靈力を放つと、囲いの上で枯れた生け垣の向こうに隠れて拳銃を構えていた何者かが「ぎゃっ」と悲鳴を上げて跳ね飛ばされた。芙蓉は理解した、まだ人に向けて撃たれたことのない銃には靈的なインパクトがなく、反応が薄いのだ。狙撃者当人はむしろ大した手練れではない。芙蓉は立ち上がり、相手の出方次第ではとどめを刺してやろうと力をみなぎらせて身構えた。その芙蓉を追い越して日本太郎が中年男子とは思えない身のこなしでジャンプして土の壁を駆け上がり、灌木を掻き分け、倒れた何者かに銃を向けた。

「勝手は困るぜ、『キンメ』」

キンメとはなんの意味か？

金目鯛のことである。鯛に似た鮮やかな紅色の深海魚で、煮付けにして食べると美味しい。

日本太郎がそうして呼びかけたところを見るとこの者も公安の一人員だろうが、

はたして起き上がった「キンメ」はジロリと大きな目で日本太郎を睨んだ。それは、

信木の妻、広岡？奈央であった。

日本太郎は拳銃を向けたまま歪んだ笑みを浮かべた。

「おまえ、保安官の奥さんだよなあ？ あんたが『キンメ』で、間違いないんだよなあ？」

「ああそうだよ」

派手なミュージカルスターみたいな濃い顔の広岡奈央「公安のキ

ンメは、怒った声で言つて立ち上がった。日本太郎がにやけながらまだ突きつけている拳銃を忌々しそうに睨む。

「邪魔するんじゃないよ。命令だ」

日本太郎はムツと真顔になった。

「そりやいつの命令だよ？ この仕事は俺が頭だ。勝手な真似するんじゃない！」

最後はドスの利いた声で命令したが、キンメはふてぶてしく笑い返した。

「残念だね、わたしの受けた命令の方が新しいと思うよ？ 邪魔な紅倉を消せ。…きつと、自分たちの正体を知られた上様が泡食つてんだろうけどさ、命令は命令だ。さ、紅倉、それに芙蓉を、やっちまいな！」

「チエツ」

日本太郎はこれ見よがしに大きく舌打ちした。

「馬あつ鹿野郎が。くつつつだらねえ。」

ビジョンも、矜持（きょうじ）も、ありやしねえ。

おいこらデメキン、

俺たちや公安はなあ、政府の犬なんかじゃねえ、

日本国の、

番犬なんだよお！

見るよあの女。てめ、あの女が怖ええか？

あの女、神と闘つたんだそうだぜ？ それで見事神様をぶつ殺しちゃまった。ハツハツハツハアア、愉快な女じゃねえか？

なあおい、悪党にだつてなあ」

日本太郎は自ら名乗ってしまつて可笑しくて笑つてしまった。

「悪党の一分つてのがあんだらうが？ これだけはやっちゃあいけねえつて、ギリギリの線があんだらう？

命張つてんだぜ、こいつらああ？」

日本太郎は、首をへし折られてうつぶせになっている若者を見た。その首の骨折が致命傷でないのを彼は知っている。若者は、本来、

とつくに死んでいたはずの人間なのだ。それがここまで大切な者を
守って戦い抜いて、その姿に柄にもなく感動してやがるのかと日本
太郎自身思ったが。

そうした心意気を足蹴にして何が正義だと、この筋金入りの公安
員は思っている。

それが日本男児の、美しさだろうか？と。

ちよつとセンチメンタルに過ぎた日本太郎が、真顔に戻ってキン
メに言った。

「腐った野郎の腐った命令なんて無視しちまいな。どうせ、」

思い切り小馬鹿にして笑ってやった。

「すぐに首がすげ替えられるだろうぜ」

日本太郎とキンメはこれが初顔合わせであり、日本太郎はキンメ
の正体を知らなかった。どうやらキンメは仲間内にも秘密の潜入工
作員であつたらしい。

「意外。甘ちゃんだね、太郎さん。どんな命令だろうが、」

不快そうに眉をねじ曲げたキンメが、ギラツと目つきを変えて、

さつと屈んだ。キンメの銃は地面に落ちて、それは日本太郎が抜け
目なくキンメの手の届かない位置に蹴つてある。キンメは、

「実行するのが工作員だろう！」

パンツの裾に手をやり、足首に装着していた小型のピストルを掴
んだ。

「やめろ！」

日本太郎が脚を伸ばして邪魔するのを横に飛んでかわし、木の枝
が邪魔し紅倉と芙蓉どっちを撃とうか一瞬迷った。その迷いが芙蓉
にも一瞬の迷いを生んだ。

同時に、芙蓉はまたしても背中に別の銃器の警報を感じ、焦った。
芙蓉はとつさに紅倉をかばって覆い被さった。

「パンツ」「パンツ」

二発の銃声が交差し、チュインーン、と芙蓉の横の地面に土煙が立った。

「いつ……た……」

小型のピストルを取り落とし、左手で血を流す右腕を押さえてキムメが恨めしそくに銃撃者を睨んだ。

銃声にびっくりしている村長の後ろに、構えた銃口から白煙を上げさせて、信木が立っていた。

「奈央……。君はいつたい……」

妻を撃った信木は、眉間にしわを寄せ、苦しそくに途方に暮れた顔をしていた。

信木は知的な冷静さを取り戻し、妻に問い直した。

「君は、公安の工作員なのか？」

憎々しげに睨んでいたキンメ。奈央も、ただ痛そうに顔をしかめ、夫をなじるように睨み直した。

「ええ、そうよ。ごめんなさいね、

黙ってて」

信木は不快そうに眉を動かした。

「いつからかね？」

「最初から。ええ、最初っからよ」

「つまり、わたしたちの結婚その物が仕事だったというわけか？」

あの、事件も？」

「あの、事件で、公安にスカウトされたの。きっとあなたが接触してくるだろうから、上手く、できるだけ親密になってくれ、ってね」

「君は女性だ。もう一人、易木カウンセラーが担当になるとは考えなかったのかな？」

「易木さんは別に事件を担当してたんでしょ？ 事件の内容的にもね、あなたが担当になるとふんだんでしょね。その通りになったでしょ？」

「わたしをスパイするために結婚までしたのかね？」

「あら謙遜。あなたは紳士だし、かつこいじやない？ 一目惚れしちゃったわよ？ ああ、この人ともっと早く出会えていたらな、って、うぶな少女みたいにときめいたものよ？」

「そうか。わたしたちの結婚その物は嘘ではなかったということだね？ 安心したよ。しかし、君が公安のスパイだったとは、迂闊にも、今の今までまったく知らなかったよ。見事だ」

「どうってことないわ。彼らはあなたと『手のぬくもり会』の動きを把握していたかっただけで、だからどうする、っていう行動は全

然してなかったもの。今回まではね」

「なるほど。しかしそんなに長く公安の手の内で踊っていたとは、いささか不快ではあるね？」

「いいじゃない？ 彼らもあなた方の必要を認めていたってことじゃない？ 世の中には、法に守られた、はらわたの煮えくり返るような悪人がいる、っていうのは共通の認識なのよ」

「だったら、そっとしておいてほしかったねえ……」

「だからっ、その女なんじゃないっ!？」

奈央はヒステリックに憎々しげに叫んだ。

「その女が来たのが悪いのよっ! その女が何もかも壊してしまっただのよっ!！」

奈央はピストルを握れないのを恨めしく思った。

「なによ、正義の味方面して! ああっ、腹が立つっ! この手で死にぞこなつた息の根を止めてやりたいわ!! ねえっ、あなたっ! 殺してよその女!、わたしの代わりに!!」

信木はすっかり忘れていたように拳銃を構えたままだったが、困ったように視線を紅倉と、怖い顔で守っている芙蓉に向けた。

「……………」

信木は、構えた腕を下ろし、拳銃をジャケットの内側にしまった。

「あなたっ!！」

奈央がヒステリックになじり、信木は妻を哀れむように優しい眼差しで話しかけた。

「もういいよ、奈央。許してあげよう。もう神は死んでしまったんだ。この村は機能を失った。もう、仕方ない。紅倉美姫はこれまでも個人で『手のぬくもり会』と同種の行為を行ってきた。彼女にはこれからもそれを続けていってもらわなくてはならない。それが、神を殺したこの女の罰だよ」

「……………」

奈央は悔しそうに唇を噛んだ。

かつて凶悪な犯罪の被害にあった者の思いは共通だ、

だったら、わたしも助けてよ!？、と。

「奈央」

信木は優しく問いかける。

「わたしたちは夫婦だ。これからも、夫婦でいいんだろっ?」

奈央はがつくりうなだれて答えた。

「ええ。いいわよ」

信木はニツコリ笑ってうなずいた。

「さ、芙蓉さん、もう大丈夫ですよ」

信木は歩み寄って芙蓉に声を掛けた。

「紅倉さんを車まで運びましょう。名古屋の病院をお世話しますよ? ああ、君、ゲンジ君? 悪いが君はあの安藤君を運んでくれるかな? 1台に乗りきれないね? 君たち車はどうしたんだい?」

「俺たち、タクシー」

「ああそう。公務員はいいねえ。じゃあ、もう1台村から拝借しなくちゃならないか」

ゲンジはない頭で一生懸命考えて、日本太郎に訊いた。

「紅倉と芙蓉殺しちや駄目なのか? じゃあその女殺すか?」

キンメは虫の手足を引きちぎってなぶり殺したい衝動の抑えられない幼児みtainなゲンジにギョツとした。日本太郎がキンメに「だいじょうぶだ」と声を掛けてやり、

「殺すな。ここでの仕事は終わりだ」

とゲンジに命令した。ゲンジはむずがり、

「俺、誰も殺してない」

と不満を言った。

「我慢しろ。今度は……」

日本太郎は次の仕事の目星がついたみたいにニヤリと悪い笑いを浮かべた。

「うんと大物をおめえに仕留めさせてやるよ」

ゲンジは、えへっ、と四角い巨大な歯を見せて笑った。

「立ちな」

日本太郎は地面に転がるピストル2丁を拾い上げてキンメに命令した。

「足を調達する。おめえも俺たちに同行しろ。いろいろ訊きたいことがある。おい旦那、女房はしばらく預かるぜ？」

信木は困った顔をしながら同意した。

「ま、仕方ないでしょう。くれぐれも、手荒な真似はしないでくださいよ？」

「安心しな、俺はサディストじゃねえ。特に『仲間』は大事にする主義でね」

信木はどうだかと怪しんだが、ニヤツと、少しは友情を感じてくれているらしい日本太郎を信じることにした。

「ゲンジ。行くぞ」

「おーいさ」

ゲンジは地面に伸びている安藤を軽々肩に担ぎ上げた。信木が慌てて声を掛けた。

「ああ、ゲンジ君。彼は我々の車の助手席に乗せておいてくれたまえ」

「うーい」

ゲンジはのっしのっしと歩いていき、

日本太郎は、

「もう危ねえ物を隠しちゃいねえだろうな？」

と馬鹿にした薄笑いを浮かべてキンメに歩くよう促し、丘を巡っていった。

信木はやれやれと肩をすくめた。

「済みませんね。妻が行ってしまつまでしばらく待ちましょう」

「物騒な奥さんね？」

「いや申し訳ない。明るく楽しい女なんですがねえ…、かわいいそう

に」

これからの二人の生活を思つてか少ししよげるように首を振つた。「さ、じゃあ紅倉さんを起こして。傷の具合はどうです？ わたしが抱き上げて運びましょうか？」

信木は二人の傍らにしゃがみ、心配そうに紅倉を覗き込んだ。芙蓉は、

「いえ。先生はわたしが運びます」と断つた。

「抱いていきます。先生、行きますよ？」

芙蓉は紅倉の背と膝の下に手を差し込み、抱き寄せた。

「手伝いましょう」

信木が下から紅倉の腰を支えて芙蓉の立ち上がるのを助けた。紅倉は薄目を開け、

「お世話掛けます」

とか細く言つた。

「はい。しゃべらなくていいですよ」

と言いながら芙蓉は少し安心して微笑んだ。

日本太郎が丘の上に駆け出してきた。

「おいつ、保安官っ！」

何か血相変えている。

「爺婆どもが押し寄せてきてるぞ？ 説得したんじゃないのか？」

「えっ!？」

信木は顔をしかめた。

「奈央は？」

「あ、くそ、逃げやがった」

「奈央…、まさか……。芙蓉さん、紅倉さんを」

紅倉を、どうしろと言うのか？

芙蓉が厳しい目で信木を見つめると、肩に寄り掛けていた紅倉の頭がかくんと滑り落ちた。

「失礼」

信木は紅倉の頭の方に回って、左手で後頭部を持ち上げた。右手を上げ、そこに握られている物に芙蓉はギョツと目を丸くした。信木の右手は手のひらに余る五寸釘を握り締めていた。

「なに・」

信木は右手を紅倉の額の横に打ち込んだ。紅倉の目がカツと見開いた。芙蓉は目を丸くして紅倉の目を見つめた。信木の手がグリツと動いた。芙蓉はその紅倉の表情を一生悪夢に見続けるだろう。左の目玉が寄ったかと思ったら、グリツとバラバラに外を向いた。

「フム」

信木は右手を引き抜き、左手で紅倉の首をひねって反対の側面を上向けると、また額の横に右手を振り下ろした。まるで医療行為でも行っているように、グリツと、中身を掻き回す。

「
・
・
・
・
・
」

「
うわあああああああ――――――――――
つっ

っ
っ
っ
っ
っ

芙蓉は、大声で悲鳴を上げた。

「うわああああああああっっっ」

芙蓉はわめいて、信木の手をはね除けた。信木はサツと後退し、紅倉の上半身が芙蓉の腕からこぼれてずり下がった。

「！」

芙蓉は慌ててしゃがんで紅倉の体をかき抱いた。嘘だ、夢だ、悪夢だ、とまるで現実感を失った頭で必死に思いながら。

「せんせ……」

紅倉は口をポカンと半開きにし、目が、死んでいた。

「せんせ……」

芙蓉は力チ力チ歯を鳴らした。再び全ての負の感情が膨れ上がって芙蓉の頭を破裂させようとする。

「わあああ——————————っ、

うわああっ、

わあああああ——————————っっっっ、

」

芙蓉は狂ったような悲鳴を上げた。事実狂ってしまったと芙蓉自身思い、………
正気が戻った。

紅倉の額の左右に丸く穴が開いて真っ赤な血がフーッと太く流れ出している。

「あっあっ。動かさないように。静かに仰向けに寝かせておきたま

え」

冷静な信木の声に芙蓉の怒りが燃え上がった。

「うわあつ、死ねえっ！！！！！」

紅倉を地面に下ろし、信木に飛びかかり、殴りかかった。ビュツビュツという芙蓉の怒りのパンチを、信木はスツ、スツ、と軽やかな身のこなしで避けた。まるでいつもの芙蓉の格闘と逆だ。

パシツ、とパンチを横に弾いた信木が、ドン！、と肩を押しして芙蓉を突き飛ばした。

地面に回転した芙蓉は、睨み、怒りのオーラを放って信木にぶつけた。

「説明したように、わたしに靈気の攻撃は効かないよ？」

涼しい顔の信木に芙蓉はまた殴りかかろうとしたが、

「紅倉さんのことを教えてあげよう！」

鋭く言われて思わず動きが止まった。

「紅倉さんは、死んではいないよ」

日本太郎は、さしものこの男も、足下で繰り広げられた事態に唾然とした。

「紅倉を、殺りやがったのか……………」

その背後で、丘を囲って物騒な気配がうごめく。先の尖った農器具や大工道具を手にした老人たち、50名近くが、境内を見下ろす丘に徒党を組んで登ってきた。

「チツ」

舌打ちして日本太郎は境内に飛び降りた。紅倉の元に駆け寄り、確かに、紅倉が致命傷を負っているのを確認した。

「どうということだ？、保安官？」

村長もダルマのぎよる目を見開いて信木に問うた。

「信木よ、おまえいつたい、なんのつもりだ？ 今さら気が変わった、復讐か？」

信木は呆れたように村長を振り向き、

「違いますよ」
と言った。

「言いましたでしょうか？、紅倉美姫に、神になってもらう、と」

丘の前面に殺気立った凶相をした老人たちが現れた。その中に奈央も顔を見せ、紅倉の殺られたのを見てニタアツと笑った。

彼らを見渡し、信木保安官は高々と宣言した。

「見よ！ 我々の、新しい「神」だ！」

人々はしいーんと静まり返った。理解できない。

「我々の社会は「神」を必要としている。彼女がその「神」だ。彼女がこの腐った社会の「善」と「正義」を象徴し、体現するのだ！」

人々は「神」の威光にひれ伏し、善良なる者が、安心して、平和に暮らせる社会が守られるのだ！」

「神」は「力」だ！

紅倉美姫は、自ら神を超えた人類最強の「力」であることを証明した！

彼女の「力」こそ新しき「神」なのだ！

しかし「神」は人間の「個人」であってはならない。
人間である紅倉には逝去してもらった。

しかし、

「神」たる「力」は生きている。

紅倉の精神は死んだが、肉体は生きている。

不必要な大脳は死に、生き神に必要な生命の脳、小脳、脳幹は、
無傷で生きている！

紅倉美姫という人間は、現世の煩惱を捨て去り、無垢なる

「神」

に昇華したのだ！

村は存続する。ずいぶん傷ついてしまったが、新しい血によっ
て再生する。

村の新しき秩序が、日本社会の秩序となり、

「善」と「平穏」と「幸福」が、

約束されるのだ！

さあみんな、祝おう、

新しき「神」

バンザイ！

「生きておるじゃと？」

村長がいぶかしく訊いた。

「ほんに生きておるんか？」
紅倉の頭にかがみ込んだ日本太郎が首筋の脈を取って言った。
「確かに…、死んじゃあいねえようだな……」
信木が満足そうにうなずいた。
「ほらね？ 死ななければいいんでしょう？ これで、我々も紅倉の怨霊に祟られる心配はない」
信木は周りを囲んで暗い顔でいる老人たちを鼓舞した。

「神」バンザイ！」

「『神』、万歳！」

「万歳！」

「万歳！」

老人たちは喜び……というより儼かな面もちで万歳の声を上げ、手を振り上げた。万歳。万歳。

「やかましいいいいいつつつ！！！！！！！！」

芙蓉が血の出るような叫びを上げて立ち上がった。

「やかましいやかましいやかましいつつつ！！！！！！！！！！」

ヒステリックに叫ぶ。

「何が、神だ、何が、力だ、何が、善だ、平和だ、正義だ、秩序だ、幸福だ。」

おまえらみんな悪人だ。

みんな、殺してやる」

信木が言う。

「悪人？ いいや、我々は善人だ。それで多くの人々が、不幸にならずに済むのだ。それを分かかっていて悪を演ずる我々は、善人だよ」

「やかましい。詭弁だ。それは恐怖政治の、独裁者の言い分だ」

「我々は富も名誉も求めない。歴史も要らない。ただ、純粹に、平和を望むだけだ」

「宗教者のつもり？」

「その通り。我々は、自らの使命に準じているのだ。紅倉さんにも、天命に従ってもらった」

こいつらには何を言っても無駄だ。芙蓉は心底どうでもよくなっ
た。

「……もういい。おまえたちは、殺す」

「待て」

村長が半信半疑で問う。

「紅倉を『神』としてコントロールできるのか？」

「もちろん」

「今までの『神』とは違うぞ？」

「こちらの方がより純粋な『力』だ。かえって扱いやすいだろう。

ガン細胞の集まりなどという不安定な物に比べて、現代の最新医療を用いれば植物人間の肉体を生かし続けるのはずっと楽だろう。

どんな姿だろうと生き続けてさえすればいいのだ。

世話も清潔な治療室が一つあれば足りる。大がかりで面倒な水路などもう必要ない。

生身の肉体を持つ神なら、サイボーグ技術も使えるかもしれない。上手くやれば巫女を使わなくても神経に接続したコンピューターで直接神を操れるかもしれない。

「どうだ村長？ 村の未来は明るいではないか？」

「なんでじゃ？」

「何故、とは？」

「なんでおまえがそないなこと知っちゃる？」

信木は村長のいわんとする事を不思議そうに眺めた。村長は目をぎよろつかせ、怪しみながら言う。

「おまえは、村の誰よりも、それが『分からない』人間じゃろうか？」

「失敬だな。わたしはカウンセラーだぞ？ 脳死判定など、最新の医療技術もちゃんと勉強している」

「そうではない。神だ！

おまえは、誰よりも『神』を感じない人間じゃろうか？ そのおまえに、どうしてそんなことが言える？ おまえには、分からん

はずじゃ、絶対に！」

信木はうん？と思いい切り顔をしかめた。

「絶対に、分からない？……」

「『神』のことは、おまえには、絶対に分からんはずじゃ。そんなおもちゃみたいな仕掛けで、神の力が操れるなど、わしには信用できん！」

何故だ？ 何故そんなに自信満々に言える？

何故じゃ？

おまえのしたことは……、ただの人殺しじゃぞお？

信木が恐ろしく眉を寄せ、うんと首をひねった。

「わたしが、ただの人殺しだと？」

考え、ニヤリと笑った。

「いや、間違いなく、紅倉は作動するよ、『神』として」

村長はじつと信木の目を覗いた。

「おまえ。信木じゃないじゃろ？」

信木がまたうん？と首をひねった。

「何を言ってる村長。わたしまでスパイか何かと疑っているのかね？」

「ああそうじゃな。そうかもしれん。おまえは……、

モグラに操られておるんじやろ？」

ふっつと信木の表情が消え、不思議そうに村長を見た。

「わたしが操られている？」

「ああそうじゃ。おまえはこの村で誰よりも現実的な考えをする男じゃ。そのおまえが、そんなSFマンガまがいの発想をして、なんの疑いもなく酔いしれるなど、わしには考えられん」

「……」

信木は不思議そうに村長を見ながら、その目は空洞で、何も見ていなかった。

「おまえもその『式』とかいうもんを仕組まれておるんじやろ？」

ええかげん姿を見せたらどうじゃ、高野のモグラ！」

雲が湧いた。

『わっはっはっはっはっはっはっは』

境内の上空低いところに湧いた黒雲に、男の顔が浮かび上がった。芙蓉の目がギラリと光り、ゴツと怒りのオーラが噴き上がった。真っ赤なフレアは、しかし、黒雲に到達する手前で拡散して消えた。

『残念だったなあ、芙蓉。俺は既に霊体レベルの有限無限を自在に切り替える法を修得しておる。』

おまえの倒したのは俺の単なる影に過ぎぬ。

しかれども、影とはいえ倒したのは見事。褒めてやる。が、残念無念。

大事な紅倉は、守れなかったな』

芙蓉は死ぬほどこの男を憎んだ。

『観自在。この世に起こることなど俺の目には全てお見通し。事象を操るのも又しかり。相手が悪かったと観念せよ。』

俺は欲しい物を半ば手に入れておる。俺が欲しかったのはその女の力を我が物として自在に操る事のみ。心などというものは一時の事象の揺らぎに過ぎぬ。過ぎてしまえば何ほどの事も無し。紅倉と言ふ意識の消えたところで俺の勝ちだ。

芙蓉。おまえにとって欲しい物はなんだ？

紅倉の命ならばその体につなぎ止めてある。心が大事だというならば、それは所詮おまえの観察に過ぎん。おまえの心が決める物だ。俺の影に勝った褒美だ、その体の世話をさせてやってもいい。童女の人形遊びのように、その体の『心』に話しかけてやるがいい。

いいことを教えてやる。紅倉の肉体もいずれば死ぬ。そうすれば魂はその肉体という牢獄から解放されて自由な『心』を取り戻す。

さあ芙蓉よ。なんならかまわんぞ？ おまえの手で紅倉の肉体を殺してやれ。医学的には死んだ状態だ。殺人にもなるまい。俺の目には紅倉は確かに生きておるのだがな、ま、それも一時の事象に過ぎん。

色即是空 空即是色

全ておまえの心のままだ。

さあ、選ばせてやる。

植物状態の紅倉と共に生き続けるか、
紅倉を殺して終わりにしてやるか、
俺に復讐して殺されるか、
どれがいい？」

「べらべらと。坊主の説教なんて訳分からない。

わたしの選択など、一つしかない。

おまえを殺す。

それから後のことは、それからだ」

芙蓉が怒りのオーラを燃え上がらせると犬たちが一緒になって一斉に吠えだした。

『犬畜生。おまえたちにもう用はない』

吠える声が一斉に止んだ。死というセレモニーに一切の心構えもないまま犬たちは命の糸を断ち切られ、何も思うことなく地面に倒れた。

「きつさまあ……」

芙蓉のオーラはめらめらと燃えた。

「おい、陰陽師」

日本太郎が呼びかけた。

「てめえとの契約は終いだ。さつさと失せろ」

『おや、公安君。すっかり忘れてたよ。ああいいよ、これは俺が趣味でやってることだから。死にたくなければそこを離れたまえ。君

にも『式』が仕込んである。うるさくすると消すぞ?』

日本太郎は無言でしらっとした顔を芙蓉に向けた。

「そついうこつた。おまえも無駄死にはするな、…と、一応言っておくぞ」

と言いながら日本太郎はそくさと退場した。

『村の方々も下がっていてもらおうか? 君らも紅倉を『神』として利用したいのだろう?』

信木は道の方へ下がり、「村長」と下がるように声を掛けた。村長も仏頂面しながら信木を追い越し、追い越しざま、

「神など、もう死んどるわ」

と嫌味を言った。信木は笑ってやり過ぎた。現実主義者の彼は「式」で操られていようと、自分の理想の「神」が手に入ればそれでいいと思っている。

『さ、いいぞ、芙蓉。やるか?』

「殺す」

芙蓉は爆発寸前にオーラを高めた。

『俺の力を教えてやろう』

雲が手を開くと、

芙蓉の頭上に大きな丸鏡が現れた。

丸鏡は端を重ね合わせながら上下左右に増殖していき、ちょうど境内に収まるドームとなって芙蓉を閉じこめた。

鏡の向こうに透けて土亀が笑った。

『俺は力の及ぶ限り自由自在だ。試しに力を放つてみよ』

負けるか!と芙蓉は怒りを込めてオーラをまとめた霊力を放った。土亀の雲に向かった霊力は、鏡の中に消え、百に及ぶ丸鏡からそれぞれ芙蓉向かって返ってきた。

「わああっ・・・」

芙蓉は自分の霊力、それも百倍した霊力にまともに撃たれて跳ね上がり、悲鳴を上げた。

どっと地面に倒れ伏し、体をブルブル震わせた。

芙蓉の正直な気持ちは大きなショックを受けていた。

恐れなど無い。しかし、実力差は圧倒的だった。

芙蓉は、

立ち上がった。

につつき陰陽師を睨み付け、さっきにも増して霊力を増大させた。

もはやこの世になんの未練もない。

自分は、死んでも、先生を守る。

『死を覚悟したか。なるほど肉体を捨てて紅倉を守る気か。だが無駄なことだ。おまえは、

『神』にはなれぬ。

悔しいか？ 悔しいだろうな、芙蓉。

正義は必ず勝つ、とでも思っているか？ それとも、

『愛』、か？

そんなことを言う輩は、欺瞞か、馬鹿だ。

この世を動かす物、それは、

『力』をコントロールする術を持っている者だ。

真にその術を持っている者は自分が力を持たずとも、どうとでも立ち回って物事を操れるものだ。

芙蓉。おまえがどんなに力を高めようと全て俺の手の内。おまえはどうあがこうと操られ、何も、思うままにはならぬのだ』

この陰陽師の言うとおりなのだろう。自分はこの男には勝てず、自分は死に、先生も助けられないのかもしれない。

でも、では魂とはなんなのだろうかと思う。

心など単なる現象だとかなんとかこの男はほざいていたが、

なんにも分かっていない、

と強く感じた。先生の軽蔑する「頭のいい馬鹿」の典型じゃないか？

この男が見ている物とは全然別のところに自分たちの「真実」がある、きつと、と信じる。

この男には、未来永劫、それが分からないだろう。

愛などくだらんと笑う男に、

愛などない。

当たり前前の事じゃないか。

愛を知らないおまえが哀れなのだ。惨めなのだ。何もかも思い通りに操っている気で、一番大切な物を、おまえは得られていないじゃないか？

わたしと先生はそれを持っている。

だからわたしは、死んでも、おまえに屈しない。おまえの思い通りになど操られない。

おまえが操っているのは、単なる現象だ。

単なる現象の中に、本当に大切な真実など、無い！

魂など無い、幽霊などいない、と科学的に言って得意になっている学者と同じじゃないか。

おまえは馬鹿だ。おまえが軽蔑している馬鹿が、おまえ自身なのだ。

おまえは自分が馬鹿だということに永遠に気づかないんだろう。言ってやろう、一言、呪いの言葉を。

「おまえは」

『なんだ？』

「不幸だ」

『ほう。そうか、俺は不幸なのか。考えたこともなかったぞ。ありがと』

「どづいたしまして」

芙蓉は靈的エネルギーを最大にした。ガラスのドームいっぱい光が揺らめき、虹色のオーロラがはためく。

全力で放った力が鏡に増幅されて返ってきて、尚全力で靈力を放ち続けたら、どうなる？

ぶつかり合って、大爆発を起こし、自分も、先生も、粉々に砕けて溶け合えば、それで幸せだ。

鏡よ、砕けよっ！

.....

芙蓉の目の前に白い女の子が現れた。

紅倉の守護霊、姫倉美紅だ。

『どうした芙蓉、怖じ気づいたか？』

美紅は首をかしげ、悪戯っぽい目をあらぬ方に向けた。どう？あの人、見えてないわよ？と言うように。

美紅は芙蓉を見ると、両手を開いてひらひら指を動かした。芙蓉は自分の手を見た。両方の薬指に、先生とお揃いの銀の指輪。

美紅が芙蓉にだけ聞こえる声で言った。

「仕方ないわ。しゃくだけど、紅倉を解放しましょう」

芙蓉は眉をひそめた。それはきつとあまり良いことではないという予感がした。でも……、仕方ないのだろう……。

「はっ、」

芙蓉は全身から全力のオーラを放った。

七色の光の奔流は全て鏡に吸い込まれていき、何百倍の圧倒的な白さになって芙蓉の放ち続けるオーラを圧して迫ってきた。

芙蓉は左右に手を開き、『集まれ、わたしのオーラ！』と命じた。途端に光は一方的な流れになり、左右の指輪に吸い込まれていった。強烈な引きの力にガラスのドームが崩壊した。

「先生っ。」

横たわる紅倉の全身から、

闇が噴き出した。

「……………」

芙蓉は噴き出す闇に飲み込まれて予想外の「色」に驚いていた。当然高貴で力強い「白」が輝くと思ったのだ。

「痛ッ！」

芙蓉は手の甲に、頬に、ピリッ、ピリッ、という鋭い痛みを感じた。手を見ると、濃い紫の血管が浮き、全体の肌を毛細血管が黒く這い、肌の表面が赤く濡れていた。それが紅倉の体から噴き出したオーラの実体化した物だと気づいた。真っ黒な闇は、実は凄まじく凝縮した「赤」だったのだ。

「逃げて！」

美紅が叫んだ。

「紅倉の本体が目覚める！」

「!?!?……………」

「早く！」

美紅は芙蓉の手を掴んで引つ張った。芙蓉は走り出した。振り返っても闇の中に紅倉の体は見えない。

村長と信木の間を駆け抜けた。

『わはははははは』

空から嫌な笑い声が降ってきた。

『そうだ！　これが欲しかったのだ！　見せてみる、紅倉美姫！
おまえの、本当の力を！』

何もかもあの陰陽師の「式」の内なのか？

「いいから、急いで脱出するのよ！」

美紅に手を引かれて芙蓉は走り続けた。

村の人間たちは逃げ出すことをしないで口を開けて広がる闇の中心を見ていた。長年神に仕え続けてきた彼らは、神秘の体験への畏れと憧れが強すぎるのか？

「急いで！急いで！」

美紅と芙蓉は走り続ける。それを追って、紅倉から発した闇は広がり続ける。

広場を通り過ぎて、ペンションへの道をひた走り、ようやく辺りが普通の夜の暗がりなのを見て芙蓉は振り返った。

何か居る。

村の3分の1を覆った闇の中に、それを突き抜けて、赤い、巨人が、立っている。

身長10メートルもある、裸の鬼女だった。

先生……、と芙蓉は思った。

「まだ駄目！　山の上まで離れて！」

美紅に手を引つ張られ、芙蓉はまた走り出した。
何か恐ろしいことが起きる空気がゾッと背中を押した。

大字村の人口は50世帯約180人。内若者を中心に20名以上が死に、5人の小学生と父母たちは校長が家を回って村を離れさせたはずだ。小学校で気絶していた鬼木成美も無事発見されただろうか？ 海老原愛美はとうに父母、平中らと逃げ出しているが、村長の曾孫百子の父のように夜祭りに参加していた若い父親がいたかもしれない。元々学業や出稼ぎ、各方面の工作で村を離れている者も十代二十代を中心に20名ほどいた。

それらの人数を抜いて、現在まだおよそ110名ほどが村にいた。意外に多い。その中でも得物を持って社に押し寄せているのが40名から50名くらい。その他の6、70名ほどは家でひっそりしていた。

「神」とその神を使って行っている村営の事業は村人公認の秘密であったが、実は彼らの多くは「手のぬくもり会」のいわばサポーター会員で、実際に事業に関わっている人間は実は、そんなものだったのである。

しかし、今日の日、そして今村を襲いつつある脅威は、彼らの「自分に関係ない」という思いなどまったく省みることなく、平等に災難を与え、今またふっかけようとしていた。

闇の中にいる村人たちは、立ち現れた巨人をよく見ようと後ろに下がったが、そこから逃げ出そうとはしなかった。

彼らの新しい「神」は美しかった。

滑らかな真紅の肌をした裸形の女神で、彼らには大陸の奥のインダス文明由来の神に思われたが、実際はもつと北方のアラブ民族の血を濃く感じさせる顔立ちをしている……有り体を言えば、紅倉美姫の東西ハーフの顔立ちをうんときつくしたものだ。

憤怒……というほどあからさまな表情を表していない。つんとして、

不機嫌そうだ。怒りよりむしゃくしゃした子どもっぽい癩癩を抱えているように思える。

「おお、神よ！！」

美しき女神を称えて両手を上げる老人を、ジロリと不愉快そうに見下ろすと、虫けらのように踏みつぶした。老人はちょうど小柄な背丈を覆う女神の足裏にぎゅうつと踏みつけられ、ミシツと骨を砕かれて血を噴き出して潰れた。老人の噴き出した汚い血は、女神の怒りによってジュツと赤い煙を噴いて蒸発した。

老人たちに驚きが走った。慌ててひざまずき、へへえー……、と平伏し、女神に機嫌を直してもらおうとした。女神は汚らしい老人の存在そのものが気に入らないように蹴り飛ばし、泡を食う老人たちにカツと目を光らせた。

「ぐう……」

睨まれた老人たちの肌が赤くなり、ぶつぶつと血の玉を噴き出し、流れ落ち、全身を濡らした。

「あ、あ、あ、あ……あああー……」

悲鳴を上げ、鉄板で焼かれるようにジュウジュウ赤い煙を上げて転げ回り、やがてボツと火がつき、ヒイとますます激しく転げ回りながら、炭となり、ぼろぼろに壊れて、動かなくなつた。

「たっ！……」

恐慌が起こつた。神が自分たちの手には負えない恐ろしいものだと思ひ知つた老人たちは、今度こそ我先にと逃げ出した。

カツ、と、女神の視線が赤いビームとなつて老人たちを襲つた。通り過ぎるビームにズバズバと肉体を断ち切られ、傷口から火を噴いて、悲鳴を上げて焼かれていった。

黒かつた空気が次第に赤く染まっていった。

丘は燃え、爆ぜた火の粉がほこらに火をつけた。下から炎に照らし出されて、赤い女神、いや、鬼女は、まるで不機嫌なまま焼け死んでいく老人どもを眺めていた。

村長は炎と村人たちの悲鳴に囲まれながら、自身袈裟懸けに切断された体を地面に横たえ、炎を立ち上らせながら、うわごとをつぶやいていた。

「あんまりじゃ…、あんまりじゃ…、これが世のため人のため働いてきたわしらに対する仕打ちか？ あんまりじゃ…、あんまりじゃ…、これでは誰も浮かばれん……………」

炎にめらめらなぶられ、カツと目を見開いたまま、村長は焼けこげていった。

信木は現実的な男である。彼は横を芙蓉が駆け抜けていくと、丘の上によじ登り、妻の下へ駆けた。妻奈央は境内にぬうつと立ち上がった赤い裸形の女神を呆気にとられて見上げた。信木は妻の見える物を確認もしないで手を取り、

「行くぞ」

と有無を言わず引つ張って丘を外へ駆け下りた。ゆるい下りになり、峠のふもとの森になる。こちらは南の陰になるので段々畑もなくそのまま森が残っている。信木は妻を連れてその中に潜み、ようやく様子を振り返った。

老人たちが騒いで、血を吹き、炎に巻かれている。いったい何が起こっているのだ？

マイナスに特化した強力な霊能力者である信木にはあの巨大な女神の姿が見えないのだ。

信木は妻の視線を追い、表情を読み、想像する。顔をしかめて言う。

「まったく、なんて事をしてくれた。我々の神が台無しだ」
しかし冷静に考える。

「紅倉の体は無事だろうか？ 体が無事ならいずれ怒りが収まればコントロールできるかもしれない」

「あなた、あなた」

奈央が信木の肩を揺さぶった。

「逃げましょう。バケモノよ？ は、早く、避難しましょう？」

「よし、そうしよう。このまま木に隠れながら山を越えてしまおう」
二人は斜面を幹の陰から幹の陰へ隠れながら登っていった。信木が山登りが趣味というのは本当で、軽々と斜面を登っていったが、妻の方は夫に右手を銃で撃たれていた。信木が先のルートを気にしている隙に妻が手掛かりを掴み損ねて泥の斜面を滑って落下してしまった。

「奈央！ 大丈夫か？ 今助けてやるぞ」

信木が奈央のすがりついていている茂みまで下りていくと、奈央は恐ろしく目を見開いて宙を見ていた。

「奈央？……」

信木も恐る恐る奈央のしている方を見た。その途端、二人の視界を真っ赤な光が覆った。

「ぎゃつ」「ぎゃつ」

二人同時に悲鳴を上げて、目を覆った。

「ぎゃああああつ、うぎゃああああつ」

「あああつ、くそつ、奈央つ、奈央つ、どこだっ!？」

「ぎゃああ……ぎゃああああああああ……」

「……」

奈央は火だるまとなって斜面を転げ落ちていった。

「くっつ、おおお、おのれえ……」

信木は脳の燃え上がる激痛に苦しみながら、目を焼く炎を拭い、無理やり見ようとした。

真っ赤に、何もかも燃えていた。その中に女の巨人が立っていた。

「紅倉……美姫……なのか？……」

信木はマイナス方向ゆえ見たことの無かった霊の姿を初めて見て、

そして、

「・・・」

目玉が炎を噴き上げ、頭の中身を燃やし、信木も妻を追って斜面を転げ落ちていった。

紅倉から生じた赤い巨人はその場からあまり大きな動きをしていない。足下の虫けらを踏みつぶし、視線だけで骨肉を断ち、灼熱の炎を生じた。じきに辺りに生きた人間はいなくなった。

赤い巨人は動かない。しかし地獄の赤は波紋のように広がり、村全体を赤く塗り上げていった。

家々においてこの異変に怯えていた村人たちの下に死者が訪れた。1000年を越す歴史を持つ村には1000年溜まりに溜まった怨念があつた。その怨念たちが赤く染め上げられ、地の底からわき上がり、村を覆い尽くす勢いで増えていった。

赤い怨霊たちは家々にちん入し、生者に組み付いていった。怨霊に組み付かれた者は、肉と骨と黒く腐れ爛れ、人間的な理性が破壊され、動物的な奇声を上げて、生きながら幽鬼に変じていった。

生きている者は悲鳴を上げて逃げまどい、ああとかううとか、怨霊たちのうめき声が嵐となって渦巻き、村をすっかり地獄へと変じさせていった。

土亀恵幸の霊体は上空からこの地獄の有様を見物していた。

『ウム……』

と、この「観自在」の男も首をひねっていた。

『なんなのだこれは？ 正直ここまでとは思わなかったぞ。死して魔界から明王でも招来したか？ ウウム、それを体現できる靈魂の持ち主など、今の世にあつたとは思えぬが……』

この男にしてもこれほどはつきりした巨人が姿を現す現象など理解できないのだった。

『不愉快だな。この俺の分からぬ事象が起きるなど。下等な霊能者の分際で俺の霊階を超えたなどあり得るか。どれ、化けの皮を剥い

「でやろうか」

どこまでも人を人とも思わぬこの男はまたろくでもないことを企んでほくそ笑んだ。

下界には阿鼻叫喚の怨念が渦巻いている。

『おまえたちも再び神となれ。あの邪神を殲滅せよ』

土亀は下界の怨念に「式」を与え、「神格」を与えてやった。

怨念の渦が、村の中心、広場に集まり、柱となり、人……らしき形になった。

「うわあああ~~~~~」

既に輪郭があやふやだ。身の丈は倍するが紅倉の鬼女のような形の美しさは皆無だ。同じ赤色をしながら、どす黒く、まだらができて、汚い。

『チツ、勝負にもならんか。では、「大黒天」でも与えてやろう』

土亀が新たな「式」を注入すると、背が縮んでぼわぼわだった輪郭が引き締まり、真っ黒になって鋼の光沢を放ち、単純なフォルムだが力強い姿となった。

『いいぞ。闘え。粉碎しろ』

「大黒天」は建物を破壊しながらドストドス地響きを立てて走っていくと鉄球のような拳を振り上げ、赤い鬼女に襲いかかった。

鬼女の胸を殴る手前で、凄まじい衝撃波が広がり、天と地を揺さぶり、黒い鉄球を粉々に弾けさせた。

鋼鉄の皮膚の砕けた肉体は真っ赤な中身を弾け出させ、無数の悲鳴と共に血の噴き出るように構成する怨霊を流れ出させた。

鬼女の目が光る。大黒天の胸に穴が開き、悲鳴が溢れ出し、真っ赤な怨霊が吐き出される。

『やれ、馬鹿！』

怒り狂った大黒天はロケットのように高く飛び上がると、反転し、弾丸のように頭から突っ込んできた。鬼女はパンチをくり出し、大黒天の頭がミシツと赤い亀裂を走らせながらへこむと、衝撃が足まで波状に伝わって行って、全体が一斉に裂け、数千数万の悲鳴を上げて怨霊たちが弾け飛んだ。辺りの空一面に広がっていき、

「はっ」

鬼女が初めて声を発すると、一斉に燃え上がり、夜空を夕焼けのように照らし出した。

怨霊たちの焼けた炎は土亀の霊体も襲った。

土亀は更に上へ逃れ、『ウウム』と唸った。上を仰げばもはや宇宙のように無数の星が強い輝きを発している。ビシツと電気が流れ、土亀は危険を感じた。いかに「空自在」などと気取っても、生きた肉体を持つ土亀は魂も生を捨てるわけにはいかず、「空」に制限が生じる。

『まあいい。そこまで俺を本気にさせるとは面白い。直々に相手してやる』

土亀は雲のあやふやな状態から、しっかりした人の形となった。

『確かめてやる』

スツと鬼女の背後にテレポーターションした。

『破っ！！』

破壊の「式」を送り込む。それはしっかりと鬼女の霊体に組み込まれた。土亀はニヤリと笑った。

『破っ！！』

「式」を発動させる。鬼女の背中が弾け飛ぶ。……はずが、ふつと目の前から赤い大きな背中が消えた。

「空自在」

『なにいつ!?!?』

いつの間にか、「空」の「座」が入れ替わっていた。土亀の送り込んだ「式」は土亀の霊体に組み込まれ、今、発動した。

『ぎゃあっ』

土亀の背中が赤く爆ぜた。今度は「影」を分身させる暇などなかった。

土亀は血煙を上げながら漂った。

『おのれえ~~~~~』

怒り狂った土亀は胸の前に手を合わせて作った三角に「力」を溜め、鬼女の正面に瞬間移動し、直接力を放った。

「力」は先へ進まず、土亀の手の中で爆発し、驚く土亀の顔までも吹き飛ばした。

『.....お、おのれ.....』

ぶずぶすと赤い煙を上げながら顔と腕を再生し、土亀は鬼の形相で鬼女を睨んだ。

鬼女とまともに目が合って、土亀の両目は破裂した。

『うぎゃあああああっっっ』

土亀は両手で目をきつく押さえ、痛みと怒りに転げ回った。

『はあっ . . . はあっ . . . はあっ』

目玉を再生したが、視界が赤く濡れている。肉体の眼球にも影響があるだろう。

『お、おお、おお、おのおおれえええ~~~~~』

土亀は怒りに我を忘れ、真っ白に火花を散らすエネルギーの固まりに変じたが、ハッと、凄まじい冷たさを感じてゾツとした。

エネルギーはすべて奪われ、土亀の霊魂は剥き出しになって「無」に放り出されていた。

うわあああああああああ . . .

土亀は本能的に恐怖の悲鳴を上げ、帰り道を捜した。
一点の赤い星があった。

「無」にそれ以上何もなく、土亀はすがって飛びついた。
脳裏に女の姿が浮かんだ。

「紅倉美姫」

視界が真っ赤に染まり、
霊体の内と外がひっくり返り、外に放出したはずのエネルギーが
内側で大爆発を起こした。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

し、
土亀は、どうやら俺は自分の内側を旅させられたようだ、と理解

これには勝てぬ、

と観念した。

なんとか己を保った土亀の靈魂は、鬼女の視線を感じ、

『やめてくれっ！！！！！！』

慌てて自分の肉体に帰った。

「はあっ、はあっ、はあっ、」

自分の体に帰った土亀は手を床に着き、滝のように汗をしたたらせ、肩を揺らして息を継いだ。地下の、死鑑のろうそくに暗く照らされた秘密の祈とう所である。土亀は首から前後左右に数珠繋ぎした鏡をぶら下げるといふ奇抜なファッションをしていたが、その鏡はことごとく粉々に割れていた。はあっ、はあっ、と激しく息をつき、固いつばを張り付く喉に飲み込んだ土亀は、後ろに手を着き直し、更に息をついて自分を落ち着かせた。

「お……、恐ろしい奴め。あ、あんな物がこの世にいるわけない……。あれは、生きた人間ではないのだ……」

土亀は落ち着きながら考えを巡らしたが、紅倉美姫という物がなんなのか？、考えは至らなかつた。

「あれは人間ではない。バケモノだとあそれだけの力を操れるわけない。完全に、負けたわ……」

屈辱だが、完膚無きまでにやつつけられて、本当に命があつただけめつけ物だ。

「明王か。神の力を我が物として使う人間に天罰を落としたか」

土亀は自分のくだらん考えを笑い、真顔になった。

「明王……。そうとしか思えんが……。どうやらあの女、この世の「理（ことわり）」の外に通じる存在なのかも知れん……」

土亀は落ち込むように考え、

「鍵……。か……。とつぶやいた。

「この世の要となる「門」の鍵であつたのやも知れぬ……。さすれば……」

ニヤリと悪い顔で笑った。

「その鍵が壊れた今、この世に何が起きる？ ふっふっふっふっふっ、これは、見物ではないか？」

紅倉の変じた巨人の力は認めよう、しかしそれから逃れた今、それを傍観し笑うことで己のプライドを保とうとした。

ろっそくの明かりは暗い。

その部屋の全てを照らせぬ暗がりには、人影が立った。

土亀は仰天した。

真っ赤な、裸形の、女、紅倉の鬼だ。

「うっむ…、馬鹿な……………」

土亀は慌てて部屋の状態を確認した。

「閉じておる…………。この部屋には外のいかなる霊波も入り込めぬはず。いったいどうやって……………」

暗がりから歩み出てくる美しい女に土亀は畏れおののいた。女は相変わらずつんと不愉快そうな顔で土亀を見下している。

「うわわ」

土亀はうっかり顔を見てしまつて慌てて顔を避けた。霊体の目玉を焼かれた激痛が甦る。あんなのは二度とごめんだ。

「土亀 恵幸」

名前を呼ばれて震え上がった。

「まっ、待てっ。俺の負けだ。もう二度とおまえの前には顔を出さん。この俺が負けを認めて謝るのだ、この通り！、許してくれ！」

「土亀。おまえも、神になりたかつたのだから？」

「ちっ、違っ！ 俺はそんなのじゃあない！ お、俺は、ただ…、この世の全てを思うままにしたかっただけだ。おまえとは違っ！

！ おまえは、天の、明王なのだろう！？」

「明王？ ふん、どうでもいい。知らん。おまえを望み通り『神』にしてやるっ」

「だから違っと言っている！ 俺は、神になんぞなりたくはない！

「！」

「そうだな。おまえは、神のまがい物が似合いだ」

「分かった！ もう金輪際神の真似事などやめる！ だから・・・」
手がズキツと痛んだ。足にも同じ痛みが走って土亀は悲鳴を上げた。

「な、なんだ、うう……、い、痛い！………」

わななく手が動かなくなっていく。動かそうとすると骨の碎けるような鋭い痛みが走った。

「ぎゃっ・・・」

腹にも同じ痛みが走って、飛び上がった。

「な、なんなんだ？ お、おい？、な、何をして……い、いて、いてててて………」

土亀は体突き刺す鋭い痛みにビクビク震えて、怯えた。自分の体の中に、何か起こっている。

「！」

土亀は悟り、痛みに真つ赤になった顔を上げ、女を見た。

「お…、おまえは、俺に仕掛けられた『式』だな？ おまえは、俺の、中から出てきたのだ。そうだな？」

女はつんとした顔で土亀を見下し、言った。

「そんなことを、わたしが知るわけはないだろう？」

土亀は痛みには震えながらヒツ、ヒツ、と笑った。

「仕返しか……、俺が連中にした事への……。ど、どこまでも、腹立たし………」

悲鳴を上げた。プライドも何もなく泣き喚いた。痛い痛い。

土亀の体は内側から「木」に変化していつているのだ。それがまだ生の肉体と神経を突き刺し、激烈な痛みを脳天へ突き上げているのだ。

土亀は泣きながら、木の仏になっていった。

表面まですっかり木化した姿を見て、紅倉によく似た鬼は、紅倉がよくやるように首をかしげて土亀の苦悶の固まった顔を覗き見た。

「おーい。

死ね。

」

バキンッ、と鋭い音を発し、木像が縦に真つ二つに割れ、生木の内部から血が溢れた。

土亀の魂までが砕け散ると、紅倉の鬼は消えた。

さすが天才陰陽師。それが自分に仕掛けられた「式」だったのは確かなようだ。

121 紅倉美姫という生き物

芙蓉と姫倉美紅はペンションの坂を上りきったところから村を見下ろしていた。

真つ赤だ。赤い霧が村を沈め、ところどころ渦を生じさせている。紅倉の鬼女は村の反対側に相変わらず突っ立っている。顔は遠くで見えないけれど、相変わらず不機嫌そうな雰囲気。芙蓉に伝わってきた。

芙蓉は美紅に訊いた。

「あれは、なんなの？」

美紅は暗い顔で芙蓉を振り向き、仕方ないように言った。

「わたしもね、もちろん紅倉も、あれがあんな風に成長しているなんて思っていないかったわ。紅倉と一緒に学習して、あんな恐ろしい物になっていたのね。」

あれが、紅倉美姫の本体よ。

わたしたちが知っている紅倉は、あれの表層に張り付いた、偽りの人格に過ぎないわ」

「それは聞き捨てならないわね。わたしの愛する先生を、そんな風に言わないで欲しいわ」

「あらありがとう。紅倉が聞いたら喜ぶでしょうね。」

紅倉の記憶がスタートしたのは16歳頃のこと。

その頃紅倉は児童養護施設に保護されていたんだけど、その頃の紅倉の状態は、

まさに バケモノ だったわ。

強すぎる霊力が外に放出されて、辺りを魔界に変え、人々を悪夢に怯えさせていたわ。

そんな状態を克服するために、彼女が努力して作り上げたのが、わたしたちが知る「紅倉美姫」という人格よ。

彼女はそれを断片的な記憶をつなぎ合わせて作り出した。

「紅倉美姫」という表向きのキャラクターによって、本体を騙し騙し、大人しくさせることに成功したのよ。

.....

美貴ちゃん。

紅倉が殺されたとき、ショックだった？」

「.....当たり前じゃない.....」

今生々しく甦り、芙蓉はビクリと震えた。この悪夢は、一生続くだろう。

「そうね。でもね.....」。

紅倉美姫は、既に死んでいたのよ。」

「あの時もう死んでいたって事？」

「いいえ」

「じゃあ……、人格のモデルにした「本当の紅倉美姫」という人がいて、その彼女が死んでいるって事？」

「いいえ。」

「あなたのよく知っている紅倉美姫が、もうとっくに死んでしまっていた人間だって事」

「……全然分からないわ」

「ずうっと、脳死状態でいたのよ」

「……そんなわけないじゃない？ 脳死状態の人が、自分で動いたり、話したり、出来るわけないじゃない？」

「だからね、

紅倉美姫の中に入っていたのは、

「 生きている人間じゃなかったのよ。」

「……そんなことあり得るわけないと思うけど、じゃあ、何が入っていたって言うのよ？」

「 死者の魂たち。」

「 この村の連中がやっていたのと同じ事よ。」

紅倉は火事の現場で一人だけ生存していたのを救助された、という事だけど、具体的な状況は知らされていないわ。

他に何人か人がいたんでしょうね。

彼らが、

脳死状態の少女の体を依り代に、

詰め込めるだけ死者の魂を詰め込んで
作り出したのが

紅倉美姫という名の

「神」

だったんでしょうね。

けれど、おそらく彼女を作り出した人たちは、彼女の強すぎる霊力によって殺された。もしかしたらそれは覚悟の上だったかも知れないけれど、とにかく、焼け死んじゃってどこの誰たちだったのか、分からないわ。

彼らが彼女に何を願って誕生させたのか、何か具体的な目的があったのか、それこそ人を呪うための生きた道具だったのか、はたまた何かの実験だったのか、分からない。

彼女はただの依り代としてただ生きてさえいればよかったのかも知れないけれど、

彼女は「紅倉美姫」という人格を作り出し、

「人間」として、生きる道を獲得した。

少女の体は大腦以外に損傷はなかった。

脳は神経の集まりで、微弱な静電気で働いている。

幽霊だって他人の脳にアクセスしてその機能を拝借するくらいだから、元々霊と脳は相性がいい、というより、似ている、のかも知れない。

彼女の、主に脳に搭載された大量の霊魂は、損傷した脳機能を十分補うことができた。

「紅倉美姫」は、甦った死者「ゾンビ」または、生きている幽霊「幽霊人間」ってところかしら？」

122 人格

芙蓉は頭が痛くなって、ため息をつきたい気分だった。

「先生の中にはどれだけの『靈魂』がいるの？」

「およそ、50」

「そんなもの？ だって、あんなに大きな姿に変身してるじゃない？」

「ただの魂じゃないってことね。それぞれが強力な……怨霊だったんでしょ。」

「紅倉美姫」の人格が生まれるまでに彼らの間にも激しい争いがあつたんでしょね。その波動が周りの人たちに悪夢を見させたんでしょ。」

50と言つても一人の人間が内蔵できる靈魂の量をはるかにオーバーしているわ。例えば岳戸由宇も何十人と家臣の靈体を従えているけれど、実際に搭載しているのは数人分でしょう。他は魔界にいて、リンクしているんでしょね。」

紅倉の場合は全部中に抱え込んでいるのよ。」

それも全部スーパー靈魂と言つていい超強力な靈力を持ったね。」

紅倉がちよつと変わり者なのも当然よね？」

「それは別問題って気がするけど……。」

じゃあ、先生の中には50の靈魂の人格があるってわけ？」

「そうよ。ただ、圧縮されて壊れちゃってるから、全部ごちゃごちゃに入り交じっているけれどね。」

「それは……、先生とは別人格なのね？」

「ええ。精神病の多重人格のようなものだけ……」。

破壊された精神を修復するために、新しい人格を作って統合を計ったけれど、それには失敗して、2つの人格に分かれ、「紅倉」がもう一人を制御している、っていう状態でしょうね。

でも「紅倉」の方が後から作られた人格で、本体はもう一人の方なのよ。それを消してしまったら、「紅倉」も生きていられない。

共存共生の関係ね。

紅倉の強い霊能力の源は本体の霊魂の物よ。

霊力を使えば使うほど、そっちの存在が表に出てきてしまう。

紅倉はたちの悪い悪霊を相手にするとたまにおかしくなることがあるでしょう？

それは「紅倉」がもう一人を制御できなくなりかけていたのよ。

ねえ美貴ちゃん。

紅倉は正義感の強い人間よ、人一倍ね。でも、

強すぎる正義感は、逆の欲求の裏返し。

紅倉の本能は、

人や、この世に対する、憎悪と、破壊欲求の固まりなのよ」「

「そんなの、人間なら当たり前の事よ。それでも、先生は正義の人だわ」

「そうね……………」。

わたしもずっとそう考えていたんだけど、どうやら少し違ったよ
うね。

「紅倉美姫」の誕生も、あらかじめプログラムされた事だったのかもね。

どうも「あれ」は単なる破壊欲求の固まりには見えないわ。姿も紅倉によく似ている。「あれ」自体「紅倉」の人格の影響を強く受けているようだわ。

「紅倉」による治療の成果が現れて、「紅倉」と一つに統合されようとしていたのかしら？

それでも明らかに「紅倉美姫」という人間ではないわ。

彼女を作った人たちの目的は分からないけれど、もしかして、最初から「あれ」を作るためだったのかも知れないわね？

ひょっとして本気で本物の「神」を作ろうとしていたのかも知れない。

あれが完成形には見えない。

戸惑いと苛立ちがすごく感じられるじゃない？

彼女はまだ成長の途中で、まだ外に出てくる段階じゃなかったのよ。

それでもあれは「紅倉」と共に学習して成長している。

これは一つの光明ね。

紅倉にも破滅だけじゃない、光の未来があるって事ね。」

「……殺してるじゃない、みんな……」

「あら、そうね。

仕方ないわ、「紅倉」は、「心神耗弱」の状態だもの」

芙蓉はため息をついた。

「どついたらいいの？」

結局……、

先生は元の先生に戻るの？」

123 夜のたそがれ

あちらこちらの空から強い大きな光が飛んできた。白や金や銀や赤や青、紫に光り、輝いている。

「この辺りの土地神や各地の大神たちが「あれ」を危険と見なして連合を組んで退治に乗り出したようね」

光たちは赤い巨人の周りを飛び回り、攻撃を開始した。

ぶつかってくる眩しい輝きに巨人は手を伸ばして跳ね返そうとしたが、パアンツ、と衝撃波が弾け、両者共に吹っ飛んだ。光は上空に跳ね飛び、巨人は地面にゴロンと転げて山の斜面に乗り上げた。

光たちは次々に巨人に襲いかかった。手で防ぐ巨人の横から体当たりしてきて、腕を弾き、開いた胸に別の光たちが飛び込んだ。光は突き抜け、巨人は『ぎゃっ』と口を開いた。胸の穴は塞がったが醜い傷口が盛り上がった。

巨人は怒り、両腕を開いて波動を放ち、空に飛び上がった。

襲いかかってくる光たちを巨人は空を自由に運動して、たたき落とし、蹴り飛ばした。

光たちは物凄いスピードで飛び回り、急襲し、巨人の注意を引き、別の光が隙をついて体当たりした。巨人の肩が背後から貫かれ、真っ赤なオーラが散った。巨人の血だろう。

神々は次々巨人を襲った。

「空自在」の巨人は瞬間移動して逃れたが、神たちも「空自在」に巨人の現れる先現れる先に追いつき、空中で眩しい光のスパークが駆けめぐった。

空が赤く染まっっていく。神に襲われ負傷した巨人の血が霧となって漂っているのだ。

「さすがの「あれ」もあれだけの大神たちを相手に勝ち目はないみたいね」

美紅の達観した意見に芙蓉は焦って問い詰めた。

「あれがやられちゃったら、先生はどうなるのよ？」

「紅倉の本体だもの、当然、死ぬわ」

「どうしたらいいのよ？ 教えなさい！」

美紅はじつと芙蓉に問いかけるように見つめた。

「紅倉を助けない？」

「当たり前よ」

「紅倉は「脳死状態」なのよ？」

「……今までだってそうだったんでしょ？ 元に戻るわよね？」

「難しいわね。かなり中身を引つかき回されたから。普通だったらもう絶対意識は戻らないわ」

「先生は……普通じゃないでしょ？」

「目覚めるまで何年も掛かるかも知れない。目覚めても、きつと重い後遺症が残るわよ？ 体も……完全な快復は無理よ？ それでも、そんな紅倉でも、あなたは生きていてほしい？」

「……………ええ……………。一生目覚めないとしても、わたしは一生、先生の心に話し掛け続けるわ」

「そう」

美紅は晴れ晴れした顔で微笑んだ。

「じゃあ、紅倉の頭の穴を塞いであげなさい」

「何で？」

「あなたの手で」

「それだけでいいの？」

「そうね、後は、眠れるお姫様にキスでもしてあげるのね？ びっくりして目を覚ますかもよ？」

「…本当でしょうねえ？」

「分かんない」

美紅は悪戯っぽく肩をすくめ、静かな顔で言った。

「あなたが奇跡を信じれば、あるいは、ね？」

彼女は今弱っている」

美紅の視線に芙蓉は痛々しく赤い空を見た。光が忙しく飛び回り、

キラツ、キラツ、と大きくフラツシュしている。

「きつと、家に帰りがつているわ」

芙蓉はうなずき、まだ赤い霧が漂い続けている村へ向かって坂を駆け下りていった。

「美貴ちゃん、オーラを放ちながら走つて！」

村にもはや芙蓉の行く手を邪魔する意志はどこにもない。ただ、あまりに怨念が強すぎて、霊的な毒素は濃く漂って、晴れることはないようだ。芙蓉はオーラを外へ放ちながら走った。芙蓉自身もう霊体の体力が底をつきそうに疲れていたが、これで最後だと信じてオーラを放ち続けた。

赤い霧が晴れた後にはまた新たな惨状が顔を見せるだろう村を駆け抜け、芙蓉は社に到着した。

膝を押さえて肩で息をつくとき、赤い渦が寄ってきて芙蓉に染み入ろうとした。

「イヤアツ!!」

芙蓉はオーラを放って霧を追い払った。

「先生……」

汗だくで息をつきながら紅倉の隣にしゃがんだ。

なんて可哀相に、と思う。先生との楽しい事ごとは全て過去の思い出になってしまったのかと思った。

こんな先生に生きてほしいか？

それでも芙蓉は紅倉と一緒に居てほしいと思った。

悲しいだけでも、悲しさは愛しさの裏返しだと思った。

それを確認できるだけでもいいと思った。

「先生、可哀相に。ほら、手当してあげますよ？」

芙蓉は紅倉の額の横に開いた穴に手を当てて押さえてやった。精一杯自分の治癒の気を送ってやった。

「先生。いっしょにおうちに帰りましようね？」

芙蓉はかがみ込み、ありったけの愛を込めて、口づけした。

「 うわあああああーん 」

空いっぱいには叫びとも泣き声ともつかない声が広がった。

カアツと赤い光がフラッシュし、巨人の姿は消えた。

神々の光は巨人の消滅を確かめるように空を飛び回り、それぞれ自分の社に帰っていった。

芙蓉は唇を離し、呼びかけた。

「せんせ」

THE END

村人たちが自分の魂を取り戻したのだろうか、数百の青い光の玉が上空に昇って行って、星々に紛れていった。

その空が明るくなり、星々は姿を消し、山に囲まれた村も全体にぼんやり明るくなってきた。朝の清浄な光に畏れを為すように赤い霧は徐々に薄くなって地面にくすぶり、物陰に逃げ込むように消えていった。

紅倉は目覚めなかった。

芙蓉は顔をしかめ、涙に潤んだ目で恨めしく美紅を振り向いた。

「目覚めない」

なじるように言う。

「奇跡なんて……、起こらないじゃないっ!!」

美紅は痛々しくも静かな表情で見下ろしている。

「あなた、誰なの？」

芙蓉は泣きながら問い詰める。

「あなた、本当に先生の守護霊なの？ 幽霊に守護霊だなんて、おかしい話じゃない!？」

「そうよ。わたしは紅倉の守護霊なんかじゃないわ。

わたしはあなた以外の誰にも見えない。

わたしはあなたが見ている幻。

わたしはあなたの中にいる。

わたしは、

紅倉があなたの中に残した、バックアップデータよ。」

「どじいじいこと?.....」

「紅倉は、死んだって事よ。」

紅倉は元々作られた人格。魂の本質ではなかったわ。こっして頭を破壊されて、せつかく作り上げた人格が、壊されてしまった。

あなたの大好きな紅倉美姫は、

死んだのよ。」

芙蓉は顔を歪めて泣いた。

「.....う.....」

うわあ~~~~~、

わああ、

うわあああ~~~~、あ~~~~、ああ~~~~~んんん
ん.....」

芙蓉は肩を揺らして泣き続けた。しゃくり上げ、ひっくひっくと鳴き、またわあ~~~~、と泣き続けた。

「.....キャ~~~~ッ、ウ~~~~ッ、キャ~~~~ッ.....」

芙蓉とは別の金切り声がやってきた。黙ったかと思うとまた発作を起こしたように嫌な金切り声を上げる。

狂った悲鳴を上げながら現れたのは、麻里だった。

麻里はどす黒くくまの浮いた目をぎよろつかせ、

「キヤーキヤーキヤーッ、キヤーキヤーキヤーッ」

と、自分の不安を訴えるように無知性な子どもの金切り声を上げた。

横たわる紅倉を見て、非難をぶつけるようにますます甲高く金切り声を上げた。

芙蓉は怒り狂い、立ち上がると走って行って麻里の頬を思い切りびんたした。

麻里はどつと倒れ、鼻血を垂らし、口の中を切って唇からも血を吐き出し、芙蓉を見てまたキヤーキヤー金切り声を上げた。芙蓉は麻里の髪を掴んで二度三度容赦なくひっぱいた。金切り声を上げようとするとすかさず叩いた。悲鳴を上げると殴られることを学習した麻里は、ようやくまともな意志のある目で芙蓉を睨み、どす黒く恨みのこもった声で言った。

「悪魔め。何もかも壊して、殺して。この、悪魔め！！」

芙蓉は麻里を突き放した。

「・・・ざまあみるだわ」

芙蓉は麻里に背中を向け、紅倉の下に戻った。

「アハハハハ、キヤハハハハハハハハハハ、」

麻里は今度は狂った笑い声を上げ始めた。

「なにがざまあみるよ、そいつこそ、天罰よ。ざまあみるのお返しよ。アハハハハハハハハハハ、キヤハハハハハハハハハハ」

ざまあみるざまあみると笑いながら、麻里は去っていった。芙蓉はもう無視した。どうせあの娘にも、地獄の景色しか残っていないのだから。

「せんせ……」

芙蓉は再び傷口を塞いで、額をくっつけ、愛しそうにこすり付けた。

「嫌ですよ、わたしを一人にしないでください？ 先生の魂はどこに行ってしまったんです？ 幽霊だったくせに先生に魂がないなんて、そんな笑い話、全然笑えませんか？」

姫倉美紅も悲しい目をして、ポロリと涙をこぼした。

「美貴ちゃん……」。

紅倉はそのためにわたしをあなたの中に残したのよ？

あなたが望むなら、わたしをインストールし直して、紅倉美紅の人格を再構築できるように。

「………どうかしら？」

あなたはそれを望む？

目覚めた紅倉はきつと以前とそっくりの紅倉になるわ。でも、それはあくまでコピー。オリジナルの紅倉はもう失われてしまった。それでも、あなたは紅倉美紅を甦らせたい？」

芙蓉はしゃくり上げながら訊いた。

「………悲しく………、悲しくないの？」

「何が？」

「………元の………先生が………」

「人は必ず死ぬ。紅倉は誰よりもそれをよく知っていたじゃない？」

死ぬのも生きていくことの内。

紅倉は最後まできちんと生きた、とわたしは思うわ。でも、心残りでしょうね、あなたを悲しませてしまって」

「返して……。わたしに、先生を、返して……………」

「わたしでいいのね？」

芙蓉はじつと恨めしそうに美紅を睨んだ。

「そんなこと言わなければ……。あなたがただ、自分が紅倉美姫の魂だつて言えば、わたしは受け入れたのに。わざわざ「死んだ」なんて説明して、あなたは、紅倉美姫そのものだわ」

美紅は悪戯っぽく微笑んだ。

「そりゃあね、わたしのやることだもの、コピーは完璧よ？」

芙蓉も恨めしい目をしながら、ようやく少し笑えた。

美紅が横たわる体を見て難しく眉をひそめた。

「でも、美貴ちゃん、覚悟はしてね？ 脳の破壊もちろんだけど、霊体も神々にだいぶ痛めつけられてしまったわ。霊媒物質がかなり失われてしまった。以前のように脳機能を取り戻すのは、絶望的よ？」

「それでも……………」

いい…。と言いながら芙蓉もやはり絶望的なショックを隠しきれなかった。顔が青ざめ、震えてしまう。美紅も悲しそうに目を伏せる。芙蓉は焦った。美紅が、「やっぱりやめましょうか？」と訊いたら、「いいえ」ときっぱり答える自信が、あるか……。どうか…

.....。

『わたしを、使って』

ケイの霊体が立っていた。

綺麗に黒い瞳をして、穏やかな、綺麗な顔をしている。ただ、とても悲しそうで、

ケイの肉体は、辺りに転がっている焼け焦げた炭同様、寝台の上で真っ黒になっていた。

『わたしの魂を紅倉さんの一部として使って？ わたしは一度紅倉さんの魂に同化している。傷ついた魂の修復材には打ってつけだと思っわ』

「ケイさん。あなたはそれでいいの？ 成仏すれば、別の人生を生きられるのよ？ 先生の魂の中身は……、よく分からないわ？」

『それに関してはわたしの方がよく分かっているわ』

ケイは芙蓉に優しく微笑んだ。

『怒り、憎しみ、暴れ出そうとする強すぎる力……。』

それを押さえつける鋼の正義感。

あなたへの思いやりと、愛と、甘え。

紅倉さんの持つ正義の心と、優しさは、わたしの魂にはとても心

地よい……。

芙蓉さん』

ケイは心配そうに訊いた。

『わたしのよくな汚れた魂でも、あなたは、愛してくれる？』

芙蓉は穏やかな表情を取り戻してうなずいた。

「お願いします、ケイさん。先生を生き返らせてください」

ケイはうなずき、目を閉じた。

『これで、ようやく安らかに眠れる……』

金色に輝き、光の粒子となってケイの形はなくなり、紅倉の額に吸い込まれていった。

ケイが中に入っても紅倉に変化はなく、

「どう?」

と芙蓉は不安そうに美紅に訊いた。

「美貴ちゃん。」

これからも、よろしくね?」

美紅の姿がフウツと消え、芙蓉の紅倉の頭を押さえる手からエネルギーが迸った。それは一瞬で消え、芙蓉は何かが自分の中から消えたのを感じた。

ちょうど山の上に太陽が顔を出し、さっと金色の光線が走った。

「先生?」

芙蓉は恐る恐る紅倉の顔を覗き込んだ。

パツと紅倉の目が開いた。

芙蓉は背筋を電流が駆け抜け、喜びより、畏れを感じた。

「先生?.....」

紅倉のガラスの目玉はまっすぐ虚空を向き、何も、映していなかった。

The Beginning

「先生。美貴です。分かりますか？」

芙蓉が呼びかけても紅倉は目を開いたきりなんの反応もなく、なんの感情も見せなかった。

「せんせ……」

芙蓉はこれからの二人の生活を思って、やはり悲しくてやりきれず、新たな涙を流した。

と、

芙蓉は腕を掴まれぎよつとした。

「先生？ 先生？ 分かりますか？」

紅倉はぎゅうつと芙蓉の腕を掴み、ガラスの目を開けたまま、ブルブルと震えだした。

「先生!？」

芙蓉は奇跡を信じ強く呼びかけた。

「……………お・」

紅倉の口が開き、一生懸命何か言おうとした。

「なんです？先生？ ゆっくり、おっしゃってください?」

芙蓉は聞いていますよ?と言うのを分からせるように紅倉の震える口に耳を当てた。

「……………ん……………な……………」

わ……………

た……………

し……………」

「女？　そうですね、先生は女ですよ？　それがどうしたんです？」
芙蓉は耳をすませたが、紅倉の口はそれきり何も言わず、開いた
きりの目は乾き、自然と涙がこぼれた。
芙蓉は諦め、まぶたを閉じてやった。
先生は生きている。何か言いたいことがある。
奇跡は一朝一夕には起きないかもしれないが、しっかりと見守っ
ていようと思った。

京都の街を離れた山のすそ野に建つ4つの塔を結んだお城のよう
な「京都済命病院」。
固い秘密主義を貫く、因縁浅からぬこの病院に、紅倉美姫は入院
していた。
半年が経とうというのにあれきり一度も目を開かない。

2ヶ月が経って、紅倉は妊娠しているのが分かった。

芙蓉は半狂乱になるほどショックを受け、いったい誰がわたしの
先生を！！、と激怒したが、ハッと、あり得ない可能性を思い立っ
た。

妊娠2ヶ月を診断された胎児だが、その成長は異様に早く、半年
で臨月に至った。

今、高度集中治療室で出産されようとしている。

芙蓉の厳命で女性スタッフのみでチームが生まれ、現在院長を務める細木原教授が助産を担当した。

意識の戻らない紅倉に帝王切開が検討されたが、赤ん坊が外に出てこようとする意志を強く感じた芙蓉の意見により自然分娩に任せることにした。

紅倉にいきみは見られなかったが、赤ん坊は自然と産道を押し出されてきた。

そして赤ん坊の顔が覗いたとき、突如、

「あああああああーっっっっ」

と紅倉が大声を上げた。

赤ん坊の顔が外に出て、真っ赤な瞳が開いた。

紅倉はまるで赤ん坊の代わりのように大声で悲鳴を上げ、見守る芙蓉はきつく手を握り締めてやった。

ぬるっと赤ん坊の体が吐き出されると、紅倉の大声が止んだ。目を見開き、うつろで、開いた口から涎が垂れていた。

芙蓉は赤ん坊の様子も気になったが、紅倉も心配した。

紅倉のうつろな瞳はまるで、魂を抜かれたようだった。

赤ん坊を取り上げた細木原教授が助手にへその緒を切るよう指示すると、赤ん坊がギョロツと目を剥き、教授の手を邪険に振り払った。

うねうねとした青いへその緒がブルンと震えた。

赤ん坊は下に落ちないように紅倉の腹に自分でしがみついた。

お尻の下に飛び出したへその緒が、ブルン、ブルン、と震えて、中で何かが激しく移動している。

紅倉はガタガタ震えだし、

「ハツハツハツハツハツ」

と激しく息を吐いた。激しく体が揺れ、肩が持ち上がり、脈を取っている機械が「ピーーーーーッ」と鋭い警報を鳴らした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

芙蓉も、教授らも、呆気にとられて見守るしか出来なかった。

紅倉の腹にしがみついた赤ん坊は、成長していた。母胎につながったへその緒から母親の栄養を吸い取り、急激に、1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月、半年、1年、……2年と、見る間に恐ろしいスピードで成長していく。

一方母親の紅倉は、震えながら見る間に痩せ細っていき、ついに心拍が停止し、震えが止まり、がっくり動かなくなったかと思っただら、ズルツ……、ズルツ……、と音でもしそうちに中身を吸われ続け、がくり、がくり、と揺れ、極限まで……骨と皮まで痩せ細ると、肌が蛍光を発しながらとろけだし、全体の形がとろけていった。

赤ん坊……とももう呼べない、子どもは成長を続け、10歳を越え、15歳を越え、……ようやく成長が止まった。

紅倉は髪の毛を残してすっかり溶けてしまい、しぼんだへその緒は自然と娘の腹部から抜け落ちた。

16、7歳に成長した娘は、分娩台に腰かけ、「ふうーーーー……」と息をつき、目を開いた。

綺麗なグリーンの瞳をしていた。

娘は左右に首を傾け、体にこびりつく赤いかすを落としながら、むん！……、と伸びをした。

「はあーっ……」

瞬きして、しっかり芙蓉を見た。焦点がピタッと芙蓉の目に合っ
て、芙蓉はドキリと心臓を高鳴らせた。

「あー、女でよかったわ。」

——次のエピソードへ、続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2363p/>

霊能力者紅倉美姫 呪殺村

2011年4月27日20時25分発行